THE CENTRAL REVIEW

中央公論

八月號

第四十四年　第八號　第四百九十七

婦人公論 八月特輯 結婚忌避時代號

イヴォンヌの方向へ……武林無想庵

劇界事實怪談……大島多慶夫

妻君業批判
◆愚かなる者よ！……加賀あい子
◆結婚投機時代……草原春江
◆過渡期の婦人……石川賴子

緑のパラダイス（大學評判記・北海道大學の巻）

女性支配時代の開幕……淸澤洌

噂への抗議
◆低級・非合理……三宅やす子
◆未亡人と戀愛……尉川蝶子

ある女給から奥様へ……松平かほる

東西婦人ゴルフアン
東京の名流婦人とゴルフ……室町英二
關西ゴルフア展望……島崎瑞枝

戀敵大杉あやめさんの死……園田榮子

生活と戀愛についての自己批判 ―山田順子への告別―……勝本淸一郎

明 何が？ 何うすれば？……ささき・ふさ

眸 眼の美容は如何にして得られる……内田孝藏

禮 眼瞼マッサージの効果……早見君子

讃 S・O・S無電は叫ぶ……山西健吉

愛兒のためのページ……岡田道一・佐久千代子・齋藤都代子・有本邦太郎・小林珠子・松野芳子・倉橋惣三・岩崎喜久榮・高井光康・伊福部敬子・千種中子・石川侃

婦人と海水浴……福井正憑

人造摸造品物語……瀧井不二

ハリウッド移動くつしよん……野寺朗

◆◆私の好きな夏姿◆◆
横山まさ子・北垣登美子
井上美代子・小泉常子
溝口歌子・木谷千種
並川德子・久我よしえ

婦人公論

働く妻を持つ夫の手記……奥　榮一

新性道德のカオス……らいてふ

世界最初の女大臣……鶴見祐輔

武郎氏の戀文に答ふるテイルダ孃の手紙……

やぢやありませんか・の時代的考察……大宅壯一

脚！脚！……城戸四郎

炎暑と撮影……田中絹代

大懸賞 近代美人寫眞募集

誰が日本一の美人か？一度本誌が發表以來非常な評判詳細は八月號を！

離婚病打診……室伏高信

内外時評

お揃ひの擬ひ寶石・田中内閣と謎の切腹・ガス問題・無駄排除……山川菊榮

生み捨てられて（新長篇小說）……沖野岩三郎

本號より愈々連載する新長篇——生みすてられた彼に社會は如何に映つたか？興味湧然

花はくれなゐ……池谷信三郎

形影問はず（戲曲）……宇野千代

木がくれの巣……小島政二郎

定價七十錢

中央公論社

（東京・丸ビル 振替東京三四）


あなたのお伴に
ビリー・カメラ
スタンダード・カメラ
寫眞界のスター
アグファ
フイルム
東京 大阪
アグファ合名会社

Onoto the Pen

光りはオノトより

オノトを使へば事務が先から先へと進捗する
成功の目標が何時も前途に輝いてゐる

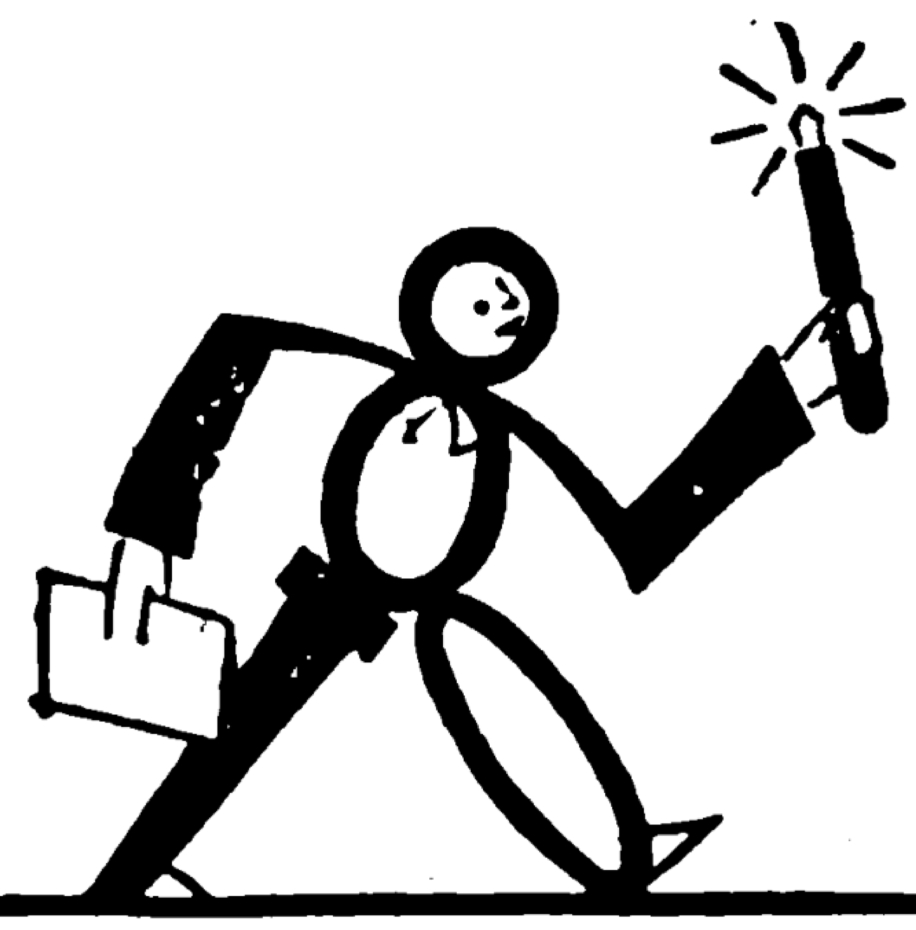
使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆　七、五〇以上

アテナ萬年筆　三、五〇以上

萬年筆用アテナインキ　、三五

送料各、一八（カタログ進呈）



¥1.50

"VALET" Auto Strop Safety Razor

街頭の新感覺

流行のバレーを使つてから人々の顔がヨリ明るくなつた。街上に公園にホールにクラブに爽快な新感覺はバレーが支配してゐる。

剃刀で研器を兼ね一枚の刃が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

他に二、〇〇　三、三〇　四、八〇
一三、五〇以上各種

替刃利用ナイフ　刃一枚付　、九〇

送料各、一八（カタログ進呈）



中央公論社代理部取次

東京日本橋通二丁目

大阪　神戸　京都　名古屋　**丸善株式會社**　横濱　福岡　仙臺　札幌

東京—神田・三田・早稲田・丸ビル



小川芋錢作　　　圖機械

田中内閣の窮死

—(卷頭言)—

(一)田中政友内閣が滿洲某重大事件で倒れたと云ふことは一面に於て日本國民の鋭敏なる國際的正義の精神を裏書するものである。縱令國家の名を以て爲さるるものでも、不義は決して我々の許し得る所ではない。一時の聲樂はどうでもい丶、日本的正義の擁護が大事なのだ。之等の事情はまた自ら、動もすれば國軍の威信を云々したがる軍部先輩の大なる反省を促さずには居まい。

(二)但し田中内閣は滿洲事件を唯一の原因として倒れたと考ふるのは正しくない。無類のかぢり付きに空前の惡例を見せてゐた政友會内閣が思掛けなく此事件の處理に行詰つて嫌々ながら投出しを餘儀なくされたのだから、形の上からは滿洲事件を唯一の原因とするに妨けはないやうだ。併し國民の頭は、滿洲事件の失態あるに由て始めて田中内閣を存立せしむべからずとして居たのではない。彼れの存立を許すに堪へずとせる理由は外に澤山ある。さうでもなかつたら、此の唯一つの事件の爲に内閣の倒さるることに對し、國民は寧ろ反對の意を表したであらう。少くとも斯くして去り行く田中以下の政客に向ては、義理にも若干の同情を寄せたであつたらうと思ふ。

(三)國民の頭には田中内閣の倒さざる可からざる所以は其の存立の當初から決まつてゐた。其理由の總選擧の不公正竝に選擧直後の議員誘拐等に在りしは言ふ迄もない。而して其後の惡政が更に國民這般の信念を强むるに役立つたことも人の知る所である。斯うした國民一般の不信と云ふことが無かつたら、元老や局外重臣の一顰一笑でたやすくあの大厦の覆へる道理がない。成立以來每に之を倒さざるべからずとした國民の要求が、二年あまりの歲月を經て今度の事件を機會に漸く其の目的を達したものと觀るべきであらう。

(四)倫敦タイムスは我國今次の政變を評し、憲政の常道は辛うじて元老竝に樞府に依て護られたと說いたとやら。我國の新聞中にも田中内閣倒壞の殊勳者として上原元帥の一派に何等か酬ふる所なかるべからざるを論ずる者があつた。若槻内閣の場合の樣に必ずしも倒るべからざる者を倒したのなら、殊勳の問題も起らう。同時に亦元老樞府の陰謀的介入を非立憲とするの難も出ぬと限らない。國民の其意思を强行するの力や、弱く、何と謂ても其地位を去るまいとする田中内閣の如きの出現を許す我が政界を、遠い英吉利の人達の洞觀をあやまるは致方なしとして、少くとも我々は、最早今日となつては如何に情勢的優勝の地位を認めらるる元老の發言でも、全然國民多數の輿望より孤立しては何等の影響を後代に殘し得るものでないことを知らねばならぬ。

(五)無論元老等の處置を實際上無影響と云ふのではない。が今度の事にした所で、相手が田中内閣でなかつたら、屹度元老重臣の干涉がやかましい問題になつたに相違ない。して見れば、國民が今次の政變を歡迎し且つ元老の介入を多とするが如きものあるは、元老の干涉に因る内閣の倒壞を原則的に承認せるが爲でないのは勿論だ。蓋し倒れねばならぬ者の遂に倒れたと云ふ事實を、宛も久振りで天日に接するが如き歡喜を以て、迎へて居るに外ならぬのである。思ふに國民の多數は今次の政變に依て憲政常道の障礙が取除かれたと安心して居る樣だ。之れから搾り出されて國民の支持を受くる政治的原則の何であるかは深く問はずして明かであらう。

中央公論

社會學の對象としての社會主義



第四十年第八號
八月號
四百九十號

田邊壽利

一、社會主義研究の必要

若し社會學の上に立つて社會主義を論題とするならば、二つの場合があり得る。その一は社會主義の基礎たる社會理論の檢討であり、他の一は社會事實としての社會主義の研究である。即ち前者に於いては、社會主義の理論の科學的價値如何が問題となり、後者に於いては、社會主義の發生原因及び社會的機能の決定となる。

抑も社會主義の理論的方面は、他の何れの社會理論に於いても然る如く、多くの難點を藏し居り、從つて他の學說に對

して特に優越性を誇り得るかどうかは疑問である。然るに今社會的事實としての社會主義を見るとき我々はそれが餘りに大なる重要性を有つてゐることに驚く。即ちこの主義の下に或は内閣が組織され或は國家が改造され、然かもその主張は漸次社會的輿論を喚起して普遍的に實現されんとしてゐる。かくて我々は、その科學理論の價値如何に拘らず、社會主義の存在理由に重大なる意義を認めざるを得ないのである。それ故に、若し社會主義の理論の缺點を指摘することによつて、その現實的意義を無視するならば、その態度は餘りに輕薄であると言はねばならぬ。何故ならば、それは基督教の教理の矛盾を摘示して、基督教が歐羅巴文明に與へた效果を無視すると同一轍であるからである。

ドゥ・メーストルは、『總べて必要なるものは存在する』と言つた。この言を信ずるならば、社會主義また何等かの社會的存在理由を有つものであることが理解される。玆に於いて、社會主義の存在理由の鮮明、換言すればその發生原因及び社會的機能の決定は社會的にまた社會學的に頗る重大なる意義を有つことになる。

社會主義理論の檢討でなしに、事實としての社會主義を研究した著述は、其數決して尠くない。殊に宗教としての社會主義の研究、例へばル・ボン其他の人々の著述の如きは、一般的にも學問的にも相當興味のあるものである。然しながら、純粹に社會學的方法を用ひた研究は多くない。それ等の中で最も價値の高いと思はれるのは、エミール・デュルケムの遺著『社會主義・その定義、その起源、サン・シモン派の學説』である。何人も知る如く、デュルケムは、社會學の祖オーギスト・コントの後繼者として佛蘭西に生れ、『社會分業論』、『社會學研究法の規準』、『自殺論』、『宗教生活の原始形態』其他を著して佛蘭西社會學を盤石の上に置き、傍ら『社會學年報』十二卷を主宰して現代社會學の絶頂に立つた學者である。傳統を重んずる佛蘭西の文部省をして『社會學』を必須學課として師範學校に採用せしむるの餘儀なきに至つた如き、如何に彼の社會學が價値高きかを證明するであらう。

彼は學生中より社會主義の研究を重要し、ボルドー大學に於いては一八九五——一八九六年の講義題目として社會主義

を選んだ。右の著述は、この講義の草稿であるが、彼の死後十年即ち昨年を以て公刊されたものである。その第一部をなす『社會主義の定義』は彼の生存中既に雜誌に掲載されたが、彼の説は佛蘭西の偉大なる社會主義者ジャン・ジョース及びゲズを驚嘆せしめ、その定義の正當なることを承認せしめた。また革命的サンジカリズムの題目たるジョルジュ・ソレルは、殆んど總べての彼の著述を讀んで最もよく利用したのである。又露西亞のマルクシスト中に於いても、彼の『社會分業論』を重要視したもののあることは、我國のマルクシストの熟知せるところであらう。

遺稿『社會主義』は未完のものである。學説の部はサン・シモンを以て終つてゐる。勿論これは繼續的講義案の一部で、次年度に於いてフーリエ及びプルードン、更に次年度に於いてラッサール、マルクス及び其他の獨逸社會主義者の説を述べる豫定であつたが、一八九六年彼の畢生の大事業たる『社會學年報』の創始と共に、フーリエ以下の講義をなすことができなかつた。彼自身常にこれを遺憾に思つてゐたといふことである。

純粹の社會學者たる彼の説が、割合に偏見なるまた反抗的なる社會主義者達の注意を惹き尊敬されたといふことは、一奇と言はねばならぬ。

私は次に彼の社會主義論の重要點の二三を紹介したいと思ふのであるが、それには色々の理由がある。先づ第一に、我國の一般人士は社會學より見た社會主義の存在理由を知るであらう。次に我國の社會主義者は、彼等の主張及行動の社會的意義を知るであらう。第三に我國の社會學者は、社會學の對象としてのイデオロジーの取扱方法に於けるデュルケム的態度を知るであらう。

二、社會主義の定義

社會主義を社會的事實として取扱ふに當り先づ必要なことは、如何なるものを社會主義と呼ぶべきか、即ち社會主義の

定義如何と言ふことである。デュルケムは先づ自己の定義を揭げるに先立つて、既存の定義が如何に不完であるかを論じてゐる。その議論は頗る價値のあるものであるが、茲では省略しなければならぬ。そして直ちに彼自身の定義に進むことにする。

デュルケムによれば、社會理論は大別二類に分つことが出來る。其の一つは、如何にあるか又如何にあつたかを探究するもの、即ち純科學的研究である。其の二は、現實を變革しようとする理論である、即ち法則の發見でなしに改革を企圖するものである。換言すれば實踐的理論である（この論については、他書に述べてゐる科學と實踐に關する彼の所說まで觸れなければならぬが、今は省く）。社會主義は右の第二に屬するものである。然るにこの第二類は多數の種に分けられる、例へば政治的、教育的、行政的、經濟的等の如く。社會主義はこの最後のものに屬する。

扨て、同一社會に屬する人々によつて行使される機能には、社會的のものと個人的のものとがある。官吏とか牧師とかのそれは前者であり、商業工業等即ち經濟的機能は後者に屬する。事實に於いて經濟的機能は、全體としての社會體を代表し支配する特定器官即ち通常國家と呼ばれるものと、決定的規則的の關係を有つてゐない。かゝる關係の存在せざることは、工業的商業的生活が國家の上に働きかける樣式と、國家が工業的商業的生活の上に働きかける樣式とを見るならば、明かに知ることができる。即ち工場及び個人商店の內部に於いて生ずる出來事は、原則としては國家の關知せざるところである。かゝる出來事については、直接にまた特別に國家は報知されてゐない。勿論或る場合には、國家はそれ等の結果を感知することもある、然しそれは社會の他の諸器官と同一方法によつてまた同一條件に於いて知るだけである。即ちそれは、經濟狀態が非常な混亂に陷つて、社會の一般狀態が著しく變形される際である。この場合國家は、右の混亂のために惱まされる結果、漠然とそれを意識する。然しながらこの意識は、國家のみに限られたものではなくて、他の諸器官に於いても等しく見られるものである。それ故に、國家と集團生活の經濟活動の領域との間には、特別な連絡がないと言へる。以上によつ

て我々は次のことを知つた。（一）經濟活動は、原則として、社會意識の外にあること。（二）經濟活動は沈默の裡に行はれてゐること。（三）社會の意識的諸中心は、經濟活動が常態的である限り、それを關知しないこと。同樣にしてこれ等の諸中心もまた、經濟活動に對して、特別にまた規則的に刺戟を與へない。卽ち、國家の勢力が經濟活動の上に感ぜしめられる決定的組織的手段の體系がない。換言すれば、高級な諸中心から來る作用を經濟活動に課する爲の一系統の機能がないのである。

經濟的機能以外の他の機能に於いては、事情が全く異なる。卽ち各種の行政官廳、市町村會、公立學校、軍隊等に於いて生起する諸事件は、定められた特別な方法によつて總べて社會の中心にまで傳達される。而してまた、國家が自己の作用をこれ等の二次的中心に傳へる方法も、同樣に存在する。卽ちこの二者の間には、諸種の繼續的連絡があるのである。故に我々は、これ等の機能が組織化されて居ると言ふことができる。この意味に於いて經濟的機能は、無組織的である。

此點に重心を置いて考へるならば、經濟理論は二種に分たれる。その一は、商業的及び工業的機能を、社會の指導的意識的機能に連結せんと主張するものであり、他の一は、經濟的機能を更に分散せしめようと欲するところのものである。社會主義の理論は、前者に屬するものである。何故なら、通例社會主義と呼ばれてゐる一切の理論は、この種の要求の上に理解され得るからである。勿論右の連結は、黨派の異なるに從つて色々の樣式で考へられてゐる。或派に於いては、一切の經濟機能が高級な諸中心に連結されねばならぬとされて居り、他の派では、若干の經濟的機能を連結するだけで充分とされてゐる。卽ち後者は、この連結が、中介者卽ち相當の自主性を有つた二次的諸中心、換言すれば職業團體とか同業組合とかを通してなされねばならぬとし、前者は、かゝる中介者を通さず直接になされねばならぬと主張する。然しながらかゝる相違は二次的のものに過ぎぬのであるから、次の如き定義を以て、總べての社會主義理論に共通な特質を表示し得る。卽ち、社會主義的理論とは、現に分散してゐる經濟的機能の或は一切を或は若干を、社會の指導的意識的諸中心に連結せんことを主張する總べての理論を言ふ。

三、右の定義の補論

れの定義に於いて先づ注意すべきことは、社會主義が經濟的機能を社會の指導的意識的中心に從屬せしめようとするものでないことである。これ特に連結なる語を選む理由である。事實に於いて社會主義者は、經濟生活を國家の手中に收めようと欲するものでなく、只國家との接觸を主張するのである。卽ち彼は、國家が經濟生活に作用すると同じ程度に於いて、後者が前者に反作用しなければならぬと考へてゐるのである。それ故に彼等の思想の根柢に於いては、右の關係の結果が、商業的及び工業的利益を所謂政治的利益に從屬せしめることには至らずして、寧ろ前者を後者と同地位まで引上げることになると豫想されてゐるのである。何故なら、一度この連絡が確立する曉には、前者は政治的器官の作用に對して今日以上に大なる影響を與へ、且つそれの進程を一層よく決定するために役立つであらうから。

そればかりでない。社會主義の最も有力な理論家達に從へば、經濟生活は國家によつて吸收されるどころか、却つて國家(今日の如き形態の)はその形を沒して單に經濟生活の中心たるに過ぎぬのである。前掲の定義に於いて「國家の」と言はずに、「社會の指導的意識的中心」と言つたのは、かゝる理由によるのである。何故なら、例へばマルクスの理論に於いては、商業的及び工業的利益に勝る獨自の利益を代表する如き國家は、やがて消滅すべき運命にある。卽ち、現在その特殊性を有つてゐる樣な所謂政治的機能は、最早存在の意義を失ひ、單に經濟的機能しか有し得ないやうになる。それ故に、最早それは國家と呼ばれることが不適當なるものとなる。國家より更に廣い意味を有つ社會といふ語を用ひたのは、そのためである。

次に說明を要することは、社會主義の根本的特質として、何故に階級鬪爭やまた勞働者の地位向上に對する主張やを數へなかつたかといふことである。事實これ等はよく社會主義の特質として數へられてゐる。けれどもこれは、社會主義の

本質的要素でなく、然かも總べて社會主義の一致的主張でもない。何故かと言へば、勞働者の地位の向上は、社會主義が要求する經濟組織の變革から期待される歸結の一つに過ぎないし、また階級鬪爭はこの變革に到達するための一手段に過ぎぬからである。今この點に關して少しく說明を加へよう。勞働者階級は直接的には、彼等より一層强力な且つ自己の意志を强制する一の特殊階級に依存してゐるのであつて、決して社會一般に依存してゐるのではない。この特殊階級即ち資本家階級である。資本家は、社會的利益を考慮するものでなくて、單に自己の利益のみを考へる。資本家が勞働者の勞働に對して支拂ふ賃銀は、勞力の社會的價値に對して、即ち勞力が社會に對して有つ效用性の嚴密なる程度に應じて評價されるのではなく、只出來る丈け安價であればよいのである。扨て資本家は、自己の勞力を眞の價値以下で資本家に賣られねば生存できない樣な人々を强制し得る武器を有つてゐる。この武器即ち資本である。資本が、果して社會主義者の論ずる如く强大なる力を有つものであるか、また所謂正統派經濟學者の主張する樣に無力のものであるか、これは今茲に論ずる必要がない。けれども社會主義者の主張が一度設定されるならば、勞働者の屈從を緩和して事態を改良し得る唯一の方法が、資本以上の力を有ち且つその作用を社會の一般的利益と調和させ得る樣な他の力によつて資本の力を規制するにあることは、明かである。然るに、この規制的役割を演じ得るものは、國家を措いて他にない。けれども、國家がこの役割を果し得るためには、經濟的諸器官の機能が國家の外部にあつてはならない。若し經濟的機能が社會の指導的意識的中心に連結されるならば、勞働者と社會との中間に介在して、勞働がその社會的價値に從つて正しく評價されることを阻止するところの資本は、絕滅しなければならぬ。而してその結果は、勞働者の地位を向上せしめることになるであらう。

四、社會主義と共產主義

扨て以上の如く定義された社會主義と屢々混同される他の主義がある。それは、プラトーンの「共和國」に源を發し、後

に至つてトマス・モルスの『ユートピア』やカンパァネラの『太陽の都』等に於いて繰返されたところの共産主義である。社會主義と共産主義とは、皮相的に見れば一見相似たる如く考へられる點もあるが、然しそれ〴〵の所説をよく檢討するならば、全く異質的のものであることがわかる。

先づ第一に、共産主義の理論は不思議にも、歴史上永い間隔を置いてポツ〳〵と現はれた。即プラトーンの後一〇〇〇年を經てトマス・モルスが出でモルスの『ユートピア』（一五一八年）』から一〇〇年以上を經てカンパッネラの『太陽の都（一八二三年）』が現はれてゐる。彼等の理論は、社會の一般的恒久的狀態を表示するよりは、寧ろ各々自己の人格を表示してゐた樣に見る。一言にして盡せば、それは彼等の夢の叙述であつた。之に反して社會主義は、十九世紀の初頭以來一個の社會的潮流を形成して進展し來り、然かも社會現實態に着目してなされたものである。社會主義者達は、共産主義者達の如く單なる個人的感受性の下に思索したのではなくて、社會的熱望の下に思索した。

事實に就いてこの二者は、本質的なる若干の點に於いて互に正反對の立場にあるものである。既述の如く社會主義は、經濟的機能を社會の中心に連結せんとするものであるが、共産主義は、寧ろ經濟生活を國家の外に置かんとするものである。このことは、特にプラトーン的共産主義に於いて著しく現はれてゐる。プラトーンの考へた都市は、非常に異つた三個の階級によつて作られてゐる。その一は農夫及び職人の階級、他の二は官吏と武士の階級である。後の二階級は所謂政治的機能を遂行する者でそれだけで國家を構成してゐる。第三階級は經濟的機能を割當てられてゐる。即ちプラトーン的政治の根本原則は、第三階級が他の二階級から全く隔てられてゐること、換言すれば、經濟的器官が國家の外に置かれてゐることである。職人や農夫は、行政にも立法にも參加せず、また軍事的機能からも除外されてゐる。即ち彼等は、社會の指導的諸中心と何等の連絡をも有しないのである。從つてまた、これ等の指導的中心は、經濟生活に關する一切に對して、無關心であらねばならぬ。その結果、私有財産は第三階級には許されるが、他の二階級には禁じられてゐる。その理由はプラト

ーンによれば、富及び富に關係する總べては、公共的腐敗の淵源であつて、人々の利己心を刺戟して不斷の爭鬪を助成し終には國家を亡ぼすに至るといふにある。

プラトーン以後の共產主義は、總てそのモデルを彼にとつてゐるのであつて、經濟的機能を社會の中心外に置かんとする努力は一樣に見出し得る。勿論モルスの如く、プラトーンと異つて階級なき社會を夢想してゐるものもあるが、然し右の根本的の點に於いては同一である。それ故に、若し社會主義と共產主義とを同視するならば、それは正反對を同一視することになるであらう。今富に關する二主義の見解を分析するならば、共產主義はこれを罪惡とし、社會主義に於いては、それが社會化されない場合罪惡となる。卽ち、後者の目的は、國家に連結することによつて產業を道德化するにあり、前者のそれは產業と絕緣せしむることによつて國家を道德化するにある。

次にまた社會主義に於いては、生產機能は社會的に組織化されねばならぬに反し、消費は個人的のものとされてゐる。然るに共產主義に於いては、共同的なのは消費であつて、生產は個人的のものとされてゐる。

かくの如く、この二者は、その結論に於いて反對を示して居るのであるが、更に注目に値するのは、彼等が既にその出發に點に於いて反對を示してゐる。社會主義の理論は觀察の上にその基礎を置いてゐる。卽ち、それは歐羅巴に於ける最も進步した諸社會の現實的經濟狀態を分析し、そして現實的秩序の改革を要求してゐるのである。然るに共產主義は全く之に反する。卽ちその根本觀念は私有財產が利己主義の淵源であるといふこと、利己主義から非道德性が出て來るといふ假定の上に立つてゐる。然るにかゝる假定は、如何なる特殊的社會組織をも目的となし得るものではない。かゝる態度は、全く抽象的道德理論を根柢に置くもので、如何なる現實的の時にも場所にも適合するものでない。共產主義の設定する問題は私有財產一般の道德的諸結果であつて、社會主義の樣に、歷史上の近き時機に於いて實現されると考へられた經濟組織に關するものではない。この二つの問題は全く異質的のものである。而してまた、共產主義に於いては、所謂經濟的組

織は二次的のものであつて、その根本原理たる個人的所有の廢棄といふことに一致し得る程度に於いてのみそれの變革を考へる。之に反して社會主義は、その要求の根本的目的たる經濟組織の立直と一致するために必要な程度だけしか、私有財産を論じない。

共産主義の問題とするところは、利己主義及び非道德性が何處から來るかといふことである。か丶る問題は哲學者によつて哲學者のために課せられる問題である。これこの主義が歷史上年代的間隔を置いて發見した所以である。之に反して社會主義は特定の社會狀態と連帶關係にあるものであり、從つて我々の眼に持續的なる社會的潮流となつて現じてゐるのである。これ社會主義が、實踐的方面に有力なる所以である。而してまた、右二主義の提出する問題が相反し、その企圖する改革が異なる理由も其處にある。

ところが、この二者に於いて相似的の一點がある。それは、兩者共社會のために經濟的特殊主義(とも呼ばるべきもの)に懸念してゐることである。即ち兩者とも、特殊的利益が一般的利益を侵害することを憂慮することである。これこの二者が混同視される所以である。然しながら、二者が批難するこの特殊主義は、事實に於いて同一のものでない。共産主義は個人的所有なるものを一般的に反社會的であると論ずるのであるが、社會主義は、歷史上の特定時期に成立した經濟的大事業の個人的使用のみを危險視する。而してまた、右兩者の態度を決定せしむる動機も同一でない。即ち共産主義は、非現實的な道德的理性によつて孕まれたものであるが、社會主義は經濟的秩序に對する考察から生れたものである。前者に於いては、私有財産はあらゆる非道德性の根元であるが故に廢棄されねばならぬが、後者に於いては、工業上商業上の大企業は社會の全經濟生活に大影響を與へるものであるから、それ自體としては抛棄さるべきものでない。それ故に二者の結論は、次の如く全く異つたものとして現はれてゐる。即ちその救濟方法として、前者は、出來得る限り完全に經濟的利益を抑止せんことを主張し、後者は、只その社會化を主張するのである。之を要するに、共産主義と社會主義とは、過

激なる個人主義に對して等しく反對するといふ一點に於いてのみ、共通的なるものを有つてゐると言へる。然しながら、單に此點より推して兩者を混同視してはならない。何故なら、この兩者間には、前述の如く最も本質的なる多くの差異點があるから。

五、社會主義發現の社會的條件

右の所說によつて明かである通り、社會主義と共產主義とは、全く異なる歷史的二事實であつて、別々に硏究されなければならぬところのものである。それ故に社會主義の硏究をなすに當つては、普通の學者がなす樣にプラトーンの『共和國』にまで遡る必要はない。事實に於いて、前に決定して置いた樣な社會主義の本質的諸要素は、それ自體近代の社會的發達の所產たる諸條件に依存してゐる。今これ等の條件について述べなければならぬ。

先づ第一に、商業や工業やを國家に結びつけ得るためには、この二種の社會的器官に對して社會意識が賦與する價値が、殆んど同類でなければならぬ。卽ちこの二種の器官が、あらゆる人々によつて同一類のもの同一地位のものと考へられなければならない。然るに永い間、この二者の間に深い溝が掘られてあつた。卽ち、一方商業及び工業がぢつと後世に至つて發達したのに對して、政治生活は旣に可成り進んでゐた。それ故に、古代に於いて民族が强大たらんためには、敢て富むことを必要としなかつた。從つて富は、單に個人だけの關心物であつた。當時にあつては、個人の價値は頗る低く見られ、之に反して社會の道德的價値は最も高いものであつた。卽ち、個人は社會に對して、全くの隷屬物であつたに過ぎぬ。從つて個人的利益と公共的利益との間には、全然相容れざるものがあつたのである。この二者は、道德生活上の正反對物であり、聖と俗との如き對立物であつた。これ共產主義の結論に於いて、總べて經濟的範疇に入るものが、出來るだけ國家から遠ざけられた所以である。

それ故に、か丶る事物の狀態が終りを告げ得るためには、從つてまた社會主義的觀念が生じ得るためには、一方に於いて經濟的機能が社會的重要性を獲得すると共に、他方に於いて社會的機能が一層人間的特質を獲得してゐなければならぬ。而して國家が、自己自體の價値を減ずることなくまたその固有の資格を喪ふことなくして、一層諸個人と接近し且つ諸個人の希望に副ひ得るためには、商業及び工業が集團的機械の一層本質的なる車仕掛となり、且つ社會が諸個人の上に高く飛翔する先驗的一存在と見られなくならねばならぬ。換言すれば、國家が何等自己に矛盾することなくして一層緊密に世俗の事物と融和し得る爲には、國家はその神祕的特質を剝奪されて一の世俗的一勢力とならなければならぬのである。

然しながら、假令右の條件が具つても、卽ち人々によつて國家のか丶る役割が認容されても、單にそれだけでは社會主義を發現せしめ得るものではない。更に、國家が事實上この役割を演じなければならない。そのためには、他の二條件が必要である。

第一に、この役割を演ずるに必要な勢力を獲るためには、國家はそれに適當なだけの發達を遂げてゐなければならない。而して人々が、國家を特にこの方向に更に擴大しようと考へ得るためには、國家の勢力圈が旣に充分擴大してゐなければならない。此處に問題は、その複雜性と變動性とが單純且つ不動なる一規定に反抗する一類の社會的表示の中に、國家の力を介在せしむることの可能如何である。故に、人々が、國家が相當完全にその課業を遂行することを見ない限り、國家の力を認めないであらう。

第二に、縱令發達が充分であつても、經濟的諸企業の組織が若し國家の勢力圈から遠ざかつてゐるならば、何事も起らないのであらう。それ故に、各企業が擴大することなくして無限に增加してゐるだけならば、また各市民が個々に自らの企業を有つてゐるだけならば、かくの如き分散は決して共通的の方向を取り得ない。卽ち、各企業が家內的牆壁から外へ出ない間は、それ等は總べて社會的統制の埒外にあるのである。從つて國家は、各企業の中に侵入して交易及び生產の適

當なる條件を規定することはできない。それ故に、社會の指導的中心の若干がこれ等の企業に追及して規則的にその作用を感ぜしめ得るためには、商業及び工業が、自成的進動によつて既に集中の形を採り始めてゐなければならない。簡單に言ふならば、大工業の時代が既に始つてゐなければならぬのである。

前に定義した樣な社會主義は、以上の如き三條件の下に於いてのみ出現し得るものである。然るにこれ等の條件は、何れも近代に至つて辛じて具はつたものである。大工業は極めて最近の現象であり、而して工業はかゝる形態を採るに至つて始めて眞に社會的重要性を獲得し得たのである。工業が互に獨立なる多數の小企業の中に散在してゐた間は、その各々の作用が一の極めて限定されたる範圍内に止まつてゐたために、原則として社會の一般的利益に重大な影響を與へなかつた。のみならず、極く最近まで、宗教的及官僚的階級が、經濟的及庶民的階級を支配して、後者は社會に於いて低い地位に置かれてゐた。最後にまた、國家それ自體も新らしい現象である。これ社會主義が近代の産物である理由である。

六、社會主義の發生

以上の所説に於いて略ゝ豫想されるであらう如く、十八世紀までは社會主義が問題となり得なかつたのである。けれども其頃でも、少くとも佛蘭西に於いては、右に掲げた三個の條件が與へられてゐたことは事實である。即ち、大工業は既に發達の途についてゐた。經濟生活に賦與された重要性は充分に認められてゐた。國家は宗教的權力から獨立し、佛蘭西社會の中央集權は完成してゐた。故に我々は、此の時期に於いて、社會主義の特質を示す理論に遭遇するのである。けれども實際には、これ等の説は其後に至つて發達した社會主義の胚芽を藏してゐただけで、一般には共産主義的觀念の域を脱してゐなかつた。

社會主義の歴史の劈頭に出で來たるものは、モールリとマーブリの二人であるが、その何れに於いても、提出された問

題は、プラトーン、モルス、カンパネッラに於いて見られると同種のものである。卽ちこの二者の主張は、經濟生活を組織化し集中化する（これ社會主義の特徵である）ことにはなくて、私有財產の廢棄によつて、經濟生活から一切の社會的重要性を剝奪するにあつた。それ故にその歸結は、一切の共產主義の歸結と等しく、本質的には退步的のものであつた。また次に來たるルッソーに於いても、特に社會主義的と見らるべきものはない。只、その實現が不可能であるとの理由の下に、私有財產の絕對的撥棄を主張しなかつたことが、前二者に比して異なるところである。彼はプラトーンの如く、經濟機能を組織化し社會化することを望まず、却つて出來るだけ社會から外に置かうと努めた、否な少くとも、できるだけその勢力を減殺しようとした。

けれども、十八世紀に於いては事實共產主義しか知られてゐなかつたとは言へ、此處に看過することの出來ない事實がある。それは、十八世紀の共產主義理論が、以前の共產主義理論には見られない頗る特異な性質を現じてゐることである。

先づ第一に、それは最早散發的ではなくて、一の流れをなして繼續的に發現してゐる。このことは、古代のそれと全く異なる點である。卽ち、該世紀の初頭より、この種の論をなすものとして、サン・ピエール、ジャン・メリエ、ルッソー、メルシエ、レスチーフ・ドゥ・ラ・ブルトンヌ、等をモルリー及びマブリー以外に數へることができるのである。

次に以前の共產主義者は、私有財產が非合理的なる基礎の上に立つてゐること、またそれが事物の本性に一致しないことを論ぜず、只集團から個人を離れしめる時悲しむべき結果に立ち至るであらうと論ずる。然るに十八世紀の共產主義者は、單に財產及び不平等の有害なる結果を攻擊するのみならず、更に所有そのものを攻擊してゐる。卽ち前者は、彼等の夢見た通りに事物がなるならば社會は更によくなるだらうにと嘆聲を洩らしてゐるのであるが、後者は、彼等の主張するごとくに事物をなさねばならぬと言ふのである。

かくの如き流れの漸進的過程の中から、佛蘭西に於いて初めてシスモンヂなる社會主義者を出すに至つた。

七、補　論

以上に於いて私は、デュルケムの所説の大綱を紹介した積りである。然しながら、この紹介は大體に於いて失敗であつたことを、今に至つて考へる。何故なら、デュルケムの社會學的研究は總べて實證的方法によるもので、一々の論議に對して具體的例證を與へてゐるのである。然るに私は、彼の詳細に亙る議論の荒筋を抽象的に紹介したのであるから、却つて讀者をして、デルケムを概念社會學者（デュルケムの最嫌惡する）でゞもあるかの如く思はしめる恐がある。

殊に最後の部分、即ち『社會主義の發生』の節は、より詳細に紹介しなければならなかつたのであるが、『社會主義の發現條件』のところで少しく詳しく論じたのと、紙面の都合で殆んど必要點を述べる暇がなかつた。特に興味を有たれた讀者には原本を讀んで貰ふより仕方がない。

次に注意を要することは、デルケムの使用した共産主義といふ文字である。共産主義なる名稱は、古來傳統的に、プラトーンの『共和國』に於いて主張された理論及び、それをモデルにした多數の主張に附されてゐた。デュケルムもまた、この傳統の上に立つてプラトーン及びそれより派生した理論に此の名稱を用ひてゐる。然るに今日に於いては、マルクスに淵深する社會主義、露西亞ソヸエット主義、及び第三インター・ナショナルの主張等に此の名が附せられてゐる。デュルケムの所説に於いては、マルクス主義は勿論社會主義中の有力なるもので、共産主義ではない。デユルケムの分析に於いて、このことは何人にも明かなことであるが、若し誤解されることがあればと思つて一言して置く。

次にデュルケムの以上の所説に於ける態度は、彼の社會學に於ける一般的態度と一致するものであるのみならず、彼の議論は彼の他の著述に於いて述べられある點を利用してゐる。それ故に若し彼の社會主義論をよく理解せんとならば、これ等の著述を讀まねばならぬ。（一九二九・七・一〇・鵠沼にて）

軍縮の首途に想ふ

伊藤正徳

一

果然、第三次軍縮會議への運動が、米國に依て起された。私の小論文は、この『果然』の註釋から筆を起すのが順序を得ると思ふ。

『今度は英國の番だ』(ブリチッシ・ターン・ツー・ムーブ)——と、前大統領クーリッヂ氏が促がしてから、餘程の月日が經つた。しかし、英國の老巧なる、容易に主唱國として動かうとはしない。ゼネヴァ會議が乘上げた暗礁は、今日も依然として波間に隱見して居る。之が取除かれて會議の纒まる見極めが付かぬ限り、英國は用心して主動的に動かぬ積りであらう。而して其心の中では、前記の暗礁は人造であり、然も米國製のものであるから、先づ米國が夫れを取除くのが當然だ。夫れを除した上で相談を持ち込んで來れば即刻欣然應諾しやうと云ふのであらう。

その暗礁とは、後に述べる如く英米海軍の均勢(Parity)と云ふことに外ならぬ。するとブリアン・ケロッグの不戰條約が多邊的に擴大されて世界的の條約とまで成功した。米國から言はせれば、之でゼネヴァの暗礁も、理論的に根こそぎに取除かれたから、英國は、この邊で軍縮の主唱國となつて現はれて宜い時分なのである。然るに英國は、この不戰條約に除外的宣言を附して調印した以外、少しも動く氣配を見せなかつた。

米國は聊かしびれをきらした觀がある。遂に、今年二月、長らく問題になつて居た海軍擴張案——一萬噸級巡洋艦十五隻の建造——を通過させて了つた。是れ、英米の巡洋艦勢力比に決定的變革を招徠するものであるから、英國はヂッとしては居られない立場に陷る。玆に於てか、英國は、曾て米國のドッ艦ト

六隻の大建造に惱んで窃に軍縮會議を持かけたと言はれる如く——華府會議の原因と稱せられるけれども、確證は舉がつてない——今度も、補助艦の縮小會議を非公式にでも提案するのではないかと考へられたが、英國は尙ほ、林のやうな靜けさを保つた。

二

米國は、いよ〳〵待ち切れなくなつて起つた。「その主唱するもの先づ拂へ」で、主催國が一番多く犧牲を拂ふのが當然である。他を慰撫するには己れに收むる所があつてはならぬ。この理は、個人の交際に於けると同樣、國際交渉の上でも動かぬ不文律である（華府會議に於て、眼前最も大なる犧牲を拂つたのは、主唱國たる米國であつた）。

英國が、當然動く可きを動かぬ理由は、會議失敗の責を回避すると云ふやうなケチな考からでは無く、大切な海軍力の公定に當つて一厘一毛でも損をしまいとの用意からであらう。思ふに、主力艦の方は致し方が無い。米國の大ド級艦十三隻を未完成の間に葬らせた代償として、英米の同率は忍ばねばなるまい。しかし、補助艦に至つては立場が違だ。更に國情の點からも餘力を保たねばならぬ。夫れ故に、補助艦縮少を主題とする軍縮會議の主唱は、その率先的犧牲は、何としても御免を蒙らねばならない。是れ、英國が、我慢を重ねて沈默を守り通した所以であると思ふ。

遂に米國が起つた。飽く迄も註文をつけて起たない相手にぢらされて、敢然と起つた力士の姿を想像することは、今後の勝負は別として、興味ある見方かも知れない。

併し乍ら、以上誌るす所だけを以て、今度の軍縮運動の緣由と見るのは素より早計である。また、私の『果然』の意味も盡されては居ない。『英國の番だ』と促がし、建艦案の示威運動も濟んだのに拘らず、英國が動かないので、遂に之を諦めたのは、正に裡面の大原因ではあるが、いよ〳〵自ら蹶起するに至つた原因は、表面的に立派に認識されるのである。

三

第一は不戰條約の成立である。日本では、之を迷信者の唱ふる「御題目」の程度に考へて居る人も少なくない。いな、當の米佛にも、之を輕く取扱つて居る論者が居るのだから、日本に同論を聞いたとて少しも怪しむには當らぬ。併し乍ら之等大國の政治家及び多數識者の間には不戰條約は、活きた誓約として遵守さる可きことを、嚴粛に信ぜしめて居る。その帝王の名に

於けると、人民の名に於けるとは問ふて居ない。而して其效果の期待が、第一に軍備縮少の協定である可きことは、理論上極めて自然の筋であると言はねばならない。

假りに一歩を讓り、不戰條約に加盟した四十ケ國が、「反對する理由も無いから」と云ふ交誼的、或は机上論的の立場から賛成したとしても、加盟は即ち加盟である。既に加盟した以上、その條約が必然的に伴ふ所の結果に對して、横を向いて了ふことは許されない。不戰條約が軍縮を伴ふことは、五に五を加へて十になると云ふほどの明白なる數である。戰爭を拋棄する決心ならば軍備は不要だ。併し一國だけが先に縮少しては危險だから、その危險の無いやうに協定し乍ら減らさうと云ふのは、之れ亦、五に五を加へて十になるの明理でなければならぬ。

今度の米國の主動は、右の手に此條約を翳して居るフーヴァ大統領が、五月三十日のアーリントン演說に於て、加盟國は其結果を受諾せねばならぬ (must accept its consequenses) と說いたのは即ち此意味に外ならない。之は正論だ。また一種の權利とも言へる。

斯く右手に不戰條約を翳して叫び掛けた米國が、その左の手に持つものは例の海軍大擴張案である。三年間に、一萬噸級の大巡洋艦十五隻を建造する急速度の大擴張案である。之に目下建造中の同型大巡洋艦八隻を加ふれば、一九三二年には、二十三隻の優勢なる新艦が編隊され、一躍して英國を凌ぐことになる。いま茲で、英米並びに日米の巡洋艦の勢力を比較論評して居る遑は無いけれども、この米國の大擴張案が、不戰條約と對角線的反對の行動であることは何人の眼にも明かである。米國は何故に、斯くの如き、子供にも判るやうな矛盾、或は又、「右手に劍、左手に和」と云ふ、俗にありふれた手を世界に晒らすのであらうか。

四

まことに、在りふれた手である。子供の頭を撫で乍ら、きかなければ是れだと、鐵拳を見せびらかすなどは、通俗に過ぎて厭味である。

が、しかし、之を以て、直ちに米國の軍縮外交を低級俗惡のものと評するのは皮相の誤に座する。實は、斯かる簡單明瞭な手段で、一氣に強く押すより外に、軍縮の空氣を具體的に導く良策が無いからである。軍備の不要を描象する不戰條約と、軍備の大擴張とを、同一人が同時に試みると云ふのは、餘程の勇氣なしには出來ない藝である。斯く、何人も常識上遠慮すべきことを、敢然と演つて行く所に、米國の決心があるのだ。即ち、

米國は、一九三一年に豫約した第二次華府會議を、手際よく仕遂げる爲に、事前に一の重大なる豫備會議――或は第二次華府會議の繰上げ――を成功させる必要がある。

而して同時に、その機會に、(一)英米の均勢(パリチー)を補助艦の上にも確立し、(二)能ふ可くんば積年の懸案たりし『海洋自由の問題』をも解決しやうと期するのである。この二つの要求は、米國の海軍政策の兩輪を成すもので、然も過去の經驗上隨分困難な問題であるから、之を一九三一年の會議に卒然と提議するのは危險である。何うしても大備を事前に築いて置かねばならぬ關係上、會議の成立に焦心して居る譯である。而して英米海軍のパリチーの問題と云ひ、また海洋自由の問題と云ひ、共に米國の利益を將來に亙つて增減すること甚大なるは明かであるから、百方苦心して英國に主唱せしめ、自分は後援者として幾分でも利益を保留しやうと企圖したのであつた。

英國の遂に動かざるを見るや、「歐洲の外交は老猾に失す、この上は高飛車に迫るの外なし」と觀念して、大巡洋艦十五隻の大擴張案を示威しつゝ、全力を動員して軍縮會議の主唱國たるに決意したのである。之を英國の側(保守黨の政府)から見れば、正に思ふ壺であつた――。

(註)この稿を草して居る時 七月四日の華盛頓電報は「米國大統領が、軍縮會議の召集權を英國首相に讓る決心である」旨を傳へて來た。思ふに、英國の政府が保守黨から勞働黨に移り、軍縮への心事と態度とが率直になつたので、米國は透さず主唱國を英に轉嫁する素思を再發したのでは無いかと思はれる。參考の爲め附記して今後の展開を待つ――。

さて、私は『果然』の註釋から英米の軍縮外交の想像の爲に、與へられた紙幅の半ばを費やした。急いで今日の事態そのものに移らう。先づ四月の聯盟委員會に於て、米國代表が、世界に新轉向の烽火を揭げた所から發足することにしやう。

五

いよ／＼自ら主唱せんと決心した米國の新大統領フーヴァ氏は、その第一聲を、ゼネヴァに於ける米國代表ギブソン氏に託した。四月廿二日の聯盟委員會に臨んでギブソン氏の揚々と述べた所は、まことに、新大統領の第一聲たることを辱しめず、その聲は全世界に洽し、その心は、可成り有效に各國識者の胸を打つた。而して米國新提案なるものは

(イ)各艦種別の保有噸數の間に融通を認めること。

(ロ)海軍力の測定を排水量のみに止めず、進んで、艦齡、備砲、速力、裝甲の諸要素をも斟酌すること。

(ハ)曾て提議された保有噸數よりも一層縮小的に制限すること。

の三點に於て從來の軍縮案よりも確に進歩的であり、且つ其演

說の隨所に現はれた語調は、前回よりも著るしく熱誠を發露した。就中、夫れは米國大統領の新任早々發表する國際政策の最重要なる第一聲であることを力說した點に於て各國の政治家に深い印象を與へた。而して同時に、米國代表は、海軍力測定に關する專門家の復案を各國に送致して研究を依賴するの途を執ると聲明したのである。

この米國の態度は世界輿論を動かすに十分であつた。多くの論者は、此案の根底に横はる海軍力測定法の難易の問題を顧みるの遑なく、軍縮は一歩進展したものとして歡迎し、且つ大いに期待を繫ぐのであつた。間もなく、各國專門家が測定法の新難關を指摘するに連れて軍縮安産の夢を破られた形ではあつたが、然も、(イ)各艦種噸數間の融通性と(ロ)一段の縮小制限とは、吾々をして軍縮の正しい方向に進みつゝあることを歡ばしめたのである。

その世論の下火とならんとするとき、今度はフーヴァ大統領自身、アーリントンに於ける無名戰士の祀典に臨んで、軍縮の要を疾呼した。氏の演說は全部が軍縮の主張であつたが、其要領を摘記すれば

(イ) 不戰條約が成立した以上は、今後の軍備は攻撃的の存在理由を失ひ、悉く防禦專用たる可し。而して即ち軍備の防禦用としての必要は全く「相對的」でなければならぬ。

(ロ) 而して相對的安全を實證するには、各國海軍力の優劣を測定す可き合理的尺度(rational yardstick)を發見することを必要とする。

(ハ) 各國が合議して共通の尺度を得た上は、吾々は軍備の制限より一歩を進め、之を現勢力の低減にまで協定し得るの道理である。

と云つたもので、最後に米國が、戰士と同じ大勇猛心を振つて此事業に當らんとする決意を表明したのである。

六

是に依て世界は再び軍縮を現實の緊急問題として反省するやうになつた。而して其世界的熱度の醒めない間に、恰も之を保溫し更に加熱する運動として、マクドナルド・ドース會見が六月十六日、蘇格蘭のフォレス山莊で行はれ、引續き六月十八日、ドース大使は、倫敦ピルグリムス・クラグに於ける新社歡迎の晩餐會席上、米國の軍縮案を綴說して世界的の反響を得るに成功した。即ち米國は、四月にはギブソン代表をしてゼネヴアに提論させ、五月には大統領自身アーリントンに疾呼し、六月にはドース大使をして倫敦に叫ばしめ、三段構への筆法を以て世界の軍縮輿論を喚めた觀がある。

不戰條約既に成り、軍備の負擔既に國民の肩に重く、而して米國また既に非常なる意氣込を以て進み來る。世界は、平和を好む國民は、軍縮への運動を遲疑す可き寸毫の理由をも持たない。米國と共に片棒を荷ふ英國も、保守黨内閣は米國案の忽急なるを嫌ふ風が見へゼネヴァに於ける代表カッシエンダン卿は巧に速答を避け、次で總選擧が爭はれるに及んで回答を延期し、而して其最中、藏相チャーチル氏をして、「英米海軍の均等(パリチー)」に大反對の演説を行はせ、少なからず米國の神經を尖らしたけれども、マクドナルド氏の内閣が成立して之等の疑雲は一掃され、今や英米の軍縮協調は未曾有の圓滑を示すに至つた。

然らば此上は、具體的方法の合理化あるのみ。そこで米國の所謂「海軍力の尺度」が實は最重要の問題となつて來るのである。是れ單に專門家の問題として擱く可きではない。その成否が直ちに軍縮の運命を決定する所以は、前記フーヴァ大統領の演説中にも炳焉と示されて居るからである。

七

若しも、この『海軍の尺度』——即ち各艦の戰鬪力の比率——が合理的に發見され、世界的に公認され得るならば、軍縮協定の足許は餘程明るくなる。何となれば、一九二九年に於ける各國の海軍戰鬪力が、數字を以て明確に描き出され、その滿足の程度が、文句無しに、各國民の眼に識別されるからである。フーヴァ氏の所謂「相對的勢力」は世界に明示され、各自が勝手に強弱を測つて不平を言ふやうな禍根は取除かれるからである。

されば、ドース大使が、倫敦演説に於て三たび、米國の尺度新設案を力説したのは信念の當然であると言はねばならぬ。彼は「軍縮の第一の仕事は、各國の海軍專門家として海軍力の理論的定義を作成せしめ、各艦の戰鬪力の尺度を發見せしめることである。而して茲に軍縮の尺度を得た上は、今度は政治家の手に依て最後的に其定義及び程度を妥協する」のが新米國案の骨子であると説いて居る。

いま之を判り易く説明すれば、從來の排水量のみに依る海軍力の評價法は不完全であるから、合理的の尺度を求めねばならぬ。即ち艦齡、砲力、速力、裝甲等の戰鬪力の要素を取入れねばならない。同じ一萬噸の巡洋艦でも、今年出來たものと、十年前出來たものとが同一戰鬪力を持つ譯は無い。また同じ七千噸級でも、六吋砲を備へるものと、八吋砲を備へるものとの間には、戰鬪力に非常の相違がある。速力の場合また同じ。故に之等の根本的戰鬪要素を計算に入れるのは當然のことであつて、

従來の排水量一點張の評價法が不合理であつたことは明白である。(筆者は既に一九二一年の華府會議當時、この點を指摘して大いに米國案の誤を警告したことを回顧する)。

然るに不幸にして、米國の折角の訂正は理論的に進み過ぎて却て實際的協定の難所に陷りはせぬかを憂へしめるのである。足をぬぐへぬ程の深みにはまつて了ひはせぬかを心配させるのである。簡單にその理由を擧げて見やう。

八

第一に、戰闘力の各要素——砲力、速力、裝甲等——を計算に入れる場合には、夫等おのおのが、戰闘力の何割を構成するかを決めなければならぬ。換言すれば、各要素の限界效用を算出しなければならぬ。卽ち戰闘力を一とした場合に、砲力はその何割を構成し、速力はその何割に當ると云ふ基礎的算定を遂げねばならぬ。然るに、之は各人の主觀、各國の國情(軍艦の利用法に關す)に依て相違し、夫れに依て自國への保有隻數に增減を來す關係があるので、列國の一致は隨分困難であると考へられる。例へば砲力を五割と見積るのと三割とする場合とでは、「八吋砲艦一隻に對して六吋砲艦を何隻持ち居るか」を、決する場合に、重大なる相違を來すことと明白であらう。

第二に、右の綜合法を避けて各要素毎に二つの艦を比較するとしても、砲力及び速力等に關する各國専門的の評價に架橋し難き溝渠の生ずることを豫斷し得るのである。例へば、八吋砲と六吋砲との優劣を數字的に發見せんとすれば

	口徑長サ	砲彈重量	口徑に於る秒速	同破壊力
八吋砲	五〇口徑	一〇五封度	二、八〇〇呎	五、七〇七呎噸
六吋砲	五〇口徑	二六〇封度	二、九〇〇呎	一五、一六〇呎噸

註、破壊力は彈重に秒速の自乘を乘じたもの

の比較を得る。卽ち八吋砲は六吋砲の約三倍の威力を把持すると云ふ計數が出るのである。之は米國ベスレーム製鋼會社の計算に依つたものであるが、各國の製砲表に徵しても大同小異である。

併し乍ら、常識から考へて、三と一ほどの差は無いと主張する人があらう。事實、六吋艦と八吋艦とが、巡洋艦第一の任務とも言ふ可き寄襲艦隊の擊破或は商船の破壊等に從事する場合には、其威力に大差無しと言ひ得るのである。また全然之に反して兩艦が一萬五千碼で對戰する場合には、六吋砲彈は到達せずして八吋砲彈の自由射擊に委するの外なく、卽ち此場合には、六吋砲はゼロになるのである。斯くの如く、目標に依り場合に依て兩砲の相對力に激しい相違を來すとすれば、果して何を標準に威力比を決したら宜いのか?、自國の便宜次第で評價法「

困し、一致點の發見殆ど不可能に歸しはせぬか？而して速力に關しても略同様の難關が考へられるのである。

九

果して然らば、米國が今度こそは成功させやうと意氣込んだ軍縮の、その基礎的要素と銘打つた海軍力の『尺度』なるものは、冷靜に考ふれば考へるほど、いよ〳〵怪しくなつて來るのである。尺度(ヤードスチツク)は、若しも世界的に統一されるならば、まことに結構に相違ない。何うかして出來る途は無いかと研究した結果私は『絶望』に近い悲觀を抱くに至つた。その理由としては、六月二十三日以降の時事新報紙上に詳述した關係上、こゝに重ねて論ずることを躊躇するが、之を要するに、

	排水量	砲口徑――數	速力	艦齡
A艦	一〇、〇〇〇噸	八吋――一〇	三三節	二年
B艦	六、〇〇〇噸	六吋――八	二九節	七年

と云ふ二艦を比較して、A艦が優勢であることは誰の眼にも誤測は無いけれども、さて其戰鬪比を算出することは、胡魔化さぬ限り不可能である。恰も西洋館と日本館の價値を、計數的に算出するのと同様の不可能に落つるであらう。況んや、六吋艦の方が高速力であり、新銳である場合の如き、或は亦、商業破壞用として特設されるやうな場合には尙更である。更にまた、防禦力（艦上、水線、艦底の三面）、航續力、水雷力等をも計算に入れるときは、困難いよ〳〵加はるのみ。

いま假りに、英國が前記の二艦の比を三對一と評定し、米國が三對二と評價したとせよ。而して兩國は各々、A艦三十隻分の力を隨意に分配所有し得るとせよ。その場合に、英國はA艦の十隻分を割いてB艦を建造すれば、A艦二〇隻B艦三〇隻、合計五〇隻――三八萬噸を保有することが出來るし、同じ分配を米國式に則れば、A艦二〇、B艦二〇、合計四〇隻――三二萬噸しか持てぬことになる。大變な相違が生れるでは無いか。而して、六千噸級を多く要求する英國が前者の『尺度』を主張し、一萬噸級のみを望む米國が後の『尺度』を固執す可きは、理の當然であると想像されるのである。尙ほ此間の懷疑を說いて居ては容易に盡きぬから、この邊で結論を急ぐことにしやう。

十

最後の問題は、米國大統領が、何故に戰鬪力の『尺度』――Yardstick なるものを、今時分、持ち出したかに懸る。

この戰鬪力の評價法は、歐洲戰爭中、新銳艦の比較を正確にする目的で、standard of measurement の名に於て、論議され

たことがあつたが、結局は「不可能」と云ふに一致して放棄された歴史を持つものである。

然らばフーヴァ氏又は其軍事顧問は、この歴史を知らずに、不注意に依て之を唱へ出したのであるか。それとも之を承知で、他に何か信ずる所あつて敢て再唱したものであるか。或は、過去の議論がレコードに殘るやうに印象深く傳へられなかつた爲に、注意が屆かなかつたのかも知れないが、私は、他にフーヴァ氏の動機と目的とを推察する理由を發見し得るやうに思ふ。即ち、一の目的の爲に、一の試みとして提唱されたものと信じ得る事情がある。

第一に、フーヴァ氏及び米國の專門家は、この「尺度」の發見を、最初は左まで困難とは思はなかつたに相違ない。故に四月廿二日の演説に於て、ギブソン代表は、この尺度に關する米國案を各國に送致して各專門家の研究に供する積りだと説いたに拘らず、その米國案は未だに各國に提出されて居ない。中途、何處かで握り潰されて、待てども／＼出て來ない。是れ疑ひも無く、米國の專門家が、尺度算出法の研究を積むに從つて、「合理的尺度」の不可能を悟つた爲と思料するの外はないのである。

玆に於てか、第二に、六月十八日のドース大使の提論は、之を補正する爲に、『專門家の尺度を、政治家の妥協に依て統一する』と改論して居る。軍艦を見たことも無い政治家が、軍艦の戰鬪力の尺度を決定するのも面白いかも知れぬ。割合に雜作なく纒まるかも知れぬ。兎に角、五月卅日のフーヴァ氏の演説に『合理的なる尺度』(ラショナルヤードスティック)なる大看板が、ドース大使に依て『政治的の尺度』に變更されたことは注目す可き事相と言はねばならない。

即ち知る、米國は、無理にも尺度を作つて、各國海軍力の保有勢力に、縮小的制限を協定する意思に外ならない。無理に作つた尺度が、各國民の間に不平と不安とを釀して、精神的軍縮の理想を打ち壞すやうでは大變であるが、之は今後の問題として、玆には是れ以上想定論を草することを遠慮して置く。

十一

さて何故に無理しても尺度を望むか。

そこには實にフーヴァ氏の苦心を想察して餘りある難關が横はつて居るのである。即ち、この尺度主義に依るに非ざれば、到底打開の途なしと信ぜられる大鐵柵が、英米の海軍協定を痛くも封鎖して居るのである。その大鐵柵とは何か。外でも無い「英米均勢」――Parity――の暗爭である。

私は既に、ゼネヴァ會議を決裂させた根本原因が、この「英米均勢」の事であることを一言した。必要の點から考へれば、

其眞相を茲で紹介せねばならないのであるが、本稿は夫れに觸れてゐる遑が無い。依て私は、この問題が、一九二七年の夏以來、少しも改善されぬ英米暗闘の癥狭であることを強調して置くに止める。而してモウ一言、パリチーは、米國海軍の不可讓の主張であり、その反對に英國海軍の飽く迄も回避せんとする所であり、更に、米國は英國が一旦容認した主義のやうに喧傳するのに對して、英國は覺へが無いと逃げて居る「戰略勝敗の分岐點」なのである。

英國の國情を以てして、貿易擁護の爲の巡洋艦以下を、自活獨歩の米國と同等に限定されることは忍び得ないのである。然るに米國は、國の威信に掛けて均等を主張して頑として讓らないのである。英國に「國民の海軍省（アドミラリチ）」あり、米國に頑強なる「上院（セネート）」あつて對峙するのであるから、其間にあつて『均勢』を解決せんとする——之を解決せざれば補助艦縮少は絶對に不可能——フーヴァ大統領の苦心や、まことに想像に餘ありと言はねばならぬ。

而して私は、大統領の『尺度』は、何とかして均勢の爭を解く爲に、冒險的に試みられる最後手段であると考へ、深い同情を以て之を見護らんとするものである。

即ち、一萬噸艦と六千噸艦の勢力を、ある尺度に依て後者を弱く算定し、例へば一〇〇に對する五〇と云ふやうな（或はそれ以下の）戰闘比の公數を協定し、即ち實力は必ずしも噸數の大小に關せぬことを證明し、之に依て、一は英國に多數の輕巡洋艦を與へて貿易保護上の要求を滿足せしめ、一は米國上院に對して「實力の平等」を觀念させやうと志すものであらう。

例へば同じく廿五萬噸の巡洋艦を持つとして、右の比率を應用するごときは

	一萬噸級	六千噸級	實力點	噸數
英	二五隻	—	二五、〇〇〇	二五〇、〇〇〇
米	一二隻	二六隻	二五、〇〇〇	二七六、〇〇〇

のやうな兩刀使ひが出來る。即ち『フーヴァ氏の尺度』は、輕巡洋艦の相對的劣勢を割出す爲の政略的尺度であると想定されるのである。

十二

さり乍ら、英國は果して一萬噸級に於て米國よりも著るしく劣勢なるを諾するや否や。米國民は噸數の劣れることを默認するや否や。更に遡て英國人は「均勢」を甘受することを得るや否や。フーヴァ氏苦心の尺度は、その目的に於て政略的聰明を閃示するけれども、之を以て軍縮が容易化されるものと思ふのは

早計では無からうか。

一方に「海洋自由の問題」が絡つて居るが、之は假に問題埒外に措き、本稿は、米國が軍縮の希望を、英米間に具體化させる爲に如何に苦心し、而して遂に「尺度」に想到した其尺度が不幸にして、本質的に難症を固有する所以を說いて擱筆する。

乞ふ、他に難局打開の合理案は無いか？

轉じて、日本は如何なる用意と見識とを以て、來らん軍縮會議に臨む可きであるか？

また今度は、曾て華府會議の後半を崩した佛蘭西の參加を必要とし、且つムッソリニ君の伊太利を加へるから、英米の均勢は、三角的に面倒な關係を生むことをも覺悟しなければならぬ。徒らに樂觀しては誤まる。さりとて悲觀も無用だ。要は覺悟を決め研究を積んで、我が海軍安全點と世界軍縮とを兩立させることを考察する人々の爲に、拙稿が幾分でも役に立つならば、忙中の粗筆酬ゐらるゝ所過大である（四、七、八）

支那資本主義革命の現段階

鈴木茂三郎

一

若き支那、資本主義の使徒、蔣介石が青天白日旗を南風に飜して、上海に旗を押しすゝむべく、まさに楊子江を渡らんとする對岸から、帝國主義國日本の田中前首相に、招商局の船舶を擔保に五百萬圓の借款を提議して來たが、田中は「あれは赤いでのう」と、膠もなく拒否したので、蔣介石はくるりと尻を向けて、帝國主義國アメリカに手をさしのべたのだつた。

田中前首相に「あれは赤い」と極めつけられた蔣介石は、封建的遺制たる農村に、物質的基礎を置くところの、かの新軍閥、馮玉祥、閻錫山に旗を捲かせて、今や彼は、支那資本主義革命の段階を制す可く、全土を統べて、「白」の白日旗を高らかに揭げたのである。

偶然「赤」にあらずして「白」だつたのである。支那には「浮雲翳二白日一」といふ言葉もあるから、白日旗が浮雲に翳はれて、田中首相の眼には、赤く映じたのかも知れないが、だが、それが赤く見えるそれほど、帝國主義國日本のブルジョアジーにとつては、若き支那の成長、卽ち資本主義革命は、恐怖に値ひする對立物の出現にひとしい事實を、我々は見逃してはならぬのである。と同時に、老帝國イギリス資本主義國も、田中前首相と、同一の立場と、同程度の恐怖の眼色を以つて白日旗を眺めたであらうし、また今や帝國主義段階の最高潮期にあつて躍進をつゞけつゝあるアメリカは、ドル資本の捌け口をこゝに見出して、同色の後裔たる支那の、資本主義革命の行進を祝福したであらうことも、之れ又、見逃してはならぬ。

さうしたことは、次ぎの如き各帝國主義國の資本力が決定す

るところである。

支那外資國別概算(單位弗)

	投資額	借款	比率%
日本	十一億	四億五千萬	四五
英國	五億	三億六千萬	二五
米國	一億五千萬	二億二千萬	七
佛國	一億	一億八千萬	五
白國	二千萬	一億一千萬	三
伊國	二千萬	九千萬	三
其他	一億一千萬	四億	一二

それ故に日本資本主義は張(奉天)と馮、英國資本主義は廣東の策略に敗亡したる廣西派、アメリカのドル資本主義は蔣の、それぐ\の國際的背景を爲し、かゝる情勢の下に、蔣介石は浮雲を掃蕩して支那資本主義革命を成し遂げたのである。だが彼は、馮を失へる日本、廣西派を見捨てた英國、その他ドイツ、フランス等一連の資本主義國とも、改めて支那資本主義國との國際關係を設定し、新たなる國際情勢を造出するであらうが、此の新たなる國際情勢は、もとより彼が造り出すのではない。彼は上海、廣東、天津を主體的勢力とする支那資本主義の政治的主權者たるに過ぎない彼である。從つて新たなる國際情勢は、若き支那資本主義を車軸として展開されねばならぬ。

二

さうした蔣介石を、政治的主權者とする支那資本主義革命の主動勢力が、上海、南洋の支那ブルジョア群であつたことは、普ねく知られてゐる。

南洋には、廣東、福建あたりから押し出した移民、所謂華僑は、諸群島に「支那人の南洋」を形成するほどの勢力がある。華僑の總數は五、六百萬人を、或は出でるであらう、英領マレーなどは總人口の三割六分が華僑である。

華僑(移民)と言つても、顧維均は資本主義革命の前期共和政府時代の輝ける外交官たりし、彼の夫人の親父も南洋の華僑だが、私財一億ドルを擁する巨大ブルジョアであるやうに、華僑は華僑を搾取することによつて、華僑ブルジョアが生成されてゐる。

ゴム産業に對する各資本主義國の投資額をみても、華僑ブルジョアの勢威は、英國に次いで第二位にある。次表の支那其他の項中大部分は支那華僑の投資額である。

日本	八、〇〇〇萬圓	和蘭	三一、二〇〇
英國	一一七、五〇〇	米國	七、六〇〇
佛國	七、二〇〇	白國	一一、七五〇
瑞、獨	一一、二八〇	支那其他	六六、〇〇〇

備考、一九二八年南洋協會調査

華僑はゴムのほか南洋錫生産の五割を獨占し、銀行、信託、保險の金融資本も相當巨大である。またジャワには郞河東號、國民製糖公司、建源號其他の製糖産業もあり、これら華僑の製糖資本は、最近上海に資本を逆輸入して、製糖工場をおこさんとさへしてゐる。

かゝる華僑に對比して、支那本土には巨大ブルジョアがない。かつては、盛宣懷、張謇といふ巨大財閥があつたが、もとより資本主義日本に於ける三井、三菱財閥ほどの支配勢力は無かつた。

盛宣懷は現在の招商局、漢冶萍鐵山を占有してゐたが、すでに沒落し、通州の大地主たりし張謇は、五工場十二萬錘の紡績のほか、燐寸、製粉、汽船會社等を張謇財閥の下に從屬させ、上海に於ける澁澤の貫錄を把持してゐた。現在息の張孝若が、遺産を承繼してゐるけれども、資力も勢威も振はない。

張謇はフトしたことから一度び日本を訪づれたことがある。の産業、紡績も製粉も、燐寸も船も、すべてが日本ブルジョアジーと支那市場にあつて尖鋭に對立するところから、彼は極端に日本を厭惡して、食料、食器に至る一切を携帶し來たり、旅宿で彼自から支那コンロに火をおこして煮炊きしたものだ。

上海には、張謇、盛宣宣懷や、南洋華僑に見るやうな財閥的な巨大資本はない。

次表が示すやうに、金融資本に於ても、群小資本が眞砂の礫の如くにならび合つてゐる。

上海に本店を有する支那銀行(單位萬元)

	公稱資本	拂込資本
中南銀行	二〇〇〇	五〇〇
浙江興業	二五〇	二五〇
浙江實業	二〇〇	一八〇
中國通商	五〇〇	二五〇
四明商業	一五〇	六四
上海商業	二五〇	二五〇
永亨銀行	五〇	二五
上海正利	五〇	五〇
中華商業	二五	二五
江蘇銀行	一〇〇	六〇
紗業信託	五〇〇	一二五
通易銀行	三〇〇	七五
浙江絲綢	二〇〇	六九
合衆日夜	—	—
慶豐合資	二〇	二〇
大同銀行	三〇	三〇
上寶農工	三〇	一五

民新銀行	一五〇	三七
大豐商業	一二〇	一二〇
中華勸工	一〇〇	五一
上海江南	一〇〇	二五
上海墾工	一〇〇	二五
江蘇興業	一〇〇	三〇
五州商業	一〇〇	—
煤業銀行	一〇〇	五〇
華大商業	一〇〇	五〇
中國棉業	一〇〇	五〇
華寶銀行	六〇	二一
中華平民	一〇〇	五〇
上海日夜	五〇	二五
百滙商業	五〇	二五
信託商業	五〇	五〇
滙海實業	五〇	二五

しかし、と言つても、上海は支那資本主義の總司令部であつて、支那全土の總發電力四〇萬キロワットの十二萬キロワット即ち三割を上海で消費するほか、新興の資本主義産業の主力はこゝにある。

紡績の三割五分は上海にあり、メリヤスにしても、全土に約二百工場——そのうち七〇工場が資本二〇萬兩だ——ある、その地域別は上海四割、香港二割五分、廣東一割、其他二割五分の比率で分布されてゐる。

製粉、砂糖、煙草、海運なども上海に集中されてゐるが、煙草は年消費二億五千萬弗、そのうち輸入と外資による内地生産高二億、のこりの五千萬弗のうち約三千五百萬弗は支那資本による生産だが、日英米の煙草トラストと對立するものに南洋兄弟煙草公司(資本金三千萬元)がある。これなどは支那資本による産業資本としては珍らしく大きい方で、一體支那は、如上の群小金融資本について見ても窺ひ知り得るがやうに、(一)ギルド的な封建的遺制や(二)株式資本に最初から公利の利潤配當を要求するので、これが資本動員の障害となつて、株式資本を壓縮するほか、遺産の分等制度などによつて、財閥的資本もその成立を妨げられてゐるのである。

三

上海と華僑の資本力は、支那資本主義革命の主動勢力であつた。だが、それが主動勢力たり得たのは、外資に對抗する壓力と廣大なる農村に經濟的基礎を置いた軍閥を征伏し得る武力とを、支那全土の上に内包するだけに、若き支那資本主義が成熟を遂げてゐたからである。

かつて、張謇をしてコンロの火を吹かしめたのと同一の理由に基く第一回辰丸事件以來の排日運動の根本的な主因は、日支資本の對立に、外ならぬ。言ひ換えると、之れは後進支那資本主義の發展、生長の段階を築く鐵槌の音だつたのである。

排日運動の記錄

	導火線	期間	中心地帶
第一回	辰丸事件	明治四十一年三月より十月	南支
第二回	安奉線問題	明治四十二年八月より十月	滿洲
第三回	廿一ヶ條問題	大正四年五月より十月	全支
第四回	山東問題	大正八年五月より十二月	全支南洋
第五回	旅大問題	大正十二年四月より八月	北、中支
第六回	山東出兵	二年六月より十月	中、南支
第七回	濟南事件	現在	

排日、排貨によつて支那資本主義は發展する、しかし發展したればこそ排日、排貨運動がおこつたのである。

支那資本主義の發展は、斯く累進的發展を遂げたのだが、支那資本主義は曾國藩、李鴻章の活躍によつて軍需品産業をおこした一八六二年から一八八一年に至る發芽時代を經て、一八八二年から一八九四年に至る官營の國家資本産業の勃興、次いで一八九五年から一九一五年に至る「外資」産業の興隆、といつた特異的な段階をつくつてその發達を跡つけてゐる。

尤も右の外資産業時代に、製油、澱粉、綿織、酒類、煉瓦、陶磁器、金銀細工、製絲などの農村と結びついた手工業的産業の、それ自體の發達と共に、在來のそれを資本主義制に變革する産業革命も急速に進行した。一九一五年度現在の農商統計によると、かゝる手工業的産業の戸數は二百三十八萬戸、從業勞働者一千百四十八萬人に達してゐたのである。

右のうち機械使用工場數二萬七百四十八工場、勞働者數六十四萬八千人、勞働者比率から見ると、僅かに五分四厘強であつた。

しかし何んと言つても、支那資本主義の長足な發展は一九一六年以降である。試みに當時と現在との、重要産業部門を對比すると左表のとほりである。

一九一六年	現在
製油	製油工業
砂糖	砂糖産業
澱粉	―
紡績	紡績工業
酒類	―
煉瓦	―

陶磁器	製陶工業
金屬製品	―
製紙	―
製煙	製煙工業
洋灰	セメント工業
	燐寸工業
	硝子工業
	人絹工業

近代産業のうち、製油、煙草はわが在支資本、紡績、燐寸、わが内地及び在支資本、セメント、硝子、人絹、製陶、製紙はわが内地の産業資本即ち、支那資本主義經濟の主要産業の一切と、日本ブルジョアジーは尖鋭に對立してゐる。

そして支那資本主義の發展を、鮮明に跡づけるものは紡績産業であるが、日英支の生産設備の比率、發展は次の如くである

	日本		英國		支那	
	工場數	錘數	工場數	錘數	工場數	錘數
一九一五	三	一六五	四	一九五	三一	五四四
一九二五	四五	一、三二六	四	二〇五	六九	一、八八一
一九二七	四三	一、三八〇	四	二〇五	七三	二、〇九九
一九二八	―	一、三七四	一	一五三	―	二、〇三九

備考、單位千錘、織機臺數は一九二七年度に於て、日本一萬三千九百臺、支那一萬三千三百臺、英國二千三百臺である。

英國は日支資本に壓迫されて現在怡和紗廠を持つだけで、それも買辦所謂ゴンプラドルに經營せしめてゐる。買辦に對しては、三井物産が卒先之れを廢止したことがあるが、現在やゝ變形して復活してゐる。しかし支那資本主義經濟に於ける買辦の勢威は今日、甚だ振はない。

四

若き支那資本主義は、すく〳〵と生育するだらうか。否、困難であらう。

支那資本主義經濟の内的情勢からだけ見ても、その基礎は資本主義化されてをらない農業生産にある。支那のブルジョアそれ自身、多くは地主兼營である。そして世界に冠絶する豐沃なる農産物は、外國資本の支配下にある。英領マレーに於ては貿易の一割を華僑資本の下に占めてゐるが、支那輸出貿易の絶對的王位を占める農産物―或は加工産―は先進帝國主義國の産業(加工)資本又は商業資本に獨占されてゐる。

支那ブルジョアジーは、「外資」のやうに青田の豫約買占めをする豐富なる資力を、今日持たないからである。

次ぎには資本主義産業の關鍵產業たる重工業を持たない、實は持ち得ないのだが、鐵、石炭、錫、其他重工業原料は、支那大陸の原野に無盡藏に惠まれてゐるに、上海に輸入される石炭は年約三百萬噸で、そのうち百萬噸は直隷の英國資本による開灤炭坑から、また百萬噸は日本資本による撫順と日本內地から供給され、支那資本による石炭は僅かに八分三厘を占める廿五萬噸にすぎないのである。

鐵鑛は日本資本の獨占するところである、僅かに廣西(官營)の錫、雲南(民營)の錫が、重工業生產に、一縷の氣を吐いてゐるが、——と言つても南洋の錫に、壓倒的におさえつけられてゐる。

かうしたことは、支那資本主義にとつては、致命的でさへある。從つて支那資本主義の發展の方向は、現在さうであるが如く、資本構成の低度な產業に向つて、根を下ろすであらう。

これは滿洲に於ける實話だが、日本の魚屋は支那の雇人に荷をかつがせ、脊廣服でついておとくい廻はりをやつてゐるうちに、支那人の爲に魚屋商賣を奪略されたものが多いとの話だ。疊屋も大工も左官も、技術を習得した低賃銀の支那人のために取つて代はられてゐる。魚屋、疊屋、大工、左官と同一の情勢が、資本構成の低度な、紡績、製油、砂糖、製粉、セメント、人絹或は雜貨等の輕工業產業の上に、すでにおこり、又將來發展の展望に惠まれつゝあるが、支那資本主義の現段階である。

そして、さうしたことさへが、沒落期を上下しつゝある日本資本主義の現段階にとつては致命的でさへあるのだ。

五

さらに支那資本主義の特質の一を將來に約束するものは國家資本產業である。

現在の國家資本產業は、銀行、印刷局、造幣廠、被服廠、兵工廠、造船所、鐵道、電信電話等であるが、銀行、鐵道を除けば資本主義經濟に於ける重要性は極めてとぼしい。

國有鐵道はほゞ左表のとほりである。

鐵道名	延長	區間	資本國
京奉	二、一九五華里	奉天—北京	英
京漢	二、六三〇同	漢口—北京	英、白、日
津浦	一二、七七〇同	天津—浦口	英
滬寧	三〇同	上海—吳淞	英
滬杭	三五〇同	上海—杭州	英、白
正太	六二三同	石家莊—太原	佛
道清	三三〇同	道口鎭—清化	英

廣九	三〇〇同	廣州—九龍	英
汴洛	四二〇同	京漢培養線	佛、白
吉長	二八〇同	吉林—長春	日
四洮	二六四同	四平街—洮南	日
洮昂	一四二同	洮南—昂々溪	日
京綏	四三九同	北京—包頭鎮	支那
奥漢	七一〇同	廣東—武昌々完成	英、米、獨、佛、
廣三	三〇同	黄沙—三水	
萍株	六二同	安源—株州	獨
漳厦	一九同	江東橋—嵩嶼	
山東	——	青島—濟南	日

備考　六華里八一八が一里である。

此のほか滿鐵、(日本)東支鐵道、(ロシア)雲南(佛國)廣九のうち英國の部の國際鐵道があるが、鐵道のための債務は、現在約六億元に達する、從つて國有鐵道とは名のみで、實際は「外資」の支配下にある。

そして現在さうであるが如く、國家資本産業の發展を期せんとすれば、將來も亦、同樣に「外資」と結び付かねばならぬ。それは先進帝國主義國に對する隷屬を深め、强める以外の何物でもないが、現在の支那ブルジョアジーの、當面先づ所期せんとするところは、國民黨のスローガンたる「資本節制」産業の國有よりも、國家銀行資本を確立、統制して、かくてブルジョア群の産業助長に政治的努力を集中するやに見える。現に上海に於ては、新政府の下に銀行を創設し、各種産業の發起、助長に努力しつゝあるが、前年張作霖が爆死する前夜、北京に於てわが滿鐵代表と張と、滿蒙四鐵の殘部の敷設權について密謀した結果、滿鐵は張に二百萬圓を贈り、張は書類に「見た」と書いた。然るに今日、奉天政府は張が「見た」には相違ないが、承認したといふ署名がないと突張つて、日本ブルジョアジーの外資の輸入による國鐵の增設を拒否したのである。

此の事實は、明白に外資と支那資本との矛盾衝突を如實に語るものである。支那資本主義の增大、發展につれて、外資との矛盾、對立は擴大、發展せざるを得ない。それ故に、外資との新たなる結合は、支那資本主義の新たなる情勢の上に結ばれねばならぬ、といふ困難が、こゝに副生産されたわけである。

が、しかし新政府の眼前には、國家銀行資本の確立、統一—幣制統一—を根幹とする—と、過剩軍隊の裁兵—兵員の産業への動員—の二つの暗礁がある。

此の暗礁を乘り切つてこそ始めて支那資本主義革命は、一應の成功を全世界の面前に明らかに告げることが出來るのだが、

それには「外資」を絶對の條件とする。そしてそれは同時に「外資」に對する隷屬を必然の條件とする。

ともあれ主腦蔣介石は、裁兵の手段として、往年財閥張謇が企圖して成就し得なかつた洪澤湖の干澤事業を、ひそかに胸中に蓄んでゐる。洪澤湖は徐州と上海の中間にあるが、これを干しあげて、水を揚子江に落とせば、日本の全耕地の七割餘の豐沃な耕地が浮かみ上るのである。

總資本六千萬圓を要する、しかし、乞ふ意を安んぜよ、かかる干澤事業は、外資と支那資本との矛盾、對立はないのだから。

さもあらばあれ、新興支那は、資本主義革命の兵火による、生産の荒廢から恢復してゐない。重工業石炭の支那資本は、山奥に眠り込まされてゐる。

武漢地方に於ける官營の被服四工場や第一紗廠、裕華震寰、申新紗廠の第四工場や、福新第五、勝新、金龍の製粉工場の多くも、操業を休止してゐる。

新興支那資本のブルジョアは、今や荒廢した生産の恢復と、そして新興産業の發起に、若き血潮を躍らせてゐる。

資本主義革命を告げる青天白日旗を高らかにかゝげて。

日本發見

柳澤健

○

マルセーユから日本の船に乘る。それだけでもう我々は『日本』へ足を一歩入れたことになるのだ。永い間朝夕使はねばならなかつた外國語も、もう口にする必要はなかつた。浴衣に素足で一寸の間は甲板(デッキ)を歩いてもよかつた。食堂には燒肴や香のものやライスカレーやが並んでゐたし、バアにはキリン麥酒や紙袋入りのピーナッツや、時とすると敷島の箱すらも備へ付けてあつた。西洋人のお客が兎もすれば同胞のお客の數より多いこともあるにしろ、横濱や神戸の居留地よりは遙かに『日本』らしい風景になり切つてゐた。

然しながら、日本人の友人にさては日本の喰べ物屋に事缺きはしない巴里や倫敦や伯林やにゐても、烈しいホームシックに襲はれて半病人も同樣になる人たちさへ鮮くはない實狀である。日本の船に乘り移つた瞬間我々はもう『日本』にゐるのだといふやうな感じは、どうもそう強くは來ない。

すくなくも自分にはまだ依然として巴里の、倫敦の、延長であつた。

○

シンガポール。あの港のなかに船がはいる爲めに島嶼の周圍(まはり)を暫らく巡航する。甲板に立つてゐて動き行くこれ等の島嶼を眺めながら、そうだもう日本も近い！　と不覺獨語したのは。

香港邊に來れば固よりそうだが、シンガポール邊でも最早山水樹草ひどく日本に似てくる。土のいろ、丘のかたち、そのうへの樹の生え具合、草のいろ合、――何と言つても、歐羅巴邊の風景のなかには見られないものだ。

海外に來る同胞には間斷なく逢つてゐた自分だ、船に乘つたとて、同胞の顏が形が習慣が物珍らしい筈はすこしもなかつた。然し、この山この樹は、――日本の地續きでなければならないこの自然は、五年振りに祖國を見やうとしてゐる自分にとつて、物珍らしい以上のものであつた。

自分は熱い日射のなかに立ち盡した……。

それからも一つ。船が香港につく一二日まへのこと。

夕飯を終へて社交室のなかに來た自分は、何の氣無しに隅の方に以前から裝飾然と用もなく置かれてあるやうなラディオの機械のまへの椅子に腰を卸した。と、何やら黑い喇叭のなかに音がつぶやいてゐる。自分は立ちあがつて、その黑い喇叭のなかに耳を持つて行つた。譯の判らぬ雜音のなかから、はつきりと細い女の聲がきこえて來た。『……こちらは熊本放送局であります……』

日本からの、――日本の土からの最初の聲が自分の耳へ來たのである。

人は自分の感傷性を笑ふかも知れない。然し、自分はあの時のふかい感動を今でもはつきりと憶ひ出すことができる……
……。

今から八九年まへ自分が最初の歐羅巴の旅行から歸るとき、船は九州から四國の沖を周つて紀伊海峽から神戸へとはいつたものだつた。それが今度の航海では、玄海からすぐに關門海峽を通つて瀨戸内海にはいるのである。

自分はそのことで船長と話をした。船長は言つた。

『はじめて日本へ來る西洋人の爲めにこの瀨戸内海を通すことに、數年まへからなつたのです。日本の第一印象をよくしようといふ譯ですな。けれど船長の方は難儀ですよ。何しろ水先案内無しにこの島と小舟の多い内海を通るのですから——』

いや、それはひとり西洋人の爲めとのみ言はない。氣使ひの多い外國での生活と永い海上の旅とを過して來た我々にとつても、かうした美くしい祖國の風景を先づ見ると言ふことは、どれだけの慰めであることか！ 自分は船長の骨折が充分酬えられるものであることを言ひ、且會社の心遣ひのありがたいものであることも述べたのだつた。

——然し、船が神戸に着いて、それから東上しやうと三の宮の停車場まで赴いたとき、これはまた何といふみすぼらしさ慘めさが、我々を待ち受けてゐたことか。勿論この停車場は假のもので、目下頻りに新停車場の竣工を急いでゐると言ふ。それにしても、歐羅巴からはる〴〵來た旅人にこの光景は餘りにも慘め過ぎる。それから車窓に移り行く沿線の町の姿……。『日本の風景は美くしい。然しそこで人の遣つてゐることは、作つたものは、——』これが、かうした旅人の『第一印象』とならぬことを自分はいのる。

大阪は自分が數年を過した所だ。知り合ひも多い。人々に迎へられてこゝで一兩日を過すことゝした。

先づ眼についたのはタクシィの多くなつてゐること。

タクシィに助手まで乘つてゐるといふことは、歐羅巴では見なかつたところだ。大阪でのこの瞥光は、自分に忽ち日本の「人口過剩」の問題を想到せしめた。——外の國ならば一人で濟むところも、何とかして二人か三人使はねばこの夥しい人口の捌け口を見出せないのではないかと。これでは物價の下りやうもない筈ではないかと。從つて、外國へ出る品物も高くついて、結局輸出不振の聲が績かざるを得なくなるのではないかと。等々……。

然し、助手は助手としての立派な仕事を持つてゐらしくしく見える。彼は、眼を皿のやうにして客を探してゐる。(この國ではタクシィは駐車してゐる權利を認められない。)それから運轉手に、やれ横から他の車が來るとか、やれうしろからこつちを拔かうとしてゐる車があるとか。それから車が停ると愼しく降りて扉をひらき帽子をとつて、客の降りるのを迎へる。——といふやうな仕事を。が、反對に客をしてはら〳〵せしめることも遣る。と言ふのは、疾走中しきりと運轉手相手に會話し合つてることだ。巴里で友人の車に乘つたとき、運轉臺にゐる友人との會話がたゝつて、危ふくアクシデントを起しかけた記憶すら持つてゐる自分は、この助手と運轉手とが平氣で交してゐる會話を氣に病まざるを得なかつた。助手の同乘が若し運轉の安全の爲めならば、すくなくもこの會話は禁じたがいゝ。

それとも、こんなことを言ひ出す自分が多年の外國生活でいつ知らず神經質になり過ぎたのか？　それとも、わが同胞の機敏性を忘れたのか？

○

チップを遣らうとすると、同車してゐた友人からそれを留められた。やがて、このチップの不用はたゞにタクシィだけの

現象ではないことを知つた。何々食堂と言ふやうな場所での飲食にもそれが不用だつた。

一體日本のチップと言ふのは隨分高くつくものであつた。その癖がついて、外國にゐる同胞が兎角多過ぎるチップを遣つては同宿同食の人たちから苦情を持ち込まれたといふ話を幾度か聽くほどである。それなのに、今度歸つて見るとかうした風にチップ無しの制度(?)が蔓延してゐる。亞米利加といふ國は一年見ないと、もう變つてゐる。この意味でコロンブスの『亞米利加發見』は永久に續くわけだ。――と言つた人がゐるが、日本でのかうした日進月歩のめざましい現象も『發見』の連續でなくて何であらう。

兎もあれ、チップなるものは從來の日本で行はれた(殊に旅館などでの)慣行こそ餘りに非實際的で非論理的なものと言へやうが、ある些少のチップをそのサーヴィスをなす人に差出すといふことは決して排斥するには當らぬことだと言つていゝ。むしろこんなことにでも紙につゝみ袋に入れたりして細かな情合を匂はせることゝしたのが、元來の日本だつたではなかつたか。それを今の歐羅巴邊でも敢てなさないやうな『改革』を施こすにためらはないといふのは、今までの程度以上に多額を遣り過ぎた反動の意味ならば別とし、我々の持つ傳統的の情味に似つかはしきことではない。物質主義といふならば、むしろかゝるはけしき改革をこそ物質主義と稱べやう。――

○

自動車の横行は久し振りに見る日本の最初の大きな感銘の一つと言へる。それについても一つ。

大阪ではどうだつたか知ら。東京では電車が停つて客が昇降しやうといふ場合、遠慮會釋もなく自動車がその側を挾驅して憚らない。あれでよく間違いが起らないものと、自分は感心さへする。あの道幅のひろい且遠望のきく巴里でさへも、電車が停つた場合には、自動車は必ずそのうしろで停る。電車の客の昇降が濟み、夫々歩道へ人々が片付いてでな

ければ、自動車は動き出さない。何と言つてもこれがほんとうである。それが日本へ歸つて、はらはらしながらもうまく電車に乘つた時はいいが、乘らうとする間際に自動車に避けられそのうちにとうとう電車に置いてけぼりを喰はせられた時なぞ、つくづく警視廳邊の人たちの考を直接聽かうかな、と思ふことさへなくはない。

それから町角の交通整理も、自分の見たところでは、目安を自動車や電車やのみに置いて、一般歩行の人たちのことは餘り考へてゐないぢやないかと思ふことがよくある。卽ち『進め』『止れ』が、こつちの歩道からむかうの歩道へと渡り切らぬうちに變化することがよくある。あれなぞ、時間にして倍か更にその倍位にして貰へば恰度いい。が、何しろタクシイの駐車も認められない場合だ。のそのそ歩いて四つ角を渡つたり、乃至のそのそ電車に乘つからうとしたりするやうな呑氣さでは、到底市内のはげしいサーキュレーションを處理できぬといふのかも知れぬ。テンポ、テンポと言ふ近頃のわが國の合言葉が、なるほど先づこゝにあるな、と自分は早々に思つた。

○

『古い歐羅巴』では到底見ることができない新奇な風變りな――モダーンな新建築。

小學校までそれだつた。警察署までそれだつた。それから(東京で)いかめしい總理大臣の官邸までがそれだつた。原始的とも言へる無裝飾な無表情な圖體の大きいビルディングの數々におどろかされた自分は、これとは反對の新時代的な表情たつぷりな學校官衙の新建造物にもおどかされた。

が、それはまだいい。自分の更に大きい感銘は他にあつた。この大きなビルディング、このモダーンな學校官衙のそばに、相も變らず――否、見た眼には益々矮小粗朴に映る住居店舗が、蔽ひつぶされもしまじき姿で群擁してゐる、その奇異な光景から受けた感銘であつた。

この對照(コントラスト)は、すくなくも自分の歩ける數々の外國に於いては、殆んど發見することを得ぬところのものであつた。それ等の國に於いては、勿論學校官衙乃至ビルディングの類が、普通の人家よりは形も大きいし、姿も立派でないことはなかつた。然し、わが國で見るやうなこんなはげしい隔り、こんな眼を見張るやうな對照は存在してゐなかつた。言はゞその性質その必要から來るだけの隔りであり對照であるに過ぎなかつた。平凡でしかないかゝる光景に見馴れた自分の眼に、わが國の都市が展開して呉れたこの新らしい光景は、奇異と言ふほかには致方なかつたのである。

が、自分はかゝる現象を目して、わが國の現狀が昔ながらに官は尊く高く民は低く賤しく、——言はゞ相も變らぬ封建的根性が依然連綿と續いてゐるのだ、といふやうなことは嘆かはしげに結論しやうなぞといふ野心は毛頭ないことは斷つて置かねばならない。むしろ反對にこれこそわが國運の隆盛の來る一因と見ることさへできると爲さんとするものなのである。見よ、狹隘なる茅屋に時間を徒費せんよりは冬は溫かく夏は涼しい此等の宏壯華麗なる建物のなかに時を送るべく、彼等は嬉々として日々の勤務に就かんとて茅家を出づるのではないか！

○

日本での第一夜である大阪の一夜を、自分たちは知り合ひの人々に招かれて、ある料亭に出掛けた。茶室風な、木の匂ひのする新らしい普請のその座敷にはいるなり、自分は覺えず口に出して言つたものだつた。

『日本はいいねえ』

入口の水をまいた敷石。屏風に植木鉢をあしらつた玄關。それから庭を橫に見る粗木(しらき)の渡廊下。水石のかすかな庭。そして明るくして寒さうな座敷……。西洋にゐて絕えず夢見てゐた、——西洋の生活のなかではまるで想像もつかない、かうした『日本』を、自分は拜みたい氣までしたのだつた。

自分は、ヴォラールの書いた畫家ルノアールの傳記のなかの一節を思ひ出す。ルノアールが、ある展覽會でか北齋なり廣重なりの數多い版畫を見せられる。立派なものだ秀れたものだと感服しながら見て廻る。それが終つて歸らうとする途端に、部屋のすみに一つの椅子が置かれてあるのが眼にはいる。路易王朝か何かの古い様式のものだつたのだ。それにふと眼を遣つたルノアールは、もう北齋も廣重も無くなつてしまつて、その小さな椅子に『抱きつきたくなつた』――と言つてゐるのである。

自分は、このルノアール翁の感激が、その時ほどはつきり判つたことがないやうな氣がした。その夜招いた人々には濟まない氣がするが、(否そのことはむしろ料亭のおかみさんに言ふことか?)あの時喰べた數々の皿で今はつきりと憶ひ出せるものがないけれど、あの座敷に通つたときの感激は、自分にとつて忘れることの出來ないものである。

○

傳統といふものはおそろしい。

自分に巴里で生れた二人の子供がある。すつかりむかうの女中まかせで育つたこととて、日本語は一つも喋べれず、御飯つぶも殆んど口にしたことはなく、況んや疊のうへに座るといふやうな行儀作法は一度だつて教へたことはなかつたのであつた。

それが日本に着いて疊のうへの生活をはじめたら、瞬く間に誰に教はるとなく世にも見事にちやんと座つて遊びはじめたのである。それ許りではない、食事がまたさうだ。米の飯をよそつてやると、お菜なしでも平氣で二三杯位平げてしまう。豆腐とか刺身とか――およそ洋食とは緣に遠いものを、文句なくよろこんで喰べる。よろこんで、と言ふよりは、近頃は晝にも夕にも豆腐をつけてやらねば泣き出すといふ凝り方なのである。

自分はかうした單純な事柄から、長々とむづかしい教訓を引き出さうといふ氣は無いが、兎も角、對手が無心な子供だけにかゝる現象をまへに考へさせられることが絶無とは言へない氣がする。

○

勿論一つには自分のやうに佛蘭西などに永くゐたものは、自然に傳統の力といふやうなものを深く思ふやうになつて來るのは事實だ。

東京に落ち付いて間もなく、島崎藤村氏をお訪ねした折のこと、例によつていろ〳〵と佛蘭西の話が出た。シャルル・モーラスの話、彼の率ゐるアクシォン・フランセーズの話、先づそうしたものから。モーラスと言へば、政治的には共和制の今の佛蘭西を王制の昔に囘さうといふ人であり、文學的にはロマンチシズムを排して純佛蘭西的なクラシズムに戻らうといふ人だ。これほどはつきりとした傳統主義の人はない。彼の率ゐるアクシオン・フランセーズの運動がわけて今の佛蘭西の若い學生を動かしてゐること、三十年ほどまへの佛蘭西の大學はソシァリストの卵でうづまつてゐたのに、今日ではこのアクシォン・フランセーズの連中で充ち滿ちてゐるといふこと。――こんな話の末に、藤村氏は言つた。

『……僕も佛蘭西以外の國に行つてゐたら今書いてゐる『夜明け前』なども書く氣が起らなかつたかも知れませんよ。佛蘭西に行つて、かうしたモーラスなぞの仕事を見て、自分も昔を新らしく振り返つて見やう、新らしく見直さうといふ氣になつたやうなものです。……それにあの『新生』だつて、――御覧なさい、その言葉を、そらあのルネッサンス！　同じその心持から來てゐるのですから……』

自分もこれに似た氣持だと言へる。露西亞の今の人たちのやうに未來に未來にとヴィジョンを追ふて行くのも一方法として、また佛蘭西の今の若い人たちのやうに傳統を生かして進んで行かうといふのも確かに一つの方法であるに相違ない。

どつちみち、佛蘭西邊に永く住んでゐると、傳統の力のないもの、脆(もろ)さか弱さを感じないでゐられなくなる。

○

然しかゝる議論めいた感想は止めにした方がいゝ。いま自分は、無垢清淨な氣持でわが日本を眺めやうとしてゐるのだ。

東京へ着いて何日目かに、自分は『銀ぶら』を遣つて見た。それは晝間のことだつた。先づ自分は、兩側に立ち並ぶ建物——諸店舗の風變りな行列に眼を見張つた。調和(ハーモニー)もなければ總觀(アンサンブル)といふものもないこの勝手々々な異樣な姿の行列を。それは、——強いてこれに適當した情景を思ひ浮べるならば、あの巴里の郊外ポルト・ド・ヴェルサイエ邊の廣場でよくやる別墅(ヴイラ)の日本の展覽會がそれだ。其處へ行くと千圓から五千圓位でできる廉價で調法で風變りな新式建物がすらりと並んでゐる。——

それからその通りを歩いてゐる人たち。

自分は外國にゐる時から『モボ』『モガ』の出現が新聞紙上を賑はしてゐるのを知つてゐた。その見物はすくなからず自分の興味をそゝつてゐた。わが銀座街頭がかうした新奇な樣子の人たちで充たされてゐる氣さへしたものだつた。

それが自分の雙眼に映つたものは？　一體どこにそのやかましい『モボ』なり『モガ』なりがゐるといふのか？　氣取つた恰好や洒落(しやれ)た身なりをしてゐる青年男女を、たゞ一概にそうした日本語とも英語ともつかぬ新語で稱(よ)ぶのだといふのならいざ知らず、自分の眼に映つた人々は依然として昔の銀座人種の繰返しに過ぎないものだつた。勿論數年前には見られなかつたらう派出な原色に近い色合ひの羽織やコートなぞを身につけて通る女はゐる。さては百人に一人位の割合で洋裝してゐる女はゐる。乃至千人に一人位斷髪をしてゐる女もゐる。然し、こんな變化が『モボ』『モガ』の出現と言ふ世にもやかましいものだつたら、歳毎にその帽子の形を色を、さてはその着物の形を色を變へて行く巴里の女に對してどうい

ふ語彙が必要になつて來ることか。

矢張りこれもわが國人の古くからの言辭の一つの——それも佛蘭西人などのまるで持ち合さない——新語好きから起つた現象に過ぎなかつたのではないか知ら……。

○

然しそう許り言ひ切つてはいけまい。昔の銀座から夜の銀座に移ると、矢張り古くは見なかつた『人種』が歩いてゐることに氣がつく。

お極りのロイド眼鏡をかけてゐることは昔通りとして、——あのピエル・ブノアのやつ、日本では女は可愛らしくてい丶けれども男といふ男は恰好のわるい洋服に鼈甲緣の眼鏡をかけて『目も當てられぬ』(hideux)と書いてやがる。——櫛を入れない頭髮をすごさうに逆立て、カラのない金ボタンの洋服かそれともルパシュカとかいふ異樣な着物を纒つて三々伍々眼を光らせながら歩いてゐる光景が、それである。そりや恰好の異樣だつた點から言へば、自分なぞも御同樣、一高にゐた頃なぞはあれで得意で銀座邊を濶歩してゐたものだつた。然し今日銀座で見る『人種』は、あゝした亂暴者とは一日に違ふ何かゞある。(それをずつとあとになつて何かとはイデオロギイと譯すべきであることを悟つた。)亂暴は亂暴でも質は他愛のない無邪氣さを發散させてゐるに過ぎなかつたのに、今日の彼等は何となく底意地の惡そうな無氣味らしい匂ひをぷん〱匂はしてゐるやうな氣がする。

マルクスボーイつてこれだな、と自分は不覺微笑した。

それにしても、マルクスボーイは愚かマルクスチヂィがうぢや〱ゐる筈の歐羅巴邊で、自分は曾て外貌風采だけで彼等の判斷がつくといふやうなことは到底なかつた。巴里にゐたときなぞは、社會黨の代議士なぞとも幾度か食事さへ一緒

にしたことがあつたが、その外形だけでは（また食卓でのその會話なぞでも）到底他の、——例へば保守黨邊の人々と區別を付けるといふやうなことは不可能であつた。況んや街頭で一見マルクスボーイ乃至チヂィが判別できるなぞといふことは、神業ならばいざ知らず人力でできるものとは到底思へなかつた。

然し日本では、——尠くも銀座では、それが易々と出來さうな氣がする。

古いものにさへ新らしい名を付けたがる習性を持つてる國民だ。新らしいものに新らしい着物を着せやうとするのは當然すぎる程當然ぢやないか！——と言へば、全くその通りである。

○

本屋の店頭に立つて見る。

マルクス何々、リエニン何々、ブハーリン何々、——なるほどさかんだ。

また佛蘭西を例にとる。若し自分が巴里にゐたとして、かうした書物を手に入れたいとする。是非とも共産黨新聞『ユーマニテ』の支店格の特別な本屋（それも自分の知る限りでは巴里に一軒しかない！）までわざ〳〵出掛けて行かねばならない。その邊の本屋なぞにはこんな本は到底見付からない。それがわが國では『キング』や『主婦の友』やを買ひに行つた序にそれが買へる。重寶と言へば——重寶、兎も角さかんだ。

佛蘭西に發賣禁止といふやうなもののあることは自分は不幸にして知らない。どうも無さそうな氣がする。それに歴史を引つ張り出すまでもなく、この國は世界のなかで先づ以て社會革命の火蓋を切つた國でもある。議會の半數——若くはそれ以上が、社會主義者と共産主義者とで組立てられてゐるやうな國でもある。それでゐながら、かうした傾向の本でも買はうとなると、以上のやうな『不便』さがある。そして、その反對に立つてゐるやうなわが國が、以上のやうに『重寶』

なのである。面白いと言へば面白く、不思議と言へば不思議な現象である。

ある外國の新聞記者が日本を見て、わが國の若い人たちの間に瀰漫してゐるマルクス「熱」に言及し、これだけ見ると日本といふ國は明日にでも大變革が來さうな氣がしてならないけれど、これと同時に彼等のスポーツに對する熱狂振りを見れば、要するに今日のこのマルクス熱も亦日本民族の通有性――「總論好き」の發露と見ることができて、兎や角外から心配するにも當るまいぢやないか云々、と簡單に片付けてゐる通信文を讀んだことがあつた。

が、それも一觀察として、問題はこれだけか知ら？

○

二三年まへ巴里で自分の大學時代の恩師M博士と逢つたときの博士の言葉を思ひ出す。

「君、日本のやうな貧乏人がうぢや〳〵ゐる國はねえ、どうしたつて左傾の運動がさかんになるよ。然し皆が貧乏なんだからいくら騒いだつて何時までも貧乏さ。それで對外的にはどうしたつて帝國主義で行かなければならないといふことになる。內は社會主義、外は帝國主義だね」

博士のこの結論の方は留保することとして、兎も角日本が貧乏人でうぢや〳〵してゐることだけは確かな事實だ。(國民一人當りの所得を統計で見ると、日本は合衆國の六分の一、英吉利の五分の一、佛蘭西の三分の一、――歐羅巴では人口過剩で同じく貧乏者の子澤山の實例に洩れない伊太利ですら日本よりは四分多い。そこへ持つて來て、わが國では所得の割に物價がぐんと高いと來てゐるのだ。)大多數が貧乏人で、ほんの僅かだけが金持、――その金持も、歐米邊りの金持に較べたらずつと桁が小さい、これが日本なのだ。もがくのも固より無理がないし、この儘の形でもがいたとて如何なるものでもないといふのも亦無理からぬことかも知れない。

○

文藝雜誌を見る。どれもこれも、やれプロレタリアだ、やれ新興階級だ、やれイデオロギイだ、やれマルキシズムの核心だ、……等々。要するに、マルクスを語らざれば、文壇人の資格を有し得ないかの觀を覿くものに與へる。

マルキシズムと限らず、兎も角文壇人が今日のわが國に於けるが如く社會問題に熱中沒頭してゐる現象は、露西亞はいざ知らず、他の諸國では餘り見ることを得ないといふのが事實ではないか知ら。例へば佛蘭西のごとき、『クラルテ』降つては『ル・モンド』のごとき社會思想的文藝雜誌も皆無ではない。然し一般の文藝雜誌はかゝる問題に超然としてゐるのが實情のやうである。否、文學者が社會問題に關係したのは百年以前のことに屬する。それを今日再びする痴愚が何處にあらうと宣言して憚からぬ者さへゐるではないか。それは古い國、濟度すべからざるブールジョア全盛の國、——と言つてしまへばだが、兎も角地上にはかゝる國も存在してゐるのである。

それにしても、貧乏人でうぢやうぢやしてゐるわが國で、所謂プロレタリア作家の人たちが眞面目になつて「打倒」するに値へするやうなブールジョア文學なり文化なりが果してあるのか知ら。德川時代の文學も奈良朝時代の彫刻も足利時代の建築も、芥川龍之介や菊池寛やの小説と一括してしまつて、それをブールジョアの作品だと片付けてしまふといふならば格別、眞の意味での階級産物として、わが國に果してブルジョア文學なり文化なりがあるのか知ら。

○

この春巴里で小説家のK君と逢つたとき、上に書いたやうな疑問を頭に置いて自分は同君に言つたものだつた。

『一つ巴里でしつかりとブールジョアジーの建てた文化といふものを見て行くんだね。惡い善いは別として、これこそブ

ールジョア藝術だと言ひ切れるものが、この土地にはある。それを是非よく見て行くんだね」

更に自分は言つたものだつた。

「藝術のうへでもブルとプロとの鬪爭と言つたやうなもの。自分はこの佛蘭西邊ならばはつきりと必然性があるやうな氣がする。即ち、ブルはブルで、これを見ろ！ と言つて誇示できる藝術のモニュマンを持つてゐる。プロはプロで、そのモニュマンにぶつつかつて倒してやらうとする具體的な意志を持つてゐる。それが日本では……」

K君は言つた。

「日本ではね、所謂ブールジョアの連中といふのは文學の味方でも何でもないのだ。それがプロレタリアの連中の方になると、僕等の書いたものも讀んで呉れるし……」

自分はありさうなことだなと思つた。そこだ、日本が歐羅巴邊の國々と一緒に論ずることができないのは、日本には、ブールジョアはゐるやう、然し眞の意味でブールジョアの藝術はない。……。

○

文藝雜誌のことを書いて來た序に、わが國の雜誌のことでもう一言。

わが國で刊行される少年少女雜誌から始めて、所謂大衆向の雜誌は固よりのこと高級雜誌の名を以て稱ばるる「中央公論」『改造』等に到るまで、他國の雜誌では容易に見られない一貫した特徴があるやうに思はれる。それは盛り澤山だといふことだ。それも、長々したものを澤山盛つてゐるといふのではなくて、細々切々のものを澤山盛つてゐるといふことである。恰度西洋料理がせいぜい四五皿で極りが付くのを例としてゐるのに對して、日本料理が十皿二十皿と微少づゝ盛つた皿數で賑やかになつてゐるのを例としてゐるのとまあ似た現象である。

かうした現象は昔から無い譯ではなかつた。然し今度外國から歸つて見て、この傾向が益々濃厚になつてゐるのを發見し、歐羅巴邊の雜誌との開きが一層増大して來たことを感じない譯には行かなかつた。

いま實例を七月號の『中央公論』にとる。約四百頁の紙數に對して執筆者の數が實に三十四五名に達する。(若しそれ實例を『文藝春秋』邊にとればその執筆者は同樣の紙數に對して五六十名にも達する計算とならう。)今これを英佛邊にて刊行さるる『中央公論』邊と同種なる所謂高級雜誌を繙くならば、執筆者の數は三分の一乃至四分の一位にしか達せぬことを發見し得やう。

かゝる顯著な對照の來る因は何處にあるのか? その詮議をこゝで遣らうとは思はない。たゞ、それを一の現象と見て、『新歸朝者』の希望の一つをこゝに洩らさせて貰ふならば。――

我々は新聞を讀む。そこに每日描かるる世界はと言へば、政界の鬪爭であり、財界の波瀾であり、さては市井の刄傷沙汰であり強盜騷ぎである。それは我々の爲めに每日飽かしめない人間社會の活縮圖を展開して呉れるものに相違ないとともに、一方また我々の感情と神經とを飽くまでも震撼し焦燥せしめずには措かぬモーターでもある。それもいい。――否それも必要だ。然しながら、我々は四六時中かゝる刺激のみに堪えない本能と良心とを持つてゐる筈である。殊に連日のオフィスでのはげしい勤務、その往復の途次の混雜危險、――これだけでも我々を惱死せしむるに足りる。せめて我々は、一日のある時間のみは、新聞と實世間との與へるはげしい震動から一步離れて、靜かなる慰藉と深き自省との機會を獲んことを望まうとする。自分は思ふ。――雜誌に正しく存在理由(レエゾン・デートル)がありとすれば、これこそそれに外ならないではないかと。そしてまた、歐羅巴の多くの雜誌の充たしつゝある使命は實にこれに外ならないではないかと。

然し自分は、これをわが國のあらゆる雜誌に望まうとはしてゐない。然しかゝる雜誌も一册はあつていいではないかとは深く望む。講談物が依然として、――更にそれが一寸衣更へした形の所謂大衆文藝なるものが、かうも讀まれてゐるわ

が國の現狀である。人々が忙がしい切々なテンポとジャッヅのモザイク模樣以外を要求しないとは思へない。一册位はかうした「高踏的」な雜誌――一册にせい〴〵五六篇の相當讀みごたえのある評論小說しか載つてゐない雜誌が經營されぬ筈はなからうと思はれる。

○

「夜開く」「夜閉ざす」の作者のポール・モーラン。この人と巴里のある料亭で食事を倶にしたとき、自分は何かの新聞の文藝消息で見たことを彼に尋ねた。――

「貴君は何でも東洋を主題とした小說を書くといふぢやありませんか？」

彼は答へた。

「え、、『活佛』といふ名の小說です。もう脫稿しました。雜誌の『巴里評論』へ渡してあります……」

この話しをし合つてから尠くも二ヶ月位過ぎてであつたらう、長篇『活佛』の第一回分がやつとこの雜誌に入つたのは。そしてそれは確か三個月位續いて掲載されたと記憶する――。

さて以上の事實に依つて當時自分が事新らしく知つたことは、第一に佛蘭西邊ではモーランほどの人氣作者でも、必ず全部脫稿しなければこれを公表しないといふことである。第二に、雜誌社がその原稿を受取つても二三個月は平氣でそのまゝ握つてゐるらしいといふことである。第三に、三四百頁（日本の活字に直したら五六百頁にもならう）の小說もせいぜい二度か四度位に雜誌に分載されて完結するといふことである。

自分はその時も直ぐと、わが國は？　と思つた。

そのわが國で、自分は嘗て新聞社に働いてゐたことがあつた。入社して先づ駭かされたことは、例へば夕刊の締切時刻

なぞになると、給仕が机のそばに立つてゐて、書いた原稿をあとからあとからも一枚づゝ遠慮なく播拂つては印刷に廻してしまうといふ現象であつた。前の原稿紙の最後の文字を忘れずに新らしい原稿紙の第一行に續けるだけでも、馴れぬ者には仕事のやうに思はれさへしたものだつた。

がいまそれを思ひ直して見ると、そんな現象は新聞だけではないことを發見する。おそらくこゝ一年も續いて『改造』かに載つてゐる谷崎潤一郎氏の小説なんぞは、毎號四五頁か五六頁位以上には出てゐなかつたやうに記憶する。夕刊締切の現象に駭く必要は毛頭なかつたのである。

それにしても、かうして作家を『こき使ふ』(それとも尊重する?)雜誌經營者、さてはそれに甘んじてゐる作家、――日本の文壇の特殊性の一つがこゝにも見られると言つて悪いであらうか? 人はよく日本人にコムポジションの能力の不足なことを言ふ。然し、雜誌だけを例にとるならば、如何にコムポジションの點で定評のある外國の小説家でも、わが國の文士の諸君の安住せるこの境遇に追ひ遣つたならば、結果はひとしくコムポジションの不足をもつて非難せらるるといふこととなりはしないか知ら。

○

またくゝ雜多な議論や理屈に拘はりすぎた。見たいもの、逢ひたい人、喰べたいものが、東京でうんと自分を待つてゐる。――

見たいもの、先づ一つ。歌舞伎!

(かういふことは腹に疊んで置いて、あらはに言ふべきことではないかも知れないが、外國に暫らくゐて久し振りに祖國に歸つて來た自分なぞは、外國の飜譯劇とか外國音樂のコンサートとか乃至は近頃大流行のレヴィユとか、よくくゝの義

理でもなければ、なるべく御免を蒙りたいといふのが本音である。その癖外國に出掛けるまへまでは、暇さへあるとかうしたものに通つたものだつた。その熱心さに於いてはおそらく自分等のゼネレーションの間ではむしろ異數だつたとさへ自認してゐる。)

歌舞伎の歐羅巴進出といふやうなことが盛んに新聞を賑はしたのは、自分の外國にゐる間だつた。左團次の露西亞訪問、それから岡本綺堂氏の『修禪寺物語』の巴里上演、その他羽左衞門の訪歐等々。がそんなことが自分に歌舞伎に對するノスタルジイを今更起さしたわけではなかつた。クローデルや、ヴィルドラック邊の歌舞伎激賞の言葉、乃至莫斯科のメリイホールド座邊の人々の歌舞伎禮讃の言葉、——それ等によつて日本の傳統藝術に對する愛國心が一層鼓舞されたからといふわけでもなかつた。たゞ外國にゐてひときは日本料理が欲しくなるやうに、オペラやコメディー・フランセーズなぞの間を往來して、たゞ譯もなく歌舞伎が見たかつたのだつた。日本料理が佛蘭西料理より優つてゐるか劣つてゐるか、——問題はそこにないと同じく、歌舞伎が西洋の芝居やオペラより優つたものか否か、そんなことはつゆ考へやうとしない自分だつた。たゞ理屈なしに歌舞伎が見たかつた、——といふのが自分の心情だつた。

その歌舞伎を自分はやつと見ることができた。自分は羽左衞門を見た、仁左衞門を見た、幸四郎を見た、梅幸を見た、菊五郎を見た、勘彌を見た、——『昔』のまゝの彼等を見た。自分の心はその『昔』に引き戻された。——が、引戻されきらないうちに、自分の心は白(しら)けかゝつた氣味だつた。

あんなに見たかつた歌舞伎が、これだつたのか!

『昔』のまゝの彼等を見た、——と自分は言つた。そうだ、一向變らないと彼等を、一向よくも惡くもなつてゐない彼等を自分は發見したのだつた。そう言へば關係者は、いや明かに進歩してゐる、動作も細かくなつてゐる、せりふ廻しも落付いて來てゐる、狂言に對する解釋も進んで來てゐる等々と、自分の言ふことを遮(さへ)るかも知れない。さうかも知れな

い。然し自分には、何年經つても同じ狂言を同じ身振りと同じ科白でやり續けてゐる彼等の忍耐力に感心するほか、そうした細かい點の進步發達には一向注意が行き屆き兼ねたのであつた。

そうだ、矢張り自分には知らず知らずのうちに外國の芝居の影響が滲みこんでしまつたかも知れない。歌舞伎とはまるで約束も行き方も違ふ外國の芝居の影響が。生きた人間のイメージを生きた人間の力で現はして行かうといふあの外國の芝居の影響が。劇場を單純なミュージアムにしないで生きた人間の生々しい實驗室にしやうとしてゐるあの外國の芝居の影響が。

がやはり自分は新聞をひろげては、來月は歌舞伎座で何をやる、帝劇で何をやると探すことを怠らない、築地劇場あたりにはまあ當分足が向きそうにもない……。

○

東京へ着いて間もなく上野の美術館に開催せられてゐた名寶展覽會といふのを見に出掛けた。

朝八時すぎて間もなくだつた、見物人もすくなかつたし。こつちの頭も生々してゐた。實にいい氣持で二時間ばかりを廣くもないこの展覽會場で送ることができた。

宗達もすばらしかつたし、光琳もすてきだつたし、抱一もとてもよかつた。數々の刀劍もいい氣持になり切つて眺めた。數々の古文書類も面白かつた。同じ『昔』のものでも、歌舞伎邊では感じられない深さと淨らかさとがあつた。自分はこれこそは滿足と言へる氣持で會場を出ることができた。

かうした長い時代に亘つての、且種々の作品を通しての『日本』を眺めると、やはりそこには他國の眞似のできない立派な傳統がはつきりと存在してゐることが感じられる。日本は模倣に巧みな國で、その在來の文化も詮じ詰めて行けば印

度とか支那とかに還元してしまう、――といふやうなことは日本人自らも言ひまた外國人もこれを斷定してはゞからないのである。然し、かうした展覧會から自分が受けた感銘は、どうしたつて「日本的な、餘りに日本的な」ものであつた。印度のあの熱土、支那のあの曠野、――それ等からは決して生れ得ない氣稟と節制と清淨と威嚴とがあつた。そうした「魂」を外にして、外に現はれてゐる材料や技巧やの斷片を支那や印度に持つて行つて、日本をこれ等の國々の殖民地のやうに論斷するならば、取りも直さず亞米利加は歐羅巴の殖民地でなくて何であらう。歐羅巴はまた古ギリシャの古ローマの、さては古エヂプトの古ペルシァの殖民地でなくて何であらう。もとより外國人の多數は、この日本の「魂」を感知するには最も不適當の素質と教養とを持つてゐることは否定し得ない。從つて彼等の眼が兎もすれば材料や技巧やのうへにのみ集中せられて、日本を印度・支那の殖民地と見ることは、或ひは止むを得ぬやうにも思はれる。然しわれ〳〵はもつと強い自信を持つていい――。

あの大革命を爲し遂げても佛蘭西人は結局佛蘭西人だと言はれてゐる。更に大仕掛けだつた社會轉覆を企てても露西亞人は畢竟露西亞人だと言はれてゐる。今日のわが日本が亞米利加渡來のジャヅとカクテルで、さては露西亞渡來のウヲッカやパンフレットで、どんな表面は變るやうに見えても日本人は結局日本人である外はあるまい。自分はその辭を、宗達から抱一から光琳から無數の刀劍からありありと聽いた氣がしたのである。――

○

一二度友だちの案内で三味線をきく家にも行つて見た。

が自分がそこで聽いたものは、もはや「秋の夜」でもなかつた、「戀すてふ」でもなかつた、「勸進帳」でもなかつたし、「越後獅子」でもなかつた。「君戀し」とやらであつた。「銀座ぶし」とやらであつた。「波浮の港」とやらであつた。

おまつさへ三味線を手にした妓は、自分の方に向つて、一つ踊りなさいよ、と言つてフォクス・トロットをさへ彈き出したのである！

――かう書いて來ると我乍ら、往時の永井荷風氏の『新歸朝者日記』あたりの感想を今また事新らしげに洩してゐるかの感じがしておのづから苦笑が浮ぶ。それに第一か丶る巷のか丶る消息は自分如きもの丶もと／＼よくする所ではない。自分の語ることは外にある。

さてそれにしても、かうした唄の擴まり方は！ 自分の家にゐて先づ耳にする街道の聲はと言へば、この種の唄である。學生の群、御用き丶の小僧、等々。ある友人の話によれば、近頃は一時あれほどはやつた『安來節』などのレコードも殆んど田舍へさへ出なくなつて、その代りに『君戀し』とか『銀座ぶし』とかが流れるやうに出て行くといふことであるが、さもありなんである。それ許りではない、田舍々々で、わざ／＼その地方の爲めの俚謠を作らせる爲めに東京から知名の詩人を招ぎ、出來上つたその作品を三味や太皷に合せて唄つてゐるとさへ言ふ。詩を讀み詩を書いたこと十年にも及んだ自分ではあつたが、か丶る時代が詩人の爲めに來るべしとは、今まで夢寐にも想像しなかつたところである。

○

それにしても――。

はじめて自分が巴里に赴いた折、音樂會でよく佛蘭西の地の民謠をモチーフとした管絃樂乃至聲樂附の管絃樂の新曲を聽いて喜こんだものであつた。その頃同じく巴里にゐた音樂家の小松耕輔氏などに、自分はその折の感想をよく語つたやうに覺えてゐる。――日本でもかういふ試みを是非君なり山田耕作氏なりの作曲家の手でやつて貰ひたい。民謠を取り入れる以外に日本の西洋音樂の行き途がどこにもないぢやないか。……といふやうなことを。

當時自分がかうして陰で言つてゐたことが、今日では自分の豫期もしない範圍にまで進展したことを發見した。民謠が

藤原義江氏や照井栄三氏やらに依つて歌はれる。それを變曲して演奏もされる。それ許りではない、北原白秋氏や西條八十氏やの作歌を中山晋平氏其他の手によつて、民謠が『創作』されまでしてゐる！

その『創作』の一つ、北原白秋氏の作歌の『ちやつきり節』といふものを、ある時江尻の海岸に近い料亭の座敷できいたことがある。その歌詞や曲譜の巧拙は自分の書く範圍外である。たゞその時自分は妓にきいた。この地方の古來の唄の節をとつたものかどうかと。答へは否定であつた。歌詞こそ地方の方言なり風俗なりを取入れて作られたものであるけれども、曲譜はまつたくの創作であると。自分は同席の友人を振り返つて言つた。それで民謠呼ばりはすこしひどい、と。

自分は昔から文化のうへでの地方分權(?)を貴いものに考へる性癖を持つてゐる。佛蘭西が極端な中央集權の國だとは人が言ふところだけれど、政治的行政的にはいざ知らず、文化の點から言へば極めて地方分權である。これが佛蘭西の文物のうへにも反映して、その單調と淺薄とを救つて呉れるではないか、とさへ思つてゐるのである。そこへ行くと、日本の文化系統は極度に中央集權的で、萬事が東京、東京である。(京都や大阪はこの點で柄が大きい許りで何の役割をも演じてゐないと言つていい。)民謠といふものさへもが、かうして、東京の詩人たちや音樂家たち(それもその郷土とは何等の關係のない――)の手で作られるといふに到つては、自分の昔からの希願も水の泡であると言つていい。

○

それにしてもかうした時代の潮流に乘つて秀れた大衆向の作曲者がわが國に生れ出ないものか知ら。

自分は歸つて間もなく友人のところで數々の流行唄をレコードで聽かして貰つた。その曲自體が惡いとは言はない。然しそれは依然として『カチューシャ可愛や』邊を出ないものではなかつたか？　日本人にとつてはあゝした感傷的で單純な節廻しのもの以外は全然向かないのだと言つてしまへば問題はない。然しジャヅだ、テンポだ、モダーンだ、新時代だと言つてゐる今の日本に、これはまた思ひ切つた古風な好みであると言つていい。モガ、モボの諸君が若しこれ等の節廻

しに滿足してその唇から日夜かうしたメロディーを絶たないでゐるものとすれば、諸君の心根が愛らしくならざるを得ない。……

平素からの昵懇に免じて實例を友人の作歌にとらして貰ふ。西條氏のあの『東京行進曲』の唄。自分の家の庭先でも一日に何度となく通りを通る人が歌つて通るほどに擴まつてゐるその唄。あの唄を同氏の宅で初めてレコードで聽かして貰つたとき、自分は歌ひ手の女のせいで、かうも原歌にそぐはない憐れつぽい感傷性が出てゐるのか、と思つたものだつた。『これは男に歌はせた方がいいね……』と、同氏を振り返つて言ひさへもしたものだつた。

然し二三度聽いて見て、それは決して歌ひ手のせい許りではないことを知つた。否むしろ責は作曲自體にあることを知つた。が、そう言ふ意味は作曲がまづいといふのではない。たゞ、西條氏の作歌とその作曲とはまるで世界を別にしたものだ、といふ意味である。

諸君は、あの『ヴァレンシア』の曲を知つてゐやう。あの『サッセ・パリ』の曲を、さては『モン・パリ』、ノートル・パリ』の曲を知つてゐやう。あゝした曲に含まれてゐるモダーン味を、諸君は『東京行進曲』の曲の何處に含まれると感じますか？　しかも『東京行進曲』の歌詞こそは、『ヴァレンシア』『サッセ・パリ』等々の歌詞に比して、遙かに遙かにモダーンなものなのである。

○

東京は變つたらうといふ。變つたと答へる。然し變つたやうで一向變らないものもある――

日本料理のありがたさ。

自分は白狀する。外國生活を續くること五六年、漸くこゝ二三年以來西洋料理なるもの、味がどうやら本當に自分にも判りかけたといふ氣がする。自分は季節の變り目變り目なぞには、勿論日本の數々の食物を想ひやらずにはゐられなかつ

た。然し、人でも案内するとなれば、巴里邊にもいくつかある日本料理屋を選ぶよりは、葡萄酒のうまい料理のいい普通の料理屋の方にどうしても足が向き勝ちだつた。家のなかでも、日本からの來客でもある時ならば格別、外國人の女中の手になつたバタ臭い料理で三度三度濟すのが常であつた。

　それが日本へ戻つて來て、この役割はまつたく反對になつた。知合ひに招かれての場合等ならばいざ知らず、自分から洋食を喰べに出かけやうなぞといふ氣は、更々起さずにこの數ヶ日を過してしまつたのであつた。それほどに今自分は日本料理に堪能(たんのう)しきつてゐるといふ狀態である。

　庭續きの、小じんまりした、清楚な坐敷――これが先づ自分を喜こばせる。あゝいふものは外國では想像もしがたい。たゞ夏になるとセエヌ河の岸なぞで川魚のフライを喰べさせる家が、まあ稍々これと似た心持を起させるが、それとても勿論こんな細かな情趣はない。愛嬌と一緒に酒を杯に充たして吳れる女の一座に加つてゐるのも、またお互同志代る代る酒をつぎ合ふやうなのも、わが國だけに見る樂しさだと言つていい。それから次々と運ばれて來る料理。それは、魚にしても肉にしても野菜にしても、その來た山の匂ひ、野の匂ひ、川の匂ひ、海の匂ひをそのまゝに膳のうへに運んで來たやうなものだ。我々は、眼でその山川を見得るばかりでなく、耳にその清流松籟のひゞきさへ聽き得る氣がする。かゝる感想を與へ得る料理は、佛蘭西料理の淳正なものをのぞいて、世界の何處にあらう！（支那料理は？　あのケーベル博士の人の惡い言葉を人々は憶えてゐるか知ら。――「この料理のなかに死んだ鼠がはいつてゐないとは、誰が言へやう……」。然し自分はよい支那料理をたべてる最中は世のなかにこんな美味なものはないとも思ふ。）

　……が、飽食した（また飽飲した）あとの日本の座敷の居心地はいゝものではない。強い珈琲をぐつと飲んでから、リキユールの硝盃でももらつて煙草をゆつたりとふかしながらまた一しきり愉快に歡語できる洋食の結び方と比べると、日本料理の結末は頗る非社交的に出來上つてゐる。寢轉ぶか、柱に倚りかゝるか、眠るか、大聲を出すか、それとも更にもう一度他所へ流れ込ませやうとするのである。

出來るものなら、日本料理はその前半だけにしてしまひたい。

○

日本の西洋料理は？

日本へ歸つて日本料理にばかり入れ浸つてゐる狀態なので、まあこのうちならば、とわざ〳〵美味で鳴る洋食店へと自分を連れて行つて吳れた知合ひもあつた。味も質もたしかに惡くはなかつた。『葡萄酒のないところには料理はない』とまで言はれて、いゝ料理には缺かしてならないことになつてゐるいゝ酒も、そこに無くはなかつた。深切な知合ひの厚意は決して無ではなかつた。——

然し、自分の喰べ馴れた——そして、引續き喰べて行かうといふ洋食とは、どうも違つてゐた。なか〳〵いゝ味だ。が、自分の求めてゐる味ではなかつた。

それなら、どんな味の洋食を自分が求めてゐるといふのか？　それは簡單に言ふことができる。魚なら魚、肉なら肉、野菜なら野菜の、原來の味をすこしも害めないやうに調理されたもの、——これだ。

佛蘭西料理が世に持て囃されてゐる理由は數々あるかも知れない。然しそのうち最も重大な理由を擧げるとなれば、實にこの簡單極まる數語の外に出でまいと思つてゐる。

そんなことなら譯はないぢやないかと言ふ人があるかも知れぬ。然し、例を文學にとつて見る。材料を生かすといふこと、——出來るだけ簡單な形式と言葉のなかに、複雜な材料や内容を殺さずに盛つて見るといふこと、これが誰にもできる容易な仕事であるとは、自分はさう考へ得ない。佛蘭西料理の秀れたところは、こゝに言ふその單純さにある！　かう見ることができぬであらうか。

佛蘭西現代の文學者中所謂食通を以て鳴つてゐるレオン・ドオデエはその著『食と飲』のなかでうまい言葉を書いてる

る。佛蘭西の料理は古典美だ。羅曼美では斷じてなく、またあつてならない、と。

古典の美は、要するに單純の美である。單純のなかに深さ強さをつゝまうといふ信條である。限界のなかに無限を藏さうとする努力である。羅曼的の美は、これに反して限界の破壞である。無限の姿を混亂と複雜のまゝで表面に表はして行かうとする傾向である。

佛蘭西料理が常にこの古典の美を探求してゐるものとすれば、(醇正な日本料理もまた！と自分は言ひたい。)支那料理こそは世にも代表的な羅曼美の料理であると言つて間違ひであらうか？　獨逸の料理を、露西亞の料理を、さては伊太利、西班牙邊の料理をまた、この佛蘭西料理と較べて見たら、たしかに羅曼的傾向にあるものと言へないであらうか？

日本で口にする洋食も、程度の差こそあれ、同じ羅曼的傾向にあるもの、やうに自分には感ぜられる。そこに細かい工風はある、數々の心使ひはある、變つた珍らしい取合せもあるし、一方ならず面白い附け味もある。然し、これ等がある爲めに、本來の材料の持つ貴い味が、どこかへ影をひそめやうとしてゐる。自分の求めやうとしてゐる味の代りに、そこに出てゐるのは、料理人の技巧であり腕まへであるのだ！

自分は、『本場』の佛蘭西に渡るすべのない都下の何百の料理人諸君に向つて、正眞正銘の佛蘭西料理はそんなものではない、先づそれを味つて御覽なさい、と言ふやうな無理を口にしやうとするものでは斷じてない。自分の進呈しやうといふ言葉はこの上なく簡單だ。

自分は諸君に言ふ。——日本料理を、——正眞正銘の日本料理を味つて御覽なさい！

○

五月の末から六月の初にかけて自分は關西から九州の方を旅した。それから間もなく郷里の會津に旅した。新綠の日本は、遺憾なく自分の眼前にあつた。一昨年の新綠の季節を佛蘭西で過し、昨年の同じ季節を北歐の水都で過した自分の眼

に、今年久し振りで逢つた祖國の新綠の風物は言葉に現はせないものがあつた。

豐かで優しくてあの明るい佛蘭西の新綠。それから、淨らかで朗らかで澄み切つてゐるやうなあの北歐の新綠。それと較べるとわが日本の新綠は、固くて黝ずんでゐて陰氣な氣さへなくはない。多くの洋畫家が日本にあつていつまでも去つた歐羅巴を懷かしんでゐるその心持は、さこそとも肯かれぬわけでもない。

然しながら、如何に歐羅巴の新綠がわれ等の感覺に快からうとも、われ等の魂はわれ等の肉體とともにこの國の土壤以外に生え育つたものではないのだ。われ等はこの土壤のうへの固くて黝ずんで陰氣にさへも見える新綠のなかの一本の樹木以外の何ものでもないのだ。われ等の眼に映るこの新綠は、われ等の存在それ自身でさへあるのだ。詩人は一ひらの葉にすら「神」を見るといふ。久し振りに祖國の新綠に逢つた自分にとつて、この新綠をつくる一本の小樹、一ひらの青葉さへ、自分の姿がありありと見える鏡なのであつた。こんな氣持で佛蘭西の新綠に北歐の新綠に向つたことは一度だつてあつたか知ら?

ある夕自分は一人の友人と打ち連れて嵐山の大悲閣にのぼつた。日は沈んだが、まだ明るかつた。冷々した峇の道。それをかくすやうな繁樹。新綠の匂ひは顏に冷たく纏りついた。下には保津川のひゞき。あゝ、そのひゞきと若葉と土の匂ひとは、若し自分が歲すこし若かりせば、自分を泣かせるに充分でさへあつた。自分は全く『歸れる子』だつたのだ。今こそは自分の家に歸つて來たのだつた。――兩手を擴げて自分を抱いて吳れる父母の家に。

青山は到るところにある。然し自分の父母のゐる青山はこの世に一つしかなかつた!

○

京都で大宮御所と二條の離宮とをはじめて拜觀することができた。

御所のあの淸淨さ、あのすがすがしさは、あの森さとともに何と言へやう。澄み渡つた五月の鮮やかな朝陽。淸砂のう

へにひそやかに影を落す青葉と小鳥の影。いさゝ流れの爽やかなひゞき。御所のなかの『昔』の色と匂ひ。充ち滿ちてゐるおごそかな影……。自分の目から心から一切の現實は消えて行つた。殘るのは、その現實よりも遙かに強いある力と美とだつた。自分の心は頭よりも低くさがつた。否、低くさがつた、――と言ふよりもむしろ世にも誇らしげに昂然となつたと言つてもいい。『日本』の心臓のすぐ側に今こそ自分は立つてゐるのだつた！

それからあの二條の御所。

大宮御所のあの清淨な世界から、この派出やかな二條の御所に移ると、自分はこゝにも『日本』の他の大きな心臓の波打つてゐるのを見ることができる。それは華麗な『日本』だ。豪奢な『日本』だ。強い色彩とはげしい韻律との『日本』だ。

わが國を何でも小さいもの、可愛らしいもので片付けやうとする外國人がゐる。また日本人自身すら居る。然しあの『土地以外他になし（リアン・ク・ラ・テール）』の一册を書いたポール・モーランが、日光の東照宮に詣でて感嘆してゐるやうに、小さな可愛いいミニヨヌリイの『日本』のほかに、強くて大きな『日本』――いい意味でのバルバリイとも言へやう『日本』があるのだ。二條の御所をいま日光に比較するのは當るまい。然し、この二つに共通してゐるところは、わが國をミニヨヌリイで片付けやうとしてゐる人々の僻見を眞向から碎いてゐることだ。佛蘭西のあの華麗なヴェルサイユの宮殿。あれを見てわが國の旅人の多くがその賑やかさ派出やかさとわれ等の清楚な趣味とは合致しがたいことを說くのを常としてゐるけれども、われ等の祖先がこの賑やかで派出やかな二條の御所を創り上げたことを思ふならば、むしろわれ等にヴェルサイユの華麗に比すべき宮殿の、――傳統のあるのを、外國人のまへに誇示しなければならないのではないか。

われ等はもつと『過去』を讀んでもいい。そして、平素氣が付かずにゐるわれ等自身を發見してもいい。（四・六・三〇）

勞働立法の國際的展開

前田多門

一

本年ジュネーヴに開かれた第十二回國際勞働總會、之れに例年無かつた事が二つあつた。

その一つは獨逸人が選まれて議長になつた事である。獨逸のやうな勞働法制の發達した國、しかも國際聯盟の場合と異つて國際勞働機關には當初から加盟して居た先進國であつたに拘らず、從來獨逸人が一度も議長を勤めなかつたと言ふことは、大戰後の餘熱から來る政治上の意味としか受取れなかつたのであるが、今度獨逸の前勞働大臣ブラウン氏が選まれて會議の議長になつたのは頗る意味深いものがあると思はれる。これで國際聯盟の機關も段々舊聯合國のものといふ非難から脱することが出來るのである。

もう一つは、支那が完全代表を送つた事、完全代表とは、政府、資本家、勞働者、この三方面からそれぞ〵代表者が任命派遣されることを言ふのであつて、平和條約の規定が各國に要求して居る處であり、その一つでも足りぬのが不完全代表と稱せらるゝのであるが、今迄支那は政府代表許りを送つて、一向民間の聲が會議に反映しなかつたのを、今度國民政府の世となつて初めて廣東の組合から代表が選任され、而かも、勞働會議開始以來初めての支那語演說を以て、「支那三億の勞働大衆の名に於て」と言ふ觸れ出しで、盛な氣焔が上げられた。

一時停頓氣味の國際勞働會議も、これから段々面白くなつて來さうだ。

日本の吉阪代表が主張した所謂「普遍性（ユニヴァーサリティー）」が、今迄より一層發揮されて來る事は良い現象である。現に本年は、總加盟國五

十五の內、五十箇國までが會議に參加したのである。たゞ若し是に國際聯盟の外にある米國とロシアが加つて居たらとは何人も遺憾に思ふ點であらう。

しかし今年の會議の興味は、否、重要性はそんな事よりも猶ほ外にあるのである。

外でも無い。六月十一日、總會席上で英國政府代表の爲した八時間勞働條約批准に關する聲明である。

此の聲明が聽き度いばつかりに、國際勞働機關は過去數年間身を悶えて居た。而して今勞働黨內閣出現の故に、昨日迄と同樣な嚴めしい「陛下の政府」と言ふ稱呼のものではあり乍ら、內容に於て今迄とは全く手を覆したやうな、八時間條約批准に關する色好い返事を英國から聽くことが出來たのである。これを聽いた時、國際勞働局長アルベール・トーマ氏の眼は如何に輝いたであらう。

二

夏の日射しは相當に强い六月十一日、勞働總會の席上は先き程から、各國代表の「おらが國さ」の御土產演說に相當茹立つた頃ほひ、英國の勞働代表、靴職工の總大將として內外に名の響いたプールトン老の雄辯に眠氣を醒された。老はトーマ局長の報告書片手に、丹念に頁數まで讀み上げて一步一步、議論を進めて行く、遂にクライマックスに達した點は自國に於ける勞働條約批准の遲延だ。今度の總選擧に由て數日前組閣したわが勞働內閣は、この際前內閣の政策を覆して卽時に八時間勞働條約批准を爲すの用意ありやと咆哮して壇を降つた。

議長に發言を求めて壇に上つたのは、英國政府代表と言ふよりは寧ろ本國に於て流行詩人として名の通つたウォルフ君、極めて簡單に、

「プールトン君に御答します。ワシントンの八時間勞働條約批准に關しましては、大英國の陛下の政府は出來るだけ早くその批准を致す爲めに、これに必要な措置を執ることに致して居ります、今これを聲明致す委任を政府より受けた次第であります」と聲明した。

一體、勞働黨內閣の出來たのは六月八日であるが、中二日置いた丈けの十一日には旣にジュネーヴでかう言ふ明白な宣言をさせる準備が出來て居る。流石は英國の勞働內閣、何處やらの政府なぞと比べて、何とテンポの早いことよ。

處がその宣言の役を勤める勞働省恆久事務官のこのウォルフ君。つい此の間までは保守黨內閣の代辯者として熱心に八時間條約の改訂を主張し、且つそのために氏一流の凌い活躍を恣に

して居たのであるが、一朝勞働黨の天下となれば、昨是今非、平氣に卽時批准聲明の御取次ぎをする。尾崎咢堂先生にでも言はせたら、朝に吳客夕に越客を迎ふる娼婦の如き俗吏との嘲罵に値する譯であらうが、其處は、事務官といふものは一體さうしたものと最初から極めて懸つて居る英國の事、本人も平氣、周圍も問題にせぬのであるが、然かし此の日のウォルフ君の演說は、平生の修辭澤山に拘らず、極めて非詩人的のものであつたらしい。少しは態度の豹變に極りの惡い處もあつたと見える。然かしそれでも、これを聽いた滿堂代表の感激は素晴らしいもので、喝采暫しは已まなかつたといふ。若し慾を言へば、平生會議にも馴染の深い、新勞働大臣ボンドフィールド女史が、丁度大正十三年の勞働黨內閣の時やつたやうに、自身此處に出馬してこの聲明をなし得たとしたら、さらに會議の感銘、熱狂は如何許りであつたらう。

それ程重視されたこの聲明、それは一體何を意味するのか。又この聲明に依て國際勞働界に投ぜられた一石が、今後果して如何なる波紋を描くに至るであらうか。

三

西洋諸國の關する限りは、世界大戰が勞働界に八時間勞働を與へた。それは獨逸のやうに共和國憲法にまで掲げたもの、佛國のやうに法律を以てせるもの、英國の場合のやうに、何も法律なくとも事實上團體協約に依て確かと極まつて居るもの等、各國各樣の定めではあるが、原則として八時間勞働は動かぬ慣行である。宜なり、ワシントンの第一回勞働會議は先づ第一にこれに關する條約案を採擇したのであつて、業務の性質から來る種々の例外は認めながら、まづ八時間を原則とする申合せは滿場一致を以て通過した。之の後、每年の國際勞働會議で議決した條約案、今では積り積つて二十六の數に上るが、その內でも時間制條約案はその大宗とも稱せらるべきもので、これがどの程度に尊重さるゝかは、全體の機關の消長にも關する譯であるが、困つた事にはその後この條約の批准成績が餘り良好で無い。今迄の處で、批准した國の數は特殊國の印度を加へて總計十四、その內五箇國は條件付批准と言ふて、一定の指名した國々が批准したらその時から效力を發生するといふ遣り方である。現にフランスの批准はその效力の發生を英獨兩國の批准に懸らしめて居る。而して肝腎の英獨はまだ批准を了して居ないのである。

何故さうか。既に多くの國々では國內に於て八時間制を實施して居る。これにも拘らず國際條約に批准を躊躇する譯は、他日の變動を懸念して、自分丈け先きに手足を縛らるゝのが厭だか

らである。で、出來るなら諸大國同時批准と行き度いのである。

處が、ワシントン會議の大正八年以後は、當初に豫想されなかつた不景氣と反動的空氣とが世界を蔽ふたのであり、當時今にも黄金時代來るかの氣持を以て敬虔に決議した時間制その他六箇の國際條約案は、實は時代の眞相より少し出過ぎたものとの感を抱く者さへ追々出て來たのである。

殊に問題を甚しく停頓させたものは英國と獨逸とであつた。

四

英國政府はワシントン會議の濟んだ後、冷靜に歸り、段々技術的研究をやつて見ると、條約に種々の疑を生じて來た。それに自國の慣行にも合はぬ點が其處此處にあるといふので、大正十年既にこの條約の改訂を提議したが、國際勞働機關の中樞たる理事會では仲々之を肯じなかつた。

其處に意外な暗雲は獨逸の方から現れて來た。獨逸は前にも述べた通り憲法の明文にまで八時間勞働を掲げた國、それであり乍ら、大正十二年の暮、緊急命令でその八時間を九時間迄引き伸ばし得ることを規定した。それは謂はゞ舊聯合國への面當であつた。戰爭賠償の誅求かくまで苛烈な上は、獨逸人としては餘計働くより外無しとの絶望的態度の現れである。

何事につけ列國の神經を刺戟するのは敗戰より再び起たんとするスフィンクスの獨逸、その國のこの聲明は少からず問題を混亂せしめたのである。

その内に、大正十三年に英國では初めて勞働黨内閣が出來上がつた。この内閣は無論八時間條約批准に無條件で賛成である。しかし、何分第二黨の身で政權を執つて居る悲しさ、國内の意見も纏めねばならず、組閣後半年經過してから漸く批准法案を議會に提出したが、議會の審議未了中に内閣の方が瓦解して仕舞うてそれ切りになつた。又内閣存命中、獨逸の不貞腐れを宥めるために、瑞西のベルンに、英佛獨白の四箇國勞働大臣會議を開いてワシントン條約に關する意志疏通の途を圖つたが、大した收獲は無かつたのである。

其處で英國の天下は再び保守黨の所謂ダイ・ハーヅの手に移り、條約批准は以ての外と言ふ空氣が濃厚で、前年少し曙光を認めかけた國際勞働機關は又々隱忍生活を續けるの已む無きに至つた。其處で無遠慮な勞働者側はもう辛棒が出來ぬと言ふ氣持になり、フランスの勞働總同盟の首領ジューオーの如き、國際勞働總會で獅子吼して、「若し國際勞働機關がかやうな明白簡單な問題にすら、勞働者側を滿足させる事が出來ぬとならば、吾々としては擧つてこの機關から脱退し、力の解決にたよる外は

無いのである」と大見得を切つたが、さりとて直接行動と言ふ譯にも行かず、暫く泣寢入の姿であつた。

しかし、流石は英國の保守黨内閣、どこかの反動内閣など、は違つて、この問題に對して全然不誠意では無かつたのである。彼等の困難とするところは原則では無くして、細則にあつた。故に先づワシントン條約の批准促進を圖るために大産業國間に解釋を一定する目的を以て大正十五年、英國の主催でロンドンに英佛獨白伊の五箇國勞働大臣會議を開いた。而して此會議に於ける大發見は獨逸の案外な進歩的態度であつた。今年の國際會議の議長になつたブラウン氏が時の獨逸の勞働大臣として會議に參加し、同氏より非公式ではあるが、大正十二年の緊急命令撤回、ワシントン條約を全部採用する新勞働法制定の見込等を大膽に打開けたのであるが、果してその年の國際勞働會議には或程度迄、その趣旨は公然獨逸から聲明されたのである。

問題解決の二大障害は、英國と獨逸との硬化、然るに、英國は兎に角、獨逸の態度が和いで來たといふ事は、時に取つて大した福音だつたのである。

五

これを切つ懸けに段々風向きが善くなつて來た。國こそ小さけれ産業では八大國中の一に數へらる、ベルギーが條約を全く無條件で批准した。之れが刺戟でフランスでも、長らく上院で揉むで居た批准案が、通過した。たゞイタリーが嘗て條件付とは言へ條約を批准して置き乍ら、大正十五年の夏、勞働時間を一時間延長し得る命令を發布したのは意外の番狂せであるが、是も問題の獨逸と英國とが批准を爲し、それに瑞西がやること、なれば、條件に指名した國の名はみな除かれて、否でも應でも八時間條約の效力は發生するの外は無い。矢張り問題の鍵は、獨逸と英國とが握つて居る。

しかるに、獨逸は曩の公約を着々として實現し、時間制のみならず、全部ワシントン條約に適合する新勞働保護法案を起草して夫々の機關に提案した。その後内閣の更迭があつた爲め、多少時が遅れたとは言へ、今では既にこの法案は、經濟會議、聯邦參議院を通過して、今年の春議會に上程され、今ではその委員會が是を審議して居る。この法案に續いて條約批准法案が近く議會に提出されることは、既に勞働大臣の公言せる處である。

つまり、獨逸にあつては、八時間條約の批准は今はたゞ時の問題だけになつて居る。

獨逸の關門は是で解けた。もう一つの難關たる英國はどうな

るか。

保守黨内閣が英國で頑張て居る間は、問題はとても解けさうにも無かつた。しかし、繰返して言ふ、如何に保守政府でも問題を全然放棄はせぬのである。さやうな事は醒めた勞働大衆を多分に包含する國民が到底許さぬのである。そこで本年三月、勞働大臣のスチール・メートランド氏はわざ〳〵ジュネーヴの勞働理事會に赴き、八時間條約改訂を提議して力說努めた。しかし、見よ、如何に時勢は變りつゝあるか、之に強き反對を試みたのはたゞに勞働者側のみでは無い。既に批准したベルギーやフランスの政府代表は固より、例の獨逸の代表までが、近く自國で批准する見込を理由として今更の改訂を拒むだのであつた。かくて流石大英國を背負つてのこの提案も無殘に一蹴され、スチール・メートランド氏は這々の態で本國に歸つた上、之れが原因で不人氣を招いたのか、此間の總選擧では一敗地に塗れて議席さへ失ふて仕舞ふた。

さうして玆にこの明快な、卽時批准の宣言を勞働黨政府から聽き得るやうになつたのである。

快刀は實に亂麻を斷つたのである。

八時間條約批准を阻止する二大原因は、獨逸と英國とのこの新しき態度に依て、今は全く除去されたと言ふて宜ろしいのである。

假令へ、その宣言は極めて事務的な言辭でなされたとは言へ、滿場が大喝采を以て之を迎へたのは無理も無いのである。

六

思はず八時間問題を語ること長きに過ぎた。

然かし現在、國際勞働立法の可能性を卜するのに、この八時間制條約の批准程適切な標尺は無い。國際勞働機關の無用論が今迄種々の方面から說へられたも、主としてこの條約の未批准が多い爲めであつた。

而して、見よ、英獨の堅壘旣に落ちて後は無人の野を行くが如きものがあらう。國際勞働機關に於て八大產業國と稱するもの、曰く英を初めとして、佛國、獨逸、伊太利、白耳義、印度、加奈陀、及び日本。之の内六箇國は問題解決となる結果、獨り、聯邦組織の憲法上の故障で批准に技術上の困難を有するカナダを除いては、東海の孤邦日本のみが、たつた一つの未批准國として殘るであらう。しかも、記せよ、日本はワシントン會議に自ら求めて特殊國となり、印度とともに特に延長したる時間數を以て(日本一週五十七時間、印度一週六十時間)その實行を約したるもの、その後十年、批准は愚か、實行可能に就て研究

無いのである」と大見得を切つたが、さりとて直接行動と言ふ譯にも行かず、暫く泣寢入の姿であつた。

しかし、流石は英國の保守黨内閣、どこかの反動内閣などは違つて、この問題に對して全然不誠意では無かつたのである。彼等の困難とするところは原則では無くして、細則にあつた。故に先づワシントン條約の批准促進を圖るために大産業國間に解釋を一定する目的を以て大正十五年、英國の主催でロンドンに英佛獨白伊の五箇國勞働大臣會議を開いた。而して此會議に於ける大發見は獨逸の案外な進歩的態度であつた。今年の國際會議の議長になつたブラウン氏が時の獨逸の勞働大臣として會議に參加し、同氏より非公式ではあるが、大正十二年の緊急命令撤回、ワシントン條約を全部採用する新勞働法制定の見込等を大膽に打開けたのであるが、果してその年の國際勞働會議には或程度迄、その趣旨は公然獨逸から聲明されたのである。

問題解決の二大障害は、英國と獨逸との硬化、然るに、英國は兎に角、獨逸の態度が和いで來たといふ事は、時に取つて大した福音だつたのである。

五

これを切つ懸けに段々風向きが善くなつて來た。國こそ小さけれ産業では八大國中の一に數へらる、ベルギーが條約を全く無條件で批准した。之れが刺戟でフランスでも、長らく上院で揉むで居た批准案が、通過した。たゞイタリーが曾て條件付とは言へ條約を批准して置き乍ら、大正十五年の夏、勞働時間を一時間延長し得る命令を發布したのは意外の番狂せであるが、是も問題の獨逸と英國とが批准を爲し、それに瑞西がやること、なれば、條件に指名した國の名はみな除かれて、否でも應でも八時間條約の效力は發生するの外は無い。矢張り問題の鍵は、獨逸と英國とが握つて居る。

しかるに、獨逸は幾多の公約を着々として實現し、時間制のみならず、全部ワシントン條約に適合する新勞働保護法案を起草して夫々の機關に提案した。その後内閣の更迭があつた爲め、多少時が遲れたとは言へ、今では既にこの法案は、經濟會議、聯邦參議院を通過して、今年の春議會に上程され、今ではその委員會が是を審議して居る。この法案に續いて條約批准法案が近く議會に提出されることは、既に勞働大臣の公言せる處である。

つまり、獨逸にあつては、八時間條約の批准は今はたゞ時の問題だけになつて居る。

獨逸の關門は是で解けた。もう一つの難關たる英國はどうな

ろか。

保守黨内閣が英國で頑張て居る間は、問題はとても解けさうにも無かつた。しかし、繰返して言ふ、如何に保守政府でも問題を全然放棄はせぬのである。さやうな事は醒めた勞働大衆を多分に包含する國民が到底許さぬのである。そこで本年三月、勞働大臣のスチール・メートランド氏はわざ〳〵ジュネーヴの勞働理事會に赴き、八時間條約改訂を提議して力說努めた。しかし、見よ、如何に時勢は變りつゝあるか、之に強き反對を試みたのはたゞに勞働者側のみでは無い。既に批准したベルギーやフランスの政府代表は固より、例の獨逸の代表までが、近く自國で批准する見込を理由として今更の改訂を拒むだのであつた。かくて流石大英國を背負つてのこの提案も無殘に一蹴され、スチール・メートランド氏は這々の態で本國に歸つた上、之れが原因で不人氣を招いたのか、此間の總選擧では一敗地に塗れて議席さへ失ふて仕舞ふた。

さうして茲にこの明快な、即時批准の宣言を勞働黨政府から聽き得るやうになつたのである。

快刀は實に亂麻を斷つたのである。

八時間條約批准を阻止する二大原因は、獨逸と英國とのこの新しき態度に依て、今は全く除去されたと言ふて宜ろしいのである。

假令へ、その宣言は極めて事務的な言辭でなされたとは言へ、滿場が大喝釆を以て之を迎へたのは無理も無いのである。

六

思はず八時間問題を語ること長きに過ぎた。

然かし現在、國際勞働立法の可能性を卜するのに、この八時間制條約の批准程適切な標尺は無い。國際勞働機關の無用論が今迄種々の方面から說へられたも、主としてこの條約の未批准が多い爲めであつた。

而して、見よ、英獨の堅壘既に落ちて後は無人の野を行くが如きものがあらう。國際勞働機關に於て八大產業國と稱するもの、曰く英を初めとして、佛國、獨逸、伊太利、白耳義、印度、加奈陀、及び日本。之の内六箇國は問題解決済となる結果、獨り、聯邦組織の憲法上の故障で批准に技術上の困難を有するカナダを除いては、東海の孤邦日本のみが、たつた一つの未批准國として殘るであらう。しかも、記せよ、日本はワシントン會議に自ら求めて特殊國となり、印度とともに特に延長したる時間數を以て(日本一週五十七時間、印度一週六十時間)その實行を約したるもの、その後十年、批准は愚か、實行可能に就て研究

すら等閑に付して、遂に印度の後塵を拜し、かれより未批准を咎めらるゝの醜態を演じて居るでは無いか。

一波は萬波を生むだ。英國に勞働黨内閣の起つたことは、國際的に軍縮の將來を想見せしめたのみならず、勞働立法の國際的進展をかく迄刺戟したのである。而してその結果は、日本をして、この點に於てもまた完全に孤立國たらしめんとして居るのである。知らず、新興の濱口内閣、その視野をこゝまで擴げて、今後の對應策を講ずる準備ありや。

これで、國際勞働機關も愈ゝ物になつて來た。

勞働事務局長トーマ氏の報告に依れば、今迄會議が議決した二十六の條約中、今年三月迄に諸國から批准濟の登錄を受けたもの、三百四十二、昨年から見て七十九の增加だとのことである。

その批准された條約の實施狀況を研究し、各國の勞働法制と實況とを精確に調査し、毎年の會議の議題内容を徹底的に調査するため、國際都市ジュネーヴに於ける勞働事務局には現に專門の役人が四百人、風光明媚の湖畔に建てた清楚なオフィスに、局長トーマの言葉を借りれば「蜂窩のやうに澤山の小窓の明いてるその内側で、蜂が蜜を作るやうに孜々として」働いて居る。その役人達の國籍は今三十六箇國に涉るとのことである。

八時間勞働以外に、どんな業績を年々の會議は殘したか。其の主要なものに就て言へば、まづ少年勞働の禁止がある。日本も是には批准して、隣國アメリカの、あの豐富な資源と文明とを誇つて居るに拘らず、その南部諸州に行はれて居る少年勞働を今以て禁止し得ぬのに對して、此の點だけは斷然優越を誇つて居る。

婦人年少者の夜業禁止、失業問題對應策としての、公設職業紹介所設置の件、産前産後婦人の保護、海員勞働保護、勞働者災害疾病補償、疾病保險、最低賃金、等々の條約案が既に採擇された外に、今年はサラリー・マンの勞働時間のことが會議で議せられた。

過去十年の反動時代、受難の時を經過して來たにしては、それでも相應の成績を舉げて居るでは無いか。

これから先きは？

少くとも、潰れて仕舞ふ存在でないことは、八時間問題の解決に徵しても、明かであらう。

七

どうして、こんな妙なものが世に現れて來たか。

勞働法制といふやうな事は元來國内的の問題である。それを

國際協議で一定するとは何事であるか。

これは現在一部の人士が眞面目に抱懷する意見であるが、獨り吾國に止まらず、現に英國、佛國の政府ですら、一八八一年の瑞西政府の國際勞働會議提唱に際して公然口にした處であり、それを理由にその時は會議の實現を阻止したのであつた。

それが何たる變りやうか。かく迄敏感に國家主權を固守した連中が、四十年の後は國際聯盟を作り、その附屬機關として國際勞働機關を設立して、所謂國內事項を國際問題視する張本人になつて居る。

時勢が變つて來た。良いにつけ、惡いにつけ、日增に密接を加へる各國の相互依存關係は、最早何人をも何國をも、舊式な主權論の殼の內に立て籠ることを許さぬやうにして仕舞つた。

其處に行くと、流石ロバート・オーウェンは偉かつた。

彼はヴエルサイユ會議の開かれし年の丁度百年前、エー・ラ・シヤペルの會議に堂々たる意見を出して居る。曰はく、一國で勞働者を良く保護しやうと思へば、一國內だけの仕事では駄目だ。産業の國際競爭がある。他の國で搾取勞働のある間、産業競爭に於ける生産費低下促進の關係上、どうしても自國だけの勞働條件向上は出來ない事になる。故にこの國際會議を機として常設の國際的勞働協約機關を作れと。つまり、今日のジユネーヴの機關そのものを百年前に提唱したのである。さうして繁論この「取りとめも無い夢想」は現實的な外交官のたゞ一笑を博しただけで、その意見書は雜作なく紙屑籠に抛り込まれた。しかし、大きな夢は、夢みて置くべきものである。

百年の後、オーウェンは知己を得た。百年後のヴエルサイユ會議ではこれが具體化したのである。

但し、今度、これを提唱したオーウェンは複數であつた。

第二インターナショナル系の勞働組合幹部連、是等の人々が所謂ベルン會議の決議を提げてパリに來り、平和會議の全權を說いたのが事の起源である。さうして、平和條約の第十三篇、國際勞働の卷が製作されたのである。

八

オーウェンの建議から見れば、百年遲れて居るが、通常人の考からすると、これですら未だ早熟過ぎる一の産物である。恐らくこんな珍妙な組織は他にあるまい。

國際的な公けな機關であり乍ら、その每年の會議には政府の代表と全く同等の權利を以て民間——使用家側と勞働者側——の代表が臨席し、その總計合せた意見が全體の三分の二以上なら、條約案が出來上るのである。この條約案も、初めこの組織

設立の委員會では、フランス、イタリーの代表などから、當然直ちに各國政府を束縛し得るものとすべしとの意見が出て、あはやそれに一決しさうな情勢もあつたのである。若しさうなれば、こゝに超國家の存在が出來た譯ではないか。しかし、遂に緩和説が勝を占めて、條約案が議決された上は、一年內に各國政府は自國の立法議會に附議して、(日本ではこれを樞密院と解して居る)、可決の上は批准せよとの事になつたが、兎に角、政府にこの手續を執る義務を負はせて居るだけでも、大したものである。即ち、職能代表主義を部分的に認めた國際的公機關を玆に建設したものであつて、今後の政治形態に一つの大きな示唆を與へるものである。

だけ、それだけ、現代の水準線より、出過ぎて居る。この機關が時々受ける惱みもまた是から來るものと言はねばならぬ。

その上に、これが生れてから以後、設立當時豫想せぬ狀勢の變化が世界の方々から現れて來た。

第一、當初の豫想を裏切つて、大立者たるべき米國が參加せぬことになつた。是は國際聯盟全般に渉つての嘆きではあるが、產業問題を扱ふ勞働の機關に、あの米國が這入らぬのは皮肉だ。フォードは、ジユネーヴ會議の極めたより少い時間を、さうして多い賃銀を、勞働者に與へつゝ、他方には勞働組合を否認して居る。ジユネーヴでやかましく言ふ勞働者團結の自由も何もあつたものでは無い。今日米國の影響を受けない國が、どこにだつて一つあるか。之れにも拘らず、此の國を除外して勞働條件の標準建設を圖るジユネーヴの機關は心苦しいと言はねばならぬ。

この機關は何としてもデモクラシーを背景として居る。又、社會主義者を包含して居るに拘らず、現在あるが儘の資本家、勞働者の地位を認めての上で、組織された國際的勞資協調機關である。しかるに、その後、さう言ふ有り觸れた物差に懸らぬ國、しかも大國が二つまでも出來たのである。曰く、ロシア、曰く、イタリー、兩者基く處は相反するとは言へ、其處に資本家及び勞働者の階級對立が無くなつた事に於ては一致を見て居るのであり、ロシアは機關以外であるから直接關係無いとは言へ、イタリーに就ては每年その選出に係る勞働代表の資格否認問題で議論の花が咲くのは、恐らく、イタリーの今の政治及び產業形態が變らぬ限り、終熄し難きものであつて、本質的に本機關と相容れぬものがある爲めでは無いか。

これに加ふるに、世界一般の不景氣があつた。反動思想があつた。デモクラシーに對する相當根强い疑が、彼方此方から現れて來た。

國際勞働機關が時に、資本家からも、勞働側からも、激しい、

鋭い、冷評熱罵の十字火の下に自己を着出す場合のあるのは、ただそれ丈けの現象では無くして、根源するところ深いと言はねばならぬ。

かくの如く、國際勞働機關は、古き、新しき、樣々の惱みと敵とを持つ。

然かし、この位な困難でこの組織が行詰る筈は無い。何故なら、これは、來るべき時代の風位と同方向に進むで行くものだからである。既に今日の世界を知る者は、餘程の反動論者で無い限り、國際協力なしに如何なる國も立つて行けぬことを認めるであらうが、勞働の問題は、その勞働條件の改善に就てオーウェンの言ふた如き相關性がある許りでなく、勞働者が人間として自己の生活に對する態度、觀念及び生活標準に關する智識、慾望は、今後隔地者間に益々接近を加ふるのであつて、人間らしい扱ひをして吳れと言ふ彼等の叫びは、いくらその國特有の家族制度とか、封建的美風とかを口實に使ふても、最早抑へ切れなくなつたのである。しかも、まだ充分普遍的では無いが、勞働者それ自身の國際運動は一層、この傾向を促進助長するものと言はねばならぬ。結局、國際的共同に依て勞働者の生活標準を作ることは可能であるのみならず、それで無ければ人が承知しなくなつて來たのである。

故に、この思潮に棹さす國際勞働機關は、今後益々存在價値を高めて行くと思はれるが、たゞ困つた事は、この機關だけが、割合に行屆いた組織を以て世の中に早產しただけで、是に後續する他の必要な國際機關が揃つて居ないのである。例へば、一九二七年の國際經濟會議、極めて結構な催しであるが、あゝ言ふものがもつと常設的な機關になり、一種の統制力を以て各國に臨むと言ふでなければ、實效は收め難い。しかし、今は仲々それ處でなく、あの時の決議は——通商自由の原則は——各國ともたゞ聽きつ放しと言ふ有樣では無いか。そんな事では、勞働問題の方だけ、折角權威ある組織が出來ても、完全に其の趣旨を徹底することは極めて困難と言はねばならぬ。

殊に產業後進國の場合に在つては、今日のやうな、各國に特有の人口密度、天資產源の分賦その儘をその國々に閉ぢ込ませて、その不平等の狀態に何等の緩和作用を講ぜず、たゞ勞働條件だけ先進國と均一にせよと迫るは片手落である。無論或程度は資源の有無に拘らず、如何なる國も勞働條件の向上を圖らねばならず、又之を圖る結果は却て能率を增進し、國內の消費力を高むる利益もないではないが、兎に角一方勞働條件を引上ぐると共に、他面は移民自由の原則、或は食糧原料の合理的分配に關して、現在以上に打融けた國際協調を是非議せねばならぬの

であるが、今是等の問題を提出しても、充分之を國際的に處理する機關が缺乏して居るのである。

ジユネーヴの勞働事務局で、數年來失業問題や炭坑勞働問題を研究して居るが、近頃公表せる意見に依れば、結局是等はみな國際的に解決を試みない限り、換言すれば國際協力に依て、生産及び金融の問題まで處理せぬ限り、國内だけでは始末が付き兼ねて來たことを明示して居る。故に少くとも經濟問題に關してもつと具體的な國際常設機關が、國際勞働機關の姉妹組織となつて建設されることが望ましいのであるが、今は勞働機關のみが獨り特殊の體系を具へて孤立の地位を守つて居るところに、所謂時代に行過ぎたるもの丶惱みがあるのである。

行過ぎたからとて引込み得る譯のものでない。明日の世になつたら、こんな組織はまだ生緩いものである。引つ込める代りに外の遅れて居るものを前に出せ。さうすれば、今のこの組織は邪魔でも無ければ、餘計な物でもなくなるのである。

まだ、御互の國際生活は極めて幼稚な時代に屬する、皆が理解と努力とを以て育て上げてこそ、漸く眞物になるのである。これに就て、國際勞働局長トーマ氏は本年の會議で旨いことを言つて居る。云はく、

「過去十年の經驗は敎へた。國際生活と言ふものは、決して未だ自然なものでもなければ、自發的のものでも無い、それは、たゞ、不斷の、辛棒強き努力の結果たるに外ならぬのである」と。

記錄からこの言を讀むで、眼前に髣髴たるは、あの努力の結晶そのもの丶樣なトーマ氏の風貌である。實に此の男の不斷の努力があつたらばこそ、言はゞ月足らずで生まれた國際勞働機關を今日是迄に育て上げて來たのである。まだ今後も發育上、相當の心配が無いでは無いが、然かし危險期は既に過ぎたやうである。何よりの證據は八時間條約の促進だ。かくして勞働立法を國際的に進め行くといふ可能性は立證されつゝある。「汝平和を欲するか、さらば正義を培へ」とは國際勞働機關の標語であるが、その社會正義は國際的協力に依て初めて徹底することは、吾國の例に見ても、この七月一日から實施される婦人深夜業禁止が如何に國際勞働機關に由り促進されたかに依つて知り得るのである。如何に悲観的に見る人も、この意義ある國際機關とその運動が、此儘停頓するものと斷ずる事はもう出來なくなつた。たゞ、此の上、願はしいのは、その後續部隊たる他の國際的經濟及び社會機關が、一日も早く出揃ふて前なるものと共助して呉れるのにある。

モスクワのミイラとミイラ取の世界と

嘉治隆一

一

昔のロシアの小説には隨分珍しい人名が出て來たものだと聞いてゐる。「行かうか戻らうかモスクワへ」といふ名前の如きは最も奇拔な一例である。恐らく之は都に對する憧憬と恐怖とを併有したムヂークの氣持をその儘名前に表したものであらう。今日のロシアにはもうそんな名前は見出せないだらうが、然し世界中を見渡すと氣持だけはそれに似た人間が案外多いやうである。いふまでもなく、モスクワは大ロシアの中心であり、大ロシアは勞農聯邦の盟主であり、勞農聯邦は資本主義世界の海に漂ふ共産主義の島である。よしや憧憬とまでは行かなくとも好奇心位をこの島に寄せてゐる人間は實際可成り多いに相違ない。とはいへ、個人々々がどう考へてゐるかといふことは、さしあたりどうでもいゝとして、問題はこの資本主義の海たる各國が共産主義の島たる勞農聯邦の存在をどうでもいゝとして抛つて置けないといふ事實である。一思ひに併呑してしまへるかといふにさうも行かず、さりとて島が大きくなるのを容認するわけにも行かない。だから用心をし乍ら、各國ともに之と何等かの交渉を保つ。人は之を世界經濟の矛盾といふ。そしてその矛盾の發展の方向に據つて世界の將來を豫想する。殊更に辯證法といふ言葉を以て說明しやうがしまいが、敢て問ふ所ではない。

何れにしてもこの事實と、そしてこの事實の發展とが大切なのである。

現在、勞農聯邦と之を圍繞する資本主義諸國との關係は種々の視角から觀察することが出來る。たゞ私は事柄を簡單にするために、貿易利權制度の二點を考へ乍ら、この問題を略述した

いと思ふ。

二

先づ貿易のことであるが、ロシアでは一九一八年四月二十三日以後、貿易國營の大原則が立てられた。隨つて個人の自由通商を許さない關係上、列國との通商協約が正式に成立するまでは依然として革命以來の封鎖狀態の下に置かれてゐた。而してこの空氣を打破し、事情を一變したのは一九二四年のイギリスに於ける第一次勞働內閣マクドナルド首相の出現であり、續いては同年のフランスに於ける左翼內閣（エリオー首相）の成立であつた。同年ロシアを正式に承認した國々はこの兩國の外にイタリイ、支那、ノールウエイ、スエーデン、オーストリア、ハンガリイ、ギリシヤ、デンマーク、アルバニア、メキシコ等があり、翌二五年には日本、ドイツ、トルコ等、二六年にはアフガニスタン、リトアニア、エストニア、ポーランド等、一九二七年にはラトヴィアも之に倣つた。尙ペルシアの如きは早く一九二一年に貿易を始めてゐるのであるから今日では殆ど世界の重要な諸國は洩れなくロシアと通商を行なつてゐる譯である。殊に、ロシアと極端に反對の地位にあるイタリイまでが何故にかくも早く之を承認したかといふことは興味ある問題であるが、恐らくムツソリニ內閣は之によつて鐵、石炭、石油等の原料品の缺乏を充たすと共に、イタリイ名物の移民を彼處に向けやうとたくらんでゐたのであらう。

所がこの列國との好意的關係はイギリスの對露斷交によつてその第一の支柱に動搖を來したのである。卽ち一九二四年秋に至つて有名な「ジノヴィエフの手紙事件」が起つて勞働內閣は一敗地にまみれ、次で二五年には支那に國民革命運動が起つて所謂「五卅事件」前後の騷動によりイギリスが非常の痛手を負つた背後にはロシアの魔手が動いてゐたといふので漸く反露熱が昂り、同年開かれたロカルノ會議の如きも一に全くサウエート聯邦封鎖のためにイギリスが列國を誘惑したものであつた。而已ならず翌二六年には炭坑罷業が勃發してイギリスの恐露病は益々昂進し、募り募つた果が一九二七年五月のアルコス商館搜索となり、兩國は表面斷交するに至つた。尤も最近出現した第二次勞働內閣はこの空氣を一掃してサウエート聯邦との好意的關係を恢復することは既定の事實である。

さてサウエート聯邦の外國貿易は右にも言つた如く國家の獨占する所となつてゐるが、その目的とする所は要するに外國商人と國內商人との直接取引による資本主義の復活を妨げるためと、外國品の輸入による國內後進產業の不振を防ぐためとにあ

る。そして内外共に消費者と生産者とを直接に聯絡せしめて有無相通ずるはこの國の根本方針たるマルクス理論に服する所以であるから、消費者は總て原則として生産品をトラスト、シンディケート、中央及地方協同組合等から得ることになり、賣價は凡て費用價格に一六%乃至二〇%以下の手數料を加へたものに國定されてゐる。但し新經濟政策實施後、若干の例外を認められてゐることは周知の事實であるが、國外貿易については依然あくまで仲買國の介入を防ぐ方針を採つて居る。例へば、棉花、羊毛、金屬類の原料品は近隣の西歐より輸入せずして直接にアメリカ、濠洲、エヂプト等の原産地よりせる如き、茶は支那よりせる如き正しくそれであつて、唯、機械類のみは英、獨、墺、チエツコスロヴキア等より輸入し、特に自動車の材料は合衆國に仰いで居る。

輸出入總額を簡單に國定チエルウオネツツの金ルーヴルによつて計算すれば次の如くである。(單位百萬留)

	一九一三年	一九二三—四年	一九二四—五年	一九二五—六年	一九二六—七年	一九二七—八年
輸出	一、五二〇・一	五二三・四	五七五・二	六七六・六	七七〇・五	六三六・一
輸入	一、三七四・〇	四三〇・二	七二三・五	七五六・三	七一二・七	八二〇・一

尚少し煩はしくはなるが、この金額が各國に分配される額によつて百分比を出して見る。

輸出先百分比

	一九一三年	一九二四—二五年	一九二五—二六年	一九二六—二七年
イギリス	一七・五	三三・二	二八・七	二五・八
ドイツ	二九・九	一五・二	一六・五	二二・〇
オランダ	一一・七	三・六	三・一	三・〇
米合衆國	〇・九	四・九	四・五	三・〇
フランス	六・七	三・八	五・九	七・〇
イタリア	四・九	二・七	四・九	四・九
レットランド	—	一〇・九	九・四	八・五
ペルシア	三・八	五・〇	五・二	五・六
トルコ	二・四	一・七	二・六	一・八
エストランド	—	二・四	二・五	一・〇
フインランド	三・七	〇・四	〇・七	一・四
支那	一・九	一・六	二・五	二・四
日本	〇・一	二・二	一・九	一・五
其他	一六・五	一二・四	一一・六	一二・一
計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

輸入先百分比

	一九一三年	一九二四—二五年	一九二五—二六年	一九二六—二七年
イギリス	一二・六	一五・三	一八・六	一五・六
ドイツ	四七・五	一四・二	二五・六	二五・三
オランダ	一・六	四・八	一・〇	〇・七

米合衆國……	五・八	二七・九	一六・〇	二〇・四
フランス……	四・一	一・三	二・六	三・一
イタリア……	一・二	六・七	三・一	〇・五
レツトランド……	—	一・三	〇・六	〇・二
ペルシア……	三・二	七・二	五・八	五・七
トルコ……	一・三	〇・四	一・三	一・五
エストランド……	—	一・一	一・〇	〇・六
フインランド……	三・七	二・六	二・〇	二・五
支那……	五・五	二・三	四・一	四・二
日本……	〇・四	〇・四	〇・三	〇・五
其他……	一三・一	一四・五	一七・九	九・二
計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

即ち過去に於て最も盛に交涉があつたのはドイツ、イギリスである。尤も後者については既述の如くアルコス商館事件が障礙をなしてゐることは察するに難くないが、勞働內閣の出現はこの形勢を好轉せしむるものと見て差支ない。フランスが出入共に案外少いのはかのド・モンジー（De Monzie）の對露通商國の協同戰線提唱以來、いたく聯邦の反感を買つたのに因るものである。結局、今後もドイツが相變らず深い關係を保ち、外に國情その他から考へて將來最も多く接觸すべきは米合衆國である。同國はサウエート聯邦とは正反對の極端に立つてゐるが、兎も角有り餘る資本とブルジョア獨裁政治とを以て世界に覇を稱へてゐるのだから何れかに商品と資本との輸出を行はなければならぬ。そしてその目的のためには支那が未だ確固たる中央政府を成立せしめ得ない現在では、ロシアが最も有望である。加ふるに合衆國は如何にロシアと接觸しても斷じて共產主義に感染しない社會狀態をもつてゐる。それ故にアメリカの資金と商品と人間とは盛にロシアへ送られる。現に新經濟政策以後個人商人としてロシアで働く者の如きもユダヤ人の次はアメリカ人である。そしてユダヤ人が南ロシアやシベリアの內國植民地に集合しつゝある今日、アメリカ商人は益々活躍するであらう。

三

次には利權である。即ち、一切の產業を國營たらしめてゐるサウエート聯邦に於ける自然資源の開發のため、一定の期間（多くは十八年乃至二十二年の契約）を限つて外國資本の投下を認許するのである。許された外國人は一定の資金を以て同聯邦內に於て農工業その他の企業を創設し、資本家的營利精神に基いて經營を續ける。而して契約期間を經過した後はその事業に投下せられた資產は總て賠償なくして聯邦政府の所有に歸するのだから投資者はその間に元利を完全に回收しなければならないが、自然資源豐富なるに拘はらず資金の缺乏から必要なる物資に涸渇してゐるこの聯邦では僅々五箇年位の間に優に之を償つ

て餘ある收益を得ることが出來るといふ計算が立つてゐる。

この外資導入による資本主義との妥協の原則は既に一九二〇年、戰時共產主義經濟政策の實施せられてゐた當時、列國の干涉が終熄したのを機會に始められたものである。但し、最初は外國資本家をしてロシア國有財產の賃借人たらしめ、それによつてロシアの富源を開發せしめ、物資を豐富ならしめ、且、勞働者及び農民の生活狀態の改善を計るといふ本來の目的の外に、かくする事によつて勞農聯邦の國力を恢復すると共に資本主義世界の一廓を自家藥籠中のものたらしめんとの意圖もあつたが、今日では直接にかゝる政治的目的をも達成しやうする傾向は減少した樣である。

この利權讓渡に關する概念が比較的明になつたのは一九二一年秋、利權主務委員會が設けられて以後のことであつて、その翌年から續々申込があり、一九二七年十月一日までにさへその數實に二千二百件に達した。然しその中、契約の成立したものは一九二二年一八、一九二三年四四、一九二四年二五、一九二五年二三、一九二六年二五、一九二七年一九、合計一四四件に過ぎない。之を產業別に表示すれば

農業	一〇
林業	六
漁獵	六
鑛業	二四
加工工業	四一
交通、郵便及電信	一二
建築業	三
商業	三六
其他	六
計	一四四

之を投資者の國別にして見れば、ドイツ人經營二七・八%、イギリス人一五・三%、アメリカ人一〇・四%、フランス人三・五%、其他(日本を含む)四三%であつた。

利權計畫を立てた始に於ては當局は約六億ルーヴルの外資を移植する考であつたらしいが、今年四月の調査によれば、七二利權、投資額五千九萬五千ルーヴルに止つてゐた。其中、最も大口はスエーデンの一千萬ルーヴルであつて、ドイツは五百萬乃至六百萬ルーヴルに下り、口數からいへば、ドイツの十二、日本(漁業と樺太とを合せ)十一、イギリス八、アメリカ七等が重なるものである。尙その生產力に至つては約一億二千五百萬ルーヴルに達するといふから、既に述べた通り、相當に早く資金の回收が出來るものと見て差支なからう。(之等の計算は Berliner Tageblatt. 14. April. に據る)

この問題と多少の類似點をもつてゐるのは、外國の專門技師の招聘である。之はドイツ、オーストリア、アメリカ等の技師と勞働者とが最多く、事情に慣れないロシア人の教練と指導を行ふために傭はれるものである。そして彼等の手當は、特別に熟練した筋肉勞働者の月收平均一五〇乃至二〇〇ルーヴル、技師は四〇〇乃至五〇〇ルーヴル以上といふことになつて居り、宿舍は無料で提供され、俸給は每月半額だけ郷里にゐる家族に送付出來る約束であるが、外國との金融關係が順調に運び難い現在の狀態では動もすれば實行不可能に陷り易い。而已ならず、ロシアの勞働者及技手には不熟練なものが多いために、技師の滿足を買ふに足らない。その上、交通が充分でないために外國で買入れた機械等の運搬、据付が停頓することも珍しくない。本國の家族並に派遣會社との通信が自由でない。之等の事情が累積して多少の不滿を生じたこともないではない。現に昨一九二八年始、モスクワに勃發した五十二名の技術家の反革命運動に三名のドイツ技師が連坐した如き、非常なセンセーシオンを捲き起したが、要するに、之は彼等がロシアの事情に通じないからであつて、多くの日本人が支那に行つて不快を感じるのと大同小異である。必ずしも取り立てゝ論ずる必要もなからう。

右に云つた外國との金融關係の難局に最も惱まされてゐるのは、寧ろサウエート政府の經濟當局自身であつて、昔のルーヴル紙幣の暴落した結果、一九二二年始めて國立銀行を立て現在のチエルウオネツツを發行して一弗に對して一・九五金ルーヴルと定め、現在、聯邦全體に渉つて十六億ルーヴルを流通せしめてゐる。人口を一億四千七百萬として、一人當り換算して五弗五〇になる筈であるが、實際にはルーヴルが四七%に下落してゐるから、一人當り、三弗二〇にしかならないわけである。如何に無產獨裁を以てしても、この下落した貨幣を對外的に平價の働を永續させやうとしても不可能である。だから、外國に對する支拂の期日を延期するか、或は外國品の輸入を制限するの外はない。一九二七年度（二七年十月一日に始り二八年九月三十日に終る）の輸入の如き、輸出を超過すること實に一億六千四百萬金ルーヴル、止むなく、原料品は三乃至六ヶ月、半製品は十二乃至十八個月、完製品は二十四乃至四十八個月の定期信用拂にせられた程であるが、一方、外國品の輸入を漸次、制限して行くといふ方針もロシアとしては元來がそれを目指してゐるのであるから、必ずしも無理ではない。現在の如く、この國が全然建國の大本を異にする外國の間に孤立してゐる限り、出來るだけ早く自給自足の域に達しやうとするのは寧ろ當然と見る可きであらう。

四

今後のサウエート聯邦はどうなつて行くか。假に豫斷を許さないけれども、政治の方面に於ては共産黨、經濟の方面に於てはゴスプラン（國家企劃委員會）の活動に俟つ者大なる可きは疑を容れない。

然らば共産黨は如何。聯邦の全人口一億四千七百萬、其中、共産黨員並に準黨員數約百十四萬六千六百人、更に眞の共産黨員の數は七十七萬五千人（勞働者四十六萬、役人十四萬六千、農夫九萬七千、其他七萬二千——昨年末の調査に據る）。されば眞の黨員は全人の僅に½%に過ぎない。特に農民政策に最も注意を要することは、ロシアの會計年度が十月一日に始まるを以ても知られる。之は例年秋の收獲の結果を待つて國民の根本生活資料たり重要輸出品たる農産物の分量を明にし、引いては農民の工業品に對する購買力の程度を推測し、然る後工業品の生産方針を立て、進んでは依存關係の有利な樣に輸入方針を決定する爲である。隨つて一切の計畫は農民を無視しては成立ち得ないのである。この農民達は叛亂を起す虞はないか、又、飢饉の虞はないか。之に對しては調査の結果は概ね否定的となつてゐる。何となれば、この聯邦は成立後十一年半を經てゐるため、赤軍は既に極度に訓練せられ、行政制度は立派に組織を整へ、警察制度も完備してゐる上に、國土尨大、一個所の出來事が他に擴大して全體を動かすが如き事は斷じて困難だといふのである。

次に、ゴスプランは如何なる計畫を發表してゐるか。幸にも我々は無政府的生産に翻弄せられる他の國に於けると異り、將來を窺知するに適する好個の科學的資料を提供せられてゐる。資本使用額並に生産額に關する統計が之である。

ゴスプランの計畫する資本使用（單位 百萬チェルウォネッツ）

年度	一九二五—六	一九二六—七	一九二七—八	一九二八—九	一九二九—三〇	一九三〇—三一
工場擴張及一般修理	五七七・六	六四五	七〇一・九	六五九・八	五五九・七	四八九・九
新建設	一〇七・一	一七五・二	二九四・二	三七五・七	四九一・三	五六三・七
勞働者家屋	九六・〇	九七・八	一四五・五	一四六・九	一五五・二	一五一・八
合計	七八〇・七	九一八・〇	一、一四一・六	一、一八二・四	一、二〇六・二	一、二〇五・二
	一九二五—六	一九二六—七	一九二七—八	一九二八—九	一九二九—三〇	一九三〇—三一

燃料	二〇四・〇	二七二・五	三一四	三一七・五	三一七・五	三二八・五
金屬	一八八・六	二三三・五	三一〇	三三〇・〇	三五〇・〇	三六〇・〇
纖維	一三九・八	一一七・四	一三八・七	一六五・五	一七五・六	一八六・一

ゴスプラン發表による生産額(單位 百萬チェルウォネッツ)

	一九二五―六	一九二六―七	一九二七―八	一九二九―三〇	一九二九―三〇	一九三〇―三一
生産額	九、四八三	一〇、七八三	一一、七七九	一二、六二〇	一三、二九二	一三、八二三
前年度ニ對スル增加%	四一・二	一四・二	九・一	七・二	五・二	四・〇

之によつてサウエート聯邦が近き將來に大體に於て幾千の資本を必要とするか、又、生産品の數量如何といふ問題につき可成り明瞭な知識が得られるのである。利に敏い列國資本家は必ずや之によつて一定の算盤を彈いてゐるに相違ない。その結果、ロシアとの取引に何者が殘り、何者が榮えるであらうか。恐らくは前にも一寸述べたアメリカ合衆國こそ、最も勇敢にして有力なる折衝をこの聯邦に對して持續することになるであらう。資本獨裁國と勞働獨裁國との對陣、それこそ二十世紀第一の見物である。

ロシアの工場を視察した英人記者の通信に依れば、勞働者は必ずその中にアメリカ人がゐるか、ゐるならはどの人か、その人は何者であり、そして何の用事で來訪したのか、といふ熱心な質問を連發するのが例であるといふ。ロシアの勞働者はアメリカ人を資本の權化と看做し、之と提携することによつて自國の經濟的勃興を成就したいと考へると同時に、一方、本能的にアメリカがロシア反對の極端に立つてゐることを直感してゐるのだといふ興味ある言葉をその記者は附加へてゐる。

モスクワのクレムリンに眠つてゐる一個のミイラ、それこそ正しく地球の五分の一を占める特殊國家存在の表徴である。而して殘る五分の四に坐する國々はこの國家に出入してひたすら我意を通さうとしてゐる。ミイラ取が目的を達するか否か、その判斷は見る人の立場によつて違ふであらう。たゞたゞ困つたことにはミイラ取の懷中にはミイラに憧憬れる勞農階級と殖民地民族とが蠢動を始めてゐるのだ。ミイラ取がミイラにならないと誰が保證し得やう。

ジャズ的思辨によるジャズ批判

長谷川如是閑

一 音樂と人間

音樂ほど、人間を彼等の生物學的單一性に引戻すものはない。音樂はその辭、人種的に、民族的に、地方的に、それ〴〵異る色彩をもち、それをまた時代に應じて變へて行くほどの多樣性をもつてゐるのだが、しかも異つた母から生れた、異つた恰好と面相とをもつた子供等が、すべての大人を嬉しがらせ又いら〳〵させるやうに、音樂の異つた色や形やは皮膚の色や脳漿の色を異にするすべての人間を、單一な生物學的人間ならしめる力をもつ。

音樂的な聲帶は勿論、鼓膜をさへ持つてゐない私のやうな人間でも、音樂的な波動に對して、規則通りの震動を神經や筋肉にうけることは、偉大な音樂家と違つたことはないと思ふ。ただそれを音樂的の術語で說明することが出來ないまでのことなのだ。豚は眞珠を投げられても、それが數千圓を値するものであることは理解しないだらうが、大きな聲で怒鳴られゝば、それが本來言語を異にする人間の聲であるにせよ、不精無精に逃げねばならぬことを理解し得る。それほど音聲は、動物一般に對して共通の力をもつ。況んや音樂をやでである。

野蠻人の酋長は、部落の人心を——卽ち部落民の行動を——統一させる必要のある時には必ず音樂的方法を用ゐる。戰ひを始めやうとする時、狩をする時、耕す時、祝ふ時、弔ふ時、物を交換する時、喧嘩する時。アメリカのニグロは仕事をする時にきつと歌を唄ふ。多くのニグロを使つてゐる主人は、彼等のニグロの能率を上げるために、仕事は下手でも歌の上手な音頭取

りを一人だけ雇ひ入れるといふことだ。文明人でも、男よりは聊か野蠻人に近いといふ女達は、仕事の時、男よりも多く唄ふ習慣をもつてゐる。それは女の從事する仕事が單純なため、彼等が個性的に別々の人間であるよりは、生物學的に單一の人類であることをより便利とするからであるが、音樂といふものが別々の人間を、一つ人類に纒める波動なるが故に、その場合に有效に使用されるのだ。

が音樂が統一的行動の場合に於て起るについては別の事情もある。それは人間が單一的な生活に對して感ずる筋肉と神經との疲勞狀態――「倦怠」といふ形で現はれる――に於て、人間は、その非リズム的の反覆運動にリズムを與へることによつて、その疲勞を癒やさうと試みる。肉をたゝくコック、飴を切る菓子職人、釘をうつ大工、などが、その音に拍子をつけるのは、その音に律動を與へる結果、一つには筋肉の運動を靜的反覆から救ふことによつて、一つにはその律動的音聲を自分の神經にうけることによつて、疲勞を緩和する方法なのだ。

だから音樂には二樣の機能がある。多種多樣の社會人の群れを一つ人間に還元することによつて心理的の卽ち行動的の統一を持ち來すことと、社會をして過度の統一狀態による生理的の又社會的の倦怠から脫れしめること、がそれである。

二 「高級」音樂の壓制

がすべての「高級」なるものは、その本來の機能から遠ざかる。音樂もその高級のものは、聲帶と鼓膜と神經との特殊の發達を根柢として成立したもので、しかもその特殊性は、古來社會の文化狀態が壓迫するものと壓迫されるものとの階級的懸隔によつて、上層のそれと下層のそれとに分かれた所から發生したものなので、社會人の大部分を無視した特殊性である。イギリス人は、ドイツの哲學や文學は、素人に分らぬ術語をもつて、專門家の間に受け渡しされる玄人用の商品だといつてゐるが、すべての文化的に高級なものは何程かの意味でのドイツ哲學である。音樂の高級なるものも、ドイツを本場とするだけ、恐ろしいほどドイツ哲學になつてしまつてゐる。それは、音樂の原始的性質に規定される部分――音の人間的感覺の一般性――から出來るだけ離れ、音それ自體の概念的構成の發展に一致するものであること、極端の正統宗教が社會的感覺を離れて經文やバイブルの字面に一致しやうとするのと似たものである。

一般社會人は――最も高度の文明人といへども――音樂の最も高級なるものは、それを普の感覺に於て受け取ることをせずに、何か道德上の最高命令でゞもあるかの如く「全く理解され

ないが、然し柔順に守られねばならぬ、ものとしてそれに對するのである。音樂批評家といふやうな人々は、音樂の高級と低級と、即ち音樂的と非音樂的とが岐かれる分岐線を、小學教師が白墨の線を黒板に引いて生徒に見せるやうな工合に、引いて見せる職業人であるが、一般社會人が、その批評家の白墨の線の意味を解し得ないことは、小學校の先生が職業的にボールドに引いてゐる白墨の線の意味を生徒の解し得ないと同じなのだ。

それにも拘らず、多くの人が音樂演奏會の、理由もわからず高價の切符を奪ひ合つて買ひ求めるのは、從つて名人の音樂家の一囘の演奏に數萬金の報酬を與へてゐるのは、教養については少しも知らぬ信仰家が大本山をして巨萬の富を重ねしめるのと同じく、社會的命令への一般の柔順性からである。云ひかへれば反抗といふことを知らない奴隷の誠忠からである。彼等は、文明國人と産れた以上は、その文明の意味は少しも分らなくとも、燕尾服を着せられたらきつと白い手套を持つものだと考へるやうに、すべての文化的なるものには絶對服從せねばならぬことを疑ひ得ないのである。餘りに文化的な、高級の音樂の場合にも、だから彼等は、自分の半睡りに對して異常の高價を拂ふことを辭さないのである。

かくの如く超越的な文化組織に對して、社會的禁制の充分に行はれてゐる所では、一般社會人は全く反抗力を失つて、神經同士が天國の言葉で會話をしてゐるのを、地上の人間が有り難く拜聽してゐるやうな敬虔をもつて、それに隨喜してゐるのであるが、もし何かの理由で、社會に、又は社會の一部に、その超越的文明の形相に對する否定か、反抗かゞ起り得る場合には、その謀叛は二つの發作的の形をとつて現はれる。一つは、根抵的に、かゝる超越的文明の發生を可能ならしめた社會構成そのものに對して拳骨を向ける——といふ方が、もつと意識的な企圖を言ひ現はす言葉よりも適切である——ことであり、一つはその社會構成そのものに對してゞなく、それの高級生活者の文化的外皮を剝いで、彼等の、また彼等と對立する自分達の、荒肌をむき出して見せるのだ。

音樂としてのジャズは、確かに右の後者の意味でアメリカに起つたのだ。

三 ジャズの『低級性』

ジャズ音樂といふものが何ういふものであるかを、「確かに」は知らない私自身が、その意味を何うして「確かに」云ひ切ることが出來る？

それが一つの「思辨的ジャズ」なのだ。

音樂が何であるかを知らない、音波の物理學が何うであるかを知らない、一切の音聲の科學の存在も知らない、音樂に關する社會的の約束についても何も知らない、從つて無論音譜も讀めない、要するに音樂といふものについて一般動物の知つてゐる以外のことを毫しも知らない人間の、確かに、しかも上手にやれる音樂がジャズ音樂なのだ。

ジャズ音樂を確かに知らないものは、確かに又は上手に、ジャズ音樂について云ひ得ないとは——少くとも、ジャズ的見地からは、——斷言することは出來ない。

蓋しだ、高級の音樂の傳統とは全く沒交渉な、ニグロの故國たる、アフリカ原始林の間から起つたのがジャズ音樂なのだ。それは最も原始的な、卽ち最も一般的な——動物的に一般的な——感覺の發現なのだ。それは動物のそれに劣らぬ感覺をもつものにならば、誰れにでも訴へる力のある音樂なのだ。ニグロは彼れらの銀座たるアフリカ原始林の空氣に最も適した音樂をもつことによつて、人間一般の神經に最も普遍的に適合した音樂をもつてゐたのだ。それは黑人一般を威壓し得る如く、白人一般をも威壓し得るアフリカ原始林の空氣そのもの、やうな音樂なのだ。

だからジャズ音樂は、まだ地理的名稱さへも持たなかつたアフリカの原始林で演奏するに適したものであつた如く、日本淺草公園第六區で演奏するに適したものなのだ。

私は『公園』で始めてジャズ音樂なるものを『見た』時には、それが黑人等によつて演ぜられたものであつたに拘らず、未だ嘗て私の見も知りもせぬ、アメリカの本場物とは、決して同じものでないことを知ることが出來た。どこが場違ひであつたかを私はいふことは出來ない。然し、一歩外に出れば——否、出なくとも——摩天樓とアメリカ女とに威壓されてゐるニグロの、そこで發する彼等の鄕國の音と、暫時たりともそれらの脅威から解放された土地に來て發するそれとが同じ調子であり得ないことは、アフリカ原始林でのジャズがニューヨークの寄席でのジャズとが同じ調子であり得ないのに、異らない道理であらねばならぬ。

が私は、それによつて直ちにジャズの何たるかを『感覺』することを得たのは、斷髪女を一眼見たゞけで斷髪の何たるかを『感覺』することを得たのと同じであつた。

それほどジャズは、禪坊主の一喝のやうな、無意味の、仰々しい『音聲』によつて、ぢかに——われ〳〵の頭を通らずに、拳骨のやうに皮膚を通して——われ〳〵に訴へるものなのだ。

私は沈默よりも意味のない、その躁音に對して、何度も『解つ

たく\/』と口の裡にくり返したのだ、まるで續けざまに毆られてゐる人間のいふやうにだ。

だからその次ぎに、日本人だけのジャズを見た時には、もし私が帝國議會の議員か何かだつたら、大きい聲で觀客席から『それがジャズならお能はカツポレだよ。』とか『株のラッパヅボン引込めー！』とか何とか、然しもつと巧い、新聞記者の喜び相な野次を飛ばしたに相違ないであらうと思はれたほど、私はジャズ的感覺の特徴について『自信』をもつことが出來るやうになつてゐた。

それは日本に來たジャズが――少くとも私といふ一個の日本人に對して――その目的を達したわけである。ジャズは前にいつた如く、それの音樂的效果を、端的に人間的感覺そのものに訴へることによつて發揮せんとするもので、高級の、而して所謂『本格』の音樂が人間に於て棄て去つたものを拾ふことをその機能とするのであるから、人々が今まで音樂的なるものとは沒交渉だと考へてゐた自分のある機官を、ジャズによつて音樂(?)に結びつけられることが出來れば、ジャズはその目的を達したといへるのだ。

その意味のジャズなら、然しアメリカに限らずどこの國も多少の程度でもつてゐないところはないのだ。たゞその發祥地がアフリカ式原始林であり、その成育地がアメリカ式都會である代りに、麥や稻や波打つ田圃や、家の内にも街道にも、地方色の濃く出てゐる町や村やを故郷とするだけのことだ。馬鹿囃しや太々神樂を見馴れた人々は、日本人のジャズり方を知つてゐるわけなのだ。が今世界を風靡してゐる「東洋式」や「野蠻趣味」やが、日本的のそれでなしに、アメリカ的のそれであらねばならないのは、今日に生れ返つた原始的のもの、再生產の工場が世界の果てに存在せずに、世界の新規な――アメリカ――眞中に存在してゐるからだ。その上に、「資本」がアメリカのそれでないわけに行かないやうに、その資本によつて働いてゐるすべてのものがアメリカのそれでなければならないのだ。

ジャズ音樂に於ても、アフリカ產の原料の再生產の工場としてアメリカが一番、文化的にはとにかく、資本的に有力だからだ。ホリウツドがフヰルム生產の中心となつたのは、アメリカ人の藝術によつてゞなしに、資本によつてゞあつた如く、ジャズ音樂がアメリカ製でなければならぬのも、アメリカの音樂的生活のお蔭ではなく、ドル生活のお蔭なのだ。

四　ジャズとアメリカ

資本と音樂？ それは信じ得ない結びつきのやうだが、すべての近代的なるものは、悉く資本組織から離れたものであり、資本組織の管理の下にあるものであり、資本組織によつて世界的に播布されたものなのだ。絹の靴下のことを考へてもその事情は疑はれない。信州の田舍の百姓だけが、蠶を作り、生絲を賣る唯一の人種であつたなら、アメリカの女が悉く、日本の蠶の絲でその自慢の脚をつゝむやうなことになるわけはない。

がジャズと資本の結びつきは生絲と資本との結びつきよりもずつと複雜なのだ。それは單にジャズ音樂の傳播だけに關することではなく、又ジャズ音樂の音響だけに關することでもなく更らに深く、ジャズ的心理に關聯してゐることなのだ。

ジャズ的心理は、ジャズ音樂について起つたものであると同時に、それに先驅したものでもあつた。アメリカはその國土の上に、アメリカ・インディアンのそれを除いては、何等、所謂『地についた』ものをもつてゐなかつた。すべてが――人間と共に――渡りものであつた。そのすべての渡りものが、これから何を始めやうかといふことは、その渡りもの中の人間が『さて何を始めやうか』と考へたのと同じ事だつた。

渡りものゝ人間共は、一部はオランダ人の流れを汲んで商賣人となり、他の一部は、ピューリタンの跡を追つて百姓となつた。それはまるで、相棒の一人が牛になり他の一人が牛泥棒になつたやうな組み合せだつたが、南北戰爭はこの牛泥棒とを一つに縛めて、迷信家と不信者とを檀家にした寺のやうな國が出來た。それが今日のアメリカ合衆國だ。だからアメリカそのものがジャズなのだ。

ジャズ音樂は、イギリス産の牛に使はれてゐたアフリカ産の奴隷牛の手によつて、アフリカからもつて來たまゝの形で、夙くからアメリカの土地にアフリカ的音波を傳へてゐたのだ。

そのアフリカ的音波はアメリカの田野に生れ返つて、田舍町の酒場に流れ込んだのだが、それが、同じくその酒場に流れ込んだアメリカの都會人の耳から入つて彼等の神經を虜にしたのだ。それだけだつたら、ジャズは、酒場荒しの疲れたアメリカ人の醉どれ共と一緒に、田舍の酒場でいつまでも飲んで倒れてゐる筈だが、それがアメリカ中に、否世界中にチエイン・ストアを張つてゐるアメリカの興行人と音樂出版社の近代的資本主義組織の商品となつたことによつて、つひに今日の世界的商品としてのジャズ音樂となつたのだ。

然し問題はもつと根本的なのだ。

田舍の酒場で醉どれてゐるアメリカ人の疲れた神經にジャズ音樂がどんな風に觸れたかといふことは、即ちアメリカ合衆國

の二億の人民の神經にそれがどんな風に觸れたかといふことなのだ。

五　絶望の歡喜

アメリカのジャズ音樂界のボス、ポール・ホワイトマンは、彼れの『ジャズ』といふ本でさういつてゐる。

『ジャズを人がチャーフルだといふのは間違つてゐると思ふ。ジャズの樂天主義は、「食つて、飲んで、面白ろ可笑しくしろ、どうせ俺達は明日死ぬんだ。」といふ厭世家の樂天主義だ。

『絶望の歡喜はアメリカに根を張つてゐるのだ。われ／＼の國は、誰れかゞ考へるやうな、子供らしい大喜びの國ではないのだ。成功を目がけて突進する裏には、不滿足の焦慮があり、空漠たる思慕があり、とても掴めない、自分にもはつきりしない何かに對する憧憬があるのだ。

『二三の批評家はジャズをさう聽いた――然し彼等はそれをロシャの暗示、又は東洋の香などゝ呼ぶのだ。何うした譯か、著述家や批評家といふと口癖のやうに『ロシャの魂』とか『東洋の魂』とかいはぬと承知しないものだからだ。誰れも魂に關してはアメリカを信用しやうとは思はないのだ。

『われ／＼は、幾棒に物質主義の國民だと思はれてゐる。金錢以外の何ものにも氣をとめないと思はれてゐるのだ。然しわれわれだつて、物質や金錢やに氣をとめないことは、地上のどの國民にも敗けはしないのだ。

『われ／＼は何かを――何か美しい、善い、氣に入るやうなものを求めてゐるのだ。われ／＼はそいつを掴まうと焦つて、凄じい元氣で、建てゝは壞わし、壞わしては建てゝゐるのだが――そいつは決して充たされない悶がきなのだ。そいつが、ジャズの上ッ面の騷ぎや律動や元氣やの裏に潜んでゐる、哀愁と思慕と苦惱とによつて表現されるそのものなのだ。批評家達はそいつを東洋的と呼び、ロシャ的と呼び、その他得手勝手な呼び方をするのだ。がそのものはアメリカの魂の表現なのだ、アメリカはちやんとそれを心得てゐるのだ。』云々

ジャズが『絶望の歡喜』の響きであるといふことは、それがアメリカに於けるニグロの社會に再生したことによつて、一應はさうも考へられるが、然し、ジャズがわれ／＼の原始的の感覺に訴へるその單純に感覺的の訴へに、『絶望』といふやうな複雜な『裏』があるとは思はれない。われ／＼の直覺が、ジャズの訴へを、たゞその音響通りに聞けばこそ、ジャズはジャズとしてわれ／＼の耳と神經とを叩き伏せることが出來るのだ。それはその音響の示す通り、絶望もなければ希望もない、哀愁も

あこがれも、戀も絲瓜もない、たゞ／＼感覺的の「汎感覺的」の――とわれ知らず、變な造語でそれを呼びたくなる――音響そのものなのだ。ジャズにある意味は、詩は、アフリカの原始林を吹く風にある意味なのだ、一詩なのだ。

ホワイトマンがジャズの音響に『裏の裏』でもあるかの如くいふのは、アメリカ産れの、文明の教養をうけた、アメリカの都會人たる、白い皮膚の彼れが、黒い皮膚の音樂家のお株を奪ふことの辯解なのだ。白い批評家達が、それをロシヤ的だの東洋的だのといふのは、パリ的ならざる、ロンドン的ならざる、ニューヨーク的ならざるすべてのものを、さう呼ぶ習慣が、彼等批評家にではなく、すべての白人にあるからなのだ。

ジャズにある『裏』はチャップリンの藝術にある『裏』ほどの裏でもないのだ。フィルムのナンセンスに裏があるなら、或はそれがジャズ音樂にある裏だらう。けれども、ナンセンスに裏をつければ、『ナン』がとれて『センス』になつてしまうのだ。ジャズに裏のあるといふのは、『ナンセンスにセンスがある』といふやうなものなのだ。

ホワイトマンは、やゝもすれば、ジャズの音樂的效果と所謂『本格』音樂のそれとを妥協させやうとする。そうして、頻りにジャズの普及が本格的音樂に對する一般の嗜好を刺戟して、アメリカを音樂化することに貢獻するものだと主張する。さうして結局自分も年をとつて、ジャズに見離されるかジャズを見離すかしたら、ジャズの儲けでこしらへた牧場へでも引込んで本格の音樂を樂しんで餘生を送る事になるだらうなどゝいつてゐる。

ジャズをアメリカに歸化させたジャズの養ひ親達は、ジャズのアフリカ的、黒人的起原をその戸籍面から削つてしまひたのだらうが、それはジャズの生みの親に對する忘恩であると同時に、ジャズに於てアメリカ人の求めてゐるものをジャズから取り去ることなのだ。

六　アメリカ人の光榮

アメリカ人がニグロと共に、ジャズをその國民的音樂たらしめたのは、アメリカ人が『高級』なるもの、支配に絶對服從する、帝政時代のドイツ人のやうな、傳統をもつてゐない國民であることと、アメリカ的生活に於ける人工的環境が丁度アフリカの自然的環境のやうに、人間の感覺をその原始的、本能的一本調子に還元させることとによるものだ。

アメリカ人を絶對服從させるものはドルだけだといふ事には、ジャズの親方は不服だつたが、氣の毒ながらそれは事實だ。しかもそのことは、強ちアメリカ人の恥辱ではないのだのだか

ら、根つから氣の毒でもないのだ。

ドルに對する絶對服従は、今日ではアメリカ人だけのことではないのだ。もとは、誰れでも、世界でドルに頭を下げてゐるものは、アメリカ人自身とアメリカ人の遊覧客で榮えてゐるヨーロッパのホテルの主人だけだと思つてゐて間違ひはなかつたものだが、今日そんなことを考へたら大違ひだ。今日では、どこの國民でも、その國の政府の大藏省の役人と共に、ドルの機嫌をとることが、その最も重大な仕事の、従つて、最も重大な義務の一つにしてゐないものはないのだ。世界中でさういふ義務を感じてゐないのは、ドルの方で鼻もひつかけない、オーストラリアの奥地の野蠻人だけだ。

それはアメリカ人の恥辱でも何でもなく、もし恥辱だとすれば世界中の人間の恥辱だが、實はそれは恥辱でさへもないのだ。資本主義時代に於ては、貨幣經濟への絶對服従は、道德でさへあるのだ。人間はいかなるものに對しても絶對服従の義務はないと敎へた近代的自由主義は、人間は貨幣に對してだけ絶對服従すべきものであるが故に他の何物に對しても絶對服従すべきものでないことを敎へたのだ。それは丁度、封建國家を破壊したものが、人民は帝王に對する外、領主や地主に對して絶對服従の義務はないと敎へたのと同じなのだ。アメリカ人は、その近代的道德を世界のどこの國民よりも忠實に實行してゐる國民なのだ。アメリカ人のドルへの服従が彼れ等の道德であると等しく、アメリカ人の、ドル以外のものに對する服従の否定も亦彼等の最も立派な道德なのだ。

『イギリス文明史』の著者バックルはアメリカについてさう云つてゐる。ドイツ人は、すべての高級のものを少數人が專門的に、素人にわからぬやうに、排他的に作り上げてそれをもつてドイツは世界の最も高級なるものを持つてゐると誇つてゐるのだが、それが萬更ら嘘でないにしても、多數のドイツ人は全くそんな高級なものとは沒交渉なのだ。ドイツ人は十八世紀頃までは曖昧至極の國民だつたが、その頃から支配階級だけがフランスの影響を蒙つて、俄かに知的、學問的進出を試みたのだ。が、多數のドイツ國民は依然としてイギリス人よりもフランス人よりも『遙か迷信的で、偏見的で、無學無知で、自分自身を何うしていゝかわからない連中』なのだ。だからドイツでは高級の知識階級が國民一般をずつと飛び越して進んでしまつて、知識階級と一般人民との間には同情も交渉も何もないのだ。

それと正反對なのがアメリカ人だと、バックルはいつてゐる。アメリカにはドイツのやうな豪らい大學者はゐないが、またドイツのやうに曖昧な人間もゐない。アメリカでは、思辨的の嗜

級と實際的の階級とが一緒になつてゐる』。アメリカでは、『ドイツに匹敵するやうなたいした哲學者も物理學者も出ない代りに、その平凡な知識が廣く普及してゐる。『ドイツの短所は少數階級に蓄積された高級なものが少しも一般に行き亘らないことだが、アメリカの短所は、高級なものが蓄積されないことだ』。

五六十年前に、バックルにそんな風にいはれたアメリカの短所は、今日では立派なアメリカの長所になつてゐる。卽ちアメリカ人は『高級なもの、蓄積されない』といふ短所の代りに、今では『低級なるものを蓄積してゐる』といふ、長所をもつてゐる。ドルの蓄積が高級なものか低級なものかは暫く措き、ベースボールのあの恐ろしい見物の、キネマのあの馬鹿らしいファンの大群は、アメリカに於ける『低級なるもの、蓄積』の標本なのだ。

ジャズは自分から高級に對する謀叛だと公言してゐる通り、それは『低級』の『蓄積』なのだ。よくもあんな風の、低級な音の『蓄積』が出來たものだと、高級音樂家が感服するほど、それは『低級』であり、『蓄積』であるのだ。さうしてその上『普及』そのものでもあるのだ。

アフリカ人はこの低級を、アフリカの威壓的な大自然――原始林――の空氣から得たのだが、アメリカ人は、それを同じやうに威壓的な大人工――工場や摩天樓――の空氣から得たのだ。ニグロのジャズは、大自然の作つた原始林の威壓的空氣を如何ともすることの出來ないために、その本能的感覺の叫び聲を擧げたのだが、アメリカ人のジャズは、彼れ自からの作つた歷史の產物たる、鐵の機械と筋肉の機械とから出來てゐる人工的原始林の威壓的空氣に對する本能的の叫びなのだ。

七　ジャズの歸化する國

あらゆる人間の種類――白人のすべての種類ばかりでなく黑人、赤人をも充分に含んだ――を集めて作られた一つの國はいかなる國も作り出すことの出來なかつた文明を產み出す國であるに相違ないが、そこに產れた文明が、ジャズとムキ出しの女の足とによつて代表されることは落膽に値するやうであるが、然し、ジャズの騷音が、あの聖人ぶつた高級音樂の勿體らしいメロディーを叩き消し、ムキ出しの女の足が、容態ぶつた傳統的禮儀作法を蹴飛ばすといふことは痛快至極でないこともない。

現代に於ける――資本主義に於ける――文化形態のすべては、之れを要するに封建社會に出來上つてゐた傳統的形式への還元であつた。現代人がいやにそれを容態ぶつて眞似て見ても、成金が能を舞ふと同じで、自分の身體にも他人の目にもそ

れがしつくりと合つてゐるとは思はれないのだ。けれども現代は、その資本主義的生活の必然から『利潤』以外の何ものにも眞劒になる能力を缺いてゐるので、舊文化に對する反抗はたゞそれから『分離』するのみなのだ。

然し、この分離に於ても現代は生半可なのだ。アメリカ女か、足を段々上の方までムキ出しにするが、ついにギリシャの女のやうに全身をムキ出しにすることが出來ないと同じく、現代人はその分離に於ても、舊威儀、舊儀禮に引つかゝつてゐて、新華族が舊華族を馬鹿にしながら自分を『御前』と呼ばせてゐるやうな、不徹底やとんちんかんを演じてゐるのだ。

然るに、アメリカのニグロは、彼れのジャズによつて、アメリカ人をこの不徹底、このとんちんかんから刎ね出させたのだ。ジャズによつてアメリカ人は、成金の謠のやうな傳統的文明感覺の世界に於ける中途半端の彷徨から解放されて、原始的感覺の發揚に一足飛びに飛びついたのだ。

それには、それぞ〱異つた文明の傳統をもつた異る人種の寄合世帶たるアメリカが一番適してゐたのだ。さうしてその寄合世帶の人間共が、協同して突進して行く先きが、荒涼たるクロンダイクであつたことがそれに必須の條件だつたのだ。あの『ゴールド・ラッシュ』のフィルムの開卷第一に現はれる蟻のやうな人間の大群の、氣狂ひじみた感覺に感ずるものはたゞ黄金の黄色い光りと黄色い音とだけなのだ。もしかういふ人間にも、藝術的、音樂的、文化的感覺があるとすれば、それが即ちジャズなのだ。

然し、よく〱藝術的天才に乏しいアメリカ人は、原始的、本能的感覺のジャズ的表現さへも自分で發明することが出來ないで、ニグロの天才に敎へられたのだ。これほどアメリカ的な『藝術』をニグロから敎つて始めて合點が行くやうなアメリカ人は、他人から敎へられて、始めて自分の首が、自分の肩の上に乘つかつてゐることを知つた阿呆と同じだ。

八　ジャズと日本

かくの如くアメリカ的なるジャズが一番早くイギリスに傳染したといふことをもつて見ても、現代そのものが難攻不落で聞えたイギリス人の頑迷不靈をさへ落城させるものであることを知るに足るのである。先達もイギリス海軍で將官が、古典音樂ばかり演奏する軍樂隊を罵倒して、問題となつたが、端厳なる——但し恰好の——イギリス軍人をして、ジャズによつて士氣を鼓舞することに氣づかしめたのは、現代が漸くそのつけ燒刄の文化形態をかなぐり棄てる時の來たことを暗示する事實なのだ。

日本に至つては、そこにジャズが入つて來たことは、ペルリが入つて來た時からの約束なのだ。どこの國でも、社會の多數がジャズ的感覺をその『低級』文化の基調とするものでない所はない——といふよりは、社會そのものがジャズでない所はな

いのだが、殊に日本は社會の多數と少數と、上皮と下積との區別なく、その文明その教養、その政治、その道德、その禮儀、その家庭、その擧止、その扮裝、その頭、その足の先…が悉くジャズ的ならざるはなしなのだ。

日本の羽織袴で、西洋の帽子を被り、朝に下駄をはいて夕に靴を穿き、腰を曲げてお辭儀をしながら握手をし、三つ指を突く丸髷の女房に、洋服の亭主がキッスを試み、スリ足の茶の湯のの令孃は同時にランニングの選手であり、箸の隣りにフォークが並び、刺身のつぎにビフテキが出、歌舞伎とフイルムとをちやんぽんに見、ガソリンで動く車に乘るかと思へば、人間で動く車に乘り、アメリカフイルムから歩るき出して來たやうな近代的男女と、劍劇のフイルムを突き破つて飛び出して來たやうな封建的男女とが、銀座を行列し……このやうなジャズの總動員を見物し得る國は、世界にも鮮いのだ。

日本のかくの如きジャズは、然し、たゞ形の比喩に於てジャズ的なるに止まるのだ。それはニグロのジャズのやうに原始的でもなければ本能的でもなく、野蠻でもなければ自然でもない。それは、野蠻と文明との中間にブラ下つて、そのどつちにも足をつけられない、首縊くりのやり損ひのやうなジャズなのだ。それは野蠻から文明へ一足飛びに飛びそこなつて、途中の溝泥に飛び込んでもがいてゐるジャズだ。

現代の求めてゐるジャズはそんなものではなく、ニグロが淺薄なアメリカ文明の袋路にまでついてゐるアメリカ人の襟首を引ツつかんで、アフリカの原始林に投げ込んだジャズなのだ。

所がアメリカ人の『淺薄』はそこでも已まない。彼等は好んでニグロに襟首をつませて投げ込まれたアフリカの原始林にアメリカのカフエやレストランで見馴れた人工の紙細工の花環をこしらへやうとしてゐるのだ。さうしてジャズを、ジャズの大將までが、所謂本格音樂への階梯だと稱してゐるのだ。

ニグロのジャズはかうしてアメリカの土地に歸化してしまへば、本格のジャズは本格のニグロと共にアフリカの原始林へ戻つて、いつか再び出直さなければならないやうになるのだ。それはルソーの『自然に歸れ』がフランスのブルジョア革命の完成と共に、『人工に歸つて』、二十世紀の末までには是非とも再び出直す運命にあるのと同じなのだ。

ジャズ的思辨によるジャズ批判は、當然、アメリカの資本主義によつて商品化したアメリカ・ジャズを否定して、アフリカの原始林に、その原始林の存する限り永久に響き渡るニグロの『本格』ジャズを高調する。

ニグロよ、君達はたゞジャズでだけアメリカを征服するのが君達の使命だと思つてゐるのではあるまい。君等はそれは、何かの前兆だとしか思つてゐないのだ。それに違ひないのだ。

日本人よ、モボの化粧面のやうに白化したアメリカ・ジャズを斥けて、アフリカの原始林の、眞黑けなジャズを採れ。（終）

劇壇漫評

菊池寛

歌舞伎

徳川時代の文物の中で、歌舞伎芝居だけが、こんなにいつまでも亡びないのが、實に不思議である。それは、歌舞伎芝居と云ふものが、三百年近くの年月の間に、藝術としても完成されて居り、社會的にも深い根據を築いてゐるためでもあらうが、それにしてもこの二十年以來殆ど衰退の色を見せないのは、不思議である。

歌舞伎芝居に盛られてゐる生活の形式も感情もすつかり封建時代のもので、我々とは何の交渉もないのに、なぜ多くの見物がなほ歌舞伎芝居を見るのであらうか、それには、歌舞伎芝居の俳優が、傳統的人氣を持つてゐることと、芝居を見物する連中が多くは保守的な人間で、歌舞伎芝居の中の舊道徳の中に安住せんことを欲する人達であるからであらう。彼等は、不快なる眞實や、良心の過度の刺激などを欲しないのである。彼等は事勿れ主義で、移りゆく世相などから目をそらしてゐたいのである。

その上、彼等の觀劇眼は傳統的な曇りがかゝつてゐて、自分自身の實感で芝居を見ることを中止してゐるのである。吉

右衛門の何々は上手なもの、菊五郎の何々は結構なもの、梅幸の何々はよきに相違なきものと云つたやうに頭が出來てゐるのである。彼等は、歌舞伎芝居を見てつまらないと思ふことは、自分の方で間違つてゐると考へてゐるのである。彼等は歌舞伎芝居は面白かるべき筈のものと考へてゐるのであらう。

役者も惰性で芝居をすると同時に見物も惰性で芝居を見てゐるのである。さうでも考へないと、歌舞伎芝居が今もなほ多くの見物を引き寄せてゐることが自分には不可解なのである。

梅幸、歌右衛門などの女形が、いかに不思議なものであるか。梅幸のおかるなどは、つひ先程も演じたやうであるが、見てゐる方で、面を背けたいやうな氣がするのであるが、當人があれで少しでもおかるらしい若さや美しさであるとでも思つてゐるのだらうか。見物が聲を出して嘲笑しないのが不思議である。もし、あれが梅幸と云ふ名をかくし、無名の一俳優として舞臺に出たならば、見物は口々に罵つてやまないだらう。梅幸と云つた傳統的な偉力で鷺を烏と強辯してゐるのである。

傳統と惰性のない映畫などであつたならば、あゝした出鱈目なことは決して行はれないだらう。本當に物を見る人間は、顔のしわ一つだつて許さないだらうと思ふ。

歌舞伎の俳優位保守的で新陳代謝しないものはないだらう。大學教授だつて停年制など云ふものが出來てゐるのに、容貌や姿態などを第一の資格にする役者が五六十になつて青年の美男美女に扮するなどをかしい話である。昔のやうに蠟燭の光りでやつてゐた時代ならばいざ知らず、現在の舞臺では醜い者は決して美しくはならないのである。

彼等は、いゝ着物を着たつもりで裸で坐つてゐた昔の王様とよく似てゐる。しかし、保守的な見物は、裸を裸と云はないのだから、ありがたいものである。その上、新聞の劇評がまた全く保守的で、決して事を荒立てようとはせず、事勿れ主義御都合主義で十年一日の如く變らないのであるから、歌舞伎芝居など云ふものは、まだもつとつゞきさうである。

然し心あるものから見れば、歌舞伎芝居の狂言の中現代人の見るに足るものは、殆ど十指にも足らない位であるし、新しい史劇なども岡本綺堂氏以後、專心する作家がないのであるから、歌舞伎の命脈もさう長くはないだらう。歌舞伎の持つてゐる舞踊なども、現代及び將來の若き民衆にアピールし得るかどうか。

然し、歌舞伎が、なほ容易に滅びないのは、外に代るべきものがないからである。之は歌舞伎芝居の幸運である。新派、現代劇、澤田存生時の新國劇なども、到底歌舞伎の跡を次ぐべく大きくなり得ないのである。歌舞伎は腐れかゝつてゐる大樹であるが、結局それに代るべき新樹がない以上、當分は倒れないだらう。劇場經營者の方で倒すわけには行かないのであらう。「九條武子」とか「戰艦三笠」とか、何が歌舞伎だか何が芝居だか分らないやうな狂言をやつても、とにかく歌舞伎芝居をやる外はないのだらう。もうそれ自身命脈がつきてゐても、とにかく帝都に於ける十に近い大劇場を開けて行くためには、歌舞伎芝居を利用する外はないのだらう。今に歌舞伎レヴューなどをやり出すに違ひない。しかし、さう云ふことに依つて、歌舞伎芝居は自壞作用を起してゆくのではないだらうかと思ふ。また、その自壞作用を待つ以外に、歌舞伎を殺す道はないのかもしれない。

新派

僕は新派と云ふものは、あまり見たことがない。新派と云ふものに、興味も關心も持つてゐない。これは明治の風俗劇であつたのだらう。歌舞伎ほどの名狂言もなく、況んや歌舞伎の持つてゐるやうな形式的な美しさや、技巧も何もない。これが、文學の形式であつたら、とつくに亡んでゐてもいゝものである。舞臺的にも藝術的にも何もならないのである。が、しかしとにかく新派俳優と云ふものが存在してゐる。そして個人々々としては俳優としてよい素質を持つてゐるものもあるのだらう。役者がゐる以上、それらの生活問題として新派劇が存在してゐるのであつて、これらの役者が、映畫俳

右衛門の何々は上手なもの、菊五郎の何々は結構なもの、梅幸の何々はよきに相違なきものと云つたやうに頭が出來てゐるのである。彼等は、歌舞伎芝居を見てつまらないと思ふことは、自分の方で間違つてゐると考へてゐるのである。彼等は歌舞伎芝居は面白かるべき筈のものと考へてゐるのであらう。

役者も惰性で芝居をすると同時に見物も惰性で芝居を見てゐるのである。さうでも考へないと、歌舞伎芝居が今もなほ多くの見物を引き寄せてゐることが自分には不可解なのである。

梅幸、歌右衛門などの女形が、いかに不思議なものであるか。梅幸のおかるなどは、つひ先程も演じたやうであるが、見てゐる方で、面を背けたいやうな氣がするのであるが、富人があれで少しでもおかるらしい若さや美しさであるとでも思つてゐるのだらうか。見物が聲を出して嘲笑しないのが不思議である。もし、あれが梅幸と云ふ名をかくし、無名の一俳優として舞臺に出たならば、見物は口々に罵つてやまないだらう。梅幸と云つた傳統的な偉力で鷺を烏と強辯してゐるのである。

傳統と惰性のない映畫などであつたならば、あゝした出鱈目なことは決して行はれないだらう。本當に物を見る人間は、顏のしわ一つだつて許さないだらうと思ふ。

歌舞伎の俳優位保守的で新陳代謝しないものはないだらう。大學教授だつて停年制など云ふものが出來てゐるのに、容貌や姿態などを第一の資格にする役者が五六十になつて青年の美男美女に扮するなどをかしい話である。昔のやうに蠟燭の光りでやつてゐた時代ならばいざ知らず、現在の舞臺では醜い者は決して美しくはならないのである。

彼等は、いゝ着物を着たつもりで裸で坐つてゐた昔の王様とよく似てゐる。しかし、保守的な見物は、裸を裸と云はないのだから、ありがたいものである。その上、新聞の劇評がまた全く保守的で、決して事を荒立てようとはせず、事勿れ主義御都合主義で十年一日の如く變らないのであるから、歌舞伎芝居など云ふものは、まだもつとつゞきさうである。

然し心あるものから見れば、歌舞伎芝居の狂言の中現代人の見るに足るものは、殆ど十指にも足らない位であるし、新しい史劇なども岡本綺堂氏以後、專心する作家がないのであるから、歌舞伎の命脈もさう長くはないだらう。歌舞伎の持つてゐる舞踊なども、現代及び將來の若き民衆にアピールし得るかどうか。

然し、歌舞伎が、なほ容易に滅びないのは、外に代るべきものがないからである。之は歌舞伎芝居の幸運である。新派、現代劇、澤田存生時の新國劇なども、到底歌舞伎の跡を次ぐべく大きくなり得ないのである。歌舞伎は腐れかゝつてゐる大樹であるが、結局それに代るべき新樹がない以上、當分は倒れないだらう。劇場經營者の方で倒すわけには行かないのであらう。「九條武子」とか「戰艦三笠」とか、何が歌舞伎だか何が芝居だか分らないやうな狂言をやつても、とにかく歌舞伎芝居をやる外はないのだらう。もうそれ自身命脈がつきてゐても、とにかく帝都に於ける十に近い大劇場を開けて行くためには、歌舞伎芝居を利用する外はないのだらう。今に歌舞伎レヴューなどをやり出すに違ひない。しかし、さう云ふことに依つて、歌舞伎芝居は自壞作用を起してゆくのではないだらうかと思ふ。また、その自壞作用を待つ以外に、歌舞伎を斃す道はないのかもしれない。

新派

僕は新派と云ふものは、あまり見たことがない。新派と云ふものに、興味も關心も持つてゐない。これは明治の風俗劇であつたのだらう。歌舞伎ほどの名狂言もなく、況んや歌舞伎の持つてゐるやうな形式的な美しさや、技巧も何もない。これが、文學の形式であつたら、とつくに亡んでゐてもいゝものである。舞臺的にも藝術的にも何もならないのである。が、しかしとにかく新派俳優と云ふものが存在してゐる。そして個人々々として俳優としてよい素質を持つてゐるものもあるのだらう。役者がゐる以上、それらの生活問題として新派劇が存在してゐるのであつて、これらの役者が、映畫俳

優になるとか金が出來るかして、それぞれ片がつけば、新派劇などは無くなるものだらうと僕は思つてゐる。

新劇

新劇乃至現代劇と云ふものが、歌舞伎を倒して、次ぎの天下を取ると云ふことは、もう夢になつてしまつた。二十年來いかに多くの新劇運動が起り、そしてその凡てが失敗したことか、新劇の不倶戴天の仇たる歌舞伎は少しも衰へてゐないのだが新劇の方は死屍累々である。

そして彼等は劇壇を少しでも明るくしたか、東京の大劇場のどこかの一座でも占領することが出來たかと云ふと、彼等は大劇場はおろか興行劇場のどんな小さい一つをさへ自分のものにはしてゐないのである。

築地小劇場の如き、新劇運動の最後の希望のやうであつたが、最近の狀態では、多く期待することは出來ないやうである。われわれに云はしむれば、新劇の天下も亦永遠に來ないのではないかと思ふ。

それには、現代劇を書く偉大なる作家が居ないことなども、有力な原因だらうが、日本の觀劇民衆が、保守的で歌舞伎に對する惰性的執着から脫けないのである。しかし、新劇が歌舞伎を斃さんとして尙五年も十年もかゝつてゐる中に、演劇に對する共通の大敵たる映畫とかレヴユーなどが、新しい民衆の支持を得て、勃興して來るのではないかと考へてゐる。

新國劇

現代劇の搖籃から出て、少しは邪道に走しつたけれども、とにかく興行劇場に目ざましく進出をなしたのは亡き澤田正二郎の新國劇であつた。その演技のテムポに、その臺辭廻しに、たしかに現代的な要素を持つてゐたと思ふ。その意味で歌舞伎に對する一敵國であつたと思ふ。その民衆的後援の點に於ても歌舞伎役者の心膽を寒からしむるものがあつたと思

ふ。その脚本の選み方に於ても、最も現代生活と交渉があつたと思ふ。歌舞伎芝居に取つて代るものでなかつたとしても、たしかに之れを脅かした存在だつたと思ふ。しかし、澤田なき後の新國劇がどうなるか。新國劇の特色が結局が澤田の個人の特色であつたことを考へると、多くの期待は持てないが、然し新國劇創始當時に比ぶれば、現在の新國劇は遙に惠まれた境遇にあるのだから、女王無くとも猶興るの意氣を以て、更生しないとも限らないと僕は思つてゐる。

曾我廼家五郎

僕は、曾我廼家びゐきである。曾我廼家の芝居の世界も、因習的で安價な道德劇に終始してゐるが、しかしその舞臺に現はれてゐる生活人情に於ては、現代生活に最もよくふれてゐると思ふ。最もよく日常生活にふれてゐると思ふ。普通人の見物は、曾我廼家を見ることに依つて、一番よく自分達の生活を反省されることゝ思ふ。また曾我廼家五郎は、脚本家としても岡本綺堂氏に次ぐ位の手腕があると僕は思つてゐる。近時曾我廼家の見物に漸次知識階級が殖えてゆき、市村座の如き不利の劇場に立ちこもりながら、尻ばねのする如き景氣を見せてゐるのは、義理や惰性や見榮で芝居を見ない連中は期せずして曾我廼家に集つてゐるのではないかと思ふ。

寶塚少女歌劇

レヴユーモンパリその他が、多少令女界的ではあつたと云へ、ある新しい形式美と情緒とを日本の劇場に創り出したことは、たしかであると思ふ。僕は、彼等が少女から、ほんたうの女性に成熟したとき、これに男優を交へてもつと、大人向きのレヴユーを創り出したならば、日本の劇場に新しいセンセイションを起しはしないかと思つてゐる。

優になるとか金が出來るかして、それぞれ片がつけば、新派劇などは無くなるものだらうと僕は思つてゐる。

新劇

新劇乃至現代劇と云ふものが、歌舞伎を倒して、次ぎの天下を取ると云ふことは、もう夢になつてしまつた。二十年來いかに多くの新劇運動が起り、そしてその凡てが失敗したことか、新劇の不俱戴天の仇たる歌舞伎は少しも衰へてゐないのだが新劇の方は死屍累々である。

そして彼等は劇壇を少しでも明るくしたか、東京の大劇場のどこかの一座でも占領することが出來たかと云ふと、彼等は大劇場はおろか興行劇場のどんな小さい一つをさへ自分のものにはしてゐないのである。

築地小劇場の如き、新劇運動の最後の希望のやうであつたが、最近の狀態では、多く期待することは出來ないやうである。われわれに云はしむれば、新劇の天下も亦永遠に來ないのではないかと思ふ。

それには、現代劇を書く偉大なる作家が居ないことなども、有力な原因だらうが、日本の觀劇民衆が、保守的で歌舞伎に對する惰性的執着から脫けないのである。しかし、新劇が歌舞伎を斃さんとして尙五年も十年もかゝつてゐる中に、演劇に對する共通の大敵たる映畫とかレヴユーなどが、新しい民衆の支持を得て、勃興して來るのではないかと考へてゐる。

新國劇

現代劇の搖籃から出て、少しは邪道に走しつたけれども、とにかく興行劇場に目ざましく進出をなしたのは亡き澤田正二郞の新國劇であつた。その演技のテムポに、その臺辭廻しに、たしかに現代的な要素を持つてゐたと思ふ。その意味で歌舞伎に對する一敵國であつたと思ふ。その民衆的後援の點に於ても歌舞伎役者の心膽を寒からしむるものがあつたと思

ふ。その脚本の選み方に於ても、最も現代生活と交渉があつたと思ふ。歌舞伎芝居に取つて代るものではなかつたとしても、たしかに之れを脅かした存在だつたと思ふ。しかし、澤田なき後の新國劇がどうなるか。新國劇の特色が結局が澤田の個人の特色であつたことを考へると、多くの期待は持てないが、然し新國劇創始當時に比ぶれば、現在の新國劇は遙に恵まれた境遇にあるのだから、女王無くとも猶興るの意氣を以て、更生しないとも限らないと僕は思つてゐる。

曾我廼家五郎

僕は、曾我廼家びゐきである。曾我廼家の芝居の世界も、因習的で安價な道徳劇に終始してゐるが、しかしその舞臺に現はれてゐる生活人情に於ては、現代生活に最もよくふれてゐると思ふ。最もよく日常生活にふれてゐると思ふ。普通人の見物は、曾我廼家を見ることに依つて、一番よく自分達の生活を反省されること丶思ふ。また曾我廼家五郎は、脚本家としても岡本綺堂氏に次ぐ位の手腕があると僕は思つてゐる。近時曾我廼家の見物に漸次知識階級が殖えてゆき、市村座の如き不利の劇場に立ちこもりながら、尻ばねのする如き景氣を見せてゐるのは、義理や惰性や見榮で芝居を見ない連中は期せずして曾我廼家に集つてゐるのではないかと思ふ。

寶塚少女歌劇

レヴユーモンパリその他が、多少令女界的ではあつたと云へ、ある新しい形式美と情緒とを日本の劇場に創り出したことは、たしかであると思ふ。僕は、彼等が少女から、ほんたうの女性に成熟したとき、これに男優を交へてもつと、大人向きのレヴユーを創り出したならば、日本の劇場に新しいセンセイションを起しはしないかと思つてゐる。

レヴュー

レヴューは、今まだ流行小唄と同じ程度に低級で卑俗である。然し近代人の感覺と退屈病とが、演劇の如き思考や判断を要求せらるゝものから、もつと刺戟的で官能的なるものに移りかけてゐることはたしかである。活動寫眞と演劇とに飽きた民衆は必ず、享樂的な官能的な、ヴォドヴヰルなりレヴューなりに集まつて來ると思ふ。

もう、さうした傾向が、歌舞伎芝居にまで、現はれかけてゐることは、滑稽である。

僕は、演劇が衰へ、レヴューが盛んになることを、謳歌するものではない。僕はより文學と交渉のある演劇の盛んなることを祈るものであるが、しかし現在の如き歌舞伎芝居が、面白くなく、新劇が不振で、殆ど劇場が我々にとつて、何の興味でもなくなつて來ると、いつそいゝレヴューでもあつた方がましだと云ふ氣がするのである。日本婦人の中に漸く現れかけた均齊のとれた美しい多くの女性を集め、それを音樂と照明との間に排列亂舞せしめて、新しい美と感覺との陶醉境を作つてくれた方が、この頃のやうな下らない演劇界より、どれだけ人助けだか分らないと思はれるのである。

田中内閣の清算と濱口内閣への批判

濱口内閣への翹望

杉山幹

無理非道の横車を押して、政權にかぢりつかうとした田中内閣が無慘の最期をとげて、意外にもろく瓦壞したのは、國民大多數の痛快に感ずるところであらう。

これと同時に、後繼内閣組織の大命が、憲政の常道によつて一路、衆議院の第二黨たる民政黨の濱口總裁に降下し、その間いはゆる政權もち廻りの演ぜられなかつたのは、わが憲政發達のために大いに喜ぶべきことゝいはねばならぬ。從來、政變のある毎に、政黨に根據のない官僚、軍閥の徒輩をかついで、超然内閣組織の陰謀をたくらむものが絶えなかつた。そして國民また暗にこれを認許するの風があつた。現に最近政黨政治の弊害の顯著なるや、實業界の人々を初めとし、かなり有識階級の人々の間にも、總選擧の公正を期せんがために、超然内閣を成立せしめてはどうかとか、或は金の解禁は政黨政派を超越した國家の重大問題で、しかも今日の政黨者にこの難關をうまく切拔けるの決意と、能力と、信用とを有するものがないから、天下有爲の政治家を網羅して、金解禁のため聯立内閣を組織せしめてはどうか、など、暗に超然内閣歡迎の意見を有するものが少くなかつたのである。今回の政變に際しても、宇垣をかつぎ床次に追從したものもあつたやうではあるが、輿論の大勢は最早や彼等の成功を許さず、清浦内閣を最後として、わが憲政史上に超然内閣の影をたち、二大政黨對立の責任内閣制が確立されむとするに至つたのは憲政の一大進歩といふべきである。

今度の政變で國民の與へられた一大教訓は、政黨が、時勢を無視した政策をかゝげ、國民を欺瞞せんとしても、やがてはその政策が行詰り、遂に破滅の運命に逢着するといふことである。引續く不景氣につ

ぐ大震災、金融恐慌等のあつた經濟困難時に處する策は、たとひ金解禁の問題はなくとも、何を措いても先づ公私經濟の大緊縮方針を固持し、大いに民心を作興して、國民に難局打開の大決心をなさしむることの急務なるは識者の一致した見解である。しかるに田中內閣は、何の見るところあつてか、いはゆる積極政策、產業立國などいふ、實に空漠雲をつかむが如き時代錯誤の政策をかゝげ、もつて永年の不景氣に飽いた民心に投ぜんとした。しかして田中內閣は、啻にこれを口に主張したばかりでなく、疲勞困憊の極に達したわが國民經濟の實狀をも顧みず、これを實行し、または實施せんとしたのである。租讓案、自作農案、肥料管理法案の如きは、幸に前議會において握りつぶされ、その實施を免れたけれども、鐵道、道路、河川、築港、電話等の地方の黨勢擴張と密接の關係ある土木事業に對し、放漫無謀の經費を計上し、ために本年度豫算は十七億七千萬圓といふ實に空前の大膨張を來し、國債はために激增して、昨年度のみにてその增額四億餘萬圓に上り、本年度中には國債總額六十億圓を突破せんとしてゐるのである。これは單に國の公債だけであるが、地方債の激增は更に甚しきものである。

しかるに國民經濟の現狀を見るに、皮肉にも產業立國を主張した內閣の下において、商工業の不振は益々甚だしく、失業者は激增して就職難の聲喧しく、本春各大學を卒業した學生の七割は、今尙ほ職を得ずして空しく悶々の不平を懷いて都會に遊んでゐる。地方農村においては、連年の農產物價の低落と負擔の過重のために、今や極度に疲弊し、ために近來國稅、地方稅の滯納著しく增加し、地方自治體のうちには吏員の給料すら支拂えず、財政破綻に瀕して居るもの少からざる實狀である。かゝる國民經濟の現狀において、徒らに中央、地方政府の經費を膨張せしむる、いはゆる積極政策をもつて、產業の興隆を期するべからざるは火を睹るよりも明かにして、既にわが國民は大正八九年以來、常に苦き經驗を嘗めた筈なるにも拘はらず、國民一般の財政經濟上に無智なるに乘じて、遂に再び彼等に欺かるるに至つた。けれども今や田中內閣の政策の破滅は餘りに顯著に國民の前に展開された。政友會自體においてすら金解禁の準備に藉口して、その傳統政策たる積極政策を緊縮整理の消極政策に看板の塗替の急務なるを主張するに至つた。歐米の先進國ならば、この一事をもつて內閣は瓦壞するの當然であるけれども、田中內閣は最後まで橫車を押し、表面上は今回の政變も、政策の行詰りによつて責任を負うた形でなく、他の事件によつて辭職したことゝなつて居るけれども事實は、不戰條約問題なくとも、某重大事件なくも、田中內閣の生命はその積極政策の行詰りにより滅失して居つたと見るべきである。さればこそ、田中內閣の瓦壞は政府監督の下にある特殊銀行當局や、株式市場においてまで寧ろ大いに喜ばれ、前代未聞の不人氣なる內閣として終始するに至つたのである。畢竟するに、これ田中內閣は時勢の變化を顧みず、原總裁以來の政友會の傳統的政策にとらはれたるの致すところといはねばならぬ。

民政黨總裁濱口雄幸氏が、大命を拜して僅かに五時間にして內閣組織を終り、國家財政の大緊縮政策をとり、金解禁の斷行を天下に聲明

したのは、今日の時世に處する當然の處置といふべきだが、常道を常道として踏みはづさなかつたといふことは、計らずも中外の好評を博するに至つた。といふのも、これを一面から觀察すれば、前内閣の失政に失望し、國民は田中内閣の存續する限り、金の解禁も、景氣の回復も絶望なりとし、放漫政策の更改を翹望したる餘り、新内閣の出現を歡迎したものであつて、必ずしも民政黨に對する中外の信望が重加したものと解するのは早計である。言をかへていへば、今日民政黨内閣の頗る好感をもつて迎えられたのは、田中内閣の失政の影響であつて、好人氣の大半は失政内閣瓦壞の悦びで、民政内閣に對する國民の信望の如何は今後の行績によつて決せらるゝのである。民政黨はその前身憲政會以來、政友會の積極政策に對して、常に財政の緊縮政理を主張して來た。しかも過去十數年間、わが國の政權は多く政友會がこれを把握し、民政黨(憲政會)は多く在野黨として政府の放漫を責め立てるの地位にあつたので、その緊縮政策の主張も兎角在野黨の常用語として聞き流され、責任の地位に立たば、その主張も實現さるゝものではないと評するものもあつたが、不幸にしてこの批評は的中した。政友會に代つて憲政會が内閣を組織するも、年々國家財政の膨張は止まなかつたばかりでなく、若槻内閣の晩年政界の形勢議會解散の止むなき情勢となるや、俄かに黨勢擴張のために無用不急の事業を計上し、ために、片岡藏相の下に編成された昭和二年度豫算は十七億五千萬圓といふ、實に當時における空前の大膨張豫算として國民の非難を蒙りたることは一般の記憶に新たなるところである。當時識者はこれをもつて憲政會内閣が國民に公約したる緊縮政策の破滅となし、若槻内閣の存立の意義は茲に全く沒却されたものと解したのである。されば若槻内閣は、片岡藏相の議會における失言に端を發した金融恐慌が因となつて樞密院の彈劾によつて、總辭職するの止むなきに至つたことになつてはゐるが事實においては公約に反して緊縮政策の放棄を敢てした時に國民の信望を失しその生命はなかつたのである。即ち田中内閣は積極政策の行詰りによつて、たとひ不戰條約問題や某重大事件の暗礁にのり上げずとも、内閣崩壞の運命が既に定まつて居つたのと同樣である。

濱口内閣の運命を決すべきは、亦同じく國民に公約した政策の實行如何にあるといはねばならぬ。濱口氏はその年來の主張を實行するに最も好都合の時機に際會した。田中内閣の失政によつて、國民の多數はいはゆる積極政策によつて經濟國難の時局收拾の不可能なるを痛感した。金の解禁を斷行せざれば、眞の景氣回復の絶望なるを覺りつゝある。されば濱口内閣は組閣早々、金解禁のために財政の大緊縮整理を斷行するの決意を聲明したのは、頗る時宜に適した方策といふべく、それだけその實行の責任は重大なわけである。

歐米の諸邦においては、官民協力して經濟の建直しに努力し、今や漸く國民經濟の基礎は確立して景氣回復の途上にある。英米兩國の財政は戰後著しく緊縮整理せられ、これを大正三年を百とする指數をもつて示せば、英國は大正六年は最も膨張して四八一となり、昭和二年度には一五〇に縮小された。米國も亦大正七年の最膨張指數一九七九より昭和二年には四六九に大縮減をなしてゐる。即ち英國は戰時中の

最膨張財政の三分の一に縮小し、米國は四分の一に縮小した。しかも兩國においては國民負擔の輕減と國債の整理に全力を注ぎ、これがために兩國の國債總額は著しく減少し、大正十年に米國の國債は二百四十三億餘萬弗に上つたもの昭和三年には百七十五億餘萬弗に減じ、英國はまた大正十二年末の七十八億磅から昭和三年末には七十六億磅に減少してゐる。しかして兩國の物價は順調に引下げられて生活費を低減して生産費を低下し、産業の基礎を固め、貿易は年々著しい發展を遂げつゝある。しかるに、わが國においては歐戰以來未だ一回も國家財政の縮減を見たることなく、膨脹につぐに膨脹をもつて遂に今日に至つた。しかして財界の不況は年一年と深刻となり、膨脹豫算の收支の辻褄を合するに困難なるより公債財源に依頼し、ために國債の總額は激増して、その市價は暴落し、財政の基礎は危險に頻しつゝある。物價の低落は捗々しからず、國民生活はために不安に陥り、生産費の低下至難にして産業の基礎薄弱となり、貿易は不振にして國際收支は支拂超過年を逐うて增加し、ために在外正貨は激減して、今や政府一ヶ年の對外支拂にすら不足するの現狀である。しかも政府は金の解禁を躊躇し居るをもつて對外爲替は動搖常なく商取引はために非常の不安に陥りつゝある。しかしてこの難局を打開するの途は、思ひ切つて財政の緊縮を斷行して公私經濟の緊縮整理を促進し、一時も早く金の解禁を行うて、わが國民經濟を常態に復せしめ、物價を引下げ、生活費並に生産費の低下をはかり、もつて對外的競爭力を强うすると共に、人心の安定を欲せねばならぬ。濱口氏は從來在野時代に大體これを主張したところであるから、今回内閣を組織したる上は直にこれを實行する責任のあり、しかして濱口内閣の運命は一にこれが實行の行績如何により左右さるゝものといはねばならぬ。(四、七、六)

朦朧政府をしりへに

藤井悌

一

石に嚙りついてでも藥に縋りついてでも仆れまいとして跪き蹌いた田中内閣も遂に仆れて、民衆をしてヤレ／＼と息をつかした。單に物理的の力、つまりどんな方法によつてでも掻き集めた議員の頭數の大いさだけによつて其存在を保つてゐる政黨として、又この頭數が權勢を濫用し權益を壟斷する事によつてのみ保たれてゐる政黨として、又これはまことに餘儀ないことであつたかも知れない。田中内閣が既に國民の信望――その存在許容の忍耐を失つてしまつたことは、昨年二月の總選擧に於て明かに示されてゐた。また國政を指導する道德的自信力を全然持ち合せてゐなかつたことも、あの選擧に於ける闘爭を通じて暴露されてゐた。然るに其後第五十四議會に於てもあらゆる批政を殆ど完膚なき迄に剔抉され、時に田中内閣の著しい一特徵をなしてゐ

た不當人事行政に綜んで内部の醜状を曝け出し遂に優諚問題までも惹き起して問責決議をつきつけられ、重要法案は殆んど總て握り潰され、この間に於て總辭職を決行すべき機會且つしなければならぬ時機は屢々あつたのである。然るに今日まで強ひて餘喘を保ち、遂に近來殆んど類例のない醜い野たれ死を遂げたのは、偏に彼等が民心を意識的に無視し侮蔑して來たがためである。而も與黨側では、田中首相其の他二三子の政治的良心、及び理性の痲痺から生ずる放心的頑冥を却つて竊かに或る痛快さを以て頼もしがつてゐたかの如く見えるのは、まことに淺ましい極みであつた。今回の政變が直接に議會を通じて行はれず、元老や宮中の微妙な態度がその動因をなしたことは餘り愉快なことではない。然しながら田中内閣は、滿洲事件の如き重大責任問題を惹き起して置きながら、且つ國民の間には此の問題に就きさまざまの噂を生んで半ば其の眞相が知れ渡り半ば深い疑惑と不安とが醸されてゐるに拘らず、議會に於ける反對黨の質問に對しては言を左右にして明確なる答辯を避け、逆まに與黨の言論機關や其の他によつて、事苟も外交に關するの故を以て反對黨及び國民の口を緘せしめんと試みたのである。そして恰も此の事件が、たとへ議會以外の勢力の手を通じても政變の直接原因となつたことは、實質的政策に關しない問題を陰謀的に利用して政變を作爲した場合よりは遙かに宜い。從來我が政界には二つの呪文的題目があつて、どんな柄を掲げてでも『國體』と『外交』とに結びつけさへすれば、何時でも反對者の言論を封ずることができた。これは無産階級に於ける『ブルジユワ的』『非階級的』等の呪文的題目と共に一種の言論上の勢力を成してゐたものである。

それにしても總辭職が決定してから後尚は新黨クラブ其の他の一部の策士が、單に政權を反對黨たる民政黨に渡さざらんが爲めにのみ反民政聯盟を作らうとして狂奔し、それがために辭表提出の期日を數日遲らせようといふやうな小細工まで弄して、民衆の面前に於て厚かましい猿芝居を試みたことは何といふ厭らしいことであつたらう。大體この一派にこそ、疾くにも崩壞すべかりし田中内閣を今日まで一寸延びに延びさせて、半年近くも國民をして不利益と不愉快とを忍ばせた責任があるのである。政治を惡弄するも彼等に至つて極まつてゐると言はなければならない。

然しながら床次一黨がせつぱ詰つて政友會に復歸したことは、政界に於ける不愉快な中間存在物が消滅したといふ一事だけでもいくらか人心を輕くする。

二

然しながら今回の政變に就いて私共が特に興味を感ずることは、我國に於ける反動運動が遂に民衆に一たびも受け容れられないまゝ下り坂に向つたといふ點にある。由來政友會が我國に於ける極右保守黨であることは言ふまでもないが、近年世界を風靡したところの反動思想反動運動に依つて力づけられ、我國大資本閥の意識的反動化に刺衝されて、田中内閣成立以來その反動的色彩は加速度を以て濃厚となつたのであつた。彼等は二年餘の間正常なる行政を事毎に停滯せしめ、そ

の自ら目ろんだ重要なる政策は殆んど一つも遂行することができなかつたにも拘はらず、たゞ一つ社會運動だけは徹底的に斷禁した。いはゆる共産黨運動の取締りはこゝでは別問題として、廣範圍に於ける前進的運動に對して露骨なる敵意を示し、一方反動的運動に關しては、不穩な言論は勿論暴行や犯罪に對してさへも殊更に寛容であるかの如き感を抱かしめた。田中總裁がムッソリニを以て任じてゐるかのやうな印象を與へるのは單に微苦笑ものであるが、田中内閣の續く限り、たとへ蕪雜無力のものであらうとも反動的運動が跋扈して、民衆の頭上にうるさく鬱陶しい陰を作るであらうことは疑はれない。殊に一部策士の待望したやうに、田中内閣の代りに政友會を與黨とするいはゆる强大なる中間巨頭内閣を現出せしめることが成功したならば、擬似ファッシスト・レヂムは一時なりとも現出したかも知れない。それにしても中間内閣といふやうな朦朧政府が(中間朦朧政黨と共に)最早誰にも相手にされなくなつたことは、とにかく政治の一進歩として慶賀しなければならない。

一方海外の情勢をみれば、約十年の間反動的政黨や反動團體が跳梁してゐたドイツに於ても、社會民主黨は其の背負はされてゐるあらゆる不利益なる條件にも拘はらず、昨年五月の總選擧に於て久し振りに勢力を恢復して同黨中心の内閣を組織し、引續きフランスの總選擧に於ても社會黨諸派が優勢となり、またイギリスに於ては、四年の間絕對多數黨たる保守黨の反動政策の下に惱まされて來た勞働黨が、去る五月の總選擧に於て殆んど半數に近い頭數を占めて第一黨となり、前回に比べて遙かに基礎の强固な内閣を組織した。とにかくヨーロッパに於ける最も强大なる二つの資本主義國に於て、無産者政黨の政府又は之を中心とする政府が此の一年の間に樹立されたのである。其の他諸種の情勢から考へてみて、今や世界に於ける强大なる國民はほゞ最近の大反動の波濤を泳ぎ切り、今なほ反動的專制の下に屈服してゐるのはスペーン、ハンガリー等の如き弱小國民か、自立力が無くて他の强大國の帝國主義的政策の道具となつてゐるポーランドのやうな國か、又は大國ではあつてもイタリヤのやうに其の國民に批判力・自律力・自發的統一力の乏しい國民に限られてゐる。

我國に於てファッシスト運動がたとへ一たび成立しても到底成功しないであらうことは、嘗て私はいろ／＼の機會に於て指摘して來たが、そのことは、政友會内閣が（軍閥・藩官僚・及大資本閥の巨頭の一部と共に）あらゆる方法を以て反動的傾向を助成し來つたにも拘はらず、笛吹くものも踊るものも共に樂屋内のみに止まつて大衆はこれと風馬牛であつたこと、地方に於ける選擧毎に無産政黨が著しく進出し、他年磐石の如く動かなかつた保守派の傳統的地盤が次ぎ／＼に脆くも崩壞すること、などに於ても之を認めることができる。從うて反動政府の存續は、到底堰き止め得べきでない社會進化の道程に無意味な混亂と歪曲とを與へ、結局全國民の負擔に歸すべき精力の浪費を强ひることに過ぎない。

三

民政黨も同じく既成有產者政黨として、政友會と交互に過誤を重ねつゝ今日まで政局を保つて來たものであつて、我國をして外交上にも經濟・產業・社會上の諸關係に於ても今日の如き深刻な行詰りの境地に陷れた點に於て共同の責任者であることは言ふまでもない。今日濱口內閣が比較的好感を以て迎へられるのは、寧ろ前內閣に對する極度の不信、嫌厭の反影であると見るべきであつて、決して民政黨の無反省な自負を容すものではない。然しながら今日我國の情勢に於て直ちに無產者政黨の直接有效なる政治的影響を期待することができない以上、とにかくあゝまで露骨無恥に黨利を事とし、公器を私し、社會の進化に無理解であつた反動的政府よりは、多少なりとも進步的な明るい政府の方が望ましいと言はなければならない。

民政黨は政局に於ける勢力變動上の立場に於ては イギリスの勞働黨に比すべきものであつて、イギリス自由黨はその曖昧な機會主義的な荷厄介な立場から見て寧ろ我が革新黨クラブに似てゐるのであるが、その掲げてゐる政綱政策から見れば 我が民政黨はイギリス自由黨に甚だ似てゐる。從うて個々の政策に就いては少くとも右翼無產黨の支持を受ける可能性がある。組閣後の具體的政策(八大政策)は今日(七月九日)の新聞紙で始めて發表されたものであつて、それは卽時實行に着手すべき且つ遂行を必期するもののみを摘み上げたからでもあらうが立黨當初に發表した政策綱領や、去る五月十三日に既定政策具體化に關する特別委員會で決定したと言はれる『九大政策』の項目に比して遙かに無鬪爭現實可能的である。然しながら同黨が立黨の際に定めた政綱は既成政黨としてはかなり明確な進步的なものであつて、この點が知識階級乃至小ブルヂョア層の好感を得た點であり、同時にまた保守乃至反動側から猛烈な攻擊を浴びせられた點であつた。そしてその後長く野黨であつた同黨が保守化すべき理由もなく、また同黨內の保守的分子は途中で脫落し去つたのであるから、理論上當初の政綱は今なほ同黨の誠實なる方針を示したものと見なければならない。ゆゑに今日及び今後の具體的政策の意義もこの基本政綱に照してこれを解釋すべきものであらう。

右の基本政綱は第一に議會中心政治の徹底と立法行政上に於ける時代錯誤の陋習の打破とを高唱して保守・反動・專制的政治を否定し、第二に生產の國家的調整と分配の公平とを主張して 經濟上の自由放任主義を否認してゐる。してみれば少くとも法制及び行政特に文政・警察・取締・取扱等諸他の方面に浸潤してゐる 反動的空氣を一掃して民心を輕く朗らかにして、前進的思想及び運動を公明に發展し得しめるやうにすることは、濱口內閣の重要な使命の一つでなければならぬ。

當面の具體的政策として第一には金解禁を中心として、財政的緊縮國民消費の節約等を圖り、これが爲めには一時的に一層不景氣とたつても餘儀なしとするものの如くであるが、これは今日の如き惡性の經濟的危機に際しては已むを得ないことであらう。眼前の景氣を僞造する政策が其の都度將來の禍根を育てて來た過去の苦しい經驗は 繰り返してはならない。

第二の外交問題に就いては紙面に限りがあるから爰には述べない。

第三の社會政策は民政黨が憲政會時代から多年その特色の一つとして高唱し來つたところであるが、各種消費稅及關稅の改正（輕減又は撤廢）、失業救濟等に就いては當然のこととして別段論じないことにする。たゞ今度の『八大政策』に於て全然默殺されてゐる各種の社會立法、中んづく勞働組合法及び小作法は是非とも濱口內閣に於てこれを適切に制定する必要がある。勞働組合法に就いては民政黨及び其前身たる憲政會は常に他の諸政黨よりも一步先んじた態度を示して來た。憲政會は大正九年第四十四議會に、大正十一年第四十五議會に、大正十二年第四十六議會に三たび勞働組合法案を提出して孰れも審議未了に終つたが、その內容は其の時々に於ける有產者政黨の提案としては比較的妥當なものであつたと言ふことができる。また大正十四年加藤內閣の下に社會局案なるものが非公式に發表され、その內容は今日まで現れた諸案の中では最も進步的のものであつたが、行政調査會の手にかゝつたり種々の經緯があつた結果多少骨拔きになつた形で翌年若槻內閣によつて第五十一議會に提案せられ、これ亦審議未了に終つた。勞働組合法と小作法との制定が今日の際切實に必要であることは今更論ずるまでもない。濱口內閣はその從來の一貫した態度に照しても必ずこの問題を解決する義務がある。

なほ第五十六議會に前內閣によつて提案されて審議未了に終つた小選擧區制案――無產政黨窒息案――が濱口內閣の出現によつて闇から闇に葬られてしまふ運命となるならばまことに幸である。

濱口首相は正直で責任を重ずる政治家だと言はれてゐる。また彼は講談本ばかりを讀む人ではなく眞面目に時代の思潮や國勢を研究してゐる人だと言はれる。閣僚や政務官の顏觸れをみても平常に於て極めて進步的な意見を發表してゐた人々が少くない。また政友會內閣に於ては閣僚中數人の大實業家がゐてこちたき感を與へたが、こゝにはこの種の人が一人もゐないのも何となくすがすがしい。組閣當初の國民の期待を裏切らないやうに努力せられんことを切望してやまない。

新舊兩勢力の展望

石濱知行

一

政友會內閣崩壞の後、政權が民政黨に移動して濱口內閣が組閣されるに至つた經過については、立憲制度の常道といふ理由から一般の評判は良好らしい。しかし、二大政黨主義による政權の移動といふことは、その二大政黨が、實質上非常に異なれる基礎の上に立ち、全く異なれる指導意見によつて動いてゐる場合には、有意義であらう。例へば有產黨と無產黨とが、異なれる基礎の上に立つて對立せる場合の如きである。ところが、その成立の基礎は根本的には同じで、ただ政見に多少の色彩の相違あるにすぎない。二つの政黨が對立して抗爭する

場合には、政權がそのうちの一の政黨から他の政黨に移動するといふことは、政權病の政黨員を滿足させるためとか、飽いた人心をやゝ新にするとかいふ效果以外に、大きい立場から見ての政治上の進歩とか、社會進化の發展とかいふ方面に於ける效果はあまり考へられない。政友會と民政黨が、今日の日本に於いて等しくブルジョア政黨であり、『金融資本の使徒たる點に於いて本質的に何等相違のない』（日本大衆黨五日の決議）政黨であることは、この兩政黨が背後に擁ひ、それを支配する日本の財閥との關係を見れば頗る明瞭である。この兩政黨の黨爭は日本の大衆の利益のための黨爭ではなくして、結局するところ、それらの政黨を經濟上操縱する財閥間の覇權掌握の鬪爭にすぎない。友人小島精一君近頃著すところの著書『日本金融資本論』によれば、日本の產業の大部分は、三井、三菱、住友、安田、第一等の銀行の統制のうちに握られてゐる。而して、茲に崩壞した田中內閣の顏觸を見ても、以上のフキナンシャーとの背後の關係は頗る明瞭である。資本主義經濟組織のもとにある我日本に於いて、しかも政權を採るがためにはしかしてそれを維持するがためには多大の金を必要とするが如き日本に於いては、政黨が金權との關係なくしては、金權の庇護なくしては——といふことは、反面から言へば內外の政策を實行するに當つては金權の利益を考へずしては——成立し、存續し能はざることは頗る明白である。

だから、その點から言へば、政友會內閣が民政黨內閣に代位したからと言つて乃ち本質に於いてはあまり變らない。二大政黨の間に立憲制度の常道の原則に從つて政權の移動が行はれたと言つても、あまり大なることを期待するといふことは誤りである。社會民衆黨は三日發したるその聲明書に於いて、『未曾有の反動政治を發揮したる田中內閣が遂に倒壞したることは倒閣に直進し來つた我等無產階級にとつてあらしを破つて晴天を仰いだ感がある』と言つてゐる。しかし、田中內閣の倒壞をもつて『あらし』はやむであらうか。輝かしい太陽の洽く『晴天を仰ぎ』うるであらうか。それは大なる疑問でなければならない。この疑問は單に日本無產階級に對する政策についてのみではない。その對外的政策、殊に對支政策に於いても同樣に疑問である。その點に於いて、北平の京報紙の論說はある點に於いて正當である。曰く『幣原外交なるものは吾人の比較的歡迎する一名詞であるが、その實際は、要するに比較的穩和的手段をとるといふに過ぎないものである。日本の對支根本方針は以來傳統的なものがあるから內閣が變つたからといつて容易に變更しまい、この點は吾人の徹底的に認識して置かねばならぬところで、吾人は、第一に日本が帝國主義者であることを强記し……云々』

二

倒壞した政友會內閣が、世界の資本の攻勢の勢に乘じて、空前の反動的政治を行つたことは、極右の人達を除いて、一般社會人の認容するところである。一般社會運動に對する過度の壓迫、出版集會に對する過度の威嚇、それらは、むろしテロリズムの政治を思はせるものがあつ

た。しかし、か丶るすべての道を封じた彈壓政策は果して成功したであらうか。むしろその反對である。政友會内閣のもとに行はれた國會選擧、地方自治體の選擧の結果は無產黨議員の進出を證據立てた。無產階級はもとより一般社會人をして資本主義とはいかなるものなるかを明瞭に覺らしめた。無產階級はむしろ一層の憤激心を强め、階級的意識にめざめた。その彈壓政策によつて大學、專門學校を出された青年は全國に散つて運動の陣營を固めた。プロレタリア藝術は文學美術演劇の各分野に亘つて既成の勢力と對立し鬪爭するに至つた。中間階級のものをして反資本主義的イデオロジストたらしめた。……

私は近頃二つの示唆に富む話しをきいた。その一は、ある無產政黨運動にたづさはつてゐる人から聞いたのであるが、商業使用人、俸給生活者、下級官吏、警官等の大部分は、無產黨に同情を有し、公然とは入黨は出來ないので。あらゆる機會に（例へば選擧、寄附募集、講演會等）於いて、無產黨に對する同情ある行爲をなしつつあるといふことである。このことは公然とは表面に現はれてゐないから、社會の人は知らないが、かなり一般に着實に、確固に行はれてゐる驚くべき事實である。

その二は、日本の代表的二大雜誌の募集してゐる創作の大部分は投稿者の男女を問はず、殆んどすべてがプロレタリア文學であるといふことである。

この二つの話しは、表面に現はれざる人達の動向がいづれに向つて動きつつありやを示唆する頗る興趣多き挿話であらう。

——かくの如きが、前内閣の彈壓政策の結果であつたのである。自らが最も好まざるものを、最もよく育て上げたといふ比喩的な皮肉の一例は、イソップ物語の作られた大昔ではなくして、昭和の時代に前内閣によつて示されたのである。田中義一は軍人でありながら、城を攻むるには一方をあけて置いて攻めようといふ孫子の兵法をすら知らなかつたのである。

三

政友會内閣に代つて成立した民政黨内閣は、從來のやり方から考へて、前内閣の採つた樣な馬鹿な反動政治はとらずして、や丶自由主義的な政策をとるであらうことは、大體、日本大衆黨や社會民衆黨の宣言の言ふが如くであらう。しかし、それにも一定の限界あることは忘れてはならぬ。なぜなら、民政黨も無產階級を代表する政黨ではなくして、金融資本と密接なる關係をもつ政黨であるからである。資本主義の發展の必然の歸結としてそれに應じて無產階級が漸次擡頭し來るべきものであり、これは人爲の單なる政策をもつてしては到底抑壓し得ざるものであるといふことは、か丶ることに全く無智だとしか思へない前内閣とちがつて、民政黨内閣は知つてゐるであらう。だが、一般民衆の爲めになつても、財閥の利益とならぬ時には、そこに政策には一定の限界がしかれるであらう。支那民衆のためになつても、日本財閥の利益と反する時には、對支政策には、一定の限界がしかれるであらう。民政黨の閣員は前内閣の閣員よりも、理智的であり、新時代

的であり、個人的には進歩主義的の人もすくなくない。しかし一度び政黨となり、内閣となつて、團體化した場合には、かゝる個人的なことは全く問題とならなくて、専らフキナンシヤーとの干係につれて動くであらうことは明らかであらう。

四

無産階級は、民政黨内閣の自由主義的政策を利用して、出來る丈廣い政治的自由を獲得せんとして戰ふであらう。今日世界の大勢たる社會民主々義の勢に乘じて社會民衆黨は勢づくであらう。それとともに無産黨的色彩、戰鬪的色彩はだんだんかげをひそめるであらう。極左黨たる新勞農黨は新内閣のもとに於いて結黨を計畫するであらう。それに對して民政黨内閣が如何なる策をとるか。けだし興味ある民政黨内閣の新社會運動政策への試金石であらう。こゝに於いて民政黨の自由主義が果して如何なるものであるかが明瞭となるであらう。この間にあつて、内訌たへまなく動揺も對資本家的黨爭よりも内紛に力を費消しつゝある中間派日本大衆黨が如何なる生存を續け、その左右兩翼といかなる關係を保ちつゝ活動するか、——けだし見ものであらう。しかしその中間派たる性質よりして大なる期待は出來ないであらう。

五

政友會内閣の倒壊と同時に、政新聯盟の中間内閣、コアリチオン内閣が計畫されたが、政權はかゝる變態的移動形態をとらずして民政黨にうつり、二大政黨主義が確立したといはれてゐる。もしこの二大政黨主義が今後の内閣交迭にも行はるゝとすれば、そしてまた無産階級の政權把握が當分不可能であるとするならば、無産階級が既成政黨の黨爭を使嗾してこの二大政黨間の政策の差異を大ならしむることも、無産階級進展のための一つの對既成政黨利用策として有效であらう。けだし、差異が大なれば大なる程、交迭毎に社會の進化がそれ丈急角度に行はれうるからである。

對支外交の立場から

大西齊

◇

濱口民政黨内閣の主要にして顯著なる特色は、幣原外交の復活せることを先づ數へなければならぬ。幣原外交の復活は、相當受けがよくいろ〳〵興味と期待とが繋かれてゐる。第一次幣原外交に眞向から楯を突き、それを粉碎することにかゝつた田中外交は、空粗にして亂暴なる積極政策のために散々失敗し、一時日支關係を破綻狀態に陷れたが、その末期には流石の田中外交も尻尾を捲き、ある程度その立て直しと整理に取かゝつた。田中外交のために、日支關係は嘗て無い惡

な時代を經驗し、日本としてどの位馬鹿な犠牲を拂つたか。その田中外交に幣原外交が代はつたことは、欝陶しい氣持ちから開放されたすがすがしい感じである。併し、幣原外交の前途を樂觀していゝかどうかといへば問題で、幣原外交が田中外交の置土産に善處すべき使命を課題として、評判ごけに終はらず日支關係の上にその實踐的効果をどう示すかが興味ある試練として提供される。

◇

外交修理として幣原外交は、田中外交を壓倒する長所を持つてゐる。田中外交は聰明の問題としては、時代錯誤であり、破産的であつた。幣原外交に於ては、强く時代の感覺を全神經に感じてゐるが、田中外交はその點全く無神經であり、零であつた。幣原外交は平和的紳士的で上品である代り、毅魄の足らぬ感じを與へ、軟弱外交の譏りを免かれなかつた。幣原外交を慊らぬものとして、世間のある部分が强い反感を持つたのは、このためであつた。軟弱と見られた幣原外交の後に、强硬外交を看板とする田中外交の我武者羅なところが、一部の氣に入つた譯であるが、田中外交の强硬政策なるものもブラフ以上の何ものでもなく、全く支離滅裂なものであつた。流石に田中外交を謳歌した者も田中外交の狼藉振りには愛憎を盡かした。併し、これは田中强硬外交の不徹底振に失望した迄で、幣原外交を歡迎するといふ意味では斷じて無い。

◇

日本の對支外交は、大體に於いて、自由主義的色彩(霞ケ關)と帝國主義的色彩(軍部方面)との二元的相剋の歴史的事情を持續してゐる。幣原外交は、前者の代表的典型であり、田中外交は後者の傳統的典型であつた。第一次幣原外交は、序論に於いて躓き、まだ各論にも結論に這入らなかつた。幣原外交の復活の眞價は、第一次外交の未了の部分、——主として理論と實際との實踐としての問題に懸かつてゐる。田中外交は日本における後者の最終的典型として、存在の可能に對する餘地無き否定であり、致命的であることを遺憾なく立證した。併し、嚴正且つ公平なる見地に於いて、幣原外交と田中外交とを批判するならば、兩者の區別は、本質的のものでなく、方法論として手段としての懸隔である。先年特別關税會議において、幣原外交は支那の關税自主權に全幅の贊意を惜まない雅量を表したけれども、二厘五厘附加税の增徴に逢着すると、日本の現實なる利害に直面せざるを得なかつたのである。また滿洲の權益に對する認識において、田中外交の概念的であると幣原外交の法律的であるとは好個の對照を爲した。五十六議會における田中外相と幣原男との質問應答に依れば、田中外交は權益擁護の爲めには、權益範圍外の臨機の處置も妥當なるものとして これを斷行したのであるが、(對滿蒙治安維持の聲明とこれに伴ふ處置)幣原外交は、權益の範圍を犯されない限り、嚴正にこれを避くべきであるとの解釋を取つてゐる。この解釋の問題は、寧ろ田中外交の流儀で差支

へないと思ふが、田中外交の場合において困つたことは、範圍外の實置た取ると、そこにいろ／＼の國策の濫造や、愛國運動が單純なる動機から行はれた事で、田中内閣は、遂に滿洲某重大事件の警備問題を惹起し、内閣の瓦解を招く導因となつた。幣原外交に從へば、かゝる冒險と手落ちは避けられたに違ひない。併しこれとて、滿蒙の權益に對する認識の本質的相違でなく、擁護上の解釋とその手段としての懸隔的相違であつた。

◇

何れが日本の對支外交として正當且つ本筋であろかと云へば、云ふ迄もなく幣原外交で田中外交は全然なつてゐなかつた。幣原外交の得意の理論的根據に就いては、男自身の言葉をその儘引用すれば（昭和三年四月一日外交時報掲載）

一、支那の主權及び領土保全を尊重し、その內爭に就いては絶對不干渉主義を嚴守する。

二、兩國間に共存共榮の關係並に經濟的の提携を增進すること。

三、道理ある支那國民の要望に對しては、同情と好意を以てこれを迎へ、その實現に向つて協力すること。

四、支那の現狀に際しては及ぶ限り忍耐寬大の態度を取ると共に我が正當且つ重要なる權利利益は飽迄合理的手段を盡して擁護すること

といふ四原則がそれである。この原則は今回の場合においても、其儘踏襲さるゝであらう、だが、今日の問題は、最早や幣原外交の理論の把握としてでなく、その理論乃至原則を背景とし 幣原外交の實際把握が如何に示さるべきかといふことである。非幣原式外交を排撃してゐた田中外交も、最後の瞬間において、國民政府を承認し、これを唯一の相手として樽俎折衝する迄の變節改論振りと、その實行をある程度示したのである。幣原外交は田中外交の方向轉換に依つて、漸く軌道に上つた日支外交の正道を足場として、今後如何に確實に踏み出して行くかである。田中外交の當面しつゝあつた現實問題の困難な解決は、幣原外交の場合にも、同樣に困難であることが想像される。單に評判のいい事や、外交辭令の交換に依つて、解決さるゝと見るには、日支の利害は複雜であり、正反でもある。幣原外交の復活は、第一支那側にいゝ印象を與へ、列國にも歡迎されてゐるが、好評の先きに立つことは、實際問題の解決には、却つて邪魔となるかも知れないのである。國民政府の膝元にある民國日報を始め、北平の京報や新民國日報などが、田中外交に比して幣原外交を歡迎しつゝ、根本政策には大差なきものと見て、大いした期待を繫げないと論じてゐるのは、對內的懸引きもあるであらうが、幣原外交の立場を正視せる言葉として眞相を穿つてゐるといへよう。

◇

ところで、幣原外交の最初の試金石は、何よりも通商條約の改訂交渉である。國民政府は曩に芳澤公使に對して、二十三箇條の基本的要求を提示したと傳へられ、日本の希望するところとは非常の距離があ

な時代を經驗し、日本としてどの位馬鹿な犧牲を拂つたか。その田中外交に幣原外交が代はつたことは、鬱陶しい氣持ちから開放されたすがすがしい感じである。併し、幣原外交の前途を樂觀していゝかどうかといへば問題で、幣原外交が田中外交の置土産に善處すべき使命を課題として、評判だけに終はらず日支關係の上にその實踐的效果をどう示すかが興味ある試練として提供される。

◇

外交條理として幣原外交は、田中外交を壓倒する長所を持つてゐる。田中外交は聰明の問題としては、時代錯誤であり、破産的であつた。幣原外交に於ては、強く時代の感覺を全神經に感じてゐるが、田中外交はその點全く無神經であり、零であつた。幣原外交は平和的紳士的で上品である代り、膽魄の足らぬ感じを與へ、軟弱外交の譏りを免かれなかつた。幣原外交を慊たらぬものとして、世間のある部分が強い反感を持つたのは、このためであつた。軟弱と見られた幣原外交の後に、強硬外交を看板とする田中外交の我武者羅なところが、一部の氣に入つた譯であるが、田中外交の強硬政策なるものもブラフ以上の何ものでもなく、全く支離滅裂なものであつた。流石に田中外交を謳歌した者も田中外交の狼籍振りには愛想を盡かした。併し、これは田中強硬外交の不徹底振に失望した迄で、幣原外交を歡迎するといふ意味では斷じて無い。

◇

日本の對支外交は、大體に於いて、自由主義的色彩（霞ケ關）と帝國主義的色彩（軍部方面）との二元的相剋の歴史的事情を持續してゐる。幣原外交は、前者の代表的典型であり、田中外交は後者の傳統的典型であつた。第一次幣原外交は、序論に於いて躓き、まだ各論にも結論に這入らなかつた。幣原外交の復活の眞價は、第一次外交の未了の部分、——主として理論と實際との實踐としての問題に懸かつてゐる。田中外交は日本における後者の最終的典型として、存在の可能に對する餘地無き否定であり、致命的であることを遺憾なく立證した。併し、嚴正且つ公平なる見地に於いて、幣原外交と田中外交とを批判するならば、兩者の區別は、本質的のものでなく、方法論として手段としての懸隔である。先年特別關税會議において、幣原外交は支那の關税自主權に全幅の贊意を惜まない雅量を表したけれども、二厘五厘附加税の增徵に逢着すると、日本の現實なる利害に直面せざるを得なかつたのである。また滿洲の權益に對する認識において、田中外交の概念的であると幣原外交の法律的であるとは好個の對照を爲した。五十六議會における田中外相と幣原男との質問應答に依れば、田中外交は權益擁護の爲めには、權益範圍外の臨機の處置も妥當なるものとしてこれを斷行したのであるが、（對滿蒙治安維持の聲明とこれに伴ふ處置）幣原外交は、權益の範圍を犯されない限り、嚴正にこれを避くべきであるとの解釋を取つてゐる。この解釋の問題は、寧ろ田中外交の流儀で差支

へないと思ふが、田中外交の場合において困つたことは、範圍外の處置を取ると、そこにいろ〳〵の國策の濫造や、愛國運動が單純なる動機から行はれた事で、田中内閣は、遂に滿洲某重大事件の警備問題を惹起し、内閣の瓦解を招く導因となつた。幣原外交に從へば、かゝる冒險と手落ちは避けられたに違ひない。併しこれとて、滿蒙の權益に對する認識の本質的相違でなく、擁護上の解釋とその手段としての懸隔的相違であつた。

◇

何れが日本の對支外交として正當且つ本筋であろかと云へば、云ふ迄もなく幣原外交で田中外交は全然なつてゐなかつた。幣原外交の得意の理論的根據に就いては、男自身の言葉をその儘引用すれば（昭和三年四月一日外報時報掲載）

一、支那の主權及び領土保全を尊重し、その内爭に就いては絶對不干渉主義を嚴守する。

二、兩國間に共存共榮の關係並に經濟的の提携を增進すること。

三、道理ある支那國民の要望に對しては、同情と好意を以てこれを迎へ、その實現に向つて協力すること。

四、支那の現狀に際しては及ぶ限り忍耐寛大の態度を取ると共に我が正當且つ重要なる權利利益は飽迄合理的手段を盡して擁護すること

といふ四原則がそれである。この原則は今回の場合においても、其儘踏襲さるゝであらう、だが、今日の問題は、最早や幣原外交の理論の把握としてでなく、その理論乃至原則を背景とし、幣原外交の實際把握が如何に示さるべきかといふことである。非幣原式外交を振翳してゐた田中外交も、最後の瞬間において、國民政府を承認し、これを唯一の相手として樽俎折衝する迄の變節改論振りと、その實行をある程度示したのである。幣原外交は田中外交の方向轉換に依つて、漸く軌道に上つた日支外交の正道を足場として、今後如何に確實に踏み出して行くかである。田中外交の當面しつゝあつた現實問題の困難な解決は、幣原外交の場合にも、同樣に困難であることが想像される。單に評判のいい事や、外交辭令の交換に依つて、解決さるゝと見るには、日支の利害は複雜であり、正反でもある。幣原外交の復活は、第一支那側にいゝ印象を與へ、列國にも歡迎されてゐるが、好評の先きに立つことは、實際問題の解決には、却つて邪魔となるかも知れないのである。國民政府の膝元にある民國日報を始め、北平の京報や新民國日報などが、田中外交に比して幣原外交を歡迎しつゝ、根本政策には大差なきものと見て、大いした期待を繫げないと論じてゐるのは、對内的懸引きもあるであらうが、幣原外交の立場を正視せる言葉として眞相を穿つてゐるといへよう。

◇

ところで、幣原外交の最初の試金石は、何よりも通商條約の改訂交渉である。國民政府は巳に芳澤公使に對して、二十三箇條の基本的要求を提示したと傳へられ、日本の希望するところとは非常の距離

るのである。通商條約の改訂は、第一關稅問題、第二治外法權問題、第三內水航行權問題である。關稅問題に對して支那側は、明年一月一日から自主權を回復して、同時に國定稅率を適用する方針を決定してゐる。國定稅率が本年二月一日から實施されてゐた七種差等稅率（七分五厘—二割七分五厘）を大體襲用するのか、全然新なものとするのか、不明であるが、日本は關稅自主權を認めて互惠條約並に最惠國條款を要求する立前（田中外交では）であり、これは大體幣原外交も變はりが無いと思はれる。從つて、支那側との折衝は、彼此の利害から觀察してなか〳〵問題であらうと思はれる。治外法權問題に就いては、最近王外交部長から正式に各國に撤廢の要求を提出してゐる。列國との關係があり幣原外交は如何なる對策を準備してかゝるか注目される。第三の內水航行權（主として揚子江）に關するに對しては、支那側は極端に制限し、漢口位に留むる意嚮だとの說がある。現に四川省まで航行してゐる日本としてどの程度に既得權を喰留め得るかゞ問題で、通商條約の改訂は、幣原外交の最初に打突かる興味ある試金石であり、改訂の先頭を切る日本は、その決定權を握る立場にあり、次いで行はるべき列國の規範たる性質のものである點において、その影響は極めて重大であるといはねばならぬ。幣原外交が此の難關を如何に突破し得るかは蓋し今後の觀物である。

◇

それから幣原外交の第二の試金石は、滿蒙問題をどう始末するかである。滿蒙問題の解決は、田中外交の生命——唯一の生命と見られたが、田中外交は未解決の儘——破綻の狀態にこれを放置したのである。而かも田中外交の全力を注いだ吉會鐵道問題は一年以內に起工すべき契約であつたが、已にその期限（昨年張作霖爆死前に北平で調印され本年五月十五日を期限としたもの）を經過し、全く手の付けられぬ儘となつてゐる。その他いろ〳〵の懸案もまだ堆積したなりであるが、肝腎の商租權問題に至つては、田中外交は一指を染むることすら出來なかつたのである。幣原男は田中外交の滿蒙交涉に論及し、

滿蒙地方問題に關する田中內閣の交涉は果して日支兩國の關係において、特に重大なる意義を有する外交問題と認められ得べきや否や、自分（幣原男）はこれを疑ふ。寧ろ日常の事務的性質に過ぎないではないかとの感じを抱いてゐる。

といつて、田中外交の大がかりな而かも恫喝的な交涉を心外に感ずるらしい口吻を洩らしたのであるが、田中外交の取つた手段には大なる錯誤があつたにはせよ。日常の事務的性質のものと高を括れる程簡單でない、日支關係においては、幣原男の疑つたと反對に特に重大なる意義を有する外交問題であるのである。幣原外交は果して滿蒙問題の解決に當り、田中外交との比較において如何なる手腕を發揮するであらうか。通商條約の改訂と共に注目に値ひする。

◇

田中外交が葬られて、幣原外交が復活したことは、色々の意味にお

いて歡迎さるゝところであるが、日本として特に望み度いことは、幣原外交に依つて今度こそは、本當の對支外交を確立して貰ひ度いものである。時代錯誤的な田中外交を永久に葬るために、幣原外交は、その理論と把握を、その實踐的效果の上に示さなければならぬ責務があると思ふ幣原外交の試練と完成とが痛切に期待される所以である。しかし、幣原外交の前途は坦々たる代はりに、否寧ろ極めて難關に富んでゐることが、支那側との關係において特に豫見される。樂觀か悲觀か、すべては出直した幣原外交の上にかゝつてゐる。

濱口新内閣の政策

堀　眞　琴

一

秕政百出の田中内閣が全く民衆の信賴を失つて不評判であつただけに、濱口内閣の成立はかなりの好感を以て迎へられたことは事實である。然しながらこの好感は濱口内閣の成立そのものに對して與へられたものであつて、濱口内閣そのものに對して與へられたものと解するならば、それはお芽出度い自負以上の何ものでもない。云ひ換へればこの好感は憲政の大道確立に對して與へられたものに外ならぬのである。即ち田中内閣總辭職するや、直ちに新内閣組織の大命が濱口民政黨總裁に下り、濱口總裁は數時間の後、閣員名簿を捧呈し、即夜親任式が擧行された。從來の政變に於て斯くの如く迅速に後繼内閣の組織が行はれたことが無かつたといふこと、並びに多數政黨に根據しない所謂中間内閣の存在は全く顧みられなくなつたといふことは、憲政の大道確立せられた所以であると云はなければならぬ。

吾々は何故に民政黨内閣の成立をそれほどに喜び迎へないか。加藤内閣時代に於て、普選、税制、其他の點に於て相當の成績を擧げたにも拘らず、その後期に至つては、徒らに研究會の御機嫌を伺ひ、膨大な豫算を編成して、在野當時の主張を裏切つたといふこと、或は資本家の前衛として政友會と同一役割を演ずるものに過ぎないであらうといふこと——そのやうな問題は差し措くとしても、閣員詮衡の跡を見る時に、吾々は先づ濱口内閣の成立に輕い失望を持たないわけには行かない。即ち貴族院から四人の閣員を取りその内一人は研究會々員であるといふことは、民政黨が憲政會當時から動もすれば貴族院の勢力に賴らんとする態度を踏襲したものと云はなければならぬのである。貴族院の勢力に賴ることが、如何にその活動を制肘せられるものであるかは、既に第五十六議會に依つて教へられた筈である。

然しながら閣員の詮衡に當つて、井上氏の藏相就任と幣原男の外相就任とが實現せられたことは、特筆するに充分である。政黨内閣の建前から云へば、勿論若槻氏が藏相の地位に据はるべきであらうが、然しそこに困難な事情があつたとすれば、財界の事情に精通した井上氏の

如きを黨外から引張つて來るのが當然である。財界が極度に不安な狀態に置かれてゐる今日に於ては特に然りである。新藏相たるもの宜しく全力を擧げて財界の維持に盡し、なるべく速かに金解禁の斷行に向つて進むべきである。幣原男の外相就任は、田中外交の不人氣であつただけに、内外に好感を以て迎へられてゐることは、支那及び歐米各紙の報道する所に依つて伺はれるのである。今日最も重要なる對支外交に於て、自由主義的な經濟政策を基調とした新對支政策が確立せらるべきこと、不平等條約の改訂軍縮問題等に就て新外相に期待せられる所が極めて多い。

閣員の詮衡に次いで考へさせられるのは、地方長官の更迭である。政友會内閣の鈴木内相が斷行した地方長官の更迭に對して、當時民政黨は盛にその黨略本位を攻擊したのであつたが、濱口内閣成るや、全國三十四府縣に亙つて地方長官の移動を試み、政友系の地方長官を一掃して之に代ふるに民政系のそれを以てしたのである。制度上は地方長官は内務大臣の指揮監督の下に、又各省の事務に就ては各省大臣の指揮監督の下に、法令を執行し、行政事務を管理することになつてゐるので、政變毎にその更迭の行はれることは止むを得ないのであるが、然しそれが爲めに襲る地方行政の不安定は、早晩地方制度の改革を必要とするまでになつてゐるのである。知事公選論が叫ばれ、地方分權の確立が唱へられることは、決して偶然ではない。田中内閣の秕政は固より一々枚擧するに堪えない。然しながら國民の信頼を失つた最大原因がその放漫な人事行政にあつたことは、之れを拒むことを得ない。然るにも拘らず、濱口内閣は組閣早々全國三十四府縣の地方長官を更迭し、政黨の色彩を地方行政の上に反映せしめんとしてゐるのである。吾々は近く行はれんとする植民地長官の更迭に於ける風評と思ひ合せて、濱口内閣も田中内閣の同一轍を踏む黨略本位内閣なりの感を深ふせざるを得ないのである。

二

議會政治は云ふまでもなく、多數國民の支持の下に行ふ政治である。從つて自己の政策を實行せんとすれば、常に議會に多數を制することが、先づ何よりも肝要である。

現在の議會に於ける勢力の分布は如何。昨年の總選擧當時に於ては、政友民政の兩黨は略同數の當選者を得て、その勢力相等しかつたが、その後幾多の醜悪なる離合集散に依り勢力の均衡を失ひ、更に一層悪いことには、議員の勝手な行動に依つて選擧民の意思が全く蹂躪せられ、その結果今や議會に於る勢力の分布は國民の意思の反映と見ることが出來なくなつたといふことは拒むを得ない。勿論かゝる離合集散の大部分は政權を中心としてのそれであつて、一度政權の移動があれば、當然崩壊すべき運命にあることは疑ひないとしても、實際に於て議會に於る勢力の分布が國民の意思を反映してゐないといふこと、及び民政黨が多數を制してゐないといふことの二つの理由から、解散が

主張される。

從つて濱口内閣が議會多數の上に立つて、その政策を實行するが爲めには、速かに議會を解散して、國民の信を確めることが肝要である。それが爲めには來議會を待つまでもなく、直ちに解散を斷行すべきである。この解散の斷行に二つの場合が考へられる、一つは臨時議會を召集して、新内閣の施政方針を天下に宣明し、然る後に解散を行ふ場合であり、他の一つは臨時議會を召集せずして解散を斷行する場合である。第一の場合は唯單に新内閣の施政方針を宣明する爲めのものであつて、憲法第四十三條に云ふ臨時緊急の必要ある場合に相當せず、加之施政方針の宣明は必ずしも議會の召集を必要とせず、故に主として第二の場合が茲で考へられるのである。然らば議會閉會中に解散を行ふことが、果して國法上、將た實際政治上可能であらうか。憲法第七條の解散權について、衆議院が閉會中にも解散を行ふことを得るといふのが、一般の解釋であつて、之れについては一點の疑議も許されないのである。實際政治上から云つても、前述の如く目下の議會に於る勢力の分布は國民の意思を無視したものであるといふ理由からばかりでなく、即時解散を斷行して來議會を解散後の議會とすれば、濱口内閣の新な財政計畫の下に、新な豫算の協贊を求めることが出來るといふ理由からも、即時斷行が肝要である。解散の已むを得ざるを豫期しながら何を苦んで來議會の豫算を編成し、解散の爲めその不成立となり、その結果前年度の、即ち田中内閣の豫算を踏襲する必要があらう。

三

扨て民政黨の國民に公約した財政經濟政策の主なるものは、一、金解禁の斷行、二、公債政策、特にその整理、三、行政財政の緊縮、四、義務教育費中俸給全額國庫負擔、五、税制の整理、六、關税の改正、七、社會政策、八、農村政策、九、金融制度の改善、一〇、電力政策の十項目であるが、右項目中最も當面の問題として重要なものは、金解禁、公債の整理、財政の緊縮等であつて、既に去る五日の定例閣議に於て、之れを目標とした財政方針が決定せられた。それに依れば、昭和四年度實行豫算編成方針と昭和五年度豫算編成方針との二部より成り、前者に於ては、極力緊縮の方針を採り、未着手の新規事業は之れを見合せ、公債支辨の事業は之れを中止又は繰延べること、後者に於ては緊縮を續行し、新規事業の要求を拒み、公債の發行を制限し、國債の償還は各會計に於て負擔することが決定せられたのである。

我國現下の經濟財政狀態に於て、豫算を緊縮し、公債を整理し、新規事業を見合すべきことは、理の當然として認められる所であり、更に之れ等の政策の準備として金解禁を斷行すべきことは、何等異議のない所である。但し解禁の時期に就て、解禁に必要な一切の手段を採つて平價若しくはそれに近づいた時に解禁を行ふべきか、それとも平價切下の即時斷行をなすべきかが、今日かなり論議されてゐる。現下の狀態に於て平價解禁を主張することは、徒らに解禁の時期を遲延す

る結果となり、平價切下解禁を主張することは、金融資本の損失を招來する恐れなしとしない。然しこの問題は經濟的に解決せられるよりも、寧ろ政治的に取扱はれる傾向にあるのであつて、吾々はこの點で國民生活の眞諦に徹した經濟財政政策の樹立を要望すること切である。旣に不景氣の波浪に揉まれた民間經濟は金解禁に依つて一層深刻なる苦境に立たねばならぬであらうといふこと、更に民衆は金解禁に依つて勞銀の低下から極度の苦痛を嘗めねばならぬであらうといふことは、諸外國の例に見るも明かである。濱口內閣は之れに對してどれ程親切な考慮を拂つてゐるであらうか。

四

新外相の外交振りは所謂幣原外交の名に於て特色づけられてゐるのであるが、その眞諦は大體左の基調に則るものである。

一、支那の內亂に對しては內爭不干涉主義を取ること。

二、支那に事變突發し在留邦人の生命財產並びに帝國の權益危殆に瀕する場合、現地保護主義を取らず、危險地域より最短の安全地帶に邦人を集中し、然る後適當の應急措置を講ずること。

三、通商條約改訂に當つてその可能なる範圍に於て列國と協調すること。

この基調に見る如く、幣原外交の特色は時代の趨勢に順應し、自由主義的色彩を帶びてゐて、當時その理論に於て識者を首肯せしめるものがあつたが、然し積極的に對支關係を好轉せしめる結果を生ぜずして終つた。田中外交は之に反し高壓政策を眞向から振りかざして、積極的效果を擧げんとしたものであつたが、結局それは武力を背景とした反動政策以外の何ものでもなく、却つて對日感情を惡化せしめる結果となつたのである。但し田中外交もその末期に至つては、濟南事件の解決、國民政府の承認等の實を擧げたことは、未だ記憶に新な所である。

幣原外相は先づ支那に對して眞の自由主義的平和政策を確立せねばならぬ。換言すれば武力を背景とした反動政策を排して、經濟を基調とした新政策を確立せねばならぬ。滿洲の權益擁護に就て武力を主張する者が往々にあるが、彼等は今日の植民政策の本質を解せぬ輩である。支那殊に滿洲に於ける日貨排斥の如何に根深いものであるかを思ふ時、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。更に幣原外交が新に當面する困難は、所謂不平等通商條約の改訂問題である。この問題は支那當局の進步的分子の自主的傾向極めて強いことと、田中外交の反動政策に對する反感相當に強いことから、幾多の困難に遭遇せねばならぬであらうが、然し要は幣原外交の基調として既に聲明せられたところの、內爭不干涉主義經濟的提携を貫徹すると共に、支那の國民的希望を充分理解することにある。

之れを要するに濱口內閣の財政政策と云ひ、外交政策と云ひ、之れを批評するには、一層詳細な計劃內容の發表と成果とに俟つべきであつて、吾々は茲では唯民衆の生活と希望とに觸れた政策の實現を期待するのみである。

田中內閣倒壞の主役者

馬場恒吾

田中政友會內閣が存在してゐた頃には、其毒々しさが吾々の心を刺激して、吾々は呪ひの眼を以てそれを見た。然るに其內閣が過去の存在となつた今日では、吾々は稍冷靜に其沒落の過程を眺める事が出來る。そして此政變の渦巻きの中に、鮮かに浮び出づる二人の政治家の姿を見る。一人は元老西園寺公であつて、他の一人は樞密顧問の內田康哉伯である。

田中內閣の潰れたのは其辭職理由に發表されてゐる如く、國外に於て起りたる重大事件の爲めである。不戰條約が樞密院で八ケ間敷かつた最中にも、田中內閣は此問題で如何に其面目を踏み潰されやうとも、內閣は決して辭職せぬと豪語し、又政界の最高方面でも、此問題で內閣は辭職せぬと諦めてゐた。同時に、同じ方面では、內閣は不戰條約では潰れないが、滿洲重大事件では必ず潰れる。若しそれが潰れぬやうならば、日本の政治組織は根柢に於て、こはされて居るのだと斷言してゐた。果して、滿洲重大事件の爲めに內閣は潰れた。

それ故に不戰條約の問題は政變直接の原因ではない。併し內閣が滿洲重大事件で辭職しなかつたならば、不戰條約が內閣沒落の直接の原因となる可能性があつた。その理由は內田樞密顧問官の辭表は田中內閣に依つては執奏されなかつた。それを執奏する場合に、田中首相は如何にして、辭職する內田の責任と、辭職せざる自分の責任に區別を付け得たであらうか。其責任に區別を付け得ざる間は彼れの內閣は無事であり得なかつたのである。

然らば誰れが內閣を潰したか。此問題を研究して得る所の答は、誰れを怨む事もない。田中首相自身が、大きな壁に打突つて、頭を碎いたと云ふ迄である。大きな壁とは日本の憲法であ

る。

話しは昨年の御大典前の事である。滿洲重大事件が起つたとき元老の西園寺公は田中に忠告した。此事件で日本は自分の非を掩ふやうな事があつてはならぬ。日本は日本が正義の國である事を證據立てねばならぬ。そして日本は世界に於ける日本の信用を維持せねばならぬと、田中は全部それを贊成した。西園寺はもし贊成ならば、其決心を上奏して置けと云つた。田中は上奏した。

其上奏が田中一流の輕卒不謹愼な内容を以て行はれた。軍法會議に依つて責任を明かにする決心迄上奏したと傳へられる。畢意するに此事件の結末を如何に付けるかを考へずになされたのである。御大典が了つた後に、田中首相は此事件に對する方針を一變した。卽ち軍法會議か行政處分に一變したのである。それは軍部の抗議に依つてさう變更されたと云ふ。田中は陸軍出身であるが故に、陸軍には押しが利くと世間一般からは期待されてゐたが、事實は其正反對であつた。初めはさほどでもなかつたが、田中が首相になつてからの頓馬さが、陸軍に對する彼れの威信をすつかり傷けて了つた。陸軍部内には田中に對して、輕蔑と憤慨と反抗の空氣が釀成された。

併し滿洲重大事件で、陸軍が軍法會議に反對したのは、さうした田中に對する惡感情から出たのではない。只田中の遣り方が陸軍に責任を轉嫁して、自分は責任を逃れんとする態度を憎んだからである。滿洲重大事件は軍事上の意味よりも政治的の意味の方がより多く含まれてゐる。軍事上の責任を軍法會議に依つて問ふとして、其政治上の責任をば不問に付すと云ふ事は、誰れが見ても片手落ちの處置である。だから田中が政治上の責任を負ふと云へばよし、然らざれば軍法會議でなく、行政處分にせよと云ふのが、抗辯出來ない論理として現はれて來た。田中は此の事に關しても、他の何の事件に關しても、責任を取ることは好まない。好まないと云ふよりは寧ろ、如何なる事があつても、政權を握つて放すまいとする事が、彼れの終始一貫したる方針であつた。だから、自分が責任を逃れる爲めには、軍部の主張に屈する外はなかつた。軍法會議は止めにして、行政處分に方針を變へる事を承諾せざるを得なかつた。だから此問題に關しては、其後は政府と陸軍の爲には別に意見の間隔はなかつたのである。

陸軍との妥協が出來て以來、此間の事情を知つてゐるものは、田中首相が前に上奏した趣旨を如何にして變更するかを注意してゐた。田中が一人で拜謁して上奏するときは、また如何なる輕卒不謹愼な上奏をするかもしれぬ。田中の上奏の場合に

は牧野内大臣が必ず侍立する必要があると云はれた。

軍法會議が行政處分に變つたとき、田中内閣の運命は已に決した。此方針を變へる事は田中としては初めの上奏の趣旨を裏切る事なしに變更出來ぬ事である。然るに彼れは大膽に方針を變へたのである。此の合はない辻褄を如何にして合はすかゞ疑問であつた。結局それが合はす事が出來なかつた爲めに田中内閣は沒落したのである。

總理大臣が上奏の趣旨を裏切る事は、憲法上の問題になる。總理大臣が輔弼の責任を完全に盡し得なかつた事になる。此點に深き關心を有したのが元老西園寺であつて、彼れは内閣の進退に容喙するのではなく、皇室の尊厳を維持する事が大事であるとした。それが即ち日本の憲法を擁護した事になる。

内閣沒落の日即ち六月二十八日は政府の慌だしき沒落の過程を記錄したのである。田中首相は、此問題で内閣が倒れると夢にも思はなかつたらしく、此日の閣議の中途に白川陸相を參内せしめて、滿洲事件の結末になる方針を上奏せしめ、閣議後にそれを發表する方針で進んだ。白川陸相は參内したが、田中首相の最初の上奏の手前、さう簡單に此問題が解決さるべき性質のものでなく、彼れは顏色を蒼白にして、閣議に歸つた。宮中より首相官邸の間を、彼れの自動車は一時間五十六哩の速力で飛んだ。田中首相も亦直ちに參内した。そして歸つて直ちに西園寺公を訪問した。蓋し宜ろしく御取りなしなどゝ云ふと云つたのであらうと傍觀者は噂した。併しそれを取りなすと云ふ事が日本の憲法の大本に觸れる事であつて見れば、如何に元老と云へども力及ばずと云ふの外はなかつたであらう。西園寺公の處から歸つた首相は閣僚個々に内閣投出しの已むなきを告げた。其日首相が參内した後に、鈴木侍從長、牧野内大臣は西園寺公と會つた。

前にも云つた如く西園寺は自から手を下して田中内閣を潰したのではない。元より彼れは過去二年間の政府の行績に對しては苦々敷思つた事はあらう。政府が衆議院に於ける多數を作り上げた方法に對しても不愉快に感じたであらう。殊に貴族院が優諚問題に於て、明かに内閣不信任を決議してゐるに對して、政府が知らぬ顏をしてゐる事は、議會の二院制を認める以上、責任を知る内閣の爲すべき事でない。だから西園寺は田中から相談されゝば、内閣の責任問題に言及する意志があつた如く見える。併し元老の身分として、進んで内閣に辭職勸告は出來ない。只田中からの相談を待つより外はなかつた。然るに田中の方では西園寺の此の氣組みを察してか、察せずしてか、興津に行つて西園寺を訪問するときも、恰も何か急所に觸れられん

事を恐れるものかの如く、自分の報告すべき事を報告すると共に、西園寺に口を利かす閑を與へずサッサと引き揚げて來たものである。

だから西園寺は進んで内閣を倒すやうな事はしなかつた。只彼れは憲法の大本を擁護したのみである。彼れは、總理大臣は元首に對して上奏を二三にすべきものでないと云ふ立前を守つた。其事は田中にしても元より承知して居るべき筈であつた。だが、事實の經過としては田中は憲法の壁に頭を打突ける迄、それを悟らないかの如く見えた。頭を打突けて後、初めて氣が付いて、慌てゝ内閣を投げ出し、危い所で、臣節を完ふする事が出來たと云へる。彼れ個人としては内閣を投げ出す事は悲しい事であつたかもしれぬ。併しさうする事に依つて、彼れが政治上の責任を取る男となり、不忠の臣とならずに濟んだと思へば、憲法擁護の任に當つた西園寺に感謝してもよい。後年冷靜になつて過去を顧るときは、彼れもさう感付くであらう。

元老としての西園寺も曾つては種々の非難を受けた。或は政友會贔負だと云はれ、或は内閣奏請の道を誤ると云はれた。例へば清浦内閣を推薦したときの如きは西園寺は天下の怨府となつた。然るに、近來は西園寺に對する非難が其跡を絶つた。彼の年は八十、最早天下に何の野心を懷かず、懷く必要もなく、從つて其生來の聰明が益々玲瓏透徹になつて、一意專心、國家に奉公する心境になつたからであらう。

それならば、彼れは今何を考へてゐるか。これは彼れ自身が語つたのでなく、外間から彼れの行動に依つて判斷するに過ぎないが、彼れの思想は頑固な日本主義でない。それとは反對に聰明な世界的立場に立つて、日本の地位を進める。それと今一つは彼れの最後の御奉公として、立憲政治の完全な發達を期したい。此二つの希望が彼の心を支配してゐるらしい。

此憲政の完全な發達を期すと云ふ點から云へば元老そのものの存在が憲政の上の變態である。元老は憲法で規定されざる機關である。憲法にない機關が内閣組織者を推薦することは、少くとも憲法政治の變態と云はなければならぬ。それは只憲法政治發達の過渡期に於てのみ許さるゝ制度である。政黨が發達して、政權の授受が政黨間に圓滑に行はれるやうになれば、元老は不必要である。西園寺はそれを知つてゐる。彼れの近年の行動は元老廢止、即ち自個消滅を促進する事に專心努力してゐたかの如く見える。清浦内閣の後に憲政會の加藤高明内閣、其後に若槻内閣、田中内閣、今度の濱口内閣と、何れも政黨内閣を推薦され、政權の授受は誰れの眼にも不自然でなく、政黨相互の間に行はれる習慣が作られた。かうなれば元老の推薦は只形

式的のものになり、元老そのものが不用になる。西園寺は自分の役目が不用になるやうに、國政を指導して行く。それは過つて清浦内閣を推薦した苦き經驗の教訓だとも批評されよう。併し彼れが將來に於て元老は不用であると云ふ事を認めて、彼れの後に元老後繼者を作らない事は事實である。だから、彼れ自身も亦自分の役目が此の世の中に不用になつて行くのを見て、それが彼れの本望であると云ふであらう。

今一つの彼れの希望である所の、世界的立場に立つ日本と云ふ思想は、偏狹な國家的利己主義とは反對の立場を取つてゐる。從つて、それは軍人流の日本を笠に着て、外國で威張り散らす事を嫌ひにする。西園寺の此傾向は何十年も前から著るしかつた。日露戰爭後、日本の軍人が戰勝の餘威を驅つて、滿洲で威張り散らしてゐた事は有名な話しである。西園寺は第一次西園寺内閣の首相として、戰後の滿洲經營を考へねばならなかつた。總理大臣が滿洲を視察に行くと云ふことは世界を驚かす惧れがあつた。それで、彼れは微行として、滿洲に行つた。表向きは其時の大藏次官であつた若槻禮次郎氏が滿洲視察を命ぜられ、其一行の中に總理大臣西園寺が加つてゐたのである。

滿洲に往つて見ると、果して日本の軍人が威張つてゐる。盛京將軍趙爾巽の宴會であつたが、日本の旅團長格のものが、將軍を捉へて、『オイ、將軍』とか云つて顋で使ふやうな態度を見せる。西園寺は皆んなの見る前で、

『何を、失禮なことを云ふか』

と、日本の軍人を叱り飛ばした。其軍人は一縮みにペチャンコになつた。其代りに支那人は、今迄日本の軍人許りに接觸して、日本人は獸な奴だ許り思つてゐたが、西園寺が來て初めて本當の日本人はかうして、禮儀を重んずる、思ひ遣りの深いものであらうと思つた。

それ迄は支那人の日本人に對する反感は、口にこそ出さぬが、内心に深く燃えてゐた。史念祖といふ篤學の財政官が居つたそれは今迄は日本人の威張るのが厭だと云つて、日本人の宴會に出た事がなかつた。西園寺一行の時にはそれが君子の交りと云ふ氣持ちを以つて出席した。彼れは有名な酒豪であつた。所ろで彼れの坐はつた席が、矢張酒豪の若槻禮次郎と山座圓次郎の間であつたから堪らない。彼れは傲慢無禮でない日本人に接した事を喜んで乾杯又乾杯と云つてゐる間に、流石の酒豪も非常に醉うた。其席では醉つた樣子は見せなかつたが、翌日は宿醉で顏を見せなかつた。かうした話は今に到つて、西園寺の滿洲に殘した印象として覺えられてゐる。

時は流れる。それから十三年後の大正七年には歐洲戰後の

和全權として彼れは巴里に往つた。巴里講和會議に於ける日本の遣り方に付いては非難の點が多かつた。私もそれを批評した一人であつた。所で、今から考へると、西園寺が果して講和會議の當面の諸問題を考へてゐたか否乎、疑問である。彼れの樣子を見ると、心これに在らずと云ふ風があつた。歐洲の諸帝國は何れも變亂の跡が鮮かで、革命の風が世界を掩ふと云ふ有樣であつた。西園寺の意志は此世界の形勢に見て、日本の國體を守ると云ふ事に集中されてゐたのではあるまいか。

西園寺が愈々講和全權になると決つたとき、今は故人になつた横田千之助が私に云つた『西園寺侯は國體の精華と云ふ事を特に重んずる人ですからな』

私はそれが巴里講和會議と何の關係があるかと云ふ事を悟らなかつた。だが横田は其當時の首相原敬の懷刀であり、西園寺の處へも屢々出入してゐたから、西園寺が巴里に行く心持ちを推察したと見える。

巴里講和會議の西園寺の參謀は次席全權の牧野紳顯、（故）珍田捨己であつた。其牧野は後に宮中に入つて、今は內大臣となつてゐる。珍田は侍從長になつた。これを見ても、西園寺の關心は皇室の安泰を守ると云ふ事に重心を置かれてゐる事が判るではないか。

面から西園寺の思想は頑冥固陋でない。若い時は佛蘭西思想にかぶれたと迄云はれた。それは畢竟するに、若氣の至りと云ふ範圍を出でなかつたであらう。年と共に彼れの思想は圓熟し實際的になつた。併し、如何に圓熟し、實際的になつても、彼れは頑冥固陋にはならない。聰明に世界を見て、採り入れるべきは採り入れる。反撥すべきは反撥する。

田中內閣を潰した滿洲事件の內容はまだ發表されてゐない。雲の上に如何なる事があつたか、吾々はよく知らぬ。併し、西園寺公の思想の中心が何處にあるかを知つて居れば、此政變の大體の輪廓は想像されない事はない。かうして、西園寺公は日本の憲法を擁護したと云へる。

西園寺公の憲法擁護振りに比較して見れば、平生、憲法の番人を以て任ずる樞密院の憲法擁護振りは全くなつてゐない。それには動機に不純な所があつたからである。

不戰條約に關して、樞密院は『人民の名に於て』と云ふ文句が憲法に違反すると云ふ立て前を採つた。それなら、それで一貫すれば、其主張の是非は何うであらうとも、樞密院の動機が不純であらうとは疑はれなかつたのである。然るに、樞密院は中頃から、此主張に但し書を加へた。それは必ずしも此文句が憲法違反でないとは云はない。例令それが違反であつても、それ

に依つて、田中內閣を潰し度くない。內閣は助けなければならぬと云ふ方針で進んだ。さうなれば憲法の解釋は第二義になつて、政略が第一義の重要さを占めるに到つた。其所に不純な動機が存在してゐると云はれても仕方がない。政府と樞密院の間を周旋したものに、政府側では久原遞相、小川鐵相、原法相などが居り、樞府側には伊東巳代治伯、平沼副議長、金子子などが居つた。

妥協の結果、此文句は日本の憲法に見て、日本には適用せざるものと云ふ宣言書を付して、此條約の御批准を奏請する事になつた。然らば樞密院は、此文句が憲法違反でないと見るかと云へば、それは決してさうでない。憲法に差支へる、卽ち違反であればこそ、此宣言文の憲法に見て日本には適用せずと云ふ事が生れたのである。然らば、政府は此樞密院の解釋に承服したと云へば、それは決してさうでない。政府は只國論の統一の爲めに、日本除外の宣言を發する迄であつて、此文句が憲法違反であるとは思はぬと云ふのである。政府と樞密院との間の此意見の相違は裁斷されずに殘された。それを突き詰めて裁斷すれば、政府が責任を取らなければならぬ。政府をして責任を免れしめ、依つて辭職させず濟まさうと云ふ事が樞密院の意圖であつて見れば、此問題を窮極まで突き詰める事は、樞密院の好まない所である。其結果が不徹底な宣言になつたのである。

然るに、政府の好むと好まざるに關らず、問題を窮極に進めんとしたのが樞密顧問官內田康哉伯の辭表である。

內閣の潰れたのは滿洲重大事件の爲めであつて、不戰條約の爲めでなかつた。少くとも、田中首相が內田樞密顧問官の辭表を執奏しない間は、內閣は無事であり得るかの如く見えた。併しそれは內田の辭表を執奏しない間の事である。それを執奏する場合に、若し陛下より、內田は不戰條約が憲法違反であると云ふ樞密院の決議に服さずして辭表を呈した。樞密院は憲法違反だと云ひ、政府は違反でないと云ふ。一體何方が本當かと云ふ御質問があつたなら、田中は何んとお答へ申したであらう。若しそれが憲法違反と解するならば、政府は憲法違反の條約を締結した責任を負はねばならず、若し憲法違反に非らずと解するならば、政府は內田と同意見なるが故に、內田の辭表を執奏すべき理由がなくなる。それ故に田中は此辭表を執奏せずして內閣を投げ出した。內田の辭表は、田中內閣に採つては切腹の九寸五分であつたのである。

併し內田が辭表を提出したのは、必ずしも田中內閣を潰さんが爲めではなかつた。彼れは不戰條約の調印者として、それが憲法違反である事を信ぜぬのみならず、此條約は無條件、無留

保で批准さるべきものだと云ふ一本筋の意見で進んだ。だから此條約に留保的な宣言を付する事には政府と意見を異にしたけれども、條約が憲法違反でないと云ふ點に於ては政府と同意見であつた。彼れが辭表を提出したのは、不戰條約を憲法違反だと宣言する樞密院に列する事を屑しとしなかつた爲めである。

　彼の主張は『人民の名に於て』の『名に於て』は憲法にある『攝政は天皇の名に於て』とか、『司法權は天皇の名に於て裁判所之を行ふ』とかの代理權の意味に解すべきでない。英語の『名に於て』は代理權の意味に解釋する場合もあるが、同時に人民の爲めに、或は人民に訴へる意味に用ひられる場合もある。不戰條約の『名に於て』が代理權を意味せざる事は米國其他の當局者と接衝の結果確定的になつてゐる。それを憲法にある『名に於て』と同意義の『名に於て』だと解釋するのは無理な議論だ。殊に『人民の名に於て』は日本なればこそ深い情味のある意義がある。日本歷代の天皇は人民を國の寶とし玉ふ。近代の戰爭の慘劇に鑑みて、陛下が不戰條約を締結される事は、それこそ眞實に人民の幸福を念とし給ふからである。此文句こそ不戰條約の生命とも云ふべき點である。それを憲法違反だと云ひ、或は日本には適用せずと云ふのは日本人として耻辱だと云ふのである」

歐洲大戰の後、世界は再びこのやうな戰爭をなからしめる爲めに、平和主義の運動に突進してゐる。其中に日本のみは屢々好戰國であるかの如く誤解された。内田は日本を代表して不戰條約に調印した。其調印した當人迄が日本に歸つて、此條約の一部が憲法違反であるが故に日本には適用せぬと云ふ主張に贊成したならば、世界は、日本には不戰條約を支持するものは一人もないと思つたであらう。内田は此條約と殉死した事に依つて世界に於ける日本の名譽を維持したと云へる。

　樞密院に於て内田と同意見で、保留案に反對した人に櫻井錠二氏があつた。彼れは英語學者として『名に於て』が代理權を意味しないと云つた。保留案に反對した今一人は八代六郎男であつた。これは内田とは正反對に、此條約は憲法違反だと眞向ふから振りかざしての反對であつた。内田は此人の生一本さに敬意を拂つてゐる。

　不戰條約問題の過程に於て、不思議な事が一つある。樞密院の審議が終つた後に發表された所の、米國との交換公文書を見ると、米國政府は『名に於て』は『爲めに』と云ふ意味で、代理權を意味しないと明確に云つて居る。政府は違憲問題が起つた時に、何故此公文書を發表しなかつたのか。これを發表すれば、樞密院の苦情を聽く必要はなかつたであらうと思はれる。殊に

又不思議なのは、此公文書の交換は内田が巴里に向つて出發する前に濟んでゐたのに拘はらず、不戰條約調印に出掛ける内田に見せなかつたことである。何故見せなかつたか。其理由は今に至つても判らない。内田は不戰條約を調印してからの歸途米國に寄つたとき此交渉のあつた事を知つた。そして自分の所信が米國に依つて裏書されてゐる事を知つたのである。

彼れは不戰條約を調印した後、歐洲大國の首腦者に會つた。そして日本が極東の平和を確保する所を如何に衷心より希望してゐるかを述べた。時恰かも張作霖の爆死事件があり、日本が滿蒙に自由國を建設するかの噂があつたときであるから、日本としては其立場を説明する必要があつたのである。

日本は東洋の天地が平和である事を切に希望する。只日本は滿洲に於て條約で得たる權益がある。其權益を捨てる事は日本の國民が承知しない。其權益が侵害されんとするときは、日本の政府が如何に平和を希望しても、國民の壓力で平和が守れなくなる。列國が此立場を諒解して呉れる事が、極東の平和を維持する上に絶對に必要なる條件である。此諒解の下に、日本は一意專心に不戰條約の精神を促進したいと云つたのである。

獨逸の首相マルクスの如きは此説明を聞いて初めて安心したと云つた。獨逸は今世界に於て孤立してゐる。將來の希望は露西亞と支那を相手に通商を盛んにして國を發展せしめる事のみに懸つてゐる。日本が極東の平和を維持して呉れる事に依つて獨逸は救はれるのだと云つた。

英佛伊それ〲日本の立場を諒解した。殊に米國政府や民間有力者は日本が滿洲に對して隱れたる野心のない事を喜んだ。それは内田の云ふ事を信用してゐる。そして、其同じ頃に内田は日本に於ては、憲法違反の條約を調印したる者として攻撃されてゐたのである。大風一過、田中内閣が潰れた今日では、前の攻撃の聲が、感謝の聲に變りつゝある。それは共に田中内閣を倒壞せしめんと欲した者の叫んだ聲であらう。

内田の提出した辭表は田中内閣を潰す意味に於ては不發彈に終つた。併しそれは日本の政治組織の重要機關たる所の、樞密院、政府及政黨の傳統的な弱點を曝露する事に於て有效であつた。

金解禁と貨幣の弗本位化

山崎靖純

一

世界戰爭中から戰後にかけての金本位廢棄、不換紙幣流通の經驗は貨幣理論上に於ける排金思想を助長し、貨幣指圖證說や種々の抽象的觀念說に花を咲かし、エルスタアやフイシャー一派やケインズやカッセルやクナップ等々の諸學者に、一時は恣いまゝなる獨擅場を提供したる觀があつた。然し乍ら貨幣價値の言語に絕した動搖から招來した國際取引の混亂衰退を救濟するが爲には、夫々の國の貨幣價値を世界共通貨幣としての金の價値に再び結びつけるより外に、實際問題としての途がなかつた。成る程、管理通貨(マネイジド・カアレンシイ)の論者に云はすれば、かゝる場合さへ金の不必要を豫想して居るが、然しケインズでさへもが云ふやうに、金は世界共通の一種の崇拜場(fetish)であり、然も一度び國境を越ゆれば、一國の紙幣はそれ自體に於ては完全に無價値となる今日の有樣に於ては、何等かの方法によつてその貨幣價値を金に結びつけることは、最も簡單にして有效な貨幣價値安定策に違ひないのである。即ち世界經濟が、今日の如くに、幾多の統治權の異る諸國に分れて、主體のない資本主義的な商品生產經濟を構成して居る限り、國際貸借の差額決濟の窮極的手段として一般的價値を有する金商品に依賴することは、止むを得ない歸結と云はねばならぬ。

かくて千九百十九年六月九日の米國の金輸出解禁を劈頭とし、その他の主要國に於ては、千九百二十四年四月一日のスエーデンの金輸出解禁から昨年六月二十五日の佛蘭西の金輸出解禁に至る間に、西班牙と日本とを除いては、悉く舊平價若くは新平價に於て金本位へ復歸するに至つたのである。而して西班牙も今や通貨の安定を得て、極めて近い將來に新平價による金本位復歸を爲さんとし、日本も亦現に濱口內閣の下に金解禁の實行に着ぎつけんことを企圖して居る。

二

然し乍らこの呼び戻された金本位制度に於ては、米國を除いては、

最早や戰前の『金貨流通本位制度』は遺憾なく消滅して居た。歐洲に於て瑞西では今でも屢々金貨の流通を見受けるが、これは千九百二十一年の暮から翌年の四五月にかけて金貨の流入が激增した時に、約一億一千七百萬フランの金貨を市場に放出した名殘であつて、金貨流通本位制を採つて居るが爲ではない。即ち歐洲戰後に恢復された金本位制度の特徴は、國内的には金貨を流通せしめず、たゞ國際間の終局の決濟にのみ金を使用するものであつて、かくすることによつて國内通貨の價値を猶よく國際通貨たる金の價値に結びつけるものである。所謂金塊本位制度や金爲替本位制度を包含する所の金核本位制度がこれであつて、『目に見えざる金本位制度』と云はれる理由も如上の點に存するのである。尤も戰後に採用された金核本位制度の中には、金塊本位制度と金爲替本位制度との双方に跨がつて居るものもあるが、大摑みに云つて、『特定された最低重量以上の金地金とのみ紙幣を引換える義務を中央銀行が負ひ、且つその輸出を自由にする』制度が金塊本位制度の特色であつて、英國、デンマーク、獨逸等の制度は是に屬し、佛蘭西も亦實際上の運用は是に屬し、また『中央銀行は金若くは金本位國宛爲替手形に對して紙幣を引換え、またその紙幣の兌換には金本位國宛爲替手形を以て應ずることによつて通貨の金價値を保持する（蓋し右の手形は任意に金に換え得るが故に）』制度が金爲替本位制度の特色であつて、白耳義、伊太利、墺太利、洪牙利、其他多くの新舊ヨーロッパ諸國の制度は是に屬するものである。

それでは以上の如く米國以外の世界の主要諸國が金本位復歸に當つて、最早や戰前の金貨の流通制度を顧なくなつた譯は何處にあるかと云ふに、それは二三の有力な理由を擧げ得る。先づ第一に見逃してはならぬことは、戰時から戰後にかけて世界各國の金の所有率が餘りに多く米國に集中し過ぎたことである。即ち世界各國の政府並に中央銀行の正貨所有總高は千九百十三年末には四十八億三千萬弗を示し、その内當時米國の正貨所有高は十二億九千萬弗を示して、世界總高の二割六分に當つて居たが、千九百二十四年末には世界總高は八十九億千六百萬弗を示し、一方米國の所有高も四十億九千萬弗に激增して一躍世界の四割七分を占めるに至つた。その後世界總高の增加に反して米國の所有高は漸減したが、それでも一昨千九百二十七年末には猶九十五億千四百萬弗に對する三十九億七千七百萬弗、即ち米國は世界總額の約三割八分五厘を把持したのである。この米國の正貨激增率は同じ期間に於ける同國の流通通貨增加率に比して遙に多いものであつた。然るに他の諸國に於ては米國と事情を頗る異にするものがある。固よりそれ等諸國の金保有高の絕對額は殆ど何れも戰前よりも增加したが、その增加率は同期間に於けるそれ等諸國の流通通貨の增加率に甚しく及ばぬものは少くない。その傾向は各國の金本位復歸が開始された千九百二十四五年頃に於て最も甚しく、その後稍緩和されたが、現在でも猶著しい痕跡を止めて居る。試みに左に千九百十三年を一〇〇としたる五六の主要國の金保有高並に通貨流通高の指數に於て、昨千九百二十八年末の狀態を見る。

金保有高指數（政府竝に中央銀行保有の金）		通貨流通高指數
米國	二九〇	一三九
英國	四四〇	一、〇九三
獨逸	二二三	二二七
佛蘭西	一八四	*二一七
伊太利	一〇〇	*一六八
白耳義	二一二	*一六五

（註）*は戰前の貨幣價値に計算したる指數

右に據つて見れば、米國の金保有高の增加率はその通貨流通高の增加率に比して著しく高率を示し、獨逸と白耳義も多少同じ傾向を示して居るが、英國、佛蘭西、伊太利に至つては、金保有高の增加率は通貨流通高のそれに及ばず、殊に英國に於てその甚だしきを見るのである。のみならず、右の獨逸や白耳義の金保有高も、實は米國に資金の借入れを仰げる結果に外ならぬのである。即ち歐洲戰後に於ける金分布の甚しい米國偏傾と、それ故に助長された各國の金保有高の通貨流通高に對する比率減少とは、米國に於て金本位復歸の爲の借款を起し或はクレディットを設定して、金融的に米國に從屬すると共に、他方に於て金不足の狀態に適應する爲に、各國をして國內に金貨の流通せざる所の金核本位制度の諸形態を採用せしめたのである。

金貨の流通しない金本位制度が流行するに至つた第二の原因は、世界に於ける金產額の減少傾向にも求めることが出來る。世界各國が金本位に復歸した曉に於て、金供給は過剩なるか不足なるかの議論は、レイフエルトやカッセルを代表として、千九百二十二年のジェノア會議以來諸國の學者間に屢々論議された所であるが、近年は不足論が壓倒的勢力を占めて來て居る。現にケインズなども本年一月十九日のネイション誌上に於て、金不足論に反對したる自分の立論の誤謬を端的に承認し、興味ある改論を述べて居る。世界の金產額は千九百十三年には六十九萬四千キログラム、是を金額に見積つて英貨約九千二百萬磅を示し、戰前數年間は略かゝる見當を維持して居つたが、歐洲戰後世界の金產額は激減し、その後漸增しつゝありとは云へ、千九百二十七年の產額は約六十萬二千キログラム、是を金額に見積つて約八千二百萬磅に過ぎない。然も專門家の意見に從へば、この額は最早や增加し得る限度に近いものであると云ふ。然るにその半額は工藝用竝に東洋諸國（支那、印度等）に吸收され、殘る半額のみが貨幣用に提供され得るのであるが、この高は世界の貨幣用在金高の約二パアセントに當つて居る。これに對して世界經濟の常態的發達に基く金需要の增加率は、物價にして平衡ならば約三パアセントであると推算されて居る。この推算はカッセルに於てもケインズに於ても略一致して居るが、かゝる狀態から見ても、若しも世界各國が從來の如き金本位制度を改めない限り、世界經濟は、緩漫ではあるが、累進的な通貨收縮過程の桎梏に陷り、其處に諸種の經濟的悲劇を起すであらうと推論されたのである。尤も作者自身はかゝる推論を全然承認することに就ては、多少の躊躇なきを得ぬ。例へば金產額不足の爲に金の價値が騰貴する場合

には必ずや金の産出を或る程度まで促進するに至るであらう。現に千九百二十二年頃と比較すれば、世界の金産額は約十三萬キログラムの増加を來し、昨千九百二十八年の産額は、國際聯盟の調査によれば、六十一萬一千キログラムと云ふ十餘年來の最高額を推算されて居る。然し乍ら金の生産能力衰退は確にその能動的な生産増加を來す可能性を奪つたことは明かで、それ故に世界は今後も豫期せざる機會に屢々金の供給不足を訴へ勝ちになるであらうと云ふ點に於て、カッセル等の推論は半面の眞理を有して居るであらうと察するものである。それは兎も角、かゝる雰圍氣の間に行はれた世界各國の金本位復歸が、半面に於ては金貨の流通せざる金核本位を採用すると共に、他の半面に於ては多くの國々が期せずして發券制度に『比例準備制度』を採用して、金の供給不足に備へたことは、注目すべき發展と云はねばならぬ。(英國は比例準備こそ採らないが、屈伸制限發行法を採用した)

然も以上の如き金本位制度上の發展を容易ならしめた今一つの原因として、戰時以來の不換紙幣に對する訓練、國内流通貨幣に對する觀念の變化を見逃すわけには行かない。千九百二十三年の秋に獨逸に於て發行されたレンテン紙幣は、形式的にも内容的にも、完全に金を背景としない通貨であつたが、遺憾なく人々の信用を繋ぐことに成功し、その價値は維持され、人々は最早やその紙幣を肌身につけて愛着した。かゝる經驗は國内流通貨幣に金の無用なることの觀念を益々强めると共に、各國をしてマネイジド・カアレンシーの原理を多分に採り入れた金核本位制の復活に考へ及ばしめるに多大の力となつた。即ち金核本位制度を採用して、國内貨幣價値を金に結びつけると共に、他方に比例準備制度を巧妙に運用してその缺陷を補ふ方法が、各國政府によつて採用されたのである。今日の各國中央銀行に於て、比例準備制度をその規定のまゝの比例に於て運用して居るものは一つもない。その悉くが或は割引利率の變更を行ひ、或は米國聯邦準備銀行のオープン・マーケット・オペレイション(一般市場取引)に倣つて手形並に國債の賣買を行ひ、通貨を統制し、金核本位制度の維持を助けて居る。

三

以上の如くにして新しい姿の金本位制に還つた諸國は、しかし金に對する深い愛着から離脱したわけではなかつた。即ち各國の中央銀行は新しく生産された金を極力吸收し、民間貯藏の金を買上げ、以前借入金の擔保となつて居た金をもその解除と共に引上げ、更に金本位復歸の爲に米國に於て借入れた資金をもその一部を金に換えて自國内に運び來つた。かくして千九百二十七年から千九百二十八年の上期にかけて、米國からは約五億弗の正貨が流出すると共に、聯邦準備銀行の準備率は昨年上期末までの一個年間に、七・四三パアセントから六三・四パアセントに減退を見るに至つた。その反對に各國中央銀行の準備率は必要の限度を遙に越えて増大した。然しこれは元々米國が歐洲の金本位復歸を促進する爲に、殊更に低金利政策を採つた結果であるが、一方この低金利が原因の一となつて同國内に熱烈な株式投機熱を煽り、正貨の流出と相俟つて二重に米國の金利高の原因を作つた。こ

ゝに於て昨年の八月以後は再び緩漫乍ら金は米國に流入し來つて居るが、各國の金に對する超理論的執着は夫々の中央銀行をして金利引上とオープン・マーケット・オペレイションを以て對抗せしめ一度び獲得したる金の流出程度を輕減せしめんとし、こゝに世界的な高金利時代を出現するに至つた。この間に於て佛蘭西と瑞西の中央銀行のみは今も猶三分五厘の低率を保つて居るが、これは兌換に打歩を附する習慣によつて正貨の流出が抑壓されて居るのと、殊に佛蘭西銀行の場合には、倫敦と紐育に二億五千七百萬磅と云ふ莫大な準備を流動資産の形で持つて居ることが正貨の流出を抑壓する力になつて居るのである。

四

然し乍ら戰時債務に於て、獨逸の賠償に於て、また百五十六億弗に餘る海外投資に於て、而して年々表裏併せて十數億弗（昨年は二十億二千七百萬弗とウインクラー博士は云ふ）に達する海外投資の關係に於て世界の經濟が依然として弗への隷屬から免れないことは最早や云ふまでもなからう。のみならず殆どあらゆる重要商品に亙つて、その世界的生産若くは消費に於て最大の割合を占め、屢々半額以上をさへ占める米國が、常に世界の物價を支配する力を持つて居ることも亦疑ふまでもなからう。然り、世界の物價は米國の物價を支配する力の桎梏の下に置かれて居るのである。この事は世界の主要國が金本位に復歸したに伴れて一層明白になつて來た。思ふに各國の物價指數には夫々技術的の相違があり、また各國の國際貸借には夫々特殊な事情があるから、それ等諸國の物價指數が常に同じ割合を以て變動すると云ふことは考へ難いことであるが、然し乍ら縱んばその特殊な事情があるにしても、金本位制度の下に於ては、各國の物價に或る一定の關係が成立することは當然である。何故なら或る國の物價がその關係を破つて特に割高となつた場合には、忽ち金の減少、通貨の收縮を來して物價を下落せしめんとし、また割安となつた場合にはその反對の現象が起り得るからである。然もこの世界物價の關係に於て、米國の物價は上述の如き理由から常に指導的地位に立たんとすることが、金本位恢復の今日に於て益々明白になつて來たのである。

然らばその米國の物價を支配する原理は何か？　こゝに歐洲戰前とは甚しい原理の變化を認めないわけにはゆかない。前にも述べたる如く、凡そ金は貨幣たることを離れてもそれ自體に於て經濟的價値を有するものであるが、然し乍ら世界各國がそれを貨幣として採用するとしないのとでは、その價値に非常な相違を來すことは當然である。即ち各國が既に與へられたる金を貨幣として採用するが爲に金の價値は高められ、或る一定量の金塊が、例へば一二三・二七四グレーンの金塊が、英貨一磅に相當する價値にまで引上げられ、從つてそれと兌換される所の紙幣の一磅が、右の金塊に相當する價値を與へられるのである。かゝる理由からして、金供給の増減が物價を左右した。これは少くとも戰前までは眞理であつたと云へる。蓋し戰前に於ける世界各國の信用及び通貨は——從つて物價は、マッケンナが云ふやうに、金の流

出によつて支配される所が少くなかつた。（McKenna: Post-war banking policy, P. 138 即ち

『戰前は各國の中央銀行は國内の通貨供給の調節を金の流出入に任せ、信用統制に就て受身的態度を採つた。即ち金が自由に流入すれば、信用と通貨は膨張し、且つ信用がその時の經濟活動の增進を支持する必要以上に與へられれば、物價は昂騰した。反對に若し金が流出すれば、信用と通貨とは收縮し、經濟活動の增進は阻止され、物價は下落傾向を示した。この事實からして、世界の物價を支配する原因は金の供給によつて決定されたのである。……而して

『各國中央銀行の斯樣な受身的態度は恐らく英國中央銀行制度の特殊な機構から起つたものである。その當時倫敦は他に競爭のない世界の金融中心であり、金の自由市場であつた。加ふるに、英國は世界の主たる債權國として、新資本供給の主要なる源泉であり、且つ國際貿易は大部分倫敦手形によつて決濟された。是等の種々なる要素は相合して、倫敦をして金の過不足がその影響を現すところの中心地點たらしめ、英國の物價水準は、金が總ての他國の物價水準に影響する媒介となつた。……

右の如くにして割引政策は金の現實的乃至は可能的移動によつて決定され、金の賣買は市中銀行の手許現金、從つて通貨の供給量を支配する最も主なる方法であると信ぜられた。尤もこの外に、中央銀行が、金以外の資産、即ち手形や證券を賣買することによつて、通貨並に信用を統制することも行はれなかつた譯ではないが、それは寔に補助的手段に過ぎないと考へられ、その實行は極めて微々たるものであつた。

五

然るに歐洲戰後、特に千九百二十年の夏頃から二十四年にかけて米國に夥しい金が流入するに及んで、その初期に當り聯邦準備銀行は早くもその影響に就て懸念し、金の流入が通貨の信用の不自然な膨張を來さしめない爲に對策を講じ始めた。即ち米國は右の内の最初の二個年に十億弗の金を輸入し、準備銀行はそれを買取つたから、放任して置けば無論それだけの通貨膨張を來す筈であつたが、事實に於ては、準備銀行は加盟銀行に對して極力割引手形の返却を要求し、一方に金買上によつて增加する通貨を他方に於て吸收し、金流入の影響を打消すことを得た。かゝる政策が非常に威力あることは、聯邦準備銀行制度制定の當時は、全く豫期しない所であつたが、戰後の甚しい金の流出入と關聯して偉功を奏し、爾來聯邦準備銀行は、その割引政策の外に、否それ以上に、金以外の資産の賣買によつて金融市場の統制を行つた。これが所謂オープン・マーケット・オペレイションであるが、その場合、準備銀行當局者にとつての通貨調節の着眼は、準備金の增減にあるのではなく、經濟活動の狀況に應じて、物價の安定を維持せんが爲であつた。蓋し物價の安定は、健全にして永續的な繁榮を齎す爲に不可缺の條件だからである。

ゝに於て昨年の八月以後は再び緩漫乍ら金は米國に流入し來つて居るが、各國の金に對する超理論的執着は夫々の中央銀行をして金利引上とオープン・マーケット・オペレイションを以て對抗せしめ一度び獲得したる金の流出程度を輕減せしめんとし、こゝに世界的な高金利時代を出現するに至つた。この間に於て佛蘭西と瑞西の中央銀行のみは今も猶三分五厘の低率を保つて居るが、これは兌換に打歩を附する習慣によつて正貨の流出が抑壓されて居るのと、殊に佛蘭西銀行の場合には、倫敦と紐育に二億五千七百萬磅と云ふ莫大な準備を流動資産の形で持つて居ることが正貨の流出を抑壓する力になつて居るのである。

四

然し乍ら戰時債務に於て、獨逸の賠償に於て、また百五十六億弗に除る海外投資に於て、而して年々表裏併せて十數億弗（昨年は二十億二千七百萬弗とウインクラー博士は云ふ）に達する海外投資の關係に於て世界の經濟が依然として弗への隷屬から免れないことは最早や云ふまでもなからう。のみならず殆どあらゆる重要商品に亙つて、その世界的生産若くは消費に於て最大の割合を占め、屢々半額以上をさへ占める米國が、常に世界の物價を支配する力を持つて居ることも亦疑ふまでもなからう。然り、世界の物價は米國の物價を支配する力の桎梏の下に置かれて居るのである。この事は世界の主要國が金本位に復歸したに伴れて一層明白になつて來た。思ふに各國の物價指數には夫々技術的の相違があり、また各國の國際貸借には夫々特殊な事情があるから、それ等諸國の物價指數が常に同じ割合を以て變動すると云ふことは考へ難いことであるが、然し乍ら縱んばその特殊な事情があるにしても、金本位制度の下に於ては、各國の物價に或る一定の關係が成立することは當然である。何故なら或る國の物價がその關係を破つて特に割高となつた場合には、忽ち金の減少、通貨の收縮を來して物價を下落せしめんとし、また割安となつた場合にはその反對の現象が起り得るからである。然もこの世界物價の關係に於て、米國の物價は上述の如き理由から常に指導的地位に立たんとすることが、金本位恢復の今日に於て益々明白になつて來たのである。

然らばその米國の物價を支配する原理は何か？　こゝに歐洲戰前とは甚しい原理の變化を認めないわけにはゆかない。前にも述べたる如く、凡そ金は貨幣たることを離れてもそれ自體に於て經濟的價値を有するものであるが、然し乍ら世界各國がそれを貨幣として採用するとしないのとでは、その價値に非常な相違を來すことは當然である。卽ち各國が既に與へられたる金を貨幣として採用するが爲に金の價値は高められ、或る一定量の金塊が、例へば一一三・二七四グレーンの金塊が、英貨一磅に相當する價値にまで引上げられ、從つてそれと兌換される所の紙幣の一磅が、右の金塊に相當する價値を與へられるのである。かゝる理由からして、金供給の増減が物價を左右した。これは少くとも戰前までは眞理であつたと云へる。蓋し戰前に於ける世界各國の信用及び通貨は——從つて物價は、マッケンナが云ふやうに、金の流

出によつて支配される所が少くなかつた。(McKenna: Post-war banking policy, P. 138)即ち

『戰前は各國の中央銀行は國內の通貨供給の調節を金の流出入に任せ、信用統制に就て受身的態度を採つた。即ち金が自由に流入すれば、信用と通貨は膨張し、且つ信用がその時の經濟活動の增進を支持する必要以上に與へられれば、物價は昂騰した。反對に若し金が流出すれば、信用と通貨とは收縮し、經濟活動の增進は阻止され、物價は下落傾向を示した。この事實からして、世界の物價を支配する原因は金の供給によつて決定されたのである。……而して

『各國中央銀行の斯樣な受身的態度は恐らく英國中央銀行制度の特殊な機構から起つたものである。その當時倫敦は他に競爭のない世界の金融中心であり、金の自由市場であつた。加ふるに、英國は世界の主たる債權國として、新資本供給の主要なる源泉であり、且つ國際貿易は大部分磅手形によつて決濟された。是等の種々なる要素は相合して、倫敦をして金の過不足がその影響を現すところの中心地點たらしめ、英國の物價水準は、金が總ての他國の物價水準に影響する媒介となつた。……

右の如くにして割引政策は金の現實的乃至は可能的移動によつて決定され、金の賣買は市中銀行の手許現金、從つて通貨の供給量を支配する最も主なる方法であると信ぜられた。尤もこの外に、中央銀行が、金以外の資產、即ち手形や證券を賣買することによつて、通貨並に信用を統制することも行はれなかつた譯ではないが、それは寔に補助的手段に過ぎないと考へられ、その實行は極めて微々たるものであつた。

五

然るに歐洲戰後、特に千九百二十年の夏頃から二十四年にかけて米國に夥しい金が流入するに及んで、その初期に當り聯邦準備銀行は早くもその影響に就て懸念し、金の流入が通貨の信用の不自然な膨張を來さしめない爲に對策を講じ始めた。即ち米國は右の內の最初の二個年に十億弗の金を輸入し、準備銀行はそれを買取つたから、放任して置けば無論それだけの通貨膨張を來す筈であつたが、事實に於ては、準備銀行は加盟銀行に對して極力割引手形の返却を要求し、一方に金買上によつて增加する通貨を他方に於て吸收し、金流入の影響を打消すことを得た。かゝる政策が非常に威力あることは、聯邦準備銀行制度制定の當時は、全く豫期しない所であつたが、戰後の甚しい金の流出入と關聯して偉功を奏し、爾來聯邦準備銀行は、その割引政策の外に、否それ以上に、金以外の資產の賣買によつて金融市場の統制を行つた。これが所謂オープン・マーケット・オペレイションであるが、その場合、準備銀行當局者にとつての通貨調節の着眼は、準備金の增減にあるのではなく、經濟活動の狀況に應じて、物價の安定を維持せんが爲であつた。蓋し物價の安定は、健全にして永續的な繁榮を齎す爲に不可缺の條件だからである。

ゝに於て昨年の八月以後は再び緩漫乍ら金は米國に流入し來つて居るが、各國の金に對する超理論的執着は夫々の中央銀行をして金利引上とオープン・マーケット・オペレイションを以て對抗せしめ一度び獲得したる金の流出程度を輕減せしめんとし、こゝに世界的な高金利時代を出現するに至つた。この間に於て佛蘭西と瑞西の中央銀行のみは今も猶三分五厘の低率を保つて居るが、これは兌換に打歩を附する習慣によつて正貨の流出が抑壓されて居るのと、殊に佛蘭西銀行の場合には、倫敦と紐育に二億五千七百萬磅と云ふ莫大な準備を流動資産の形で持つて居ることが正貨の流出を抑壓する力になつて居るのである。

四

然し乍ら戰時債務に於て、獨逸の賠償に於て、また百五十六億弗に餘る海外投資に於て、而して年々表裏併せて十數億弗（昨年は二十億二千七百萬弗とウインクラー博士は云ふ）に達する海外投資の關係に於て世界の經濟が依然として弗への隷屬から免れないことは最早や云ふまでもなからう。のみならず殆どあらゆる重要商品に亙つて、その世界的生産若くは消費に於て最大の割合を占め、屢々半額以上をさへ占める米國が、常に世界の物價を支配する力を持つて居ることも亦疑ふまでもなからう。然り、世界の物價は米國の物價を支配する力の桎梏の下に置かれて居るのである。この事は世界の主要國が金本位に復歸したに伴れて一層明白になつて來た。思ふに各國の物價指數には夫々技術的の相違があり、また各國の國際貸借には夫々特殊な事情があるから、それ等諸國の物價指數が常に同じ割合を以て變動すると云ふことは考へ難いことであるが、然し乍ら縱んばその特殊な事情があるにしても、金本位制度の下に於ては、各國の物價に或る一定の關係が成立することは當然である。何故なら或る國の物價がその關係を破つて特に割高となつた場合には、忽ち金の減少、通貨の收縮を來して物價を下落せしめんとし、また割安となつた場合にはその反對の現象が起り得るからである。然もこの世界物價の關係に於て、米國の物價は上述の如き理由から常に指導的地位に立たんとすることが、金本位恢復の今日に於て益々明白になつて來たのである。

然らばその米國の物價を支配する原理は何か？　こゝに歐洲戰前とは甚しい原理の變化を認めないわけにはゆかない。前にも述べたる如く、凡そ金は貨幣たることを離れてもそれ自體に於て經濟的價値を有するものであるが、然し乍ら世界各國がそれを貨幣として採用するとしないのとでは、その價値に非常な相違を來すことは當然である。即ち各國が旣に與へられたる金を貨幣として採用するが爲に金の價値は高められ、或る一定量の金塊が、例へば一一三・二七四グレーンの金塊が、英貨一磅に相當する價値にまで引上げられ、從つてそれと兌換される所の紙幣の一磅が、右の金塊に相當する價値を與へられるのである。かゝる理由からして、金供給の增減が物價を左右した。これは少くとも戰前までは眞理であつたと云へる。蓋し戰前に於ける世界各國の信用及び通貨は――從つて物價は、マツケンナが云ふやうに、金の流

出によつて支配される所が少くなかつた。(Mckenna: Post-war banking policy, p. 138 即ち

『戰前は各國の中央銀行は國内の通貨供給の調節を金の流出入に任せ、信用統制に就て受身的態度を採つた。即ち金が自由に流入すれば、信用と通貨は膨張し、且つ信用がその時の經濟活動の增進を支持する必要以上に與へられれば、物價は昂騰した。反對に若し金が流出すれば、信用と通貨とは收縮し、經濟活動の增進は阻止され、物價は下落傾向を示した。この事實からして、世界の物價を支配する原因は金の供給によつて決定されたのである。……　而して

『各國中央銀行の斯樣な受身的態度は恐らく英國中央銀行制度の特殊な機構から起つたものである。その當時倫敦は他に競爭のない世界の金融中心であり、金の自由市場であつた。加ふるに、英國は世界の主たる債權國として、新資本供給の主要なる源泉であり、且つ國際貿易は大部分磅手形によつて決濟された。是等の種々なる要素は相合して、倫敦をして金の過不足がその影響を現すところの中心地點たらしめ、英國の物價水準は、金が總ての他國の物價水準に影響する媒介となつた。……』

右の如くにして割引政策は金の現實的乃至は可能的移動によつて決定され、金の賣買は市中銀行の手許現金、從つて通貨の供給量を支配する最も主なる方法であると信ぜられた。尤もこの外に、中央銀行が、金以外の資產、即ち手形や證券を賣買することによつて、通貨並に信用を統制することも行はれなかつた譯ではないが、それは寔に補助的手段に過ぎないと考へられ、その實行は極めて微々たるものであつた。

五

然るに歐洲戰後、特に千九百二十年の夏頃から二十四年にかけて米國に夥しい金が流入するに及んで、その初期に當り聯邦準備銀行は早くもその影響に就て懸念し、金の流入が通貨の信用の不自然な膨張を來さしめない爲に對策を講じ始めた。即ち米國は右の內の最初の二個年に十億弗の金を輸入し、準備銀行はそれを買取つたから、放任して置けば無論それだけの通貨膨張を來す筈であつたが、事實に於ては、準備銀行は加盟銀行に對して極力割引手形の返却を要求し、一方に金買上によつて增加する通貨を他方に於て吸收し、金流入の影響を打消すことを得た。かゝる政策が非常に威力あることは、聯邦準備銀行制度制定の當時は、全く豫期しない所であつたが、戰後の甚しい金の流出入と關聯して偉功を奏し、爾來聯邦準備銀行は、その割引政策の外に、否それ以上に、金以外の資產の賣買によつて金融市場の統制を行つた。これが所謂オープン・マーケット・オペレイションであるが、その場合、準備銀行當局者にとつての通貨調節の着眼は、準備金の增減にあるのではなく、經濟活動の狀況に應じて、物價の安定を維持せんが爲であつた。蓋し物價の安定は、健全にして永續的な繁榮を齎す爲に不可缺の條件だからである。

斯くして世界の物價の規準とも云ふべき米國の物價は、最早や金の移動によつて決定されずして、たゞ準備銀行の信用膨張政策若くは收縮政策のみがそれを決定するのである。卽ち弗の價値を決定するものは、金の價値に非ずして、準備銀行の信用政策あるのみである。寧ろ、或る一定量の金が常に或る一定數の弗と交換されると云ふ保證によつて、その金の價値が確定されて居る。卽ち金の價値は弗によつて決定されて居るのである。斯くて世界が金本位に復歸したと云ふことは、實は弗本位に歸したと云つても差支へないのである。何故なら若し米國以外の諸國の物價が、金供給增加の爲に騰貴して、米國物價との均合を失つた場合には、それ等の諸國は國際貸借の上に於て支拂超過となり、結局その過剩の金は米國に吸收され、又若し、反對に諸外國の物價が、金供給不足の爲に下落した場合には、右と反對の作用によつて、結果米國がその不足の金を供給することになるからである。

最後に弗が、斯くの如く世界の物價を支配する力は既述の如く、(一)米國の生產並に消費の力が隔絕して偉大なること、(二)米國は既に世界の最大債權國として立ち、且つ年々巨額の新規對外貸付を爲す力を有して居ること、(三)然も米國の金保有高は餘りに莫大で、金準備を法律上の最低率以下に落すことなしに、金を流出せしめ得ること、(四)米國の準備銀行制度は、米國經濟の大世帶と相俟つて、同國に巨額の金流入を可能ならしめつゝ、猶その吸收した金の信用創造能力を掠ふことが出來ること等に歸するのである。

六

是を要するに、今や世界の經濟は弗が價値づけたる所の金貨幣の作用によつて、その商品生產經濟の有機性を恢復しつゝある。是が統制するに諸國も亦オープン・マーケット・オペレーションの方法を多分に採り入れて居るが、その標準は弗の價値である。かくせざる可からざると共に、かくせざるを得ないのである。かくて貨幣の弗化は、又世界經濟のあらゆる方面に亙つて、その米國化を促さずんば置かない。例へば獨逸の產業合理化も、英國の勞働爭議以後發展したる勞資協調運動も、夫々の歷史と個性とを持つそれ等諸國の經濟に對する米國化浸潤の過程に於て表はるべき當然の現象と見られる。同じ理由によつて、日本も亦金輸出解禁後に於ては、日本の意味に於ての經濟の米國化、卽ち一大產業革命――それ故に又相當に嚴しい程度の恐慌が來るべきことを覺悟せねばならぬ。それにしても特別融通による日本銀行の統制力破壞狀態は、この場合に於ける、我が財界擴大の癌と云はねばならぬ。

（完）

井上準之助論

森田久

昨年六月、金融動亂後の特融一段落を機會に日銀總裁の椅子を退き、麻布の浪居に再び財界世話業を開いて時々工業倶樂部あたりに姿を現はし、最近は株屋のお先棒となり金解禁不卽行を三土前藏相に聲明さしたことによつて、その存在を示してゐた井上準之助が、濱口内閣の大藏大臣となつた。

民政黨とは緣もゆかりもなさそうに思はれた井上が、突如として民政内閣の、然も樞要なる大藏大臣の地位に就いたことは、少からず世間を面喰はしたが、彼はそんなことには一切お構ひなく、就任後數日を出でざる内に前内閣の財政計畫を根本より覆へす大々的な緊縮政策を發表して、早くも大向ふを唸らして居る。誠に疾風迅雷、端睨すべからざるところに、井上準之助の面目一段と躍如たるものありと云はうか。

大正二年に正金銀行頭取として、始めて財界の第一線にスタートを切つて以來、日本銀行總裁たること二回、大藏大臣たること一回、戰時より戰後にかけての、劃期的大跳躍時代の財界に指導的勢力を振つて、よかれあしかれ財界に太い鮮かな線を殘して來た彼は、兎角の評はあつても、大正より昭和にかけての財界に於ける第一人者であり、偉大なる存在であることを否定し得ない。

その井上準之助が、濱口内閣によつて、積極政策より消極政策へ、放漫より緊縮への一大轉回運動が起されんとするに際し、コンダクターとして起用されたのである。今日までの彼は山本内閣の大藏大臣として、極めて短期間を政界に送つたゞけで、彼の存在は財界人として知られた、然るに今や政黨内閣の大藏大臣として、愈々本式に政界に馬を進めんとして居る。卽ち彼自身としてはその戰線を政界にまで擴大し、金融界の支配者と

斯くして世界の物價の規準とも云ふべき米國の物價は、最早や金の移動によつて決定されずして、たゞ準備銀行の信用膨張政策若くは收縮政策のみがそれを決定するのである。即ち弗の價値を決定するものは、金の價値に非ずして、準備銀行の信用政策あるのみである。寧ろ、或る一定量の金が常に或る一定數の弗と交換されると云ふ保證によつて、その金の價値が確定されて居る。即ち金の價値は弗によつて決定されて居るのである。斯くて世界が金本位に復歸したと云ふことは、實は弗本位に歸したと云つても差支へないのである。何故なら若し米國以外の諸國の物價が、金供給增加の爲に騰貴して、米國物價との均合を失つた場合には、それ等の諸國は國際貸借の上に於て支拂超過となり、結局その過剩の金は米國に吸收され、又若し、反對に諸外國の物價が、金供給不足の爲に下落した場合には、右と反對の作用によつて、結果米國がその不足の金を供給することになるからである。

最後に弗が、斯くの如く世界の物價を支配する力は既述の如く、(一)米國の生産並に消費の力が隔絶して偉大なること、(二)米國は既に世界の最大債權國として立ち、且つ年々巨額の新規對外貸付を爲す力を有して居ること、(三)然も米國の金保有高は餘りに莫大で、金準備を法律上の最低率以下に落すことなしに、金を流出せしめ得ること、(四)米國の準備銀行制度は、米國經濟の大世帶と相俟つて、同國に巨額の金流入を可能ならしめつゝ、猶その吸收した金の信用創造能力を稼ふことが出來ること等に歸するのである。

六

是を要するに、今や世界の經濟は弗が價値づけたる所の金貨幣の作用によつて、その商品生産經濟の有機性を恢復しつゝある。是を統制するに諸國も亦オープン・マーケット・オペレーションの方法を多分に採り入れて居るが、その標準は弗の價値である。かくせざる可からざると共に、かくせざるを得ないのである。かくて貨幣の弗化は、又世界經濟のあらゆる方面に亙つて、その米國化を促さずんば置かない。例へば獨逸の産業合理化も、英國の勞働爭議以後發展したる勞資協調運動も、夫々の歴史と個性とを持つそれ等諸國の經濟に對する米國化浸潤の過程に於て表はるべき當然の現象と見られる。同じ理由によつて、日本も亦金輸出解禁後に於ては、日本の意味に於ての經濟の米國化、即ち一大産業革命――それ故に又相當に厳しい程度の恐慌が來るべきことを覺悟せねばならぬ。それにしても特別融通による日本銀行の統制力破壊狀態は、この場合に於ける、我が財界最大の癌と云はねばならぬ。

（完）

井上準之助論

森田久

昨年六月、金融動亂後の特融一段落を機會に日銀總裁の椅子を退き、麻布の浪居に再び財界世話業を開いて時々工業俱樂部あたりに姿を現はし、最近は株屋のお先棒となり金解禁不即行を三土前藏相に聲明さしたことによつて、その存在を示してゐた井上準之助が、濱口內閣の大藏大臣となつた。

民政黨とは緣もゆかりもなさそうに思はれた井上が、突如として民政內閣の、然も樞要なる大藏大臣の地位に就いたことは、少からず世間を面喰はしたが、彼はそんなことには一切お構ひなく、就任後數日を出でざる內に前內閣の財政計畫を根本より覆へす大々的な緊縮政策を發表して、早くも大向ふを唸らして居る。誠に疾風迅雷、端倪すべからざるところに、井上準之助の面目一段と躍如たるものありと云はうか。

大正二年に正金銀行頭取として、始めて財界の第一線にスタートを切つて以來、日本銀行總裁たること二回、大藏大臣たること一回、戰時より戰後にかけての、劃期的大跳躍時代の財界に指導的勢力を振つて、よかれあしかれ財界に太い鮮かな線を殘して來た彼は、兎角の評はあつても、大正より昭和にかけての財界に於ける第一人者であり、偉大なる存在であることを否定し得ない。

その井上準之助が、濱口內閣によつて、積極政策より消極政策へ、放漫より緊縮への一大轉回運動が起されんとするに際し、コンダクターとして起用されたのである。今日までの彼は山本內閣の大藏大臣として、極めて短期間を政界に送つたゞけで、彼の存在は財界人として知られた、然るに今や政黨內閣の大藏大臣として、愈々本式に政界に馬を進めんとして居る。即ち彼自身としてはその戰線を政界にまで擴大し、金融界の支配者と

して振つた手腕を、更に國民の經濟生活を對象とする政治家として試みんとしてゐるのである。かくて我々は彼の過去、現在、將來に對し、いよ〳〵無關心であることを許さなくなつた。井上準之助とはそも如何なる人物であるか。

昭和二年の金融動亂により若槻内閣倒れ、政友會が之に取つて代るや、首相田中義一は黨の長老たる高橋是清を大藏大臣に起用し、動亂善後の大任を托した、所謂功成り名遂げたる高橋が、後輩たる田中の下に、國難に當るの概を以つて、老軀を挺して起つた時、國民は涙ぐましいばかりの感謝と興奮を以つて彼を迎えたものだ。

この高橋是清を一枚看板として生れた田中内閣も、施政二年の間に散々不仕鱈の限りをつくして倒れ、再び反對黨たる民政黨に天下は廻つた、然して新内閣の看板たる大藏大臣には黨外より井上準之助が起用された、が世間は如何なる目を以つて、彼の出現を迎えたか。

田中内閣は滿洲某重大事件とか、不戰條約とか云ふ、あまり公明ならざる理由によつて倒れたが、この不公明なる瓦壞に導くに至つたのは、過去二年に亙る政策上の明白なる行詰りがその根柢をなして居る。卽ち金融動亂後の跡始末は七億圓の巨費を國民の頭上に轉嫁することによりて、兎にも角にも收拾し得たが、國民の經濟生活の基調そのものは、何等改善されてゐないのみか、寧ろ金解禁に對しては倒行逆施、悉くその政策を誤つたが爲めに、經濟界は見方によつては金融動亂直後以上の不安に蔽はれて居り、これこそ田中内閣瓦壞の主因をなすものであつたのである。

こゝに於てか、昭和二年の田中内閣出現が、財界安定を使命として生れたと同樣に、若くは夫れ以上に、二年後に成立した濱口内閣の使命も依然たる財界安定に存する。然してこの使命を双肩に擔うて井上準之助は現はれたのである。

然るにも拘らず田中内閣の高橋是清が國民的歡呼を以つて迎えられたに反し井上準之助の出現は、濱口内閣に對する當初の期待を、いさゝか裏切らしめた感がないでもない。少くとも黨内の長老たる山本達雄とか、若槻禮次郎を起たしめたであらうならば、一層の人氣を博した筈の新内閣が、井上準之助の起用によつて、或る程度までその人氣を減殺された點は否定し得ない、寧ろ一部からは新内閣の前途に一沫の暗影を投じたかの如くに失望せしめて居る。かくの如く高橋是清の場合に於ては國民の無條件的歡迎を受け、より以上の經濟的國難打開の使命を帶び、晴の舞臺に乗り出した彼の場合には、失望と危懼を以て迎えられた所以は、そも何を語るであらうか。

井上準之助は大正八年より大正十二年まで、昭和二年五月より翌三年六月まで、二回に亙り中央銀行の主宰者たり、所謂通貨統制力によつて財界に指導的勢力を振ひ、短期間ではあつたが山本權兵衞内閣の大藏大臣として、關東大震災後の財政を處理した經歷を持つて居る。從つてその間に於て、彼が財界に殘した成敗の跡については、國民の頭に尙ほ生々しい印象を刻して居るのである。この國民の頭に殘された印象こそ、彼の才腕と財界に於ける地位から見れば、嶄然として群峰を拔く存在であるに拘らず、濱口内閣の大藏大臣として彼が入閣した場合に、國民が無條件の歡迎を敢えてしなかつた所以としなければならない。

更に彼の入閣が、濱口内閣の人氣を挽いたも一つの理由は、民政黨そのものの政策的良心の缺如を、彼の入閣によつて、まざ／＼と立證されたことに存する。云ふまでもなく政黨の生命は政策にあり、これなくんば政黨なるものは名實共に政權爭奪を目的とする私黨的集團に墮する。殊に民政黨は、その標榜する緊縮政策によつて、多數識者の支持を得、之によつて政權を贏ち得て居るのである。然して民政黨の政策の運用に當り、その中軸に座するものは大藏大臣である。卽ち在野時代より標榜し、國民に對し口約せる政策を實行せんとするに際し、之を扇に譬ふるならば要とも云ふべき大藏大臣の地位を、黨外よりの傭兵を以つて當らしめんとするに至つては、大膽と云はうか、無責任と云はうか、黨首その人の政策的良心の存在を疑はざるを得ないのであつて、世間が井上の入閣を意外とした所以はこゝにある。

それも井上その人が入閣と同時に入黨し、民政黨の統制と政策に無條件に服從するものであれば、深く咎むるを要しないのであるが、入閣後今日までまだ入黨のことを聞かぬ、その上に井上はその日銀總裁時代に於て、政友會内閣若くはその支持を受くる政府と相呼應して、政友會の放漫政策に片棒擔いだ人である。日銀總裁として獨立の權威を保持し、時の政權に超然として、その通貨政策によつて財界を正しくリードする勇氣を持つたならば、大正九年の反動の如きは、或る程度まで之を防止し得た筈であり、金融動亂後の特融濫發により、中央銀行としての機能を全然失墜せしめた如きも、責任の大半は彼井上が負擔すべきものである。

卽ち民政黨員の口調を藉りるならば、現在の財界行詰りは政友會の放漫政策に基因する。然して中央銀行の首腦者として、獨立の權能を發揮してこの放漫政策を制止することをせず、漫然として放任し、寧ろ之に迎合したるものは彼れ井上準之助であ

つた。民政黨平素の主張によれば彼は、財界を今日の如く行詰らしめた責任者の一人である。前内閣の政策を根本より覆へし、財界更生のために大々的緊縮政策を行はんとする民政黨が、人もあらうにこの井上準之助を迎えて、その主管大臣に据えようと云ふのだから、『大藏大臣として井上準之助氏起用』の號外が出ても、世間は容易に信じようとせず、いよ〳〵確定するに及んで民政内閣に對する期待が失望に代るに至つたのである。

かくて濱口内閣が、内閣そのものとしては曩の政友會内閣以上の期待を以て迎えられたに拘らず、大藏大臣としては曩の高橋是清の蹶起に比し、井上準之助の方が歡迎されなかつた所以が、一は彼の今日までの出所進退に關する國民の意識から來たものであり、一は彼を迎えた民政黨の政策的不見識に對する批難に存することを看取し得るであらう。

しかし、井上準之助の過去の出所進退や、その成敗の跡が如何であらうとも、濱口内閣が彼を黨外より迎えたことの是非が何れにあらうとも、大藏大臣井上準之助は厳然たる實在として我等の前に現はれた。金解禁を控えた經濟國難を打開するが爲めに、形式的には國民の輿望を負うて起つたのである。好むにせよ、好まざるにせよ、我等は暫く彼を信賴して、彼をして充分にその手腕を揮はしめなければならぬ、こゝに於てか私は、彼が公人として今まで歩いて來た足跡を一應檢討し置くの必要を認める。

彼は九州大分の生れだから、山本達雄や、故和田豊治等と郷里を同じくする。廿九年に大學を出で、當時に於る大學出の俊才逸足なるものが、多く官界を志したに拘らず、鬱勃たる覇氣を擁して日銀に入つたのが、彼の今日ある始りである。少壯行員として日銀にあるや、一目から鼻に抜けるやうな煥發の才氣は早くも儕輩を壓し、トン〳〵拍子に出世して紐育監督役となり、故三島彌太郎が正金銀行の頭取たりし時、招かれて副頭取に轉じ、大正二年には三島の跡を襲うて頭取となつた。この前後から井上準之助の存在は漸く世間的に認識されると共に、彼の功罪史は始る。更に大正八年には又も三島彌太郎の跡を享けて今度は日銀總裁となり、これから大正十二年までの彼の第一次日銀總裁時代が續いたのである。然して彼が正金頭取たりし時代の大正五六年より彼の第一次日銀總裁時代たりし大正十二年までは、我が國經濟界の劃期的大跳躍時代に相當するのであるから、正金頭取や日銀總裁と、樞要な地位にありし彼の存在が、我が國財界にとり如何に重大な役割であつたか、然してその成敗が今日の財界に如何に決定的影響を與へて居るかに關しては、改めて冗說を要しない。

大正十二年の大震災直後に、成立した山本内閣に大藏大臣となつた彼は、官僚や政黨出身の大臣の型を破つて、外見的には如何にもテキパキした小氣味よい腕の冴えを見せ、山本内閣が虎の門事件で引責すると共に、彼も惜しまれつゝ野に下り、飄然として歐米漫遊の途に上つた。久方ぶりに一介の浪人として歐米の天地に心身を靜養一新した彼は歸來財界世話業なるものを開き、相當に店も繁昌して財界の巨頭たるの地歩を確立したが、金融動亂後に田中内閣が成立するや、藏相高橋是清に招かれて再び日銀に返り咲き、金融動亂跡始末の大業に當り、特融締切りの一ケ年を經過すると共に、副總裁土方久徵にその地位を讓つて、再度の浪人生活に入つた、これが今度の濱口内閣に大藏大臣となるまでの、彼の公人として辿つて來たコースである。次はこの間に於ける彼の功罪を檢すべき順序となる。

正金頭取として在職中に於る横濱茂木家との關係は、あまりに多く世間に知られて居るが、同時にそれは公人としての彼の遣り口を象徵化（シンボライズ）したものと見て差支えない。彼は自力を信ずることの厚い男である。口八丁手八丁の遣り手であり、同時に親分肌の素質を多分に持つて居る。然して親分肌たるの素質には、清濁併合の度量？を具有することを、その條件とし、これが少くも明治より大正にかけての政界や財界に於ては、所謂大をなすの一資格とされた。俊敏と覇氣の固まりである井上が、この點を看逃そう筈はない、正金頭取や日銀總裁の地位は、井上によつて彼自身を世間的に大にする爲めに、遺憾なく利用された。清濁併合の處生法により、取引上には職權を利用する私恩は賣られ、麾下に集る乾分を各方面に配置して、その勢力を張り、後日に備ふることを忘れなかつた。茂木事件は彼のこの遣り口の最初の破綻であり、安田と結城豐太郎事件は最近に於る顯著なる實例である。結城は井上麾下の逸足であり、同時に日銀にありても、その前途を囑望された一人であつた。然るに井上は結城を日銀より拔いて安田に推薦したが、井上は日銀總裁時代は勿論のこと、その財界世話業時代にありても、結城を通じて安田を利用することを怠らなかつた。之が爲めに結城は安田一族の反感を買ひ、あたら有爲の才幹を抱いて、遂に財界の表面より退かざるを得ざる悲劇まで生んだのである。即ち茂木事件や結城事件は、自己を社會的に大にする爲めに、目的の爲めに手段を選ばざる彼の機會主義が、偶々世間的に破綻を示した例證であるが、右は彼に云はすれば猿が偶々木から落ちた例外をなすものであつて、今日まで彼がこの流儀で私恩を賣り、勢力を扶植した策戰の大部分は成功して居り、これあるが爲めに日銀總裁を退いて一介の浪人たるに過ぎなかつた井上が、尚ほ財界に於

る侮るべからざる勢力として認識され、遂には再び大藏大臣として起用される所以となつたものである。

大正四、五年より大正十二年に至る我が國財界の大跳躍時代に、正銀や日銀を主宰したる彼は、その地位にありて對策を誤らなかつたか否か、これは彼の功罪を斷ずる大きな鍵である。

二大正八年、戰時景氣の絶頂時に彼は日銀總裁となつた。彼にして若し卓越なる識見と果斷を持つ男であるならば、中央銀行が保持する通貨政策による財界の統制力を活用して、何等かのコントロールを試むべきであつた。財界が好景氣に醉ひ投機熱の流行その度を越ゆると見る時、中央銀行が金利政策に據つて之に反省を與え、恐るべき反動來を未然に防止することは、歐米各國に於て常に見るところで、これこそ中央銀行の與えられたる使命でなければならぬ。然るに井上は大正八年十一月以來、その在職中に一回も金利政策を運用せず金銀の機能を停止せしめたのみか、大正八年日銀總裁就任後の全國手形交換所大會に於て、戰後の財界反動は來らずと豫言し、しかもこの豫言は一年も經過せざる中に、大正九年三月の反動となつて裏切られたのである。

更にその前後に於て井上はアクセプタンスビル即ち輸入手形の大宣傳をやり、爲替に慣れない田舍銀行にまで輸入手形を取扱はしめ、この結果は財界恐慌の一因を作つたことも、尚ほ世人の記憶に新である。

大正十二年九月、彼は山本内閣の大藏大臣として、輸入關稅を撤廢して大々的に輸入を助長した。震災直後の復興材料輸入の對策としては、或は機宜の處置であつたかも知れない、しかし一方に正貨拂下を局限し、一方大量輸入を圖つたが爲めに、我が國爲替暴落の端はこゝに開けた、即ち結果から見れば爲替の恢復難と金解禁難の蛹は、井上の藏相時代に發生したのである。

昭和二年の金融恐慌後に、高橋是清が老軀を挺して起つたのに呼應して、彼が再び日銀總裁に就任したのは、彼によりて金融動亂の跡始末に善處せしめん爲めであつた、即ち特別融通法と臺灣の金融機關救濟の爲めに、國家が負擔を承認したる最高七億圓の融通を、國家の利益を代表して之を最低限度に喰ひ止め、金融界を安定に導くことが、彼に與えられた使命だつたのである。然るに井上はこの最高限度の七億圓を、與えられたる當然の權利なるかの如くに解して、政友内閣の三土藏相と呼應して、特融の大盤振舞ひをやり、この結果は日銀の通貨統制力を失墜せしめ、今日の金融界の病を作つたのである。

それのみではない、昨年五月特融締切の法定期間を經過するや、彼は特融貸出の後始末即ち之が回收に努力して國家の損失

を輕減することの義務を忘れたかの如く、後進に途を讓ると稱して、日銀總裁を辭した、功利的見地から云へば、彼自身としては出所進退のその機を得たるものかも知れないが、國家の重責に任ずる士として、彼の行動は果して是認されるのであらうか。

五月下旬、關係の不謹愼なる金解禁に對する行動から、有價市場に解禁恐怖相場を現はすや、井上は團琢磨、郷誠之助等と語つて、三土藏相に解禁不卽行聲明をやらして居る、しかし金解禁を豫想して、有價證券の市價が低落することは、當然のプロセスを辿るものに過ぎない、井上が濱口內閣の藏相として、最近とりつゝある勇敢なる政策よりすれば、寧ろ之を放任して、政府に向つて緊縮政策を强要するのでなければ意味をなさい、然るに漫然と不卽行聲明をなさしめるに止めたことは、確乎たる定見に基く行動に非ずして、單に株屋のお先棒を勤めたに過ぎないと非難された所以である。

かく過去十六、七年に亘り、財界の第一線にありて指導的地位を占め來りたる彼の足跡を檢する時、そこに井上準之助の人物と功罪が鮮に書き出されて居るのを發見するであらう。

彼は力の人であり、自己を社會的に大にすることの爲めに、あらゆる機會を利用したる人である。殊にその出所進退の驅引の巧なる點は、世間的に所謂なみ〳〵ならぬ腕前を持つ才人である。彼の尤も華かであつた大正八年の日銀總裁時代以後は、大正十三年より昭和二年に至る憲政系內閣時代を除き、大部分は政友系內閣の積極政策時代にあり、彼はこの政權と協調し迎合し來つたのであるから、强いて色分けをつけるならば、彼が政友會內閣の大藏大臣となつたのなら敢えて不思議としない、然も事實は世間の意表に出て、濱口內閣の閣僚となり、卒然として緊縮政策の大鉈を振り上げて居る、その奔放自在の進退、一代の才人に非ずんばなし能はざるところである。

彼の過去に於る功罪は、彼の最近十六、七年に亘る財界に於る存在が、幾許を財界にプラスしたかを計算することによつて決する。私は之に對して、前に列記したる事項以外に歸納的に斷案を下すことを避ける。しかし井上が濱口內閣の藏相として、最近發表したる緊縮政策の綱領は政友系內閣時代の積極政策を、根本から否認する思想に基礎を置いて居る、然らば財界の指導的地位にありて、政友系內閣の積極政策に片棒擔いだ井上準之助は、濱口內閣の井上準之助によつて否認されたことになるのではないか、少くも私はそう推定して誤りないと思ふ。

資本家は金を求めて手段を選ばず、サラリーマンは地位を追うて汲々たり、これが現代の世相であり、病弊である。そこに[illegible]

濟界の共存的繁榮もなければ社會の厚生もない、即ち我が國には歐米に見るやうな統制的繁榮經濟や厚生的經濟政策が確立されて居ない、然してこの弊風を助長したものが過去に於る放漫なる積極政策でなり、井上準之助はその尖端を歩いて來た一人である。しかし國民は漸くこの點に目覺めんとし、この國民的潮流に乘じて濱口内閣は放漫政策より緊縮政策への一大轉囘運動を起さんとして居る、この時、井上準之助は飜然として過去を非とし敢然起つてこの轉囘運動のコンダクターを買つて出たものと私は解したい。

從て過去の功罪の如きは、これ以上に追及するを要しない、彼の才幹と識見は、これを現代の財界と政界に比較を求むるならば、正に第一人者を以て推すに値する。若し彼によつて、濱口内閣が企てつゝある國民的運動が相當の成果を結び得るならは、彼の過去に於る功罪の一切は是正される。私は彼が既に政黨内閣に飛び込んだ以上は、從來の如く逆櫓の戰法を用ゐるを止め、進んで民政黨に入黨せんことを勸告する。特融締切後の跡始末を後任者になすりつけて、自ら潔うする如き過去に於る彼の態度は、世間的には出所進退の妙を得たものであらうが、決して彼の終りを全ふする所以ではないことも併せて附言して置きたい。

七月七日記

陽氣な風車

長田幹彦

「ちよいと、ペリカンてどんな鳥？　あんた知つてる。」

「え、知つてますとも。ペリカンてのはね、……」

「あら、そんな、口でなんか說明したつて、私にや分りやしないわよ。どうせ綺麗な羽をした鳥なんでしよ。あんた、そのクレイヨンで、ちよいと描いてみせてよ。」瑠璃子は、ハート形に口紅をさした口で、ストローをくはへながら、いかにも橫柄に我儘さうに云つた。

先刻からもう一時間あまりもカツフエ・ミグノンの薄暗い隅ッこの卓で神妙に相手になつてゐる桂は、長い蓬髮を煩さゝうに後へ搖り上げながら、

「君、こりやクレイヨンぢやありませんよ。これはパステルを描く繪具なんです。かうやつてみると、どんな紙へでもぢかに描けさうだけど、やつぱりこれはこれ獨特の紙でなけりや駄目なんですよ。」

「まあ、融通がきかないのね。まるであんたみたいだわね。ほゝゝゝゝ。ぢやいゝわ。今度くる時に、何か紙があつたらもつて來てみせてね。きつとよ。」

「え、何か探して來ませう。併し、どうしてそんなペリカンなんて鳥が必要なんです。」

「それはね、かうなの。昨夜ね、私、或る紳士とね、橫濱へ遊びにいつたのよ。さうしたらね、その紳士がホテルでアメリカ人と話してゐる間に、ペリカン、ペリカンて言葉がさかんに出たのよ。ペリカンてつちや皆でにや〳〵笑ひながら私の顏ばかしみるの。だからきつと私が、そのペリカンて鳥に似てるんぢやないかと思つてね。それで私、あんたに訊いてみた譯なのよ。

私、ペリカンに似てる？」

桂は氣が弱さうに蒼ざめた頬でにいッと笑つて、
「さあ、それは僕にはちよつと分らないな。一體烏の顏つてものは、あんまり特徴のあるもんぢやないですからねえ。」
「あら、厭だ。顏のことなんか云つてるんぢやないわよ。失禮しちやうわね。私、昨夜はね、ジャバサラサのワンピースを着てたでせう。だからその色が烏の羽の色に似てたんぢやないかと思ふわ。」と、蓮葉に云つて、瑠璃子はもうペリカンのことは忘れてしまつたやうに、「ねえ、桂さん。横濱のホテルはいついつても、實際いゝわねえ。」昨夜もね、私、ミリオンダラーを十杯も飲んぢやつたわ。それに何んて鳥だか知らないけど、鶉のやうな鳥の丸燒が、そりやとつてもおいしかつたわ。何んでもね、一皿二圓五十錢もするんですつてさ。お値段もいゝわね。」
桂は飲みさしのウイスキーをぐッと呷りながら、眼をしばたいて、
「昨夜はその儘泊つたの。」と、いふ。
瑠璃子はまだがらんとしてゐる四邊の卓を眺め廻しながら、
「無論よ。それにベットもそりや素敵だつたわ。第一スプリングが違ふわよ。私もうとても外國へ行き度くなつちやつたわ。誰れか私を連れてつてくれる人はないか知ら。活動寫眞をみてあこがれを滿足させてるなんて、全くみぢめだわね。私、外國へ連れてつてくれるんなら、どんな厭な人の云ふことだつて聞くわ。」
「行きやいゝぢやありませんか。君の美貌と手腕がありやいつだつて行けるでせう。」
「あら、いやアだ。あんたは隨分もそもそした云ひ方をするのねえ。もつとピンとなさいよ。もうお酒がないんでせう。もつと飲む。お金は足りるの。」
「え、今夜は買物をしたおつりがあるから。」
「ほゝゝ。畫家なんて實に貧弱ね。買物をしたおつりで、このミグノンへ來られちや耐らないわね。ほゝゝ。幾ら殘つてんの。私もマチニカクテルを飲むわよ。大丈夫?」さういひながら、瑠璃子は手で合圖をして、女給の一人を呼んで、酒を命じた。カクテルが來ると、瑠璃子は自分の方が先に洋盃をとつて、半分ほどひと息に飲みながら、
「お酒の味だつて、この銀座と横濱ぢやまるで違ふわね。やつぱり彼地は本場だわ。カクテルなんか、大きなピッチャーへ入れて、そのまゝ卓へもつてくるのよ。その感じだけだつて、とても贅澤だわ。あゝ、私、今夜も行き度いな。誰れかいゝ鴨はゐないか知ら。今夜はこゝの店もとても暇ね。もう何時かしら。」と、彼女は腕時計をみて、「あら、もう八時過ぎてんのね。

驚いたわね。」

桂はウイスキーを今度は惜しみ惜しみ飲みながら、

「今夜はこのお天氣だから、銀座も寂しいですよ。いくら梅雨うちでも、かうじめ〳〵降つちやあね。」

「全くね。もう今日で三日降つてるわね。先刻は一寸止みさうだつたけど、又降つて來たのね。」

すぐうへの窓からみると、プロヂエクターで横ツちよから照らし出されたすぐ眞向ふの時計店の三階には、銀のやうな雨の脚が薄明るくみえてゐた。四邊が靜かになると、舗道を歩いていく高足駄の音がものうく聞えて來た。

瑠璃子は突然欠伸をひとつして、

「あゝ、とても退屈だわね。私、踊り度いわ。今夜のやうな晩にやもう思ひツ切り踊つたら、體中にある汗がすつかり出ちやつて、さぞいゝ氣持だらうと思ふわ。私、アブれたら、自分のお金で國華へでも行かうかしら。」

そこへ眞丸く肥つた女給の一人が、變に笑ひながらひよつこりやつて來て、だしぬけに、

「瑠璃子さん。昨夜はお樂しみ。」と、聲をかける。

瑠璃子はぐるりとそつちへ體を向けて、もう氣分が變つたやうに、

「あら、春さん。昨夜はほんとに有難う。恩に被るわ。ほゝゝゝ。あんた、いつ來たの。私、さつきから待つてたのよ。延番にしたつて、隨分ゆつくり過ぎるわね。さては、……」

「違ふわよ。今日はね、私、キーさんや、ノーさんに邦樂座へ連れてつて貰つたの。」

「歸りは。」

「歸りはね、例によつて晩翠軒よ。退屈しちやつたわ。あんた何時ツから來てんの。」

「私、さうね、もう二時間位になるか知ら。」

「まだ誰おれも?」

「え、私、アブれちやつてんのよ。何うにかしてよ。今夜はお店もひどいわね。」

「今夜はどうせ駄目よ。私も、カクテルが飲み度いんだけど、桂さんにたかつちや氣の毒だわね。瑠璃子さん、あんたたからせる。」

「いゝわ。氣前よくね。ほゝゝゝ。」

「だつて、昨夜はたんまりでせう。」

「ところがね、私、歸りにこれを買つちやつたのよ。いゝでせう。」と、革の手提鞄をみせて、

「折角貰つたお金をこいつのためにまる〳〵取られちやつ

わ。とんだ誘惑ね。ほゝゝゝ。」
「でも、Mさんとてもでせう。工合よかつた？」
「とッてもよ。私、今夜にもまた逢ひ度いわ。でもね、一週間に一度でなけりや、彼方だめなんですつてね。悲觀しちやうわ。」
「聞いちやゐられないわね。私、モリオンダラーさう云つてよ。」
さう云ひながら女給のお春は酒場の方へいつて、自分でカクテールを取つて來た。そのまゝ彼女は三角なりになつた隅のところへ腰をかけて、ちびちび飲みながら、
「ねえ、瑠璃子さん、それはさうと、あんたお芝居の稽古とかつてのはどうしたの。今夜六時からだとか云つてたわね。」
「え、新劇座でせう。嘘よ、あんなこと。私もう疾うに止めちやつたのよ。だつてね、一週間出て、たつた十五圓しきやお身上をくれないつてんですもの。馬鹿々々しいわ。それッくらゐならダンス場へいつて遊んでた方がよッぽどいゝわ。」
「だつて此間は、週給百圓だなんて云つてたぢやないの。」
「ほゝゝゝゝ。飛ばしてやつたのよ。でも私は妙な性分でね、いくらヨタでも、百圓くれると信じきつてると、いつの間にかさういふ氣持ちになつて來るのね。だから可笑しいのよ。朝起きるとね、あゝ今日は新劇座で百圓くれるんだなと思ふと、もうとても一日愉快なのよ。人生が急に明るくなるわ。」
「ほゝゝゝ。困つた人ね。それで何うして、下宿のお勘定は
「そんなもの、どうだつていゝわ。まだ三月と溜めちやゐないんですもの。でも今度のとこはいゝわ。階下の旦那つてのがね陸軍省の書記をしてゝね。ちよいといゝ男なのよ。私がモウションをかけると、そりやよく踊るわよ。今朝も何んだか、奥さんとちやんちやんやり合つてゝ、とても面白かつたわ。春さん。カクテールを奢つたかはりに、あんた、煙草一本頂戴。」
「スターでよくつて。」
「結構。」瑠璃子はお春が袂からスターを出すのを、箱ごと取つて、平氣な顔で火をつけながら「私、踊り度いわ。今夜はとつても憂鬱ね。ほんとにヤーさんか、ツーさん來ないか知ら。先刻から首を長くして待つてんだけど、誰れも顔を出さないわね。今夜來た人は幸福なんだけどなア。」
「ほゝゝゝ。何にが幸福なもんか。こんな晩に捕つた人は、それこそ災難だわ。私も何處かへ遊びにいき度くつて仕様がないのよ。先刻はよつぽど店を休んで、淺草へでも行つちやはうかと思つたけど、今日はね、これでせう。」と、帶のところをぽんと叩いてみせる。
瑠璃子も洋服の胸へ手をおいて
「やつぱり。私と同じことね。ほんとに廻り合はせが悪いわ。

だから春さん。先刻からさういつてんのよ。せめて桂さんが今夜五十圓でももつてゝくれると、私、うんと面白い目に逢はしてあげるんだけど、この人駄目ね。畫家なんて、今時流行らないわ。」

「ほゝゝゝ。可哀さうに。ねえ、桂さん、あんた、こんなに瑠璃子さんに何にしてんのに、隨分御挨拶だわね。又この間のやうに醉つて、自殺をする氣にならない。」

桂は蓬髪を後へかきあげながら、照れきつたやうな顔をしてゐたが、殘りの酒を飲んで、

「いや、瑠璃子さん位、殘酷な人はないですよ。僕は一昨日の晩も、十圓とられちやつたからな。」

「あら、いつ私が取つて。人聞きの悪いことを云ふのはよしてよ。あんた、醉つて、私に斷りなしにキッスをしたんぢやないの。だから私、罰金に十圓とつてやつたんだわ。ほゝゝゝ。でも、あの時の格好つちやなかつたわね。お化みたいに、頭髪を顔へ垂らして、はァはァ肩で息をしてるんですもの。あんたほんとにあん時、惱ましくなつた。」

桂は顔を紅くして、何とも返事をしずに、向ふを向いてしまつた。

瑠璃子はゲラゲラ笑ひ出して、

「ねえ、春さん。あんた、ゐなかつたから知らないだらうけどこの人そりや可笑しいのよ。醉ふと、もう野獸みたいになるらしいのね。一寸手を握られても、そりやとても痛いのよ。することがさつでね。とても厭になつちやうの。」

桂は居耐れないやうに、いつの間にかもぞりと卓から立つて、變に氣拙さうにしてゐたが、やがて、

「おい、春さん。僕もう歸るよ。」と、云つて、そのまゝあつさり自分で勘定臺の方へいつてしまふ。

瑠璃子は一寸殘忍な眼で見送つて、

「桂さん、そんなにテレなくたつていゝわよ。早く歸つた方が無事だわ。もうさつきのおつりがなくなるわよ。ほゝゝゝ。」

と、笑つて、お春とたつた二人になると、今度は彼女は力任せにお春の肥つた二の腕を握つて、

「ねえ、春さん。どうかしてよ。何んか面白いことない。誰れかんところへ、電話かけるとこないかしら。とにかく遊び度いわね。」

お春も淡い醉ひで眼をうるませながら

「あゝ、私、今夜はどうしたんだらう。たつた一杯のカクテルで、ぼうツとしちやつたわ。」といつて、頬を押へながら「でもあんたあの桂さんに、あんなに云つちや可哀さうだわ。あんた

にそれこそほんとに一生懸命になつてゐるんぢやないの。あんな男だつてやつぱり數のうちだわよ。」

「あら、厭だ。いくら氣の毒だつて構やしないわよ。私、あんなもちやもちやした男、大嫌ひなの。貧乏で、しつッこくて、いやに正直もんでね、大體あゝいふ男はこんなところへ來るのが間違つてんだわ。だから畫の方だつていつまでたつたつても賣出せないのよ。」

「でも、あんたもう隨分長い間のつきあひなんでせう。」

「え、もう彼此れ二年位になるわ。私が美術座にゐた時分に、背景を描いてゝね。その時分から、もう變なのよ。」

「でも、一度ぐらゐあつたんでせう。」

「あら、失禮なこと云ふのよして頂戴よ。私あんな男とさうなる位なら、死んぢやうわ。もうそんな話よしてよ。私、なほ憂鬱になつちやうわ。」と、云つて、瑠璃子はもう一度四邊の卓を見渡したが、別に眼星しい客も入つてゐないので、落膽したやうに、「あゝ、今夜はもう思ひ切るかな。これから下宿へかへつて、お風呂へでも入つて、まあ寢るんだわね。いゝことのあつたあとはやつぱり駄目なもんね。」

「當りまへよ。さう慾張るもんぢやないわ。私なんか、どうして。今日はまだ一文にもなりやしないんだもの。」さういひながら、お春も兩腕をのばして、思ひッ切り大きな欠伸をした。

瑠璃子がミグノンを出たのは、それから間もなくであつた。彼女がかうやつて、カッフェで網を張ることを覺えてから、もう三月になるのである。氣の利いた、時節向きの洋裝をして、こつてりと化粧をして、宵の口から人の出盛るカッフェへいつて、思はせッ振りな樣子をしてゐると、此方ではさう努力をしなくても自然に男の方から引懸つて來た。中には隨分いゝ相手もあつて、新劇の女優なぞをしてゐるよりも、三倍も四倍も收入があつた。初めのうちは變な相手に踏込んで、とんだ目に逢はされるやうなこともあつたが、もう此頃では大分馴れて來たので、うつかりしたのはつかまなかつた。かうした世過ぎにもいろいろ手はあつて、やつぱり一月や二月では中々一人前になれなかつた。それに片棒をかついでくれる女給達との連絡が中々うまくいかないので、それが一番苦勞の種であつた。

瑠璃子がカッフェ、ミグノンへいくやうになつたのは、つひ二十日ばかり前からであつた。それまでは竹川町の裏通りにあるセントラルといふ家へいつてゐたが、そこでは女給頭のお花といふ女と勘定のことから云ひ合ひをして、到頭それなりになつてしまつた。そこは相當客種もよく馴染みの顏も可成澤山あ

つたので、瑠璃子にしてみれば随分惜しかつたのだが、さうした行懸りになつてしまつては、もう何うにも出來なかつた。一體にものごとに屈托しない性の女なので、今ではセントラルの前を通つても、別に何の感じもしないのであつた。

ミグノンのお春とは、最初から妙に氣が合つた。或晩、振りで入つたのが縁になつて、今ではもう姉妹のやうにつきあつてゐた。どんなことでも打明けて話すし、又客のことではいゝ相談相手にもなつてくれるし、うまく譲り合つて取做してもくれた。現に昨夜のごときも、或る大きな商店の店員と話しをつけてくれて二人を自動車で横濱へ遁してくれたりしたのであつた。

瑠璃子はこんなことをして、いゝ加減に日を送つてゐるのが、とても愉快なのであつた。芝の愛宕下町に二階借りをして、それこそたつた一人で、何の係累もなしにうかうかその日その日を暮らしてゐるので、全く苦勞はなかつた。取つたゞけの金をつかつて、手一杯にやつていきさへすれば、それで何うにか生きていけるので、彼女自身ではこんないゝ境涯はないとさう思つてゐるのであつた。今迄舞臺のうへで苦しんで來た昔のことを思ふと、何んだつてあんな思ひをして辛抱して來たのかとそれがあべこべに可笑しかつた。

瑠璃子は銀座通りへ出ると、もう又氣が變つてゐた。まだやつと十時になつたばかりなのに、これから綻臭いやうな下宿へ歸るのはいかにも耐らなかつた。昨夜の疲れで、先刻までは何んだか、胸のあたりがかツたるかつたが、戸外へ出て、舗道のうへをポコポコ大股に歩いてみると、輕い醉ひも出て來て、急に體が輕くなつていくやうであつた。昨夜の男は、やたらと腕を首へ捲く癖があつたせいか、彼女はまがひものゝ首飾のあたりが、まだ少し痛かつたが、そこへ濕ッぽい夜風があたるのが妙に氣持ちがよかつた。男の手帛についてゐた龍髭香の香水の匂ひはまだほんのり殘つてゐて、そんなものからも、彼女は何んとはなしに男戀しさを覺えるのであつた。

雨はまだびしよびしよ降つてゐた。人通りの少い舗道は洗はれたやうに店明りの中へひろがつて、兩方から斜に倒れかゝつてくるネオンランプの光までが、甘いやうな味覺を感じさせる。黑い傘の重なりの向ふを、電車が音ばかり立てながら影のやうに駛つていつた。圓タクの前燈も濡れしほれて、あつちにもこつちにもよぼよぼしながらかたまつてゐた。

瑠璃子はとある店の前へ立つて、無雜作に手提鞄の中をさぐつてみた。まだ二圓や三圓の金は殘つてゐさうなので、いつそもう一軒何處か變つた店を流してやらうとさう思つた。思ふと一緒に、彼女は我れにもなくにいツと笑はずにはゐられなかつた。

瑠璃子はそれでも裏通のカッフェを一軒一軒それとなく物色して歩いた。店飾りはいかにモダーンに出來てゐても、中にゐる女給の風をみないと、うつかり入れないので、彼女は人でもさがすやうな顔で、ソッと窓から中をのぞいて歩いた。何處の店もその晩は大して賑やかではなかつた。

そのうちに日吉町にあるリオンといふ店が自分でも氣に入つたので、彼女は洋傘をつぼめて、そこの扉をついと開けた。中には藤色の照明がほんのり點つてゐて、四五人ゐる女給の顔がみんなキブスのやうに白茶けてみえた。客も三四人入つてゐて煙草の烟りと酒の匂ひがむッとするやうにこもつてゐた。

瑠璃子は態と恥かしさうに、一番隅にある卓へいつて、そつと腰をかけた。自分の顔もあんなに眞白にみえるのかと思ふと、彼女は戸外で顔を直してくればよかつたと思つた。それと一緒にちらりと此方をみた客達の眼で、もう彼女は一種の直覺を感じた。この中に自分とひと晩つきあつてくれる男がきつと一人はゐるに相違ないと、彼女は無理にさう信じようとした。

脊の高い、痩せこけた女給が番とみえて、注文をきゝにやつて來た。かうした店では無論女一人の客は嬉ばないので、その女給も彈まない顔で、卓の横へ立つてゐた。

瑠璃子はのつけから、もう先の度胆をぬく氣で、がらりと態度をかへて、

「ねえ、ちよいと、私にジンカクテールを頂戴な。」と、落着いた調子で註文した。

と、女給はぢろりと此方をみて、そのまゝ默つてカウンターの方へ歸つていつた。

その時、バーには、體にしつくり合つた脊廣を着た中年の紳士が、眞鍮のレーリングのうへゝ片足をかけて、後向きになつてバアテンダーとしきりに賽を振つてゐたが、今の女給がその傍へいつて何か囁くと、その紳士は何んと思つたかいきなり此方を振顧つた。女の癖に、ジンカクテールを飲むのよとでも、その女給は囁いたやうにみえた。

瑠璃子の方でも女給のあとを眼で追つてゐたので、紳士が此方を振顧つた拍子に、ぱつたり眼と眼が合つてしまつた。その途端に瑠璃子は、あゝあの方ぢやないかと、ふいにさう思つた。

紳士の方でも見覺えがあるとみえ、さも怪訝さうに此方をじいッとみてゐたが、やがてにつこり笑つて、そのまゝ瑠璃子の卓の方へ歩いて來ながら、

「やあ、あんた、松川さんぢやないか。」と、向ふから聲をかけた。

瑠璃子もやつと相手が誰れであるかといふことが分つたので、もう頤のあたりに溢れるほど媚びをたゝへて、頓狂な聲で、

「まあ、八代さん。隨分しばらくね。」と、會釋をする。八代といふのは、瑠璃子がまだ宮島春枝達の一座にゐた時分、度々淺草で厄介になつたことのある或大きな常設館の支配人であつた。

八代は瑠璃子の向側の椅子へ無遠慮に腰をかけて、

「ほんとにしばらくだつたね。こんなところで偶然出會はすなんて、實に妙だねえ。はゝゝ。何うだい。相變らず踊つて歩いてゐるのかね。」

「踊つて歩いてゐるはないでせう。私、もうとうに女優なんか、やめちまつたわよ。」

「ほう、そりや初耳だねえ。ぢやうまいのでもつかまへて、愛の巣つて奴でもこしらへてるのかい。はゝゝゝ。」

「どういたしまして。そんなのが出來る位なら、このお天氣に銀座なんぞぶらついて歩いてやしませんわよ。あんた、察して頂戴よ。」

「はゝゝゝ。うまくいつてやがらあ。先刻一寸みた時にや、すつかり樣子が違つてるから、誰れかと思つたが、かうやつてみると、相變らず昔の瑠璃ちやんだね。併しあの時分に比べると、すつかり綺麗になつちやつたぢやないか。何處でそんな磨きをかけたんだね。」

「磨きなんか、かけやしないわよ。昔は態と男よけによごしておいたけど、此頃は生地が出て來たのよ。ほゝゝゝ。」

「かなはないなあ。すつかり達者になつちやつたなあ。」

そこへ女給がジンカクテールをもつて來たので、八代は眼をみはりながら、

「おい、瑠璃ちやん。君、こんなもの飲むのかい。呆れたねえ。」

と、云つたが、瑠璃子は平氣な顔で空嘯いて、

「御免なさい。私頂くわよ。」と、いつて、半分ほどぐツと飲んでしまふ。

八代はまじろぎもしずに、色めかしくつぼめたその口のところをみてゐたが、ポケットから煙草を取り出して、

「今君、何をしてゐるんだね。もうほんとに舞臺は退いちまつたのか。」

瑠璃子は手帛で口を拭いて、

「えゝ、ほんとうはすつかり退いた譯ぢやないけど、御存知のとほり、宮島さんの一座は解散しちやつたでせう。だから私、失業してんのよ。八代さん、何處かいゝ口はなくつて。お身上が高くつて、いゝ役をつけてくれて、それで體の樂なとこはないか知ら。」

「はゝゝゝ。結構だね、さういふところがありや、先づ私の方が先に身賣りをするよ。」と、云つて、八代も女給にウイスキイを一杯命じながら「それで、今は君、何處にゐるんだね。ほんとにまだ結婚はしないのかい。」

「結婚、笑談ぢやないわ。今頃からそんな氣でゐて、どうなるんですか。私、相變らずひとりよ。芝の下宿にゐるの。」

「ふむ、どうだかね。口だけぢや信用出來んよ。だがまあいゝさ。一人なら一人でいゝが、一體何をしてるんだね。」

「さあね。何んでせう。何をしてるやうにみえる。」

「分らんねえ。スタイルは馬鹿にモダーンだが、まさか此頃流行のステツキガールでもあるまい。はゝゝゝゝ。」

「ほゝゝゝ。いゝわね。私、そのステツキガールよ。あんた一遍私と銀座を歩いてみない。」

「からかふのはよせよ。私は人がいゝから、何んでもすぐにほんとにしちまふからね。はゝゝゝ。ほんとに瑠璃ちやん、笑談はあとにして、ほんとうのことを云へよ。ダンスホールへでも出てゐるのかい。それとも、カツフエか。」

「まあ、そんなところだわね。毎日かうやつて、ふわふわしながら日を暮してんの。何につて、きまつた仕事がある譯ぢやないわ。でも、何うにか生活だけはしていけるわね。それよりも八代さん、今夜はとても憂鬱ぢやない。」

「憂鬱つて柄でもないね。いゝ顔色をしてるぢやないか。」

「ほゝゝゝ。ほんとね。私今夜は何だか矢鱈と自烈ッ度いから憂鬱になるのね。八代さんてば。何んか面白いことない。」

「さあ、面白いことならいくらだつてあるよ。」

「あるんなら、教へてよ。教へてくれるだけでなしに、私にも一口分けてよ。あんた、お金もつてる。」

「いや、どうもズキなだなお。はゝゝ。面白い。さう來なくつちや、話が面白くないよ。金があつたら、何うしようといふんだね。」

「遊びませうよ。何か眼のまはるやうな面白いことをして遊ぶのよ。そいでなきやつまんないわ。」

「遊ぶつて、何ういふことをするんだね。一緒に何處かへ御飯でも食べにいかうか。」

「あら、そんな平凡なこと厭だわ。さうね、今夜のやうな晩は何をしたら面白いか知ら。とにかくいゝ自動車に乗つて、京濱國道を四十五哩位ですッ飛ばすんだわね。とても痛快だわ。」

「はゝゝゝ。景氣のいゝ話だね。さうして何處へいくんだい。」

「何處だつていゝぢやないの。行けるところまで行きや、あとは

何うだつてなるわ。出たとこ勝負よ。」
「はゝゝ。云ふことが思ひ切つてるね。ぢや箱根へでも飛ばすか。」
瑠璃子はもう雀踊りして、
「あら、いゝわね。箱根へ連れてつてよ。後生ですから連れてつてね。その代り宮の下か、小湧谷まで上るのよ。」
「この天氣にか。」
「無論よ。雨が降つてるからいゝんぢやないの。これからいきや、曉方までにやいけるわね。さうしませうよ。もう極めたわよ。」
八代は尖つた鼻ばかり捻ぢりながら、
「おい、まあ、まあ待てよ。その代り、私と一緒にホテルへ泊るんだぜ。それは承知だらうね。」
「無論だわ。そんなこと云はないだつて分つてるぢやないの。あんたの方でそれだけのことをしてくれりや、私だつて出すものは出すわよ。」
「徹底してるなあ。面白い。口でばかり茶羅ッぽこを云つて、あとで厭なんざ、卑怯だぜ。いゝかい。」
「ほゝゝゝ。あんたもくどいわねえ。私、そんな思ひッ切りの悪い女ぢやないわよ。それよりも、とにかくこゝへお金を出しなさいよ。一體いくらあんの。」
「おい、おい、人を侮辱するなよ。私だつて〇〇館の支配人だぜ。二百や三百の金はいつだつて、ポケットへ入れて歩いてらあね。」と、云つて、八代も酔つたまぎれに、面白づくでポケットから革のシースを出してみせる。
瑠璃子はそれを素敏ッこくひよいと攫つて、臆面もなく中を開けてみた。その中には十圓紙幣が少くとも二百圓位は入つてゐるらしかつた。その他に小切手のやうなものも入つてゐた。瑠璃子はそれをみると、兩手をあげてよろこびながら、そのままシースを平氣で自分の手提鞄の中へ押し込んで、
「さあ、八代さん、これだけありや、二三日遊べるわねえ。早く支度をなさいよ。そろそろ出かけようぢやないの。」
「氣が早いなあ。まあ、待てよ。第一自動車の用意からしなけりやならないぢやないか。はゝゝゝゝ。」
「自動車なら、私の知つてる家があるから、そこへ電話をかけるわよ。」
「圓タクなんざ御免だね。少しぴんとした車でないと、生命を粗末にすることになるからね。まあ、待てつてば。私が今、ラチエーターの前へ横つちよに字のかいてある車を呼ぶから、默つて待つてろよ。」

「あら、ホイツペツト。」
「笑談いつちやいけない。」
「ぢや、スター。成つてないわね。ほゝゝゝ。」
「どうも上ッ方の車を知らない奴は話せないな。君、パッカードの二十八年式なんて車に乗つたことはなからう。あれなら箱根までひとッ駛りだからな。」
「あら、まあパッカード。パッカード位知つてるわよ。パッカードなら、とても素敵ね。私、嬉しい。是非それを呼んでよ。」
「はゝゝゝ。參つたらう。まあ、とにかくその前に、うんと飲んでおかないとなあ。途中で醉ひが覺めると、ギヤスリンをくれるところがないからな。」
「ほんとにさうだわ。お酒が覺めると、男の方つてものは、すぐに里心がつくから駄目よ。何んなら、キング・オブ・キングスでも一本買込んだいつたら何う。」
八代はもういゝ加減醉つてゐるので、ふらふらしながら便所へ立つていつた。瑠璃子はその間に、コンパクトを出して、顏を直したが、ぽうッと醉ひが眼に出てゐるので、いつもよりひどく艶めかしかつた。自分でもこれならばと思へるほど綺麗にみえるので、それがまた彼女には何よりも滿足なのであつた。

自動車は旋風のやうに雨に濡れた國道を疾驅していつた。スピードメーターは薄青い光の中で、焦らだたしさうに慄へてゐた。時速四十五哩。瑠璃子は自分で車内の電燈を消して、
「もう燈を消したつていゝわね、八代さん、もつと此方へ寄つてよ。私、よつかゝるところがないんだもの。」と、云つて、態と甘えるやうに八代の肩へしなだれかゝりながら、「でも、到頭出て來ちやつたわねえ。今夜は偶然なんで、猶ほのこと面白いわ。あんた、どう。もう後悔してるんぢやない。」
八代は笑つて、
「笑談いつちやいけないよ。君こそ、とんだことをしたと思つてるんだらう。あんまりどうも調子がよすぎたからね。」
「あら、私、こんなこと何んでもないわよ。これからアメリカへいくつて云はれたつて、平氣だわよ。」
「まさか、何んでもアメリカへはとばさないから、安心してゐたまへ。併し夜よなかに、箱根なんかへすッとんで、何んとも思はんのかねえ。全く日本の女も變つちまつたもんだなあ。藝者達だつて、一寸今の時間ぢやしりごみするからなあ。」
「ほゝゝゝ。そこが人生ぢやないの。一體あんた方は、あんまり藝者なんかの古い傳統に甘やかされすぎてるから駄目なのよ。その證據にや、きまつて何かつていふと藝者を比較に出す

んだもの。誰れだつて男の人はさうだわ。藝者が女を代表した時代はもう過ぎ去つちやつたのよ。」

「ほう、大した氣焰だね、面白い。僕は興行師だから、さういふ話を聞くのが大好きなんだよ。一體今の女は、人生つていふものをどう考へてるのかね。御高說を承はり度いもんだね。」

「え丶、私、今夜はあんまり思ひがけなかつたから、そりや嬉れしいの。何んでも饒舌るわ。その代り途中で草臥れちやつちやいやあよ。よくつて。」

「そりや我慢をすらあね。」と、いつて、八代は體の位置をかへながら。「それではね、先づ第一に聞くが、一體君は、今何をしてるんだね。それから先に白狀しろよ。」

「ほ丶丶丶。まだ氣になるのねえ。そんなに恐がらないだつて大丈夫よ。私、ステッキガールだと思つてりやい丶ぢやないの」

「それがさ、僕も此間ッからそのステッキガールなるものに逢ひ度いと思つて、そりや毎日毎日銀座へやつて來て物色してるんだがねえ。まだ不幸にして、一人も出會はさんのだよ。ところでね、僕考へるのに、丁度我々興行師が社會へ向つて一種の術策的な宣傳法を用るるやうに、ありや何處かのカッフエか何んかの、頭のい丶マネーヂャーがい丶加減にでつち上げた幻影なんぢやないかと思ふんだがねえ。つまり社會それ自身もあんな幻影をこしらへて、それを銀座のやうな賑やかな街の中へおッ放して、いい氣持ちになつてお互に享樂してるんぢやないのかねえ。どうだい、君達の側からみて、どういふ判斷を下すね。」

瑠璃子はしきりに行進曲の足拍子をとりながら、

「さうね。そりやほんとの職業的なステッキガールなんてものは、先づないわね。唯ステッキガールつてなもの丶內容に變り得る女は澤山あるわね。假りに私達にしたつてさうよ。自分ぢやさうぢやないと思つてるけど、一方からみりや立派なステッキガールだわ。新聞記者なんてものは、ほんとにうまい名をつけるもんだわね。昨夜もその話が出て、大笑ひをしたのよ。」

「ところが君、君がもしステッキガールだとすると、その內容は何うなんだね。」

「つまりステッキガールぢやないの。男の人と生活のうへでは何の交渉もなくて、唯一緒になつて遊んで歩く。訪問用のもあれば、觀劇用のもある、それから又散步用のもあるわ。一番多いのは、活動用のだわね。ほ丶丶丶。」

「それで結果は何うなるんだね。やつぱり貞操を販賣するのかね。」

「そりやあんた、男の人次第よ。男の人がそれを要求すれば、何うにだつてなるわ。自體女なんですもの。」

「ぢや昔のさうした女と少しも違はんぢやないか。ちつとも新しいところはないんだね。」

「新しいなんて、そんなこと見方次第ぢやないの。私、でもね、藝者やなんかとは、貞操に對する觀念が違ふと思つてるわ。あゝいふ階級では、もう唯單に賣買するつてだけでせう。それに境遇からいつたつて、一種の奴隷だわね。ところが私達はさうぢやないわ。かうみえたつて、ちやんと貞操觀念はもつてるわよ。」

「それは又どういふんだね。」

「そりやさうぢやないの。私達は自分に愛人なり、良人なりが出來れば、それからが初めて、貞操つてものに價値が出來てくるんだと思ふわ。そんなもの、ないうちは、私達の貞操はあらゆる男のもんだとさう思つてるんですもの。だからそれを金で買ふ人が出てくりやいつだつて賣るわ。相場次第ぢやね。その代り無條件ぢや厭なの。それぢやあんまり自分てもの、意識がなさすぎますものね。」

「何ういふ條件をつけるね。そいつは聞きもんだね。」

「そんなこと簡單だわ。つまりね、私達も唯お金をもらふだけぢや厭なのよ。自分達も一方ぢや若さつてものを享樂しなくつちやねえ。そこが昔の女と違ふところぢやないかと思ふわ。切迫つまつた社會に生きてるんですもの。私達には私達の享樂つてものがあるわ。」

「活動をみて、支那料理をくつて、シャルムーズの服がきたい位のところだらう。はゝゝゝ。」

「ところが、それだけぢややつぱり納まらないわよ。これでお金をため度いなんて慾もあるのね。」

「金をためて、何うするんだい。」

「外國へいきたいわ。一生に一度はどうしたつて、外國の土を踏んでみたいわね。それが私、一生の希望よ。」

「はゝゝ。外國へいつたつて仕樣がないぢやないか。彼地で何をするんだね」

「いゝえさ。唯私、ニューヨークの町だの、パリーの町だのをやたらと歩いてみたいのよ。それだけなのよ。」

「はゝゝ、歩くだけか。それぢやつまらないぢやないか。」

「でも、私、それつきや考へられないんですもの。やつぱり教養がないからだわね。もし私にもつと教養があれば、あれもし度い、これもし度いつてことがもつとよく分るのね、きつと。でもそんなこと何うだつていゝわ。唯外國へいけさへすりやそれでいゝんだもの。」

「實に吞氣なもんだなあ。よくもそんなことを考へて、ふわふ

わしてゐられるもんだなあ。一體君なんざ、先のことなんかちつとも考へんのかね。」

「先のことつて、何あに。」

「いや、將來の生活のことさ。君だつていつまで若くてゐられる譯でもなからうし、ちつたあ行末のことも氣にかゝりさうなもんだがねえ。」

「あら、厭だ。そんなこと私、考へやしないわ。私達の仲間は皆さうよ。私達はどうせ生きてる以上は何うにかなるに極つてゐるんですもの。それはもう信じきつてるわ。年をとりやお婆さんになる、それだけぢやないの。もつと先のことを云やあ、死ぬと、もうはつきり分つてるわ。ほゝゝゝ。」と笑つて、瑠璃子は自働車の行手をすかしてみながら、「とても素晴らしいスピードねえ。もう大森も通り過ぎちやつたのねえ。運轉手さん。今何哩出てんの。」

運轉手はむッつりした調子で、

「五十哩です。」と答へる。

「まあ、五十哩。いゝわねえ。この車はスプリングがいゝから、丁度操られてるやうな快感があるわね。あら、八代さん。厭だわ。あんた、そんなに離れちまはないだつていゝぢやないの。肩へよつかゝらしてよ。あんた、割りに肥つてんのね。」

八代は又坐りなほして、

「いや、僕はもう顏負けしちやつたよ。とても交ひきれないね。」

瑠璃子はその腕をぎうッと握つて、

「あら、そんなこと駄目だわ。そいぢや約束が違ふわ。もうあんた里心がついて來たんでせう。意氣地がないわね。」

「いや、さういふ譯ぢやないさ。だが、僕等にや、君の心持ちがよく分らないんだよ。やつぱりさういふもんかなあ。」

「ほゝゝゝ。厭に考へ込んぢやつたのねえ。駄目ねえ。そんな心持ちなんか、分らなくつたつて、ちつとも構はないぢやないの。私はとにかく箱根へさへいけばそれでいゝのよ。箱根へいくつてことさへ享樂出來れば、つまり今日一日は生き甲斐があるでせう。あゝほんとに面白いなあ。今日は生きてゐて、ほんとによかつたと、さう思へれば、そいでいゝぢやないの。」

「まあ、そりやさうだがね。併しそれだけぢや何んだか食ひ足りないんだよ。何の目的で遠い夜道をかけて、箱根へいくのか、そこがはつきりしないからね。」

「あら、いやあだ。つまり自分の力で女一人を燥ばしてやるんだと思へば、充分男の誇りになるぢやないの。つまり世の中にや、それだけのお金さへ自由にならないやうな男の方がはるか

に多いのよ。それであんた優越感を感じない。」
「さあ、どうかね。僕としちや、それだけの金を殘しておいてこのお盆に從業者にボーナスを一圓でも餘計にやつた方がいゝやうな氣もするね。常設館だつてもう此頃は純然たる資本團體になつてるからね。」
「まあ、淺猿しいわね。そんな氣でゐるの。男つて分らないもんね。だから途中で草臥れちまふんだわ。さういふ考へ方をするから、女の貞操なんてものが漸次安ッぽくなつちまふんだわ。ほんとにしつかりしてよ。私の體だつて、箱根まで一緒にいつてあげりや、二百圓や三百圓の價値はあるわよ。さ、八代さんウィスキイの栓をぬいてあげるから、ぐッと一杯お飮みなさいさうすりや又氣がかはるわよ。ほゝゝゝ。」
瑠璃子はさういひながら、坐席の隅へ倒れないやうによせかけてあつたウィスキイの壜を手探りでとつて、その栓をぬくと八代の口のところへもつていつて當てがつてやつた。八代も暗い中で瑠璃子の手を握りながら、ぐッとひと息に喇叭飮みをした。危く咽せさうになるのを彼はやつと押へながら、
「あゝ、このスピードで搖られながら飮む酒は、あんまりうまくないね。一體この車は何處を駛つてるんだね。眞暗なんで、ちつとも方角が分らないぢやないか。」
瑠璃子もそつとウィスキイの壜を口へもつていきながら、
「もう六鄕を渡つちまつたわよ。川崎を出ると、すぐに橫濱だわ。さ、もつと此方へ寄つてつてば。どうしてさう遠慮をするの。」
自動車の前窓からみると、ヘッドライトへ來てあたる雨の脚が、まるで銀粉のやうにみえてゐた。坦とした國道には、もう方々の店屋も閉つてゐて、橫濱の方から逆に疾驅してくる自働車は、宙を飛ぶやうに車窓を掠めていつた。
八代は却つてあべこべに瑠璃子に愛撫されてゐるやうな形になつて、だんだんと言葉少なになつていつたが、瑠璃子はそれを自烈ッ度がつて、
「ねえ、八代さん。あんた、今〇〇館で毎日何をしてんの。此頃は何う。あの館は隨分上るんでせう。」
八代は煙草をとりだして、チユッとマッチを擂りながら、
「いや、この頃はこの景氣だから、大したことはないよ。それにもう時勢がすつかり變つてしまつたからね。淺草も昔の夢はみてゐられないんでね。」と、いつて、煙をつゝましやかにふうッと吐きながら「實はね、今度僕の方の館でも、ボードビルをやつてみようと思つてね。それで苦心をしてゐるのさ。」
「まあ、ボードビルを。素晴らしいわね。もうさういふものが

客をよぶ時代よ。私を使つてくれない。」
「君を使つて、何をやるんだい。」
「それだからさ、私踊るわよ。オリエンタルダンスだつて、何だつて踊つちやうわ。私、裸になると、これで割合に肉體は綺麗なのよ。私オリエンタルダンスなら、客が呼べると思ふわ。私もう三度の御飯よりも踊りが好きなのよ。皆で氣狂ひあつかひにして困つてんの。さうでせう、少しでもお小遣ひが殘ると、すぐにダンスホールへいつちやうんですもの。」
「だが、ソシアルダンスぢやなあ。」
「いゝえさ、私、トルコの踊りだつて、印度の踊りだつて、何んだつてやれるわ。それよりも、ジャズがいゝか知ら。ジャズのいゝのを伴奏につかつて、思ひッきり踊らしてよ。私さうすりやお給金なんか要らないわ。」
「はゝゝ。うまくいふね。それで客がくりや、申分はないが興行つてものは、さううまくはいかないもんでね。」
「だつて、どうせボードビルにすりや、山カンでせう。日本にやまだ本ものはないんだから、精々ヨタの方がいゝわよ。私だつて名前をかへて、宣傳すりや、お客は食ひつくわ。何う。ひと山張つてみる氣ない。」
「まあ考へさして貰はふ。うまくはめりや成る程、わッといふかも知れないね。僕はそれで毎晩銀座へ出て、世の中の移り變りを研究してるんだが、どうにもうまい趣向がつかないんでね。成る程、そりやいゝかも知れないね。警察さへ大眼にみてくれりや、オリエンタルダンスを出すんだね。」
「あら、儲かる話になると、すぐに元氣が出てくんのね。現金ね。もつと此方へいらつしやいつてば。私にオリエンタルダンスを踊らせるんなら、もつともつと私に切り込んでこなくつちや駄目よ。西洋でもさうだつてぢやないの。踊りッ子の肉體は、興行主が一番よく知つてるんですつてね。さうなるべきだわ。ほゝゝ。もしさうなつたら、私も一生懸命になつて働くわ。好きな道で生きてけるんですものね。私だつてさういつまでこんなピクニック川のステッキガールでゐたかないわ。大分話がしんみりしてきたわね。あんた、もう一杯飲む。いや。こゝは何處かしら。あゝもう鶴見だわ。あの山が總持寺ね。とてもいいスピードね。私、嬉しくなつちやつたわ。煙草一本頂戴つたら。」と、云つたかと思ふと、彼女はテンポの早いジャズの拍子を頻に靴の爪先で刻みながら、小聲で何か唄をうたひ出した。
八代は彼女の肩を支へながら煙草ばかり吸つてゐた。
横濱へ入ると、雨はいつの間にかあがつてゐたが、地いきが強いせいか、一間先もみえないやうなひどい霧が下りてゐた。方々の軒燈は丸くぼやけて、電車道には水溜りがぎらぎら光つてゐた。時計をみると、もう午前一時に近かつた。—完—

日本エロチック作家論

大宅壯一

一

「由來大衆とは、文學に『好色』と『好戰』との二つしか求めぬものらしいんである。今日の大衆について云ふならば、通俗小說(現代物)が、卽ち好色的文學。大衆小說(時代物)が、卽ち好戰的文學。通俗文學ばかりでなく、藝術小說に於ても、この二要素の二つともが、いづれかの一つを、ある程度まで含んでゐない作家は、決して多數の讀者を獲得することが出來ないのである。」(『文藝春秋』五月號所載、川端康成君の「文藝時評」)

文學が人生の表現であるとするならば、すべての人間にとつて、生命の緊張が頂點に達する瞬間――性的愉悦の刹那と生命の危機とが、文學の內容として重要な地位を占めるものであることはいふまでもない。文學に於ける好戰的要素については、又別に改めて論ずることにして、今はたゞ、文學に於ける好色的要素の意義、種類、役割について、簡單な考察を加へたい。

フロイド流の唯色史觀によれば、文學はもちろん、すべての藝術は、人間の性的活動の變形なのである。かういふ極端な說は容易に承認しがたいとしても、少くとも從來の文學に於ては、性的要素がその王座を占め、酒に於けるアルコールに近い役割を演じてゐることは明らかである。

だが、酒にだつて色々ある。燒酎やブランディのやうに强烈なものもあれば、酒に非ずとさへ云はれてゐるビールもあり、最近流行のカクテールもある。同樣に、文學に於ける性的要素にも、種類もあれば强弱もある。

私がこれから問題にしようとするエロチシズムとは、單なる戀愛の表現でもなければ、露骨な性慾描寫でもない。文學といふ形式を通じての、人間の性的欲求や性的行爲の技巧的な表現である。

性慾は厳粛な事實である。だが、社會の逃避層にとつては、それはもつとも刺戟的な遊戲の對象になる。從つて、從來主として逃避層の逃避の對象であつた文學に於て、エロチシズムがその必須的要素となつてゐるのは、全く無理もないことである。

又逃避にも色々ある。技巧的な性的遊戲若しくはそれの自慰的表現に生活の意義を求めるのも逃避であれば、白雲飛ぶ深山の瀧の下に草庵を結んで詩作に耽るのも逃避である。後者が前者を嗤ふのは、南畫家が浮世繪畫家を卑しむやうなものだ。いづれも現實遊離の二つの形式にすぎない。

前に引用した川端君の言葉が明らかに語つてゐるやうに、今や時代は末期に近づいて、世人は益々強烈な刺戟を要求してゐる。阿片やアルコールやニコチンの、より大なる含有量を要求してゐる。

私はエロチック文學を專門的に研究してゐるものではない。だが、この際日本の文壇を一通り見渡して、かうした方面を代表する人々の作品を檢討してみるのも、満更無意義ではないと考へたので、本誌の需めに應じて少しばかり調べてみた。もちろん倉皇の間に執筆したことゝて、多少の思ひ違ひや脱漏は免れがたいと思ふが、一種の文壇側面史、裏返しにしてみたブルヂヨア文學史を瞥見するつもりで、讀んで頂ければ幸甚である。

二

近代日本文學は、江戸時代の軟派文學の系統を引いて發達したものであるが、この江戸軟派文學、わけても末期の戲作者の手になる草紙類が、如何に猥褻なものであつたかはいふまでもない。明治以後の作家でも、耽美派、享樂派、頽廢派、遊蕩派等の名で呼ばれてゐる人々、わけても東京で生れて東京で育つた人々の作品は、この傳統の烙印がはつきりと押されてゐる。

永井荷風は、現文壇が有する唯一の、といふよりはむしろ、完璧の域に達した戲作者である。もつとも彼の作品は、夙にフランスの近代文學の影響を受けたゞけあつて、江戸末期のものとは比べものにならないが、その材料、主題、色調、構成等は、ほとんど江戸時代そつくりである。彼のエロチシズムも、既に明治三十年代に洋行して、ワシントンでイヂスとかいふ娼婦に深く馴染んだことのある人が書いたものとは思へないほど江戸的である。どれもこれも、下町風の放蕩児と、藝者と、待合のコンビネーションから成るエロチシズムである。

大正四年に書おろしの單行本で出して、すぐ風俗壞亂で發賣禁止になつた『夏姿』といふのは讀んでゐないが、彼は大正五年に雜誌『文明』に連載した『腕くらべ』に、思ひきつてエロチックな

場面を增補し、二百部ばかりの限定版にして知己に配つたさうである。私は讀まないが、讀んだといふ友人から聞いたところによると、一節々々にちやんとクライマックスがあつて、脚本としての出來榮えは素晴らしいものださうだ。

だが、今日のヤンガー・ゼネレーションと彼の作品との間は、既にかなり大きな時代的距離が出來てゐる。藝者が旦那の眼を盗んで役者と通ずるといつたやうな場面は、いかに巧妙に描かれてゐても、やはり歌麿の春畫を見るのと、少しも變りはないのだ。

谷崎潤一郎は、荷風に比べると遥かに複雜で近代的だ。『刺青』その他初期のものには、江戸末期的な色彩が濃厚に出てゐるが、『痴人の愛』などには、極めてモダーンな、全く新しい型の女性が鮮やかに描き出されてゐる。一時女學生の間に大いに流行した「ナオミズム」といふ言葉は、この小説のヒロインの名から來てゐるのだ。

だが、彼のエロチシズムはノーマルではない。極端なマゾヒズムや殘虐なサディズムに偏しすぎる。さういふ變態的な性的關係から來る兇暴な男女間の爭鬪に興味を感じすぎる。友人の姉の小便を飲んだり、女が洟をかんだハンカチを舐めたり、女裝をして淺草を歩き廻つて巡査につかまつたりするのは、正氣の沙汰とは思へない。

それから彼は、全體としての女よりはその肉體の一部、特に足に對して非常な興味を感じる。彼と一緒に遊んだことのある私の友人も言つてゐたが、彼は女が來るとまづ第一に足を見て、氣に入らなかつたら、早速歸つてしまふさうだ。彼が如何にそのエロチシズムの重心を足に置いてゐるかは、『富美子の足』といふ小説を見ればよくわかる。

それは質屋の隱居が富美子といふ妾の足の美を享樂することばかりを書いたものであるが、隱居は臨終に際してこんなことをいふ。

「お富美や、後生だからお前の足で、私の額の上を暫くの間踏んで居ておくれ。さうしてくれゝば私はもう此のまゝ死んでも恨みはない。……」

そして彼はこの物語を次のやうな言葉で結んでゐる。

「お富美さんがさうしてくれたお蔭で、老人は無限の歡喜のうちに息を引き取ることが出來たのでした。死んで行く隱居には、顔の上にある美しいお富美さんの足が、自分の靈魂を迎へる爲めに空から天降つた紫の雲とも見えたでせう。」

かうした足に對する彼の拜物教的態度は、彼の多くの作品に現れてゐる。例へば『痴人の愛』にも、次のやうな描寫があちこ

ちにゐる。

「寢惚けて足の裏を舐めたつてね。」

「足を舐めたつていゝぢやないの。讓治さんなんか始終だわよ、顔より足の方が可愛いゝくらゐだつて云ふんだもの。」

要するに彼の文學は、既に三期に入つた社會の爛れた局部そのもの丶やうなものである。

里見弴もやはりこの系統の作家である。彼の作品は、潤一郎のそれのやうに生理的な變態性慾ではないが、社會的な變態性慾——即ち姦通を取扱つてゐる場合が甚だ多い。好んで藝者や役者を題材にする點は荷風に似てゐるし、あやしげな西洋人を引き入れて、新しい刺戟味を出さうとしたりするところは潤一郎に似てゐる。

『大道無門』『善心惡心』『俄あれ』『おせつかい』等、すべてエロチックな要素の漲つてゐないものはない。描寫は大して露骨ではないが、非常に效果的である。『多情佛心』には、西洋人の妻になつた日本の女が、自宅の押入を改造して、その中で媾曳するところが細かに書いてあるが、實に手に入つたものである。『凡夫愛』には、年增の人妻と出入の若者とが、手紙の奪ひ合ひをするところが、巧みに、感覺的に描かれてゐる。

彼は冴えた技巧をもつた作家である。その技巧は、最初はかなり人生の多方面に亘つて用ゐられてゐたが、近頃はかうした戀愛遊戲しか描くことが出來なくなつたか、或は別な對象を描く興味を失つてしまつたらしい。

死ぬ前は築地に立籠つてかなり左傾したといはれた小山内薫も、一昔前は、やはりこの種の作家であつた。『大川端』や『背教者』の中にも、エロチックな場面が隨分あるが、前に出て發賣禁止になつた『伯林夜話』といふ短篇集には、ひどいのが澤山ある。中でも『×を賣る男』といふのは、伯林の公園中に於ける性的亂舞を描寫したものである。

近頃は病氣で何も書けなくなつた宇野浩二も、『藏の中』に現れてゐるやうな一種の頹廢的なエロチシズムをもつた作家である。有名な『戀愛合戰』は、彼と澤田正二郎と大錦と渡瀨淳子と鍋井克之との五角關係を書いたものであるが、大して露骨な描寫は見當らない。

三

次に自然主義系であるが、さすがに近代文學に於ける性慾描寫の本家であるゾラやモウパッサンの影響を受けたゝけあつて、エロチック作家が頗る贍富である。

わが國に於けるこの運動の先驅者である二葉亭四迷は、その

代表作『平凡』に於て、これまで貴重品若くは下等品扱ひされてゐた性慾を一つの平凡なる日常事實として取扱つて、極めて無雜作な筆致で、しかも巧妙にそれを描寫し、次のやうな抗議を呈出してゐる。

「人は皆隱れてエデンの果を食つて、人前では是を語ることさへ恥る。私の樣に斯うして之を筆にして憚らぬのは餘程力むから出來るのだ。何故だらう？　人に言はれんやうな事なら、爲んが好いぢやないか？　敢てやるなら誰の前も憚らず言ふが好いぢやないか？　敢てしながら恥るとは矛盾ではないか？　矛盾だけれど、矛盾と思ふ者も無いではないか？　如何いふ譯だ！」

これは自然主義の哲學であり、性慾描寫の解放の原理である。

自然主義の代表的作家の中では、國木田獨步がエロチック作家として優れてゐる。中でも『正直者』と『女難』とは、明治になつて現れた最初の肉慾小說だといはれてゐる。

島崎藤村は、同じ自然主義作家でも、道德的な殼に入り易い性質だから、エロチックな要素が少い。『新生』その他にいくらか出てゐる位のものだ。

田山花袋の『蒲團』は、その「大膽な性慾描寫」をもつて後世に聞えてゐるものだが、今讀んでみると隨分おまいものだ。

「……芳子が常に用ゐて居た蒲團――萌黄唐草の敷蒲團と、綿の厚く入つた同じ模樣の夜着とが重ねられてあつた。時雄はそれを引き出した。女のなつかしい油の匂ひと汗のにほひとが言ひも知らず時雄の胸をときめかした。夜着の襟の天鵞絨の際立つて汚れて居るのに顏を押附けて、心のゆくばかりなつかしい女の匂ひを嗅いだ。」

文學史的に有名なこの終の句も、誰かも言つてゐたやうに、今なら全く鼻持ちのならないものだ。近頃なら、田舍の同人雜誌にだつてこんなものが出れば笑はれるだらう。

岩野泡鳴の『征服被征服』は、野獸的で、デリカシーがなさすぎて、性慾描寫ではあるが、エロチックとはいへない。

上司小劍の『父の結婚』には、後に述べる室生犀星の作品に見るやうな少年期の性慾が巧みに描かれてゐるが、正宗白鳥の作品は全體的にくすんでゐて、エロチック描寫のはつきり出たものがない。強いて求めれば『落日』くらゐのものだ。

德田秋聲の代表作『黴』、『あらくれ』、『爛れ』などは、さすがに「生れたる自然主義者」の作だけあつて、性慾描寫も、部分的にではなくて全體的に表現されてゐて、それがすつかり板についてゐる。

だが、最近の「順子もの」になると、少々亂調子だ。「春近し」

に出てゐる、大森の望翠樓ホテルの一室で、顯子とおぼしき女を負つて歩くところなどは辟易する。

近松秋江の未練文學にエロチシズムを感ずる人はもう餘程少くなつたゞらうが、彼の代表作『疑惑』中の左の一節は、一時代前の自然主義的感覺の見本として面白いから、少し長いが左に引用する。自分を捨て、行つた女の生活を想像するところである。

「……落着いた小さい部屋に簞笥があつて、火鉢があつて、小ざつぱりとして、裕福さうに見える。冬ながらもう疾くに太陽は高く昇つてゐるので、十七人の健康さうな小女が効々しい襷がけでお勝手の方で何かごと〳〵いはしてゐる。何處かに、雨後の清淨に足駄を洗つたのが歯を上に向けて置いてあるのが見える。……私の家にゐるとき一寸々々着に仕舞つておいたあの紅絹裏の柄の好い紡績の絣の袷などを惜氣もなく寢卷に着下してゐるであらう。それを着て何時までも寢てゐるところが見える。」

自然主義の中へ入れてい、かどうかわからないが、細田民樹、同源吉、廣津和郞なども、すぐれたエロチック作家だ。兩細田が「轉向」して『文藝戰線』の同人になる前の作品には姦通ものが多い。和郞の作品のほとんどすべては、下宿屋とカフエーに材をとつたエロチック文學である。『轉落する石』の中には、容貌の醜い男が、下宿屋の廊下を隔てた向ひの部屋で行はれる情事に耳を立て、悶え苦しむところが實によく描かれてゐる。いつか『改造』に出た『別離』といふ短篇では、汽車の中で西洋人の男女が横濱から鎌倉まで接吻し續けてゐるのを書いてゐる。

これを要するに、自然主義作家は、人生の「眞實」を捕へようとして、「科學的解剖」の網をうつたが、肝腎のものは皆逃がしてしまつて、たゞ昔ながらの男女關係しか掴み得なかつたのだといへるであらう。

四

私はこの小論を草するに當つて、なんでもないことではあるが、今まで氣がつかなかつた一つの事實を發見した。といふのは、日本に於けるもつとも優れたエロチック作家は、いはゆる「人道主義」系と目されてゐる人々の間に多いといふことである。

デカダン作家のエロチシズムは、刺戟的ではあるが、偏奇的で一般性を缺き、自然主義作家は、大膽に性慾を解剖はしてゐるが、案外にエロチシズムに乏しいのに反して、「人道主義」作

家は、性慾の不自然な抑壓から來る激しい憧憬をもつてゐる。從つて彼等の性慾描寫には、情熱と、潤ひと、技巧と、濃厚なエロチシズムに必要なものがすつかり揃つてゐる。抑へつけられてゐればゐるほど、そのエロチシズムには壓力が增して來るものである。

有島武郎が、一面に於て、强烈なエロチシズムの作家であることは、私が今更說明するまでもない。彼の作品全體が大陸的で、精力的であると共に、その中のエロチシズムも著しく大陸的で、精力的である。他の日本の作家のエロチシズムが、精進料理か、或はせい〴〵魚料理を想はせるにすぎないのに反して、彼のそれは、ビフテキかカツレツに相當する。この點で彼に匹敵するものは、谷崎潤一郎の外にはない。

武郎の代表的長篇『或女』が、全篇到るところでむせるやうなエロチシズムの香を放つてゐることは、普く人の知るところである。その他『石にひしがれた雜草』に於ける濃厚な描寫、『宣言』に於ける女と一緒に入浴するときの效果的な表現、『迷路』に漲つてゐる性的煩悶等、すべてエロチック作家としての彼の地位を異常に高めるものが甚だ多い。この點でも彼は、決して弟の弴にまさるとも劣るものではない。

倉田百三もすぐれたエロチック作家である。作品にはさう露骨には出てゐないが、宗敎的な材料を取扱つた『出家とその弟子』などでも、エロチックなところが、極めて柔かに、浮彫のやうに圓味を帶びて出てゐる。

その外に彼は、感想や隨筆で盛んに性慾について論じてゐる。『戀愛と性慾に就いて』と題する長論文に於ては、性慾に關して實に微に入り細に亙つた觀察を下してゐるが、これなどは、寢ても醒めてもそのことばかり考へてゐるものでなければ、出來ない藝當である。

武者小路實篤も、武者式エロチシズムを豐富に取入れてゐる。例へば『世間知らず』の中には次のやうな一節がある。

「自分はC子の手をいぢつたり、くすぐつたりした。しかしC子は默つてゐた。自分は『少しもこはくありませんか』と云つて見た。さうしてC子が默つて微笑んだ時『隨分圖々しいのですね』と云つた。二人は其處に腰をおろした。

深入りするだけ深入りしてしまつた。C子は子供は生れないと云ふことを保證した。しかし接吻する勇氣はどうしてもなかつた。二人は深入りしてしまつたらさつさと電車の方へ行つた。自分は別に後悔もしなければ不安も感じなかつた。さうしてそれは相手と齡と自分の思想のせゐだと思つた。

しかし自分はC子に對してわるいことをしたと云ふ氣をもつ

のがいやだつたから、○子にわるいことの責任をもつてもらふことにした。……さうして何が起つて來てもそれは自分を成長させることにすぎないと思つた。」

最後の一句は、いかにも武者式で面白い。樂天的で、圖々しくて、無責任で、出鱈目で、全く出口王仁三郎のお筆先を讀むやうである。かうした態度でをれるのを、彼は自ら自分の思想のせゐだといつてゐるが、その思想といふのは實は、「世間知らず」の馬鹿殿様の思想であることがこれで明らかである。

志賀直哉は、武者小路に比べればずつと常識的ではあるが、態度はよく似てゐる。題材は大部分、大家ののらくら息子が女中か小間使を口説くことである。「暗夜行路」を初め、「襖」「佐々木の場合」などすべてそれだ。「大津順吉」の中には次のやうな描寫がある。

「私が千代の體に觸れた事は二ヶ月程前暗い所で千代の持つて來た私の懐中時計を受取る時に私の指の先が千代の掌へ一寸さはつたのを覺えてゐるばかりだつた。其時私は自分の愛する女の掌が案外堅いのに驚いたのでよく覺えてゐる。

抱きすくめるやうにして接吻してゐると、何んだか千代の體が急にグツタリと重にかゝつて來た。少し私が體を離すとガツクリ首を前へ垂れて、氣を失つたやうになつて了つた。何かいつても默つてゐる。」

感覺が鋭敏で、描寫は正確だ。だが、小間使の掌が「案外堅い」のに氣がついても、何故堅いかを反省する能力を階級的に缺いてゐる。「亡くなつた母の不細工な金の指環」で無邪氣な少女を釣るやうな話をどんなに克明に書いたところで、それはただ同じやうなイデオロギーを持つた人間の參考になるだけだ。

その外この仲間では、長與善郎の作品がエロチツクである。『彼等の運命』か何かに、信州の山奥で戀し合つてゐる男女が嵐に遭つて、その恐怖が忽ち性的刺戟となるところが描かれてゐる。

總じて彼等の「人道主義」には、有閑階級の剩餘エネルギーの變態的表現ではないかと思はれる節が多い。もつとも、彼等の宗祖であるトルストイにも多少さういふところがあつた。

五

その他、明治大正文壇の巨匠の中では、特別に取り立てゝいふ程のエロチストはゐないやうだ。

強いて求めれば、森鷗外の「ヰタ・セクスアリス」くらゐのものだ。滅多に軍服を脱いだことがないといふ几帳面な男も、自然主義の波には抗し切れなかつたと見えて、こんなに思ひきつ

た告白小説を書いたといふ點に興味がある。左に引用するところは、彼が少年時代に近所の後家さんの家で、初めて春本といふものを見せられて驚くところである。

『僕はつかつかと側へ往つた。娘は本を伏せて、をばさんの顔を見て笑つた。表紙にも彩色がしてあつて、見れば女の大きい顔が書いてあつた。

をばさんは娘の伏せた本を引つたくつて開けて、僕の前に出して、繪の中の何物かを指さして、かう言つた。

『しづさあ、あんたこれを何と思ひんさるかの。』

『娘は一層聲を高くして笑つた。僕は覗いて見たが、人物の姿勢が非常に複雑になつてゐるので、どうもよく分らなかつた。

『足ぢやらうがの。』

をばさんも娘も一しよに大聲で笑つた。足ではなかつたと見える。僕は非道く侮辱せられたやうな心持がした。」

夏目漱石には、エロチックな描寫があまりない。『行人』の主人公が、義姉と同宿してゐると、嵐で停電するところぐらゐのものだ。だが、彼の直系である森田草平に到つては、エロティシズムを通り越して純然たる春本だとしか思へないやうなものがある。彼の出世作である『煤煙』は、そのお手本である。ダヌンツィオの『死の勝利』がエロチック文學の最たるもので、列車中の情事まで書いてあるのに反して、案外エロチックではないが『輪廻』は全くひどいものだ。

「迪也は二たび犇と×××××××。そして××××××××××××しながら、その充血した、熱い唇に、××××××××××。それは執拗な、長い接吻であつた。彼はさうしてゐながら、×××××××××。そして今迄この世の中に、誰もさう云ふ事をしたものがなかつたやうに、わく〳〵と胸を波打たせながら、××××××××××××。それでも××××平氣でゐた。何も知らぬ××だけに、何うされるのやら分からなかつたらしい。が、その×××××××××××、小夜子は吃驚したやうに××××××。そして引き千断るやうに××離しながら、

『待つて、待つて……それだけは……それだけは何卒……』と喘ぐやうに哀願した。

死んだ徳富蘆花は、初期には戀愛を書いても、あまりエロチックな描寫をしなかつたが、晩年に書いた『富士』には思ひ切つて露骨なところがある。それから彼の日記は更に露骨だ。

今日の文壇でなほ活躍してゐる中堅作家では、豐島與志雄に室生犀星がすぐれたエロチストだ。與志雄の『野ざらし』などには、隨分エロチックなところがある。

室生犀星の初期の作品は、エロチック文學としては一流のものである。『性に目覺める頃』といふ彼の處女作の題名が示してゐるやうに、彼の少年期の性慾描寫は天下一品だ。

「『ぢつとしていらつしやい。きつと震へないから。』

と女は言つたが、ぢつと力をこめてゐてもやはり手さきが震へた。こらへれば、こらへるほど烈しい震へやうがした。そこでは、いつも時間が非常に永いやうな氣がした。たとへば女と私とが僅か三尺ばかりしか離れてゐないために、女のからだの惱ましい重みが、すこしづつ、その美しい圓いぼた〳〵した坐り工合からも、全體からな曲線からも、ことにその花々しい快活な小鳥のくちのやうに開かれたりするところからも、一種の壓力をもつて、たえず私の上にのしかゝるやうで、弱い少年の私の肉體はそれに打ちまかされて、話をするにも、どこかおづおづしたところがあるのに氣がついた。」

武者小路や志賀の「人道主義」的エロチシズムが、非人道的といふよりはむしろ無人道的であることは前に述べたが、それよりも更にひどい不道徳なエロチシズムが葛西善藏の作品に現れてゐる。

「野鴨のやうに」といふ短篇の主人公は、故郷に置き去りにしておいた妻が、彼が「去年の秋一寸歸つた」ために、またも「野鴨のやうに」姙娠したことを友人に話して、次の如く結んでゐる。

「『これであと二三年はまた打つちやつて置いても大丈夫だらう。女は子供さへ生まして置けやいゝんだな。』」

それからこの主人公は、鎌倉に於ける寓居へ歸り、最近自分の子供を孕んだ茶屋の娘に向つてかう話すのだ。

「『……それにしてもまだ四ヶ月位でそんなにむづ〳〵する筈が無いんだがな。どれ〳〵一寸見せてご覽よ、……僕もね、古女房の子なんかちつとも見たいとも思はないがね、おせいちやんの子は早く見たいよ。』私は斯う云つて、娘の白い前掛の上から片手を當てゝ、新しい地に播かれた新しい生命の聲無き蠢めきを感じようと、緊張した全神經を掌に集めて、ヂーツと首を傾けたのであつた。」

もしもかういふ文學に非常な「藝術的價値」を見出すものが實際あるとするならば、彼は斷じて社會人でないことだけは明らかだ。

六

おりさうで案外ないのは、通俗作家と閨秀作家のエロチストだ。

紅葉や風葉時代から、近くは菊地寛、加藤武雄、中村武羅夫

などに到るまで、通俗作家は絶えず「貞操の危機」を取扱つてゐるが、巧妙なエロチック描寫は極めて尠い。わけても武雄の諸作などは、模範的な「家庭文學」で淫らなところがほとんどない。たゞ一人、三上於菟吉だけが、專門のやうにその方を書いてゐる。殊に『白鬼』はそればかりのやうな作品で、フランスの魔窟にでもありさうな性的亂舞場の內部が描かれてゐる。

閨秀作家では、昔田村俊子がエロチック作家としてすぐれた手腕を持つてゐた。今までのところでは、まだ彼女に匹敵し得るものは出ない。宇野千代も、『脂粉の顏』などにはみづ〳〵しい描寫があるが、近頃の作品は白粉燒けをしたやうな感じだ。

それよりも最近突如として現れ、女性のもつつゝまやかさをかなぐりすてた大膽な性慾描寫で、文壇人をたまげさせ、遂に廣津和郞をして讃嘆せしめたのは、かの中本たか子だ。一部からは、安來節文學だなどといはれてゐるが、ジャズの時代は、彼女の中に自らの正しい投影を見出してゐるともいへるだらう。先月某婦人雜誌に出て問題になつた三宅やす子の「蓉子の母」は中味は何でもないものであつた。これは廣告文のエロチシズムだ。同樣に、詩人の中にもエロチストは少い。西條八十などは、徒らに實際的方面に於ける令名のみ高いが、彼の詩は到つてつつまやかである。

だが、今日の詩壇には、あまり廣く知られてゐないが、全詩壇のみならず、全文壇のエロチシズムを一人で代表しうるやうな物凄い詩人がある。それは南歐文學の紹介者として有名な堀口大學である。最近豪華版になつて出た「堀口大學詩集」の中から代表的なのを二つ三つ拾つて見よう。

　少女がマリアにする祈り

マリアさま
けがれずに孕みなされた
マリアさま
私のねがひをおきき下さい
私のねがひはあべこべです
私が×がされても×がれても
×××やうにして下さい

　彼女の靴下

シュミイズはなほ取去るべかりしが
遂にかの女の靴下は
かの女の皮膚の一部なりしか
膝の上のやや高きあたりより

波もなき淡墨色の刺青の
すみ見ゆる絹の夢
黄金いろの麥の穗の波
桃いろの形よき畝のあひだに燃え上る
美學の中心をやゝに遠ざかり

彼女の靴下は
ああ　對照だ
合奏だ

頌

きらびたる汝が寢室の天地の
やはらかきクウサンのうづ高き雲の上
やさしきランプの光のかげ
雲にうづもれてヴエニユスの山の
心地よき傾斜の　影に咲き出し
紫いろの×××單瓣花！
たゞ一つ時じくも咲き匂ひ
ばら色の花びらは
やはらかく×に開きつ！

かぐはしき××は……
そこひなき暗黑の花心より
夜をこめて流れ出で
そが四圍の常綠の防風林を培ふ！
おゝ　香氣！
おゝ　滋養！
おゝ　饒趣！

七

新進作家の中では、岡田三郎と尾崎士郎がエロチストとして光つてゐる。三郎の作品中でも、妻と別れて新しい女と同棲し始めたときの心理を描いた『夏の一齣』や、七月の『文藝春秋』に出た『三日間』などは、少々自然主義的な匂ひはするが、細かく行き屆いた筆で、巧みなエロチック描寫が行はれてゐる。士郎の『河鹿』は、一寸した短篇ではあるが、やはり妻に別れた男の心理が、河鹿の性交に託して生々と描き出されてゐる。

小島政二郎の『生理的腫物』は題からして猥褻だ。その外、彼は『綠の騎士』の中で、房州の旅館で酒に醉つて女を口說くところを、かなり際どく書いてゐる。

稻垣足穗は男色ものが得意だ。

淺原六朗のエロチシズムは、最近著しくジャズ化して來た。

新感覺派には、案外エロチック作家が少い。横光利一はいつもしやちこばつてゐるし、川端康成は弱々しい。池谷新三郎が『婦人公論』の『花はくれなゐ』その他で、男と一緒に寢ても一向性慾を感じないといふモガの一變種を丹念に描いてゐるくらゐのものだ。

プロレタリア作家の中では、藤森成吉が『若き日の悩み』時代から最近の『光と闇』に到るまで、エロチシズムに對する鋭敏な感受性を示してゐる。

金子洋文は、プロレタリア・エロチシズムを叙情詩的な甘さに溶かして表現することに特別の興味と才能をもつてゐるが、彼ももうかういつた境地を卒業していゝときだ。

片岡鐵兵は、新感覺派の中ではすぐれたエロチシストであつた。中でも彼が公然と轉向する少し前に『新潮』に發表した『金錢について』は、彼の新舊の兩要素が渾然と融合してゐるいい作品であるが、その中で、女を寢かして、オルガンのやうにあちこち押へながら、ド・レ・ミ・フア……をやる面白い描寫がある。

アナ系では、モダーニズムの元祖新居格が卓越したエロチストだ。『明暗』、『午後四時』『ニヒリストの幻想』などから、最近『相聞』に發表した『一つの近代型』に到るまで、すべて典型的なエロチック文學だ。

最後に、林房雄が六月の『新潮』に發表した『痴情』を問題にしたい。これは、『斷髮の社會學』に見るやうなふざけたところのちつともない、彼としては珍らしく眞面目な、リアリスチックな作品である。その中で彼は、職を失つた朝鮮勞働者の妻と、そこに寄寓してゐる日本勞働者との間の不幸な、避けがたい『痴情』を描いた後に、次の如く主張してゐる。『夫婦だとか、貞操だとか、浮氣だとか、嫉妬だとか、そんな關係や、道徳や、感情は、もつと安定した、言葉を換へれば、現在を支配してゐる階級の生活狀態に近く、それに似てゐる生活にのみ適用されるものであつて、今の社會から全くはみ出した、それによつて滅茶苦茶に叩きこわされた、例へば金(この作品の主人公)の家族のやうな生活に、あてはめやうにもあてはまらない空つぽな概念ではなかつたらうか?』

この主張には少しも誤りはない。それを裏づける事實は到るところにころがつてゐる。だが、『プロレタリア解放運動の特等席』だといはれてゐるプロ文學運動の陣營中に、かうしたコロンタイズムによつて、運動に不必要であるばかりか時には有害でさへある自己の性的放肆を幾分でも辯護したり、合理化したりしようとするものが一人でもあるならば、それは階級的裏切りであることを知らしむる必要がある。

トーキー文明をめぐる渦巻

畑耕一

——それは破壞者ではない。明日は知らない。すくなくとも今日までのところ、攪亂者の名をもつて呼ばるべきである。

トーキーが現れて、從來の無聲映畫は破壞されつゝあるといふ。いや、氣早やに、破壞されたといふ。が、さう簡單に片づけてはならない。それはとにかく攪亂しつゝあるのだ。猛りたつ嵐のやうに、また、渦まく浪のやうに——資本主義的に、製作技術的に、興行價値的に、そして科學藝術的に。

映畫に聲を與へること——それは、トーキー出現このかたの話では無論ない。映畫そのものと、ほとんど時を同うして、このことは考へられ、着手された。佛蘭西のゴーモン社が、まづこれを企て、相前後して獨逸でも工夫された。所謂「物いふ活動寫眞」が、セント・ルイスの世界大博覧會に出品されたのは、もう二十餘年の昔である。見ると聞くとは、人間の感覺的な欲求から、すでに根本的に相助け相携へんとしてゐる。しかも映畫が大衆的慰樂を目的とする以上、眼に訴へると同時に、耳にもは當然の考へでなければならない。

この考へられ、また、發明工夫の緒についたものが、それ以來次第に閑却され、疎遠された理由は、いろ〳〵あらう。——が、なによりもまづ、製作者は、映畫そのものを進歩させ改良することに、多忙でなければならなかつた。そして、いつしか聲の問題は忘られ、また、これはさきにいはなかつたが、色の問題、すなはち天然色をそれに與へるといふ研究すら、僅かの間に、ほんの氣まぐれの工夫と思はれるくらゐの效能をあげただけでやめてしまつた。——で、映畫は聲のないもの、白と黑、光と影だけで進むべき藝術だといふモットオなり、キヤテゴリイなりができて來た。かなりの時間をかけて、脚色者、監督、俳優、撮影技師などが、やうやく自得し、確信のついて來たものを、このまゝ間違へぬやうに守り進めたいといふ考へと、それに馴れて來た見物の好みと——モットオと、キヤテゴリイは、遂にセオリイとなつたのである。勿論、このほかにも理由はある。が、いくら理屈に生きやうとする人間でも、習慣づけられたものには、執着がある。トーキーが出現して、その是非が喧々囂々とあげつらはれる時、トーキーの反對論者のことごとくに、この心持がなかつたとは、誰が斷定し得やう。僕はかたくなゝ男ではない。だから、この際の藝術論とともに、人情論の至極の價値をも認めたいのだ。

佛蘭西のルネ・クレールや、アベル・ガンスなどの權威ありとせらるゝ反對論、日本の映畫評論家の理路ありとせらるゝ反對論——そんな紹介は一々できない。が、事こゝに至つては、實際的にトーキーの出現に當面する僕

等でなければならないのだ。トーキーは、従來の映畫に比して、スピードが欠けてゐる、テムポに不滿がある、手法が不自由である、製作費設備費が莫大である、よつて映畫の賃貸料が騰貴し、従つて見物の負擔は重くなる。それに檢閲問題、ことにカットされる場合の困難、等々、たしかに肯定すべき多くの理由と事實を僕等は知る。また今日まで、トーキーとして發表された作品は、新たに加へられた「聲」といふむつかしいかゝりあひに掣肘されてか、筋もつまらなく、場面の變轉、人物の取扱ひ、性格の交渉、事件の發展など、決して感心できないものであることも知つてゐる。そして實際、今の程度のもの（日本に來たものだけの意味）では、或る反對論者から單に見物の好奇心を滿足させるだけであるとか、流行心理、ひどくいつては、各製作者興行者、觀客等の優越感、虚榮心の一種のあらはれに過ぎないといはれても、いたしかたのないことだと思はれないではない。

——が、僕はたゞ驚いてゐる。多くの反對論者の喧々囂々を、餘りに無力なものとするだけ、トーキーの「聲」は、强く烈しいことを。しかもそれが、事實として咆哮してゐることを。——本場の亞米利加では、藝術の、理論の、そんなことは今の研究問題にはならないらしい。それは實に傍若無人な資本主義的な解決を急いでゐる。トーキー出現以來各大映畫會社のトラスト化されんとする傾向は、著しく濃厚となり、これによる大投資をもつて、無聲映畫を、既に（といつてもいゝ）蠶食し驅逐した。それはまつたく、トーキーならでは夜もあけぬといふ映畫國を完成しつゝある。パラマウント社のラスキーは曰く、「三年後の無聲映畫の存在は想像されない」と。そして無聲映畫の貢獻者として第一級に置かるるグリフイスも、その成功せる業績を惜し氣もなく抛つて、これを是認した。また「トーキーは世界的に最も古く、尊重すべきである默劇(パントマイム)藝術を冒瀆するものだ」「トーキーは沈默がもたらす美を傷けるのだ」「トーキーは從來映畫のもち得た誇るべき世界的共通性を失はせるものだ」と叫んで、誰がどうしやうと、自分ばかりは無聲映畫の最後の孤壘まで守らうと揚言したチャップリンさへも、着手しつゝある「街の灯」を、トーキーに改めることにしたと、近く牛原虚彦氏への消息中に書いて來たといふ。あの、みづからすぐれたる創作家であり、俳優であり、監督であり、また資本家である彼が——實際的に自由で我意であることをゆるさるべき彼が——遂に、トーキーのもつ資本的勢力、吸引力、魅力に泣々ながらも屈せねばならなかつたのである。

ユニヴアーサル社長レムレエは、「映畫に聲や音を要求することは、理論的にといふよりも自然的にといひたいのだ」と說破した。これに對して、様式(スタイル)を力說する戲曲家、純藝術(アーティスト)性を主張する美術家、沈默の交感を論斷する哲學者は、むづかしい顔をして詰め寄りもしやう。が、レムレエの言葉のごとく、トーキーは今は理論よりも自然——すなはち學問とか知識とか、またはそれによつて精練された感覺とか、そんなまだるつこいことでなしに、前にもいつた、見る興味のほかに聞く興味も持ちたいといふ、早わかりのする大衆的な自然の要求なのである。形とか線とか、色彩とかにも音と言葉をもつといつたところではじまらない。映畫はこゝでいよ／＼民衆的な慰

業を目的とするものとなる譯だ。實は、僕もトーキーには全然肯定を欲しない人間なのである。チヤップリンのいふ世界的共通性とは、まづ映畫が物言はなかつたといふ點である。外國映畫を見てゐると、僕等はそこに盛られた「人情」に、いつしかひき入れられてゐる。たしかにそれは、僕等と生活を異にし、趣味を異にし、國民性を異にしてゐる人間の、やや關係の薄い遠い話なのであるが、これを見物して感動するのは、畢竟、映寫幕に映さるる人間を、知らずしらず自分の周圍のなかに換算してゐるからである。路上で會ふ外國人には、異人種といふ意識がハッキリしてゐるが、映寫幕で會ふ彼等に、その意識を棄てゝしまふのは、第一に彼等が物言はぬからである。そして、彼等が白と黒とで現はされてゐるからである。紅毛碧眼を直接に認めないからである。それが、一朝、耳馴れぬ、七八分通りは解釋することのできぬ言葉を發せられたとしたら、映寫幕で、僕等の周圍に換算し得る心持が破綻し、彼等はたちまち僕等からかけ離れた、ストレンジヤアになつてしまふだらう。せつかくの馴染が、あかの他人になり過ぎてしまふのだらう。つまり、僕等の想像力なり同化力が急に制限され束縛されて、感動する餘地がすくなくなつてしまふだらう――と、さう危惧してゐるのである。だから僕は、トーキーは、外國物では困る。これこそ日本の製作物に限るものだと考へてゐる一人なのである。トーキーによつて、外國物とは大いに交誼を距てられてしまふだらうと、失望してゐる僕なのである。

――が、トーキー自身からいへば、あらゆるものを問題にする必要がないのである。たしかにそれは傍若無人に進んでよろしいのである。映畫の行はるゝ地域に於て、亞米利加の作品への理解の通ずるところは實に七十五パーセントを占領してゐる。ゆへに、言語の相異によつて、亞米利加作品の不向きである範圍は、殘りの二十五パーセントに過ぎない。トーキーは本場的な價値だけで立派に、些の懸念なしに生きられる。しかも、昨年度の亞米利加に於けるこれの製作數は長短篇とりまぜて、千三百本と註せられ、その製作費實に三億弗、世界のトーキーの九十パーセントを占めた。昨年、はじめてトーキーが試行的飛躍の第一歩を踏み出して、やつやく一年間にこの驚くべき所産はなにを語るか？　そしてどんな刺戟と煽動とを、獨逸、佛蘭西、露西亞、日本に與へんとしつゝあるか？――四年前すなはち一千九百二十六年の夏、紐育で、バリモアの「ドン・フアン」をヴイタフオーンとして發表したウオーナア兄弟社が、これによつて博した人氣をきつかけに、「ジヤズ歌手」を發賣して、トーキーの存在を決定的にし、「紐育の灯」(オール・トーキー)の記憶すべき作品を送つて、遂に當時その社に於ける經濟的切迫から救はれたばかりか、フアースト・ナシヨナル社を買收したほどの成功を贏ち得たといふ事實をはじめ、フオックス、パラマウント、ユニヴアーサル、メトロ・ゴールドウイン、ユナイテッド・アーチスツなど、續く亞米利加の大撮影所に於て、トーキーを計畫せざるものなく、企業的な三十幾種かの發聲映畫機はつぎつぎに發明され、フオックス社のごとき、數百萬弗を投じてトーキー專門の撮影所を設立せんとしつゝあり、全土十五萬の映畫館中主なる二千はすでに、莫大なる費用を惜しまず、この新裝置と、音響的の改築を、建築に

加へ、英國でも、すでに二百の主要館が、發聲設置を終へたといふ。——この素張らしい事實に、胸をドキつかせない興行者、製作者が、どこにないといへやう？

獨逸にも、トーキーのために、トビス社なるシンデイケートが設立された。それはたとひ三四卷程度の、「世界のメロデイ」「牧神の結婚」「シユーベルト」「十月祭からの歸省」「最後の唄」など、題名を見ただけで、およそ内容の簡單さの想像のつくものであつても、若々製作に熱中してゐる。佛蘭西、露西亞も、無論この渦卷きにまきこまれやうとしてゐる。そして日本にも、新聞の報ずるところによれば、日本ヴイクタア社は、ジエネラル・エレクトリツク社と提携の相談がまとまつて、一百萬弗の發聲映寫機撮影機の製作工場を設立し三菱住友が後援するといふ、大した噂がもちあがつてゐる。

だが——と、僕はペンを控へる。

だが、日本のトーキー熱は、かくまでマラリアカルではない。いや、あり得ない。「進軍」「レツドスキン」「底ぬけ騒ぎ」など、到來し封切されたが、その成績は、ほんの新聞雜誌の批評欄以外にはわからない。事實各社ともに日和見の形である。松竹では、新人城戸四郎氏が外遊からの歸朝談に、トーキーに多くの好意を持ち得ぬ理由は、その肝心の發聲法の不滿の點、また經費の多額なる點などから、大いに考へものだと斷じてゐる。日活は、さきに「東京行進曲」にこれを試みて、十分の效果を得ないために放擲した。皆川スタデイオも「噫無情」の製作豫定を中止した。東條氏イーストフオンで、「蜂須賀小六」を試作中だが、この稿を書いてゐる今は、海のものとも山のものとも考へ及ばない。東亞キネマの「君戀し」も、目下研究中とある。いつか故小山内薫氏の手で、松本幸四郎所演の「素襖落」が、フオノフイルムで撮影されたが、これはむしろ、舞踊をフイルムの上に移植されたに過ぎず、トーキーの本領からいへば、失敗だつた。たゞ一本、マキノが「戻橋」を部分トーキーとして完成したが、見物に對してどこまでの吸引力、魅力を有するか、神ならでは知りかねるのである。勿論、亞米利加でも、はじめは各興行者はトーキーに對して、半信半疑であつた。一昨年末から昨年の春にかけて、すなはちウオーナー兄弟の成功（むしろ商業的な）に至るまでの間は、たしかに日和見主義であつた。だがその日和見は僅か半年じやないかといつてはいけない。その前に彼の資力と我の資力の、餘りに無殘なる差異あることを考へなければ話にならない。日本の興行者は、膽力はあるが、その膽力の第一要素となるべき資力に欠けてゐるのである。一日の論にはならないのだ。

いつたいトーキーと、一言にいふもの、、前に話したやうに、亞米利加にも三十幾種の發聲映畫機がある。いや、ゴーモン社が、あのセント・ルイス大博覽會に出品して以來、トーキーの名によつて呼ばる、映畫が現はれるまでにも、十種以上の發聲方法は工夫されてゐた。——が、すべてを通じて、今日までの設備には、二つの方法しかないのである。その第一は、蓄音機のレコードによるもので、ウオーナー兄弟社が成功した、所謂ヴイタフオーンである。つまり從來の映畫と蓄音機とを連絡せしめ、兩者の速度を均等にする方法で、第二は、音波を光波に變じて、畫と同時にフイルムの緣に燒きつける方法、所謂フオ

ノフイルム或は、ムーヴイ・トーンと呼ばるるものである。このほかに磁性作用に基く方法も發明されてゐるが、まだ實用向きでない。で、この二つの方法だが、いづれにも長所短所がある。前者の長所は、設備の簡單で安價なこと、工夫次第でどんな映寫機にも結合され得ること、フイルムが古びても、レコードは新らしくかけかへられること、等であるが短所は、音聲と畫面との同時併發(シンクロナイズ)に、苦心を要し、優秀な手際を要すること、重複煩雜な音聲を記入するに困難なこと、編輯にあたつて、自由にカットすることが不可能であること等である。また、後者は、フイルムの線に寫眞の進行と伴ふ音聲の濃淡像をもち、これが光電池によつて電流に再轉しラウドスピーカアを通して再生音となるので、トーキーとしては理想的本質的のものである。ヴイタフオーンの成功は蓄音機の成功ともいへるが、フオノフイルムはたしかに、トーキー自身の成功である。シンクロナイズの苦心はいらず、カッテイングも自由だし、撮影臺本(コンテイニユイテイ)によつて、どの場面からでも撮れる便利がある。が、欠點とするところは、再生音がまだ〱蓄音機に及ばぬこと、機械裝置が複雜なため、撮影は簡單なやうだが技術上面倒の多いこと、フイルムが損傷すれば音聲に影響すること、などがあげられる。

いづれにしても、トーキーに於ける今日の不滿であり不安である點は、この再生音なる主要問題で、再生音と原音とが、音質上同等のものとなるべき根本的研究を要するのである。「進軍」「レッドスキン」「底ぬけ騷ぎ」などにしても、この缺點はかなり認められたし、また俳優の不馴、監督や撮影技師が、機械をこなし得なかつた樣子もあり〱とわかるやうであつた。いづれも音響學的な惱みにひつかゝつて、筋も平凡單純なんの新味なく、映畫的に評すれば幼稚で、冗漫で、退屈なものといはざるを得なかつた。或る場合は、こんなものが、どうして亞米利加の映畫フアンを熱狂させるのかと、不思議に思ひさへした。

僕の親しき友、そして敬意を拂つてゐる研究家であり實際家である牛原虛彦氏が、某會合の席上で、トーキーは、自分等が辛苦の汗をしぼつてこゝまで辿りついて來た映畫藝術の境地から、また最初の步みへひきもどしはせぬかを悲しむといつた。同感である。トーキーといふ言葉を發聲映畫と譯されてから、從來の映畫をそれに對して無聲映畫と呼ばれるに至つたが、無聲は決して啞の意味ではない筈だ。また、眞空のなかの演出といふ意味ではない筈だ。それにはたしかに音があり聲があつたのだ。いや、僕等はトーキーのごとき、限定された音なり聲なり以上の音なり聲なりを聞き得たのだ。――あゝ、しかしこんな詠嘆は愚痴かも知れない。

――明日は知らない。幾多の困難な、不安な問題がトーキーの今日に懸つてゐる。脚色者は、もはやあの符號的な、項目的なシナリオのみをもつて晏如とはしてゐられない。彼等は新らしき――それは戲曲ともちがふ――獨白や對話に惱まねばならない。鋭く素早やく力強くしかも正確な詞言警句を學びもし漁りもしなければならない。擬音の效果的構成配列に苦勞しなければならない。俳優は、とりあへず發聲學を心得ねばならない。吃りや訛りは矯正しなければならない。聲調のめりはりも修練しなければならない。アル・ジヨンソンは「ジヤズ歌手」によつて、一躍映畫

界の花形となつたのではないか？　また、レイモンド・グリフイスのやうに、病的惡聲のため、悄然として撮影所から姿を消した一流俳優もあるではないか？　――監督は、いちはやく音響學的な知識を習得せねばならない。俳優も音聲と表情動作とを完全に調和せしめる苦心に、新らしい汗を絞らなければならない。演劇的に陷りやすいところを、飽くまで映畫的に踏みとゞまる用意と反省をもたなければならない。演劇にあつては言葉は表情動作にともなふものであるけれど、トーキーにあつては、言葉を主、表情動作をむしろ從にしなければ效果はあげられぬ。また聽覺的である部分と視覺的である部分の處理――ロング、クローズ・アップ、オヴアラップ、カット・バックなどあらゆる手法に對する新規蒔きなほしの、空間的時間的研究を、藝術としてのほかに、最も正しく科學の上から試みねばならない。そして、トーキーにあつて、不滿不足とされてゐるスピード、テムポの缺陷を、一工夫した音聲と畫面との交錯進行によつて、取りかへさねばならない。撮影技師は、カメラを操えると同時に、今までの人物を撮影すほかに、音聲を撮影する二重の――いや三重四重の心配にやきもきしなければならない。そこには、新らしい擬音係だの、調聲調律係だのといふやうな、うるさい姑小姑が現はれて、たゞさへ面倒の起りやすい撮影所は、一層事面倒になるであらう。

パート・トーキー（一部のみ發聲するもの）、トーキー・サウンド（擬音や伴奏のみを加へたもの）、オール・トーキー（全部發聲的で擬音、伴奏あるもの）など、今は區別があるが、トーキーたる以上、オール・トーキーが本質的であり根本的である。現に本場の亞米利加は、撮影所のほとんどがオール・トーキー目ざして進みつゝあるといふ。オール・トーキーになるほど、外國物トーキーは言語學的に國際性を失ふだらうが、これを日本の興行者は將來どう取扱ふか？　――樂師、説明者はどうなるか？　ことに説明者は日本特有のもので、なかに非難する人もあるけれど、多くの日本の映畫フアンはこれに馴らされてゐる。さてその見物をどう滿足させるか？　ことに、都會のフアンよりも地方のフアンを――

また、檢閲問題で、トーキーはどう取扱つたが最善であるか？　――パラマウント社の「底ぬけ騷ぎ」はオール・トーキーであつたが、その裸體の場面、會話の不當な場面が切りとられた。内務省の檢閲係は、會話はパスしても、畫面のパスせぬ場面を、黑く塗つてはかへつてよくない聯想を起さしめるといつて、藥品をもつてその部分を透明體にしたといふが、向後をこの方法で押し通す譯でもなからう。なにかもつとよい救濟法が考慮されればなるまい。

なんといつても、かく觀じ來れば、トーキーは今のところたしかに攪亂者である。もとよりそれの表現力は、完成されたトーキーにあつては、從來の映畫、また演劇のそれよりも自由であり、まつたく獨自の境地を開拓して、新藝術を確立するに足ることは、十分豫想される。――トーキーが攪亂者たることから、破壞者となり、遂に天晴れ建設者と名乘りをあげることは、ともするとトーキーに不安であり勝ちな、そして從來の映畫に對して別路の健全な發達を望み勝ちな僕でも、その大きな難有い「聲」を待ち設けてゐる者なのである。

内閣暗礁受難劇史

山浦貫一

暗礁が海圖の上に明記してあれば避けて通る。政海圖の測量は技師の力倆不足か、手が廻り兼ねる故か、又は暗礁の方で出沒自在を極める故か、何時何處でのり上げるかあらかじめ見當がつかぬので厄介だ。

英吉利の様に、暗礁は選擧に在りと定まつて居さへすれば、其處を航海する時に馬力をかければ濟むが、日本の様に、勿論選擧にもあるが、こいつは金や壓迫やで避けて通れる相場が成り立つから大したことでなく、選擧區數よりも、一人か二人の隱れたる暗礁が隨所隨應、海底からドカンと頭を擡げて船をやつつける習慣のあるところでは、船長の苦心は並大底なことでない。板一枚下は地獄なのだから、船の上では成る丈け面白く暮さねばならない。故に政權を離るゝことの「立憲的」であるといふやうなことは、英吉利の様に海圖の正確な國のことで大日本帝國の様な非科學的な、出鱈目な海圖をたよつて航海しなければならぬ國では、たとへ船が乘り上げて動かなくなつても、沈みかけても最後の一物迄使ひつくし食ひつくされぬ中は、拔手を切つて泳いで陸へ辿る氣にならないのは無理もない。そこで溺死して、他日立つことが出來ないといつても、そんな先の事迄考へてもをれるものではない。

□

大正以來の政治史をひろげて見ると、時の内閣が暗礁にのり上げたのは、第一元老山縣有朋の力、第二樞密院の力、第三貴族院の力による。衆議院の力で内閣が倒れたためしは、桂内閣と清浦内閣たつた二つである。で、桂内閣と、清浦内閣は、非立憲的に成立し立憲的に退却したといふ逆路が成立する位模範的内閣であつた。護憲運動といふ民衆の力を試した偉大なる犧牲者であつた。

山縣が死んでからの暗礁は、どうも伊東巳代治に在る。だから、永田町(彼の住所)は政界の鬼門とされる。巳代治は「憲法の番人」を以て自任する。憲法制定に參劃した者で生き殘つてゐるのは、巳代治と金子賢太郎の二人丈けになつてしまつた。で、彼等、殊に伊東の自負する所に從へば、若い青二才の憲法學者なんぞが『人民の名に於て』は憲法違反でないなぞと利いた風な口をきくが、それは彼奴等の横文字幻惑であつて、抑も日本の憲法制定當時の精神及び解釋によれば……と來る。憲法が巳代治と先に時代を超越してゐやうが、時代の流れに從つて變更されぬ以上、憲法制定當時の精神及び解釋の金棒をついた番人は絕對勢力を握つてゐる。氣に食はん奴が通りかゝれば若槻禮次郎の様に叩きのめされる。此の番人にチップを忘れたり御機嫌奉仕を怠つてゐやうものなら抑も憲法制定當時の……と高びしやに出る。が鬼に金棒の番人は欲が深い。其處を心得てをれば何でも

い。暮夜ひそかに贈物か持參してペコ／＼と頭を下げる『憲法に抵觸しない樣に留保宣言をつけて來れば通して上げてもいゝ。又若い番人共にさう言つて、違憲々々など大きな聲を出すのはイケンと內命しておくから、宜しく考へて來なさい』位の注意をしてくれる。憲法の精神解釋と雖も人間が慾と自惚れで立つてゐる以上、ゴムマリの樣に彈力性を持つ。

伊東は猾り屋で、汚ないから人望はない。伊藤博文の秘書官、書記官長をして大臣を叱りつけたといふ逸話以外に大臣室に納まつて何をしたといふ話しを持たない。で、樞密院の大先輩であり乍ら議長、副議長を後輩にさらはれて連綿たる平顧問官である、が、何しろ頭のいゝ事、勉强すること（それも一つは擾る爲め、威脅する方便でもあるが）樞府第一だ。だから、議論をさせたら彼に太刀打の出來るのは久保田讓以外に居ないじ、我儘と向ふ見ずと人を人と思はぬ押し、至尊の御前で大臣を馬鹿呼ばりすること位平氣なのだから、誰でも憎くい／＼とは思ひ乍ら年中壓服されてゐる。それが彼の身上だ。

若槻內閣の最後の幕は、臺灣銀行救濟案の否決だ。臺銀が二億圓といふ大金を鈴木商店に貸した。返してくれないのでニッチもサッチも行かなくなつた。此儘ほつておけば店を閉めなくてはならぬ。閉められては臺灣統治の上にも、財界の混亂を防ぐ上からも大問題だから、差し當りの手當てとして、國庫から臺銀に貸してやるといふ案だ。貸して返さぬ時は國家の損となるといふ案だ。困つた案だが、財界が、彼の時の樣に混亂して來て、銀行の閉店が續々と出るやうな急な場合としては致し方のない案だ。

此の案を樞密院へ持ちこんだ。乃ち伊東巳代治の出幕である。彼は言ふにや及ぶ、活躍を開始した。倒閣運動をやる政友會の鈴木喜三郎等と棒組になつた。純理論を揭げた。それを憲法論で裝飾した。かくの如き案は宜しく臨時議會を開いて決すべき問題である。——尤もな話しだ。が此の急な場合、そんな呑氣な眞似をしてゐられるか一寸考へれば判る。臨時議會でも開いたら、政友會が根掘り葉掘り財界のアラ探しをやるに違ひない。財界は益々混亂に陷るばかりだ。だのに承知してゐるくせに臨時議會を開けといふ。出直して來いといふ。さういつて否決してしまつた。尤も全會一致で否決したのだから、表面的には伊東一人の罪ではないが、精査委員の一人として、そこでやり、本會議では、臺銀救濟と關係のない幣原外交の攻擊迄やつて『知らぬは亭主ばかりなりといふが、知らぬのは幣原君だけであらう』など、陛下の御前で惡口雜言を吐いて迄やつつけてゐる。若槻內閣を潰したのは、正に伊東巳代治に代表される樞密院だ。

もし若槻氏が事前に、伊東伯にわたりをつけること、不戰條約事件に於ける田中男の如くであつたなら、彼はそれ相當の憲法染色術を施したであらう。同じく臨時議會を必要とする、いやもつと切實に必要とする、田中內閣の治安維持法案急勅令案を御諮詢になつた時、伊東は病氣と號して缺席したではないか。わたりさへつければ病氣になる位わけのない話しである。

□

加藤友三郎內閣は首相の死で最後を遂げたが、それ以前に時にお駄佛になりかけた。矢

張り樞密院で、舵手は伊東伯である。題目は日支郵便條約。極めて小さい條約で、郵便物に關する取り定めに過ぎないが、外務省の方では、先方との交渉、實施期の切迫等から、樞密院にかける時間がなくて、定めてから事後承諾を求めたのだ。さあいけない。樞密院をないがしろにしてゐる。憲法違反である。といふので已代治を筆頭にカン／＼となり、遂々不埒であるといふ上奏迄してしまつた。もし事後承諾が得られなければ内閣總辭職より外途がないのであるが、そこに、司法大臣岡野敬次郎といふ人が居て此の人は伊東の弟子格であつたから百方謝罪し、泣きを入れ、漸く通して貰つた。此の時でも加藤首相が豫じめ伊東の諒解を得てをくか、又は時の内田外相又は、山川條約局長が、條約交渉の進行中に、報告をして、諒解を求めてあれば内閣の暗礁にもならずに濟んだのである。だから憲法の解釋といふものは、感情と勘定でどうにでもなる極めて彈力性を持つたものであるといふのである。

伊東伯の憲法論には誰も太刀打が出來ない。山縣在世中伊東に對抗させる爲め現宮内大臣一木喜徳郎を樞密顧問官に任じたことがある位だが、然し、伊東伯は前に述べた通り彈力性をもつてゐる。

田中内閣の不戰條約を議題に供した時の如き、精査委員長の權限を越えて、委員の言論を壓迫した。石黑忠悳がイン・ゼ・ネームス違憲論をおつぱじめると『石黑さん、政府は妥當を缺くといつてゐるから、夫れ位で如何です』とか、金子堅太郎が口を出すと『貴方の様な憲法の大家がこんな事をお訊きにならんでもわかつてお出でゞせう』とか、そして政府の難局を助けた。

しかも、ほんとにしかもだ、いよ／＼政府が助かつたとなると、今度は逆手を使ひ出した。本會議で『個人の資格に於て一言する』とばかりに田中首相を低能よばはりしたり、内田康哉伯を馬鹿物扱ひにしてこれが憲法違反でないと考へられるか。日本の憲法の精神によれば……と來る。辯じ終つて自分の用が濟めば、陛下の御出でになるにも拘らず、下痢の故を以て中途で退席し、さつさと家へ歸つてしまふ。手がつけられぬ。

此の爺さんがお冠を曲げたも一つの大きい事件は、山本權兵衛の地震内閣の時である。震災善後策として先づ復興審議會なるものを組織した。總裁が御大權兵衛伯で、委員には内相後藤を初め日銀の井上準之助、政友會の高橋是清、憲政會の加藤高明、研究會の青木信光、樞府の伊東已代治、浪人者の大石正巳迄かき集め正に擧國一致、各方面の勢力代表者を加へたのだから大變な騷ぎである。

一方帝都復興院といふ、省よりも大きい役所を作り、總裁には後藤自身が内相と兼任し、副總裁には子分の宮尾舜二と松木幹一郎をもつて來て、扨て東京の燒け跡に思ふ存分區劃整理を斷行する理想的大都市建設案なるものをデッチ上げ其の必要の爲めには土地をどし／＼買收するといふ大風呂敷をひろげかけた時に、已代治が動き出したのだ。後藤の風呂敷に穴をあけて中味をこぼしてやらうといふ陰謀だ。序に權兵衛内閣を潰さう……。

後藤と伊東は元來仲のいゝ間柄で、後藤の妾を伊東の邸内に住せてをいた程だから意地を曲げなくとも可さ相なものだけれど、感情と勘定ではさうは行かない。

先づ第一に、首相山本は、組閣に當つて伊東の所へ足を運ばぬのみか内閣が出來てからも宜しく賴むといふ挨拶もしてゐない。おまけに、東京へ戒嚴令を布くに當つて、いくら急の場合とはいへ樞密院に御諮詢を奏請して來なかつた。已れ面憎い權兵衛奴、種を播けばほぢつて呉れやうと、烏の樣な考へを抱いて待ち構へた矢先きだ。

おまけに、後藤案によれば銀座通りを廿四間に廣めやうといふのがある。あの銀座の、カフエタイガーの一角の土地建物は彼が伊藤博文の書記官長をしてゐる時分、役所のものを、何かの都合で自分の名儀に書き換へた儘、其の儘猫婆をきめこんだ所の所有物だ。これを削るといふのである。削られては勘定に合はぬ。こんな計劃は叩き潰すに限ると定めてかゝつて、浪人無宿の大石正巳を語らつて、いろいろとおつぱじめた次第である。

そこへつけこんだ倒閣陰謀者は政友會の横田千之助だつた。田中義一などは時の陸軍大臣であり乍ら横田等と通謀して、内から倒閣にかゝつた。貴族院の研究會も加擔した。たゞ憲政會は、入閣こそしなかつたが準與黨氣分でゐたので加藤高明は賛成しなかつたし、同じ政友會の中でも官僚系統の山本達雄や床次竹二郎などは山本内閣を援けやうといふ主張をもつてゐたので横田とは説が合はなかつた。後日、政友會分裂の遠因は既に此の時に發してゐたのである。

で、伊東はかういふ氣運に乘ずることを忘れなかつた。或日の總會では二時間に渡つて後藤案叩き潰しの演説をやつた。一方、委員に手をまわして賛成を求めてをいた。かくの如くにして、政友會は議會で豫算の大削減をした。復興院は復興局に縮少されてしまつた。山本後藤の面目は丸潰れになつた。虎の門事件は、丸潰れになつた體面を洗ふチヤンスであつた。山本地震内閣は、伊東の陰謀にかゝり、虎の門事件をキツカケに倒れた。

此の他、いろ〳〵ある。原敬内閣の時に陪審法が樞密院で難關にひつかかつた。この時に精査委員長だつた伊東が、どういふわた[illegible]をつけられたか、原敬に賛成して、賛成四、反對四の所へ委員長が賛成の一票を投じて漸く通つたことがある。これなどは、臭い〳〵といはれる一ツ話しである。

山縣有朋は伊東などよりも何倍も大きい暗礁であつた。先づ大正初頭、西園寺内閣を暗殺してゐる。

西園寺内閣は二ケ師團增設問題で倒れた。手つ取り早くいふなら、民論は增師に反對だつたし、西園寺も反對だつた。たゞ山縣を主盟とする陸軍はどうしても增師せねばならんと頑張つてゐる。時の陸軍大臣上原勇作は、西園寺とはフランス仲間で、新人と稱する方だから、身閥僚である以上、いくら軍部の要望があつたとした所で閣議が認めない案を死守する程のわからず屋ではないが、何しろ山縣が後ろにゐる。其の山縣は、長州の特産物西園寺を追つ拂らひ、殊には政友會といふ政黨の勢力に、閥族が侵略されるのを好かなかつたので、何とかして西園寺内閣即ち政友會内閣を驅逐しやうと思つてゐた所だから、看板には增師絶對論を掲げて軍部の統一をはかりつゝ攻め寄せた。そして遂に、軍部の主張容れられずと見るや、陸相上原を辭職させてしまつた。といつては上原がデクの坊の樣だ

が、上原だつて板ばさみに困りぬいたのだ。

で、上原が辭職した後の陸軍大臣だが、山縣は後任を出すまいと計つた。陸海軍大臣は現役の大中將に限られてゐたので、いくら西園寺でも陸軍大臣を兼任するわけには行かない。それとはいはね、山縣に其の陰謀がたくはへられてゐると知るや、公卿一流の恬淡さと、例の明敏さから、さつさと辭表を捧呈してしまつたのだ。其後は山縣が時局を拾收しなければならぬ。それがいゝ氣味であつたかも知れぬ。增師は後繼桂內閣によつても成らなかつた。其の後の山本內閣でも出來なかつた。

もし西園寺が田中の樣な男なら、いくらでもかぢりつく。第一民論にうつたへれば山縣を征服することが出來るし、陸軍大臣をして、閣議に屈服させる事は不可能ではない。だのに、彼はさつさと退いてしまつた。山縣の陰謀を增師に屈服するのいやさに受け入れた。どうも近來の政治家には解し兼る心理である。

其の後へは、待つてましたと計り、內大臣・侍從長を兼ねてゐた桂太郎が乘り出して、例の護憲運動に倒されたが、抑も桂を宮中に奉りこんだのも山縣の陰謀なのだ。桂の勢力日に日に增大してまご／＼すると自分をしのぐといふ有樣だ。同じ長閥でも、自分より下の奴は引立てるが自分の學にせまる樣なのは何とか始末しなくては安心が出來ない。長閥の後繼者は寺內にしやうと定めてゐた際のこと、丁度、明治天皇崩御、大正天皇御位に卽かせられた。桂は、急ぎ外遊から歸つて來た。

其の途中へ、山縣の使者寺內が出迎へていふには、時局重大、是非共貴下が新天皇の側近に奉任して助け奉らねばならぬ。といふ元老の意見だから、これを傳へに來たといふ。桂は齒がみして口惜しがつた相だ。『盛られたな』と思つたのであらう。

其の桂に浮世の色氣は充分あつたし、山縣にして見れば、依然同じい長州ではあるし、寺內には未だ早く、他の畑に取られるよりはといふので桂の色氣を是認して浮世に出したのだ。或は浮世に引出して民論の沸き立つ中に投じたのも深刻な陰謀ではなかつたであらうか。

山本權兵衞も山縣の暗礁で沈んだ。

シーメンス事件で倒れたことは勿論表面的理由であるが、山縣は、貴族院を一手に納めて權兵衞擊滅運動をやつた。衆議院に於て原敬の政友會を足場とする權兵衞內閣が、シーメンス事件の進展中とはいへ、未だ內閣の中から罪人を出したといふではないから、沈沒する義理はない。海軍擴張豫算も大手をふつて通つて來た。島田三郎が、時事新報の外電をタネにしやべり拔いた所で致命的な負傷はおはせなかつた。

然し貴族院は山縣の一派が大手をひろげて立ちはゞかつてゐる。いきなり、八千萬圓の海軍擴張費の中半額四千萬圓を削つてしまつたのである。山縣だ。山縣だ。

權兵衞は薩派で海軍の大御所、山縣は長閥で陸軍の大御所、抑も合ふ筈がない。然り而して、權兵衞は山縣の嫌いな政友會を足場として居り、海軍擴張費を八千萬圓も計上してゐながら、西園寺內閣以來の懸案である增師に要する計費の如きは一文も計上してない。癪にさわらずに濟まさう筈がない。武官派の曾我祐準は山縣の代辯として、この事を力說し、シーメンス事件を攻め立て、齋藤海軍大臣の處決を促がす演說を試みてゐる。

いくら權兵衞が、海軍瀆職事件は事實の判明と共に相當の制裁を加へるから、海軍補充費(擴張とはいはぬ)だけは認めて貰ひたいと百方陳辯しても肯かばこそ衆議院と兩院協議會で衝突して迄四千萬圓削つてしまつた。

貴族院が、政府不信任の彈劾案を出すことは許されない。豫算を削ることも殆ど不可能である。それをも敢てして彈劾的意味に於ける豫算の大削減をやつたことは今日に到る迄此の時がはじめてゞある。

もし山縣が、かりに政府に好意をもたぬまでも惡意をもつてゐなかつたら、シーメンスはシーメンスとして豫算は通してやれ、と鶴の一聲をかけたであらう。さうすれば山本内閣はシーメンス事件で倒れたといふ汚名を永久に著なくて濟んだかも知れない。議會丈は切りぬけられたらうから。

大隈内閣は田中内閣以上の罪惡史を殘してゐる。曰く選擧大干渉、大浦事件、武器賣却事件、支那に於ける罪惡、等々、二年餘輿論に耳をかさぬかぎりつきも田中内閣に似てゐる。然し山縣が、寺内朝鮮總督を立てる積りで劃策しなかつたら、もつと續いたかも知れないが何しろ、大正天皇の御即位式に行つた出先きの京都で大隈引退の言質を卷き上げてしまつたのだからたまらない。田中内閣に於ける薩派の劃策とよく似てゐる。

寺内は、米騷動で倒れた。實は健康が許さなかつた。米騷動を切りぬける氣力さへ缺けてゐたから、引退すると直ぐ大磯の別莊に行つて死んでしまつた。寺内々閣は山縣の陰謀にかゝらなかつた。其の後の原内閣の時に、山縣は陰謀を抱いた儘地獄へ旅立つてしまつた。其のあとへ出たのが前記伊東巳代治である。濱の眞砂はつきるとも倒閣陰謀業者は絶滅しない。

山縣が死んで松方が逝いて、元老は西園寺一人になつた。彼は決して陰謀をやらぬ。だから、内閣の暗礁には決してならない。それが、彼自身の終りを完ふする所以だとも考へてゐるらしい。それ位だから樞密院の存在を惡む。憲法制定の爲めにこそ樞密院は必要であつたが、今日では無用の長物であると洩したこともある。殊に政治に干渉するに到つては許すべからざる罪惡の固まりとする。然し乍ら、憲法には樞密院の存在を保證してゐる。仕方がないから人物的に降下させるに如かずとなし、清浦が辭して以後、穗積陳重、岡野敬次郎と値下げして來て、今では平民倉富勇三郎を議長にしてゐる。かうすれば政府と對等もしくは以下になつて、對抗出來なくなるといふ肚であるが、中にして伊東巳代治などは西園寺生意氣などいふ肚がある。どうにも巳代治は仕方がない。事實上、巳代治は樞密院の本質を代表してゐる。彼が無ければ樞密院は事實高等法制局であらう。

西園寺かつて、横田千之助にいふて曰く、君達は貴族院改革よりも先づ樞密院廢止の運動をすべきではないかと。之にはさすがの横田グゥの音も出なかつた由である。

扨て寺内の後は原内閣、原は東京驛頭凶刄に倒れたが、政治的暗礁といへば、閣僚に中橋德五郎を文部大臣として有し、其の中橋が例の昇格問題で貴族院にひつかゝり將に一蓮托生、お駄佛になりかけた時である。原は業腹だつた。閣僚も、黨幹部も中橋を辭職させて難關を切りぬけることを勸告したが彼れは白頭を横にふつて、死なば諸共一蓮托生だ。内閣の運命よりも黨の生命が重いといつたぎ

りだつた。

其の意氣と張りで、水野直を使ひ、一夜の中に研究會を切り崩して昇格案を通した。

高橋内閣は、その厄介者の中橋を繼承した。中橋がゐては對貴族院關係も惡い。黨内も惡い。も一人元田鐵道大臣が嫌はれ者だから二人を辭させて内閣を改造しやうとかゝつたが、二人は頑として、死なば諸共一蓮托生ぢや、といふ原敬のいつたことをその儘眞似てやめない。遂に抱合心中をやつてしまつた。

抱合心中には、護憲内閣事、加藤高明を首班とする、憲、政、革の聯立内閣がある。政友會の小川、岡崎の二相が内からこわして政友内閣を目ろんで抱合心中したが、心中の目的は成らず、却つて加藤單獨憲政會内閣が出來てしまつた。お次が加藤の死による若槻内閣、巳代治に暗殺されたそれである。

護憲運動で倒れたのは第三次桂内閣と清浦内閣だ。この裏面史は隨分面白いけれど紙がないので略すとしてたゞ然し、かういふ事はいへる。護憲とはいふものの、民衆の心理を利用した倒閣運動の成功だと。卽ち桂は、交詢社のストーブ會議に因を發した菊地武徳等の倒閣談に實が結んで、政友會の原、野田、國民黨の犬養、古島等の倒閣實現運動が民衆をリードし、お先棒の尾崎行雄や肚に一物ある犬養が憲政の神樣になつたが、尾崎は單純だつたにしても、犬養は桂の爲めに自分の國民黨を割られた恨みが全部であつた。

清浦内閣のそれは、平常仲の惡い、加藤憲政、犬養革新、それに政友會の高橋を結びつけた三浦梧樓の仕事である。割つて見れば感情と、政權慾で何も日本國民の代表として憲法を擁護する、などと大きな口の利けた義利でも何でもないのである。國民の名に於て、政權慾の爲めにする陰謀に過ぎない。政權の移動は毎に陰謀を基調とする。陰謀の件はぬ政治談は官報にのせるより仕方があるまい。

最後に田中内閣の倒れたのは?

これは大正以來珍らしくも薩派の陰謀と傳へる。長州系の山縣、同じく系統は長州である。伊東巳代治の連絡的陰謀に、珍らしくも明治時代の薩長關係が復活し來つて、其の力が田中内閣に止めを刺したのは考へると面白い因緣だ。

元帥上原勇作は陸軍の長州に對する薩派だ。昔、彼が陸相時代に田中を軍務局長として重用した關係で仲は惡くなかつたが、尼港事件の時田中が陸相、上原が參謀總長、田中は責任を參謀本部に歸して以來仲が惡い。清浦内閣成立に際して上原は同じく九州福岡の福田雅太郎を陸相に推し田中は、後任は前任者が推すべきだと强調して宇垣一成を持ちこんで勝つた。以來益々惡い。

扨て、所謂滿洲某重大事件、張作霖の××事件が政治問題化した昨秋以來、上原は陰躍し出したらしい。村岡軍司令官が自分一人さつさと辭職してしまへば八方圓滿に濟むから、といふのをお前一人やめる事はない。軍部の責任だけで政治的責任を取るものがないといふ筈はないと、辭職を思ひ止まらせて策をねつた、といふ說が傳はつてゐる。

一方斯ういふこともある。宇垣一成が若槻内閣をやめて、後任に推した白川陸相が、滿

洲事件で辭職したいといふ相談を議會の論戰に嫌氣がさして持ちこんだら、宇垣が『氣の弱い事をいふな。お前一人やめる法はな。いやめるなら一蓮托生だ』と景氣をつけたので、其の通りドタン場迄一蓮托生主義を捧じた、宇垣は個人的には田中といゝが、系統は民政だ……といふのだ。宇垣と上原と關係があつたか、何うかはわからないが、兎に角、薩長、軍部對政府の關係が極めて圓滑に行つてゐなかつたのが倒閣の暗礁になつたのは爭はれない。

で、上原は、同じ薩派の内大臣牧野伸顯、千葉出身ではあるが芋畑の侍從長鈴木貫太郎大將、昔フランス仲間の西園寺に放送宜しきを得、雲深きあたりに機先を制したといふ噂である。

それと知つてか知らないでか、田中は、貴族院の反政府議員が六月中旬官邸で會見して、滿洲事件の發表を迫つた時に、近い中に發表すると言明してしまつた。これが穴だつたらしい。

不戰條約もまあ内田一匹を泰山鳴動の副産物にして切りぬけたし、愈々オラが内閣を改造して、天下泰平の夢を見るには滿洲の懸案も片づけた方が宜しからうと、村岡司令官以下の出先軍部の責任者を處罰して、調査の結果、出先の者の手落ちであつて、日本人が犯人であつた事實はない、といふ風な事を發表すべく奏上したのである。

そこで行き詰つてしまつた。議會なら何とでも言ひぬけをする。も少し恐ろしい樞密院で人民の名を遠慮でないと苦しい言ひ拔けをする。然し、其れ以上の所で軍部の責任はそれでいいとして政治上の責任が問題となつた時さすが軍人出だ。その責任は負ふ必要がありはせんとは言ひ切れない。こゝに於てか、『忠義の臣』田中義一はドタン場に行きつまつてしまつたのである。

これ卽ち薩派の陰謀……と襲する。筆者の困るのは、事雲の上に關し詳細な記述の出來ぬのと、滿洲事件なるものが、由來報道禁止事項である事だ。明ら樣に記述出來ぬ内容の暗礁へのり上げて、田中内閣は倒れた。軍部の責任も政治上の責任も完了した。たゞ、調査内容の發表なるものは遂に出來なかつた。出來る位なら辭職しなくて濟んだ。辭職しなくて濟む積りで奏上したのだ。

で、辭職理由にいふ『客歳國外に發生したる、某事件が端なく黨爭の具に供せられ、遂に政治問題化するに到り……而して本件に關聯し、輔弼の重責に顧みて恐懼措く能はざるなり』云々。之をわかり易く飜譯すれば、前述の意味になり、而して『盛られたなー』となる。

處罰された、村岡軍司令官以下全部が陸軍の所謂九州系であり、上原系であり、而して上原元帥の女婿で、本件に活躍したと傳へられる大塚惟精の復活重用なども考へ合せてよからうと思ふ。

後藤伯大風呂敷の内容

東海隱史

偉人と遺産

昔から英雄とか偉人とか云はれる人が死ぬと、何かしら此の世の中の利益(ため)になるやうなものを遺していつて呉れる。後世の人間が其の遺産に據つて幸福を增進する途が拓かれてゐる。楠正成や西郷南洲や乃木大將のあの素晴らしい氣魄と感激は、久しい間大和魂の肥料となつた。鼠小僧や國定忠次は或種の社會では世直し樣と云はれた位で是れも見樣では近世社會主義の種播きとも云はれぬことはない。東洋第一の歷史家太史公は此著を名山に藏めて知己を千載の下に待つと云つた。孔子の遺産は孟子が掘り當てた。マルクスの遺産はレーニンが掘り當てた。それほどでなくとも、尠くとも人傑が死んだ後には何か社會に有益な最小限度に割引して見ても何等かの暗示を遺して行くものだ。只その遺産が、時代によつて變り、環境によつて變り、精神的な遺産もあれば物質的な遺産もある。人間の思想も變化して來ると寶の意義もいろ〳〵に考へられる。

どれほど大きな遺産――寶を此の世にのこしても、其の時代の要求が伴なはなければ三文の價値もなくなる。心の糧と肉體の糧とは全然別なものだ。現代の日本のやうな空腹國民に向つて、釋迦の說法を聽かせたり、孔明の出師の表を讀んだり、カントの哲學を講釋したつて無意義である。國民の大多數が飢ゑてゐる。詩を作るより田を作れだ。日每の新聞紙は強盜の記事と生活難で自殺した記事を掲げない日は罕(まれ)である。國民懸倒、瀕死苦惱の地獄の繪卷は無遠慮に公開されてゐる。加ふるに法令雨下して盜賊愈々滋く、治安維持法出で、暴力團の横行は益々甚だしいといふのが今日の我國の社會相だ。原因は極めて明

喩だ。要するに國民大衆が飢えてゐるからである。

明治大正過去の人物、伊藤、山縣、桂、星、原、加藤、それぐ\日本の偉人であらうが、不幸にして彼等の遺して行つた多くの遺産は相續人が放蕩息子だつたゝめに今では目茶々々に散財されて殆ど破産してしまつた。輕薄な時代諷歌者に云はせると、我國は今や東洋一の文化國であり、世界五大國の一に列してゐる。日清日露の戰爭に勝ち、世界大戰に參加して重要な立場を獲得し、皇威を八紘に輝やかして、小日本をしていきなり大日本にならしめた。生産工業は勃興し、文藝美術は進歩した。論より證據是れ以上大なる收穫はないと云つてゐるが、實際の内容を調べて見ると、戰爭は謂はゆる一將功成つて萬骨枯るで、徒らに空名を馳せた代りに大借金を背負ひ込んだ結果になつてゐる。算盤外れの戰爭や猿智惠工業を無闇に興して、損失に次ぐに損失を重ねた結果が、今日の經濟的行詰りになつたのだ。海に十億萬圓の軍艦があつても、陸に文無しの人民がウジャく\してゐたんでは仕様がないではないか。

飯が食へないので、骨肉相食み犇めき合つてゐる日本の此の社會に、突如としてモンテクリスト伯のやうな不思議な金を撒く人は出ないものか。現代の日本はいかなる精神的大人物よりもモンテクリスト伯のやうに宇宙を黄金化するほどの遺産を掘り當てゝ、それを撒きちらしつゝ正義の爲に戰ひ、貧乏と惡魔を退治て呉れる人の出現を翹望して止まないのだ。

不思議な存在であつたファリヤ法師は日本の何處かに居ないだらうか。何處かに隱されてある寶を掘り當てゝ、其の力で日本の建て直しをしなければならない時が迫つてゐる。

後藤伯の大風呂敷

私は晩年の後藤新平伯とはある縁故から可成り近しくして頂いた。と云つても私は別段後藤伯の政治上の仕事のお手傳ひをしたわけではない。又、赤の他人である私は後藤家の方々とは何等の關係も無い者である。私は無位無官、金も無ければ地位も無い一個の閑人である。其の無關係な閑人である私は折ふし後藤伯の話し相手を命ぜられる光榮に浴したのだつた。話し相手と云つても、只それは聽き役である。或時は廣い應接間で、或時は温泉宿の二階で、或時は名山の僧房の廣座敷で、後藤伯は名高い鼻眼鏡を搖がせ乍ら滔々懸河の辯を揮つて天下國家を論じるのを、私は謹んで拜聽し時に靜かに合槌を入れる位が關の山であつた。

私は前段に於て、偉人の死するや必ずそれ相當の遺産のあることを證明し、現代の日本の國民が渇望してゐる寶が何である

かを云つた。

後藤伯は、明治大正昭和を通じて最も異色ある人傑であつた。政治家としては第一等の素質を有つてゐた。併し伯は到頭總理大臣にならなかつた。皮肉に云へばなりたくてなりたくて溜らなかつたけれども總理大臣になれなかつた人である。政黨の總裁にもなれなかつた。けれども、總理大臣になれなかつたことが後藤伯の眞價を下げはしない。それは實質よりも環境の問題である。時の關係である。政治家後藤新平の全幅は總理大臣の誰れ彼れよりも數等上格であつても下ではなかつた。

後藤伯が總理大臣になれなかつた理由は環境と時の關係であるが、それをもう一つ具體的に云ふと、後藤伯は現代の政治家として餘りに飛び離れた遠大な政策を考へてゐた。それが小役人型の大臣級やモグリの請負師みたいな代議士共が跋扈跳梁してゐる現代では何だか現實離れのしたやうな感じを與へる不利益が伴なつてゐた。世間ではよく後藤の大風呂敷と評したものだ。けれども本人に云はせるとまだ一度も大風呂敷を廣げて見ない。內務、外務、遞信、滿鐵、臺灣、東京市、何處でも氣持よく大風呂敷を廣げたことはない。それであり乍ら世間が大風呂敷と評するのは、其の者の風呂敷が餘りに小さいからである。又世間は後藤伯を脫線家と云つたが、彼はまだ本當に脫線した經驗はない。一體掛け聲は盛んだが出足は割に正確な人だつた。

大風呂敷と云ひ、空想家といふ風に觀られてゐたが實際は其の反對である。元來後藤伯は醫者の出身だけに何處迄も科學的な頭腦の持主だつた。其の政策は科學的であり合理的だつた。新しい言葉で云ふと彼の思想は餘程唯物史觀的であつたので、或頃などは後藤は赤化したのではないかと云はれたことさへある。從つて彼の得意とする處も概ね技術功用の方面で、科學の利用から學問の傾向も唯物主義に偏してゐた。人物を採擇するにも其の人の人格や天性といふことよりも、技術や手腕をとり、政治上の考察も現實から離れてはゐなかつた。例の倫理化運動なども外面から見ると其の以前の彼とは正反對の行動のやうに見えたが、眞の目標とする處は矢張り科學的であり少なからず唯物主義的だつた。政治の倫理化運動は最初のプランに據ると、國家建直しの叢書とでも云ふべきパンフレットの連續的出版計劃であつて、全部で二十四冊を一ケ年間に出して仕舞ふ筈だつた。處がイザとなると都合の悪いことも生じて來た。鐵道事業や、電話事業や、政黨問題や、教育事業などは大して面倒もなかつたが、肝心の大問題である日本國民への現實の大遺産とすべく後藤伯が考へ拔いた極祕の大政策を、藪から棒に國民の前へさらけ出すとどうも變なものになる憂ひがある。伯の理想と

する大調査機關でも組織されて總ての專門家の研究に掛けたにならい、が、單獨の私見としてテーマだけを荒削りで拋り出したのでは權威も薄からうといふ心配があつたので、パンフレット續刊は中止にして、單に倫理化運動一本槍で押し切ることにしたのだつた。さういふわけで最後の目的はむしろ其の奧にあつたのだ。

政治の倫理化運動は世間も知つてる通り失敗に終つた。それは單なる一册十錢の本となつて講談社から發行されて俗惡な大廣告が人目を驚かした位に過ぎなくて何等實質上の收穫は無かつた。それでも伯は靑山會館を振り出しに全國を行脚して、政治の倫理化運動の傍系として普選準備會を組織したりしたが、大體にて凡てがへマにいつて纏りが付かず、結局伯が櫻田町の本邸と本村町の地面を擔保にして勸銀から五十五萬圓借りてそれで倫理化運動と普選準備會の跡片付けをして綺麗になつた。

けれども、是れだつて見樣によれば萬更捨てたものではない。大體政治の倫理化は元龜天正以來の斬り捕り强盜式を脫してゐない日本の政界では無理である。其の無理を見越し乍ら後藤伯位の元老級の政治家が素ッ裸になる覺悟で、淺草公園の萬歲式に大衆の前へ躍り出したといふ點は、これを彼の稚氣ばかりと見ては氣の毒だ。他の同階級の元老や富豪連の財布の尻ばかり固くして只管後生を願つてゐる連中と比べると兎に角後藤の遣り口は愉快で、社會に何等かの刺戟は與へたに相違ない。

後藤新平伯がどういふ人であつたかといふことを話すのが、私の目的ではない。偉人が死ぬと必ず何かの遺產を社會にのこしてゆく。後藤伯の遺していつた遺產は果してどんな物であるか。伯が生前考へてゐた大國策、所謂國家建て直しの政策とはどういふ事であるか。日本の空腹國民がそれに據つてどの程度に救はれるか。後藤伯の所謂大風呂敷の內容、まだ一度も人の前へ開けて見せない極祕の玉手箱をそろ〳〵公開してお目に掛けやうと思ふ。

水產事業の國營

溫泉で有名な伊豆の伊東では、漁業が或る形式で村民一同の權利となつてゐて、それが入札によつて賣買され、此の收入を村費に當て、尙餘れる分が一戶當り數百圓づゝ分配されるさうである。本年四月頃の時事新報には伊豆白濱村の狀態が紹介されてゐたが、此の村では魚族とテン草を村民が採取し、其の幾割かを村役場で公費に充て、餘れるものは各戶へ分配してゐるが、一戶當り每年二百圓位あるといふことだつた。

東京府下下葛西村のはづれ、大利根の支流である江戸川の畔

き出し口では、淺草海苔の採取が盛んな處であるが、これも公費を支辨した上相當の分配金になるさうだ。全國的に調査して見たらまだ他にも隨分かういふ村があるに違ひない。

後藤伯の調査して考へた處に據ると、日本は別に驚くことはないのだ。水産事業を國營にすれば、毎年度の豫算總額だけの利益を上げて行くことは何んでもないさうである。

他の漁業は別として、單に捕鯨事業だけでも優に十億萬圓以上の利益を擧げることができるのである。專門家の研究に據ると朝鮮海峽を通過して太平洋を横斷する巨鯨の群は一年間に三十萬頭を超えてゐる。其の鯨群は或地點に至つて殆ど全部ノルウエーの捕鯨船で捕られてしまふが、此の巨鯨は恐らく日本人の手では一頭も獲られないのである。それは日本には立派な捕鯨船が一隻も無いからである。實に莫迦氣た、勿體ない話だ。巨鯨となると一頭約一萬圓程度の價格である。朝鮮海峽を通る奴を全部捕獲すれば三十億萬圓の收入があるわけで、日本の國は鯨だけで立派に立ち行くことになる。

地球に棲息する巨鯨の全數は少なく計算して約三千萬頭ある。海は陸の三倍大であり、鯨群は黑潮に乘り、餌を追つて世界中を絶えずグル／＼廻つて歩く怪物だ。鯨は毎年百萬頭捕つても滅多に種切れになるべきものではない、然るに、時の爲政者はどうしたわけか、明治四十二年十月農商務省令第四十一號を以て鯨漁取締規則を發布し、同時に此取締規則に因り、我が國の鯨獵汽船の數を三十隻以内に制限してしまつた。其の目的とする處は、鯨屬の繁殖を保護すると共に漁業の秩序を維持するといふことにあつた。同時に遠洋漁業奬勵金の下附も廢止を見るに至つた。

これは考へて見ると實に莫迦々々しい事で、不必要にまで鯨の保護を勤めてゐるといふだけで、みす／＼寶を見のがしてゐるのだ。最近は捕鯨船の數も法定數の三十隻に達したが、これまでにするには容易に新造を許さなかつた。捕鯨船を一隻新造することを政府へ運動して認可を取つて造れば捕鯨會社から數十萬圓の報酬を受けられたくらいだ。併しかういふ風だから現在ある捕鯨會社は皆健實な發達をした。現今日本の捕鯨會社としては東洋捕鯨會社、大東漁業株式會社、土佐捕鯨株式會社、藤村捕鯨株式會社、遠洋捕鯨合資會社の五會社があるが、何れも非常な好成績を擧げてゐる。

けれども、捕鯨事業を、國家的見地から觀る時は甚だ微々たる成績である。現在の日本の捕鯨船は悉く舊式の小さなつまらぬもので、ノルウエーの捕鯨船に比べたらお話にならぬ。現在の日本にある捕鯨船では小鯨だけしか捕れないのだ。其の小鯨を

年に僅かに千五百頭位捕獲してゐるに過ぎない。巨鯨を捕るのにはそれだけの設備のある船が必要なのだが日本には一隻も無い。

一體鯨を捕つて何にするのかと云ふと、日本では食料や肥料にもするが、歐米では食料にはしない。骨も肉も鰭も海中に捨てゝしまつて油だけ取つてゐる。日本では鯨全體少しも棄てずに金にする。鯨油の用途は種々あるが、この油からニトログリスリンが出來る。此のグリスリンを混入しなくては強力な爆發藥は出來ないのである。

とにかく、鯨を捕れば大層な國富である。此の一事だけで國礎を定め得る程の有利な事業が、現在のやうな兒戯に類する小規模な殆ど問題にならぬ程度で經營されてゐるのは實に情ないといふよりも莫迦々々しい事である。謂る處政治家や役人が無智識である結果である。

日本人の鯨についての智識がいかに貧弱であるかを説明するに都合のいゝ笑話がある。先年東洋捕鯨會社が金華山沖で捕獲した小鯨の腹の中から大きな眞黒な石塊然たる一物が出た。すると其の船に新智識のハイカラな社員がゐて、此の人が米國で出版された鯨に關する傳奇小説を讀んでゐたので、眞黒な石塊然たる物が大問題になつた。其の社員の説明に據ると、此の眞黒な物を乾燥させて置いて、少し宛削つて呑むといかなる難病も卽治する奇藥となるものだ。米國では或る漁夫がこれを獲つて忽ち千萬長者になつた事實があるといふのである。さア大騷ぎになり、百萬頭の鯨の中に僅か一個しかない寶物だといふことが傳へられて、會社ではそれを錦の袋の中に納めたりして大切に保管した。農商務省や外務省の役人達も態々其の寶物を拜見に出掛けたものであつた。處が、後でノルウエーの捕鯨技師に鑑定させると、是れは澤山あるもので、ブルンバイと名づけられてゐるが、實は鯨の糞の塊りだといふことが判明した。奇藥どころか屁の役にも立たぬ代物であることが證明された。鯨の糞の塊りを錦の袋へ納めたり、それを態々政府のお役人が御寶拜見と飛り出たんだから大笑ひだ。が、大體日本人の鯨に關す智識は專門家といふ手合が此の程度だから呆れたものだ。

後藤伯の云ふ水産立國策は先づ爰に着眼して、第一着手として捕鯨事業を官營にし、ノルウエーのやうな優秀な捕鯨船をドシ／＼建造して此の海洋中の無限大の寶物を日本で拾へといふのである。序でに後藤伯の水産事業一般に對する説明を御紹介しやう。

日本は海國であるから先天的に日本人は漁業に長じてゐる。それともう一つ、日本人は下駄を履き、箸で飯を食ふので、足

の先と手の先の働きに掛けては世界一であり、此の特徴が漁夫たる資格に大いに適してゐる。元龜天正時代戰場討ち洩らされの武士が至る處の漁夫を煽動して扁舟で荒波を渡り、當時の暹羅には八千人からの日本人街が出來てゐた。山田仁左衞門、津田又左衞門、木谷久左衞門、呂宋助左衞門等の傑物がゐた。彼等は漁夫若しくは船頭の力を借りて遠征し、略奪や海上貿易で奇利を博した豪傑共だ。此の他にも裸體で四百餘洲を震駭させた無數の倭寇の勇者がある。史實の證明する如く、日本人は元來冒險心に富み、海洋に親しみを持ち、遠洋漁業に從事する素質を多分に有つてゐた。それが一朝德川幕府の鎖國令に禍されて消極的になり維新開國以後も海外發展力乏しきが如くに見られたが、日本人の天性はさうでないのである。

　世界を大局から觀察すると、各國人はあらゆる科學の力を應用し、資本の力を盡して、アフリカの蠻地でも、極地の南北までも、地球の陸地に於ける富を掘り出すことに熱中してゐる。今日の狀態で押し進むと、近い將來に陸上の寶は枯渇してしまつて、必然的に水產の大競爭時代が出現することは明確なことである。水產事業ほど將來大きな仕事はない。後藤伯が昔世話してやつたことのある臺灣人が偶然のことから基隆で珊瑚を採取して成功してゐるが、段々調べて見ると、珊瑚礁といふものは從前の學者が思つたよりも遙かに大きなもので、其の礁脈は基隆の沖から小笠原群島を經て四國に亙つてゐるものであることが判明した。今日ではこれを採取するのに小さな網に引つ掛けて、僅かに小枝を折つてゐるに過ぎないのだが、若しこれを大仕掛な方法で、海軍が搜海する時のやうな方法で採り揚げれば、世界でまだ見たこともない珊瑚の櫛や簪なども出來ていろんな美術作品の原料の上に世界的革命が來るであらう。

　或る航海者の發見に係るもので、北海道から金華山沖に亙つて海底に驚くべき昆布狀の海藻の何丈もある大きな草が簇生してゐて航行の邪魔になるが、採るには量が多過ぎるから大變であり、採つても直に簇生する非常な繁殖力である。試みに是れを採つて乾燥して置いた物を綿に製して見たら、面白い絲が出來て、それで布を織らせて使用實驗すると、完全に濕水力があつてレーンコートにでも作つた日には恐らく世界一であり、其の量に於ては正に無限大だから、印度から米國や日本へ輸出する綿などは忽ち驅逐されてしまふだらう、といふやうな問題もある。

　かういふわけだから、どの方面から見ても日本は水產立國が立派に出來る素質や條件を十二分に具備してゐる。これを上手に經營すれば其の國富だけで政府は財源が有り餘ることになり、國民は苛斂誅求を免がれることが出來るばかりかうまくい

くと一人當り何千圓かの配當金を頂戴する事さへ不可能ではない。然るに現代の政治家はありもしない國民の懐を絞る事ばかり考へてゐて國家永遠の策に就ては無頓着である。先年後藤伯が高齢病後の身をいとはず大寒を冒して日露漁業條約改訂の爲に露都へ行つた事など思ひ合せて見ると、伯が如何に水産事業に熱心に着目してゐたかを想像することが出來るだらう。最近の例の日魯漁業の問題堤清六對島徳の醜悪な喧嘩なども後藤伯が生きてゐたら起らなかつた事件であり、よし起つたとしたところがあゝまで双方醜態を曝露して國民の不信用を買ひ、獨り露國をして漁夫の利を得させるやうな馬鹿な事にはならなかつたであらう。

電氣事業の國營

仁丹の本舗で自家製體溫計の廣告をしてゐる文句の冒頭に、國債六十億萬圓、十年間の輸入超過が四十億萬圓、これでは國が亡びるから體溫計は仁丹の國産品を買ひ給へと云つてゐる。

電氣事業の日本の投資總額は四十億萬圓に達せんとしてゐるから、日本の事業の第一位であつて、投資額は實に大國債に次いでゐる。陸地が狹くてすべての原料品の無い日本は、良くしたもので造化の天惠があつて、水電國としては世界に冠たる資格をもつてゐる。然るにどうだ。電燈電力の使用料の高いことは世界一である。どう考へても理屈が合はないぢやないか。

現代のあらゆる産業や機械工業は悉く熱と光の力が基になつてゐる。あらゆる科學文明が其處から築かれてゐる。然るに此の光と熱を供給する電氣の使用料が今のやうに法外に高くてはいくら勞働賃銀を下げて見たところで産業は發達しない。電燈電力の使用料は、少なくとも現在の四分の一に引き下げなくてはいけないのである。それは不可能な事ではないのである。

鐵道の電化は今や時の問題だが、電力の使用料が現在の四分の一になると、乘客の賃金は半減又は三分の一になる。豆腐屋で使用する電力が四分の一に下ると豆腐は一丁五錢のゝが三錢になる。斯くしてすべての産業は沛然たる雨に逢つて蹶乎として擡頭する草木の如くに勃興して來やう。政友會でも民政黨でも、産業立國の看板を同じやうに掛けて叫んでゐるが、いくら空に叫んでも騷いでも、肝心の原動力である電氣の使用料を四分の一まで引き下げない限りは無駄である。電力普及は都會だけの問題でなく農村振興の上にも土臺となるものだ。一般農業に對する電力使用、或ひは製茶でも養鷄でも電力を必要とする。農村電化の聲は隨分久しい前から聞かされてゐるが一向實現されて來ない。せい〳〵ランプが五燭か十燭の暗い電燈に變つた

くらいのもので、農業上には少しも應用されてゐない。理由は說明するまでもなく電力使用料が滅法高いのでとても百姓等には使ひ切れない。電力の料金が四分の一になつたとすれば、宣傳する必要もなく日本の農村は忽ち電化されて、肥料の根本である空中窒素も澤山取れて海外から肥料を輸入する必要は無くなる。さうなると國民生活は實に樂になつて少なくとも今日の半分の收入で暮らせる世の中になる。産業が振興するから失業者が無くなる。生活難で一家心中するやうな慘鼻な世相は昔の夢となるだらう。然るに多くの爲政者が此の根本問題を解決しやうとしないで徒らに産業立國を叫ぶなどは、泰山を挾んで北海を超ゆるの類である。

日本は何故かう電力が高いか。元來水力は天惠物である。其の天惠物に少しばかり人工を加へるとそれが熱となり光となり力となるのだから、勿論油や薪や炭より安かるべきものである。そうしてそれは各人に普遍的に惠まれなければならぬ性質のものだ。日本ではそれがすべて反對にいつてゐる。今から其の原因を糺して見やう。

水力電氣會社の總資本額は將に四十億萬圓に垂々として、十年後には七十億に達するだらうと云はれてゐる。日本のシミッタレな資本家共が此の驚くべき投資を敢行したのは、要するに莫迦に儲かる獨占事業と考へたからだが、併し、資本家に公德心が缺けてゐると、眞面目な事業も不眞面目になり勝ちなものである。四十億萬圓といふ資本金は恐らく四分の一の十億萬圓でも安くなるものかも知れない。手近い例が、東京市電會社の資本金だけで五億何千萬圓といふ莫迦げた數字であり、尚其の上會社は五億の社債を負つてゐる。現在東京市の厄介者になつてゐる電車は、その昔僅か數百萬圓で出來てゐたものを市民の遠い將來までの財源をつくるためだといふ口實の下に、それを一躍一億萬圓にも買ひ上げたのである。最初の評價が全然桁外れである。だから幾年何年經つても收支償ふ時がない。

日本のあらゆる事業の中でも電氣會社の資本は飛び切り法外に高く評價されてゐる。水力電氣は政黨の黨費の捻出所とされてゐて、其の利權は驚くべき高いものに計上されてゐる。いろんな人間がこれに絡み付いて不正な利益を貪ぼるところの伏魔殿になつてゐる。それに日本人の惡い癖で經驗の乏しい事業に對して野方途に大工事を進める。一方請負師は遠慮なく不正工事をし、官吏でも會社員でも賄賂で殺して泥棒同樣の太い事をする。かういふ風で何から何まで無駄な金が掛つて結極始末の付かぬものになつてしまつた。ために水力電氣は天惠物でも何でもないものになつて、徒らに事業の資本ばかり大きくなり、其

の結果が今日の如き世界に比類のない高價な使用料を徴收しなければ會社の經營が成りたたなくなつてしまつた。すべて公德心の無い國の政治家や事業家のする事は知らず〴〵國家と國民を食ふことになり、丁度鮹のやうに最後には自分の手足を食ひ物にして死ぬのであらう。

數年前から政府は電力統制審査會を組織して審議をさせてゐるが、根本的に電力國營から出發しない限りは、いつも小田原評議で了るのは明瞭なことで、いつ迄待つても使用料の下りつこはないのである。

日本の國礎を立て直すには、是非共水力電氣を國營にする必要がある。而して可成り正確な見積りに據ると現在の資本總額の四分の一に評價するのが至當であり、從つて使用料も四分の一に輕減することは樂である。國民は如何なる犧牲を拂つても此の天惠物にして偉大なる財產である水力電氣事業を國營にして產業振興を圖らなければならない。以上が後藤伯の電氣事業國營論の概略。

取引所國營

現代の大モンテクリスト伯の現はれる處無限の黃金が生れて來る。後藤伯が一度び打出の槌を振ると、無數の財源が飛び出して、ちつぽけな日本の財政位は立ちどころに救はれてしまふ。

敢てどれに限るといふのではない。後藤伯の考へてゐた大國策の中の一つでも實現すれば、日本國民は生活難から救はれるのである。

後藤の大風呂敷と云ふ。けれども、後藤伯の云ふ事には、實行不可能のものはない。只、議論が餘り遠大であつたり、數字が餘り桁はづれであつたりするために、俗物の耳には何となく法螺のやうに感じられたりするだけであつて、立論には必ず深い根據があり、科學的調査が伴なつてゐることは前にも述べた通りである。取引所國營論なども着眼が頗る奇拔で未だ何びとも唱へたことのない問題だが、實行は實に易々たることである。

大正十一年八月二十五日の朝日新聞に、石井定七が失敗の經過と其の告白といふ記事を載せてゐる。大正七年から八年へかけての石井の財力は日銀そこのけの偉大なものだつた。

「私の一番儲けたのは大正八年の春で其の時少なくとも七千萬圓位儲けた」と當時定七は親近者に語つた。その七千萬圓は何處から石井の懷中へ流れ込んだか。北濱株式、三品、堂島、綿絲、鐵、銅、あらゆる投機の的中から大河の決する如く定七の掌中に金が集つた。大正八年末の郵船の配當だけでも、一期に二十七萬圓を受け取つて關西の投資家連をあッと云はせた。

當時石井の持株は全國に跨がり、大阪取引所の株だけでも十萬株、大阪電燈の株が三萬株、久原の鋼の片持りには一擧にして百七十萬圓を利し「どうだす一寸首を捻つたらこんなもんや」と豪語した。此の話を耳にした連中は頭がフラ／＼になつてしまつた。かういふ記事が載つてゐたが、末路の哀れさは人の知る通りだ。

成金といふ標語は今でも通用するばかりか大抵の奴がそれになりたがつてゐる。乾新兵衛、久原房之助、さては大倉であれ、三井であれ、三菱であれ、元を糺せばいづれも成金である。石井定七と同樣の經路を辿つて來たものだが、それが運好く安定したに過ぎない。只、成金になる經路も時代と共に異つて來て、昔の成金は顯官と政府とで作つてやつたものが多く、或は土地成金、鑛山成金、船成金と種類もあるが、どんな成金でも取引相場の影響を受けてゐない者はない。

取引所相場が一國の經濟界に必要であることは無論だが、併しこれは藥に譬へて見ると劇藥のやうな物だ。一方で非常な危險が伴つてゐる。藥でも劇毒藥に取締りがある如く取引所相場も大體に於て取締らなければならぬ性質の事業だ。

後藤伯は、此の相場事業を國營にして、それに因つて生み出した利益を以て水力電氣を國營に統一することを考へてゐたのである。相場はどう理屈を付けて見てもつまるところ大きな公開賭博である。此の取引所が必要である以上、賣買手數料、露骨に云へばテラ錢を政府で取つて國庫に入れよといふのだ。大體として取引所官營は名案で、其の長所は取引狀態が現在よりも確實になること、官營に直すことによつて人民の生業を奪ふといふこともない。謂はゞ誰も迷惑を蒙ることがなくしてそれで政府は大なる財源が得られる。

現在の取引所は、兜町、蠣殼町、北濱、堂島を始めとして全國主要都市に至る處設置されてゐる。株、米、綿絲、砂糖、豆粕といふやうな物を扱つてゐる。假りに是れ等の取引所を全部國營にすると極く消極的の計算を立てゝも政府の得る手數料は年數億萬圓を超過する。日本の輸出品の第一位にある生絲は八億萬圓以上に上るから、これの手數料百分の一だけでも八百萬圓はある。其の他それ以上に巨額な米穀、株式の取引は月に幾億といふ金額に上るから、賭博のテラ錢だつてかうなると馬鹿には出來ない。

全體日本の現在の取引所は百害あつて殆ど利益が無い。絶えず詐欺的策動が行はれて物價が正當の相場で取引されてない傾向がある。さうして客筋は仲買人や相場師に食はれて破産して仕舞ふ運命になる。更に一番馬鹿を見るのは生產業者だ。一

を米價に就て見ると、年收五千萬石と云へば今日では大凶作の歲であらうが、其の時は米價は必ず一石五十圓以上になるだらうから、總金額に直すと二十五億萬圓といふ額になる。若し七千萬石も出來れば大豐作といふので、米價は徹底的に賣り崩されて一石二十五圓以下になるだらう。すると此の代價は十七億五千萬圓といふことになる。從つて凶作の年には農民の懷中へ二十五億萬圓の金が入るが、豐作であると十七億五千萬圓しか入らないといふ莫迦に矛盾した奇現象が起つて來る。かういふ例は珍らしくなく每年のやうに繰り返されてゐる。詰る處これは現在の取引所が作り出す缺陷である。政府も是れには其の都度頭を惱まし大正十年に米穀法を制定して、米價調節に苦心してゐるが、取引制度の根本を捨て置いて僅かな金で調節を計るのだから殆ど利き目がない。そこで今度の內閣は米穀調査會を設置して米價の下落を防止することに努めてゐるが、どうして見た處で、此の儘では駄目である。いづれにしても米價が豐凶に比例して正當に近い價格をもつことになり、生產者と消費者の利害がほゞ一致することにならなくては、國民の生活が安定しない。殊に農村の生活は米作の豐凶と米價の高下によつて左右されてゐるが、現在の狀態では農民は常に投機者の爲に飜弄せられてゐて、自己の幸福と不幸とに對して全く標準を失つてしまつてゐる。農村疲弊は全國的に著しい現象となつて來てゐる。日本の將來に對して最も憂心とすべき事はこれだが、農村疲弊の最大原因は米價の不安定から發し、其の責任の大半は現在の取引所の制度にある。

米穀取引所の設置を許可した當時の趣旨から見ると、商取引の圓滑を計りこれで米價が適當に調節されるであらうと爲政者は考へたのであつたが、今日の實際から見ると單に一部の投機者の賭博機關となつてゐるだけであつて、米穀取引の實は少しも行はれてゐない。米穀取引所の名稱は全く空文空事で目的は賭博である。國民生活を毒すること是れ以上に甚だしいものはない。

株引取式所は米穀より更に大仕掛な賭博であるが、併し株券は紙であるから取引がしやすい。大震災の時には新東株が百十圓以上であつたのが、地震のために取引所も燒けてしまつて立會不能となり、紛擾中に解合つて八十圓で餘議なく決濟された。然るにバラックが建てられて立會を開始して見ると百何圓から忽ち百二十圓以上に飛躍した。いくら取引所であるからと云つて燒け太りとは合理的であるまい。今日の制度の取引所では、仲買人の都合や、利害關係の生じた會社や財團の都合次第で、相場は左右されてゐるのである。特に宜しくないことは政治家

や政商が極端に取引所を利用することだ。日魯漁業會社の今度の問題のやうな馬鹿な事でも、所謂相場師と政客と組んで打つた賭博の陰謀である。元來取引所といふものは基礎が一片の主務省の認可で出來てゐるものであるから、營業認可の期限が切れると改めて延期を願つて許可して貰ふことになつてゐる。其の度每政治家に食はれてゐる。日本全國では可成り澤山の取引所が認可されてゐるが、其の資本金は極めて僅かのもので、さうして取引金高は非常に驚く可き數字に上つてゐる。大正八年と云へば戰爭成金の無暗に出來た年だが、此の年は單に株式取引しかも東京株式取引所だけの賣買高で、六十一億八千五〇二萬圓に上つてゐる。これは整然と取引所の帳簿に上つてゐる分であるが、此の他に謂はゆる呑屋と稱する不正賣買の數字を想像して加算すれば恐らく百億にも達してゐたことだらう。此の數字に、米穀、綿絲、生絲其の他の物を加へて、而も全國的に計量すればどれ程の金額に上つてゐるか分らない。若しこれを國營にすれば每年二億や三億のテラ錢を政府が獲得することは居睡つてゐても出來ることだ。取引所を國營にしてすべての制度や規則を改革して直接政府の手で經營することになると、眞に價格のある物は高くなり、胡麻化しものや不合理の採算外れのものは安くなり、米をはじめ物價の調節が思ふ樣に出來て、國庫は多大の財源を得た上に國民生活を安定に導くことが出來る。四十億圓も投資されてゐる電氣事業なども十億圓程度に株の値下りがして、國家が買收することも手易く出來るやうになる。

國際大學と萬國博覽會

後藤伯は教育事業には素人であつた。然し教育事業そのものには隨分興味を有つてゐて、殊に晩年はそれに對して大きな抱負を持つやうになつたが、生前に何等實現の運びに至らなかつたのはお氣の毒であつた。

後藤伯は一口に云ふと學校トラストといふやうな案を考へてゐた。現在の東京市內に散在する各種の私立學校を糾合して一ケ所に集め、郊外に一大學園を建設しやうといふのである。都市が發展するに從つて學校は第一に敷地難を感じて來た。且つ其の地域は多く人家稠密して學校には不適當である。運動場も教室も狹くて學生の健康にも品性の陶冶にも適しない。東京の如き都市は商工業の地であるから、學校は宜しく郊外地に移轉さすべきである。それと現在の多くの私立學校は特殊のものを除くの外は大概經營難に陷つてゐる。それらの大小私立學校を綜合してこれにトラスト式の組織を加へると學校經營者も財政的に救はれるに違ひない。

最初は漠然とこんな風に考へてゐたが、それぐ〲獨自の歴史を持つてゐる各學校を一つに統一することはなか〳〵困難であるので、先づ新しい學校を創立することにした。後藤伯の案は國際大學の創設といふことだつた。明治維新以來日本の國運は發展して、文化的に歐米諸外國と拮抗するまでに到達してゐる。現在では學問をする爲に歐米へ洋行する必要はなくなつてゐる。今後の日本は益々文化を向上させ此の文化を以て世界に臨まなくてはならぬ。それには先づ日本に完備せる國際大學を創設して、少くとも東洋諸國の學生を其處に吸收する方策を立てるがよい。現在でも支那の留學生は數千人を算するが、政府の方針や學校當局者の彼等に對する待遇がよろしきを得てゐないため折角遊學して來た者を滿足させないばかりか反つて在學中に不快な印象を遺させ、それらの學生が歸國した曉に排日思想を宣傳するといふ面白くない結果を招いてゐる。

國際大學は主として東洋諸外國の學生を收容することを目的とし、教師には日本の學者は無論のこと、支那、印度あたりから優秀な學者を招聘して任命する。廣き東洋文化を綜合する一大學府を建設するのである。現在支那では日本學の流行は洋學を凌いで、支那の青年は悉く日本語を研究し日本の學問をとり入れることに努力してゐる。かういふ時代であるから、更に留學生向きの立派な學校を造つて優遇すれば必ず支那ばかりでなく、印度の學生も暹羅の學生も安南の學生をも吸收することは困難でない。

後藤伯は大體かういふ目的の下に學校を建てることにして、昭和二年頃、神奈川縣高座郡綾瀨村約三十萬坪の敷地を買收した。プランは立つて敷地も出來たけれどもそれから先の進行は容易でなかつた。大體學校は營利事業でないから資本家がつかない。それで行き詰つた結果、プランを立て直すことになり、學校は第二段にして、其の場所を利用して萬國博覽會を開催することにした。博覽會をやつた後で建物の一部を學校に利用する方法を考へた。

萬國博覽會といふことは千八百五十年英國アーサー・コンノート殿下の創意でロンドン郊外で開催されたのが初めで、當時萬國の文化を集めて廣く英國民に世界的智識の普及を計つたのだつた。其の計劃は見事圖に中つて第一回世界萬國博覽會は豫想外の大成功を收めた。有名な水晶宮は其の時の建造物の一部が現存してゐるのである。次いで千八百六十年頃にはパリで開催され、七十年頃はウヰンで、七十六年にはアメリカ獨立百年祭記念事業としてフィラデルフィア市で開催され、以來萬國博覽會は歐米各國で殆ど競爭的に開催されて來たが、歐洲大戰で

一頓座の形となつた。我國でも農商務省の計劃で明治四十五年に五百萬圓の豫算で青山練兵場及び代々木御料地（現在明治神宮）で開催することになり、歐米各國へ贊同を求め、米國の如きは百五十萬弗の計上費で既に委員まで特派し準備に着手したが、豫算關係から明治五十年に延期され（再度の豫算は一千萬圓）引續いて翌年の議會では無期延期となつて、今日に至つてゐるのである。此の際それを復活して日本で開催することは一面不景氣挽回策ともなり、産業發達文化進展を計る上に非常なる利益を齎すことは云ふまでもない。

此の計劃を進めて更に隣接地を買收し總坪數百萬坪といふ尨大な敷地をつくつた。昭和三年三月卅一日の報知新聞に大々的に此の記事が載つた。後藤伯の考では、とにかく政府の力で博覽會を開かせれば自然其の土地が發展して少くとも其の跡へ小さな町位は殘るに違ひない。さうして百萬坪の土地の値上りによつて第二段の理想的な國際大學建設に着手しやうといふ目論みだつた。

後藤伯のことだから、考へてゐるうちにプランは段々大きくなる。現在日本では米國から觀光團の申込みがあつても大仕掛の團體は泊めてやるホテルもないから斷るよりほかはない。國際會議や國際オリムピックなども日本で開きたいのは山々だが宿屋も無ければ會場もない。アメリカ人が年々歐羅巴へ觀光に出掛ける數は四十萬六千人に達し十六億圓も費消してゐる。日本へも每年六千七百名位來て四千萬圓以上の金を落して行く。これ丈の金額でも日本の輸出品と比較すると第三位にある絹織物に次ぐ第四位の金高である。成金の米國の客を引き寄せることは輸入超過を帳消しにする方策として一番手取り早い手段だ。萬國博覽會は此の客寄せにはもつてこいであるし、數十萬坪を開放して國際オリムピック競技場にあてる計畫なども立ててゐた。

國際大學と萬國博覽會は、後藤伯の最晩年の仕事として伯自身非常な熱心をもつてゐたが、天この偉人に壽を借さず不幸にも何等眼鼻も付かぬ前に病を得て薨去されたことは遺憾であつた。それがため折角敷地まで出來てゐるのに此の事業は一頓座を來してしまつた。何しろ莫迦々々しく計劃が大きいのだから後藤伯のやうな人でもなければ容易に手の付く仕事ではない。遊廓移轉位の利權で熱中してゐる現在の政治家共では荷が勝ち過ぎてしまふ。と云つて是れ程の仕事を捨てゝ仕舞ふのも惜しいと思ふ。誰か此の後を買つて出て見やうといふ大風呂敷の持ち合せはないか。

平壤遷都論

私は後藤伯から屢々聞かされた得意の大國策を本誌に據つて紹介して國民の參考に資し、眞面目に考へて貰ひ度いと思ふのである。然るに私がこれまで書いた處を讀み返して見ると何だか非常に面白おかしいやうなものになつてゐる。私は文筆家ではないから敢て面白く書くつもりではないのであるが、すべて後藤伯の考へてゐることが現實の社會から餘り飛び離れて居り、統計上の數字が桁はづれに大きいところから、何となく大風呂敷のやうに聞えて自然に面白おかしげになるのである。事實伯の談論を拜聽すればもつと此の何層倍も面白かつたものであるけれども、いかに面白くても決して空論はない。實行不可能の問題はない。立論には必ず科學的根據がありたゞ想像力が遠大に馳るのである。それについては私はかういふことを考へる。すべて政治家でも實業家でも學者でも、藝術家でも大人物は必ず想像力が豐富である。恒に目前の現實に囚はれてゐる者では科學の發明も出來なければ人類や國家社會を救ふ大事業も成し遂げられぬ。後藤伯は此の想像力の働きの最も鋭い人だつた。若し運命が後藤伯をして小說家たらしめたのであつたならば、彼はトルストイやユーゴーを摩する大仕掛な創作を發表して社會を驚かせたかも知れない。

後藤伯の懷抱せる國策の二三を紹介したから、最後に最も雄大を極める大陸進出策を述べて此の稿を終ることにする。前段に述べた數種の國策はこれに據つて日本の財政を立て直す爲であるが、一國の强大は財力が出來たばかりでは完全しない。

元來日本の缺點は國土の狹い事である。國土が狹いから製造事業を起す原料が無い。更に日本のやうに人口增加の急激な國では現在の國土の內では國民の全部が生きて行く道が立たなくなる。然らばどうすればよいのか、云ふまでもなく大陸進出の長計を樹てることが此の問題解決の唯一の鍵である。

日本國民が日淸日露の兩役を敢行して大犧牲を拂つたのも、世界大戰に參加したのも、最後の目的は國土の擴張を念としたのであるが、いつも列國の邪魔があつたりして十分に所期の目的を貫徹することが出來ないでゐる。然し、日本民族の大陸進出の遲々たる所以は强ち外交の失敗ばかりが其の責任の全部ではない。日本人は、金のある者は外へ出す、金の無い者は出掛けて行つてもロクな仕事がない。仕事の無いのは金のある者が行つて事業をしないからである。日本國民のやうな環境や傳統や其の他いろ／＼な條件を持つてゐる者は、尋常一樣の政策では國土の擴張は絕望である。神功皇后の三韓征伐以來、豐太閤

の遠征、日清日露の役でも、實は思つた程の大陸進出は出來なかつた。現に多くの政治家が騒いでゐる對支問題の解決でも、滿蒙政策の實現でも、現在の調子では百年河清を待つ以上に見込みのない問題であるが、日本國民の生きる途は滿蒙以外に餘地のないことも一般が知つてゐる。知つてゐながら出來ないといふのだから厄介である。

が、後藤伯に云はせるとそれは何でもなく行はれる問題である。それは、日本が帝都を朝鮮の平壤に遷すことである。明治維新は東京へ奠都を斷行することによつて始めて大磐石の基礎がすわつたのである。鎌倉は賴朝に依つてさだまり、大阪は太閤によつて出來、江戸は家康によつて出來上つた。されば明治維新の際の大英斷のやうに錦旗を押し樹てゝ鳳輦を進め、大日本帝國が世界大に擴がる爲に、朝鮮平壤へ奠都するのである。これが大陸進出の基礎である。

帝都が平壤に遷れば陸海軍も移動するであらう。日本銀行も行くであらう。皇室の藩屏である華族さん達は先を爭つて行くであらう。日本中の富豪も行くであらう。朝鮮に事業は矢鱈に勃興する。鴨綠江沿線長白山系の大森林は開拓される。大同江をひかへて東洋第一の大都會が出現する。仁川、鎭南浦大連等は東洋屈指の貿易港となる。疲弊の極にある朝鮮は忽ち煙突林立の衢となる。現在一億萬圓の資本で計劃されてゐる三菱の長津江水力電氣などは十倍の規模に擴張されるであらう。内地からも海峽を越えて電力が輸入され朝鮮の大工場で多量に生産される物資は飛行鐵道で東亞の各地に輸送される。現在では乞食で埋まるだらうと云はれてゐる朝鮮に大小の成金が續出し、乞食などは見たくても見られぬやうになるだらう。

日本國民は初めてお膝下にゐると同じ心地で、安心して滿蒙シベリヤの天地に進出するであらう。大規模な生産工業が起り、人口食糧問題は過去の夢となり、陸海軍は充實し、茲に初めて日本は名實共に具はれる世界の一等國となり、皇謨を中外に輝やかすことが出來るであらう。

妖怪画談全集

全十冊 豫約募集

第一回配本開始

全國書店に行渡る

日本篇上

藤澤衛彦編

川端龍子畫伯の高雅なる裝幀

本篇所載の妖怪文章六十篇口繪原色版二枚・別刷一色版三十二面・凸版挿畫百二十種

人智の解き得ざりし不思議、奇怪幻妖の怪事實の大集成、而もそれは全世界に亘たるのだから珍重すべきである。日本のものは二冊、傳説學者の權威藤澤衛彦氏が編集する。古文の解し難きをさけて悉く現代文で書いてある、支那篇は北平の文人過耀良氏、ロシヤ、ドイツ及び北歐諸國はワノーフスキー氏、印度篇は詩聖タゴール翁が人選中、イギリス篇はグラント氏アメリカはラコツク氏、フランス篇はボルネ氏、比較妖怪學はスパルビン博士が擔當される。要するに全世界の妖怪圖書館で且つその研究室だ。

只の繪話でない
昔話の寄集でない

科學的文學的に
取扱はれる世界
民族恐怖の表現

あの科學と器械で固まつてゐる現實一點張の現代アメリカにも不可思議な妖怪が出現する奇怪！妖幻！理論の鍵の開き得ぬ扉の蔭を此全集で窺つて見給へ

一冊一圓五十錢

毎月拂は外に申込金五十錢入要一時拂は十冊十四圓申込金不要外に送料・豫約以外分賣せず

〆切・七月末日

内容見本全國書店にて進呈

東京市外長崎町
中央美術社
振替東京四七六八二番

雄

國際 妖怪座談會

出席者　（帝國ホテルに於て）

エデス・アメリア・ラーコック夫人　（アメリカ）
アレクサンドル・ワノーフスキー教授　（ロシア）
エフゲニ・スバルヴキン博士　（ロシア）
チエルトック・チエルトフ技師　（ロシア）
フローレンス・ウエルス孃　（イギリス）
藤澤衛彥　（日本）
雨宮庸藏　（本誌編輯部）

雨宮。今宵は色々と御多用の所をお集り願ひまして有難う御座いました、それでは是から始めることゝ致しますが、どうぞ面白いたねを存分御話し下さい。

藤澤。では……日本には百物語といふほど（「百鬼夜行」その他の書物を示しながら）澤山妖怪があります、御覧下さい、このやうに迚も澤山の妖怪があるのですが、日本の妖怪と西洋の妖怪とを比較して見ると、西洋の妖怪は主として民族的なものが多いようですが、日本の妖怪はその民族的なものばかりでなしに、非常に郷土特異な妖怪が多いやうでございます。それで、この郷土的の妖怪を一つ一つお話をすることは皆様のお國の方達には分らない妖怪が多い。それに、非常にグロテスクなもので、民族的に違つて居る所が多いやうでございます。それで今日の話はどこか共通點のある雷と惡魔といふやうなことからお話し願ふお打合せになつて居ります。この雷は、日本では斯ういふやうな（第一圖を示す）表現になつて居ります、サンダー、……太鼓を叩いて……。

スバルヴキン。是は大分新しいですな。

藤澤。是は新しい、古いのは東京市の自治館に展覧會がありまして持つて參ることが出來ませんでした（第三圖參照）が、是は後期雷の表現なんです、三つの巴がくつ付いて居る、巴の起源については別に論がありますが、雷の巴は新しい。それ以前のは唯太鼓ばかりで何も印が付いてゐなかつたのです。（第二圖參照）又雷自身も、古いものは嘴が尖つて天狗のやうな形をして兩翼を持つて居つた。その羽を持つて居る日本の天狗とか雷とか言つたやうなものが、その表現の形式からいつてギリシヤの惡魔、サタンに似て居やしないか、その翼は黑くはないけれども、顏の恰好などがサタンに似て居る所がありはしないか、さういつた點で

何か……。ワノフスキーさん如何です。

スパルヴキン。 それはバイブルの中に羽の生へたのが出て來ますね。

藤澤。 さういふやうなことに就て御考察は如何ですか。

ワノーフスキー。 ギリシヤのサタンといふのには、鳥の羽を持つて居る表現は先づ無からうと思ひます。それから嘴ですね、嘴も持つてゐないやうです。

ウエルス。 その話は、オーストリアにあります。鳥が羽を擴げて雷をつくる。それはフランスとアメリカ・インデアンにも同じ話がある。オーストリアにサンデバールドといふ鳥がありますね、夕立の前に騷ぎをする、さういふ所から鳥が雷を造つたといふのでせう、面白いですよ、オーストリアとフランスとアメリカ・インデアン、みな同じ話がありますね。

藤澤。 それは雷鳥のやうに雷が鳴る時に落ちて來る鳥と一緒の話ですか。

ウエルス。 さういふ話がある所へ、鳥が夕立の前に騷ぎをしますからサンデバールドと言ふのでせう。

藤澤。 私のお話した、初めに嘴の尖つたといふのは、支那の傳來のものです。支那に「三教搜神大全」といふ本がありますが、その本の中にも出てゐる。その雷は、嘴が尖つて羽があり、太鼓を持つて居る、さうして、かみなりは天から地に落ちる、落ちるといふやうな所から惡魔、地獄の鬼に表現されて來るといつたやうな所がありはしないかと思ひます。さういふ點に何かお氣付はありませんか。



(第一圖)

ワノーフスキー。 ロシヤの迷信にあるサタンは、かみなりと同一視することは出來ません。サタンは惡魔である。併し雷は惡魔ではない、かみなり、雷光、そこから生ずる雨は、却つて人間に對して幸福を齎らすもので、自然を活かすものであつて、惡魔のやうな自然を殺すやうなものでない、それで、雷や電光を發するものは惡魔でなくて、良いものである、それでロシヤではイリヤパブロッスといふ聖女があつて、この聖女に因んで、國民は雷と電光をその聖女の發する現象であると信じて居ります。

ウエルス。 昔のギリシヤ人と

ユダヤ人とローマ人は、雷を神樣と思ひましたね、惡魔ではなくて一番上の神樣、それで、太鼓を叩くのは使はれてゐる僕であると言つてゐますね。

スバルヴキン。 ロシヤのヘーロンといふ神樣は矢張り神樣であつて惡魔ではない。

藤澤。 日本でも、やはり雷は、元來が、神樣で、思想の上からは、惡魔ではない。それから、雷の神樣には、日本では二種類ある、一つは印度から來て佛教に附隨してゐるものと、もう一つは、日本民族の在來から持つてゐる神樣です。佛教に附隨してゐる雷神といふのは、印度の帝釋天として日本では信仰されて居る、これが、波羅門教には無數の神樣がありますけれども、大體に於て三つの種類に分類することが出來るのであります。一つは天上の神樣、その二は空中の神樣、それから地上の神樣で、それで空中神の中心が即ち雷電、光明の神樣、雷、稻妻といつたやうなものになつて居る。雷が幸福を齎らすといふのは光明の上からいつて幸福を齎らすといふ意味もありませうが、日本には、人間が死んで、雷と成り、その怒りが其憎むべき者を懲すといふやうな思想がある。例へば後に天神樣と言はれて信仰された菅原道眞といふ英雄が、雷となつて自分の仇を打つ、それは、自分は元來非常に忠義を盡したものであるのに、天子樣に讒言をされて島流しにされた、でその靈魂が雷となつて、もと自分を苦しめた人に仇をするといつたやうに、雷に成つて惡い者を滅ぼしたといふやうな話が附隨して居ります。他の國々ではどうですか、この話はありませんか。

ワノーフスキー。 いまのお話に不明の點があるのですが……、それは、死んだ人が雷に化けるのですか、それとも、その靈が雷を支配して居つて、それを自由自在に使ふのですか、どつちなんですか。

藤澤。 死んだ人がかみなりになつてやるのです。

ワノーフスキー。 かみなりに成るのですね。

スバルヴキン。 それは佛教ではありませぬか。

藤澤。 影響は兎に角、日本説話のうちに流れを築きました。

ワノーフスキー。 さうしますと、自分がヽに化けるといふのは、亡靈が外のものに、例へば獸（けだもの）——に化けると同じやうなことなんですか。

藤澤。 人間の怒りが雷そのものになる、雷は怒りの代表であるといふやうな思想です。そこから結付いたものと思ふのですね。

スバヴキン。 それは、後の解釋ですね。もとの解釋ではないでせう。さういふ雷は、人間の描いた貌ですが、形として現はれてゐない前の雷はどうですか、何か人間と化物の間でゝもあるのですか。

藤澤。 それは、光明を齎らすものと、それから天の怒りと二つに分れてゐる。人の怒りも要するにそこに交渉がありませう。

ワノーフスキー。 雷を呼起すのと、さうして、雷そのものになるのとは餘程違ひますが、雷そのものに化けるといふのは、どうも自分としてはその思想を掴み得ない。さうすると、鬼と同じやうに、亡靈は水に化ける

とか、河に化けるといふやうなことも出來る譯です。

藤澤。さうした話も生れて來てゐます。然しこれは自然說話より餘程遅く、取扱はれたといふやうなことはいへるだらうとは思ひますけれども、とにかく、後には、雷自身が或る悪い者を戒める、天の怒りで戒めるといふ話もありますけれども、亡靈が雷となり、鳴神となつて現れるといふのが、年代で言ふと、五百年も前から行はれてゐる。先程の菅原道眞、それから、新田義興といふ日本の忠臣ですが、それが、雷となつて悪い者を滅ぼしたといふ話がある。それは只今のお話のやうに雷を使ふといふ意味にも取れないことはない、何故なれば一度落ちたばかりでなしに、三人の悪い者があつて、三人に仇をする場合には、三ケ所へそのかみなりが落ちて來る。仇を報じてからはやつて來ない。….

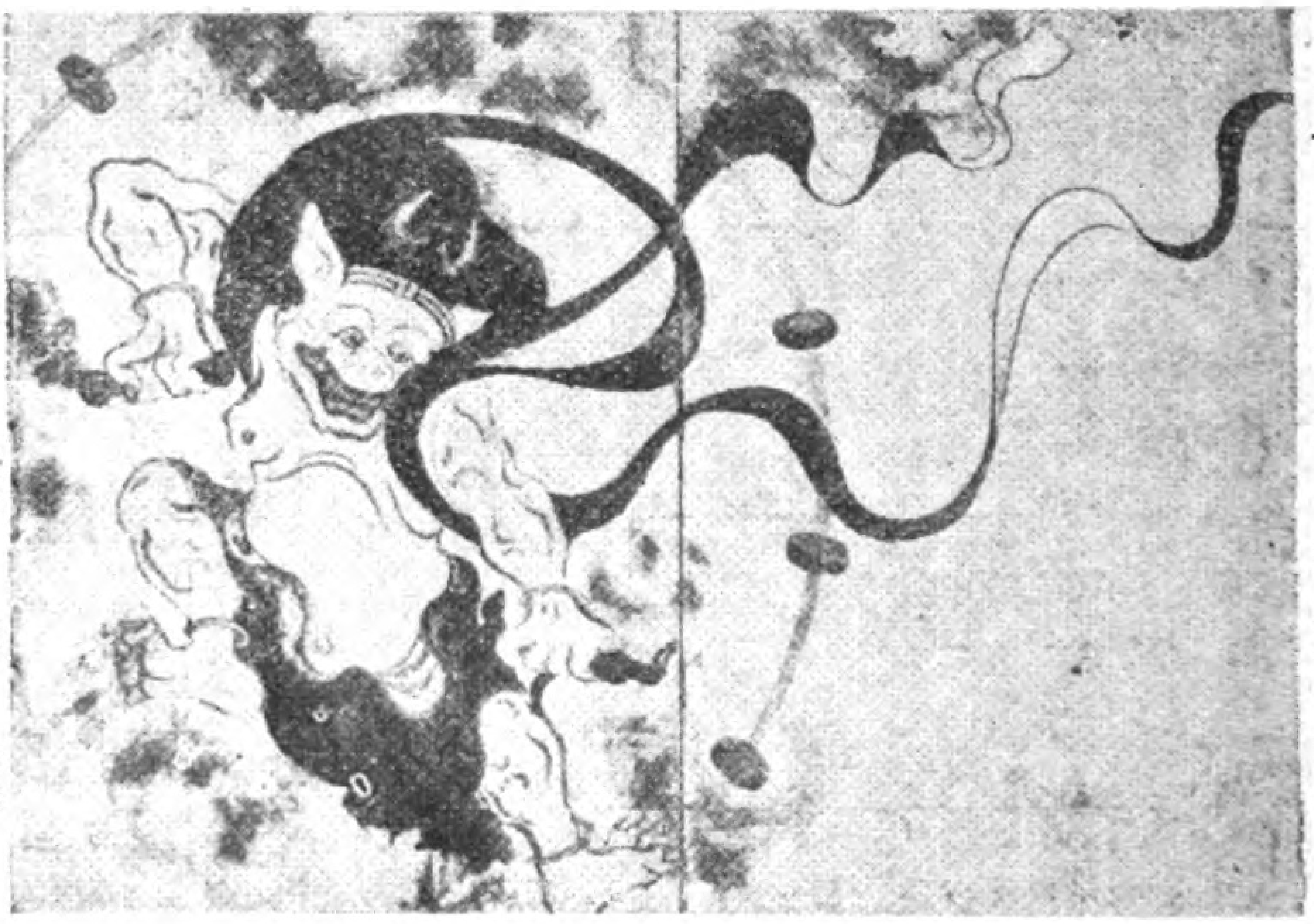
ワノーフスキー。亡靈が雷を使ふといふのが、元來の思想であつて、さうして、この思想が段々變化して、到頭亡靈はかみなりそのものに變るといふ思想になるのぢやないですか。

藤澤。先刻も申した通り、天の怒りが人の怒りを代表した思想かとも考へられますが、現在一般に、國民に知られてゐる場合は亡靈そのものが雷となつたとして知られて居た。そして、雷となつて落ちて來た、詰り、人間が……かみなりと悪魔とは無論違ひますが、人間が、鬼になつたといふやうな話が日本にあると同じに、雷となつて落ちてきて、同じ雷が何度か落ちるといふやうに考へられる節がある。

フエルトツク。それは、要するに日本の國民とロシヤの國民の思想と大分違つて居る、神に對する思想とか、或は悪魔に對する思想が、餘程違つて居りますから、どうしても理解の出來ないこともありませうと思ひます。それで、大體今のロシヤの悪魔の表現を申上げまして、さうして皆様の御意見をお聽きしたいと思ひますが、ロシヤの悪魔といふのは、悪魔といふよりも、チヨルツ、是が純粹な民族的思想から出た存在でありますが、そのチヨルツといふのは、日本で云へば鬼であります。そのチヨルツは、ずうつと以前、キリスト以前殆ど野蠻時代からその役割を演じて居りますが、その形は割合に少ないので、昔から今日までに至る間、形といふものは殆ど變らない、ずうつと以前、野蠻な時代には、あの大きなロシヤの殆ど到る處に色々な悪魔が住んで居りましたが、それが、何時頃からは知れませぬが、到頭一つのものになつて了つた。それが所謂チヨルツであります、即ち鬼であります。さうしてこの鬼といふものは色々な性格を持つて居りますが、大體違つた性格を申上げますと、農民の間に信じられて居る鬼は、割合にお人好しで人に瞞され易い、自分も狡いけれども併し外の鬼には適はない、それが一つの表現です。もう一つは、水に棲んでゐる鬼ですが、是は女の形になつてゐる、ウハサカと申しますが、それは割合に良い性質を有つてゐる、併し、外國から來た思想の影響、殊にカトリツク教から來た思想より生れた鬼は、非常に悪い性

質を帶びてきたのです。さうして、この鬼は善惡の惡といふ、總ての惡の表現に變つてしまつた、さうして、神の對照物となつてしまつたのであります、さういふ外來思想がロシヤに這入つてから、善と惡、神と惡魔との間に、始終鬪爭が行はれてきた、さうして、この鬪爭が、色々な作家の著作の中心となつてゐるので、例へば、トルストイであるとか、ドストイエフスキーの著作の中などに行動して居る二つの力は、神と鬼であります。今に至つても、例へば、現代作家のネルコフスキーなど、この二つの力の鬪爭を以て、自分の著作の中心思想にして居ります。

藤澤。日本では鬼は神話時代から出て居る、それ以前の有史以前のことは分りませぬが、日本の鬼はやはり冥府(よみ)の國の者である。所が、其後佛教が這入つてきて、冥府(よみ)の國を所謂地獄と解釋するやうになつた。それで、日本の鬼には、善といふ思想が割合に輕い意味で表れて來たのは天邪鬼(あまのぢやく)……といつたやうなものであるが、その外は割合に惡といふやうな意味を有つて來た。併し、大體に於て、日本の鬼は、人間が生きながらにして鬼となるといふやうなこともあるが、大體に於て、地獄の鬼といふやうなことの上に考へられて居る。それで、地獄といふことは、恐らく地獄の鬼、地獄の



(第二圖)

惡魔といふ思想、天國と地獄といつたやうな思想は世界的のものぢやないかと思ふのでありますが、ギリシヤあたりの惡魔の表現、それからその思想といふものと、佛教を輸入した日本の地獄の思想といつたやうなものとは、同じやうな流れにあるのぢやないかと考へる、さういつた思想が、佛教時代に深く日本の國民の頭に喰入つて居る鬼といふものは、どうしても冥府(よみ)の國、死んでしまつた幽冥界のもの、それから地獄の鬼といふやうなことが深く印象に入つて來た、非常に良い鬼といつたやうなものは、いまの天邪鬼(あまのぢやく)……いふやうなものを除いては想像されなくなつた。

スパルヴキン。鬼を宗教上の國家的に造つたのは、大分後になつてのことでせう。もつと古い頃は、獨立した鬼がある、それは日本にもあるでせう、ロシヤにもあります。宗教以外に、……併しそれは何の組織もないもので、例へば、水の中に棲んで居るサタンといふやうなものである、大體お伽噺の中に出て來るもので、大分綺麗に、何の意

味もなく扱はれてゐた。併し、水の中には非常にひどい者が棲んでゐる、水の中にゐて人を引張り込んで殺すといふやうな、それをホヂョノイといふ。それから、又、森林の鬼とかいふ、それは皆獨立して居つて別にシステムになつて居りませぬ。併し、佛敎が、印度から這入つてからは、斯ういふ色々の鬼を集めて、さうしてその鬼に就ての色々の話を造つて、さうして、その國々の鬼を入れたのです。だから、斯ういふやうな自然的な鬼はあるでせう。

藤澤。自然的の鬼といふものは、日本では鬼といふ名で呼ばない、鬼の種類に入るべきものと思ふのは、例へば、山のモウリヤウ、水の中に棲んでゐて人を引張り込む河童などです。

スバルヴキン。それはよくロシヤのホヂョノイに似たものです。

藤澤。それから、河に居るものには、別に、河赤子などいつたやうなものがあります。

——

ワノーフスキー。（藤澤氏に向つて）いまのスバルヴィンさんの仰有つたことに附加へてお聽きしたいと思ひますが、この獨立した鬼、宗敎に關係しない鬼、それは、日本のお化といふものに當りませぬか。

藤澤。日本では、鬼といふものは、總て佛敎以後の思想が深く喰入つてゐるので、鬼は、之を總て地獄のものとしてしまつた。さうして、ワノーフスキーさんの仰しやつたロシヤの色々な河に棲む鬼、木の鬼、山の鬼といつたやうな、國民の想像が生んだ自然の儘の妖怪、變化、詰り、ロシヤの鬼といつたやうなものは、日本では頗る形が變つて居る。鬼とは大變に變つてゐる。それで、特に異つたものは、川なら、前にも申しました河童とか、河赤子とか、さういつたもの、それから、山に居るのは、山精だとか、木精、といつたやうなもの、さういつた部分部分の自然的の妖怪がある。それがいまのロシヤの所謂鬼に當るのぢやないかと、今も私ちよつと考へたのですが、さういふものは、ロシヤではどういふ形をしてゐますか、河の鬼、山の鬼といふのは銘々妖怪としての表現形式が違ひますか。

ワノーフスキー。要するに、藤澤さんがおつしやつた通り、日本の妖怪と、日本の鬼は、密接な關係にあるのであるといふことは、私達に取つては非常にその思想が面白いと思ひます。ロシヤの迷信に因る鬼、宗敎から來た鬼と、それから國民の想像力が造つた鬼とは、形が隨分違つて居る。宗敎から來た鬼は、やはり地獄と密接な關係をもつて居ります。それで、宗敎から來た思想に因る鬼といふものは、確に惡の表現であると思ふが、併し、この表現の上に、純粹な國民思想が又新しい性格を附加へたものと思ひます。詰り、この鬼は、日本の冥府の國に當る所の存在物であつて、さうしてこの鬼の性格は、宗敎上の鬼と合致して非常に恐しい力になつて來るのですが、卽ち、その宗敎的の鬼と、それから國民の迷信がその性格の上に附加はつた新しい性格と一緒になつたものは、自分の思ふのには、日本のお化けに當るものぢやないかと思ひますが、之に就いて又御質問申し上げたいと思

ひます。日本のお化けと、それからロシヤのチョルッとの間には、何か似通つたことはないかといふことに就て御意見を伺ひたいのですが、詰り、宗教上の惡魔が、民衆思想の惡魔と一緒に合致してしまふと、一つの恐しい力になつて來る。それが日本のお化に似てゐるのではありませんか。

藤澤。日本の、宗教上からいつた鬼といふものは恐しいもので、いまの地獄の王支配下の鬼、それから國民性が生み出した妖怪の中の鬼と思はれるものは、例へば魑魅魍魎さういつたやうなお化けは皆人間に對して惡を爲す。反對に善を爲すお化けはない。善を爲す妖怪といつたものは、どうしても鬼から離れたやうに考へられてゐる。國民性の生み出した鬼も、鬼の形に表現されて怖がられてゐるものは、日本の妖怪では惡いことをする。河童とか魍魎といつたやうなものでも、人間の首を喰つたり、尻ご玉をねらつたりするやうに、人間に對して惡を爲す。それから、その外に、人間が亡靈といつたやうなもの丶中に、出る自然の鬼、想像力が造つてきた自然の妖怪といふものゝ中には、善を爲すものがある。所が、鬼として考へられてきたものは、これは、どの點から斯ういふ風になつたか知れないが、或ひは長い間の宗教上の影響があるのかも知れないけれども、鬼に表現されたものには善を爲すものがない。それから、惡い人間が、生きながらにして鬼になるといつたやうな話も澤山出來て來てゐる。生きてゐる中に角が生へてしまつたとか、嫉妬から顏が鬼そのまゝになつたとかいふのは皆惡を意味します。

(ワノーフスキー氏、グリゴリーエフ氏、露語にて私語)

グリゴリーエフ。(ワノーフスキー氏の意を受けて)併し、人間は、死んでから亡靈になつて、鬼になるのですね、さうして、さういふやうなお化けになる、この思想は、宗教上の鬼に對する思想と一緒に混合してしまつて、一つの別な鬼を造つたといふやうな所は、いまワノーフスキーさんが申されたロシヤの惡魔とか鬼とかに似てゐませんか。

藤澤。亡靈と、鬼は、最初から違ふと思ふのです、日本の妖怪は、亡靈(人間が爲るもの)、變化(人間以外の他の動物のなるもの)それから自然的妖怪。それから鬼です。地獄には地獄の王の部下の鬼が澤山ゐて、地獄に陷ちた人間を苦しめるといふのですが、人間の亡靈が、地獄で他の人間を苦しめるといふことはない。詰り、人間その者が鬼になつても、地獄に行つてその鬼に苦しめられるといふことはない、宗教の鬼そのものは地獄に居る鬼であつて、卽ち、地獄に居る鬼、惡魔の鬼と、人間の成つた鬼とは、違ふやうに日本では考へてゐます。

グリゴリーエフ。併し、靈、怨魂がお化になつて、さうしてそのお化けが人間に祟るとかいふ所は、人間を苦める鬼とは多少似て居りませんか。

藤澤。此世では、人間が鬼に祟られることがあります。然し、地獄の鬼は鬼であつて、人間が成つた鬼ではない。亡靈は、元、人間であつたものが鬼になつたので、地獄の

鬼は元からの鬼である。人間が鬼になつたといふ場合は、宗教上の元からの鬼ではない。惡魔になるといふやうな想像が生んだ鬼であつて、元來の鬼といふのは、初めから鬼である。人間の亡靈となつたものは、元が人間であつて、現れた亡靈は初めからの鬼ではない、そこが大分違ひはしないかと思ひます。

スパルヴキン。 地獄の鬼は、皆宗教の役人です。それですから苦しめてゐる、さういふ役を持つてゐるのです、それで人間を裁くのです。だから、どうしても組識立つてゐる。所が、自然的の鬼、民族的の鬼は、どうしても自由です。それだから、人と喧嘩することも人を虐めることもあるけれども、併し、又善いことをする場合もある。

藤澤。 その裁くといふやうな思想は東洋にも勿論あります。鬼が地獄の役人であるといふ思想は日本にも遊行しました。けれども、是は如何でせう。世界的のものでせうか、ラルコックさんや、ウエルスさんの方に、お考へはありませんか、鬼が人を裁くといふやうな思想に就いて……。

ラルコック。 裁くといふやうな思想は、イギリスにはありません。

藤澤。 詰り、地獄の役人であるといふ思想がないのですね、この役人といふ思想は、東洋では、印度から來た佛教的のものですね。キリスト教ではどうです。

スパルヴキン。 それは耶蘇教にもある。地獄があります。その地獄に鬼といふ役人が棲んでゐて、それが澤山な役をやつてゐる、或は鉾を取つてゐるものもあるし、色々な面白い話がある、全くそれは組織的になつて居る。併し、その他の、即ち宗教にない鬼は、人間に偶然打付かつて來るのです。散歩する時でも、何でも、林の中などに這入つて行くと、直ぐ出て來る、それは古くなつた木を見ると、何かの形になる、さうすると、その時に又妙な感じがしますから、その感じで、それが生物のやうになつてしまふ。例へば、水の上でも同樣であつて、さうすると、道を失つて這入るのです。さうすると、彼處で何か皆誰かゞ死んでしまつたといふやうなことで、さういふものが何か後になつて色々な女の神樣のやうなものに現れて來るとか、色々な綺麗なものに現れて出る。或は眞の人間の女の形をして居るといふやうに…併し、それは後のことでせう。今では色々芝居をやつて居りますが、元は別にさういふものはなかつた、直接人間に突當つて來る、さうしてそれが消えてしまつて一層驚く、それなロシヤでは、青空のかみなりといふ言葉がありますが、それは、急に何處からか、妙なこと、大變な事が出來てくる、まるで、青空の雲がない所にちよつと出て來る、さうすると大變なことになるといふので、青空のかみなりといふのです。日本では、災は、下から起るといふさうですが、ロシヤでは青空から起る、雷のやうにぽつと起る、それも今は當り前の話になつて居る。

藤澤。 また雷に歸りましたね、そこで、かみなりの妖怪に就て、何かお話をウエルスさんに願ひませんか。

ウエルス。 英國では、かみなりが鳴ると、あれは祟れると謂ふのです。さうして、子供が外へ出て遊んでゐる時に、かみなりが鳴

ると、雷に打たれるから、子供に、早く家へはいれと云ふことがあります。

藤澤。日本には、かみなりに臍を取られるといふことがあります。それには種々特異な話がありますが……。

ウエルス。私は一つ、變つたことを感じました。日本の鬼の話は、子供に話すのに、鬼と言ひます。桃太郎は鬼を殺しに行きますね、あの桃太郎はかみなりの神樣かも知れません。英國にも同じやうな話がありません。ジャックの話は、かみなりの神樣の話から、だんだん子供に話す爲にお伽噺に作りました。さうして、私共が子供に話すのは鬼とは言ひません。米國などは、說話が方々の國から來ますから、混ぜこぜかも知れませんが、オーストリアのレックス・ハイフインガアの話、アメリカのまア浦島太郎といつたやうな話は、かみなりの神樣ではなく、小人です。山に遊んでゐる小人のことを謂ひます。その話は芝居に出ましたし、お伽噺に出ました。お伽噺になりましたが、さういふものは、鬼と言はないで、小人と言ひます。或はフエアリーと言ひます。

スパルヴヰン。しかし、それは何の値打もないことです。それは唯だ、想像力のない作家、又は美術家などが、何か昔のことを見て、それから綺麗に書かうかと思つていろいろに話すのです。それで、今も外國から日本にはいつて來た話で、いろいろ小人の話を作りますが、それは大へん變化した、昔から見ればずつと變つた、何かの事から起つて來た話です。これは、從來に就ては何の關係もない話のやうですね。今の木を見ますと、それにいろいろ飾り物を入れてあるので、それは同じ無意味の材料を寄せただけのものです。



（第三圖）

ウエルス　それですと、一つの事をお伺ひしますが、サンタ・クロースはロシアから來たでせう。あのサンタ・クロースの鹿に、なぜ「かみなりと稻光り」といふ名前をつけてゐますか。

スパルヴヰン。サンタ・クロースはロシアから來たのではありません。ロシアでは、クリスマスを一般に民族的にやりません。唯だ宗敎的に坊さんがやるので、ロシア人は家でクリスマスは餘りやりません。しかし外國の習慣として、非常に綺麗なものですから、レーニングラードや大きな都會でやつたことはありますけれども、一般にはやりません。ドイツや、西ヨーロッパの方です。それで、サンタ・クロースはいろいろな土產を持つて來る話はありますが、これはサンタ・クロースとは言ひません。ニコラスと言ひます。

ウエルス。それでは、鹿は「かみなりと稲光り」といふ名前をつけてゐるでせう。それはどうしてゞせう。

グリゴリーエフ。それは、何處でさういふことを言つてゐるのですか。

ウエルス。私の國で、聖ニコラスの鹿に、「サンダー・アンド・ライトニング」(かみなりと稲光り)といふ名前がついてゐますが、それはどうしてでせう。どういふ積りなんでせう。

ワノーフスキー。このサンタ・クロースの思想は、これは純ロシア思想ではない、外來思想です。從つて、その鹿といふものも、これはロシアからでなく、やはり外から來たものです。さうして、その鹿にかみなりと稲光りといふ名前がどうしてついてゐるかといふことは、自分はよく知りませんが、しかし、かみなりと稲光りはサンタ・クロースに附隨してゐるものではないといふことは、斷言できると思ひます。ロシヤで謂つてゐるのは、かみなりと稲光りを發する者は、エリアスといふ聖女で、それはバイブルから出た豫言者の名前です。これが民族的迷信に於ては、だんだんかういふやうな宗教から離れたものに變つて、かみなりを發する者になつてしまつたのです。

ウエルス。アメリカのインデアンの迷信に、かみなりが落ちて木を裂くでせう、さうすると、そのかみなりの正體が山猫だと言ふのです。

藤澤。それはかみなりそのもの、正體が山猫だと言ふのですか。

ウエルス。さうです。

藤澤。日本では、雷獣はかみなり樣の正體ではないのですね。あれは、かみなりが落ちた時に騒いで來るもの、かみなりが使つてゐるものといふ意味に取られて居つたやうです。

ウエルス、アメリカでは、もう一つ、黑んぼの迷信があります。南の方は、冬の間は、そんなに雨が降りません。それで、長い間雨が降らないでゐて、春先に一番初めの雨降りの時に、頭を窓から出して、頭の上に雨がかゝるやうにすると、どんな病氣でも癒ると黑んぼは言ひます。

ツエルトツク。時間で用件がございますので、私はこゝで失禮します。

サヨナラ。サヨナラ。(ツエルトツク氏退席)

藤澤。かみなりのお化けに就いては、ラルコックさんにもおもしろいお話があるさうです。……さあ、お聞きしませう。

ラルコツク。ロンドンからさう遠くない處にベッドフオードといふ町があります。その町に、かみなりのお化けが出るといふ古い家がありました。そのかみなりのお化けの名は、ロイ・オヴ・ベッドオード。つまり、ベッドフオードのロイと呼ばれて居りました。その家の現在の主人公の言はれるには、かみなりのお化けが現れた時には、家族の中の誰かが急に死んでしまふといふのです。その家は實に三百年も續いたと謂はれたやうな古い家です。大戰爭の時に、その家の一人の息子が、スエズ運河の方の守備隊として廻されて居りましたが、或る日の午後、家族は客間に居つて、丁度お茶の時でしたから、お茶を飲んで居りました。さうすると、天氣は非常に好く、風もなく、空には一點の雲もないのに、突然大きな雷

がその家に落ちて參りました。その物音にビックリして一同は顔を見合せました。その時に、急に二階から鎧に身を固めた者のやうな跫音が、がたがたと降りて來たやうに聞えたのです。家族の者は、その跫音が正面のドアから出たと思ひました。――それまで、やはり默つて顔を見合せて居りました。勿論、皆の者はかみなりの武士の話は前に聞いて居つたのです。しかし、この主人は、その前の代と、つまり二代の間はかみなりが落ちたといふことは聞かなかつた。すると、次の日に、陸軍省から、スエズの守備隊に行つてゐる息子が昨日午後三時突然日射病で急死したといふ電報が參りました。その時が、丁度二階からかみなりの武士が降りて來た時であつたのです。この武士、つまりベッドフォードのロイは、三百年も前に住つて居つた一人の武士でありました。それから、また一人のブラック・ナイト(黒武士)がありました。その武士は、善良で勇敢でした。彼の主人は烈しい質で、勇敢な軍人でありました。それですから、自分の家來たちは、主人が何處へ行かれるにも附いて行つて、水火の勞も厭はずにその主人に從つて居りました。或る時、ベッドフォードのロイと、このブラック・ナイトとの間に、何か名譽爭ひが起つて、二人が決闘をすることになつて、兩方とも大變に傷を負ひました。さうして、その決闘したことが主人の耳にはいつたのです。所が、その主人の言ふには、二人で決闘をしたらどちらか一人斃るまでつまり一人を殺すまでやらなければいかぬといふことを言はれました。その晩は、外は暴風雨で、風も烈しく、かみなりまで鳴つて、丁度天魔が人地へはいつて來たやうな有様でありました。先程の黒武士は、血だらけになつて、テントの中に座つて居りましたが、突然寝床から起きあがつて、劍を執つて、さうしてベッドフォードのロイのテントの方へ、暴風雨の中を辿つて出て行きました。外は荒れ狂ふ暴風雨と、テントがヒラヒラと煽られる音のほかには何にもなかつた。黒武士は喘ぎ喘ぎ、滿身の勇を振つて、ロイのテントへはいり、一撃の下にロイを殺してしまひました。それでベッドフォードのロイは、彼の古い家を歩く時には、かみなりが鳴つて、家族の者が急に亡くなると言ひ傳へられて居りました。そこで、この話の、今のスエズ運河へ行つて死んだといふ息子は、私のカズンです。

藤澤。ホホオ、それでは、ウエルスさんは、かみなりを親類に持つてゐる譯ですね。

ラルコツク。だから、その話はどうかわかりませんが、その家を私は知つて居りますから、その家と、死んだといふことは確かです。

スバルヴキン。雷に對して、何か自分を保護することありますか。

藤澤。かみなりに對して身を保護することは、徳川時代になつてからは、蚊帳です。蚊帳の中にはいつて、中でお線香を立て、拜んでゐるといふことです。然し、これは少し科學的ですが、それ以前には、さつき言つた天神樣、即ち菅原道眞が雷になつて落ちるといふので、天神樣を雷と信じた。さういふ思想が日本の民族に傳はつてから、天神樣のお師匠さんである人の名を呼べば、かみなりの落ちることを免れるとい

ふので、呪文を唱へる。それで「桑原桑原」と言つて呪文を唱へれば、かみなりを避けることが出來るといふ迷信を生んだことがあります。

スバルヴヰキン。私は、この間講演を聞きましたが、面白い話でした。釣鐘で雷を退けるといふ話ですが、この釣鐘でかみなりを避けるといふ意味は特別ですね。宗敎になりますと、雷の落ちる時には、十字架をつける。さうすると、雷は惡魔ですから、その十字架で惡魔を退けるといつてゐます。かういふ風なことが雷除けにやるといふのですが、日本では釣鐘を雷除けに使ひますか。

藤澤。使ひません。

スバルヴヰキン。それから、雷と太陽と何か關係がありますか。

藤澤。關係はあります。

スバルヴヰキン。昔ギリシヤでもそれに就てはいろいろ話がありますね。印度には、豪傑が生れて來た話などがあるでせう。

藤澤。その話もあります。それからかみなりが墜て地震に關係するやうなことになります。殊に、常陸の地震鯰の話、一面、あれはかみなりの支配者といふやうな思想から、かみなりを鎭める者が、地震を鎭めるといふ思想に交渉づけられたやうです。

スバルヴヰキン。昔のローマの神話の思想と同じですね。かみなりから生れて來た豪傑があります。

ラルコツク。ちよつと、今のベッドフォードのロイの話ですが、現在の主人は、その話をさうだとしてゐます。かみなりが落ちたから、誰れか死にはしないかと言つてゐる中に、戰地で息子が死んだといふので、それは事實の話に近いのです。

藤澤。日本でも、かみなりを捉へたとか、かみなりを婿にとつたとか、或はかみなりが地上の女にラヴして、天から落ちて來たとかいふやうな話がありますけれども、それは一つの說話として作られた話が多いのです。國民性が生み出したやうな話でなく、文學上の作物といつたやうなものに見えるのが多くて、本當の國民性の流れといふやうなもの丶上にあるやうな話がありません。唯だ一つ奇態なのは、かみなりが臍を取るといふ話ですが、さういふ話がありますか。

ワノーフスキー。かみなりが臍を取るやうな話がありますかね。……それからラルコックさんのお話になつた事は、實話として今お話になりましたが、そのお話の上には、ほかの影響があるやうに思はれるのです。耶蘇敎の新約の中にアパカリセスといふ經典がありますが、殺された人々の魂は、その殺されたといふ怨みを聲で呼ぶ時には、それがかみなりになつて、暴風雨になり、星や月や天體は皆消えるやうになつて、非常に恐ろしいいろいろな現象を地上に喚び起すのです。そこでかういふアパカリセスといふ經典の思想が、今實話のその裏になつて影響してゐるのではないかと思ひます。

ラルコツク。その話の家の、現在の主人公は私の伯父に當る人で、今でもその事を信じてゐるのです。たゞかみなりの落ちた音ですが、それもかみなりが落ちたと信じて居つて、さうしてその時に二階から武士が降りて來たといふことを今日でも信じて居り

ます。

ウエルス　アメリカのお化けの話は、まるで違ひますね。アメリカでは餘り陰氣な家がありません。家が明るいから、陰氣なお化けはありません。アメリカのお化けの話は明るい話があります。これは別の種類かも知れませんが、死ぬ時靈は身體から出ます。その靈はまた元の身體に歸りたい。それであちこちへ行つて歸る道を探して、それがはいつて來る所があります。かういふのは一つの種類です。

ワノーフスキー。今ラルコックさんの話に因んで、今日の催しを、かみなりと惡魔といふ話題にするよりも、かみなりと怨魂（死んでからの怨みを懷いてゐる魂）さういふ題にしたらどうかと思ひます。

藤澤　日本では人の怒り、さういふ風に流れがなりましたから、贊成です。

ワノーフスキー　何故かと云ひますと、少くもロシアの思想に依れば、かみなりを呼び出す者は、鬼ではないのです。それを呼び出すいろいろな怨魂がある。その思想はずつと昔のバイブル時代に生れた思想であつて、怨みを感ずる亡靈は、自分の怨みを霽らす時には、それがかみなりになつたり、暴風雨になつたり、或は日本に於ては、地震があつたり、その他の自然的現象になります。それで鬼といふものは直接かみなりを呼び起す者ではないとロシアでは信じられて居ります。アパカリセスといふ耶蘇教の新約の中にある所に依れば、怨魂は怨みを霽らす時には、かみなりになつたり、一般自然的現象になるといつてあります。恐ろしい、自然現象を呼び起す者は、鬼でなくて亡靈である、怨魂である。宗教的性質を帶びて居らない鬼は、さういふやうな恐ろしいことはしないのです。例へばロシアでなく、小ロシアの民族的迷信をよく文學に現したゴーゴリといふ小說家が居りますが、そのゴーゴリの描いてゐる民族的な鬼といふものは、割合にお人好しであつて、恐ろしい事を仕出かすよりも、狡いことをやつたり、或は小憎らしいことをする。しかし人間の力に依つて、却つて自分は馬鹿にされたり、窘められたりすることもあるのです。例へば、「クスリマスの前夜」といふ小說には鬼が出て居りますが、キリストが生れたら鬼の惡い働きは出來なくなつてしまふから、キリストがまだ生れない前にさんざん惡い事を思ふ存分にやるといふのですが、しかしさういふやうな鬼を少しも恐れない人物が現れて來る。それはワーコフといふ村の鍛冶屋さんで、これが自分の力でその鬼を窘めて、さうして自分の家來にしてしまふ。それから、例へばその鬼を馬のやうに使つて、その馬に跨つて都へ行つて靴を買つたり、都見物をするのです。かういふ風に純粹の民族的思想が生んだ鬼といふものは少しも恐ろしくない。しかし同じ小說家のゴーゴリの著作には、もう一つの性格を持つてゐる鬼が現れて居ります。その鬼は、純民族的のものであるよりも、宗教的性質を帶びて居ります。それから言ひ忘れましたが、前の民族的な鬼は、その容貌は動物的です。例へば、顏が豚の面を持つて居り、尻尾があり、角を持つて居ります。さうして足はドイツ人の足と言つて居りますが、ドイツ人の足といふのは餘程奇妙なものに思はれて居つたのです。大體

ロシア人はドイツ人に對して非常に奇怪な感じを持つて居りました。それでドイツ人の樣子といつたら非常に奇妙なものに思はれて居つたので、つまりこの鬼もドイツ人の足を持つて居つた譯です。しかし今度は宗教的の鬼は、民族的なお人好しの鬼に全然似つかないやうな鬼で、それは非常に恐ろしいものなのです。その鬼は怨みの鬼であつて、さうしてその容貌は、動物的といふよりも人間に似たやうな容貌です。例へばイワン・コッパーワーといふ祭の前の晩……

スバルヴキン　これはイワン祭といふのですが、キリストに責めを與へた人です、バイブルの中に出て來ます。

ワノーフスキー　このイワン・コッパーワーといふ聖人の祭りがあります。この「イワン・コッパーワー祭の前夜」といふ小説ですが、その中に出て來る鬼は恐ろしい鬼なんです。

スバルヴキン　それは六月の二十四日です。

ワノーフスキー　それは非常に恐ろしいのです。これは死んだ人の容貌を持つてゐて、さうして非常に恐ろしいことをやります。その鬼の影響で、人間も非常に恐ろしいことを仕出かします。人を殺したりするとかいろいろ恐ろしいことをやつて、坊さんでさへもその鬼を恐れてゐるのです。その怨みを懷いてゐる鬼は、日本のお化によく似て居ります。それで、この鬼の性格といふものは、要するに二つの要素から成り立つて居ります。一つは死の要素それは死の惡魔といふこと、もう一つは怨みといふ要素がはいつて居ります。この二つの要素は、一つに混合してしまつて、この二つの要素の關係をはつきり見分けることは難しいのですが、兎に角この二つの要素は混合してしまつた爲に、この性格を帶びてゐる鬼は非常に恐ろしいものであつて、且つ非常に偉大な力を持つて居ります。ゴーゴリにはもう一つの小説がありますが、その小説の名前は「ヴイ」と言ふので、これはその話の中に活動してゐる惡魔の名前です。この筋を簡單に申しますと、或る學生が鬼婆を殺したのです。その鬼婆といふのは大體普通の鬼よりも女性であるだけに弱いものであつて、大して力を持つて居りません。しかし殺されてからの鬼婆は、自分の怨みの力でいろいろな惡魔を呼び出すのです。さうしてその惡魔の中で一番恐ろしいのは、このヴイといふ惡魔で、これがとうとうその學生を殺してしまひます。その學生は恐ろしさの爲に死んでしまふのです。さうすると、要するに鬼婆の怨みの力といふものは非常なものになる譯です。

スバルヴキン　怨みといふものは非常に強くなります。當り前の鬼婆は、惡魔の下女のやうで、別に力を持つてゐませんが、しかしその怨みを霽らす時には大變な力になります。さうすると、それが一番上の主人公になつて、他の惡魔がその下の家來になつていろいろな事をするのです。ゲーテの「ファースト」を見ますと、鬼婆がゐますが、當り前の鬼婆はみんな下の惡魔です、しかし死んでからの怨みを霽らす爲に働く時はそれが非常に強くなつて、一番上等な鬼になつてしまふのです。

藤澤　日本のかみなりは、日本の古典の「古事記」に、吾哉吾勝速大忍穗耳尊といふの

がありまず。その勝といふのはかみなりのかちかちといふのを採り入れたやうに思はれてゐます。これは日本の國民性が産み出した自然神話で、それから、怨靈がかみなりになるといふのは、その一番の代表となつてゐるのは菅原道眞、卽ち天神樣がかみなり樣になつてゐるのです。その場合は、亡靈がかみなりを使ふのでなしに、亡靈自身がかみなりになるといふことが、先程ロシアの方の話と國民性に於て違ふ、これは佛敎の影響その他の影響に依つて違つて來た話ではないかと思ひます。それから鬼が自然の鬼といつたやうなものが現れてゐる妖怪にも、日本には三通りあつて、鬼と見られる妖怪と、變化、別にゴーストといふ、日本で幽靈といつたやうなものとありはしないかと思ひます。それが自然の妖怪の中に善なる者と惡なる者といつたやうなものが二通り出て來ます。それからそれが人間と何かの場合に關係したり、人間と結婚したりするといつたやうな場合にも、惡い影響を與へるものと非常にいゝ影響を與へるものとがあるといふやうに、亡靈と人間と結婚する場合に、さういふやうな場合が生ずるのです。それから動物の妖怪、殊に獸類の妖怪といふやうなものが人間と結婚するといふ話がありますが、鬼が人間と結婚するといつたやうな話は殆どありません。そこが、何かチヨット考へさせられるやうな所があるのではないかと思ひます。それから鬼が人間に惡を爲すことを神樣が防いで哭れる話があります。佐渡の國に金北山といふ山があります、その山は、大晦日、つまり年の變る日になると、鬼が現れて人間を捕りに來る。さうすると、神樣が人間の代表者に立つてそれを防いで哭れるのです。その防いで哭れる話の中に豆の話があります。つまり豆は何故撒くかといふのに、豆を鬼が非常に恐れるといふ話がある。さうしてその豆も炒つて芽の出ないのを恐れるのです。あれは芽が出てしまふと、鬼は恐れない。それで節分のおにやらひ(追儺)の豆にはよく炒つて芽が出ないやうにしろといふことになつてゐるのです。

スバルヴヰキン　それから藤澤さん日本には形のない、目にも見えない、空氣の中に棲んでゐるものがありますか。ロシアにはさういふのがあります。さうして、それが欠伸をしてゐる時に、身體の中にはいつて來るといふのです。

藤澤　それは珍しいですね、日本の逢魔時ですね。

スバルヴヰキン　ロシアでは、欠伸をする時はさういふ迷信を持つてゐる人は、十字架を切るのです。さうすると、惡魔が身體の中にはいつて來ないと謂ひます。それが身體の中にはいると、氣違ひになつたり、病氣になつたりするといつて恐れてゐます。

雨宮　さうしたまだ、いろいろの妖怪の話をすれば、澤山ありませうが、今晩はもう大へんおそくなりましたから、かういふ面白い會は、ほかの話題に改めてやる時に讓つて、今日はこれくらゐで終りたいと思ひます。大へん有難う御座いました。

櫛部速記者個事務所員
下島三郎
山田健兒

五百號記念と記念事業

中央公論五百號記念號は着々諸般の準備を進めつゝある。併しながら讀者諸君よ、驚く勿れ、懸賞應募原稿實に四千。炎暑酷熱

記念號發行豫定日變更

の中を夜を日に繼げばやれないことはない。併しながら諸君よ、これほどの白熱的歡迎と鐵柵的支持を受けて言論界における本誌の地位と使命を彌ヶ上にも自覺させられた吾等は、これら四千の讀者の熱望と努力の結晶である原稿のし片をも等閑にしてはならない。その他、未發表の計畫において尚十二分の用意と準備とを必要とするものがある。慌てふためいて吾等の意に滿たないものを出してはならない。それは我誌本來の使命と懸けられたる諸君の期待に對して申譯ない。寧ろ一ヶ月延ばして十月に發表するに如かないのである。

殊に十月號は秋季特別號である。秋季特別號と記念號とを合併して發行せんには、讀者の負擔をも減じ、我等の計畫をも豫期以上に發揚し得るであらう。われらは熱心なるわが讀者の期待に背かざる雜誌を作りさへすればいゝのである。藉すにいま一ヶ月の時日を以てせられよ。われらの意氣は八月の炎天と共に燃えてゐる。おゝ讀者諸君よ。

清澤洌氏のアメリカ特派

本誌五百號紀念事業の一として清澤洌氏をアメリカに派遣する。アメリカは今や世界の驚異である。アメリカ文明は

日本の隅々までも浸透して、わが固有の文化をアメリカナイズせんとしてゐる。ロシアに對立する資本主義文明の權化アメリカを研究することは軈て日本の將來を研究することである。さうしてアメリカを研究する上において、わが清澤洌氏に優る者が今の日本に見出だされるあらうか。それはかりではなく、今度の特派員派遣に、新聞雜誌界未だ曾て試みられなかつた我社最初の試みを應用しようと思ふ。他でもない、それは讀者サーヴィスである。

「讀者サーヴィス」とは、讀者多年の愛顧に報ゆる我社の心ばかりの奉仕を指して言ふのである。清澤氏派遣は何を讀者に奉仕せんとするのであらうか。

吾等はアメリカについて知りたいと思ふ多くを有つてゐる。同樣に諸君も恐らくは多くの疑問と欲望とを有つてゐられるであらう。極簡單に、例へばフウヴアーとはどんな人か、會つて來て欲しいと思はれる人もあらうし、又はフオードの實況が知りたいと思はれる人もあらう。その他、アメリカの洗濯屋は?、アメリカのパン屋は?カフエーは?キネマは?等等等といつた具合に、諸君の興味からなり若しくは職業からなり、何なりとも諸君の知りたいと思ふ欲望を申越されたなら、我社の特派員清澤洌氏は熱心に且つ忠實に諸君に代つて諸君の欲望を滿足しめられるのであらうことである。來る八月十五日までに「中央公論編輯部記念事業係」宛申込まれよ。但し一人の清澤氏が無限に諸君の欲望を滿足せしむる譯にはゆかない。餘りに個人的な興味のものは避けて一般的興味のあるものから手を附けるであらう。又個人的職業的なものでも、一般大衆的興味に關聯した掲載價値のあるものから採擇することにしよう。出來るだけ多くの讀者の利便を圖りたいとは思ふもの丶、紙數に制限のあることを豫め斷つておきたいと思ふ。

谷讓次論

丸木砂土

テキサス無宿

谷讓次君はその作品の中で、二つの米國を描いてゐる。「もだん・でかめろん」に現れた東部米國と、「テキサス無宿」に現れた西部米國と。東部米國は「現代機械文明のメツカ」と艱辛淨土の「あゝ大紐育の夕まぐれ」で代表し、西部米國は「コオンビイフと向日葵とプラツトフオオムのない停車場とのジヤツプ生活」で縱横無盡に描破されてゐる。

「テキサス無宿」一卷は、日本で初めて現れた移民文學である。しかもそれは國際的に世界獨自の移民であるメリケン・ジヤツプの文學である。メリケン・ジヤツプの生活は、波蘭に於ける猶太人、滿洲に於ける苦力、ミシガン湖畔の獨逸人と共に、奇怪な民族的存在である。一種の米國的ジプシイだ。米國的ファガボンドだ。今日まで外國生活を描いた日本の作品は甚だ多いが、移民文學としての國際性を持つたものは、この谷君の「テキサス無宿」を以て初めてとする。谷君はこの一冊を以て、日本文學史の上に新しい民族文學を、新しい混血文學を生み出した人であると言つて好い。日本人のみを描き、日本の國ばかりを描いてゐた作家は、これによつて世界にかういふ日本人の生活がある事を知つて驚嘆したであらう。しかもこの日本人は、作者谷君の如くに發作的懷鄕病にもかゝはらず、日本人の體面といふものも構はず、便利な日米混合語を發明して、他人の物を自分の物のやうに使ひ、悲しいタキシイドに身を裝ひ、たまには美人局もやつて米國人の鼻を明かし、紐育の雨に米國老人の腰も一つは突き飛ばしてみるのである。かういふ人種も同じく日本人であると教へてくれるのは、この愛すべき作者谷讓次

に外ならぬ。「アンマ」の主人公ヤマト博士は谷君の問ひに答へて、

「日本？　そんな國があることさへ忘れてゐたね」

と言つてゐる。「テキサス無宿」は米國西海岸でゴルフに日を暮してゐる日本領事や、ワシントンで櫻の木の下を散歩してゐる日本大使の報告よりも、遙に日本移民の眞相を突いてゐる國際記錄である。日本外務省の役人も、植民政策を論じる大學の先生も、日米問題を賣物にする代議士諸君も、先づこの「テキサス無宿」一册を讀んでから、初めて日米國交論に移つて貰ひたいものである。谷君のメリケン・ジャップ作品は、日本の文壇ではジャアナリスチックなモダン好みとして、新青年諸君を悅ばしたに過ぎないが、實はこれは日米國交文書として、日本移民の實寫映畫として、これ程日本移民の狀態の內外を明にしたものは、今日まで日本には現れてない。將來日本移民問題を論ぜられる時には、必ず谷讓次著「テキサス無宿」が引用される時機がくるに相違ない。

苦笑された米國

これ程メリケン・ジャップの事なり何でも知つてゐる谷君は排日國米國をどう見てゐるか。

多くの外國人の日本觀の中で、誰にも聞かされる言葉は、この日本が米國化し、機械化し、日本古來の美風を失つてゆくのを慨嘆する決まり文句である。唯かういふ中に、昭和四年の四月に、櫻の日本を見物に來た米國新聞記者團體中のたつた一人が、恐らくは最近日本に來た外人の中の唯一人として、東京新聞記者の問ひに對して、日本の今日及將來の文化は、日本の生活が米國化し、機械化してゆく中にのみ存してゐる、と斷言してゐる。僕はこの記者の名前を失念した事を甚だ殘念に思つてゐる。

この日本の米國化を褒めてくれた言葉こそ、實は米國人らしき最率直な觀察であり、且日本にとつては最重要な暗示だ。今日の世界のどの國が、米國化に反抗してゐるか。歐洲の各國が經濟的産業的に米國化さうとして遂に之を成し得ざる處に、今日の歐洲の苦悶がある。世界の何れの國と雖、米國の今日の生活と文化には達する事は出來ない。米國の持つてゐるあの浪費的繁榮と、冒險的精神を、今日何れの國も持つ事は許されない。いかに日本が米國化さうとしたつて、米國だけの産業的、經濟的生活は得られない。唯いくらかでもこれに近付かうとする處に、今日の日本の文化が生き且つ動くのである。

「テキサス無宿」の著者は、この米國を批評して、日本人の想

像も出來ない幼稚な心境の中で、日本人の想像も出來ない豐富な物質生活を營むのを、今日の米國だと言つてゐる。考へる事、疑ふ事をしない民族の莫迦々々しい力を、今日の米國だとしてゐる。米國は國でもない、民族でもない、一つの現象だと言つて苦笑してゐる。

けれども僕等の求めやうとしてゐるものは、實はこの莫迦々々しい力ではあるまいか。谷君は米國に思想のない理由を、飽滿なる生活の僞だとしてゐるが、今日世界の誰が憐れむべき思想を、悅んで豐富なる生活と交換しないものがあるだらうか。世界は、少くとも日本はそれ程貧乏し且貧乏に飽いてゐる。米國には思想がないかも知れないが、物質生活がある。僕は日本的思想の存在であるよりも、米國的生活の存在でありたい。僕は考へる事疑ふ事をしない生活を、それ程率直で、明快で、單純で、新鮮な生活を求めてゐる。僕は今日の米國的生活を以て、その浪費的繁榮と、冒險的精神を以て、新しい思想と力でないとは考へない。

僕は谷君の米國觀が、往々にして反つて多くの外國人の日本觀と同じやうに、その國自身の新しい生活意義を認めない誤謬に陷つてゐやしないかと思ふ處がある。

愛國者　谷

谷君は遂にコスモポリタンではないやうだ。それどころではない、熱烈なる愛國者である。日本男兒である。

歐洲にあつてもし三人の日本人が集つたつて、その話はゴルフと土産物と女と、それから必ず日本政治論、日本外交論である。日本にゐる時は、新聞の海外電報さへ讀まない人が、兎に角西洋へ出ると、政治外交論を鬪はすからおもしろい。しかもさういふ人達が例外なしに軍備擴張論者であり、從つて愛國論者となるのもおもしろい。かういふ人達は歐洲の歸り途で、新嘉坡あたりで初めて日本の貨物船でも見ると、甲板で目の裏が熱くなつてくる程の感傷主義を持つてゐる。

西洋に來て初めて日本を振返る事が出來るとか、日本がはつきり分るとかいふ「祖國を顧みて」式の論は、實は間に合はせの急造の日本觀であつて、もし神戶で灘の酒でも飲み、下の關でふぐでも食つたら、忽ち日本も祖國も、ついでに愛國主義も何處かへ飛んでいつてしまふので、これ程賴りにならない愛國論はない。愛國心はメエド・イン・ジヤパンに限るやうである。

殘念乍ら、わが愛すべき「テキサス無宿」の著者も、實ではこの愛國者の一人であり、日本主義者の一人であつたらしい。

軍備制限提唱國にゐただけに、さすがに軍備擴張論はしてゐないが、排日國にゐて、その仇敵に等しい米國人をやつつけるメリケン・ジャップは、「テキサス無宿」の中では至る處に活躍してゐる。谷君がこの孤獨なメリケン・ヂャップの果敢ない勝利に寄せた心は、排日國に生活する者の一應は誰しも持つべき感情に違ひない。排日されなくても、多くの人は海外愛國者になる位である。こゝに於て谷君は「テキサス無宿」他三十一篇に於て、米國遊人對日本長脇差を寫し、「サム・カゴシマ」に於て三人の惡戲米國紳士をへこます日本料理人を描き、「喧嘩師ジミイ」に於て紐育下りの拳闘家の首を締める日本無頼漢を書いてゐる。更に作者は「靴」の中に、加奈陀義勇軍の記念行進を、見事に白い馬に乘つて、胸に何かを光らして、英人の一隊を指揮する哀れな日本人ヘンリイの靴を見ながら、谷君は頻りに日本人意識に耽つてゐる。何と言つてもかういふ作品の裏の裏には、結局少年らしい愛國意識が潜在してゐる事は爭へまい。

この日本的意識を、直ちに愛國的意識だと斷定してしまふのは、酷だと考へるかも知れない。常に米國生活の眞中へは入つてゆけないメリケン・ジャップの立場から見れば、かういふ痛快さは同感に値すると言はなければならんかも知らん。この外「返報」で、「アンマ」で、「ジャップ」で、「まるう・しつぷ」で、「P・D・G」で、谷君は横暴なる米國人に對するメリケン・ジャップの愉快な反抗と果敢ない痛快さを散々に描き盡してゐる。讀者は思はず憎らしい米人無頼漢のへこまされるのを見て喝采せざるを得ない。これは決して愛國心の發露ではなくして、人種的同感からくるものかも知れない。

けれどもだ。メリケン・ジャップの中には、「人殺しの突上げ」の一手を知つてゐるヤング東鄕がゐる。この中重拳闘選手は、電車の中で東洋人にからかふ米人を打ち倒した。キャデラックの酒場で、喧嘩師チバは一日五弗の給金をとつてゐる。「サム・カゴシマ」に至つては、顔が物凄くて、傷だらけである。不具者といはれる程力がある。谷君の背後にはかういふ拳闘手と喧嘩師と鐵棒振りがついてゐる。いざとなればこの連中が、思ひ切つた卷舌で、日本人的正義を振り廻す事が出來る。谷君はかういふ腕つ節の強い人間を後楯にして、可愛いゝ威張り方をする事が出來た丈でも幸福である。尤も谷君は或は生來の望鄕病者かも知れない。「まるう・しつぷ」の愉快な船出に、職業にありついた嬉しさからか、目の裏をあつくした時に見たものは、下宿の壁に浮んだ三浦三崎の灯だ。從つて谷君は「ジョオジ・ワシントン」のやうな江戸つ子の水兵志願といふ惡戲もやつてみるし、「テキサス無宿」の中では、滔々と現代日本青年の無氣力を

難じ、豪快と情味と俠氣と心意氣を推賞してゐる。然し排日されるジャップは、必ずしも米國西海岸にゐる人間ばかりではない。かういふ喧嘩師と心意氣を後楯にしてゐない、米國以外のジャップはどうしてくれる、と言ひたくなるのである。

外國生活が長くなればなる程、祖國日本を思ひ慕ふ人はいくらもある。倫敦の老日本畫家牧野義雄は、美しい水彩畫で倫敦風物を描き作らも、心の中で描くものは絶えず母國日本の昔の風景である。牧野畫伯の日本追想談を聞くものは、この畫伯が殆ど日本狂かと思ふに違ひない。

僕にはかういふ故郷的心理が不可解である。僕は長い外國生活が續けば續く程、日本を離れれば離れる程、國境の觀念を失つてゆくものだと思つてゐる。結局これは、世界の何處へ行つても同じものだ、といふ心持に過ぎない。ある場合には、日本人である、といふ意識さへ無くなつてゆくではないか。

「亞米利加は一つの現象である」と谷君は「めりけん・じやつぷ商賣往來」の序言の中で言つてゐる。僕はこの言葉を大に味ふべき一句だと思つてゐる。けれども谷君の斷言してゐる米國が一つの現象である見方は、米國が日本と「その建國の精神、理由、意義、從つて存在價値において、同日の談でない」からである。けれども僕は寧ろ米國は一つの現象であると共に、日本も亦一つの現象と見る見方を加へたいのである。

僕はこゝに猶太人の例を見やう。今日歐米の經濟界も、政治界も、文壇も工業界も、殆どその意思の儘に動かす事の出來る猶太人の生活はどうであらう。今日の猶太人が本氣でエルサレム帝國の復活に努力してゐるかと言へば、それは嘘である。そんな何千年も前の夢を實現する爲に、わざ／＼エルサレムを開拓するなぞといふ無益な仕事に努力を費す空想家が何でゐるものか。エルサレムに道路を開かせ、家を建て、ゐるのは、あれは猶太人の中の移民業者の平凡な仕事に過ぎない。何千年放浪の猶太民族でさへ、その母國を建設しやうとしてゐるなぞといふのは、猶太移民業者の美的看板だ。かういふ猶太人にとつては、あらゆる國は一つの現象に過ぎない。猶太人は一國に住む人種ではなくして、世界に住む民族である。しかも猶太人は今日人間としてどれ程この世界の文化の先頭に立つてゐるだらう。猶太人に國境はない。猶太人は世界を國境としてゐる。世界は一つの現象である。

米國人の存在は一つの現象であつて好い。然し日本の存在も、排日も一つの谷君の所謂現象であつて好い。僕は谷君の現象にもつと虚無的解釋を加へたい。この現象を小さな感傷的愛國心の目を以て見たくはない。めりけん・じやつぷを認るものは、常

にこの感傷主義である。この點に於てメリケン・ジャップは、東洋の猶太民族ともいふべき支那人に遙に劣つてゐる。谷君は「西洋を經て東洋に還る心持」を主張してゐる。僕に言はせれば甚だ危險な思想だ。今日まで多くの西洋旅行者が、日本の土を踏むと共に、日本の國粹を唱へる程度の保守主義ならば簡單である。かういふ國粹論ならば三日と長續きしない。然しあれ程米國を識つてゐる谷君が、西洋を經て東洋に還る心持を主張するならば、それは餘りに新米のメリケン・ジャップ的な、小さき日本人的な、しかもサム・カゴシマやヤング東郷の前に慚死すべき思想である。愛すべき之等のメリケン・ジャップは、實はもつと勇敢である。もつと無智である。もつと無遠慮である。もつと放浪的である。もつとコスモポリタンである。もつと動物的である。現に「みだれの街」の中に、谷君はかういふ日本を忘れて、國際的に出たらめといはれるメリケン・ジャップの一群を描いてゐるのではないか。日本を忘れてゐない愛國者は、作者谷君一人だ。

今日歐洲旅行を終へて歸朝した谷君が、歐洲から再び西洋を經て東洋に還る心持を濃くしてきたならば、僕は敬愛する谷君の爲に殘念である。僕等はもつと好い意味で猶太的であり、ジプシィ的でありたいからである。外國に長くゐればゐる程、日本人としての民族的感情から遠ざかる、といふ事は、決して日本に對する反抗の意味でもなければ、賣國的の心持ではない。これが人間としての事實であり、避く事の出來ない本能であり、人間としての生活の實際だからである。もし海外に二年住んで見給へ。必ず日本の夢は見なくなるではないか。

ぺ　ら　？

——名文家としての谷

紀行家としての谷君を、新しい卜返舍一九だと言つたら、必ず語弊がある。然し國際的一九だと言つたら、或は多少似た處もないではあるまい。

「テキサス無宿他三十一篇」、「紅茶と葉卷」、「もだん、でかめろん」を通じて、谷君は今日の日本文壇に全く新しい文體を創め出した作家である。米國俗語を縱横に驅使して、饒舌に近い迄の日本語とちやんぽんに使ひ分けて、その輕快と、呼吸と、警句と、速力と、寫實と、センスに於て、日本に嘗てこれ丈の自由なる文體を創造した人はない。僕はこの饒舌さに於て、國際的一九だと考へるだけである。谷君がいかに輕妙なる筆致を有するかといへば、例へば米國横斷鐵道の食堂車で、黑んぼのボオイが註文を取りに來て、「何かぺらぺらぺらと言つて、その最後の

ぺらを、ぺら？　と上げて」谷君の顔を覗いたさうである。僕はこの無邪氣な一節を讀んで、あの焦げついたやうな黒い顔の黒んぼボオイが、白いテエブルの傍に銀色の盆を兩手で持つて立つて、列車の窓の外にはちらと湖の水が消えてしまつたワシントン州の汽車喜劇を想像して、一人笑はずにはゐられなくなるのである。僕等は誰でもシヤトル停車場を出て、まだ汽車の窓に夕日が射し込む時分に、そろそろ第一の難關である列車内の食事に、このぺら？の心配をしないものがあるだらうか。谷君の名筆は、米國旅行者の、大けさに言へば、肺腑を衝ぐるものがある。その急所は實にこのぺら？だ。

　谷君の名文で、僕の更に愛讀するのは、「もだん・でかめろん」の「デユ・デボア夫人の幽靈」の一節だ。この短篇は獨逸ならば、ハンス・ハインツ・エエヱルスの作を想はしめるに十分だが、その(四)に米國郊外の午後の往來を描いて、甚だ簡單に「白づくめの保姆が口笛を吹いて、學校歸りの子供を呼ぶと、それに答へて、子供の代りに犬が飛んでくる」と書いてゐる。この二行の光景は、何人の米國日記にも書かれてない位の平凡な風物でありながら、これ程はつきりと米國郊外の懐しい靜かな風景を現してゐるものはない。何人も觀察し逃がしてゐながら、實はこれ程眞實な描寫はない。僕はこの何でもない往來風景に目をつけて、何氣なくこの二行を書き下すに至つた米國日常生活に徹した味ひを、谷君の羨むべき情趣だと思つてゐる。

　谷君の描寫は、多彩的であるけれども、平面的な場合も免れない。明快ではあるけれども、尖鋭的な處は往々にして缺ける。例へば「みぞれの街」で米國夏場の光景を描いて「まづあらゆる原色を縱横に想像してくれ給へ、それからあらゆる音響の中に、あらゆる外國語の發音を想像してくれ給へ」と言つてゐるが、夏のコニイアイランドの日光は、もつと光彩的で、もつと新鮮で、もつと海風が吹いて、もつと女の肉體が見えて好い筈である。然し紐育の初雪を描いて、白い大な塊が河を渡る風につれて、模樣のやうに落ちては舞ふが、大概途中で建物にぶつかつて消えてしまふ、と讀むと、さすがに僕にもあのメトロポリスの夜の雪の空虛な無限な想ひがさせられて、何となく涙が出るやうな心持がする。

　谷君の多彩的で平面な筆觸は、僕に現代露西亞の畫家ユオンの繪を想はせると共に、レビユウの舞臺の明快と早さを感じさせる事が多い。この最好い例は「白い謝肉祭」の戀とスキイの物語だ。この一篇は白い毛の帽子と、白い毛を縁につけた外套と、白い革の編上げ靴と、たつたこれだけが黒いロオラアをつけて、雪の山脈と氷の張りつめた湖水の背景の前に、大勢で手

をつないで音樂に合はせて舞臺を滑りまはる、レビュウには缺くべからざる一場景そのまゝだ。粉雪、柔い雪、硬い雪に説かれた戀の諸分けを、谷君がこの白い謝肉祭の聖モオリッツで巧に忽ち觀察したのだとしたら、僕はこの作者の敏腕には全く感嘆せざるを得ない。「白い謝肉祭」はその白い雪を背景にしたレビュウ趣味に於て、同君の歐洲紀行の中で僕の愛讀する處である。

僕はその自由なる饒舌に於て、谷君の行文を一九に比べたが、これ程新奇濶達な文章を書いた作者は、明治以後僕には一寸思ひ當らない。この名文は、めりけん・じやつぷ文、ともいふべきであらう。谷君の風格を以て、單にジャアナリスチクといふならば、それは新しい時代を知らぬ人の言葉であらう。

北緯五十度

谷君が日本を出發したのは、昭和三年の四月か五月であらう。それから一年の間に、どういふ歐洲の旅をしたか。一寸それを紀行の順序で見ると。

まづ「踊る地平線」で西比利亞からモスカウに十餘日を滯在してゐる。その印象記を日本に向けて發送したのは、恐らく六月初めであらう。それに引續いて「テムスに聽く」と「黄と白の群像」の二ヶ月を倫敦に、「虹を渡る日」でドオバァの海峽を越えて、ブラッセルと和蘭へ、「白夜幻想曲」で丁抹、諾威、瑞典、芬蘭へ、それからステチン港かハンブルク港かへ出て、巴里に走つたのであらう。これを以て谷君の所謂五十度以北の旅を終へて、これを「紳士的に忠實なる報告」と稱し、千九百二十八年も終へて、その後は「ノオトルダムの妖怪」で巴里を、「血と砂の接吻」で西班牙を、「しつぷ・あほい」で葡萄牙を、「Mr. 7 and Mr. 23」でモンテ・カルロを、「長靴の春」で伊太利を、「白い謝肉祭」で瑞西の物語を終へ、これを以て五十度以南の「社會的冒險」と稱して、千九百二十九年の前半を過してゐる。日本に歸着したのは六月かと思はれるから、滿一年の間に、歐洲は十餘國を歩いた譯である。前篇は民族的角度に立つた黄色い紳士の遍歴記であり、後篇は近代的無宿者といふ谷君の、奔放たる外國小説に近い。

飄然たる歐洲旅行者としての谷君を見ると、所々で土地の案内者を巧妙に使つてゐる痕が見える。これは勿論紀行の中には直接に現れてこないから、僕の臆測である。然し恐らく案内者を使つたと見ると、その使ひ方は實に巧妙を極めてゐる。中々これ丈に使ひこなすには、餘程に自由な外國語と、餘程に旅馴れた圖太さを持つてゐなければ出來ない。この全篇を通じて谷

君の筆に上つてゐない國はと見ると、波蘭と獨逸と、墺匈國、ルウマニア等の中歐と東歐は全部省略されてしまつた。漫遊者としての谷君は歐洲の座敷と四疊半と玄關には踏み込んでゐるが、居候が縮こまつてゐる三疊や、陰氣な土藏や、姦ましい女中部屋には足を入れなかつたやうだ。惜しいと思つたのは、ルウマニアからコンスタンチノオプルまで、國際列車で一走りされなかつた事だ。あの歐洲の野性を、極東でない東洋の奇怪さを、あの煙草と絨氈の國の惡臭を嗅がなかつた事だ。然しその代りにはリスボンの夜の波止場の物語がある。これは確に珍品だ。

更に五十度以南の幻想小說で、谷君は見事に日本のボオル・モオランに近付かうとしてゐる。唯谷君はその歐洲物語で日本のボオル・モオランに成る爲には、餘りに饒舌が過ぎるやうだ。歐洲ではかういふ饒舌は餘り好かれない。谷君は米國の往來に捨てられた新聞紙の如くに、家の裏になげられた空罐の山の如くに、多くの言葉をしやべり、無駄話をする。歐洲人は米國人に比べると、然し上品ぶつて氣取つてゐる。かうしやべられては、秘に眉をひそめるものは、一人ボオル・モオランばかりではあるまい。「血と砂の接吻」と「カタロオニユの夜」の一節とを比較し給へ。モオランは鬪牛の光景を寫すのに、僅に馬の黃色い齒と、鬪牛師の禿げ頭と、茴香酒の句を書いただけである。

然しこの饒舌を以てしても、歐洲旅行者としての谷君が、一ケ月餘に新しい土地を訪問し、新しい物語を作つてゆくこの精力と鬼才とは、僕は少からず感嘆せざるを得ない。しかもそれが大な聲では言へないが、一令夫人携帶の煩さである。けれどもこの饒舌に累されてか、谷君の見たる歐洲は、平明なオフセツト版である。少し輕快に過ぎる行進曲である。谷君は陰氣な歐洲を見てゐない。また暗い所には近付かない。歐洲の憂鬱と陰險と淫逸とは、紳士谷君の敢て飛び込まなかつた處である。もし谷君が今少しく歐洲らしく言葉少なであり、そしてもつと谷君自身の近代的無宿性を發揮したら、歐洲の晝と夜は、もつと潑剌と、印象的に、黑と白との鮮明さで現れてきたに違ひない。歐洲の持つ陰影と明さとがはつきり區別され、歐洲の女と風の惡臭が、もつと強烈に僕等の鼻を衝き或は顏をそむけさせる迄に迫つてきたであらう。谷君の歐洲紀行が、僕にある種の空虛さを感じさせるのは、歐洲に於けるジヤツプ谷が現れず、谷君の近代的無宿性が缺けてゐるからである。「國際的に破目を外さなかつた」からである。僕は南北どちらかと聞かれたら、敢て五十度以北の平明な記錄の中が好きだと答へたい。ドルンで獨逸のカイゼルをつけねらひ、アムステルダムで青空の國旗を仰ぎ、芬蘭で村の子供に取卷かれる谷君夫妻の旅姿の方が、南

歐の谷君よりもはつきり目に映つてくるからである。谷君が最力を盡した南歐小說は、人間谷よりも、獵奇に過ぎたモノマニア谷の作品である。

然しさすがの谷君も、この一ヶ月每に逐はれる飛び步きには疲れたらしい。「海のモザイク」には痛ましい迄にこの疲勞が現れてゐる。僕は心からこの旅疲れを慰めたい氣持だ。僕一個の回想から思へば、芬蘭の夏の風景が、中々に捨て難い印象を與へる。無駄話だが、僕がヘルシングフォルスに着いたのは、眞冬の夜の十二時であつた。この北歐の港は、恐ろしい迄の吹雪であつた。僕は脊の髓まで凍る思ひをして、深夜の雪を衝いて馬橇を走らした。谷君夫妻が樂しさうに白樺と岩とを眺めて步いたのとは、大違ひの芬蘭の旅であつた。

僕は谷君が歐洲でその近代的無宿性を發揮しなかつた事を、大に殘念に思つたが、それは僕の方が無理だつたかも知れない。歐洲旅行者としての谷君は、どこまでも漫遊的紳士だつたからである。露骨に言はう、令夫人御同伴の愉快な旅客だつたからである。

令夫人御同伴

谷君は「白夜幻想曲」の中で、丁抹コペンハアゲンの眞夏の秋風に吹かれながら、小石を蹴る貧しい少年の姿に、甚だ日本人らしく想ひを寄せてゐる。そして曰く、旅にゐると誰でも詩人になると。だから旅行者はみんな發作的に詩人になると。

旅にゐると誰でも詩人だ。僕はこの言葉にぶつかつた時、あれ程南半球の風に吹かれ、チャプスイの筍を食ひ飽きた谷君にして、まだこんな事を言ふのか、とさへ思つたのである。僕は歐洲旅行の泣言ならば、島崎藤村の巴里だよりでもう澤山である。あの冷靜な正宗白鳥の旅だよりを見ると、この恐るべき小說作家をして、甚だ淚脆い慘憺たる日本詩人にしてゐる。この谷君の言葉は眞理である。けれども實を言ふと、僕は谷君の口から、旅は人を無宿者にする、といふ文句が聞きたかつたのである。

まあ旅行者が、或は谷君が發作的に詩人になつても好い。唯僕の問題とする處は、谷讓次風に言へば、なにもさう固くならなくても好いが、何が谷君をさうさせたかである。何があの正宗白鳥を詩人にさせたかである。何が谷君からあの近代的無宿性をこの歐洲旅行から奪つたか、である。或はこれを具體的に言へば、なぜ谷君がモンテカルロよりもアルゼリアの砂漠へ渡つてくれなかつたか、モスカウからヲルガの川まで出てくれな

かつたか、いつそ匈牙利の山窩と一緒に歩いてくれなかつたかである。

歐洲に於ける谷君の旅には、クラリッチの館票を一枚だけ貼つた深紅の女持ち帽子箱が離れなかつた。言ひ換へれば令夫人御同伴の樂しい羨むべき漫遊であつた。メリケン・ジャップとして、まだ獨身者で、悲しいタキシイドを着て米國三界を放浪してゐたこの紳士も、きつと感慨無量に相違ない。

けれども僕の愛すべき無術者としての谷君の歐洲旅行には、この令夫人御同伴が谷君をして遂に「詩人」たらしめ、「こすもぽりたん」たらしめる事が出來なかつたのである。テキサス無宿であつた悲しき谷君の涙は、綺麗に南歐の風に乾いて、わが谷君は綠灰色のゴルフ服に、綠灰色のゴルフ靴下をつけて、革外套の襟を立てゝ、長い旅に狐色になつた荒さを顏に輝かし、その夫人は水玉模樣のスカアフと一緒に短い斷髮を風になびかせ、蜥蜴皮の靴先を自動車用毛布の下に一寸覗かせて、相共に悠然とモンテカルロ指して、疾風の如くにドライブして來たのである。樂しく羨むべき南歐の旅であつた。

けれどもだ。もし谷君の歐洲旅行記かあれ程の奇想を縱橫にし、あれ程の名文を驅使し、あれ程に巧妙な旅行をしてゐながら、遂に樂しき羨むべき、獵奇の、獵美の、獵新の旅行に終つたのは、この「令夫人御同伴」が累したのである。

然しこれは Mr. Tany の罪でもなければ、Mrs. Tany の罪でもない。唯僕はまつ先に正直に然し甚だ遠廻しに、諧謔的に言はう。歐洲の旅行に夫人を携帶するのは、ミュンヘンにゆくのに、麥酒を持つてゆくやうなものだと。然し一寸待つてくれ給へ。かういふと必ず誤解がありさうだから。

外國旅行に夫人を同伴するのは、男一人で出勝ちの日本では勿論奬勵すべき美風である。この意味に於て市村羽左衛門は、生れて靴をはいた事のない老夫人に、巴里の踵の細い靴を強ひてはかした。この意味に於て正宗白鳥も同樣である。恐らく久米正雄も同樣である。わが谷夫人は、勿論今迄の日本製の靴を洒麗た蜥蜴皮の靴にはき變へられただけであらう。けれどもこの尊ぶべき美風が、實はいかに羽左衛門をして、白鳥をして、更に勇敢なる正雄をすら苦惱せしめ又はせしめつゝあるか。これは決して自分の横に或は後に、シャンゼリゼエの大通りを、細い靴の中に魚の如く幅の廣い日本の足を押し込んで、人知れずべそをかきながらよちよち歩いてゆくわが令夫人が厄介なものであり、腹立たしきものであり、これさへゐなければ、の感を抱かしめる爲ではない。寧ろ反對である。歐洲旅行に相共に相當の赤毛布をやればやる程、同伴する令夫人が、いとしく、

可愛らしく、いぢらしいものになつてくる。外國旅行に自分の體よりも大切に感じられるものは、實にわが令夫人である。さすがの好色羽左衛門も、この歐米旅行の間程あの老夫人を大事にした事は嘗てあるまい。

谷君の歐洲旅行に現れた令夫人は、實に聰明なる內助の功を盡した美婦人である。かの遙に遠い歐羅巴の奥の細道芬蘭の奥の山と湖の途上で、この山の子供達にチョコレートを頒けてやる夫人の姿は、僕をして微笑を禁じ得ざらしめる可憐なる風景である。婦人の賢明はピカデリィ街上で、羽左衛門訪問を「思ひつかせる」程驚くべくジャアナリスチックである。夫人の愛情は、かの虹を渡る飛行機上で、夫に「イカが」と筆談を取り交はす程濃かである。夫人の嗅覺は夕風のストックホルムに、味噌汁を嗅ぎつける程銳敏である。

けれどもだ、この尊ぶべき令夫人の存在は、當然歐洲に於ける夫君をして、あらゆる冒險から遠ざけた。谷君は歐洲に於て、冒險者であるよりも、詩人になつた。谷君は歐洲の女の價値に觸れなかつた。それは當然である。然るべきである。谷君にとつては、歐洲紀行を書くよりも、令夫人の方が尊ぶべき存在であつた。勿論である。然るべきである。久米正雄は歐洲印象記を書くよりも、まづ艶子夫人の巴里のお買物のお伴に忙しいに相違あるまい。これも當然である。然るべきである。

けれどもだ。此處に悲しき矛盾がある。僕等が谷君の歐洲紀行を讀んで、結局樂しい羨むべき遊山旅行記である、と斷言せざるを得ないのは、そして無宿者谷をして、歐洲の旅は人を詩人にするといふ泣言を云はせる程女々しくしてしまつたのは、谷君の傍に甲斐々々しく寄り添ふ令夫人の存在といふ人間的制肘と人道的怯懦の結果に外ならぬ。谷君の印象記に歐洲の女の存在が全く無視された事は、言ひ換へれば、谷君は歐洲に於ける陰鬱と暗黑と冒險と無宿性を無視した事である。もしこの危險を冒す事が谷君に出來たら、谷君は必ず平明な詩人にはならなかつたであらう。そして谷君は昔日の如くにコスモポリタンとして、テキサス無宿として、ジプシイ谷として、放浪者谷としての悲しき姿を見せてくれたに相違ない。僕の見たかつたのはこの歐洲無宿の谷である。ジプシイ谷である。歐洲生活の憂鬱と女とを知つた谷である。僕の嗅ぎたく、知りたかつたものは、谷君のコスモポリタンの汗である。放浪者谷の戀である。無宿者谷の血である。谷君の歐洲遊行は、紳士の、ジャアナリストの令夫人同伴の快活なる洒脱た行進曲ではあつても、歐洲の女と酒に我を忘れた人間谷の記錄ではなかつた。僕は谷君の近代無宿性が、遂に米國にでも置き忘られたのかと思ふと、甚だ寂寞

の感に打たれる。

僕は谷君の「令夫人御同伴」を批評するのではなくして、歐洲途上でこの谷君の近代的無宿性の消え失せた事を悲しむのである。

世に賣春婦程コスモポリタンなものはあるまい。黄色日本人として歐洲に侮蔑されてゐるものを、一夜にして救つてくれるのは、誰でもない、各都市に巣くふ賣春婦に外ならない。谷君は「しつぷ・おほい」のぼるとがる紀行の中で、放尿する賣春婦を描いてゐる。けれども僕の直觀する處では、ここには谷君の「嘘」がある。谷君の歐洲紀行が米國記錄に比べて、甚しく人間的呼吸と汗の匂ひを缺いてゐるのは、この谷君の「嘘」が多いからである。

歐洲に於ける谷君は、身を挺して歐洲の暗黒と憂鬱にもぐつてみる理由と時間とを持たなかつた。どこまでも令夫人同伴であり、一と月毎に書かねばならぬ旅行日記である。令夫人御同伴は、谷君をして内外に氣を配らし、注意深くし、愛妻的ならしめ、善良なる夫たらしめ、詩人たらしめ、ここに「嘘」と無理とを生ぜしめた。作り上げねばならぬ旅行記の義務が「嘘」となり無理となつたのは言ふまでもない。然しその爲に谷君の愛すべき無宿性が永遠に失はれたものとしたら、谷君が遂に「紳士」に止らうとするならば、それは敢て僕ばかりの遺憾ではあるまい。米國紀行に傾倒した僕が、歐洲紀行に於て、これは眉唾ものだぞ、と思はず嘆聲を發したのは、無宿者が紳士に早變りし、中々その洒麗た流行服を脱ぎさうでなくなつたからである、しかもそれがどうやら令夫人の手前でありはしないかの如くに。

しかしもし谷君が一人であつたならば、無宿者谷の旅であつたならば、港々に女あり、必ず谷君は賣春婦に目をつけたであらう、もつと貧乏旅行をしたであらう、失戀したであらう、醉つ拂つて地上に倒れたであらう、侮辱されたであらう、泣いたであらう、汽車に乘り遅れたであらう、金を盗まれたであらう。然し人間谷は泣顔をして、笑顔をして、悲しい顔をして、べそをかいて歐洲を歩いたに違ひない。

外國の旅に出て、初めて女房の有難味といぢらしさを知る人は、甚だ多い。然しそれは餘りに安價な詩人的感傷主義である。「さまよへる日本人」谷の面影が、遂に歐洲旅行記に見られなかつたのは、令夫人御同伴の罪ではなくして、この安價なる詩人的感傷主義の爲である。

僕は勿論令夫人御同伴を云々してゐるのではない。令夫人御同伴は當然である。然るべきである。尤もである。唯人生には人間として賣春婦のゐる事も忘れてはなるまい。僕は人生の旅に、令夫人を愛撫する夫君谷君の外に、賣春婦と戯れる無宿者谷君も想像してみたいのである。（昭和四年七月）

中央公論社代理部案内

東京市丸の内ビルデイング五八八區
中央公論社代理部
振替東京七八四七五番
電話丸の内(23)二〇六番

代理部への御註文はすべて前金に限ります。御送金はなるべく振替を御利用下さい。

御註文の際は郵税をお忘れなく。

宛名は必ず「中央公論社代理部」として下さい。

浩壮

―無臭ニンニク錠―

ニンニクの効力は皆人のよく知る所、然しその臭氣は十人が九人まで嫌やがる。

効力は認めるが服むのは嫌や、服み度いが服めないと云ふ人は、このニンニク錠浩壮をお用ひ下さい。ニンニク特有の臭氣を無くした所が本劑の特徴で服んだ後も何等口中に臭氣を殘しません。

原料にはニンニクの原質そのまゝに、數種の高貴藥を配し、肺結核、肋膜炎、氣管枝加答兒、喘息、胃腸弱、神經衰弱、貧血症、腎臟病による浮腫、蛔虫條虫の驅除等には驚く程の効力を持つてをります。

定價　十日分　二圓　三十五日分　五圓

送料東京市内十二錢、内地十八錢、領土四十五錢

脚氣特効 純良胚子

脚氣はヴイタミンBの缺乏によつて起ると云ひ米の胚子の中には多量のヴイタミンBを含んでゐると云ふ事を識りながらも純良胚子を手に入れる事が出來なかつた爲に非常に不味い米糠を服むのでなければ、高價な製劑に頼るより外に道がない狀態に鑑み、特別な方法で、胚子ばかりを集める事に成功致しました。

脚氣豫防には晒布の袋に入て毎日の飯と共に炊き込めばよく、脚氣に罹つた場合は、一日十匁以上をなるべく少い水で煎じ、其煎汁を一日三回に分け食間に飲めば、大低二週間以内に全治致します。

定價　半ポンド罐入　六十錢

送料東京市内十二錢、内地十八錢、領土四十五錢

古本賣買のお取次

主として地方在住讀者諸氏の御便宜を計る目的で特設いたしましたのが弊社代理部の「古書案内部」です。どうぞ御遠慮なくどしどし御用命下さい。古本御購入のお取次はもとより御賣却御希望の古本古文書、和本、綿繪等價格不明の御不用品の評價、賣却のお取次をいたします。お問合せだけで御返事いたしかねるやうな種類のものならば、一應御送附下さいますれば早速市内一流の專門家に囑して正確迅速に評價して御返事を差上げます。

古本賣買お取次規定

(A)紹介は往復葉書又は返信料添付のこと。(B)註文はなるべく振替で、但送品は着金後一週間以内。(C)評價御希望の書籍は、書名、著者、發行年月、發行所、汚損の程度等詳細御報のこと。但古文書、綿繪等の如きは現品拜見の上ならでは正確に評價できない場合がありますからその旨お含みおき下さい。御返送の場合の送料は申受けます(D)宛名は中央公論社古書案内係と明記のこと。

スプリングコート兼用

バーバリーレインコート

英國製と同樣の生地を用ひ純國產品。品質も仕立も非常に吟味されたもの、色は紺及茶系統の最も嶄新な流行色。

寸法襟下鯨二尺六寸より二寸每に各種

定價　一着　十九圓



純良レインコート

上質の羽二重にゴムを裏付して、上品な縞柄を染出したもので如何なる豪雨にも絕對に水の透る事なく、折疊んでサツクに入れゝば少しも嵩ばらず、一番輕量で、夏期流行中突然の急雨に備へるには最適。色はネヅミ、茶、テツ系統の最も嶄新なもの。

定價　一着　十三圓

送料東京市内十二錢・內地二十七錢・領土五十五錢

小型活動寫眞撮影器

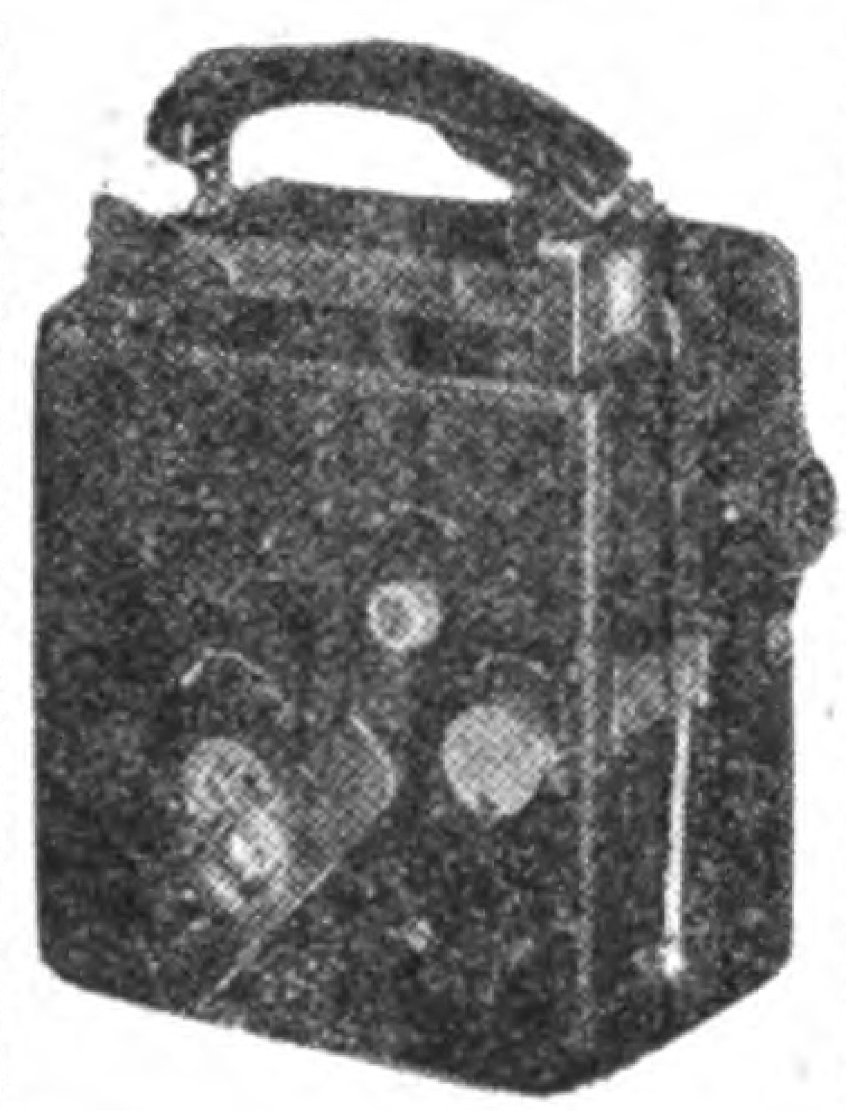
本社代理部特選のシネニゾー小型活動寫眞撮影器は、科學の國ドイツの最優秀品です。

シネニゾーは自動式と共に手動式を兼ね一齣づゝの撮影から、高速度撮影に至るまで小型活動寫眞撮影器としては他に見られない一切の條件を具備してをります。時には撮影者自らの姿を撮る事も出來、高速度撮影では飛び交ふ小鳥のみ巧な空中の動作を分解する事も出來、シネニゾー一臺を持つ事によつて本日の行樂を永遠の生ける記憶として隨時隨所に再現する事が出來ます

定價　九ミリ半用　百六十圓以上

十六ミリ用　百六十五圓以上

先づカタログを御覽下さい。



ガリレオ双眼鏡

本器は普通オペラグラスと云はれてゐるものゝ中で、最優秀品です。高級な光學ガラスのレンズ十二枚使用、嚴格な試驗濟ですから、レンズの周邊まで明るく見る者の眼に愉快な感じを與へます。

定價　A（少しく小型）十八圓　B十七圓

送料　東京市內十二錢、內地十八錢。領土四十五錢

経濟と實用とを兼ねた

替ズボン

地方在住の方々のために、最も經濟的實用的な替ズボンを左記の特價で提供致します。

茶褐スレン園藝用　二圓十錢

鼠綿綾セル執務用　二圓四十五錢

黒セル　五圓四十錢

上等黑・紺セル　五圓八十五錢

絹セル黑・紺セル　七圓

鼠フラノ（蒲ラシヤ）　六圓

夏物

白地縞綿セル　二圓三十錢

白綿ギヤバジン　三圓二十五錢

純毛白絹セル　八圓八十錢

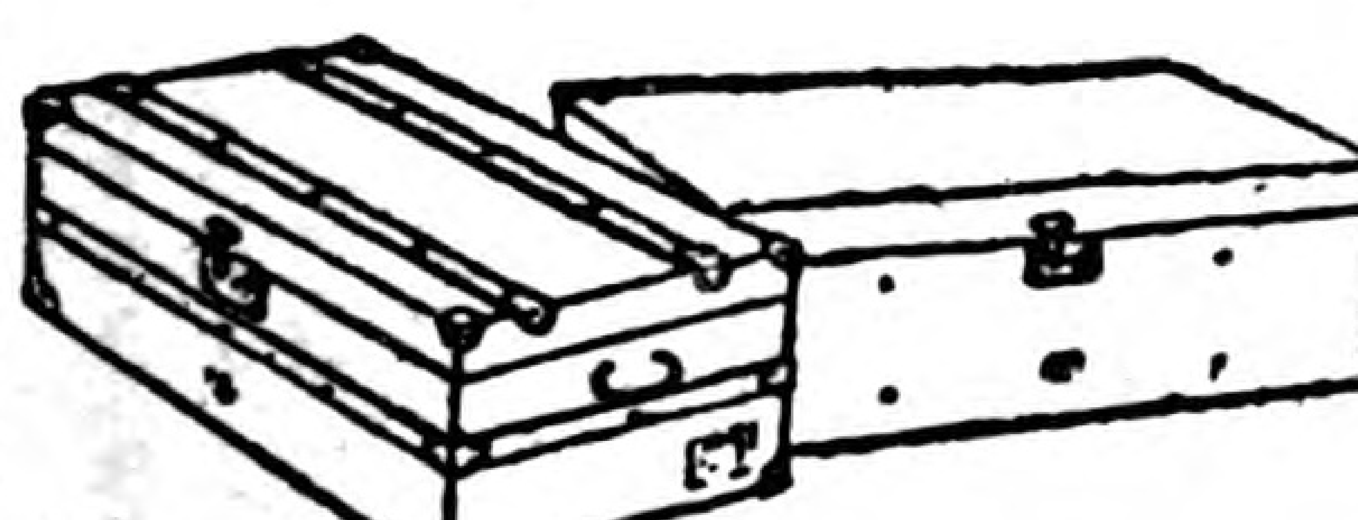
寸法

	腹廻	股下
大	約二・五尺	約一・九尺
中	二・三尺	一・八尺
小	二・二尺	一・七尺

送料　東京市內十二錢　內地十八錢　領土四十五錢

昭和文庫

厚い鐵板張り、タテ二尺七寸、幅一尺二寸、厚サ八寸五分の堅牢な容器で、內壁の四方を丈夫な木板で圍み、中にナフタリン樟腦入れを備へ、外面には漆の燒附けを施して立派に仕上げ、絕對に外氣の侵入を防ぐ樣工夫された、毛織物又は貴重書類等をしまつてをくのに必須な品です。



特製はトランクとして、そのまゝ送り出す事が出來、簞笥や支那鞄より遙かに便利です。

定價　特製　九圓八十錢

並製　六圓八十錢

送料東京市內二十錢　地方運賃先拂

洋服カバー

防水防濕防蟲の效用を具備した紋紙製品で、而も洗濯が出來、布よりも丈夫です

改正定價　大一圓　小六十錢

送料　東京市內十二錢　內地十八錢　領土四十五錢

萬能書見臺

小には机上の書見臺から、大には約五尺五寸位までの自由な高さになり、腰掛けて見る場合、寢て見る場合等には各々に適合した形となり、書架の部分には頁止めを附してありますから、盛夏扇風に立ても風に吹きめくられる心配もなく、奏樂用の譜面臺にも好適、屋外ではスケッチ用の書架ともなり、横に曲げて氷嚢つりとなり、寢臺に取附ける事も出來ます。

大部分は鋼鐵製ニッケル鍍きの、木箱入携帶至便、分解組立共に自在な、文字通り萬能書見臺です。

寢ながらの書見には、下向の書物を完全に把持し、而も高低左右角度長短傾斜等、意の欲するまゝです。

定價 一臺 八圓五十錢
送料 東京市内十二錢内地五十五錢領土八十五錢

最小型將棋盤

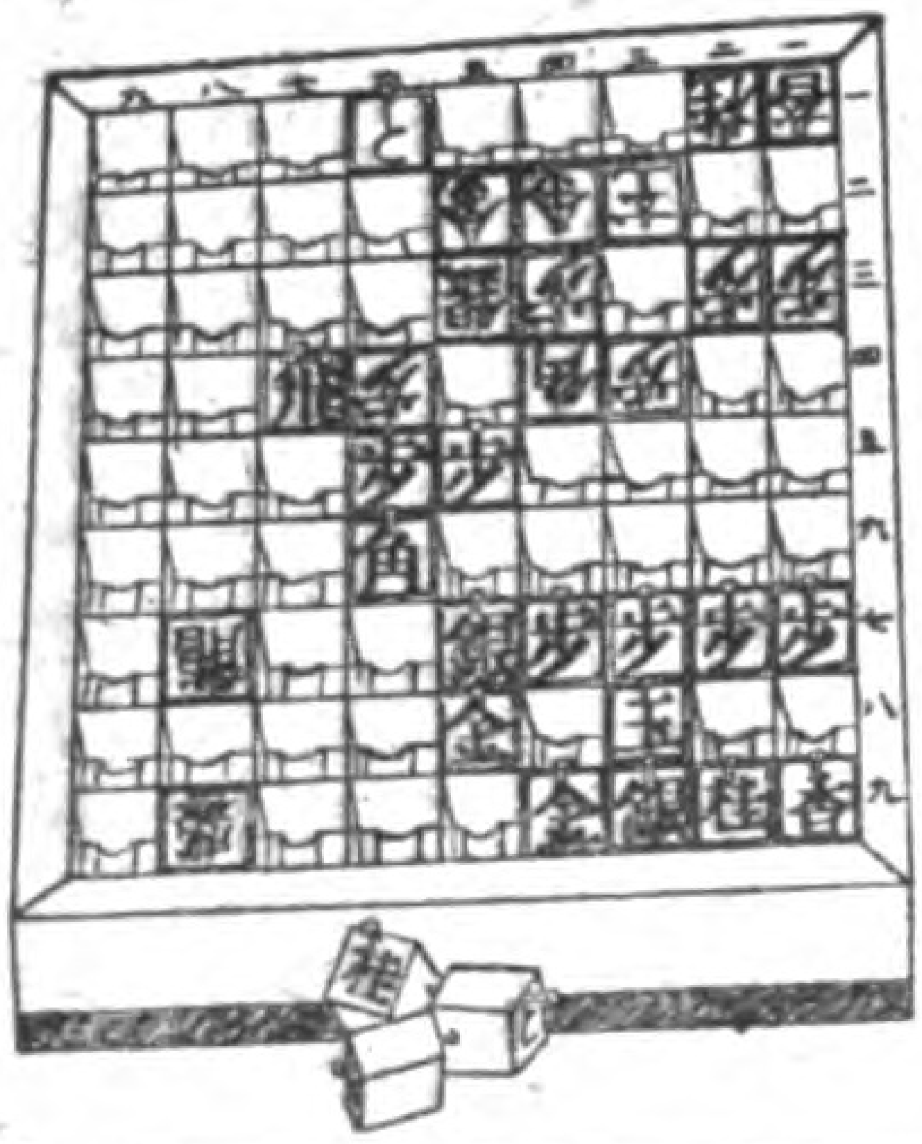
縱三寸七分橫三寸二分厚さ五分の最小型輕便將棋盤です。

木とアルミニユームとで造られてありますから、ポケツトに入れて少しも重く感じる事なく、駒には一個一個磁針が附けてある等、婦女子の眼にも可愛らしい程のものです。

駒は標準文字を用ひ、盤には縱横に數字が記されてありますから、新聞を見ながらの研究には一層便利です。

其の他繁雜な業務の間に數分の閑を得て、又は忙しい旅の車中に、或ひは湯上りの腹ばひのまゝで、或ひは机上に、或ひは病床のつれづれに、仰向けのまゝでも出來る、好棋家にとつてこれ程便利なものはありません。

定價(駒全部附) 一圓八十錢
送料 東京市内十二錢 内地十八錢領土四十五錢



最新艶出布

このフレツシユマン ダスト アブソーバーは、特殊の毛纖物に機械的工程と化學的處理とを施したものでありますから、器物固有の塗色を損する事は決してありません。

この布は從來の艶ふきんと異り、埃りを吸ひ取りしかも美しい艶を出す不思議な作用を有して居ります。

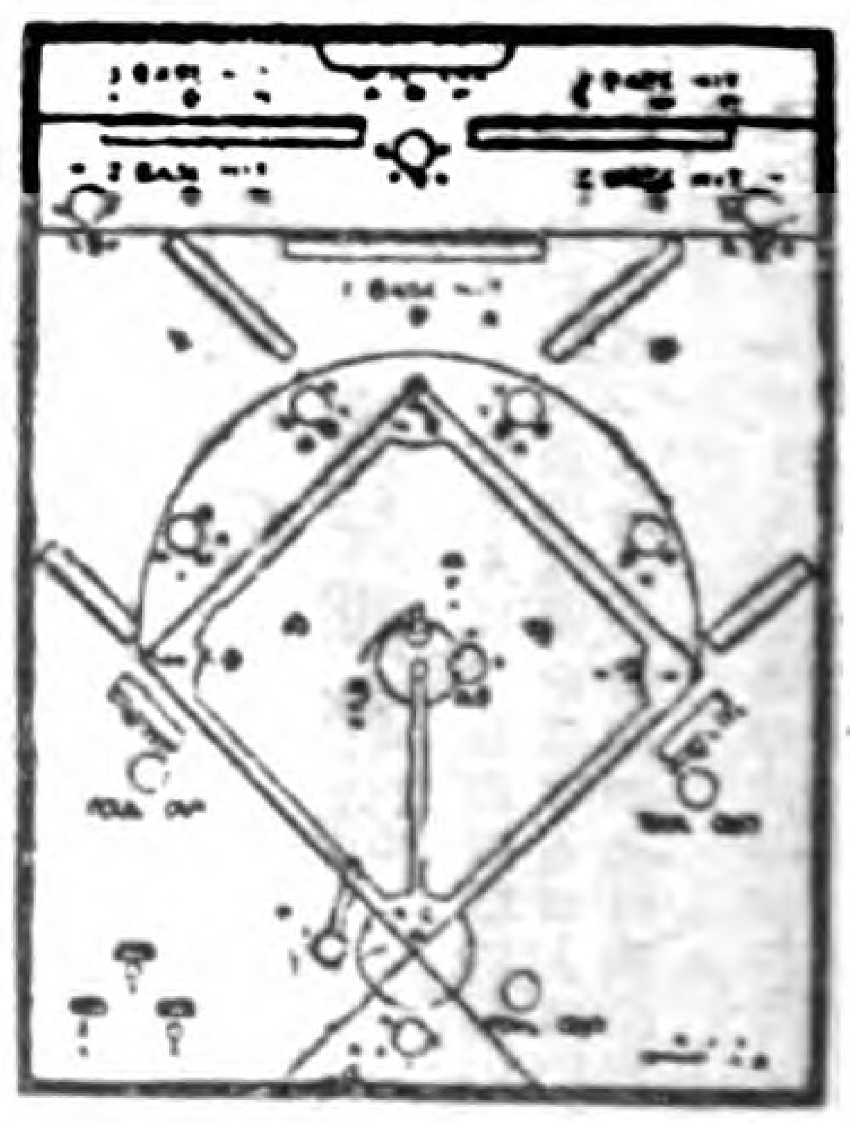
漆器類、殊に蒔繪の器具、ピアノ、オルガン、卓子、自動車等用途は中々廣く蓄音器のレコードをこの布で拭へばレコードの壽命を永くし、音は非常に美しくなります。

定價(金屬製容器入) 一圓
送料 東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

誰にも愉快な 野球競技盤

約二平方尺の盤上へ野球の實戰と同じ興味と緊張味を移す事に成功したのが、この高等式野球競技盤です。

盤面は飛行機上から見た野球場さながらで、投手は球にあてた指の力一つで、直球、曲球、軟球、剛球自由自在に出す事が出來、打手も亦選手がボックスに立つた時以上の緊張した氣分で、バツトの振り方で美事本壘打を飛ばす事も出來れば油斷をすれば投手に好く詐られて、三振「アウト」にされて了ひます。



實戰に臨む人はもとより、野球の興味が婦人の世界にまで及ばうとしてゐる現今、高尚な新らしい家庭遊戲として、一般の家庭におすゝめ致します。

定價 小型 一圓三十錢
中型 三圓八十錢
送料 東京市内十二錢内地小型は十八錢中型は二十七錢領土小型は四十五錢中型は五十五錢

スマドレ・ヘヤトニック

このスマドレ・ヘヤトニックは米國で唯一の日本向の化粧料を出してゐるスマドレ會社の製品でニユーヨーク、ロンドン、パリー在住の日本人間に愛用されてゐるものです。

洗髮後や朝夕に數滴を毛髮の根元に振りかけて、指頭で輕くマツサージしてをけば、フケを除り拔毛を止める事は妙であとには得も云はれぬ芳香が永く殘り、使用するにつれて、毛髮は絹の樣に軟くなり、日々漆黑の美を増します。

定價 婦人用紳士用 特大瓶各二圓五十錢
送料 東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

スマドレ・シャンプー

理想的洗髮液スマドレ・シャンプーは短時間に地肌からキレイに汚れを落すことが出來、同時にフケを除り爽かな艶のある美しい髮にする一方、ちゞれ毛や、癖毛を直す事は全く不思議な程で、スマドレ・ヘヤトニツクと共に、ニユーヨーク、ロンドン、パリー等の日本人に愛用されてゐる世界特許品です。

日々忙しい社會に立つて、男子の髮を整へる事が、重要な禮儀の中に數へられる今日、僅かな時間に之を用ひて、毎もさつぱりとした髮で、自他共に氣持ち良く會談する事が出來ます。

定價 特大瓶 二圓
送料 東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

春と夏の香水

此の頃は一般に一年中香水が用意される樣になりましたが、それも毎も同じものでなく、その時々の氣分に應じ、出る場所に應じて、變つたものを用ふるために、中央公論社代理部で特に四季の香水を造りました。

中でも、すがすがとした春の梅、夏の鈴蘭の香水は、今のものとして是非おすゝめ致し度いもので、贈答品にもふさはしい樣、素敵な體裁の函に納めてあります。四季何れでもお好みのまゝにお註文下さい。

定價(春・夏・秋・冬)各二圓
(四季組合せ)七圓五十錢
送料 東京市内十二錢内地十八錢領土四十五錢

御注意

◇振替は、一番安全な送金法ですが、普通近い所で四日位かゝりますから、そのお積りで、何も御註文は少々お早目に願ひます。

新著月評

最も權威ある批判であり推薦である

小島精一著 日本金融資本論

向坂逸郎

私はこの書を貪り讀んだ。何者、この書の著者の云ふが如く、『獨占！ 然り少數大金融資本團による全面的支配の確立！ 之こそ實に最近十餘年間の經濟的急展開の中核的現象』であるからである。そうしてこの書は吾國に於けるこの『經濟的急展開の中核的現象』を如實に描き出す意圖を以て書かれてゐるものであるからである。

著者は先づ序説に於て、その所謂産業組織の近最的展望を試みる。こゝで獨占的資本主義の一般的概念が與へられ、その先進諸國に於ける一般的なる發展過程が概觀され、次で吾國に於ける所謂金融資本的獨占の發展の概括的叙述がなされる。第二章以下最後の章（第十二章）にわたりて吾國の各重要産業部門に就いて、生産力の發展、資本の集中、獨占化の過程等々に對する具體的描寫が現はれる。それは實に、金融業（銀行、信託、保險）、炭礦業、石油業、電力（電燈）業、銅工業（銅礦業、製銅業及び銅加工業）、製鋼業、セメント工業、機械製造及び造船業、人造肥料、新興諸化學工業、製紙（洋紙）業等にわたるものである。

吾國に於けるこれら産業の各部門の一々について、何時、如何にして獨占化が進展し、如何なる程度に市場を支配し、中小資本の沒落が如何にして行はれつゝあるか等々の事實につき述べられてゐる。この各論的部分に、著者のエネルギーは最も多く集中され、從つて又それはこの書の最大の特色を形成してゐる。量的にも質的にも。私自身の如き又こゝに於て最も多くのものを學び得たと信ずる。

この書に就いて、著者は卒直に彼自身の信ずる所を述べてゐる。曰く、

『一、單にそれがカルテルやコンツェルンの外貌的叙説に止まらないで、各部門の産業的背景——例へば、生産力發展の過程、生産條件の吟味、内外競爭狀勢、關稅その他の保護政策等、謂はゞ獨占化を胎生した自然的及び社會的環境の考察。

二、大銀行會社の經營の作用——その效果の檢討。

此二點に主力を注いだことは、さゝやかながら、本書の存在理由となるであらう』と。

私も亦著者のこの言葉をすなほに受入れることが出來る。吾々の眼前に展開した吾國資本主義獨占化の過程について、この書の如くこれらの諸點を詳に描出したものあるを知らぬ。又この書の如く包括的なるを知らぬからである。

吾々の『學者』は、從來吾々の眼を餘りに海の彼方にのみ注がしめた。誇張して云ふならば、獨占的資本主義の出現、産業の合理化等々の問題に就いても遠い〱海の彼方のアメリカやドイツの物語であるかの印象をさへ受けないではなかつた。この書は、それらの現象が吾々の現下の問題であり、吾々の直前に如何に廣き範圍に於てうごめきつゝあるかをはつきりと示した。この書は、『特殊國』日本に於ける獨占的資本主義の特殊的展開を明にせんとする力強き努力の跡を示してゐる點に於ても充分に存在の理由を有する。この點に於て著者は、先驅者として誇る充分なる權利を有するであらう。

ブック・レヴューの慣例に從つて、次に一寸ばかり惡口をつけ加へて見る。

この書の序説は餘りに簡單に過ぎた。この

序說はこの書の最も難解なる分部に屬する。それは著者の餘りに簡單なる叙述から來る。この說明を以てしては、吾々は『獨占資本主義組織』の意味と『先進國に於ける獨占資本義組織の發展過程の概觀』と更に『本邦金融資本の發展過程』とを充分に明かにすることは出來ない。無論私は著者の言に從つてその別、著『工業政策』を考慮に入れつゝものを言つてゐるのであるが。

更に吾々は、こゝに於て國家が演ずる役割に就いて明瞭なる具體的なる描寫を見る事を得ないのを遺憾とする。無論著者は序說で國家の金融資本の時代に於て、又その成立の過程に於てなすところの一般的役割に就いて說く。だがそこに於ても叙述は何故にかピンと來ない。例ば、そこでは國家は或る時は『大資本團の寡頭支配』の『强壓的指導』の下にあるものとして、又はその寡頭支配の確立に協力するものゝ如く現はれる。又他の時には、階級對立の上に超然として全民衆の利益を代表することを得、以つて大資本團の寡頭支配に對立するものであるかの如くでもある。私は著者のこの問題に對する見解も、本書の全篇を通じて具體的に現れ來ることを望みたい。否なそれなくしては、吾々は寡頭支配の理解に本質的なる一點を見失ふ事となり了るであらう。[illegible]

最後に今一つ私の希望を述べることが許されるならば、この事を附加しておかう。即ち著者は本書で各重要産業部門に於ける企業集中、獨占の確立への過程を極めてあざやかに述べた。だがその上に著者が、各産業部門間に於ける獨占的企業を更に結合して、その上に君臨する銀行が如何なる方法を以て、如何なる姿に於て金融寡頭支配を確立しつゝあるかを、吾國の事實についてもつとはつきりさせてくれたとしたならば、その喜びは筆者のそれのみではあるまい。

レーニンはこう云つてゐる『生産の集積、それから發生する獨占、銀行と産業との融合及び合成——これが金融資本の發生史とこの概念の内容を特徴づけるものである』と。銀行資本が如何にして如何なる企業を一大結合の中に包括し、支配しつゝあるか？　これを吾國について如實に描き出す事をこそ『日本金融資本論』の名に最もふさはしき仕事であるであらう。私は著者がこの事をなさなかつたといふのではない。著者の此の方向への努力を認むるが故にこそ、その完成を希望するのである。

希望や註文の申出は誰にでも出來る。だがどんな小さな仕事であつてもその完成は決し

新刊紹介

日本思想論（永井亨著）　現代日本の思想問題を以て、明治時代に統一された國家思想と勃興しつゝある社會思想との衝突に因由するものなりとする見地から、思想線上の現代日本を導る通俗的に叙述せんとせるもの。蓋し時宜を得た書物である。（四六版四一七頁、定價一・二〇、東京牛込早稻田大學出版部）

田園・工場・仕事場（室伏高信譯）「トルストイの主張せる所を生活した」クロポトキンの思想を、最も代表的にあらはせる著書の一つの飜譯である。（四六版三一三頁、定價一・六〇、東京京橋山下町一・田舍社）

土の藝術と土の生活（犬田卯著）　既に發表せられた評論隨筆の選集で、農民文藝論の素材が集められてある。（四六版三一〇頁、定價一・〇〇、東京市外杉並町成宗一一三・農民文學社）

科學方法論（戸坂潤著）　學の方法を中樞とせる學問理論、方法概念の分析を總論とし、學問の分類、科學論、科學的世界などを特殊理論として取扱ふて居る。（四六版二七三頁、定價一・五〇、東京神田南神保町一六、岩波書店）

男ごころ（堀口大學著）　大正八年以降の詠歌の選集である。すでにして言葉こころを傳へれば抱きたるのみ口すひしのみ。（三六版一九六頁、定價一・五〇、東京麹町一の五第一書房）

て容易ではない。況んやこの書の企圖の如きに於てをや。私は遙に著者の先驅者としての苦心と努力とに對して敬意を送りつゝ擱筆する。

小泉信三著
マルクシズムとボルシエギズム

永井　亨

經濟學者としての社會思想家としての小泉信三氏は世上あまりに有名の人である。こゝに氏の著書を紹介すべく。

しかも猶ほ本書を紹介する所以のものには理由がある。我國の今日に何人も知らんと欲する問題はロシアのボルシエヴイキ革命とそれが産んだ勞農ロシアの現狀と將來とであらう。殊にその國の農民問題であらう。支那の國民革命とその背後に横たはる共産黨の眞相であらう。その事よりも現に我國に發生しつゝある共産黨祕密結社の思潮たるボルシエヴイズムと、今や我國の思想界を風靡しつゝあるマルキズムとに對する「理解と批評」とであらう。同じ共産主義の名の下に呼ばれるボルシエヴイズムとマルクシズムの異同であらう。かやうな問題についての最近數年間における論文をとりまとめたのが本書である。「マルクスに對する著者の批評的態度」はこの書によつてよく察知し得られる。

更に私が特に本書を推薦したい所以のものがある。何人も一たびマルクスを研究すれば必ずや逢着するであらうところの關門を通過せずしてはマルクスが判らず、何人も一たびマルクシズムを思索すれば必ずや念頭に浮ぶであらうところの疑問を解かずしてはマルクシズムが明かにされない。そこで動もすれば一歩も門外に出で得ずして宗教の如くそれを信じ、或は問題に觸れ得ずして異端の如くそれを排する。この關門を開かんために、この難關を解かんために、簡明な解說が與へられ、公正な批判が下されてゐるのが本書である。文獻の豐富と論理の透徹とは著者の一切の述作を通じて人の知るところであらう。それ故に思想問題の眞相を知らんとする人々はこの書を一讀する必要がある。苟も今日の思想問題がマルクシズムを中心に描かれてゐるといふ以上。

こゝには本書の内容に亙つて一々紹介批評を試みる紙面の餘地がない。特に讀者の注意を惹きたいと思ふ二三の點を掲げる。

先づ著者はマルクシズムとボルシエヴイズ

加賀の千代女の生涯(吉松祐一著)　朝顏に釣瓶とられて貰ひ水、起きて見つ寢て見つ蚊帳の廣さかな、蜻蛉つり今日は何處まで行つたやら、などの絶唱をものせる千代尼の人及び句に就て語れるもの(四六版二四六頁、定價一二〇、東京神田西小川町二の三、大同館)

大地讃頌(薄田泣菫著)　前著「艸木蟲魚」の姉妹篇である、季節艸木禽獸蟲魚などに對する愛と敏感とが、香ゆかしく如實に描かれて居る。(四六版四一六頁、定價二・〇〇、東京芝二本榎西町二、創元社)

ロシヤ社會史(外村史郎譯)　ブハーリンの Azbuka Kommunizms と並稱さるる名著ポクローフスキーの「ロシヤ史概要」の、第四版による譯である。茲にはブルジョア革命までの分が譯出されて居る。(四六版二七六頁、定價一・〇〇、東京牛込神樂町二の一一、叢文閣)

チエルヌイシエフスキイ(藏原惟人譯)　プレハーノフの大著第一部の譯である。卽ち十九世紀のロシヤの生める最大思想家の一人の、哲學觀歷史觀文學觀の的確な紹介を茲に見ることができる。(四六版四一六、頁定價一・五〇、叢文閣)

獨逸文學研究1(東京帝大獨逸文學會編)　「獨逸文學」の後身である、成瀨氏の「シュトゥルム・ウント・ドラングの宗教觀」其他身のはいつた文獻が收められて居る。(菊大版、一四四頁、定價一、〇〇、第一書房)

山水大觀　(評論隨筆家協會編)　日本の山水に關する諸家の隨筆三十餘篇を收む、

ムとについて次の如くいふ、マルクシストのいはゆる歷史的必然にはしば／＼形而上學的の意味が含まれ(八頁)資本主義の發展が必然的に社會主義に導くといふのは一種の形而上學的樂天觀に過ぎず(一二頁及一八六頁)社會主義必至論には戰略的の意味が含まれ、それが現時の思想界におけるマルクシズムの勢力の一の祕密をなしてゐる(一三頁)と、又いふ、革命は資本主義進化の必至的結果ではなく、革命は偶然に起るといふゾムバルト斷案は至言であるが(三六頁)元來マルクシズムがブランキズムと異なるところは革命の成否を資本主義發達の程度いかゞにかゝらしめた點にあるのだから、そのいかゞに拘らず社會主義の實現を可能だとするボルシエヴイズムはマルクシズムよりブランキズムへの復歸である(五一頁)と更に著者はいふ、かく社會主義革命のためには、資本主義の成熟を要せずとするのはブハリンでありラデツクであり(八五頁)プロレタリヤの獨裁がボルシエヴイキの最高政治原理となつたのもそこにあり(五二頁)それと兩立し得る限り、それを危くせぬ限りの程度に資本主義を復活せしむるのが勞農政府當局者の見解らしく(九三頁)嘗てレニンは稱してプロレタリヤデモクラシーといつたが(六九頁)それはデモクラシーよりも更に進步した最終の國家形態ではなくして專制政體よりデモクラシーへの途上における一階段に過ぎぬ(九九頁)と。

右の如く說く著者は勞農ロシアの農民問題に及んでいふ、久しく村落共產體の內に棲息したロシア農民は社會主義說に對する感受性を有つてゐた(一二〇頁)、地主の土地に關する限りに於ては社會主義的であり自己の土地に關する限りに於ては私有主義的であつた(同上)、そこに農民の利害と共產主義との衝突が起つた(一二三頁)、農民の私有主義が事實多くの點に於て共產主義立法を無效ならしめた(一三四頁)と。私は附け加へていふ、久しく封建傳統の下に階級意識を培つた我國の農民の間には共產主義的思想も運動も受け入れられつゝあると。著者もいふ、農民の關係する限りに於てロシア革命が成就し得たと確實に斷言し得るのは封建的諸制度の遺物を一掃して土地に對する農民の權利を確保したとであり、而して實質的に此利益に浴するものは農民中の比較的富者(中以上)たる分子であつた(一三八頁)と。次に著者は勞農政府の新經濟政策や新々經濟政策を說いていふ、新政策の採用以來生產力の增進が農民間に於ける階級的分化を伴ひ(一三四頁)新々政策の採用以來個人の營利的活動に對する制禁の緩和が富

販行のシイズンにふさはしきもの。(四六版三三〇頁、定價一・八〇、東京牛込矢來町・新潮社)

藝術と精神分析(安田德太郎譯)　フロイドの「レオナルド・ダ・キンチの小兒期回想」と「ヰルヘルム・エンセン作グラヂワに於ける妄想と夢」の翻譯である。(四六版二五〇頁、定價一・八〇、東京本郷湯島切通坂町一九・ロゴス書院)

重農派經濟學の人々(山口正太郎)　アダム・スミスの經濟學に基礎を與へたフランス重農學派諸人物の傳記と思想とを連絡的に述べたもの。(四六版二四二頁、定價一・八〇・ロゴス書院)

人間の本質(木村德藏著)　自然科學者としての故著者の人生觀を明かに吐露せる數章節を收む、行文平易にして啓蒙的である。(四六版四三一頁定價二・五〇、東京神北神田保町二・新生堂)

東西素描大成第八巻　安田靫彦小杉未醒和田三造山本鼎四氏の編輯する所、本卷は人體篇でドラクロア、コロー、ミレー、ゴーガン、ロダン、ルノアール、ピカソ其他最高畫壇の人々都合二十名の個性の香高き得難き逸品を收めてゐる。製版亦優美である。(菊倍版二十葉非賣豫約品、東京市牛込喜久井町三四アトリエ社)

香道(杉本文太郎著)　よき意味に於ての國粹としての香道を說く。珍らしい本である。(菊版四〇四頁、定價四・〇〇、東京市牛込市ケ谷田町一の一六・昭文堂)

農の擡頭を助長する傾向を伴つたが（一四〇頁）富農と中農との間の利害の衝突よりも農民と都市プロレタリアとの間に相容れざる利害の衝突があり（一四一頁）、遂にはソヴエト制とブルジョアデモクラシーとの差異は徹頭徹尾にな るであらう（一八七頁）と。私もいふ無國家、無階級の共產社會は遂にユートピアに終はるであらうと。

著者は最近の見聞に基づき支那共產黨運動の眞相を說くこと詳かである。マルクスの公式に從へば支那に社會主義實現の條件が具備してゐないことは勿論であるが（一八五頁）革命後の支那が先づ資本主義の段階を經過すべきである以上、多年の暴政の下に鍛錬せられたる支那人の不撓不屈の營利心を新しき支那の建設に利用せぬといふとは確かに賢明の策ではない（一八八頁）と。「マルクス・エンゲルス傳の發達」はマルクス文獻を敎へ、「產業豫備軍と農民の都市流入」はマルクスの人口論を評し日本の人口問題に資すると大である。

終りに私は著者と共に讀者の注意を喚ぶべく「ゾムバルトのプロレタリヤ社會主義」について一言する、往年マルクス心醉者たりし彼をしてマルクシズムの虛妄無價値を高唱しドイツ精神の超越を叫ばしむるに至つたのは研究の進步ではなく亞流マルクシストの態度によつて捲き起されたゾムバルドの裡の感情の嵐ともいふべきものであるといふことを。（二〇二頁、二一〇頁、二二七頁）。（昭和四、六・三〇）

新明正道著
社會學

松本潤一郎

「形式社會學論」「獨逸社會學」「群集社會學」「社會學」と矢繼早に力作を發表する新明氏の此頃の活躍ぶりは目醒しいものがある。一貫した氏の態度は形式社會學的硏究を核心とし其上從來の一般社會學の問題を併せ受け入れることである。これを氏は前以て「形式社會學論」に於て暗示して居たが、「社會學」に至つてその體系を社會論に對する社會現象論の二大部門に區分することによつて、問題を明瞭ならしめて居る。新著「社會學」は實にこの社會論、社會現象論の二つを含む社會學內容論（卽ち本論）に對して、更に序論として社會學論を加へて成立つ。

先づ社會學論に就て云ふと、それは社會學の體系論、組織論、方法論等を含む。新明氏は形式社會學に興味を有する者であるが、多くの形式社會學者の如く、從來の一般社會學

東都行脚（川勝政太郎著）（菊半截二九四頁、定價二・〇〇、京都東洞院二條北入スズカケ出版部）

農業託兒所の經營（倉橋惣三、紳田工著）（四六版七四頁、定價・二〇、東京神田通神保町九・富山房）

國際無產青年運動の現勢と諸問題（山野一郎譯）（四六版二五二頁、定價一・〇〇、東京神田錦町一の一二、上野書店）

レーニン主義敎育の任務と方法（宇津木等譯）（四六版一三一頁、定價六〇、上野書店）

抹殺詩論（中村漁波林著）（四六版五五頁定價五〇、東京市外雜司ヶ谷四一二、東輪社）

胃癌征服體驗記（笈田敏野著）（四六版八五頁、定價一・八〇、神戶市北長狹通一の一八九、永田文進堂）

死を前にして（平方逵雄著）（四六版一五五頁、定價一・五〇、東京市外松澤村赤堤二五・曉聲社）

大靈療法禪靈術（釋靈海著）（菊版二八二頁定價五・〇〇、大靈閣）

佛蘭西文學硏究第六輯（東京帝大佛文學硏究室編）（菊版二七二頁、定價二・〇〇、東京神田小川町三〇・白水社）

民謠の今と昔（柳田國男著）（四六版一四六頁、定價一・〇〇、神田南神保町一四・地平社）

歌麿（野口米次郎譯著）一八九一年出版のゴンクール著「靑樓畫家歌麿」の抄譯である。原著に於ては非常な興味を以て歌麿の藝術が論じられて居るも[illegible]事實浮世繪は作品を

を蛇蝎視することをしない。此二つの傾向は對立するものではあつても、前者の立場に於て後者の問題を考察する觀點によつて、一般社會學的問題は再び社會學體系中に處を得べしとする。かくて「基體の社會學」と「社會現象の社會學」とを相關聯せしめて組織するのが著者の主張の要點である。別言すれば社會現象の認識原理として「社會基體」の價値を認め、「社會基體」を中心題目とする社會學の附帶的部門として社會現象——從來の一般社會學の問題——を採取せんとするのである。私自身曾て形式社會學的純粹社會學と之に標榜せる歴川或は微驗社會學を以て社會學の領域としたが、新明氏は斯學の範圍について大體斯樣な見解に一致さるゝやうである。

著者は社會論及び現象論に於て、夫々本質論、構造論、法則論を試みる。社會の本質論にては心的相互作用說、結合說等を別にして關係說に出てゝ居る。ある意味的關聯に於て社會の本質を求むるといふのである。又社會現象本質論に就ては、それを單に社會の具象界に於ける反映事實であると考へ、タルドの模倣說も、デュルケムの拘束說も不充分であるとして排除されてある。これは社會の抽象研究を非座に据える著者當然の態度であらう。

私は著者が社會と社會現象といふ社會學に於ける二つの中心事實を採つて體系を考案することに關して著しい興味を覺えさせられた。然し社會と社會現象とは存在に對する過程の意味に於て、いづれも形式社會學的純粹社會學の問題たりえ、又同時に二つのものは一般社會學的問題たりうる其歴史的形態に於て吾等の研究に關聯して來るのである。兩者は基體と具象的機能の意味に於て對立するといふよりは概念的にも又具象的にも對立し得る二原理であると思はれる。而して多くの社會學方法論の混亂は、此二原理の對立に依繫するよりも、寧ろそれらの抽象性と具體性との混同に於て成立ち來るやうに思はれる。

然しかゝる感想的批評は、本書がよく最近時の社會學の根本問題を吟味し、取捨し、體系化せる點に於て、我國社會學界の一大收獲であるといふ大きな價値を沒するものでは無い。新生面を開いた此體系に對して、私は好學の士の注意を大に喚起したいと願つて居る。著者も序文に述べるやうに、本書は今や或は全く面目を一新するかも知れない社會學の試みに對して重要な標識を成すものであらうからである。

いては完全でない——本書にこれが採錄されてないのは惜しい。それにもかゝはらず私たちは本書に於てその挿繪のもつ纖細柔軟な描線と滲かす如き壓積的粘柔性とに、藝術的優艷美哀調美を存分滿足せしむることができる。譯者の註は甚だ便利である。(四六倍版一七二頁挿繪六六圖、定價五・〇〇、東京麴町町一の五第一書房)

世界經濟年報 4(經濟批判會譯) 本輯に於ては一九二八年七月一日より一九二九年一月十五日迄の列國經濟及經濟政策が取扱はれ、特殊題目としては、反サヴエイト戰線統一を目途するものとしての賠償問題、及び反サヴエート戰線の前哨としての新ルーマニア問題などが取扱はれて居る。資本主義經濟の歪めるテンポを知るに甚だ便益である。(四六版三六〇頁、定價一・〇〇、東京牛込神樂町二の一一、叢文閣)

最近政治外交史續巻(坪井九馬三著) 日清戰後に於ける三國同盟の支那分割策より歐洲大戰前までに於ける列强の政治外交を說いて餘蘊ない。誰人も一本を備へて然るべきもの。(菊版九三四頁、定價五・〇〇、東京神田通神保町九、富山房)

ラスプーチン(ロシア問題研究所譯纂) ロシア大革命の裏面史譚第三篇である、ロマノフ朝の沒落に直接大きな機緣を與へた性慾的神秘的政治的な存在ラスプーチンの全幅をうつして興味深い。(四六版四五六頁、定價三・〇〇、東京麴町內幸町一の五、ロシア問題研究所)

銀座を見捨てる

武林無想庵

十三年ぶりでたづねて來てくれた大平野虹の語るところによると、かつて大阪で開かれたさる文士達の會合の席上、薄田泣菫の無想庵評に、無想庵といふ男は、近代人としての凡ゆる缺陷を一身にしよつて立つた人間だとあつたさうです。

それで思ひ出されるのがこの四月の改造十週年號です。その中で、千葉龜雄さんは無想庵を評して、やはり世紀末人の典型だと書かれてゐました。符節を合すやうだとはこのことではありませんか？

その無想庵が日本の置土産に銀座のわる口を書かうといふのです。鏡に向つて自分の顏の表現を罵るやうなものでせう。何となれば銀座は近代生活の凡ゆる缺陷をあつめたやうな市街だからです。世紀末的生活の國際典型に相違ないからです。

大根河岸の可川を出て、三人は銀座へ出ました。三人とは秋田忠義、辻潤、さうしてかく申す無想庵の三人です。

まづヤポンといふ家へはいりました。入口には Japon とありました。僕はそいつをヤポンと讀むのが不思議でたまりませんでした。これが若しフランス語だとしたら、ジャポンと讀まなければなりません。若し獨乙語だとしたら、Japan と書かなければなりません。然るにそいつをどこまでも Japon と書いて、さうしてどこまでもヤポンと讀まうとするのです。して見るとこれは決してフランス語でもなく、又決して獨乙語でもないものと斷定しなければなりません。僕は英獨佛の外にはほんの十ばかり露西亞語を知つてるだけの人間ですから、或はそれ以外の國語で日本のことをヤポンと稱するところがあるかも知れません。又ヤポンといふのは或は日本のことではないのかも知れません。さうしてそれが日本を意味する言葉でもなく、

それが英佛獨露語でもないとすると、僕の貧弱な頭にとつては、さア全く何が何だかわからないといふことに歸着します。

かうして、地震後の銀座に於ける僕の第一印象は、まづこの何が何だかサッパリ見當がつかないといふところからはじめられました。

三人は二階へ上りました。大きな家ではありませんでしたが、とても立派なムーブルです。フランス語で申すと、どうしてもリユックスとでも云はなければならないほど、それほど据り心地のいゝ軟らかな腰掛です。

まさか本物ではありますまいが、いかにもそれが本物であるかの如く思はるゝアカジユウの食卓の上には、メニユの紙が立つてゐました。さうしてどこの華族樣の御令孃がどなたさまの園遊會からのかへるさお立よりになつたかと疑はれる若く美しくスラリと丈の高いおん方が、やんごとなくわれ〳〵の腰かけたそばへお近より遊ばされました。

――何を召上ります？　と、その御令孃は質問されました。

僕の心は轉倒しました。さうして正に大名汁粉で庭先へまはれと一喝された町人よろしくといふ心持になりました。

で、恐る〳〵目の前のメニユをさしのぞくと、それが又日本語といふものが一字も書いてなくて、悉く英語であつたには全くビックリして了ひました。

楚の項羽は垓下の帳中で目がさめて、九星山から鷄頭山へかけて、張子房の吹く洞簫と共に、颯々たる金風に送られて來る楚歌をきいて、漢すでに楚を得たるかと云つたさうですが、僕は日米いまだ砲火を交へないうちに、米すでに日を得たるかと思ひました。

――君は何をのむ？　と、辻潤はヰイタンを注文しながら、僕の方へふりむきました。

――さうさなア……キヤツフエがのみたいネ。

――さうかい……コーヒーださうだ。と、辻潤は僕の代りに御令孃に答へてくれました。

――コーヒーはムいません。と、御令孃は申されました。

僕は呆れて目を見張りました。同時に自分の耳を疑ひました。キヤフエにキヤフエがない？……巴里の田舍者は再びビックリして了ひました。

――かういふ要領の家でキヤフエがないとは考へられないネ。どういふわけだらう？

――アメリキヤン・バアだからだらう。と、辻潤は無造作に説明しました。

云はれて見ると、その通りでした。ヤボンはキヤフエではな

かつたのでした。さうしてそれがバアだつたのです。さうして巴里のアメリカン・バアに往々上等なキャッフエがあるのは、それは巴里人が田舎者であるがために、又シミつたれであるがために、特にたゞそなへつけて置くのであつて、アメリカン・バアにキャフエの如き田舎くさい飲物のない方が、實は本格的にそれだといふことが、恰も夢のさめたやうに僕の心に會得がゆきました。實際、旅はすべきものです。テンポのはやい日本へは歸つて見るべきものです。

どういふわけだか、一杯機嫌の辻潤は、秋田忠義の聲色をつかつて、電話で矢部周をよびよせました。紹介されて見ると、それが僕の平生尊敬して措かない故高畠素之氏の高弟だつたのです。

そこで劇務にある秋田忠義は後事を矢部周に托して春秋社へかへりました。

新しい三人はヤポンを出ました。と、矢部周はわれ／＼を加六へ案内しました。

僕は久しぶりではじめて故郷へ歸つたやうな氣がしました。ところが、さう思つたのも束の間でした。

なるほど、昔山本露葉、西田長左衛門等と、よく一緒にのみに來た時の要領だけは、想ひ出されましたけれど、丁度、向ふ側に引越した後の天金や、改築した後の橋善と同樣、質實とか黒光りとか或は粋を木地でゆくとか云つた心持は、何となく消滅して了つてゐて、どうしても大正期に發生した所謂成金趣味の横溢してゐるところが、その久しぶりで歸つた筈の故郷に對して、少なからず浦島太郎の暗然さを思はせられたものです。

地震によつて江戸文明は完全に滅びて了つたのです。それゆゑに多少なりとも江戸文明の教養をもつたものには、完全に故郷がなくなつて了つたといふわけです。

加六を出ると、三人はやがて尾張町の交叉點を横ぎりました。

僕としては甚だ思ひ出の多い交叉點です。中學時代に五年間日々二度づゝ通つたところだからです。その時分には歌舞伎座の方向へむかつて、左り角には中央新聞社がありました。右角には毎日新聞社がありました。又後ろ左の角には朝野新聞社がありました。さうして今交番の立つてゐるところの角には、堺緞通屋がありました。その後、朝野新聞社は服部の時計店となり、中央新聞社は山崎洋服店となり、毎日新聞社はカフエ・ライオンとなつたものです。

尊王攘夷が隊長の手によつて、それと矛盾した居留地の延長なる銀座通り——僕の子供の時には煉瓦を煉瓦々々と呼んだものです。蓋し洋式の煉瓦といふものですべてを建造したところ

いふ意味だつたでせう――を、まづそのプロパガンダのために、その主要區域を新聞社で占めさせ、さうしてそのプロパガンダが民衆の一部に行きわたると、つゞいて勃興したブルジョアジイの象徴具、即ち時計とか洋服とか洋食とかいふものが、それに代つて具體化したといふわけだつたものでせう。

――ヤア。

――ヤア。

と、交番のうしろあたりで、辻潤と忽ち邂逅したにぎやかな青年二人、ロシア語の一人稱のやうな、ドイツ語の肯定詞のやうな聲をかはしあはすと、そのまゝわれ〳〵の一行と一緒になりました。

これも秋田忠義同様劇職にある矢部周は潮時を見すまして、辻潤無想庵といふ天下のボヘミアンどもを新來の二人の青年達に引渡して立去りました。

青年の一人は蜀山人の孫か曾孫にあたるさうです。さうしてフランス語のできる人です。さうして江の島の岩屋觀音を逆様にしてチャンと立派に彫りつけてあつた生殖器をそのまゝに美事な寫眞にうつした人です。さうして十年の苦心によつてゴンクールの「歌麿」を翻譯した人でもあるのです。僕はこの青年から今日流行の「斷然」といふ日本語を覺えさせられました。それほどこの青年は「斷然」を濫發してゐました。

今一人の青年は喧嘩ッぱやい畫家ださうですが、われ〳〵に會つた時はたゞニコ〳〵してゐました。

四人はタイガアへはいりました。

ヤボン、タイガア、ライオン、ナナ、ニューヨーク、コロンバン、モナミイ等々、なんといふ羅馬字と外國熱のさかんになつたことでせう？　今日の青年はどうしてこんなにまで外國の名前ばかりがすきになつて了つたものでせう？

こゝにも例のお孃様が隊をなして、建物や内部裝飾とは一向に調和しない服裝のお客さん達に、甚だ媚かしくセルギスしてゐました。さうしてなぜ僕がかの女等を目してお孃様よばゝりするかといふと、僕の目から見たかの女等は、どうしても十數年以前に榮えたところの、かの伊井河合全盛期の新派によつて演出された華族の令孃そつくりに思はれてならなかつたからなのです。さうしてその想ひ出は僕にとつては決して愉快なものではないのです。

爰まで書くと、僕はこの上書きつゞけることがばか〳〵しくなりました。丁度鏡を見つめてゐると、自分の顔が見るにたへなくなつたやうなものでせう。

實際銀座を歩いてゐると、生きてゐることがばか〳〵しくなり

ます。從つて酒でものんでそのばか〳〵しさを忘れたくなります。さうした念の人一倍強い辻潤は果してわづかばかりの酒に醉つぱらつて來ました。さうして若しそこに不幸にして再び無想庵が大きらひな永井荷風でもゐあはしたら、かれは又々大きな聲を出して、

——君は名古屋だらう！　と罵倒したかも知れません。

東京は勿論アメリカの殖民地ではありませんけれど、少くとも日本の殖民地にはたしかになつて了つたやうです。小さんの云ひ草ではないけれど、越後の國から出て來たから越後屋で、白木の國から出て來たから白木屋です。さうしてだん〳〵田舍者ばかりが勃興する天下の形勢になつて行くと共に、辻潤や水島爾保布の如き寺門靜軒の後裔がアイヌ人種に退化して行くこともまた止むを得ない理の當然かもわかりません。

陶然として四人がタイガアを出ると、銀座は燦然と町一杯の電燈にかゞやきはじめてゐました。こんなにフンダンに電力を浪費して吝しまない都會を僕はまだ見たことがありません。それだからと云つて、銀座の日沒後は世界一に美しいといふわけではありません。何となれば大抵の場合、分量の多すぎることは、昔から過ぎたるは及ばざるが如しと云ひ傳へてゐるやうに、むしろ不快を與へる方がしばしばだからです。もちろんこのフンダンの電燈から僕は多大の不快を與へられたわけです。

電燈に鏤められた銀座には何等の豐麗さが見出されません。さうしてたゞ物ほしさうな羨みと、たゞ〳〵それに伴ふ目まぐろしさとがあるばかりです。要するに獼猴の冠です。恐らく一般の民衆にとつては棘の冠ではありませうけれど。

さう、この一ヶ月來僕の日本で受けた印象によると、今日の東京には、獼猴と民衆とが住んでゐます。さうして共に等しく冠をかぶつてゐます。さうしてその冠が今云つた王冠と棘のそれなのです。

丸の内はその王冠の一つです。銀座はその王冠の他の一つです。さうしてその他の市街に錯雜した、見苦しい、安價な、へロ〳〵な、とてもひどく過渡期的な、まア、そこらで我慢して置けと、蟲のいゝ神樣達に木で鼻をくゝられたやうな、無數の民衆の住む建物は、もちろんそれ等が棘の冠でなくて他の何物でありませう？

だから民衆の生活は動くたびに頭が痛いのです。頭が痛いからつとめて麻醉に耽けるのです。さうして麻醉に耽けるためには、やつぱり銀ブラが必要となつて來るのです。さうして民衆が銀ブラ的に傾けば傾くほど、獼猴はいよ〳〵手を打つて喜ぶのです。何となれば民衆が定軌を逸すれば逸するに隨つて、

猴の懐はますく肥えるばかりだからです。

地震前のそれに比べると、今日銀座は何となく陰慘の氣に充ちくてゐます。通るほどの人には云ひあはしたやうに絶望的の顏をしてゐます。みんな棄鉢です。みんなデスペラです。みんなどうしたらいゝかわからないと云つたやうな憂色を帶びてゐます。

辻潤著、鳥有叢書上第一編「どうすればいゝのか？」の中にかうした文句がありました。

曰く、

――しかし我々貧乏人にとつてはこの世はまことに恐ろしい地獄である。文明は至極便利重寶なものである――但し「金さへあれば」である。一錢不足しても電車へは乘れず、病氣になつても醫者にはかゝれず、働きたくつても仕事はなし、學問したくても學校には行かれず、結婚をしたくても自由に出來ず、等々と數へ立てれば際限がない。

――諸君、大地震はまた何時來るかも知れないのである。太陽はいつ衝突するかも知れず、ペスト、コレラ、ジフテリヤ、レプロジイの諸黴菌はいつ絶滅するとも見當はつかず、××はいつ××するかも知れないのである。それでなくとも飛行機は墜落するものであり、自動車は顚覆するものである。汽船は沈沒するものである。銀行は破産し、會社は潰れ、牧師はデタラメを教へ、醫者は處方をあやまり、妻君は家出をし、子供は河へ落ち、役所は滅になり、原稿は賣れなくなり、斷髮美人が發砲し、革命家が何時資本主義にならないとも限らないのである。

又曰く、

――大切な時に紙を所持してゐない女、番茶のほうじ方のヘタ糞さ、朝湯のない國、東京に於ける近年の味噌のまづさ、電車の乘降、いつでも眞中のスイてゐること、尻知らず、道路の險惡、蒲燒のダラク、國民の代表者？の醜態、科學と迷信とを同時に兒童に詰込む教育法、人間を取締る人々に馬鹿の多いこと、諸屆の面倒くさゝ加減、異人の外形さへ眞似すれば文化だと心得てゐる阿呆、相變らず愚にもつかない説法つきの大ベラボーの賣藥の廣告を麗々とのせる大新聞、創作と稱する小説の原稿料の一番高いこと、社會主義者の内輪ゲンカ、坊主の國家主義、丸善の本の高いこと、愚にもつかない小説や詩をやたらに書き散らしてやたらに活字にしたがる青年、文學が好きなのか、賣名が好きなのかどつちだかわからぬ文學青年少女、文學と文壇と混同してゐる低能兒、字をサカサにしたり、横にしたり、ワイセツな文字をやたらに羅列さへすればダダイズムだと考へてゐる唐變木、氣が狂はないと天才ではないと考へてゐる天才病患者、成熟した人間の感覺が明日にもすぐさま新しくで

もなるものと妄想してゐる人間、笑ふことを忘れた人間の増加、科學萬能の迷信——その他数へ立てれば際限がない。

狭い國の中で、なぜ君達はそんなに同志打をしたり、血を流し合ひたいのだ。

言々句々血を吐く思ひでつゞられてゐるではありませんか？　さうしてこれが今日の東京です。

いよ／＼書くのがいやになりました。

かうして辻潤の文章をうつしてゐると、これはどうも辻潤にまかして置いた方がよさゝうです。それほど辻潤の文章は今日の銀座を悪口雑言するのに適してゐるやうな氣がします。

その辻潤はわれ／＼を引率して、「アザミ」へはいりました。「アザミ」のかみさんが辻潤をいつも傳法だと思つてゐるらしいのが癪にさはるから、今晩錢をもつてるのを幸ひ、自分の手から勘定を拂ひ、かみさんをビツクリさせてやりたいといふのが、かれのわれ／＼をそこへひツぱつて行つた稚氣でした。

われ／＼がそこへはいると、同時に一人の銀杏がへしに結つた年増が、近眼なのか亂視なのか、まさかまだ老眼でもありますまいが、藝者然たる服装へもつて行つて、三味線を抱へながら、キラリ／＼と眼鏡を光らしつゝ、木彫のやうに無表情な顔してはいつて來ました。それは勿論このあたりに徘徊する門附藝者の一人でした。

辻潤はビールを命ずると、さつそくこの門附をつかまへて、得意満面の歌澤を唸りはじめました。

そこへ門附の女のいかにも生氣のない顔とは正反對な、健康のハチきれんばかりな、小さな眼の可愛らしい、むく／＼と肥つた朝鮮少女が、その白衣を翩翻とさせながら、いきなり辻潤の向つてゐた食卓の上へ、例の文化イカをつきつけて、

——十錢だから、買つて下さい。と朗らかな聲で云ひました。

辻潤はすぐ買つてやりました。

少女はお禮を云つて十錢玉を受けとると、今度はバアのすぐ下の一番奥のテーブルに陣取つてゐた客のそばへ近づいて、同様に又文化イカを突きつけました。

すると、そのお客は勿論イカを買はなかつたばかりでなく、朝鮮語でベラ／＼と何かその少女に云ひました。前後の様子で想像して見ると、どうもあんまりそれが優しい言葉ではなかつたもの丶やうです。

と見てとつた辻潤は、急につゞけてゐた唄をやめて、その少女を招きました。

——君、朝鮮の唄を一つうたつてきかせないか？　そのイカをみんな買つてやるから。と、かれはいかにもその奥のテーブルの客にあてつけがましく云ひました。

——朝鮮の唄うたひませうか？　イカはそんなに買つてくれ

なくてもいゝのです。

――さうか、ぢや、とにかく唄ひたまへ。イカはそれぢやァあのお客に買つてもらつてあげるから。と、辻潤はその客を指しながら云ひました。

少女はそのそばへ突立つてゐたテーブルの一角へ一寸手のひらをあてながら、何等のわだかまりのない、思無邪そのもの、やうな聲をはりあげて、嬉しげに朝鮮の唄をうたひました。

勿論うたの意味はわかりませんでしたけれど、そのコセ〳〵として、小器用な技巧でかためた門附の日本唄など、ちがつて、心の底にある感情をばのこらずぶちまけてしまはないでは措かないと云つたやうな、堂々とした甚だ大陸的な或物が、その細やかな若々しい聲の中を貫いて流れました。

僕等はいゝ心持になりました。さうしてかの女を褒めちぎりました。

ところが、例の奥のテーブルのイカを買はなかつた客は、何と思つたが、半畳を入れて、

――お前の朝鮮語は本當の朝鮮語ぢやない。お前のは南の音だから駄目だ。と、にくにくしく叫びました。

それをきくと、辻潤は忽ちクワツとしたやうに、大聲で、

――南だらうが、北だらうが、大きにお世話だ。そんなシミつたれた語學通をヒケらかすひまで、このイカを買つてやッちやァどうだ？……さァ、買つてやれ……やらねえか？……どうだ？……と呶鳴りました。

室内は險惡になりました。さうして一方で面目を施しながらまた他の一方でしきりと困つて了つてゐたのは朝鮮の少女でした。

が、あまりに居丈高になつた辻潤の見幕に、さすがに怖れをなしたものと見えて、奥のテーブルの客はしぶ〳〵財布をひきづり出して、不承々々文化イカを買ひました。

その日からもう一ケ月はたちました。さうしてその一ケ月間僕はかうした新しい銀座からさん〴〵になやまされました。

幸にして出版書肆の好意によつて希望した仕事を與へられましたら、僕はその仕事の實行に着手すべく、近々のうち三たび日本を去つて、また元の巴里生活へ戻ります。巴里には銀座のやうなところはありません。それほどまだ巴里は殖民地化してはゐないのです。たとへモンマルトルはあつても、モンパルナスはあつても、さういふところに投げすてるべき金も時間も持合はさぬ僕にとつては、それ等の歡樂鄕はないも同然です。さうしてビブリオテーク・ナショナルと、ミユゼ・カルナヴレエと、ケエに連續せる僕の二時間の散歩場、卽ちブキニストをひやかして歩くことゝ、それから愛する妻と愛するイヴォンヌと、それだけさへあれば、僕の人生はそれで飽滿されて了ふのです。

巴里滯在記

小宮豐隆

一九二三、一一、一、

今日はツーサンのお祭なのださうである。みんなそれぞれにお墓詣りをしてから、あとは一日遊ぶのだといふ。外に出て見ると、大抵の商店は店を締めて、商賣を休んでゐる。戰死者の靈を祀るといふ凱旋門のあたりは、非常な人出で、門の上には、蟻の樣に人がたかつてゐる。ボアの通りもぞろぞろ人があるいてゐる。自動車の往來も、いつもよりは遙に頻繁である。

——日本の盂蘭盆會とその精神に於いてひどく似た所のあるこのお祭は、或は東洋から輸入されたものではないか。もつとも日本の盂蘭盆會の樣なお祭は、昔の希臘にもあつた樣である。それが後後までも、ビザンティンか何所かに殘つてゐて、中世紀になつてから基督教の中に採り入れられたのが、このツーサンのお祭であるのかも知れない。然し、若し假にさうであるとしても、その昔の希臘の亡者の爲にするお祭は、一體何處から來たのであるか。あのお祭はたしか春のディオニソスの祭の幾日目かであつたと記憶するが、或は矢つ張りディオニソスそのものと同じ樣に、是も東洋から這入つて

行つたものではないのか。――さういふ事を考へながら、私は人込みの中をよけて、いつもあるくボァの大通と並行した、横の細い小道をあるいてゐた。人と一緒にツーサンらしい氣持に少しもなれないのが、當り前の事ではあるが、妙に淋しかつた。

靑々した芝生の上に、マロニエの黄ばんだ葉が、ところどころに落ち散つてゐる。不斷は綺麗に手入れが屆いて、汚ごれ一つ目に立たない程なのに、今日はお祭で人足も休んでゐるのか、ところどころにさういふ落葉が見うけられる。然しそれが、わざわざさうしてもしたかの樣に、いかにも趣深く散らかつてゐて、それと芝生の色や形との取り合せが、類ひなく美しい。一體こつちの庭園の多くは、凡てに亙つて、あまりに秩序がありすぎる。軍隊式に整頓しすぎてゐる。從つて無秩序の變化と美しさとがない。たまたま今日のマロニエの落葉は、假令微かながらも、その整然たる幾何圖的の秩序を破ぶつて、此所では今までに見た事もない樣な特別の美しさを、私の前に展げて見せてくれたのである。私は難有い氣がした。さうして不圖日本の庭園の事を思ひ出した。

日本の庭園を支配する根本精神の一つは、かういふ秋の自然が我々に示す樣な一種の荒廢味を、人工的に、然しそれが自然のまゝのものとして人に訴へる樣に、表現して見せようとする點にある。それが日本の庭園に於いて、さびと呼ばれるところのものであり、又それが日本の庭園に於いて、無秩序(らしい秩序)に對する愛を、石に對する愛を、苔に對する愛を、乏しい水に對する愛を、黑ずんだ古木に對する愛を、特に呼び醒す原理となるところのものである。是は、西洋の文明若くは二十世紀の文明とは、結局相容れる事の出來ないものであるのかも知れない。然し、少くとも我々の心の中には、いつまでも靑々としてゐる、手入れの屆いた、幾何圖の樣にきちんと形を與へられた芝生の樣なものをも愛しはするが、然も始終さういふものばかりを眺めてゐる事に堪えられない、もつと寛ろいだ、暢び暢びした、さうして特に對象の

生活力を意識しないで濟む心持になつてゐたいといふ様な要求が動いてゐる以上、假令それが西洋の文明若くは二十世紀の文明とは相容れる事の出來ない性質のものであるとしても、我々は一面に於て我々の憧れを、日本の庭園に於けるさびやわびの世界の上に懸ける事を、決して過める事が出來ないのである。——

歸りの途で、プラターヌの葉か何かが二三枚、私の肩の上に散りかゝつた。それは、肩から往來の上に落ちて、そこで、からからといふ様な、からびた、輕い、然しかなりはつきりした音を立てた。——私は此所でも亦微かに「日本」を經驗した。

夜、もう一度凱旋門のそばへ行つて見る。晝間よりも、もつとひどい雜沓である。さうしてみんなが門の下を通り拔けてゐる。巡査が大勢方々に立つて、群集を整理する。群集は、凱旋門を中心に大きな圓を畫いて、門を潜ぐつて行く者が形づくるその圓の半徑を、シヤンゼリゼー口からグラシザルメーロへと拔けて行くのである。門の下には、人間の脊よりも高い、鐵の丸柱が二本、向き合つて立つてゐる。柱の頂には大きな燈明皿の様な恰好の柱頭がくつゝいてゐて、そこから、多分瓦斯の、紫がかつた青い色の火が、音もなく燃え上がつてゐる。是が戰死者の靈に捧げられた、お燈明なのであらう。群集はそのお燈明を仰いでは、格別の表情もなしに、さつさと門を向うへ拔けて行く。

一九二三、一一、二、

ルーヴルへ行く。今日はドラクロァだけを見て廻る事にする。——

ヴェルフリンは伊太利文藝復興期の繪畫に描き出された人物の、顏面乃至肢體の表情を、"grosse Gebaerde"なる名に

於いて呼んでゐる。ラテン民族にあつては、内面の感動とそれの外部への表出との關係が、北方のゲルマン民族に於けるよりも、遙に親密であり活々として居り且つ自由である。從つて、ゲルマン民族にとつてラテン民族の表情は、ともすると劇しすぎ大きすぎて、十分に理解出來ない場合もある。そのラテン民族に特有な、劇しい大きい表情を、善惡批判の意味なしに、客觀的に命名しようとするものが、このグローセ・ゲベルデなる言葉である。ドラクロアの畫を見てゐると、特に『シオの殺戮』だの『千八百三十年七月二十八日』だの『十字軍のコンスタンティノープル入り』だの『サルダナパールの死』だの、ああいつた大がかりな畫を見てゐると、勿論もつと廣い意味ででではあるが、まづ第一に、このグローセ・ゲベルデといふ言葉を思ひ出す。さうしてドラクロアは、伊太利文藝復興期の繪畫から動き出たこの方面の傳統の、最後の繼承者ではなかつたのかといふ氣がして來る。

無論ドラクロアの畫の中には、殊にもつと小さな形の畫の中には、いろんな點で、後に來る者を豫言するものが——セザンヌやルノアールが崇拜に近い愛情をもつてドラクロアに對したのも、決して無理ではないと思はせるものが、多分に含まれてゐる。その意味ではドラクロアは、幕を閉ぢる人ではなくて、正に幕を開ける人である。然しミケランジエロで高潮しヴエロネーゼやティントレットで横溢しルーベンスやグレコで渦巻いた、壓潰的な英雄的な動的形象の世界は、そのままドラクロアに流れ込み、ドラクロアに於いて再びその表現を見出しはしたけれども、それ以後は杳としてその消息を斷つて了つてゐるのである。——是は、一面から言へば、ドラクロア以後ドラクロアほどの劇しい大きい情熱を持つた畫家が、竟に出現する事がなかつたからだとも言へない事ではないが、然し、一面から言へば、假令さういふ情熱を持つた畫家が出現したとしても、ドラクロア以後の畫界の趨勢として、その情熱は、ドラクロアの樣にではなく、もつと日常生活に近い、平民的な、現實に卽した形象を通してのみ表現される樣になつたからである。その意味でドラクロアは、新と舊とを劃する。際どい一線の上に立つてゐた人である、と言つても差支ない樣に思はれる。換言すればドラクロアは、

一方では幕を閉ぢる役目を勤め、一方では幕を開ける役目を勤める人として、歐羅巴の畫壇に存在したのである。

ドラクロアは、アングルをその盟主とするクラシック派に對抗する、ロマンティック派の頭目だと言はれる。歴史的な英雄的な動的形象の世界を表現したドラクロアは、ヸクトル・ユーゴーと同じ樣な意味で、正にロマンティシズムの頭目であると言つて可いには違ひない。然し私は不思議に人々と同じ樣に、ドラクロアのロマンティシズムのかういふ現はれを、ドラクロアの畫の價値として感じる事が出來ないのである。

凡そ南方ラテン民族のグローセ・ゲベルデは、北方ゲルマン民族の我々には十分に理解する事が出來ないといふヴエルフリンの言葉が、動かせない事實であるとすると、それは我々日本人にとつては、一層理解を絶する部分もあり得る表情である筈である。從つて日本人としての私が、ドラクロアのロマンティシズムの一つの現はれである、ドラクロアのグローセ・ゲベルデに價値を感じる事が出來ないといふ事は、畢竟私がそのグローセ・ゲベルデを十分に理解する事が出來なかつたといふ事を、告白するものであるに外ならないのかも知れない。然し私には、さういふ事を勘定に入れて尚、ドラクロアのこの方面のロマンティシズムには、張り切つた現實性が——もつと適切に言へば、奔放する幻想を裏づけてその幻想を十分に實なるものにする現實性が、ともすると幻想の疾驅に取り殘され、描き出された形象の厚みにムラが出來る爲めに、その幻想の世界に一應は感入する事は出來ても、竟に作者の幻想とともに仕舞までは動き徹す事が出來ない樣に感じられてならないのである。この傾向は『千八百三十年七月二十八日』に於て最も著しい。『サルダナパールの死』にあつても似た樣なものである。——是は果して、私一人の感じにしか止まらないものなのだらうか。

ドラクロアは動的な魂を持つた畫家である。ドラクロアのかいた畫は、どういふ靜的な對象を取り扱つてゐても、必ず動的に見える。それは、その動的な魂が、言はゞ亂舞するリヅムとなつて、畫家の外に搖らぎ出るからである。然もドラクロアは、感興が動き始めると、幾日もぶつ通しに、不眠不休飲まず食はず、その制作を續ける事もあつたほどの、制作

に對する情熱に燃えてゐた畫家であつた。然し恰もかういふ情熱的な動的な魂こそ、厭潰的な英雄的な動的形象の世界の表現を切望する魂であるとともに、一方では、その厭潰的な英雄的な動的形象の世界の表現に、十分の現實性を與へ悉す事に堪えられなかつた魂ではなかつたか。ドラクロアの畫面から渦巻き出る亂舞するリヅムは、觀る者の魂をその中に捲き込まないでは措かないと同じ樣に、畫く者の魂――ドラクロアの魂をもその中に捲き込んだものに違ひないと想像されるからである。畫家の魂がその渦巻きの中に捲き込まれるのは、まだ可い。然しその魂が捲き込まれた爲に、その魂が漂ひ溺れ、又その爲めに全體のリヅムの原動を形づくる筈の、然も繪畫にあつては成立の根本條件をなすところの、形象の形象的表現を忽がせにするならば、その畫家は、そのリヅムの渦巻に捲き込まれる事だけで堪能する觀客には十分な世界を提供する事は出來ても、その渦巻に捲かれながら、尚且つその渦巻くもの丶機構を存分に見究めようとする樣な觀客にとつては、十分の美味を提供するものとは言へない筈である。勿論畫面が小さい場合には、自分のかういふ傾向を支配する事は、畫家にとつて恐らくは容易な事であらう。然し畫面が大きくなればなるほど、この事は必ず、段々六づかしい事になつて來る。それは、その爲めには、昂揚された情熱ではなく、その昂揚された情熱を牽制する冷徹な理知が、それにつれて段々必要になつて來るからである。

ドラクロアに冷徹な理知が全然缺けてゐたとは、私も思つてはゐない。のみならず、私は、マネがドラクロアに會つてドラクロアを氷の樣に冷たい男だと感じたといふ話も知つてゐる。然しドラクロアは、對人關係にあつてはたま〳〵さういふ感じを與へたかも知れないが、制作に現はれたところでは、決してそんな、氷の樣に冷たいものを、一方では貯へてゐる人だといふ樣な感じを、決して與へる人ではないのである。然も、一般的に言つて、大きな面積を持つた制作の場合にあつて――例へば『サルダナパールの死』や『千八百三十年七月二十八日』の樣な大きい制作の場合にあつては、理知が鐵の環かなぞの樣な力で、情熱と幻想とを確と抱きすくめてゐるのではない限り、ともすればそれらのものは、理知の桎

結を破つて、奔放に自分の途を驅け出さうとする危險性を多分に帶びるものである以上――然も、畫面が大きければ大きいほど、またその畫面を流れるリヅムの持ち方が強ければ強いほど、情熱と幻想とは、自分々々の途を勝手に驅け廻る誘惑に曝される機會が、必然に多くなるものである以上、ドラクロアほどの猛烈な情熱と豐富な幻想とは、生やさしい理知の牽制力位では、到底どうにも持ち扱ふ事が出來なかつたのではないか。ドラクロアの大きな畫の多くは、リヅミカルに見れば――もう少し廣く言つて、音樂的に見れば――たとへば『サルダナパールの死』の樣なものは、瑰麗無比の音樂である。然し繪畫的に見れば、その構圖やデッサンの上に、幾多の弱點と空隙とが歴々と指摘され得るのである。

然しドラクロアの眞價が、かういふ大作の上にあるのだとは、私にはどうしても思へない。元來ドラクロアが、かういふ大作に興味を持つたのは、外にいろ〳〵の理由はあるとしても、重なる理由の一つとして、當時はナポレオン一世好みの餘波として、誰もが大作を好んだといふ、極めて外面的な理由があるといふ事も見逃す譯には行かない樣に、私には思はれる。それがドラクロアにとつて、自分の衷に磅礴するものを盛り込むに最も適切な器であるとして取り上げられたのは言ふまでもないが、然し時代はもうミケランジエロやヴエロネーゼやティントレットの意味での英雄的な時代を疾くに過ぎ去り、ルーベンスやグレコの意味での英雄的な時代も亦遠く過ぎ去つた時代であつた。いくらさういふ意欲がドラクロアの内に動いたとしても、結局十九世紀の子としての、神經と感覺と想像とイデーの世界とを持たされたドラクロアには、その點では竟に古人の壘を摩する事が出來なかつたのである。

然も結局是は、前代の幕を閉ぢる人としてのドラクロアの價値である。さうしてドラクロアの畫家としての眞生命は、もつと外の方面にある。それは、新時代の幕を開ける人としての、ドラクロアの價値である。換言すれば、もつと外の、小さな畫面の、多くの場合、現實そのものから引き出され、現實そのものに卽しつゝ表現された、ドラクロアの情熱と幻想との、無限にして且つ豐富なシムフォニーである。――例へば、『アルジエリアの女』の樣なものが、その一つに屬する。

一九二三、一一、三、

相馬君が來て、ヴォラールのうちに連れて行つてくれる。二時半といふ約束だつたのに、ヴォラールはなか〳〵やつて來ない。四時近くになつて、やつと來る。

ヴォラールの今度越して來たうちは、なか〳〵堂々たるものである。然しまだ越したばかりでちつとも整理しないと見えて、二階に這入つて見ると、額縁に箝めた油畫だの、ブロンズだの、デッサンをぐる〳〵卷にしたのだが、箝細工のしてある球嚢の、上だの下だの横だのに、一杯亂雜に放り出されてある。丁度我々が引越しをして、本の箱をぶちまけた時の様な感じである。

どうかセザンヌが見せて貰ひたいといふと、ヴォラールがその亂雜に放り出されてゐるものゝ中から、あれこれと色色な大きさの畫を選り分けて來ては見せてくれた。驚ろいた事には、そこいらにぶちまけられてゐるものが、みんな名のある人達の作品ばかりである。氣をつけて見ると、マイヨールのブロンズがころがつてゐる。壁の隅にはノアールの制作だといふブロンズのレリーフがある。モネの畫がある。マネの畫がある。セザンヌのものに至つては、凡そどの位あるか、丸で見當がつかない位、それからそれへと、見せてはひつこめ、ひつこめては持つて來する。

セザンヌの畫は、數が多いせゐるか、もう少し見てゐたいと思つても、ヴォラールは、さつさと持つて行つて了ふ。又どうかするといつまで待つても、なかなかあとを持つて來てくれない事もある。ヴォラールといふ男はひどく得手勝手な男だと思ふ。もつとも考へて見ると、我々は、畫を買ふ氣があるのではなく、ただの見物にしか行つてゐないのだから、然も引越しして整理も何もまだ出來てゐない所へ押しかけて、遠慮げもなく見物させてくれといふのだから、此方も隨分圖々

しい譯ではある。ヴォラールの方で、もつと得手勝手に振舞つた所で、別に致し方がない。是ならまあ有難いと思つてゐなければなるまいと思ふ。それにしても、部屋の中はさういふ風に取り散らかされてゐて、椅子一つ置く所がないのだから、初めから仕舞まで、じつと立つたままでゐなくてはならない。是には少々閉口した。然し是も、畫廊にでも行つた氣にさへなつてゐれば、此所では何しろ畫を向うから持つて來て見せてくれるのだから、あるかないだけでも仕合せだ、と思つてゐる事にする。

セザンヌの畫には、あんなに自由な、言はば勝手な手法でかかれてゐるにも拘らず、いかにもクラシックな、落ついて上品な、然も垢ぬけのした、ひどく洒落な感じがある。是が特に私を牽きつけるものの樣である。色の好みも、實に澁い。――かういふ畫が、畫として果して上乘なものであるかどうか、私にはよくは分からない。然し少くともセザンヌの畫には、ドラクロアの畫を見てゐる時とは違つて、もつと靜かな寛ろいだ自由な、此方の心持に少しも無理を加へないで、そのままテタ・テトに話しが出來る樣なものがある。それが私には甚だ有難い。さうして是は、西洋のどの畫にも、今まで殆んど見出す事の出來なかつた、特別な味である樣に、私には思はれる。

セザンヌは晩年には、多く畫の仕上げをしなかつたのださうだ。ヴォラールの所には、その仕上げのしてない樣な畫が澤山ある。是は例の、ヴォラールがエークスの芥捨場から拾ひ出して來た畫が澤山まじつてゐるせゐなのかも知れないけれども、然しそれでもやつぱり、仕上げの出來てゐないものは、出來てゐないなりに、十分に面白い所がある樣に思はれる。

仕上げの出來てゐるものが仕上げの出來てゐないものよりも、纒まつても居り且つ立派でゞもあるのは、無論の事である。然し元來セザンヌの畫は、セザンヌがいくら一生懸命に苦しんでかいた畫でも、その出來上がつたものを見ると、必

ずその苦しさうな所を畫面に示してゐないと言つて可い樣な畫である。從つてセザンヌの畫の與へる感じは、いつでも、舒びやかで安らかで物靜かで淸らかである。是はセザンヌの畫の世界が、恐ろしく官能的なものを踏まへてゐるにも拘らず、その官能的なものはいつのまにか抽象されて了ひ、凡そ官能的に體あるものはなくなつて、あるのはその體あるもののこだまだけであると言ひたい樣な、物から游離した色の世界を取り扱つてゐるからであるに外ならない。セザンヌの苦しみは、その色を魂あるものとして受とる所から始まる。セザンヌは、その魂ある色が、刻々に物から逃げ去つて行かうとする事を認識し、それを刹那に敏活に捕捉する事によつて、畫面の中に永久に擒としようとする事に、全力を傾けて努力した畫家である。從つて、セザンヌの畫が晩年に及んで、ますます淡彩となり、油畫ではなく水畫を、然もその水畫さへ、極めて數の少ない鉛筆の線の上に僅か許り施こされた淡彩の、全然刹那の感興を表現するスケッチ風の水畫になつて行つてゐるといふ事は、セザンヌの老衰を物語るものではなくて、寧ろセザンヌが是までに追求して來た傾向の、自然の歸結を物語るものではないかと、私に思はれる。さういふ方法によつてのみ、物象の中に動いてゐる物象の魂は——セザンヌ流に言へば、色の魂は——初めて完全に捕捉され得る筈だからである。さうして、その意味で私は、セザンヌの晩年の淡彩の水畫に價値と意義とを見出してゐるのである。

然もそこにこそ東洋の文人畫の出發點があるのではないか。勿論東洋の文人畫は、主としてその表現機關を水墨にかりてゐる。從つて此所では色をも形をも十分に超越して、物象の魂を刹那に捕捉しようと試みられる。セザンヌには然し色彩がある。假令それが淡彩ではあつても、とにかくも、それだけに、まだ色にこだわつてゐる所があると、言へば言へない事もない。然しセザンヌが背負つた傳統を勘定に入れて考へれば、セザンヌが晩年、殆んどそれのみを試みてゐたと言つても可いあの淡彩の水畫は、東洋の文人畫に於ける色の超越よりも、もつと思ひ切つた色の超越であるといふ事も、言へない事ではない樣にも思はれる。殊にセザンヌの畫は、色の美しさから這入つた畫である。その色の美しさの精緻な不斷

の追求が、セザンヌに色の美しさが刹那刹那に變化して行く事を教へ、色に顏がある事を色に魂がある事を教へ、さうして色の顏と色の魂との刹那の相を——刹那の美しさを捕捉する事に繪畫の本領がある事を教へたとすれば、セザンヌは、いくら晋通の官能的な色から超越したとしても、所詮色一般を全然無視する事は出來なかつたといふ事も、無理はないとも言へる。然もセザンヌは、さういふ色を殘してゐても尙、晋通の東洋の文人畫家が竟に到達する事の出來なかつた境地を、氣韻生動の境地を、——外の言葉を使へば、物象の形や色を超越した奧に祕められてゐる物象の魂の、舒びやかで安らかで物靜かで淸らかで、然も消なば消ぬかにトランシエントな相を、その畫に於て表現する事が出來てゐるのである。

從つて私は、このヴォラールが澤山に集めてゐる水畫が、假令全部芥捨場から拾ひ出されたものであるとしても、又假令それが全部セザンヌの氣に入らなかつたものであるとしても、それぞれ面白いと思ふ。結局それらのものは、凡て畫家としてセザンヌの心の方向と、その方向に於ける戰ひとを、我々に事細かに物語つてくれるものだからである。

ヴォラールといふ男は、背の高い、蠻骨を帶びた、人の顏を少し斜めに見る時には、左の眼が右の眼よりもぐつと細くなる、胡麻鹽の、髭むくじやらの男である。伯林にゐた時分にタウエンチエンの本屋から本を屆けに來てゐた配達夫の顏と、毬栗頭の眼の三角な襟のつかない白シャツを著てゐるコーホの自畫像の顏とを搗きまぜて、それを二で割つた樣な、北方のゲルマンの血が多分に交つてゐるさうな、田舍田舍した顏つきをしてゐる。さうしてヴォラールの聲は濁つて太いのでなんだか佛蘭西語をしやべつてゐるのぢやない樣な氣がする。セザンヌのかいたヴォラールの顏では、ヴォラールは遙かに上品にもなつてゐれば、また遙かに深味もある事になつてゐるのである。——もつともなんとなく氣六づかしく憂欝らしい所は、本ものの顏にも、多少浮かんでゐなくはない。

一九二三、一一、四、

昨日秦君が伯林からやつて來た。今日一緒にヴェルサイユへ遊びに行きませうと言つて、成瀬君が誘ひに來て呉れる。出かける。秦君は先月の三十日に伯林を立つて倫敦から此方へ廻つて來たのださうであるが、立つ日には伯林では一磅が二億八千萬馬克の爲替相場だつた、二日に倫敦で調べて見たら、それが六億萬馬克に下がつてゐたといふ。お伽噺かなぞに出て來さうなファンタスチイックな相場である。獨逸人はさぞ困つてゐる事だらうと思ふ。伯林の下宿のシュパイエルのうちでは、どうして暮らしてゐるのかとも思ふ。

車がボアの通りを通りぬけてロンシャンにかかる頃から、段々景色がよくなつて來た。丁度紅葉どきである。日本の様に紅くなる葉は丸でないけれども、大抵は落葉樹の森ばかりなので、見亙すかぎり、凡てが悉く金色の天地である。然もその金色の中で濃淡錯雜のいろんな變化があり、それにところどころに綠葉樹さへ交つてゐて、色合の工合がいかにも美しい。殊にセーヌの上流が緩やかに流れる向うに、小高い丘が高まつて、その丘の上に、いろんな屋根の色や壁の色をした、サンクルーの町が立つてゐる所を、遙かに此方から一目で見亙す所なぞ、柔らかで穩やかで、まつたく美しい景色である。

先づトリアノンに行く。

是はルイ十四世が愛妾メイントノンを住ませる爲につくつたものださうで、所謂屋根のない、ルネサンス風の小さな、寧ろ無風流な建築である。然し、手入の屆いてゐない庭が、落葉に埋もつてゐる景色は、反對に、なかなか雅致がある。

立樹の植ゑ方や並樹の枝の張らせ方などに、一寸ゴシックのリヅムを思はせる様なリヅムがある。是にロココ風の男女を配合すれば、すぐそのまゝでワートやランクレーやブーシエーの畫が出來上がりさうな景色である。ところどころに池がある。池の中には唐銅製のいろんな裸像が立つてゐる。池は泥浚ひをする事もないと見えて、水の底には幾重にも溜つた落葉が黒く朽ち、水の色を黒く見せてゐる。

凡てが遠い遠い過去の感じである。――さう思つてメイントノンの住まつたといふ建物を振り返ると、黄色いマロニエの葉越しに、黄色を帶びた緒いその建物の壁が隱見して、それが急に詩の衣に包まれでもした様に思ひなされた。

ヴエルサイユの宮殿には大して感心しなかつた。なんだこんな所だつたのかといふ氣さへした。有名な鏡の間といふのも、今の贅澤なホテルなどを考へ合せて見ると、大して豪奢な感じも起らない。然し是が三百年の昔に世間に與へた效果は、きつと素晴らしいものであつたに違ひないといふ事だけは、十分に想像する事が出來る様である。

鏡の間のヴエランダに立つて、有名な庭を見下ろす。庭のすべてを支配するものは、シムメトリーの法則である。是を見下ろした刹那、自分の眼の下には、非常に大きな絨氈か何かが擴げられてゐるといふ様な錯覺が、ふいと浮んですぐ消える。それほど此所では規則正しく、花圃も立樹も噴水も階段も、一枚の平面の上の模様の様に、きちんきちんと並んでゐるのである。西洋の庭作りは、庭を立體として考へずに、より多く平面として考へるのではないかと思ふ。從つて西洋の庭は、本來高い所から、例へば此所の鏡の間のヴエランダの様な、二階だの三階だのから見るのが、本當なのではないのかと思ふ。少くともこのヴエルサイユの庭園は、この鏡の間のヴエランダから見下ろし且つ見遙かす事を眼目として、思料され且つ作り上げられたものである事は確かである。

戰爭の畫が澤山ならんでゐる。中にドラクロアのかいた畫といふのが、一枚ある。然し、かうして並べて見て、なるほどドラクロアだけの事はあると思はせるものが、この畫には殆んどない。無論外の人達の畫に比べて、此所に活々したりヅミカルなものが動いてゐる事は、事實である。またさういふものを出さうとしてドラクロアが、例へば壁だの波だのに、格別な工夫を凝してゐる事も亦、十分に認められる。然し結局は外の人達と同じ樣に、ドラクロアも亦、自分の心持にある擬勢(ポーズ)を施して、特別の擬勢(ポーズ)の下に置かれた人間をかいたものに過ぎないのではないか。——是は、押しつめると、私自身の中にさういふ英雄的な動的形象の世界に響きを合はせるものがないといふ、いつもの結論に落ちて行くものであるのかも知れないけれども、然し幾度考へ直して見ても、ドラクロアのかういふ種類の畫は、私にはどうも、高く買ふ事は出來ない樣である。

ルイ十四世が使つてゐた卓で、然も此間の歐洲大戰の講和條約の調印に使つたといふ卓がある。それから祭壇がある。祭壇の天井には天井畫がある。この天井は、茶碗を伏せた樣な淺い圓錐形をなしてゐて、然もその面は、菊の花の形にでも彫り拔いた樣に、幾本もの凸起した線によつて幾つにも分たれて居り、その凸起した線は緩やかな曲線を描いて兩隣の面の凹みにいつのまにか流れ込んでゐるのだから、普通の茶碗の底の樣な丸天井に畫をかくと同じ樣には、容易くはかけさうもない。かういふ風な面を與へられ、それを利用して畫をかくのでは、畫かきもさぞ骨が折れるだらうと想像する。

一體西洋の天井畫はどうしてかくのだらうかとも考へる。日本にも天井畫はある。然し日本の天井は機構が割に簡單だから、畫かきは板や布や紙を下に置いて畫をかいて、かきあげてからそれを天井に張る事も出來るであらう。此方でもさういふ方法で出來上る天井畫もあるかも知れない。然しワディカノのカペラ・システィナの天井畫の事なぞを考へて見ると、

あれをかいてミケランジエロは頸が曲つて了つたといふのだから、多くの場合は出來あがつた天井に、足場を掛けて仰むいて畫をかく事になつてゐるのではないか。（少くとも此所のヴエルサイユのこの天井の畫も、ヴテイカンのそれと同じ樣に、天井が出來上がつてから、足場でも組んでかゝれたものであるに違ひない。）

もし西洋の天井畫の多くが、既に出來上がつた天井へ、足場でも組んでそれに登つて、畫かきが仰向きになつてかいて行つたものであるとすると、條件が色々と違つて來るのだから、今日我々が我々の前に縱に壁の上にかけられた畫を鑑賞し批評するのとは、可也違つた立場から鑑賞し批評されなくてはならないといふ事になるのではないかと思ふ。その上、天井畫や壁畫は元來が裝飾畫である。それは裝飾畫本來の目的に支配される。換言すれば、それは、それが置かれる場所の如何によつて受ける筈の制限が違ひ、畫家が自由に自分の欲するまゝのものを自分の欲するまゝに表現する事を許さない性質のものである。從つて天井畫乃至壁畫は、その場所的條件から截り放して、それだけ一つを單獨に問題にされる事を欲しない。殊に天井畫や壁畫では、畫家によつて、天井や壁とそれを觀る者との間の距離を勘定に入れ、或はその場所の空間的な廣がりを勘定に入れて、取り扱はれる物象の上に、必要上、いろんな廓大と誇張とが加へられてゐる筈のものである。從つてそれらの畫を觀る者は、その畫家が勘定に入れた距離や廣がりや角度や、さういふものを確と摑むと、ともにその畫家の立場からそれらの畫を見るのでなければ、本當にその畫の値うちを定める事は出來ない筈のものである。

その意味から言ふと、ミケランジエロの天井畫は双眼鏡で見るべきものではないとも言へる。また、カペラ・システイナの天井畫でもないものに、カペラシステイナの天井畫と同じ樣に廓大と誇張とを施した人間をかいたヴザリやヴザリの徒は、天井畫や壁畫と普通の陳列畫との區別をも辨へない、短見者流であると言ふ事も出來るのである。

宮殿の見物をそこ〳〵に濟ませて、庭園の見物をする。

こゝの庭園は、あるいて見ると、恐ろしく廣いものである。庭は四段の平面から成り立つてゐる。第一段の平面は宮殿と同じ平面の上にあつて、言はゞ三方から宮殿に取り圍まれた恰好になつてゐる。まん中に噴水があつて、その兩側に花壇がある。二段目の平面は極めて狹い空間で、第一段の平面から石段を下りて來た者の、少しの間の足溜りとなつて、それらの人達を、右と左と兩側面にしつらはれてゐる石段によつて、第三段目の平面へ運び下ろす丈の役目をしか勤めてゐない。この二段目の平面のはづれに、圓錐形に刈り込んだ、日本の高野槇の樣な、人の脊丈位の植木が、横に一列に高い欄干の樣に列んでゐる。その欄干がすぐ二間ぐらゐ掘り下げてある。掘り下げた面に密接して、何の樹か分からない樹が、丁度その掘り下げた面の高さに、さうしてその掘り下げた土の層を隱す樣に、一杯に植ゑ込んである。それをもう一段下の平面から見ると、綺麗に刈り込んで壁の樣になつてゐる常盤樹の上から、圓錐形の高野槇の丁度尖端だけが見えて、そこいらに石段だのなんか、存在してゐるさうには思はれない、不思議に第二段の平面の存在を、そつくりそのまま消して了ふ樣な仕掛けになつてゐるのである。第三段の平面は、この壁の樣に刈り込んだ立樹の平面をもつて始まる。これは緩やかに向う下がりになつて行く斜面で、斜面がそれほど斜面として勾配し出さない前に、大きな噴水池がある。噴水池を挾んで兩側には、同じ樣に壁の樣に刈り込んだ——もつと適切にいふと、厚い屛風の樣に刈り込んだ、ルネサンス風の立樹の列が、幾かたまりも連なつてゐる。それから廣場になる。廣場の盡きる所は、第四段の平面である。此所にもルネサンス風の樹壁が兩側に立つてゐて、それが青青とした、廣い芝生を挾んでゐる。芝生は廣く且つ長く續いてその末が小河に横ぎられる。小河の水はきらきらと光つてゐる。その水の向うはまた青青とした芝生である。芝生の遙か奧に、多分此所から一哩も隔つてゐるさうな遙か彼方に、ポプラの樹らしい樹が二本、すくすくと立つてゐる。その樹の向うには何があるのか、渺として何にも見えない。

向うの方が無限の廣がりを持つ樣に、遙か一哩（たかどうだかよくは分からないが）の彼方に、華奢な樹を二本まつ直に立

たせた所は、驚くべきイデーである。これあるが爲めにヴエルサイユの庭園は纏まりがつき、又これあるがためにヴエルサイユの庭園は無限の廣がりをそれ自身の中に含むからである。もつともこれほどの廣い空間を使つて庭園を作らうといふほどの人は、これだけのイデーを案出し得る丈に器量のある人でなければ、到底その任に堪えないのかも知れないとも思ふ。

第三段の平面の廣場に立つて宮殿の方を見あげると、此段の噴水と第二段の噴水とが一直線にならんでゐて、さうしてその線が凹字形に建てられたヴエルサイユの宮殿のまん中邊、即ちさつきこの庭を見下ろした、鏡の間のヴエランダの見當に流れて行つてゐるのに氣がつく。振り返つて、水の向うのポプラの樹を見ると、是も丁度その一直線上に立つてゐる。――この直線こそこの庭園の中樞を形づくるものではないのかと思ふ。ル・ノートルがこの庭園を設計するに當つて、まづ線を引いたのは、この一線であつた、さうして、そのあとで、この線の兩側にあらゆる幾何模樣がシムメトリカルに排列された、さうして、この庭園の設計が出來上がつたのだとも想像する。その一線が鏡の間のヴエランダの邊から出てゐるといふ事も、またそれが遙か向うのポプラの樹を介して無限の彼方に連なつてゐるといふ事も、いかにもルイ十四世の氣に入りさうな、設計の仕方であるとも考へる。

考へて見ると、チユイレリーの庭園に立つて、カルーツセルの凱旋門を眞正面から眺めると、プラス・ド・ラ・コンコルドのまん中に立つてゐるオベリスクとエトワールの凱旋門とは、丁度一直線上にある。是はヴエルサイユの庭園よりも後に出來たものであるから、それから示唆されて、オベリスクも凱旋門も丁度一直線上にある樣に、工夫して建てられたものであらう。從つてここのパースペクティーヴのイデーの存在はヴエルサイユのパースペクティーヴのイデーの價値を殺ぐものとは決してなり得ない。然しルネサンス以後の庭園が凡てこのパースペクティーヴと幾何模樣のシムメトリーとから出來てゐるものである事を考へれば、此所にパースペクティーヴを川ひたといふ事その事よりも、寧ろパースペクテ

イーヴのイデーを是だけ雄大なものを作り上げる事が出來たといふ事の方が、ル・ノートルの手柄になるものなのだらうと思はれる。然も一方から言へば、廣漠たる空間を支配する最も簡單な方法は、パースペクティーヴとシムメトリーとによる方法であるとも言へる。それだからこそ都市計畫の凡てはパースペクティーヴとシムメトリーとを基礎として計畫されるのである。從つて、日本の庭園といふものを頭の中に置いて考へれば、ル・ノートルのこの庭園は雄大は雄大でも、いゝいゝ作られたる庭としては、ひどく働らきのない、廣い空間をもてあました結果、やつとシムメトリーとパースペクティーヴとでごまかして了つた樣な庭であるとも、言へない事もない樣である。勿論是だけの廣大な空間を使つて庭を作る事の出來る庭作りは、或は日本にはゐなかつたかも知れない。假令作る事が出來ても日本の庭作りは、全體の上に是だけ單純な統一を與へる事が出來ずに、もつとばらばらなものしか作り得なかつたかも知れない。然し、例へば利休の樣な男に、これだけの空間を投げ出して、是で統一ある庭を作つて見ろと言つたら、利休は或はもつと趣のある庭を作つたのではなからうかと想像する事は、あながち私のショーヴィニズムが活らくからばかりではない樣である。

一九二三、一一、五、

柏亭君と敏子さんとから夕飯に誘ひ出される。それから早川雪洲が出てゐて評判だといふ『カジノ・ド・パリ』に引つぱつて行かれる。雪洲は此所でもなかなか人氣があるのださうである。

『カジノ・ド・パリ』は、此間の『フォリー・ベルジエル』と同じ樣に、女が殆んど裸で踊る踊りを、いろいろに裝飾して見せる寄席である。此所でも『フォリー・ベルジエル』で感じたと、殆んど同じ事しか感じない。寧ろ、あすこで感じ

た事が、ここで一層確實された樣なものである。

ただ一つ、ここで新に感じた事は、西洋の著物——殊に西洋の女の著物には、確定した樣式(スタイル)がないといふ事である。從つて西洋の女の著物は、假令どんな突飛な途棒な思ひつきから生れたものであつても、それが女の身體(からだ)にひつかかつてゐさへすれば、ともかくも著物らしい感じを起こさせる。是が若し、我我日本人の著物の樣に、樣式(スタイル)のはつきりときまつた古い傳統を背負つてゐる著物に馴れてゐる者であつたら、かういふ所で案出された新奇な著物の樣なものを身體に纒つても、丸で夜具風呂敷か何かで身體を包んでゐる樣で、著物を着てゐるといふ感じを人に起させる事は出來ないであらう。その點で西洋の女の著物は、可也自由な立場に置かれてゐるのである。第一、織るにしても染めるにしても、あらゆる模樣が可能であり、あらゆる色氣が可能である。同時に又あらゆる形が可能であるから、織屋も染物屋も、裁縫師もあらゆる事を考へる事が許され、その考へた事をどしどし實行に移して見る事が許される。從つて畫の上で立體派が出て來ても表現派が出て來ても、それは色氣や模樣の上のみではなく、形の上にまでも、やすやすと應用される事が出來るのである。——是が善い事であるとは、私は必ずしも思はない。然し自由と言へば、是ほど自由な事はないのである。

早川雪洲が、燕尾服の上に羽二重の五つ紋の羽織を羽織つて、舞臺の上に現はれたのには、驚ろかされた。もつとも此方の女が、自分の著物の上に紋つきの羽織を羽織つて、得意氣にあるいてゐる所は、伯林ででも此所ででも、私はちよくちよく見かけてゐる。雪洲は、その流行に迎合する氣でかういふ扮立ちを思ひついたらしく思はれるが、さうして西洋人にとつてはそれは別に不思議な事でもなんでもないに違ひないが、どうも我我日本人から見ると、是は甚だ汗顔至極な服裝である。是も我我の著物がはつきりした樣式(スタイル)を持ち、古い傳統を脊負つてゐて、我我がそれに十二分に馴染んでゐるせゐであるに違ひないが、なにしろ是は閉口である。穴があつたら、這ひ込みたい樣な氣がする。もつとも、一方から言へば燕

尾服の上に紋つきの羽織を羽織つて、得意さうに舞臺の上にのさばり出るといふ事が、我我現代の日本人の姿であるとも、言へば言へない事もない樣である。

雪洲は日本の畫かきになつてゐるものらしい。その畫かきは佛蘭西の女を妾にしてゐるのであるが、女は畫かきから絞つては、佛蘭西の情夫に金を注ぎ込んでゐる。芝居はその畫かきが、近ぢかのうちに日本に歸るといふ時から始まるものの樣である。

雪洲は英語を使ふ。女も雪洲と話してゐるうちは英語を使ふ。女が歸るといふ。畫かきは歸さないといふ。女はどうでも歸るといふ。畫かきはどうでも歸さない、日本に連れて行くといふ。それから少しごたごたして、畫かきは到頭女の髮をつかんで、床の上にひきすえる。其所へ女の情夫が出て來る。さうして畫かきをピストルで打つ。畫かきは泰然として、貴樣の打つた彈丸なんぞが俺に當つてたまるものか、彈丸は何所かあすこいらに飛んで行つた樣だ、とかなんとか言つて、上手のストーヴの所を指でさす。其所へ玄關番の樣なのが出て來て、畫かきに手紙か何かを渡す。畫かきはそれを受とつてから、この方がたをお送りしろと、その男に言ひつける。みんなが出て行つたあとで、畫かきは羽織の袂からハンケチをとり出して、それを左の脇腹の邊にあてる。ハンケチを見ると、ハンケチはまつ赤に血に染まつてゐる。畫かきはそれをじつと見てから、よろよろとソーファの側の卓の所へあるいて行つて、卓の上の卷煙草盆から、煙草を一本ぬきとり、それをくはえ、マチをすつて火をつけ、にじる樣にして、ソーファの傍へ寄つて行く。この間ずうつと右の手は、ぴくりぴくりと痙攣してゐるのである。かうして畫かきが、やつとソーファの角まで來ると、畫かきの口から卷煙草がおつこちる。さうして畫かきはソーファの上に突つ伏してしまふ。――それで幕である。

雪洲は初めから終まで顏面の筋肉一つ動かさない。丁度新派の高田實の樣に、ただぬうつと立つてゐる樣なやり方である。然し見物は頻に喝采する。殊に幕切れのハンケチを出して脇腹にあてる所から、煙草を啣へたりマチを擦つたり、最後の、啣へた煙草をおつことして、ソーファの上に突つ伏すあたり、非常に印象を與へるのかして、幕が下りると、喝采は割れるが如くに起る。

我我から見ると、是は實に下らない芝居である。雪洲は是で一ぱし腹藝を見せた積りであるかも知れないが、然し是は藝といふ名前に値ひしない程の、下らない藝である。伊井蓉峰がいやに氣どつて思ひ入れをする。あの氣障な厭味を思ひ出させて、然も伊井ほどの味を持ち得ない藝であるに過ぎない。——それで巴里の見物に、どうして受けるのか。

雪洲の芝居がどうして巴里の見物に受けるのかは、私にはよくは分らない。然し巴里の見物は隨分出鱈目である。なんでも新らしいものが、さうして何所かで評判だつたものが來れば、きつとそれに對して喝采を惜まない樣な、ひどく浮氣な所を持つてゐるのが、巴里の見物である。それに巴里の見物は、日本人といへば、みんなスパルタ風の武士道的教育に訓練されて、腹を切つても眉一つ動かさない、怪物の樣な人間である、とも思つてゐるものらしい。さういふ日本人がやつて來て、さういふ日本人を表現しようといふのだから、自分達にはとても理解出來ないが、然しさういふ點では恐るべき「日本」を見る事に興味を惹かれて、彼等の大部分は來てゐるのではないか。

特に賢明な、巧に此所の人氣に投じる方法と想像されるのは、雪洲が顏面並に肢體の上で、殆んど何の內面の表情をも試みようとしなかつた事である。西洋の芝居では、聲の表情も無論であるが、顏面乃至肢體の表情も亦、隨分問題にされて來てゐる。從つてこの方面の表情は、西洋の劇術にあつては、可也に複雜細緻に分化し發展して來てゐる表情である。元來その方面での訓練に乏しい日本人としての雪洲が、その方面では可也に發達してゐる西洋の役者と、同じ方向に向かつて動いてゐては、決して衆人の注目を惹く樣なものを示し得る機會を、竟に持ち得る筈がない。それが雪洲に取つて丁

度その反對の、音聲、顔面並に肢體の極端なる無表情主義に赴かしめたものではないか。表情の多い役者の中に雜つた無表情は、その劇しい對照の故に人の注意を牽く。然も、日本人はどんなに動亂する内面を持つてゐても、是を決して外に表はさないといふ事をもつて誇りとするといふ樣な傳説が、歐米人の頭の中に巣を喰つてゐるらしい以上、彼等は、その無表情の奥に自分の感情を投入して、舞臺の上の人物の心持を自分自分で勝手に創造するといふ樣な、特別な便宜を計つて呉れるのである。然も最後にさういふ役者が、僅かばかりその人物の苦惱の表現を、ちらちらと小出しに仄めかすとすれば、勝手にその人物の苦惱を創造し同感してゐた見物は、誘ひの隙を見せられた下手な劍撃使ひの樣に、驀地にその隙を目がけて飛び込んで行つて了ふ筈である。

――雪洲が果してこの逆手を用ひて、歐米の見物を牽きつけたかどうか、私は知らない。然し雪洲の藝を見てゐて、あれで歐米の見物が牽きつけられるとすれば、その理由は、さう考へるより外、別に考へ樣はない樣に思はれる。然も、若し雪洲がそれを意識してやつてゐるのだとすれば、雪洲もなかなか賢明であると言はれなければならない。また假令雪洲が意識しないでやつてゐるとしても、雪洲が鋭敏な嗅覺を持つてゐるといふ事は、是だけで既に確實である。

見物は雪洲に向つて頻に喝采しながら、時時は我我の席の方に注意する。なんだか我我は、組になつて、雪洲の應援の爲に來てゐる者の樣に思はれてゐるさうである。さう思はれては、少少割に合はない。是を機會に立ち上がつて歸る事にする。然し驚ろいた事は、是を機會に歸つて行く見物の非常に多い事である。その人達が又我我の方を頻にぢろぢろ見る。應援の爲に來てゐる樣に思はれるのが厭で立つたのに、今度は立つた爲に反つて應援に來た者の樣に思はれるらしいのが厭ででもあれば、可笑しくもあつた。

編輯者雜記

×

谷譲次君は世界周遊の旅を終つて、今は鎌倉に靜養してゐる。今年一杯は徐ろに休養して筆硯を新たにして新春一月から讀者に見えようとしてゐる。材料無限、彼の胸吐に往來する腹案は、再び滿都の人氣を沸騰せしむるや必せり、必せりだ。

×

谷君の歸朝と入れ違ひに、我社は清澤洌君をアメリカに派遣して、現代流行のアメリカニズムを研究せしめんとする。彼はアメリカ通の第一人者。殊に我社の「讀者サービス」を志して、讀者に代つてアメリカを研究せんとしてゐる。今日のアメリカに於いて知りたいと思はれることは何なりとも御註文あれ。彼は忠實に讀者の利便を圖つて本誌に報告するであらう。詳しくは豫告で・・・・。

×

五百號記念號は都合で十月號に延期する。計畫が餘りに大き過ぎて手が廻らないからだ。急いで不滿な物を出すより燈下讀書の好季節十月號を期して大々的に立派な物を作り出したいと思ふ。懸賞應募原稿實に四千通それだけでも酷暑の一仕事だ。同情してくれ玉へ。

◇

讀者諸賢よ、この暑いときに御變りはありませんか、本誌編輯部員はお蔭を以て益々健康、はちきれるやうなエネルギーを抑つてもてあまして居るやうな始末です。そんなわけで本誌も素晴らしい動きと熱と光とを以て皆さんにお眼にかゝることができました。

このうちには心理的ヴイタミンAがあります。それからB、C、D、E・・・・とあります。

讀者諸兄よ、テンポ速く鋭い複雜な現世に健かなる呼吸せんとせらるゝならば、先づ中央公論」です。本誌の讀者が一人でも多ければ多いほど日本は明るくなります。歪んだ展開を免かれます、どうぞ本誌から存分の滋養を採つて自らを培ふて下さい。

本誌は滋養豐富ばかりではありません、味覺案かいカクテルの味を持つて居ります、而もいかに呑みすぎたからとて心身彌々爽やかな味持つばかりのカクテルです、酷暑の折柄存分おとり下さい。

◇

田中内閣は倒れました、醜劣なサナダ蟲みたいな内閣でした。いゝ鹽梅にくだつたので日本の身體も是で夏やせしなくすみさうです。今度の内閣崩壞についても本誌の取扱ひ方がいかに鮮やかなものであるかをおみとめ下さい。舊内閣が倒れて喜ぶと云ふた所で無條件に新内閣を歡迎するものではありません今度の金解禁問題だつてあまりに銀行家本位ではありませんか、私たち賢明なる讀者諸兄と共に靜かに現内閣を見守つて參りませう。本誌の内容については私はかれこれ申しません百言一見に如かず、乞ふ店頭に本誌繙くを吝む勿れ。

×

六月末から今月へかけて慌しく轉變動搖した政局舞臺は、醜劣を極めた田中内閣の瓦壞を示して、盛夏を迎へる吾等への快よい淸涼劑たらしめた。大觀すれば、反動内閣の頽落は吾等に何を教ゆるか、後繼内閣に何を期待し得べきか。―本號特輯の内閣批判は必ずや諸君の心襟に寬濶なるものを感ぜしめるだらう群峰を拔いて常に視角の大と展望の鮮を誇る本誌は、更に視野をひろげて、現下世界の重要關心事を收錄した。世界の眼と手の伸べらるゝロシア、新興意氣の壯なる資本主義支那・現實段階の最先端たる國際問題としての

度その反對の、音聲、顔面並に肢體の極端なる無表情主義に赴かしめたものではないか。表情の多い役者の中に雜つた無表情は、その劇しい對照の故に人の注意を牽く。然も、日本人はどんなに動亂する内面を持つてゐても、是を決して外に表はさないといふ事をもつて誇りとするといふ樣な傳説が、歐米人の頭の中に巢を喰つてゐるらしい以上、彼等は、その無表情の奥に自分の感情を投入して、舞臺の上の人物の心持を自分自分で勝手に創造するといふ樣な、特別な便宜を計つて呉れるのである。然も最後にさういふ役者が、僅かばかりその人物の苦惱の表現を、ちらちらと小出しに仄めかすとすれば、勝手にその人物の苦惱を創造し同感してゐた見物は、誘ひの隙を見せられた下手な劍擊使ひの樣に、驀地にその隙を目がけて飛び込んで行つて了ふ筈である。

——雪洲が果してこの逆手を用ひて、歐米の見物を牽きつけたかどうか、私は知らない。然し雪洲の藝を見てゐて、あれで歐米の見物が牽きつけられるとすれば、その理由は、さう考へるより外、別に考へ樣はない樣に思はれる。然も、若し雪洲がそれを意識してやつてゐるのだとすれば、雪洲もなかなか賢明であると言はなければならない。また假令雪洲が意識しないでやつてゐるとしても、雪洲が鋭敏な嗅覺を持つてゐるといふ事は、是だけで既に確實である。

見物は雪洲に向つて頻に喝采しながら、時時は我我の席の方に注意する。なんだか我我は、組になつて、雪洲の應援の爲に來てゐる者の樣に思はれてゐるさうである。さう思はれては、少少割に合はない。是を機會に立ち上がつて歸る事にする。然し驚ろいた事は、是を機會に歸つて行く見物の非常に多い事である。その人達が又我我の方を頻にぢろぢろ見る。應援の爲に來てゐる樣に思はれるのが厭で立つたのに、今度は立つた爲に反つて應援に來た者の樣に思はれるらしいのが厭ででもあれば、可笑しくもあつた。

編輯者雜記

×

谷讓次君は世界漫遊の旅を終つて、今は鎌倉に靜養してゐる。今年一杯は徐ろに休養して筆硯を新たにして新春一月から讀者に見えようとしてゐる。材料無限、彼の胸吐に往來する腹案は、再び滿都の人氣を沸騰せしむるや必せり、必せりだ。

×

谷君の歸朝と入れ違ひに、我社は清澤洌君をアメリカに派遣して、現代流行のアメリカニズムを研究せしめんとする。彼はアメリカ通の第一人者。殊に我社の「讀者サービス」を志して、讀者に代つてアメリカを研究せんとしてゐる。今日のアメリカに於いて知りたいと思はれることは何なりとも御註文あれ。彼は忠實に讀者の利便を圖つて本誌に報告するであらう。詳しくは豫告で・・・。

×

五百號記念號は都合で十月號に延期する。計畫が餘りに大き過ぎて手が廻らないからだ。急いで不滿な物を出すより燈下讀書の好季節十月號を期して大々的に立派な物を作り出したいと思ふ。懸賞應募原稿實に四千通それだけでも酷暑の一仕事だ。同情してくれ玉へ。

◇

讀者諸賢よ、この暑いときに御變りはありませんか、本誌編輯部員はお陰を以て益々健康、はちきれるやうなエネルギーを却つてもてあまして居るやうな始末です。そんなわけで本誌も素晴らしい動きと熱と光とを以て皆さんにお眼にかかることができました。

このうちには心理的ヴイタミンAがあります。それからB、C、D、E・・・とあります。讀者諸兄よ、テンポ速く鋭い複雜な現世に健かなる呼吸せんとせらるるならば、「先づ中央公論」です。本誌の讀者が一人でも多ければ多いほど日本は明るくなります。歪んだ展開を免かれます、どうぞ本誌から存分の滋養を採つて自らを培ふて下さい。

本誌は滋養豐富ばかりではありません、味覺柔かいカクテルの味を持つて居ります、而もいかに呑みすぎたからとて心身溂々爽やかな味持つばかりのカクテルです、酷暑の折柄存分おとり下さい。

◇

田中内閣は倒れました、醜劣なサナダ蟲みたいな内閣でした。いゝ頭痛にくだつたので日本の身體も是で更やせしなくすみさうです。今度の内閣崩壞についても本誌の取扱ひ方がいかに鮮やかなものであるかをおみとめ下さい。舊内閣が倒れて喜ぶと云ふた所で無條件に新内閣を歡迎するものではありません今度の金解禁問題だつてあまりに銀行家本位ではありませんか、私たちは賢明なる讀者諸兄と共に靜かに現内閣を見守つて參りませう。本誌の内容については私はかれこれ申しません百言一見に如かず、乞ふ店頭に本誌繙くを吝む勿れ。

×

六月末から今月へかけて慌しく轉變動搖した政局舞臺は、陋劣を極めた田中内閣の瓦壞を示して、盛夏を迎へる吾等への快よい清涼劑たらしめた。大觀すれば、反動内閣の顚落は吾等に何を敎ゆるか、後繼内閣に何を期待し得べきか。―本號特輯の内閣批判は必ずや諸君の心襟に寬潤なるものを感ぜしめるだらう

群峰を拔いて常に視角の大と展望の鮮を誇る本誌は、更に視野をひろげて、現下世界の重要關心事を收錄した。世界の眼と手の伸べらるるロシア、新興意氣の壯なる資本主義支那・現實段階の最先端たる國際問題としての

軍縮と勞働會議等々。

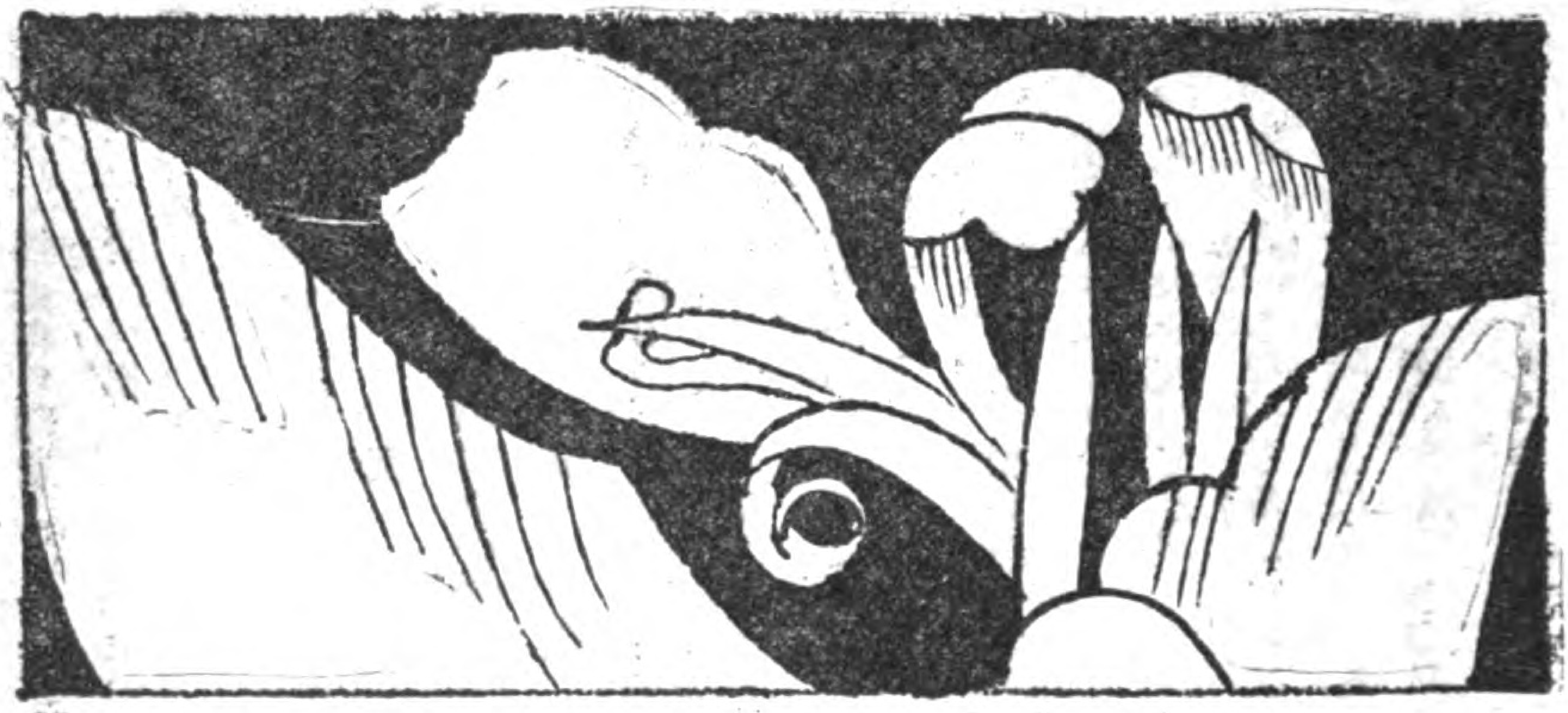
トーキーを語る畑氏はジャズ批判の如是閑氏と併讀さるべく、ともに滯歐數年の柳澤氏と夢想庵氏は顧みて「日本」を考へる。是亦觀察の透徹と筆致の麗美とは推さるるであらう。

本號も亦素晴らしい出來榮を以て諸君と共に考へ、談じ得る事をひそかに誇負して居る。

×

長田幹彥氏の「陽氣な風車」は久しぶりに頂いた原稿のことゝて推敲を重ねて成つた面白い、時代向き季節向きの讀みものである。この作に現れる一女性は、モダンガールの最も悪い意味で最尖端に立つものとして一讀に値する。それから大宅壯一氏の「日本エロチック作家論」も是非讀んでいたゞきたい。どの作家のどんな作品にどんなエロチシズムがどんな形で表現されてゐるかといふことを知るには、非常に都合のいゝものて、いふところの「趣味と實益をかねた……」といつたところです。

創作では十一谷義三郎氏の「街の岸博士」の續稿が頂けなかつたのが殘念でした。



選擧（二幕六場）

藤森成吉

現代（一九二九年）世相劇。――ゲオルグ、カイザアの向ふを張つて？――だが、そんな世相劇とは物がちがふ。

第一幕

第一場

人物

赤木　町會議員候補者。
小松　同志、選擧責任者。
土居　同志。
伊東　同志。
警察の特高係長

舞臺裏の聽衆

野　田　　聽衆の一人、政治狂。

時

現代、四月の或る日曜の午後。

所

地方の町の活動常設館の裏二階。

舞臺

事務用のデスクや印刷物や大道具小道具の殘物等が、雜然と置かれてある。壁板には、大看板風な活動ポスタアやビラやスチイル等々。上手に階段の上り口。正面の壁に、觀客席をのぞく爲めの、四角の一寸した穴が切つてある。

幕あくと、舞臺裏の聽衆の話聲。

A。隨分入ッたなア。

B。××も大分入つてる。

C。きッと、しやべる端から××させるつもりだらう。

D。あの演壇の隅ッこに立つてるなア、何だ？

E。活動寫眞を撮る機械だッてさ。

F。おやア、もしゆふべのやうに騷いだら、×××××みんな映してつかまへるつもりだなっ

F。そうだ。

G。おお怖え。

H。ぢやあウツカリ手もたたけねえぞ。

小松、脛の上へ長い洋紙をひろげて跨つて、演題ヌキに下部へ土居新介と書いてゐる。頭から耳、顎へかけてグルグル巻きに繃帯してゐる。突然汽車の笛の音。つゞいて「ボッ――ボッ……」と云ふ噴出や車輪の音。

小松。あッ、もう汽車の奴出て行きやアがる。今度こそ、きッと土居君きてくれるだらう。(もう一枚の短い洋紙へ跨つて、「土居君來場」……と書き始める。)

汽車の音消え去る。赤木、荒ッぽく階段をあがつて來る。

小松。(振り返つて)來たかい?

赤木。(不安を顔に漲らせて)未だ來ねえ。

小松。(筆を握つたまま同じく心配に陷ちて)どうしたんだらう? 來られなくなつたのかな。

赤木。そんなら、電報ででも知らせてくれるだらう。此の汽車でも來ないとこを見ると、もしかしたら途中の驛でつかまつたんだ。

小松。そうだッたら困るぞ。おれ達二人だけで演説をする事になッちまう。

赤木。(決然として)くそ! 聽衆にそのわけを話すんだ。

舞臺裏の聽衆の聲。

A。おい、まだか?

B。早く開會しろ!

C。もう時間を過ぎてるぞ。

赤木。(腕時計を見て)うむ、過ぎてる。

(腕組みしたまま、正面の壁に添つて往復し始める。)

聽衆の聲。

D。土居さんは未だ來ねえか？

E。ほんとに來られるのかなア。

F。來たッて、入れるかどうかわからねえや。

G。まア、もう少し待て。

野田。(突然聽衆の中から頓狂な大聲を擧げる)諸君！——親愛なる町民諸君！

笑聲。

A。ホラ、又あの選擧きちがひの野田ぢいさんがしやべり出した。

B。いつかチャンと來てるやがつた。

C。選擧演説ッて聞いたら、ぢいさん逃しッこあるもんか。

野田。(多少どもりながら)諸君！　僕は決して此の赤木君のやうな無産黨の候補者に反對する者ではありません。無産黨大いによろしい。既成政黨も惡くない。

D。何云つてるんだ！

E。ぢいさん、しッかり！

赤木、立ちどまつて、正面の壁穴から聽衆席をのぞく。

野田。だが僕は、あらゆる政黨政治に關係のない僕こそ、一番よく町民諸君の意志を代表する者だと固く信ずる者であります。

F。よう、ぢいさん！

G。よせやい。

野田。これが、僕が十年一貫、選擧のたびに自分を推薦する理由であります。然し殘念なるかな、充分諸君に理解して貰へず、いつも投票はタッタ一票きりであります。

聽衆、大笑と拍手。

H。そのとほりだ。

B。一票居士萬歳！

野田。その一票は、僕が自分で入れるんである。

又大笑。

C。よく知つてやがらア。

D。いい餘興だ。

野田。然しながら、僕は僕の生きてゐる限り、決して此の尊い一票を棄てない覺悟です。

拍手。

野田。なぜかと云ふに、これは日本臣民の大切な義務であり、權利であるからである。

聽衆騷然。

E。いい加減でやめろ！

C。もう時間を過ぎてるぞ。

赤木。(腕時計を見て)うむ、過ぎてる。

(腕組みしたまま、正面の壁に添つて往復し始める。)

聽衆の聲。

D。土居さんは未だ來ねえか?

E。ほんとに來られるのかなァ。

F。來たッて、入れるかどうかわからねえや。

G。まァ、もう少し待て。

野田。(突然聽衆の中から頓狂な大聲を擧げる)諸君! ――親愛なる町民諸君!

笑聲。

A。ホラ、又あの選擧きちがひの野田ぢいさんがしやべり出した。

B。いつかチャンと來てるやがつた。

C。選擧演說ッて聞いたら、ぢいさん逃しッこあるもんか。

野田。(多少どもりながら)諸君! 僕は決して此の赤木君のやうな無産黨の候補者に反對する者ではありません。無產黨大いによろしい。既成政黨も惡くない。

D。何云つてるんだ!

E。ぢいさん、しッかり!

赤木、立ちどまつて、正面の壁穴から聽衆席をのぞく。

野田。だが僕は、あらゆる政黨政治に關係のない僕こそ、一番よく町民諸君の意志を代表する者だと固く信ずる者であります。

F。よう、ぢいさん！

G。よせやい。

野田。これが、僕が十年一貫(くわん)、選擧のたびに自分を推薦する理由であります。然し殘念なるかな、充分諸君に理解して貰へず、いつも投票はタッタ一票きりであります。

　聽衆、大笑と拍手。

H。そのとほりだ。

B。一票居士(こじ)萬歲！

野田。その一票は、僕が自分で入(い)れるんである。

　又(また)大笑。

C。よく知つてやがらァ。

D。いい餘興だ。

野田。然しながら、僕は僕の生(い)きてゐる限り、決して此の貴い一票を棄てない覺悟です。

　拍手。

野田。なぜかと云ふに、これは日本臣民の大切な義務であり、權利であるからである。

　聽衆騷然。

E。いい加減でやめろ！

F。辯士中止ッ！

聽衆大笑。

野田。中止しろと云ふなら中止します。然し諸君！不肖野田は……。

G。なぜ、臨監や巡査は笑つて觀てゐるんだ？

H。こんな時こそ整理しろ！

サアベルの音。

巡査。(笑ひ聲で)おい、少し靜かにし給へ。

赤木。(決心して振り向いて)小松、もう始めやう！

小松。(見返して)始める？

赤木。うん、もうどうせ來ねえ。おれ達だけでやッつけやう！

その時、階下から、鳥打ち眉深に眼鏡をかけヒゲを生やした中年の男を先きに、同じく口ヒゲを生やし外套を着たやや若い男があがつて來る。

第一の男。(突ッ立つたまま)こんちは。

赤木、小松、ぎよッとして默視する。

男。大分入つてるねえ。

赤木。(注視しながら鋭く)君達ァ誰だ？

男。(笑ひ出しながら)僕だよ。(帽子や眼鏡や口ヒゲをむしり取る。)

赤木、小松。おお土居君！

(思はず走り寄つて、土居の兩方の手をべつべつに握りしめる。)

土居。(固く握り返しながら)おくれて濟まない。

小松。待つてたぜ。

赤木。あんまりヘンな恰好をしてゐるから、僕ァ又スパイか國粹會の手先きかと思つた。

土居。ははは……すつかりだまされたな。味方をだませる位でなくちやァ、とてもスパイの××××××わけにやァ行かないよ。さツき君が停車場へ迎えに來てくれてたのを見かけたが、わざと知らん顔をしてゐたんだ。大分スパイらしい奴がウロウロしてゐたから。

赤木。そうか?——ちつとも知らなかつた。

小松。今朝ッから、奴等、汽車の着くたんび停車場へ行つてるんだ。

土居。多分そうだらうと思つた。(氣づいて伴を紹介する。)ああ、これはK勞働組合の伊東君て云ふんだ。忙しいとこを無理に頼んで、大山氏のメッセージを讀んで貰ひかたがた引ッ張つて來たんだ。

赤木。そうか。それはありがたう。(伊東へ)僕、候補者の赤木です。

伊東。やァ初めて……。

赤木。よろしく。

伊東。僕こそ。

土居。(いきなり伊東の口ヒゲを引ッ張つて、赤木等に)此のヒゲはほんものさ。

伊東。(顔をしかめて)痛いぢやないか。

赤木等。ほう、僕ァやつぱり附けヒゲかと思つた。

土居。ははははは。

伊東。心ぼそい事を云ふなァ。

小松。僕、責任者の小松です。（握手する。）

伊東。御苦勞さま。何だッてね、みんなつかまへられて、君達二人きり同志は殘つてないんだッてね。

小松。そうです。

赤木。僕達もやられたんだが、奴等多少世間ていをつくらうつもりか、檢束一週間で出しやがッたんです。

土居。（小松へ向つて）君、さッきから氣になつてるんだが、その繃帶はどうしたんだ？

小松。（思はず耳のところを手で押へながら）××でなぐられて中耳炎を起したんだ。

土居。××で……？

伊東。中耳炎？

小松。うむ。

土居。畜生め！痛いかい？

小松。とても痛くてたまらなかつたが、今はよつぽどらくになつた。

土居。君、抗議したか？

小松。勿論したが、てんで受けつけねえんだ。

伊東。彼奴等ア、此の頃は全く暴力團だな。

土居。（決心して）よし、何べんでも抗議だ。今日の演說會のあとデモをやらうぢやないか。

小松。デェ？

土居。うむ。どうせ今日は××××に定つてゐる。そいつを××××××××××んだ。これだけ聽衆が集まつて、おまけに元氣がありやァ、たとへこッちの數が尠いにしろ、きつとモノになる。

伊東。そうだ。幾ら仲間が尠くたッてやれない事ァねえ。

小松。××へ行くか？

土居。うん。そうして堂々と、君の傷害に對する、及び同志十何人の不當長期檢束に對する抗議をやるんだ。抗議と同時に、卽時釋放を要求するんだ。

伊東。そいつァ是非とも必要だ。でなけりやァ、奴等癖になる。

赤木。然し、うまく行くかな？ 此の頃の暴壓ぶりで、何しろみんなひどくスクんぢまつてるからな。

伊東。だから××××必要がある。

小松。ゆふべこゝでやッた各候補者の立會演說でも、ほかの候補者にはみんなしまひまでしやべらせながら、赤木だけは二口三口云ふと中止さ。で、流石の聽衆もおこッて、橫暴々々ッて騷いだら、××の奴どもとても凄い恰好をしたよ。そして今日は、よもや土居君なんぞ來やしめえ、そんな事ァ左翼式宣傳だらう。來なかつたら勿論演說會も出來めえが、萬一來たら、ッて云ふんで、活動の機械を一臺据ゑつけて、もし又昨日のやうに會場で騷いだ者があつたら、みんな撮して、そいつを證據につかまへちまふ、ッて今朝新聞へ宣傳してやがるんだ。

土居。そいつが向ふの××。そんな手へ乘つちやァ駄目だ。今日の演說會だッて、奴等ァ散々やらせないやうな宣傳をしてゐたらう？

小松。(うなづいて)うむ。

土居。でも我々が××××××××とすりやァ、此のとほり聽衆が集まつて來るんだ。そんな警察の××××××××

土居。はははは。

伊東。心ぼそい事を云ふなア。

小松。僕、責任者の小松です。(握手する。)

伊東。御苦勞さま。何だッてね、みんなつかまへられて、君達二人きり同志は殘つてないんだッてね。

小松。そうです。

赤木。僕達もやられたんだが、奴等多少世間ていをつくらうつもりか、檢束一週間で出しやがッたんです。

土居。(小松へ向つて)君、さッきから氣になつてるんだが、その繃帶はどうしたんだ？

小松。(思はず耳のところを手で押へながら)××でなぐられて中耳炎を起したんだ。

土居。××で……？

伊東。中耳炎？

小松。うむ。

土居。畜生め！痛いかい？

小松。とても痛くてたまらなかつたが、今はよつぽどらくになつた。

土居。君、抗議したか？

小松。勿論したが、てんで受けつけねえんだ。

伊東。彼奴等ア、此の頃は全く暴力團だな。

土居。(決心して)よし、何べんでも抗議だ。今日の演説會のあとデモをやらうぢやないか。

小松。デエ？

土居。うむ。どうせ今日は××××に定つてゐる。そいつを×××××××××××んだ。これだけ聽衆が集まつて、おまけに元氣がありやア、たとへこッちの數が尠いにしろ、きつとモノになる。

伊東。そうだ。我ら仲間が尠くたッてやれない事アねえ。

小松。××へ行くか？

土居。うん。そうして堂々と、君の傷害に對する、及び同志十何人の不當長期檢束に對する抗議をやるんだ。抗議と同時に、卽時釋放を要求するんだ。

伊東。そいつァ是非とも必要だ。でなけりやァ、奴等癖になる。

赤木。然し、うまく行くかな？ 此の頃の暴壓ぶりで、何しろみんなひどくスクんぢまつてるからな。

伊東。だから××××必要がある。

小松。ゆふべこゝでやッた各候補者の立會演說でも、ほかの候補者にはみんなしまひまでしやべらせながら、赤木だけは二口三口云ふと中止さ。で、流石の聽衆もおこッて、横暴々々ッて騷いだら、××の奴どもとても凄い恰好をしたよ。そして今日は、よもや土居君なんぞ來やしめえ、そんな事ァ左翼式宣傳だらう。來なかつたら勿論演說會も出來めえが、萬一來たら、ッて云ふんで、活動の機械を一臺据ゑつけて、もし又昨日のやうに會場で騷いだ者があつたら、みんな撮して、そいつを證據につかまへちまふ、ッて今朝新聞へ宣傳してやがるんだ。

土居。そいつが向ふの××。そんな手へ乗つちやァ駄目だ。今日の演說會だッて、奴等ァ散々やらせないやうな宣傳をしてゐたらう？

小松。（うなづいて）うむ。

土居。でも我々が××××××××とすりやァ、此のとほり聽衆が集まつて來るんだ。そんな警察の××××××××

なくなるまで、徹底的に民衆を訓練する必要がある。
伊東。一體どこから活動機械なんか探して來やがッたんだ？　いやに新式な×××を使やがッて……だが、そんなもの、ほんとに撮せるかどうかわかるもんか。
小松。おれも、そいつ怪しいと思ふんだ。
伊東。もし撮すやうだッたら、第一その機械××××××しちまやァいい。
土居。×××××する位なら、どうせ大衆的にやらなけりやァ駄目だ。どれだけおれ達で大衆を引ッ張れるか、試驗の好機會だ。
赤木。君にもまだ知らせて置かなかつたが、社民黨の方にも、實は多少の同志、或は同情者がゐるんだ。我々がデモをやるッて云つたら、その連中も多分力を貸してくれるだらう。×××××！
小松。やらう！
　聽衆席からの拍手と怒鳴り聲。
A。おい、まだか？
B。早く始めろ！
C。土居氏はまだ來ねえか？
土居。(立ちあがつて)大分お待ちかねだ。ぢやァ始めやう。
小松。ちよッと待つた。……今こいつを貼つて來る。(「土居君來場」と大書した紙を持つて、急いで降りて行く。)
伊東。(赤木へ向つて)よく、こんな活動館を貸して貰へたね。
赤木。こゝの館主が僕の親類の男でね。そいつが俠氣があつて、おまけに可成り運動に理解を持つてくれてるもんで、歴

迫を押し切つて貸してくれたんだ。

伊東。そいつァいい。

土居。工場の方が首になると、赤木はいつもこゝで辯士や下足番をやるんだ。

伊東。そいつァますますいい。

　　突然、聽衆席から叫び聲と拍手が湧きあがる。

D。おお、土居氏が來たとさ。

E。萬歲！

F。えれエもんだな。

　　オーバアを着た高等主任が、慌しく階段をあがつて來る。

赤木。(土居達へ向つてやゝ低聲に)高等主任が來た。

伊東。高等主任？

赤木。うん、とても陰險な奴だ。

主任。(一寸面喰つたやうに)こりやァいつの間にか御揃ひだなァ。

小松。(つゞいてあがつて來て、書きかけの紙の方へ行きながら)土居君、演題は？

土居。演題か？　まだ定めてない。

小松。だが――。

土居。親愛なる無産町民諸君に訴ふ、とでもしてくれ給へ。

小松。よし。(伊東へ向つて)伊東君は？

伊東。我々はかう要求する、伊東三造。と書いてくれ給へ。
小松。よし來た。(書き始める。あと、適當な時に紙を持つて降りて行く。)
　主任、突ッ立つたまゝ伊東の顔を見つめる。伊東、煙草を吸ひながら見返す。
主任。(土居の傍へ來て腰をおろして)土居さんお久しぶりですね。
土居。(皮肉に)やァ、去年の總選擧の時は、どうも御世話さま。
主任。(一寸テレて)いや、あの時は失禮しました。……今度は、よく來られたですね。
土居。(更に皮肉に)お蔭で無事に着きましたよ。
主任。いや、あなたはとてもいゝ東京の方の仕事が御忙しいッて聞いてるたから、多分今度はおいでになれまいと思つてたんだが。
赤木。(ニヤニヤしながら)ほんとにそう思つてた××?
主任。ほんとさ。僕だけぢやァない、今こゝへ集まつてる聽衆でせえ大概そう思つてたやうだ。
赤木。それも、××の方からそう思はせただらうて。
主任。戲談云ふない。僕の方から、何もそんな餘計な事を云ふ必要はねえぢやァねえか。そりやァ君の方のヒガミさ。
赤木。ぢやァ、土居君が來るのを、×の方ぢやァ歡迎してるたわけ××。
主任。(苦笑して)歡迎もしないが、何しろ土地出身の名士だから……。
伊東。道理で、大分停車場へ迎えに來てくれてたと思つた。
　主任、彼の方をジロリと見る。
土居。いや、實際忙しくて困るんでね。だから、普通なら國へなんか歸りたかァないんだが、何しろこッちの同志がみん

なつかまつて、まるで手も足も出ない、演說會さへ碌々ひらけない、なんて云ふもんだから、仕方なく〳〵やつて來たんですよ。

主任。(應酬的に)そりやァお氣の毒さまでした。

土居。僕もだが、やられてゐる同志達が氣の毒でね。

主任。いや、僕の方でも、矢鱈留めて置きたかァないんですがねえ。

伊東。置きたかァないが、留めて置く理由が何かあるッて云ふ×××。

主任。(傲然と)まァ、あるわけさ。

赤木。選擧××の爲めだらう?

主任。(ムキになつて)おい、馬鹿云ふなよ。君達の頭は實際簡單だなァ。……(急に調子を變へて)もッとも、どう考へやうと、そりやァ君達の勝手だがね。

伊東。選擧の××をする爲めでなけりやァ、何の××××? 拘留にもしないで、長いあいだ檢束處分で置くなんて……

主任。(急に峻しく嚴い恰好と口調で)君ァ一體誰だ?

伊東。僕ァ、東京から土居君と一緒に應援に來た者さ。

主任。職業は?

伊東。勞働者よ。

主任。(ちよびヒゲをひねりながら)そうか?

伊東。なぜ不法檢束をする×××。

主任。(荒々しく)何の爲めにそんな事をきくんだ。

伊東。何の爲めだッて××××。

主任。(顔色を變へて)なにッ?

伊東。きいちやァいけない××。

主任。生意氣云ふなッ! (つかみかからうとする恰好をする。)

土居。(彼の前を片腕で遮つて)……どうしてそんなに昂奮するんです?

主任。(伊東を睨みつけながら) 僕が誰か知らないか?

伊東。(平然として)高等主任×××。

主任。知つてるなら氣をつけろ!

伊東。知つてるからきいてるんだ。

主任。舐めた口をきくと……。

土居。(伊東が何か應じやうとするのを片手で押へながら)どうして舐め×××だ? 同志達が、わけもわからず、二十日も一月も検束されてるのを見りやァ、誰だッてきゝたくなるなァ當然でせう?

主任。あんた達は、役所と云ふものを知らないんだ。きいたッて、答へられる事と答へられない事とある。

土居。そりやァあんたの方の勝手でせう。然し、答へられないなら答へられないで、もッとおだやかな親切な態度を取つたらどうですか? 民衆警察とか何とか、よくあんたがたは宣傳してるぢやありませんか。

主任。勿論、警察は民衆の爲めの物です。

土居。そんなら、そう云ふ風に民衆的にしたらどうですか? 今のやうな態度が、その民衆的つて奴ですか?

主任。だが、あんまり失敬な口をきくから……。

土居。此の男の職業は勞働者です。だから、勞働者らしい、口のききかたをするんです。
主任。御意見はもう澤山だ。
土居。(强く)もしあんたの方でそう云ふ態度を取るなら、僕の方でも云ひたい事がある。一體あんたは、誰にことわつて默つてズカズカここへあがつて來たんですか？
主任。……。
土居。そして僕達に食つてかかつて。……あんた達は、二言目にやァ僕達を非合法的々々々ッて云ふが、僕達に云はせりやァあんた達のやり口の方がよつぽど非合法的だな。
伊東。異議なし！
係長、彼を睨みつける。
土居。今我々の力が多少弱いからそれでもとほるが、少し氣をつけて貰ひたいなア。いづれ、同志の檢束問題についちやア、あとで警察へ伺ふつもりですが――。
聽衆の叫び聲と拍手。
複數。まだか？
複數。始めろ！
土居。(立つて)さァ始めやう！
伊東、赤木。始めやう、始めやう！
(土居と共にドカドカと降りて行く。)
係長、慌てて追ひかける。

つゞいて階下で鈴を振る音、拍手の音。

暗　轉

第二場

人　物

前場の人物、及び巡査や聽衆（中に女も混つてゐる。）

所、　時

演說會場。前場の直後。

舞　臺

黑幕が、舞臺上手から下手へかけて2/3以上を蔽ふ。

黑幕の前、上手に、演壇とテーブル。テーブル上に水瓶コップ等。――黑幕の上に「無產町民の町稅負擔絕對反對。」「稅金は資本家地主に出させろ。」「金持地主の町會を無產町民の手へ！」「言論集會出版結社の自由を戰ひ取れ。」等のスローガンを赤く大書した紙や、演說の題目を記した紙が貼つてある。

赤木、土屋達、演壇の手前に胡座を搔く。肩章の臨監、黑幕寄り、演壇の橫に、サアベルを突いて傲然と椅子に倚りかかる。その傍に特高係長や、頸紐をしめた巡査の群が立つ。適當な處に、活動寫眞撮影機が据ゑつけてある。

下手、黑幕の垂れてゐない部分、幕の前と背後へ溢れて、大勢の聽衆が緊張した顏つきで座し（或は腰かけ）てゐる。

盛んな拍手のうちに舞臺明るくなる。小松、演壇に立つてゐる。繃帶の中から、聲をしぼつて開會の辭を述べる。

小松。(連續の氣もち)……諸君も御承知のとほり、我々の同志は殆んどすべて檢束されてゐます。候補者も二人までつかまつて、村會の投票日には護衛つきで投票場へ行つた始末です。そして投票するとそのまんま又留置所へ――。

臨監。(怒鳴る)辯士注意!

小松。……で、演説會を一度ひらく事も、ビラを一枚撒く事も出來ず、恨を呑んで二人とも落選したのであります。それでも投票數はどつちも三四十票もあつて、もう少しで當選するところでした。(拍手。)諸君! かかる壓迫を――。

臨監。注意!

小松。これが、我々の一回きりの演説會です。ほかのブルジョア候補者どもの演説會とちがつて、我々は金がないから入場料まで取つてゐるのに、又こんな、諸君の都合の悪い晝の時間に開會したのに、かくも大勢聽きに來て下さつた事に對して、責任者として僕は滿腔の感謝を表します。(拍手。)此の意氣と自覺を以て、明日の投票日には、勞働者及び無産町民諸君の唯一人の代表者たるわが赤木君の爲めに、諸君の一票を投じて下さい。(拍手。)……それでは、第一番に、わざわざ東京から應援に來てくれた、K勞働組合の輝ける闘士、伊東三造君を御紹介します。

小松退く。伊東演壇へ進み出る。拍手。

伊東。(拳を振りあげて)諸君! 町會なんてものア、支配階級の××機關だ。××自治なんて全くのウソッパチだ。自分達の議員を町會へ送り込みさへすりやア、勞働者及び無産市民諸君の目的が達しられるなんて云ふ社會民主々義の候補者どもは、ブルジョア候補者とちつとも毛色の變らない、同じ穴のムジナだ。

高等主任、いそいで臨監の肩をつつく。

つゞいて階下で鈴を振る音、拍手の音。

暗轉

第二場

人物

前場の人物、及び巡査や聴衆(中に女も混つてゐる。)

所、時

演説會場。前場の直後。

舞臺

黒幕が、舞臺上手から下手へかけて2/3以上を蔽ふ。

黒幕の前、上手に、演壇とテーブル。テーブル上に水瓶コップ等。——黒幕の上に、「無産町民の町税負擔絶對反對。」「税金は資本家地主に出させろ。」「金持地主の町會を無産町民の手へ!」「言論集會出版結社の自由を戰ひ取れ。」等のスローガンを赤く大書した紙や、演説の題目を記した紙が貼つてある。

赤木、土屋達、演壇の手前に胡座を搔く。肩章の臨監、黒幕寄り。演壇の横に、サアベルを突いて傲然と椅子に倚りかかる。その傍に特高係長や、顎紐をしめた巡査の群が立つ。適當な處に、活動寫眞撮影機が据ゑつけてある。

下手、黒幕の垂れてゐない部分、幕の前と背後へ溢れて、大勢の聴衆が緊張した顔つきで座し(或は腰かけ)てゐる。

盛んな拍手のうちに舞臺明るくなる。小松、演壇に立つてゐる。繃帶の中から、聲をしぼつて開會の辭を述べる。

小松。(連續の氣もち)…諸君も御承知のとほり、我々の同志は殆んどすべて檢束されてゐます。候補者も二人までつかまつて、村會の投票日には護衛つきで投票場へ行つた始末です。そして投票するとそのまんま又留置所へ——。

臨監。(怒鳴る)辯士注意!

小松。…で、演説會を一度ひらく事も、ビラを一枚撒く事も出來ず、恨を呑んで二人とも落選したのであります。それでも投票數はどつちも三四十票もあつて、もう少しで當選するところでした。(拍手。)諸君! かかる壓迫を——。

臨監。注意!

小松。これが、我々の一回きりの演説會です。ほかのブルジョア候補者どもの演説會とちがつて、我々は金がないから入場料まで取つてゐるのに、又こんな、諸君の都合の惡い晝の時間に開會したのに、かくも大勢聽きに來て下さつた事に對して、責任者として僕は滿腔の感謝を表します。(拍手。)此の意氣と自覺を以て、明日の投票日には、勞働者及び無産町民諸君の唯一人の代表者たるわが赤木君の爲めに、諸君の一票を投じて下さい。(拍手。)…それでは、第一番に、わざわざ東京から應援に來てくれた、K勞働組合の輝ける鬪士、伊東三造君を御紹介します。

小松退く。伊東演壇へ進み出る。拍手。

伊東。(拳を振りあげて)諸君! 町會なんてものア、支配階級の××機關だ。××自治なんて全くのウソッパチだ。自分達の議員を町會へ送り込みさへすりやア、勞働者及び無産市民諸君の目的が達しられるなんて云ふ社會民主々義の候補者どもは、ブルジョア候補者とちつとも毛色の變らない、同じ穴のムジナだ。

高等主任、いそいで臨監の肩をつつく。

臨監。（大聲で）辯士注意！

伊東。（冷笑して）そら、×××生きた證據だ。

笑聲と拍手。主任や臨監怒る。活動撮影機動き始める。

伊東。だが、そんなら、なぜ我々は候補者を立てて、町會や市會や議會へ送り込まうとするか？　それは、町會や議會の内幕を××し、支配階級の欺瞞を具體的徹底的に……。

臨監。（突つ立つて）中止！

伊東。――（キツと顔を向けて）注意か？　中止か？

主任と臨監。（同時に）中止！

聽衆席から、一聲「横暴！」

伊東、憤然として壇をくだる。一齊の拍手。

小松。（立つて）では次に、嘗てここへ來られた事のある、我々の委員長大山郁夫氏のメツセージを、伊東君によんで貰ひます。（拍手。）

臨監。いかん、今の男によませる事は。

小松。なぜです？

臨監。わかり切つとるぢやァないか。今中止したばかりだ。

伊東、構はず壇上へあがらうとする。巡査、遮つて突き飛ばさうとする。

伊東。（大聲で）他人の代讀だから差支へないぢやないか？

主任、何か臨監にささやく。

臨監。(うなづいて)ちやァ特別許す。

伊東。(獨語)何が××だい！（忿懣のやうな拍手。壇上へ立つて、紙をひろげてよみ始める）親愛なるS町無産町民諸君！　やむを得ぬ差支への爲め、私は今殘念ながら諸君にお目にかかれません。で、メッセージを以て、わが政獲勞農同盟の爲めに、又わが同志候補者赤木君の爲めに、心から諸君に訴へたいと思ひます。諸君！　去年の三月十五日事件以來、又左翼三團體解散以來、打ちつづく嵐のやうな支配階級の暴壓のもとに……。

臨監。中止！

伊東。(振り向いて)中止？

　同時に、係長飛びついて、伊東の手の中の紙を引つ奪る。

伊東。何をするんだ！　(奪ひ返さうとする。)

臨監。(立ちあがつて)　檢束だ！

　巡査達、バラバラと伊東へ飛びかかる。

伊東。畜生、ふざけるな！　(あばれ廻る。が、ついに黑幕のそとへ拉し去られる。)

　聽衆席から、「さうだ、連れて行け！」と云ふ聲一つ。それを壓倒して、多くの聲々。

　「横暴々々！。」

　土居、立ちあがつた赤木達を押へる。

小松。(土居等と打ち合はせて、聽衆へ向つて)では、今度は候補者赤木君を御紹介します。(拍手。)

一つの聲。いよ、無産でなくて無惱候補者！

他の喚聲。A。どいつだ？

B。廻し者め!

C。つまみ出せ!

赤木。(壇上へ立つて、水瓶を取りあげ、コップへ水を注いで飲んでから)諸君! 今御覧のとほり――。

臨監。注意!

赤木。(つづけて)我々はいつでもかう云ふ工合に――。

臨監。注意!

聽衆席の聲。構はずやれ!

赤木。(臨監席を振り向いて)では、べつな話をします。今、大勢町會議員候補者が立つてゐます。その連中は、みんなハンコで捺したやうに、全町民諸君の利益を代表するの、計るの、と云つてゐる。こいつが×××だ。町民全體の代表なんて者がどうしてあるか? (拍手。)そう云ふ連中は、實は資本家や地主や金持だけの利益を計る代表者だ、と自分から云つてるんだ。

叫び聲。「そうだ!」

赤木。それから又、社會民主々義の候補者が一人ゐる。その候補者は、如何にも無産町民諸君の利害を代表するやうな事を云つてるが、それが如何にやつぱりウソッパチで、然も諸君に取つてブル候補者に劣らない危險な代物であるか、と云ふ事は、すべて彼等の行動によつて明瞭だと思ひます。(拍手。)もつと具體的に云ふなら、彼等は事ごとに諸君の眞の利益を裏切つて、官權と妥協し、馴れ合ひ……。

臨監。中止!

赤木。注意ですか?

臨監。中止！

赤木、靜かに一瞥し、飲み殘しのコップをグッと飲み乾して降壇する。（拍手。）

小松。（立つて）では次に、わが郷土の生んだ指導者の一人、土居君に話して貰ひます。

嵐のやうな拍手喝采の中に、土居演壇に立つ。頭をさげる。

土居。（拍手がやまない爲めモウ一度頭をさげて）諸君！　光陰矢の如し、と云ふが、去年私が候補者としてお目にかかつて以來、もうマル一年の上になる。あの時の落選は、我々の努力にも係はらず、まだ諸君が充分勞農黨と云ふものをわかつておられず、又諸君の階級的自覺も、忌憚ないところ充分でなかつたからだと考へます。然し去年の三四月以來、我々の血と涙の戰ひによつて、我々の立場はもう充分諸君にわかつて頂けた事と信じる。如何なる迫害や困難が來やうとも、我々は斷じてひるむ者ではありません。（拍手。）何となれば、迫害が來れば來るほど、我々はますます、自分達か眞に諸君の友であり仲間であると云ふ自覺と、又我々の終局の勝利が近づきつつあると云ふ確信を持つからだ。（搖がすばかりの拍手。）同じ運動と云つても、我々の運動は、所謂體育運動、スポーツとはちがふんです。スポーツのやうに遊び半分では出來ない。又無傷では出來ない。いや、野球やテニスでさへ、擦り傷や怪我位な事はする。（聽衆席、笑聲。）まして我々の運動、此の困難な上にも困難な、勞働者及び全無産階級解放の大運動には、怪我人や犧牲者位は……。

臨監。（叫ぶ）中止！

同時に、巡査達飛び出し來て、土居を擔ぎあげて演壇から運ばうとする。「横暴々々！」の喚聲。聽衆演壇をめざして殺倒する。赤木、小松達も一つになる。その時、廻轉してゐる活動撮影機××××、固い×××が一つ×××××飛んで來る。××當つて、機械ガチャリと×××。

群集の歡聲。萬歳！

叫び聲。土居さんを奪還したぞ。

聲々。萬歳！　々々！

土居の叫び聲。××勢ひで、みんな×××不當檢束傷害の抗議に××××、

赤木達の聲。×××、×××！

土居の聲。デモだ、×××！

群集の聲。よし、×××××！

×××！

畜生、××なんか恐くてたまるか！

洪水のやうに、群集黑幕前上手へなだれる。

急に幕

第二幕

第一場（全部活動寫眞。不着色サイレントの方がいい。）

最初の字幕が出る。

「激戰を極めた、普選最初の町議戰の投票日は明けた。連日の暗雲も、此の朝拭つたやうに晴れ、午前七時の開門を待たず、町役場の前には投票者達が雲のやうに押しかけた。」

畫面A。眞正面へ向つて歩いて來る大勢の人達。——工場へ出かける前の、勞働服を着、辨當をさげた勞働者達。印絆纏を着た自由勞働者達。ブルジョアらしい服裝の若い男。頭の禿けた高利貸風の男。商人風、百姓風、會社員風、袴をつけた學校敎師風等々、各階級と社會層の特徴を網羅した男達。それに交つて盲人の一隊。又若い娘に附き添はれた老人

や息子の背中へ負はれた高齢者等。

その中を、御辭儀して廻つてゐるブルジョア派の參謀、運動員等。

畫面B。やや遠く、白堊の堂々たる町役場の建物。その閉めてある鐵門前の多くの人間。それへ向つて夏の雲のやうに押し寄せて行く人間の群。手前からばかりでなく、横の方からも切り交つて行く。

第二場

人物

小松及び他の群集。

時

開票日。前場の翌日の午前

所

町役場の建物の一部を取り入れた廣場

舞臺

上手に、役場の白い二階の窓。各候補者の參謀達がそこに鈴成りになつてゐる。(候補者一人につき二人づつの關係運動人が、入場を許されてゐるのだ。小松もその中にゐる。)更に上手の隱れた場所に、選擧長(町長)、助役、役場吏員、立會人等がゐるところ。

廣場には、建物の下からギッシリ群集。自轉車を押へてゐる傳令達大勢。みんな緊張した顔つきで、一樣に上の窓を見あげてゐる。報告のたび、多數は手に持つた點取表へ忙しく書き留める。

舞臺下手に一本太い樹。それにも幾人か攀ちのぼつてゐる。一番上の、二階の窓より高い（舞臺一文字に屆くあたりの）場所にのぼつてゐる男は、望遠鏡を眼にあてがつて窓の中を一所懸命覗いてゐる。

その狀態で幕あく。

廣場の群集のどよめき。

A。（いらいらして）どうしたんだ！　おれの方の候補者の投票はまだ一度も出ねえ。不思議だなア。

B。金の撒きかたが足りなかつたんだらう。

A。戲談云ふなよ。

C。一度も名前を呼ばれねえ候補者は、まだドッサリあらア。

D。おれの方の候補者もまださ。

E。おれの方もよ。

D。悲觀しちまふな。

B。なアに、今に出るさ。待てば海路の日和ツてな。

D。馬鹿にしやがるない。

C。だが、赤木君はえれえもんだな。もう二度も呼ばれてるぢやアないか。

E。そうだ。此の分ぢやア、どうも當選らしいぞ。

A。ゆふべまで、いや、今朝まで、誰も問題にしてゐなかつたのになア。

D。全く奇妙だ。だから選擧は水商賣ツて云ふんだ。

B。昨日の演說會が利いたんだよ。何しろみんなで警察まで押しかけたんだからなァ。

C。お蔭で、赤木君は又警察へブチ込まれてるんだッてな。

E。うむ。土居氏だきやァ、みんなの手で取り返したが。

B。その土居氏も、今朝無理矢理東京へ送り返されたつて云ふぢやないか？

E。そうだ。――警察も、よつぽど手古摺つたと見えるな。

その時、舞臺蔭で選擧長の讀みあげる聲。よく聞えない。二階の參觀者達のおどろいた顏、よろこんだ顏、しよげた顏。

廣場の群集。おい、又發表だ！

發表だ！ （みんな見あげる。）

二階の連中、手に持つた紙へ、今よみあげられた候補者の名前を書いて、窓から下へ落す。或る紙には木や鐵の重りがついてゐる。それらが、或は羽根のやうにヒラヒラと、或は輪のやうにクルクル廻つて落ちる。

いそいで拾ふ傳令達。

群集の叫び聲。誰だ々々？

拾つた者の聲。三木さんだ！

叫び聲。なに三木？

聲。北澤五郎だ！

群集の聲。やァ、北澤君が初めて三十票出たぞ。

聲。（つゞいて）花岡善左衛門三十票！

叫び聲。よう素敵々々！（二つ三つの拍手。）

他の聲。社會民衆黨も仲々やるなア。

つゞいて叫ぶ聲。赤木君三十票！

群集。なに又か？

　萬歳！（喚聲に交る拍手。）

驚嘆した聲々。これでもう九十票だ。

　いよいよ當選だ。

　番狂はせだ。

　番狂はせだ！

　　幾人かの傳令、自轉車と一緒に飛び出して去る。

勞働者風の一團。（二階の小松へ向つて呼ぶ）小松君、おめでとう！

　　小松、眼に涙を浮べながら默つて挨拶を返す。

人々の聲。どうだ、小松君うれしさうな顏をしてゐるぢやアねえか。

　無理アねえや。

別の人々の聲。誰が一體、そんなに赤木君へ入れたんだらう！

あの人だきやア、まるで金も使はなかつたのにな。

××の壓迫があんまりひどかつたから、きツと反つてみんなの同情を呼んだんだらう。

いや、やつぱり時代の動きだ。

なァに、昨日の大騷ぎのセイさ。

それも時代さ。

何にしても偉いもんだ！

樹上の望遠鏡の男。(頻りに窓の中を眺めながら)おや、又赤木君らしい。

群集。なに、又？

勞働者の一團。(歡喜して)萬歲？

聲。ほかには誰だ？

一人。(望遠鏡の男を目ざして)チエッ、あいつうめえ事をやつてやがる。

他の一人。(感心して)文明の利器ッて偉えもんだ。あれだけ早くわかるんだから。

望遠鏡の男。(遙かに投票束の上書きを眺めつづけながら) 武井金三郎さんらしい！

武井の運動員等。しめた！　もう當選御禮のポスタアを貼つてもいいぞ。

他の者。まだ早いよ。今度のやうな番狂はせ投票ぢやア、これからどうなるかわかりやアしねえ。

　おれの方はまだ一度も出ねえ。これぢやア幾ら何でも駄目だ。

仲間。あれだけゆふべ電報を打つたのに、效目がなかつたのかなア。

B。泣きつき電報より、やつぱり潜航艇運動が一番さ。論より證據、武井さんの成績はどうだ！

C。だが赤木君は？

B。ありやア別ものよ。

一人。(第一幕の野田を見つけて)やァ野田さん。どうも御氣の毒ですねえ。

叫び聲。よう素敵々々！（二つ三つの拍手。）
他の聲。社會民衆黨も仲々やるなア。
つゞいて叫ぶ聲。赤木君三十票！
群集。なに又か？
萬歲！（喚聲に交る拍手。）
いよいよ當選だ。
驚嘆した聲々。これでもう九十票だ。
番狂はせだ。
番狂はせだ！
幾人かの傳令、自轉車と一緒に飛び出して去る。
勞働者風の一團。（二階の小松へ向つて呼ぶ）小松君、おめでとう！
小松、眼に涙を浮べながら默つて挨拶を返す。
人々の聲。どうだ、小松君うれしさうな顏をしてるるぢやアねえか。
無理アねえや。
別の人々の聲。誰が一體、そんなに赤木君へ入れたんだらう！
あの人だきやア、まるで金も使はなかつたのにな。
××の壓迫があんまりひどかつたから、きツと反つてみんなの同情を呼んだんだらう。
いや、やつぱり時代の動きだ。

なァに、昨日の大騷ぎのセイさ。
それも時代さ。
何にしても偉いもんだ!
樹上の望遠鏡の男。(頻りに窓の中を眺めながら)おや、又赤木君らしい。
群集。なに、又?
勞働者の一團。(歡喜して)萬歲?
聲。ほかには誰だ?
一人。(望遠鏡の男を目ざして)チヱツ、あいつうめえ事をやつてやがる。
他の一人。(感心して)文明の利器ツて偉えもんだ。あれだけ早くわかるんだから。
望遠鏡の男。(遙かに投票束の上書きを眺めつづけながら) 武井金三郎さんらしい!
武井の運動員等。しめた! もう當選御禮のポスタアを貼つてもいいぞ。
他の者。まだ早いよ。今度のやうな番狂はせ投票ぢやァ、これからどうなるかわかりやァしねえ。
おれの方はまだ一度も出ねえ。これぢやァ幾ら何でも駄目だ。
仲間。あれだけゆふべ電報を打つたのに、效目がなかつたのかなァ。
B。泣きつき電報より、やつぱり潛航艇運動が一番さ。論より證據、武井さんの成績はどうだ!
C。だが赤木君は?
B。ありやァ別ものよ。
一人。(第一幕の野田を見つけて)やァ野田さん。どうも御氣の毒ですねえ。

野田。僕の無政黨論は、まだ尠くとも百年ばかり進みすぎてる。町民諸君に信任して貰へないのは、僕が不幸にして早く生れすぎたからさ。

勞働者の一人。へツ、百年ばかりおそく生れすぎた方だらう。

ほかの人々。ははは……その方らしいや。

その時、又二階の連中動搖し始める。そして急いで紙へ書いて下へ飛ばす。

廣場の群集。誰だ々々？

關さんだ！

よう、これで二束だ！

それから誰だ？

赤木君！

動搖する群集、湧きあがる喚聲、萬歳の聲。

素早く暗變

第三場

オール・トオキイ（着色。）（或は、着色サイレント映畫に、辯士的なセリフを添へてもいい。）

人物

伊東、赤木、その他同志十數人と巡査。

時

前場の午後。

所

留置場内。（特に暗くじめじめしてゐる古い設備）

最初字幕が出る。「前場の午後、S町警察留置場内。」

畫面1。第一室。同志達數人散坐してゐる。みんな身體を惡くして、苦しそうに或は退儀そうに。

A。一遍そとへ出たいなア。

B。出たい。こんな事をしてゐりやァ、だんだん身體が惡くなつて來る。

C。此の頃ア、おれの脚はてんで感覺がねえ。まるで酢の入つた大根みたいだ。

D。おれもそうだ。

B。刑務所へ行つた方が、どれ位えらくだか知れねえ。

C。そうだ。あつちへ行きやア、お湯へも入れるし、運動も出來るし、手紙も書けるし、面會も出來るし、本だつてよめるし、……ここと較べりやア極樂だ。

D。ああ、本がよみたい。脚氣も苦痛だが、おれはそいつが何よりの苦痛だ。

A。全く、こんな事をされてゐりやアだんだん頭が馬鹿になつちまう。

B。いつになつたら、一體出しやアがるつもりだらう？

E。今日の選擧が濟んだら出すか。

C。出すもんか。――出すにしたところで、どうせ二三日經つてからよ。今すぐ出しやア、如何にも選擧干渉の爲めだつ

て吹聽するやうなものぢやないか。

E。そりやァそうだ。――だが、ほんとに干渉の爲めかな。おれ達を怒りさせやうつて氣もあるんだ。

D。いろんな事を一緒にコメてやつてやがるんだ。

A。チエツ、馬鹿にしてやがる。

B。ゆふべのデモにやァ、然し奴等大分慌てたらしいな。

C。もう少し大衆の力が增して來りやァ、おれ達ァ幾らでも奪還して貰へるんだがな。

書面2。第二室。伊東、赤木を中心に、みんな輪を成して坐つてゐる。

R。もう開票の結果のわかる時間だらう？

赤木。もうわかつてる筈だ。

伊東。どうなつたらう。當選か落選か？

赤木。(笑ひながら)まづ落選さ。

伊東。いや、わからないぞ、ゆふべのデモの樣子ぢやァ。

S。然し、まるでこつちの勞働者の組織がないからなァ。

T。だが、社民黨の下にゐる勞働者達だつて、きつと幾人かはこつちへ入れてくれるよ。

S。幾人か位ぢやァ心ぼそいな。

赤木。落つこちたつて、かうして戰ひさへすりやァ、これからあつちの勞働者は益々こつちへ來る。

伊東。そうだ。一つ目や二つ目なら知らず、三つ目のある勞働者なら、戰ひのたんび、どつちがほんとに自分達の爲めを思つてくれる人間か、又黨か、位の事がわからねえ筈はねえ。

赤木。向ふの兄弟達も、此の頃だんだん向ふの奴等のグラ幹ぶりがわかつて來てゐるんだ。もう一息だ。

伊東。だから、保計警察ぢやァおれ達を怖がるんだ。

T。此の次の選擧にやァ、きつとおれ達の勝だ。

R。此の次は次として、今度はどの位入つたらう。結果を知りてえなァ。

伊東。看守に聞いて見やうや。おい看守さん！

　その時突然、夕の街角を廻る鈴の音と一緒に「號外々々——開票結果號外！……」

　と叫ぶ少年の聲が近づいて來る。

R。あッ、號外が出た。

T。畜生！　どう云ふ結果だらう？　買つて見てえ。

　みんな口惜しそうな顏をする。

　近づいた號外賣りいきなり叫ぶ「赤木さん當選！　百九十五票！」

　赤木達思はず聲をあげる。

號外賣りの少年。「赤木さん百九十五票！　番狂はせの號外々々！」

R。なに百九十五票！　すばらしい高點の當選だ！（思はず赤木の腕をつかむ）

伊東、Tその他の同志。（飛びあがつたり、赤木へ飛びついたりして）素敵だ！　萬歳！

　つづいて、隣りの室からも一齊に叫ぶ聲。「赤木君萬歳！　勞農同盟萬歳！

第二室の連中。（赤木を胴上げしながら）勞農同盟萬歳！　赤木君萬歳！

隣室の聲。おれ達も胴上げをしたい！

看守の巡査。（慌てて飛び出して來て、大聲で）おい、何を飛んでもない騷ぎをする！
伊東。だつて、愉快だから仕方ないや。
看守。（激しくサァベルを鳴らして、聲を勵まして）靜かにせんと承知せんぞ！
みんな。××××……。

S。胡坐を組んで啜り泣き出す。

R。（發見して）おい、どうしたんだい？　何を泣いてるんだ？

S、泣きつづける。

R。（顏を寄せて）腹でも痛むのか？
S。そうぢやァねえ。思はず淚が出て仕方ないんだ。
R。なんだ、うれし泣きか。
S。だつて、此の前のストライキで敗け、縣會で敗け、總選擧で敗け、しよつちう負けつづけてゐたのを、今度初めて勝つたんだらう……。
T。敗けるは覺悟だ。
S。だから、何とも云へない氣もちになつちまうんだ。
赤木。同感だ！
U。號外賣りの中にも、あゝ云ふ仲間がゐるんだぞ。
伊東。おれ達の同志はどこにだつてゐるんだ。

第四場

人物

北原　勞働者
細君
彦（ひこ）　二人のあひだの子供
小澤　若い勞働者
丸山　同
花岡善左衞門　社民黨町會議員
外に勞働者その他

時

前場の夜

所

北原の家と街路

幕あくと、上手（かみて）の如何にも勞働者らしい室（へや）の眞ん中で、北原が胡坐を搔きながら號外を兩手にひろげて見てゐる。

北原。（ひとりで笑ひ出す）はははは……百九十五票、赤木英作！――愉快だ！　はははは……。

その時、街路へ、小澤丸山の二人現れる。

ドシドシ戸口をあけて入る。

北原。誰だ？
二人。おれ達だ。(同時に障子をあける。)
北原。やァ待つてたよ。
　二人室へ入る。
小澤。なんだ、また號外を見てるるのか？
北原。うん、何度よみ返しても愉快で仕様がねえ。
小澤。(丸山と一緒に胡坐を掻きながら)僕ァ、昨日ッから痛快でたまらねえ。
丸山。全くよ。演説會はウンと聲援する。土居君は取り返す。デモはやッつける……。
小澤。それから、スポーツの眞似をして活動の機械を叩ッこはす。赤木君を美事當選させる……。
北原。なんだ、まるで自分達だけで當選させたやうな事を云やァがる。
小澤。はははは、まるでそんな氣がするァ。お蔭で、此の間ッからの風邪がすッかりなほつちまッた。風邪藥は痛快丸に限らァ。
丸山。痛快丸ぢやァねえ、闘爭丸だ。
北原。そうだ。そいつァ萬病の藥よ。
小澤。××や×××の畜生め、赤木君の××に限つて、わかり切つた字のまちがひの分を全部××にしやがつたから、まだあれで隨分減つてるんだ。
北原。そうか。
丸山。××の奴ども、きツとビックリ兩でも見たやうに面喰つてやがるだらうな。

小澤。勞農同盟の連中だッてびッくりしてるぞ。
北原。うむ。まさかこんなスバラシイ點が入るたァ思はなかつたらう。
丸山。小松君は、投票場で、赤木君の投票が發表されるたんび、繃帶の中から眼を眞ッ赤にしてたそうだ。
小澤。そうだらうとも。――いや、おれ達だッてびッくりした。まさかこんなに赤木君の……勞農同盟の支持者があるたァ知らなかつたな。
丸山。全くだ。町ぢう恐らく、びッくりしねえ者はゐないだらう。
北原。いつか、すつかり思想が惡化しちまッてたんだな。
小澤。惡化はいいや。ははは……。
丸山。べらぼうめ！　これだけしぼられて、だまされて、苦しい生活をさせられて、それで××的にならねえプロレタリアートがあッてたまるもんか。
北原。異議なし。――ところで、(臺所――上手蔭――へ向つて)おい、酒はまだかい？
細君の聲。今すぐ。
北原。ちッたァぬるくッたッていい。
細君。すぐ。……ぢやァ彦坊、これを先きへ持つてッておくれ。
彦。よし來た。(皿や箸や猪口を載ッけた膳を持つて現れる。)
小澤。ヨイショ。(膳を取つてやる。)

彦、又臺所へ走る。

細君の聲。今度はこれ。

彥。ほい！（大きな丼を持つて出る。）
丸山。彥坊。よく働くなア。
細君の聲。どうしても今夜は自分で運ぶッて、承知しないのよ。
小澤。（丼を膳の上へ置きながら）ほう、豪儀にいろんな物を煮込んだな。
細君。一品きりの代り、ドッサリこしらへたのよ。
丸山。異議なし。異議なし！
北原。さァみんな勝手に取つてくれ。
二人。ぢやァ御馳走になる。（めいめい皿へ取る。）
細君の聲。大丈夫？
彥。大丈夫とも。（銚子を持つて現れる。袴がついてゐない爲め顏をしかめて）あッちッち……。
北原。おッと危ねえ。（取つてやッて、小澤や丸山の方へ口を向けて）さァお祝ひだ！
二人。ありがたう。（めいめい注いで貰ふ。）
小澤。今度は君だ。（銚子を取る。）
北原。ありがたう。

小澤注ぐ。

丸山。（猪口を擧げて）プロレタリア萬歲！
北原、小澤。萬歲！
彥。（傍で兩手を擧げて）萬歲！

小澤等。ははは、いい子だ！（呑む。）

北原。（子供の頭へ手をのせて）お前にも一杯やりてえが、子供は酒はいけねえ。プロレタリアの子供は身體が第一だ。酒の代りウンと御馳走を食べろ。

彦。うん、食べるよ。

小澤。よし、おぢさんが取つてやる。（皿へ取つてやる。）

北原。（臺所へ向つて）おい、お前も一杯やれ。

細君の聲。わたし？

北原。うん。

細君の聲。わたしはいけないわ。

北原。いけなくツたツて御祝ひだよ。滅多ねえや。

細君の聲。ぢやァ行くわ。

細君、エプロンで手を拭き々々出る。

丸山。さァ一杯！（さす。）

彦。僕注ぐよ。（銚子を取る。）

北原。あついぞ。

彦。大丈夫。

細君。眞似だけよ。

彦注ぐ。

細君。(杯を上げながら) 駄目よ、こんなに注いぢや。

北原。はははは、愉快だ。こんな愉快な事ァ此の頃初めてだ。

丸山。久しぶりに酒を飲むよ。

小澤。今夜あたり飲まなけりやァ、飲む時ァねえや。

細君。(北原へ)あんた、まるで自分が當選でもしたやうによろこんでるのね。

北原。自分が當選したも同じ事よ。今度の勝は、赤木君だけの勝ぢやァねえ。おれ達勞働者全體の勝だ。

丸山。そうだとも。おれ達ァ他人の爲めによろこんでるんぢやァねえ。自分達の爲めによろこんでるんだ。

小澤。ほんとに自覺した勞働者ならみんなそうだ。

北原。自分が當選したよりおらァうれしいや。

細君。でも、他人から見たら、きッと花岡さんのお祝ひかと思ふわね。

北原。畜生！ あのダラ幹の野郎が當選したなァ、癪で々々仕方がねえ。

小澤。だが、もう少しで落ッこちるところだッたぢやァねえか。して見ると、社民系の連中の半分以上は赤木君へ投票したんだぞ。

丸山。そうだ。

小澤。きッと、奴泡を食つてるぞ。

北原。なァに、あれだけダラ幹ぶりを發揮すりやァ、自分だッて多少知つてるだらう。だからこそ、奴散々ブルジョアや地主どもの投票を拾つて廻つたんだ。

丸山。野良犬みたいな奴だ。

北原。奴だけが惡いぢやァねえ。ほんとの階級的立場に立つてゐねえ社民黨や大衆黨が惡いんだ。そんな中にゐりやァ、人間もだんだん墮落するんだ。

小澤。そうだ。奴だツて、もとはあんなぢやァなかつたからな。

丸山。そいつを考へると、おれ達も隨分長いあいだ間違つてたな。

小澤。うん、いろいろ理由はあつたがよ。

北原。去年の三月以來の、勞農同盟の兄弟の苦しみや戰ひぶりを考へると、全く濟まねえや。その取り戻しに、これからウントやらう。

丸山。やらう。今迄散々ごまかされて來ただけ、もうこれからはどんな事があつたツてごまかされねえぞ。

小澤。至急同盟へ入らう。

丸山。勿論だ。

北原。フラクションの仕事として、第一に、今度投票した仲間を出來るだけ早くしらべやう。

小澤。丸山。やらう。そして結合しやう!

彦。(突然傍からうたひ出す)ワツシヨォ、ワツシヨォ……。

細君。おや、何を此の子は急にうたひ出したの?

彦。(つづけて)やつつけろォ……。

丸山。(彦の頭を撫ぜて)それ、おれ達はこれから一緒になつて、あらゆる敵をやつつけるんだ。

その時、やゝ遠く自動車の警笛の音。それに交つて、メガホンで呼ぶ聲「社會民衆黨、花岡善左衛門――當選御禮!」

皆。なんだ？

彦、逸早く低い硝子窓のところへ飛んで行つて、あけて、街路のかなたを眺める。

彦。(振り返つて)提灯行列だ。提灯行列だ！

小澤、丸山等。なに、提灯行列？ (おどろいて窓のところへ行く。)うむ、全くそいつの眞似だ！ 畜生、ふざけ切つてやがる。

二人いきなり街路へ飛び出す。

聲「花岡善左衛門——當選御禮を申します。」次第に近づき、長い柄の幾つかの赤い酸漿提灯を車に挿したり手に持つたりした、花岡等四五人を乘せた無蓋自動車一臺、ゆるやかに家の前に現れる。

小澤、丸山、あとから飛び出した北原等。

(車の前へ立ちふさがつて)待て！

自動車とまる。

車上の一人。誰だ？

小澤等。おれ達だ。

花岡。あゝ、君達か。今度はありがたう。

北原等。(それに答へずに) こりやァ何の眞似だ？

車上の一人。御祝ひかたぐ〵御禮廻りをしてるんだ。

小澤。お禮廻り？ 糞ゥ喰へ！ 君達あブルジョア議員どもの眞似をするつもりか。

丸山。ブルジョア議員どもだつて、こんな馬鹿げた事ァしないぞ。

北原。恥を知れ！　そんなに當選がうれしいか？

　此の頃から、人がだん／＼周圍に集つて來る。

花岡。(車上で悠然として)今度は普選初めての町會選擧で、初めての無産黨當選ぢやないか。

他の一人。そうだ。だから、我々勞働者は充分祝つていゝ。

他の者。恥を知れの何のつて、變だな。

丸山。馬鹿！　誰に向つて御禮して廻つてるんだ。

花岡。君達にさ。

小澤。僕達にだつて？

花岡。それからなほ、僕に投票してくれたすべての町民諸君にさ。

丸山。チエッ、すべての町民諸君に？　金持にでも地主にでもか？

花岡。何だつていゝぢやないか。いやしくも無産黨に理解と好意を持つてくれる人間なら、ちつとも拒む必要はないだらう。僕達は、すべからく運動の大局から見なくちやならん。

北原。ふむ、そうか。だが、そんなに吾々の代表づらをするなら、何も御禮廻りなんかする必要はないだらう。

花岡。なぜ？

北原。御禮したいのは僕達の方だ。君ぢやァないや。アベコベだ。

花岡。そいつァ理屈だ。だが君、禮儀として、僕の方からも挨拶をしたつて差支へないぢやないか。

北原。(鋭く)此の自動車代は、一體誰の懐から出てるんだ？

大勢。(口を揃へて)そうだ／＼！

運轉手、恐れて車から降りやうとする。

車上の一人。(引きとめて)おい運轉手君。君、降りちやア駄目だよ。

花岡。(强ゐて豪傑的に哄笑して)はゝゝゝ……君達ァ何をつまらん事をきくんだい。無論僕の懐からさ。

小澤。大した金持ちだな!

丸山。そんな金があつたら運動の爲めに使へ!

聲々。そうだ〱。

花岡。(又哄笑して)君達ア、どうしてそうロケがわからない人だい? 僕がかうしてナケナシの金をはたいて自動車を乘り廻すのも、みんな運動の爲めぢやないか?

小澤等。運動の爲めだ?

花岡。そうさ。これもデモンストレーションだよ。

北原等。デモ?……(啞然とする。)

花岡。(得意になつて)諸君充分諒解してくれたらう。さァ道をあけてくれ給へ。

北原。(强く)斷じて諒解しない。こんなデモなんかねえ。

丸山。そうとも。こんなデモがあつて堪るもんか。

小澤。これがデモなら、手踊りの藝妓屋台を引き出したつてデモだ。

群集の笑ひ聲と呼び聲。そうだ。こんなプロレタリアのデモがあるもんか!

イルミネーションと間違えてやがら。

ダラ幹のデモだ!

おれ達を侮辱してゐんだ。

花岡。（形勢險惡になつたのを見て、急に慌て出して、自動車上に突つ立つて）よしわかつた。ぢやア此の問題はあとでユツクリ諸君と討議する事にしやう。だが今夜は、切角かうして用意して出かけて來たんだから是非一廻りさせてくれ給へ。

群集。駄目だ。〻〻〻。

提灯なんか××××！

すべての提灯、忽ち叩き落される。

花岡。おい、亂暴するな！

つゞいて叫び聲。ダラ幹を引きずりおろせ！

ぶんなぐれ！

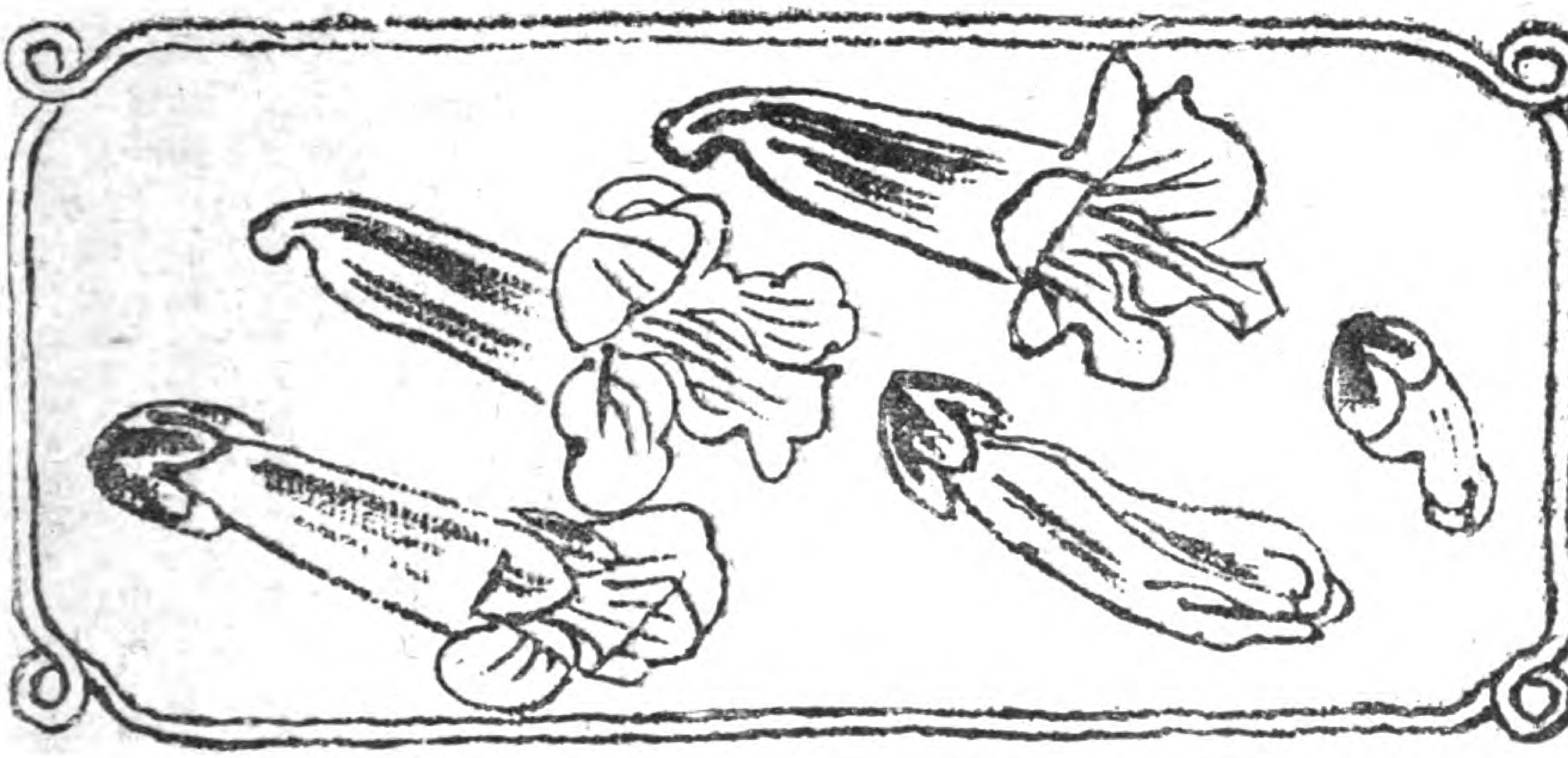
やつつけろ！

花岡。（悲鳴をあげて）巡査はゐないか？　巡査は……。（言葉なかばに引きおろされて叩かれる。）

群集の聲。は、、、……これこそデモだ。

彦。（室の窓から母親と一緒に眺めてゐたが、足踏みしながらうたふ××××××——××××すまで……。

その間に幕



支那（長編小説）

前田河廣一郎

十八

ホンコンといふ港は、高い、階級的な梯子(はしご)の上に建つた、不思議な近代都市である。——

その梯子段のいちばん下は、常に、ドックやセメント會社や軍港の煤煙に、腐つた牛乳のやうに濁つてゐて、不穩な空氣の底では、原始以來の支那人が、喉を裂かれる鷄のやうに騷ぎまわつてゐる。

市街のいたるところに、經濟戰爭のバリケードが散在する。皇后大道(クインスロード)の長さは、それ自らの姿に於て、蜿々たる半殖民地の階級鬪爭のパノラマである。搾取の組織と機關と、治安の法律と大砲とは、洪水のやうにあふれきつた、無秩序で非個人的

な、恐ろしく重厚な混亂となつて押よせる支那人の生存慾と、あらゆるビルデイング、エツキス・チエンヂ、酒店（ホテル）、客棧、銀號、錢莊、サイドウオーク、市場、取引所、碼頭、沖合などに於て、組んづほぐれつ戰つてゐる。——この戰爭だけは永遠だ。

干諾道（コンノートロード）の花崗岩の石堤から、ボツチンヂヤー區域へかけての、西洋人の商業地帶、これは、もののしい銃眼を備へ、機關銃のやうなタイプライター、コムポメータアで武裝した、占領軍の大本營であつて、大理石の城砦の一つ一つは、牛肉のやうに脂ぎり、海賊の眼を持つた無數の資本主義の前衛によつて充たされてゐる。そこから、世界に放射される殺人光線のやうな無電とケーブルとは、直ちにニユー・ヨーク、ロンドン、東京、上海の市場を、それぞれの電波力によつて飜弄し激動する。事務所の掲示板の數字の桁の增減は、全然その事務所と關係もなさそうな場所に、新しい武器を持つた傭兵の群が、古るい馬蹄銀で買つた老耄督辨の支配を顚覆して、城壁に圍まれた都會を掠奪強姦してゐる。

香港廣東澳門汽船會社の碼頭（はとば）から筲箕灣（シユウキヤワン）へかけて、大食した工場主のやうな外國汽船や、一擧にして數千人を殺ろそうと身構へしてゐる將軍のやうな軍艦や、カデツトから始めて金モールを着けた少壯士官のやうな驅逐艇などが、入り變り立ち變り出はいりして、喧しく號令を港へむかつて吐き掛けると、磁力に吸はれるやうに數限りもないジヤンク、石炭船、荷船、家族船、サムパン、物賣船、供水船の群が、あらゆる角度から聚まつて來る。これらの黑い、小さな蟻のやうな船（クラフト）は、陸の人間よりも衝動的であり、群集心理に富んでゐる。……

ホンコンの上部構造は、梯子段の七百フイート以上から工作される。支配階級の法律は、これ以上の高さに、支那人の昇降を嚴禁してゐるのだ。そして、ホンコンが支那の領分であつた時代も亦現在も山の高さには變りはない。ウイクトリア・ピークは、昔から一千八百フイートの雲上に聳えた。

上部構造には國旗がある、文化がある、贅澤がある、美人がある、音樂がある。溫度でさへも、下層の世界とはシヤツ一枚はちがふ。モータア、ケーブル、電線、軌道、自動車、水道、下水、ラヂオ……これらの近代文明の神經系統は、大理

石の殿堂とふくいくとした百花園に鼻孔をひろげてゐる資本戰の元勳や參謀に、戰場とうるさくない程度の聯絡を取ることによつて快よい熟眠を與へてゐる。高價な地價の調節によつて地所をひろく取り、颱風に對する耐久力そのものである、それらの花崗石の上に築かれた大理石の邸や、殿堂や、別墅や、城廓は、阿片戰爭以來、奴隷のやうな支那人によつて、年がら年中、石を運び、木を伐り倒し、地固めをして、最後に西洋人の建築技師の指圖に應じて造り上げられたものだ。そこから、微妙な策戰を講ずる英國紳士達は、天然色の地圖のやうに展ろがる深州灣（ディープベイ）、鯉魚門、九龍灣、半島、島嶼、デルタ地方までの占領區域を、寶石にひかる指先で指し示すことが出來る。足下のヴィクトリア市とホンコン港内とは、いつも手巾のレースとコップの底から、ルーレットの盤のやうに透かして見られる。だが、七百フィート以下に支那人を押留めた彼等も、七百フィート以上にまで達する支那人の視力を、法律で縛ばるわけには行かない。そして、現代の支那人は、カンフル注射で起き上がる病人のやうに、時折頭を擡げては、血走つた眼付で山の上を瞻上げる習慣を持つてゐる。そこで、劣等民族を劬はる傳統に優秀さを誇る英國の紳士達は、サー・アーサア・ケネーデー總督時代から、支那人の眼を痛めまいといふ親切心で、この山の上に澤山の樹木を植えて、あけすけと支配階級の虐殺的な豪奢と富とを見せまいとして、成功した。七百フィートの制限が、『公衆衞生と土地法』といふ人道主義的法律によつたとすれば、このことも、水源涵養といふ非常に都合のよい口實に背景づけられた。そして、深い木立に隱くされた大邸宅群の間には、戰爭に勝ち誇つた紳士達が、『ストランド』や『ヴァニテー・フエア』に欠伸を催すと、ゴルフに、競馬に、亂脈な戀愛に、帝王主義的な飲み明しに、ギリシャの神々のやうな淫蕩な時間を過ごすのである。

　上部構造と下部構造とに極端な軋轢があつてはならない。どちらから見ても、それは氣持のいいものではない。そこで、殖民地政策の一定法式に則つて、山の七百フィート附近の中腹地帶の重要性が生じて來るわけだ。どんな獰猛な支那人と雖も、死を惧れることは英國人と變りはないではないか！　はげしい彼等の生存慾を鎭靜するアンテ・ドートは、「死」の觀

念を常に彼等の頭に植え込むことに限るのだ。寺院と、慈善病院と、監獄と、死體解剖所とは、『死』の各段階に應じた表現であり、それらを山の中腹に密集することによつて、資本主義は肉迫するプロレタリアニズムと適宜な遠近法的胡麻かしをつけることにするのだ。明らかな鐘、香の煙、ゴシック建築の持つ空洞の威嚇、それに女の胎内から生れたことのないやうな僞善的な牧師、――消極的に支那人の死の恐怖を喚かすにはこれで充分である。

かうした用意周到な搾取制度に庇護されながらも、野蠻な支那人は、生意氣にも海賊となつてホンコン近海をひどく荒らし廻はる! 豚群の如く家畜化された彼等が、つひこの頃まで、やはり海賊を働いてゐたアングロ・サクソンを脅かそうと云ふのか!――首は飛ぶ、支那人であるが故に、海賊の首は、密柑のやうに飛び落ちる。

もしホンコンの街で、外國の女王や皇帝の銅像が林立してゐるとか、コンノート、デ・ビユウ、ボツチンヂヤー、ケネデー、モリソン、ボナムなどといふ街の名は、憎むべき支配者達の名であるとかわめきちらして演説をはじめるものがあつたとすれば、一八八八年以來の支那人取締法や一九一二年度の團體取締法が、直ちに適用されるし、又、新しく法律を作製したところが決して未決抑留者を處罰出來ないわけではない。殊に最近の新しい經濟戰術を教はつた支那人が屢々歐米で學んだ學生の煽動に乘つて起こすボイコツトには、れつきとした『ボイコツト取締法』が制定されてゐるではないか。

輕蔑すべき理想主義者、孫逸仙の乾分の鄧芰芳が發行してゐる、危險な民主々義新聞『現象報』は、わづかに二千かそこそこの出版部數しか持たないのであるが、これはいつでもめつけ次第に、南京蟲のやうに捻り潰して來た。

――かう考へて見ると、獸のやうな破浪漢と、水兵あがりと、博奕打と、退職軍人と、三百代言との雜多な集團であるホンコン市民達にとつては、水も洩らさぬ支配制度によつて、堅尼地域から灣仔の貧民窟にいたるまで、支那人といふ支那人は、セメントの壁へ封じた石ころのやうに、完全に七百フィート以下に詰め込まれてしまつたやうに思はれないでもなかつたが……そこに、まだ、何となく不安な何かがあるやうな氣懸りが潜むのである。それは、單なる侵略者の被侵

略者に對する猜疑心であらうか？　謎のやうな廻轉性を持つ東洋人の無道德に對する、西洋人の國家觀念の戸惑ひであらうか？――いや、いや、もつとほかにある。何かある。

食ふことと、金を惜しむこととと、手鼻をかむことをしか知らい貪慾な支那人に、どうして廣東政府の急激な建て直しが出來たらう？　英國人の金で編成した陳炯明の軍隊を破つたのは何の力だらう？　あの黄埔軍官學校の組織的な編成はどうして生れた？　泥溝(どぶ)にころがつて眠むる苦力さへも、小生意氣に三民主義などと論じ立てるのは誰が教育するのか？　むやみに勞役に對する報酬だけをやかましく云ひ立てるコックを見ろ、アマを見ろ、下級事務員を！　英本國の優良な勞働者でさへも最近の支那人のやうにボイコットの、ストライキのと、勝算のない爭議は起こさないぢやないか？　英貨排斥、日貨排斥、取銷不平等條約――その裏には、何が策動してゐるのか？　各國が怪しい、わけても、ロシアが！

かう思つてゐる矢先に、ホンコン市民の眼の前には、意外な一つの現象が突發した。それは、一頭の牛が赤い物に驚いて驅け出すと、數千、數萬の牛が、どどろと土を蹴つて動き出すやうな、無數の支那人苦力、勞働者、事務員、船員達の放心的な、實に不合理きわまるホンコン脱出であつた。――

最初の船が、灰色な五百人を積んで九龍(クーロン)へ行くと、次の汽船は千人を滿載して廣東デルタ地方へ出航した。次第に中央魚菜市場附近に物賣りの影がうすれたと思ふうちに、皇后大道(クインス・ロード)の支那家屋には、瀕死の病人と、娘の子の赤ん坊だけが取り殘されて、家は大半がらあきになつてしまつた。南北行(ナムポクホン)やウエスト・ポイントの古風な支那人の店舗には、いつもの爆竹の音も、婚禮の馬鹿騷ぎもしなくなつて、がらんどうになつた店先に老人達がだらりと水煙袋を膝へ置いて口を開いてゐた。あらゆる海の畸型兒を聚めてゐるやうな支那碼頭にも、いつとはなしに、その一艘づつがどこかへ漕ぎ去つて、古靴を脱ぎ捨てた演說會場のやうであつた場所は、青い、海面を湛へてゐた。たしかにそこは、絨毯を敷いた室内のやうに靜かになつた。何の理由もなしに、ばたばた仕事を疊んで行つてしまふ勞働者のために、大概の工場では山火事のあとのやうに煙筒だ

けが聳えて見えた。……日頃のんきな支那人が、あたふたと急いで行くときの後姿ほど忙しさを感ぜしめるものはない。
ホンコンの市民は、何かの兇變を感じた。これは、眼に見えない鐵鎖が迫つて來たのではないか？　恐ろしい洪水か、戰爭でも？　この急激な脫走は、人間の造つた都會から、今にも人間をすつかり拭ひ去るのではないか？
果して、勞働者群の動向の彼方から、ホンコンといふ階級的な大きい梯子段をゆるがすやうな報告が來た。――五・三十事件？
沙面事件！
そして、三萬人からの支那人をからにしたホンコンの市街の空虛には、すべての英國人を戰慄させる合言葉が、颶風の豫告のやうに見る見るひろがつて行つた。
『ソヴィエット・ロシア！』

一九

一瞬間、このホンコンの市街を、李刀達は、ホテルの窓のスクリーンから恐ろしいものに思つて瞰おろした。
窓のすぐ上には、朝靄に西洋婦人のやうにエールされたウイクトリア・ピークの連丘が聳え、その下には、片側だけ日光に向いた建物の壁が、うつろなポルテコを睜つて、並木の背後から伸び上がるやうにして四角な頭を揃へてゐた。
いつもの朝の賑ひは、瘠せ落ちたやうになくなつてゐた。妙な秋が來たやうなものだ。
撒水夫に見捨てられた、そろそろ照り返へしのはげしくなる鋪道の上には、ひよろ長い影を投げながら、印度兵と英國の下士官が、傳單を蹴りながら歩いて行つた。街路掃除人でさへも、もう廣東へ引上げてゐた。

しばらく無言で英字新聞の朝刊をがさつかせてゐた王英先生は、室のソーファから太枠の老眼鏡を擧げると、もう一度李刀達の注意を促がした。

『――で、その怪しな男といふのは、どちらの方面へ行つたかな?』

李刀達は、窓から眼を離すと、重苦るしい氣持を振りきつて答へた。

『――碼頭のところで、私は振りかへつたのです。やはりさうでした。誰が貴方、猫の仔のやうに丸るくなつて眠つてゐる料理屋のボーイなどに、何が出來ませう。やはり、この私に肩すかしを食はせやがつたのですよ。……で、輪船を彼奴が降りた。私はちよつと電柱の下で、大勢にまぎつて、海の方を向いて――小便をしたのです。生憎と私の後ろに、山の蔭あたりの漁師らしい大男がゐたので、彼奴、私の姿を見失つたらしかつたですな。云ひわけばかりの手荷物を抱へて、港灣局の横丁を、きよろきよろしながら、たうとうラダー・ストリートの方へ鼠みたいに隱れてしまひました。今度は、私の番だ。あん畜生、いい加減に俺を欺しやがつた、と思つて、あとを尾けようとしましたが、やはり先生のところへ伺つてみないと、まだ誰かが私を見戍つてゐるやうな氣がしましたので……そのままになつた次第です。』

『ほう、ラダーストリートか? あれは急な坂町だ。……』

『誰か住んでるんですか?』

『さア、いろいろな人物が住んどるが、――』

『茶館の手代をやつたなんて――ちえッ、人を馬鹿にしてますよ。ですが、一體、何の廻はし者でせう?』

王英先生は、今度は、自分で立つて窓から下を瞰おろした。

支那人を、體格の上から二つに大別すると、先生は肥つた方の人物で、それも脂肪肥りといふよりは、逞しい筋肉の發達によつて白麻の洋服が、フートボールのやうに張りきつて見えたのであつた。眉毛と眼と鼻と頰とが、額と顎の重たる

さでくちやくちやといつしよに寄つたやうなところに先生の特徴があつた。そのまん中だけ緊縮した顏を、黑い太枠の眼鏡が大まかに二等分しようとして、二等分しきれない恨みを、部厚い下唇が不平を云はうとしてゐるらしく突出てゐる。總じて、學者肌らしい、口で云ふよりも五倍も物を考へてゐると云つた風の老紳士であつた。李刀達には、昨夜、紹介の書簡を出してから、いつまでも親しめる人らしくこの老人が見えた。

港の方から、鋭い汽笛が壁と壁の間にまぎれ込んだ。

何かを訊ねようとして、振り向ひた李刀達の方へ、老人は猫脊をくるりと向けると、澁いやうな笑ひを見せた。

『あれを見よ。』

二階であるその窓からは、磨き立てた眞向ひの洋館のガラスに、鮮かに影を曳いて、一頭の白い馬が通つた。馬の背には、ぎらぎらした鞍の上に横乘りにすんなりと掛けた、一人の女が西洋人らしい乘馬服に身を固めて、ゆるやかに馬の動きと共に上半身の調子を取つてゐる。

黑の山高帽に、黑の袴、赤革の長靴に、線のやうに細いスウィッチ、飽くまでまつ白な動物と、乘手の姿はくつきりとコントラストを描いて、見てゐる眼がまぶしいくらゐであつた。

『あッ、ありや支那人ですね？』

李刀達の驚きに、老人は、柄にもなさそうな喉聲で笑つた。

『ホンコンの名物だよ、彼女（あれ）は！』

『へーえ、誰ですか、一體？　大膽きわまるね、この毛唐の街に！』

『別嬪だらう？　――曲者さ。恐らくあんなあばずれ女は、中國ひろしと雖も、たつた一人しかゐないだらうよ。あれが商賣なんだ。』

『すると、何か、曲馬團にでも――？』

老人は、その言葉に、兩手をちぎれるまで振つて笑つた。

『曲馬團か、これは妙だ。何、人の妾さ。ああやつて、毎朝遠乘りに一度は出るんだ。――それ、お前が昨夜、怪しい男を見失つたと云ふラッダー・ストリートに住んでる王平といふ金持の妾だ。…あッ、これは、ひよつとしたら――』

それきり老人は、窓から顏を引込めて、もとのソーファへ重さうな彈機の音を聞かせて掛けた。

李刀達には、まだ椀を伏せるやうな蹄の音が耳に殘つてゐた。谷鈴のやうに曲つたビルディングの袖に、馬上の女も、馬の影も白い幻影と消えてゐた。彼は眼の裏が、ちかちかと疼むやうな氣がした。

『おい、李刀達、かうしちや居られない！』

對手は、もう一度彈機の音を聞かして、樽のやうに室のまん中へ飛び出した。

『しかし、待て。…あの女が歸へるんだから、今は――』

彼は懷中時計を出して見て、しきりに口の中で何かを呟いてゐたが、しまひに、

『よし、間に合ふだらう！』と云つて、別室の帽子掛のパナマ帽をめがけて歩を運んだ。

『ついてお出で、――お前は、今日からわしの從者といふことに。』

李刀達は、何が何やら一向に要領を得ないうちに、王英先生によつて、扉の鍵をおろされて、宏壯なギング・エドソード・ホテルの油を流したやうな廊下に立つてゐる自分を見出した。

幸ひと、朝起きしなに、老人によつて手渡された洋服は、前に働いてゐたといふボーイに背丈がしつくり合つてるので、昨日以來の汚らしい服裝を脱ぎ捨てることが出來たのであつた。

ストライキがはじまつてから、リフトが、支那人ボーイ達にすつかり投り放しにされたので、客はぶつぶつ云ひながら、

正面の階段を、昇つたり降りたりしてゐた。それらの一人一人が、悉く英國人だつたので、李刀達は忌ま忌ましげに唾を吐いて歩るいた。

老人は、大きいボールのやうに階段を、丸るく駈け降りた。

『あッ、自動車がない!』

表へ出ると、老人は氣短かにさう呟いて、またもとの帳場へ取つて返へして、何かをマネーヂャらしい英國人と談し出した。

間もなく、二人の支那人は、横柄な外國人の運轉士に顎でしやくられながら、音もなく滑つて來たロールス・ロイスに朝の風を切つてゐた。

市街は、どこを見ても英國の軍人の姿のないところはなく、銀行や役所々々には、きらびやかなバンドを締めた兵隊が、ぎらぎらする銃劍をつけた小銃を構へて、審かしそうに通行人を睨めてゐた。

『どうなさるんですか——何處へ?』

『いや、面白ろいことに出遇はすかも知れんぞ。まア、默つて見とれ。お前、王資平を知らんな?——口をきくんぢやないぞ。』

はじめて、眞劍らしい顔をして、王英先生は眼鏡の奥から、じつと李刀達の顔を熟視した。

『毛髪屋の二階——不思議な老人——ホンコン——王先生——馬上の女——時計——』と考へてみて、李刀達にはその悉くが、今にも非常な苦痛を作つて、大きい切紙のやうに覺める夢であるやうな氣がした。神祕と、冒險と、芝居氣の好きな彼でも、ここまでは運んで來られたくなかつた。

『いつたい俺は何をして居るんだらう?……何處へこの自動車は走らうとするのか?……俺だけが正氣で、ほかの人間は

皆沙面の事件で氣が狂つてしまつたのかしら？……」

何かの病氣の場合のやうに、しきりに鈍い苦しみは感じて居ながらも、頭だけは硝子のやうに冴えて來るのを彼は感じた。そして、鋭利な頭腦の働きは、自分の現在營んでゐる行動とすれすれになりながらも、水の上に影を落す飛行機のやうに、それを遙かに下の方に眺めて一直線に、夫自身の進路を走つて居た。ただこの際、李刀達の一つの信頼は、あの二重壁の部屋で妙な老人に言はれた、

「王先生は、謂はば儂の片腕とも云ふべき人でのう。革命の爲めにはずいぶん功勞のある仁ぢや。」

といふはつきりした音吐の記憶だけである。

自動車は、ラダー・ストリートへ切れる皇后大道（クインス・ロード）の角で止められた。

默々として、賃銀を拂つて、人差し指を元來た方へさした老人の無表情な顏には、極端に英國人を鼻であしらつたやうなところがあつたので、李刀達は心ひそかに威張りちらした運轉手をあざわらつた。

横町の小路が西と東へ別れるのを、二人は傍目もふらずに坂路を上つた。

と、そこへもう一度朗らかな馬蹄の音がして、先ほどの女が二人を追越して上へのぼつて行つた。何かの拍子に、自動車の方が彼女を途中で追越したのを、李刀達は見そびれたのにちがひなかつた。

たくみに組み合せたセメントの勾配が、一段二段と桁を増して行くと、さすがにあと足で障害物を越えようとする時のやうに馬が突つ立つので、鞍の上が不安に見えたらしく、女は馬を止めると手綱を引きながら、輕く長靴の皮をしなはせて上つて行つた。

「良い馬だな。」

老人は、とつて附けたやうな讃詞を浴びせた。

『良い女だな。』

しぶい口調で、前の文句を訂正するやうにかう云つた言葉は、かうした狹い屋敷町で、眞顔な老人の口から出るものとは思はれぬほど見當ちがひな氣がした。

最後に、思ひ切つてせゝら笑ふやうな口吻で、老人は前を行く女に留めを刺した。

『――あんな馬は、二匹と支那にはないんだ。』

恰度その時、女と馬とは、建物ならばものの三階も高からうと思はれるところで、ぐるりと向きを代へると、女が手にしたスウイツチを水車のやうに振り廻しながら、何やら聲高に叫んだと思ふと、横手のいかめしい石造りの門の中へ、馬諸共に姿を消してしまつた。

さすがに王英先生は太り肉だけあつて、せいせい息をはづましてゐた。女の這入つて行つた邸の前まで來ると、彼は鼻で息を吸ひながら、追ひ縋るやうに李刀達のコートを引いた。そこの頑丈な鐵扉を持つた石門は、狂ひのない鬼出しのやうにぴつたり締つてゐた。

老人は、しきりに小首を傾けながら、門柱の何處かに呼鈴を探がしてゐた。

『こゝは、呼鈴なんかないんでせう？』

かう李刀達に注意されると、老人は始めて長い間の謎を解いたやうに、密集した眉毛と眼と鼻の間をひろげでにやりと笑つた。

『さうだ――おい、開けて下さい。わしは、キング・エドワード・ホテルに居るドクトル王英ぢやが、至急御主人にお目に懸りたい！　急用ぢや！』

嗄れた後の大聲に對して、意外に眞近い所から誰かの應へる聲がして、半分ほど花模樣の鐵柵になつた鐵扉の向ふに、

眼の險しい、まんぢゆうのやうに頰の張り切つた、若い支那人の警官が、脊中にライフルの筒先をぎらつかせながら、ぬうつと上半身を現はした。

『王英博士ですか？』

『急用ぢや。御主人はおいでかの？』

『さあ、伺つて見ませう。――貴方も知つてらつしやる通り、王資平氏はいつも何處へ泊まられるか、私共にはちつともわからないのでしてな。別莊が四つもあるんだから、なかなか泊り歩くにも骨でせうよ。』

この門番警官のあいまいな口吻に老人は殊のほか立腹したらしく、せき込んで扉を叩きながらかう云つた。

『第三夫人燕氏が乘馬から歸つて來たんだからきつとゐるにちがひない。――嘘を云つたら承知せんぞ。』

この權幕に恐れて、警官は錠をがちやがちや云はせながら、伏目勝ちに扉を開いて、白手套の手で老人に擧手の禮をした。

開かれた扉の向ふには、何かの花をつけた古木が立ちはだかつてゐて、その氣ちがひじみた陰影のしなだれかゝつたところに、眼の冴ゆるほどの大理石の洋館が、深々と青と白の立縞の日覆ひを下ろして、涼しさうに建つてゐた。道は細かいダイアモンドの屑を敷き詰めたやうに、歩るく者の眼を無數の反射でちかちか射した。それが、老木の前で二た股に岐れるところで、先刻の馬の蹄の跡は、邸とは反對の、西洋人だけが工夫する複雜な、屋根のない石の建物らしい方へ消えて行つた。

二人の這入つて來た表門が、もう一度錠前を下ろされると、邸内のどこかに蟬の鳴く聲がした。

表玄關まで行きつかぬうち、正面の大扉がいつの間にか開いてゐて、青桐の上衣を着た支那の青年が象牙のやうな額を見せて、二人の前に敬禮してゐた。

二十

廻轉椅子のスミルノフは珍らしく廻轉椅子から離れた。

彼は、その無恰好な巨軀を、財政廳のビルデングに向つて運んだ。正面の石段をのぼりきると、そこに不動の姿勢を守つてゐる番兵に、上衣の裏側をまくつて見せた。裏側には、赤いリボンに彼の名が書いてさがつてゐた。番兵は、寒さに筋肉が硬直したやうな表情で、魚の鰭のやうに擧手の禮をした。

スミルノフは、さほど香りの良くないパイプの煙草をその邊に吐き散らしながら、忙しさうに開いたり閉ぢたりするドアの間を縫つて、ゆつたりした足どりで二階、三階へとたどりついた。

三階の中ほどのドアを、熊のやうな拳で叩くと、中から一人の士官候補生が現はれて、無言で彼を通した。

天井を高く取つた會議堂には、水のやうに光る長いテーブルを差し挾んで、七人の人間が、小さく、何かに壓迫されるやうに、前踞みになつて相對してゐた。中ほどに煙草の煙が漂つて、灰皿を共通してゐることが解つた。高い壁のどこかには、その煙の絲があるかないかの縞を織つて漂つた。明かに彼の這入つて來たドアからの煽りが、靜かな煙の層を掻き亂したものにちがひない。

それと同やうに、一同の視線もスミルノフの方へちよつと轉じられたが、彼の大きいパイプとヘルメット帽とを見、その帽子の下の大きい顏が筋肉を弛めてにこつくと、彼等は安心したやうにもとの方向へむき直つた。

スミルノフは、遠慮をするやうに、一同から稍遠ざかつて、一脚の椅子をぎゆうぎゆう云はせながら腰かけた。

『では、第一に決議機關、第二には執行機關、第三――これは先刻も議論のあつたところだが、獨立機關といふことにした、これで組織の大綱が出來たわけだね。――決議機關には罷工工人大會があり、それに法政局が附屬する。この法政局

は、臨時首席團五人が代表する。執行機關は罷工委員會の手に在るのだが——その細目は、まだ準備委員會の方で確定した案を寄越してゐないが、おそくも今晩までは大體のところが起草されるらしい。それから獨立機關だが、これは勞働學校と醫者、それがまあ直接ではないが罷工團の組織の一部に參加する。——大體この經濟絶交は今までの排外運動のやうな自然發生的なものではいかん、どうしてもこの際帝國主義打倒の國際的運動にまで結び付くべきものである、といふのが一般戰略であつて、現在の戰術としてはこれで鬪爭を開始することとなるのだ。」

かう云ひ終つた一人は、ポルトフォリオを疊んで新しい煙草に火を附けた。

「執行機關の職能は、僕の考へではかなり複雜な活動範圍にまで亘るだらうと思ふが、準備委員會の方では、よくその性質を研究してゐるだらうかしら？——たとへば、スキャップに對する裁判だとか、ピケッテングの配置方法だとか？」

反對の方の、窓の光を背負つた、海坊主のやうにぼんやりした姿の男が、餅をちぎるやうにねばつこい口調で質問した。

『そりあ、勿論さ！　この際武力に訴へてもわれ〳〵はホンコン封鎖を裏切る工賊を排擊せんならん……出來るなら、この際軍事委員會から加勢して貰ふ方がいゝと思ふ。」

これはわりに若やいだ、肺の力に任せて發音した言葉であつた。

そこで、この非公式な相談會にちよつと議論の分岐點が起つたらしい。スミルノフには、これ等の支那語は一言も解らなかつたのであるが、數人の人間が一度に持説を主張するとなると、勢ひ彼の注意を惹かないわけには行かなかつた。彼は眼を細めて、熱心に細い腕を振り廻はしてゐる工人部長の廖仲愷の黑い横顏を見戍つた。相變らずこの男の前には大きい鞄が載つてゐた。

しまひにかん高な支那語の粒々が砂糖のやうに沈默の中に溶け込んで、一としきり皆が煙草を喫ひかけた時に、支那服

を着たその一人が、拳の腕時計を捲くり上げて、兩肩に力を入れて起ち上つた。

『僕はこれから二つばかり會合があるので、これで失敬します。大體今の御説明ではつきりしてゐるやうだが、すべては基金の問題だ。それには、この際各國の華僑團體に打電して寄附金を募ることだね。——何しろホンコンから三萬人も來てゐるし、それにこの廣州地方の勞働者全部が參加すれば、なまやさしい軍團の給料どころの騷ぎぢやあないからな。ざつと昨日勘定しただけでも、總數十萬人からの罷工參加人員になるぞ。それを賄つて行くには、この借金だらけな廣東政府では明日からでも破産だ。僕は元來樂天的な方だが、今度ばかりはちよつと前途のことが見透せないね。……まあ、僕の希望は、今日のところその位にして置いて、あとは一つじつくりと會議にかけて練り上げようぢやあないか。民衆大會やその他の諸團體の決議を執り上げるのもよからうが、何よりも先に戰爭は金だ。しかも、この戰爭がいつまで續くかは、經濟戰の常として、輕々に豫測は出來ない。——やるなら、今度こそは、負けたくはないからな！』

彈力のある言葉でかう述べた支那服の男は、一同に會釋して、戸口の士官候補生からパナマ帽を受取ると出て行つた。この男は、昔辛亥革命當時、一介の青年でありながら、爆彈を抱へて清朝の攝政王をねらつたので有名である。スミルノフは、瞳を大きく瞬いて、どこかしら滑かな餘韻を曳く支那語の發音者である汪精衞を見送つた。

しまひに、席上の誰彼も、各自に時計を出して見て、二三の雜談を交はしたのち、椅子を立ちかけたので、スミルノフも足元の痰壺へパイプの灰を落すと、椅子から腰を上げた。

『ちよつと、廖仲愷さん——少しお話があるので、』

大きな男は、稍氣恥しげに小さな男に向つて動いた。

『スミルノフさん、私個人にですか？』

廖仲愷は、演說する時のやうに椅子を片手につま立てした。

『少し內密です。急ぎますか？』

『いや、御用ならば……。』

『誰も居ない所がよろしい。——この人達もう歸るのでせう？』

對手がその返事をするまでもなく、役人達はめいめいに急にからだの重みがふえたやうな足どりで、默り勝ちに室內を出て行つた。廖仲愷は、ふりかへると、扉口に立つてゐる蒼白い士官候補生へ暫時遠慮するやうにと命じた。

廣い室內は、この大男と小さい役人との異樣な二人きりのものになつた。スミルノフは對手を窓ぎはへ誘つてちよつとの間しげしげとその顏を打戍つた。

『廖仲愷さん、貴方、氣を付けるとよろしいな。——誰か、貴方を尾けねらつてゐる者がありあしませんか？……つまり、貴方の敵か、味方かで？心當りはないですか？——實は一昨日からどうにかしてお知らせしようと思つてゐたんだが、電話でも都合が惡いし、と云つて、貴方はこの通り事務所にはちつともお出でにならんし、』

かう云はれた廖仲愷は、濃いまばらな口髭を二三度指先でこすりながら、始めて英語でも習ふ人間のやうに暫く對手の言葉を考へてゐた。最後に勢ひよくその口髭を引つ張ると、俄然として彼は頭を眞つ直にした。

『有り難う——萬謝です！しかし、もし私が、自分の死に對する恐怖から、もしやと思つた人間の名を、たとへ半分でも口にしたとすれば、それはわれわれの革命工作とは相容れない臆病な羞恥にちがひない。——有り難う！』

この最後の言葉に力を籠めた工人部長は、あまり大きくない黃色な手を差伸べて、ロシア人の白つ茶けた拳を握つた。

『ほかの同志達、皆忙しいです。私一人この通り遊び人です。だから御注意します——この間貴方が同志ボローヂンと

お台見になつた直ぐあとで、私何氣なく窓の下を見ると、二人の人間が、勿論支那人です、貴方の自動車のあとを見てゐるました。一人は紳士か、商人といふ身裝、首の太い男でした。もう一人は、苦力です。をかしいぢやありませんか、この全く關係なささうな二人が、何か手眞似で貴方の自動車の行つたあとで話合つてゐるのです。……ほんの一秒時間のことで、それは好奇心から出た見物人とはちがふ小機敏さを以つて交はされた暗號です。同志ボローヂンの心配では、多分貴方が少し頻繁に亞洲酒店(ホテルアジア)に出入しなさるからだらうといふことです。――どうも、われ〳〵ロシア人には、支那の同士の混み入つた昔からの關係が解りません。」

廖仲愷は、嬉しさと悲しみに同時に打たれたやうなちぐはぐな表情をして幾度も頷いて見せた。しまひに、對手の言葉が途切れると、彼は兩手を翼のやうにひろげて見せて、急に快活に笑つた。その片手には大きい鞄が子供がぶらんこへ乘つたときのやうに震れてゐた。

「殺(や)られたら、私の妻が居りますよ。……あの女には、たいていの男が敵ひませんからな！」

「何香凝さんですか？――いや、貴方は仲々のユーモリストです。」

思はず釣り込まれてスミルノフもいつしよに笑つた。しかし、この突發的な笑ひ聲は何かしら東洋人流な不可解――不自然なものが感じられた。孫文の高弟であるこの小さな活動家にも、人に知られぬ惱みがあるのだと、スミルノフは皺の深い東洋人の顔を見て、しみじみと感じた。

二人は握手して別れた。

スミルノフの本性は、自分も動きながら他の動いてゐるものを見ることを要求した。

さういふ意味から、現在の廣東市をぶらぶら歩いて行くことは、彼の觀察を豐富にする絶好の機會であつたとも云へ

る。

多數の勞働者が、新聞社の前に集つて、腰を屈めながら、張り出された新聞を讀んでゐる。その或る者は、他人の頭が邪魔になるのでからだを古い釘のやうに曲げて、頭だけ突つ込んで活字に眼を曝してゐる。讀み終つた二三は、熱心に手を振り動かしながら何かを論議してゐる。そこには何の不自然なものもない。支那の新しい革命的な動きに彼等は熱狂んてゐるのだ。大衆がこゝまで動いてゐれば、それをリードする國民政府は非常に樂だと謂はねばならない。しかし、あまり容易に支那の大衆が雷同するための指導者側の安易な氣持が、かへつて思はぬ誤謬を招ぎはせぬか？ ベラ・クーンのハンガリア革命に於ける、ボローヂンのトルコに於ける、それぞれの失敗の原因はどこにあつたらうか？――スミルノフは、煙草の煙と共にかういふ考へ方を空中に分散して歩くのである。

それでなくとも人口の密集し過ぎるほど密集した廣東に、今はホンコンから罷工者や、九龍やデルタ方面の勞働者をくはへたので、狹い舊城内の街々は、凄まじい人間の洪水が渦卷いてゐて、その元氣な、鬪爭的な騷々しさは、殆んどどんな國のカーニバルにも想像し得ないぐらゐである。

かういふ群集の都會に溢れきることは、何處の國でも十年に一度とはないことだ。この複雜な群集には、いろいろな個々の要求や、希望や、生活を通じて、海中の魚が一色に見えるやうに、唯一つの強い力が溢れてゐるのだ。すべてを綜合した無產階級民全般の烈しい反抗意識が、今何かの方法を通じて具體化しようとしてゐるのである。數十年も前から失敗に失敗を重ねた彼等は、唯一つの實行方法として組織を持たうとしてゐるのだ。組織の要求に應じて、組織を計劃する頭腦がその役割を果さうとしてゐる。……

スミルノフは大股に群集の間を拾つて歩きながら、長い陰鬱な曇天のあとで、久しぶりでからりと晴れた夕立を待つた

やうな快さを感じた。なるほど支那の大衆も、その本質には變りはないものだ。それを變つたものとして差別化し、劣等化し、半殖民地視するのは、たしかにブルジョアジーの見方である。ブルジョアジーの奸策である。

とある街角にさしかゝつた。急いで通り拔けようとして、ふと彼の眼に止まつた一團の勞働者の煤ぽけた酒店で、半裸體になりながら大きい圓卓を圍んで話してゐるのに出遇はすと、ちよつと立ち止まつて見る氣になつた。一人の黑布を腕へ卷いた勞働者は、箸を取り上げると、樂師がベトオンを揮り上げるやうな調子で、咽喉いつぱいの聲で何かを叫び出した。少しは醉つてゐるのかも知れないが、その男の瘦せた咽喉首に膨脹して動く頸動脈を一と眼見ると、スミルノフは直感的に、

『時は來た！』

と感じた。

やがて、一團の勞働者達は鈍い重苦しさうな動作で、一齊にその男の叫んだことを繰り返した。煤ぽけた酒店の壁から、今にも凄じい何かが飛び出して來さうな反響が起つた。思はず、外に立つてたるスミルノフも、手を叩いた。一分間の後には、彼は完全に半裸體の勞働者達に包圍されて、唯にやにや笑ひながら彼等の突き出すブリキ罐の盃に、水とも酒ともつかぬ物音を立てゝゐる液體を拒むことに全力を注がねばならなかつた。

彼等は口々に勝手なことを喚き立てた。しかし、それは皆この不思議な赤髭を尖がらしたスラヴ人に對する好意から出てゐるものであることは、敏感なその表情でよく解つた。

何も云ふことがなかつたので、スミルノフは、試みに、

『廖仲愷（リヤンチヨン・カイ）！』

と呼んで見た。

すると、酒店の壁が崩れ落ちるほどの響で、その友人の名前が無數の小銃のやうに彼の前で爆發した。

『孫文（スンウエン）！』

これは前にも增して、喚呼の聲が高かつた。或る者は、箸や手を叩いて、その名を繰返した。二度も三度も、同じ名が群集を行亘つた。

ミスルノフは、子供のやうに興に乘じた。思はず知らず、彼は『李大釗（リタチヤオ）！』と叫ばうとして、これだけは口を噤むだ。

『陳烱明（チエンチユンミン）――』

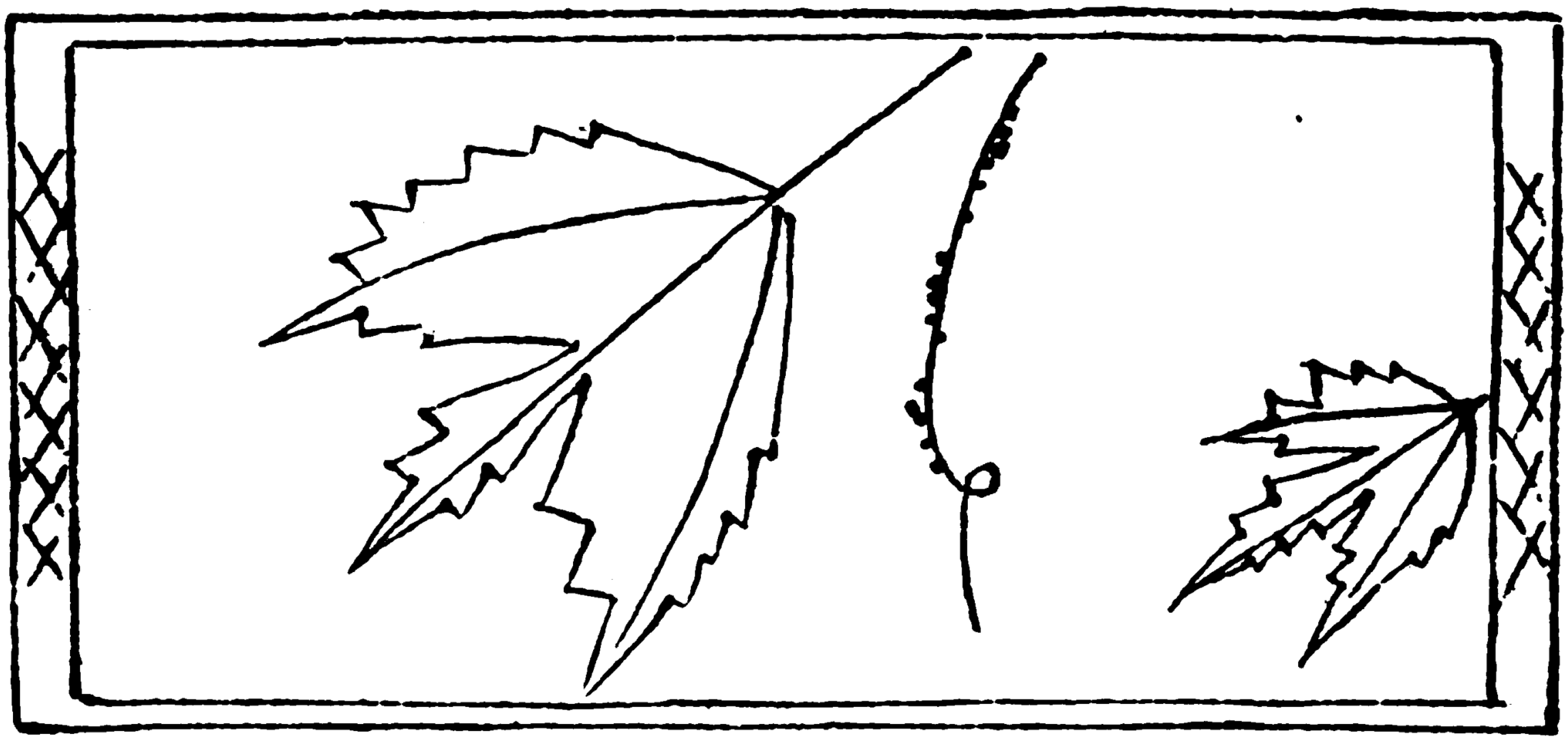
勞働者達の表情は、最初外國人の云ひちがひだらうと疑ふ風であつたが、スミルノフの輕蔑したやうな唇を見ると、彼等も一齊に横を向いたり、足を投げ出したり、拳を握つたりして無氣味な土人形のやうな顏を見せた。

『蔣介石（チエンカイシエク）！』

これには、贊否半々ぐらゐで、最初音頭を取つてゐた男の如きは、白い齒を剝いて齦の間から、蛇のやうな物音を吐いた。

スミルノフは、ロシア流に手を擧げて、のつそりとその酒店を出た。

――（次號完結）――



ペトロンを捜す女

徳田秋聲

『日本畫家の福井紫耕の妹で、大内友子といふ婦人が、一度貴方のところへ遊びに來たいと言つてゐますが、連れて來ても可いでせうか。』

劇場の廊下や銀座や、何かの會の席などで、幾回か口をきいた覺えのある、新進劇作家の花房が、歸りがけに彼のテーブルの傍へ寄つて來て、映畫の話などした後で、思出したやうに、さう附加へた。そこは彼は散歩のときに休むことになつてゐる喫茶店であつた。

彼はちよつと聽耳を立てた。紫耕の妹のことならづつと以前に誰かから何か聞いたことがあつた。餘り好い噂ではなかつたけれど、彼は世間の噂をその儘に受取ることのできない質であつた。世間の噂に好い素姓のものは滅多になかつた。普通の

好いことは此の人生では當り前で、平凡で、世間の興味にならないに決まつてゐた。噂は大抵怪しげな世間の創作家達の口から產出されるものであるが、事實は噂よりか幾層倍惡いこともまた珍らしくはないが、さういつた特殊な場合は、大抵、善良な世間の日常常識に揉まれて、月日がたつにつれて平凡化されてしまひがちである。勿論大内友子が何んな惡い噂の持主であつたところで、彼女の訪問を拒む理由は少しもなかつた。彼自身が餘り好い噂の持主ではないばかりか、寧ろそんな女も一應知つておくのも無駄ではなかつた。

『あゝ可いですとも。』

『いつ頃が好いでせうか。』

『いつだつて構はない。電話をくれさへすれば。』彼は心安く承諾した。

彼は安請合ひに請合ひはしたが、女性ではいつも彼の尤も弱いところが露出しがちで、まるで自身の身のうへだとは思はれない人格の一面が飛出して來るので、近頃はぐつと手を引締めることにしてゐた矢先き、又しても醜禮が出るのではないかと懼れられた。それに彼の其の種類の好奇心も、到るところ幻滅の憂き目に逢つてゐた。しかし其は其として、景氣の好い時代に、あんなに花やかであつた人氣畫家の福井紫曙の妹に會ふことは、床の花瓶の花を生けかへるくらゐの興味はあつた。

花房青年から電話の來たのは、それから大分たつてからであつた。

『大内さんが今日御都合がよかつたら、御飯を差上げたいと言ふんですが、如何でせうか、伺つてくれと仰つて、花房さんからのお電話ですの。何と申しあげませうか。』

取次ぎの電話に出て行つたお婆さんが言つた。

彼はその四五日前に留守中訪ねて來たといふ婦人を、漸と思出すことが出來た。『こんな方ですよ』と、外から歸つて來た彼に、所番地づきで大内友子と書いた紙片を見せられた時、彼は花房青年と約束したことも、婦人の名前もすつかり忘れてゐた。

『へえ、誰だらう。どんな女だらう。』

『何ですか四十……あれでも二三でせうかね。氣輕な方ですよ。』

『何の用事だらう。』

『何とも仰やいませんでしたよ。又伺ふと仰つて。』

それが何ういふ種類の女かと云ふこともお婆さんの話では全く見當がつかなかつた。又例の家政をやらしてくれといふ女の一人かも知れないとも思つてゐたが、今の電話で大内友子が其女であつたことが漸く判つた。午後の五時頃で、彼は晩飯を家で食べようか、何處かへ出ようかと思案してゐたところであつたが、さて何處へ行かうといふところもなかつた。彼は暫らく讀書にも創作氣分にも遠ざかつてゐた。解決しなければならない澤山の問題や事務をも回避してゐた。例へば三年も滯つてゐる納税だとか地代だとか、魔の業のやうに何時の間にやら一品二品づゝ何か彼か紛失して行く家財の散佚を防ぐ方法だとか、氣分を落着けて仕事に取りかゝるべく家を今少し住心地よくすること、二三年通學を思ひ止まらなければならない中學生の子供に對する、今少し徹底的な手當の方法と家庭教育、この夏の子供達の避暑、非難の聲の多い傭人の處置、代りを見つけること、月々に氣の滅るほど出て行く少し許りの預金、庭や裏の花畑のことも、彼の貧弱な生活の面を、下らなく無闇に複雜に陷れる惡い趣味病の一つであつた。この頃は又義太夫を一緒に稽古しませうといふ女や、裏の空地に借家をたてゝ、住まはせてくれといふ女もあつた。しかし生活がどんな重荷であるにしろ、自身のことや子供

達のことやを、自身で自由に考へたり空想したりすることは、兎に角彼に取つては幸福であつた。

『この神經のぴり〳〵したおばさんの代りに、二人の娘の孰かゞお給仕に坐つてくれたら。』彼はさう思ひながら、調理の殊に上手なおばさんの手になつた晩飯を、獨りで嚥込むやうに、さつさと食べてしまふのであつたが、それを口へ出すことは出來なかつたし、それも何だかみぢめつたらしい感じであつた。

『行くと言つて下さい。所をよく聞いて。』

『はい。では晩御飯はいゝんですね。』

彼は煙草をふかしながら、庭へ降りて行つた。石から石を取まいた叡山苔や熊笹が、山路を行くやうに生茂つてゐた。山梔子やお茶がぼう〳〵新芽を立てゝ、草の間から山百合の莖がひよろ〳〵拔出してゐた。去年造つたこの庭も、朝晩に見睨んでくると、いきなり一ト思ひに掃きすてゝしまひたくなるのであつた。庭は建物とちがつて、カンバスの繪のやうに、時々構圖や色彩を刷きかへうる種類のものでもあつた。そんな技巧も亦現代的に新しくなりつゝあつた。それはちやうど各時代各派の畫風を敏感に驅使した新時代の日本畫のやうなものであつた。

裏へ出ると、些やかな池のまはりに、五つになる男の子をつれたきよう子が彼の子供と水蓮の葉に止まつてゐる蛙に興じてゐた。出來たての泉水に、もう湧いた蛙か、どこからか迷ひこんで來たのかゞ問題になつてゐた。きよう子は自分の借家の庭から持つて來た草花を植ゑたりして、二時間も遊んでゐた。きよう子は近頃良人と別れたばかりであつた。彼女は自分の腕でこの子供を育てゝ行く方法について、少しは彼の力が假りられるかと思つてゐた。白粉氣などの絶えてなかつた彼女の顏が、百合の花のやうに白くなつて、だらしのなかつた曾ての身裝もきりりとしてゐた。

『カフエ何うでせう。』

『まあ、取着は早いだらうが……。』

「御存じのところないでせうか。」

「僕は知らないけれど、頼めば頼んで見るところもないこともない。」

「實は新聞の廣告を見て、ちよつと行つて見た家があるの。」

「場末？」

「いゝえ、場末どころか、目貫の場所よ。」

「銀座裏？」

「でもないけれど。」

「そしたら……。」

「私涙ツぽろいものだから、貴女にはこんな職業はお氣の毒だといふの。」

勿論舊い趣味の下町で名の賣れた料亭に育つた彼女は、餘りぱつとした方ではなかつたし、新時代の女性氣分でもなかつた。長い間の苦勞が、彼女の表情から若さを搾り取つてしまつた。

「今日は。」木戸から竹叢のなかを通つて、こちらへ遣つて來たのは、この間遊びに來てゐた藤子ときよう子とで、金魚をうんと買つたことのある金魚屋であつた。

「あゝ、水蓮が入りましたね。この間こちらへ持つてこようと思つて、餘所から頒けてもらつて來たら、餘所の奥さまに買はれてしまつてね。もう入らねえかね。」

「もう入らないね。」

「さうかね。金魚を買つて下さい。」

「こなひだの金魚みんな死んぢやつたぢやないの。」

『さうかね。あの水盤は狭かつたからね。こゝなら大丈夫請合ひだよ。』
赤い五六匹の金魚が蒼濁つた水のなかに、潤んでみえた。目高が水の面を敏捷にすい／＼動いてゐた。
暫くすると金魚屋は表において來た金魚を二種類ばかり持込んで來た。そして何かと油を賣つてゐるうちに、少しばかり賣りつけた。すると今度は別の金魚盤が持込まれて來た。優秀な金魚が五六尾底の方にかたまつてゐた。
『もう澤山だよ。買はないよ。』
『買はなくても可いですよ。』金魚屋はさう言つて、その一尾を掬つて、網杓に載せたまゝ、惡戯さうに泉水に浮かしてゐた。金魚が放れさうになると、急いで掬ひあげた。そして仕舞ひにそれを放してしまつた。腹の重さうな金魚は、薄絹のやうな尾をゆら／＼させて、廣い水を泳ぎはじめた。
『そんな金魚は弱くて駄目だよ。』
『さうでねいですよ。これなら死ぬ氣遣はないよ。』
　金魚屋は又二匹すくつて放した。
『買はないよ。』
『可いですよ。上げて行きますよ。』金魚屋は暫く金魚を泳がしてから、掬ひあげようとして、わざと掬へないやうな風なして、しばらく赤い生きものを追つてゐた。
『水蓮の葉が邪魔になつて可けねい。旦那三匹買つておくんなさいよ。』
　彼は金魚屋の伎巧に感心して到頭負けさして金魚を買つてしまつた。
『うまいよ君は商賣が……。』さう言つて彼は金を拂つた。
『旦那もうまいよ。』

部屋へかへると、例の通りそこに襦絆を重ねた着物や羽織が、手を通すばかりになつて、足袋やハンケチと一緒にきちやんと揃つてゐた。彼はも少し呑氣にしたかつたが、着替をしてゐるところへ、お婆さんがせかせか〳〵遣つて來て、手捷く衿を直したりした。普通女中の三人前を彼女は何時でも氣が屆いた。彼にはそれがちよつと煩はしかつた。

暫くすると彼は或る小意氣な構への家の、水をうつたばかりの石疊をかち〳〵踏んで入口に立つたが、この會合が何うといふことのある譯もなかつた。

女中の案内で部屋へ入ると、友子らしい女の立つて出迎へるのに出會つた。花房と今二人の青年が、そこにゐた。

『今夜は畫家の××さんや、美術批評家の△△さんも見える筈でしたけれど、みんなお差閊へがあつて來られないんですて。』友子は初對面の挨拶がすんでから辯解らしく言つた。みんな相當大きい名前の人達であつた。

よく見ると、彼女の鋭い目も、づんとした鼻も、締つた口も、皆んな刻んだやうに線がくつきりしてゐたが、おどんだ皮膚の色や、耳の附根から頸筋へかけてのさびしい影が、彼女の年を語つてゐた。見やうによつては貴族らしい型でもあつた。どこかで見たやうな顏の感じで、古い肖像畫など見る。何々尼公といひさうな氣分であつた。彼はちよつと間違ひのやうな氣がしたが、それは彼の接觸面が比較的近代味をもつた婦人が多かつたからであつた。

『さうなんですよ。』

『何か藝術論でもやるんですか。』

『藝術論つていふほどのこともありませんけれど、私の家へ遊びに來る方や、兄の仲間の方で、時々寄つて話をしようと言ふんで、私はこんな人間で何んにも分りませんから、晩酌きながら、皆さんのお話を聞かしていたゞかうと思ひまして、

ね。宗教家の方もお一人、今夜來て下さる筈です。それで創作家の方が一人もないものですから、御迷惑でせうけれど、先生に來ていたゞかうと思つて、お願ひしたつていふ譯なんです。』友子は歯切れよく語つた。

彼女は布巾で香木の食卓を拭きまはしながら、

『何うしたんだらうな。お酒を早くもつて來てくれるといゝな。テイブルばかり拭いてゐたつて仕方がないね。――先生はお酒を召食るんですか。』

『少しは旨いが、たんとは可けないんで。』

『それお詰んないな。』

『貴女も畫をかくんですか。』

『かきたかつたんですけれど……今でも描きたいんですけれど、兄が駄目だといふもんですから、その方は思ひ切つてしまつたんですの。口惜しいけれど、この年になつて初めるたつて大變だし、何も能がないので、先生なぞとお話ができないで誠におはづかしいんですけれど。先生は畫をおかきになりませんか。』

『畫なんか描けるもんですか。小説でさへ漸と〱です。』

『小説のことはちつとも解らないんですけれど、よくあんな事がすら〱書けるもんだと、感心するな』

『金色夜叉ですか。』

『さう〱、金色夜叉のモデルの素破ぬきが何かに出てゐましたね。』

お銚子や何かゞ運ばれて、酒がはじまつたところへ、宗教家の丘氏がポオトフオリオをかゝへて、入つて來た。

『どうも遅くなりまして。學校を退けると、△△青年會館の講演會だもんですから、二時間ばかりおしやべりをして、圓タクを飛して來たやうなことで。』彼はさう言つて、座につくと、近くにゐる青年法學士の乙氏の差す猪口を受けた。そし

て其を呑干すと、又猪口を差出して、

『駈けつけ三杯といふから……』と無邪氣に哄笑した。

『私も丘さんに時々佛教のお話でも伺つたら、少しは修養ができるかと思つて、お附合を願つてゐるんですけれど、行ひすますには未だ少し早いやうな氣もしてゐるんだ。』

『やつぱり藝術の方ですか。』三四杯の酒にほろ醉ひの出た彼が混ぜ返した。

『藝術家も花房さんが聞かしてくれますけれど、餘り古い〳〵と言はれるんで、うんざりしてしまふ。』

『老女のお化粧みたいに、何も新しがるには及ばないんだ。』

『先生は口が惡い。私お化粧なんか大嫌ひだ。』

友子はさう言つて、猪口をもつて彼の傍へ來て坐ると、

『もう少し召食れ、今天麩羅が來ますから。實はお座敷天麩羅へ御案内したかつたんですけれど、外の客も來るからと思つて、こちらへ取寄せたんですの、何うしたと言ふんだらうな。ひどく手間取るな。』

それから兄の紫淵の畫會の話など出た。彼は少許りの酒で、浮調子になつたことが寂しくなつて來た。そして飯をすますと、友子と花房と同乘して、途中まで送られた。

翌日の夕間暮、彼はきよう子の所謂る目貫の場所で、圓タクを乘りすてると、キヤフエ、ボアールを捜しあるいた。

ボアールは直ぐに見つかつた。彼はきよう子に強請られて、ボアール主人に逢つて、彼女を傭つてもらへるなら貰はうと思つた。名前は以前から耳にしてゐたボアールの主人に逢ふことも、無意味ではなかつた。きよう子は今朝も彼の全集

編輯に入るべき彼の作品集の古本を、方々捜し歩いてくれたりした。彼女は何でも知つてゐた。例へば薔薇の栽培、彼の水蓮の甕のひゞの修繕方、それから文壇の古い新しい人達の戀愛談、もと鑛山技師の妻だつたところから、鑛夫達の生活、父が遊蕩好きだつたので、花柳界の事情、俳優の内幕等々。七八年同棲してゐた彼の夫は、德川文學に關する著述なぞもつてゐたが、世話してゐた映畫女優と出來て、家を出てゐた。勿論きよう子も餘り世帶持の好い方とは思へなかつた。大抵の女は浪費家であつた。

『まあ、そのうち又一緒になるだらう。』彼はその問題を氣樂に受流してゐた。

『ならない。なるもんですか。』きよう子は仔犬のやうに目を潤ませてゐた。

キヤフエ、ボアールのドアを推すと、蓄音器のヂヤヅバンドの旋律が目間苦しく旋回してゐるなかに、兩側のボツクスから赭い、健康さうな顏が幾箇も覗いて、洋裝和裝の女給達の姿がちら〳〵動いてゐた。やつと店を開いたばかりで、まだ何處かしつくり板につかない氣分ではあつたけれど、ペンなど執る人の仕事としては、さうチヤチなものではなかつた。

『成程！』と彼は感心したが、若い女給達の、殊に其のなかで優れて健康さうな、洋裝の一人の壓倒的な態度を見ると、彼は何となし氣がひけた。彼は此の空氣のなかにきよう子の輪廓を描いて見たが、如何に贔負目にみても、釣まりさうには見えなかつた。

『御主人がゐられますか。』

『は。』

彼は紙入から名刺を出した。

『ちよつと此の名刺を差しあげてくれませんか。少しお願ひしたいことがあるので。』

『さうですか。』

やがて主人が、無雜作な書生風で出て來て『やあ、どうも』と言つて彼の前に腰かけた。

『お呼立てして失禮ですが……。』

『貴方には同鄕人の令でお目にかゝつてゐます。御挨拶しようと思つたんですけれど、つひしそびれまして。』

『好いことをお初めになつたのですね。これは貴方の御設計ですか。』

『これでも隨分苦心しました。なか〳〵思ふやうには行きませんが……。』

『かゝつたでせう。』

『は、思つたよりかゝりました。』

主人は女給を呼んで、彼のために飲料を命じた。彼はさよう子の話を初めた。

『あゝ、その事ですか。其の方ならお目にかゝりましたが、御存じのとほり、この商賣に感傷は禁物なのです。お客を誠入らせるやうでは駄目なのです。お見受けしたところ、あの方はひどく氣が弱いやうですからね。』

『さうね。』

『何か事務員のやうなもの何うです。』

『さう云ふ風でもないやうだが……。』

しかし押返す勇氣は彼にもなかつた。彼は女給にチップを少しおいて其處を辭した。

外へ出て、でこぼこした往來を孰へ行かうかと考へてゐた。若し好いやうだつたら、きよう子を呼入れる約束で、彼女もどこか其の邊にゐる筈であつた。反對側のところから、彼女の影がこつちへ動いて來るのが目についた。

『どうも濟みません。』彼女はさう言つて、不安さうに彼を見た。そして胸へ手をかけて外套の釦をかけたりしながら、

『駄目でせう、やつぱり。』

『駄目だ。誰か決まつたんかも知れない。』

『眞實(ほんたう)はさつき一寸來たの。そして女給さんにきいて見たの。そしたら、さう言つてました。一人あつたつて。』

『まあ仕方がない。』

『濟みません。』

『少し歩かう。』彼はしばらく足を入れなかつた銀座の方嚮へ動きだした。

きよう子もわざと元氣らしくついて來た。

『他にちよつと頼んでみてもい丶處もあるんだが。』彼は呟いてみたが、氣が進まなかつた。きよう子は昔しから知つてゐる若い友人の細君であつた。大して責任を感じる理由もなかつたけれど、氣分が重苦しかつた。

彼は花畑へ入れるやうなものが、若しかしたら何か見つかるかも知れないと思つた。きよう子は花にも精しかつた。

途中でひよつこりS夫人に逢つた。幸福な彼女は今日の土曜に若い良人と活動を見て、食事をして來た歸りであつた。

『私達も引返してもつと散歩しても可いんですの。』

四人は打ちつれて歩きだした。

『今日は先生を引張りだして、どこかで御飯を食べようと思つて。』

友子はさう言つて火鉢の前へ來て坐つた。

それまでに、或日彼は友子が何んな風に暮してゐるかと思つて、一度彼女を訪ねた。住居は風流であつた。彼と同郷のお茶人が、隣りにゐた。友子の家は、そのお茶人が田舍から壞して持つて來て造つたといふ、風雅な菴室風のものであ

つた。そこに一人の若い書生とも寄宿人ともつかない男が、入口の廣い一室に卓子や椅子を据ゑてゐた。友子は彼を家の書生と呼んでゐた。彼女はその奥の庭向きの部屋に、連月の手炙をひかへて、無氣味な目をぎよろつかせて、坐りこんでゐた。

彼は十分もその手炙の前にすわつゐてると、何かしら憂鬱になつて來るのであつた。寂しい〳〵と口癖のやうに言ふ彼女に無理はなかつた。

『書生も晝はお勤めだし、夜も大概家にゐないもんだから、私寂しくなると婆やを呼んで、そこへ坐らせておくの。』

『ふむ。僕も寂しい。しかし馴れて來た。何かやれば可いぢやないですか。』

『小說を書くことでも致はりますか。』

『そんな事より、お茶とか、花とか。三味線は彈くでせう。』

『それより畫をかいてみたいの。美人畫を。兄のやうな堅い畫は嫌ひ。』

『花は引かない。』

『花は强いんだけれど。あれは人の氣が見えすいてね。』

『花は傍觀してると、名々暗がりに探りあひをしてるところが滑稽だ。人間はみな花を引いてるやうなもんだけれど。』

彼はこの近所に住むD夫人に、今日、事によつたら友子を紹介しようかなんて目論んでゐた。D夫人は紫楷の花鳥をほしがつてゐたし、暇々に畫を致はりたいとも言つてゐた。紫楷が畫會を作らうとしてゐるので、D夫人の力を借りるのは可かつた。で、近所のカフエで友子に電話をかけさせて話して見たが、友子と一緒でなしに、遊びに來てくれるならいゝが、それにしても今日は都合がわるいと言ふのであつた。

その時も、友子はおいしい取りつけの北京料理があるからと言ふので、彼女の菴室までついて行つたのであつたが、この陰鬱さでは樂しく物を食べる氣にはなれなかつた。

『佛教は大分わかる？』

『信仰すればいゝつて言ふんだけれど。尤も以前鎌倉のお寺で參禪したこともあるんだけれど、逃げ出してしまつた。』

『失戀か何かで？』

『失戀だか何だか……。』友子は笑つた。

『さういふ事があると、振子が居づわるまでに時日がかゝる。』

『先生二階へ來てお書きになるといゝ。』

『さうも行かない。』

『先生は子供さんがおありだからね。』

『貴女は一人もない？』

『え。本當の獨法師。だけれど、出ると無闇と出たくなるけれど、家にゐつけると、一月もこゝにぶつ坐つてゐるんですよ。これで氣がむくとお掃除もするし、お洗濯もするんですよ。夜眠られないので困るのね。さうすると下へおりて、手當り次第本をもつて行つて夜明まで讀んでるの。この節はカルモチンも利かなくなつてしまつて。漫性だ。』

『夜眠られないのも又好いもんだけれど。』

間もなく彼は友子を誘つて、外へ出た。そして時々遊びに行く下町の藤子の家で晩飯を食べた。

友子と藤子は、直きにお馴染になつた。

今日も友子と二人きりでは、何か物足りなかつた。

『家へいらつしやいよ。廣東料理をおごつてよ。』

彼は友子の養室を考へるとうんざりした。

『銀座ならちよつと行つて見てもいゝけれど。』

『兎に角出ませう。』

彼は誰との附合も餘り面白くなくなつてゐた。自身や子供や一切の生活を順次に整理して行かうと云ふ氣持が、長い過去のおびただに皆つてなかつたほどの希望の光を前途に投げかけてゐた。彼の心は寂しくも貧しくもなかつた。

自動車のクツションに膝を並べてゐると、彼はうつかり自他の年齢についての錯誤感に陥つてゐるのに氣がついた。若い人と別れて幾許にもならない彼の頭腦に、時々友子のやうな女の、自分に對する感情を、その側から考へてみる必要があつた。

銀座で彼は思ひがけない助手を拾ふことが出來た。それは新出のシナリオライターの青山であつた。彼は友子とは、まるで名々路傍の人のやうに、歩いてゐるうちに、青山が友達の群と立話をしてゐるのに出會した。彼のレヴユが公園で喝采を博したことを彼も知つてゐたが、酒喰ひの此上なしの善良な彼の面目に變りはなかつた。

『やあ！』と帽子をぬいで、聲をかけ合つて、行きすぎてから彼はふと立止つた。

『あの男をつれて行かう。』

『誰よ。』

『えらい作家なんだ。何か食べるにしても賑やかでいゝ。』

『さう、ぢや呼んで來ませう。』

『あゝ。』

友子は青山を拉れて、追つついて來た。

『若し差閊なかつたら。』

『え、どうせ今日は別に用事はないんですから、お伴してもいいんです。』青山はさう言つて素直について來た。

彼は忽ち自由になつた。

『何か食べますか。何處にしますか。』彼は友子に謀るやうに言つた。

『お金をつかつちや詰らないから、私のところへ入らつしやいよ。』

『君は相變らず飲みますか。』

『いいえ、この頃はちつとも遣りません。』

『あのレヴュは大分受けたやうだね。』

『え、各方面のファンから隨分投書が來ます。あの救世軍のなかには、私もゐたのですが……。』

『さう。判らなかつたな。』

『悉皆塗り潰してゐましたから、見物にはあの扮裝が大分受けてゐたやうですけれど。』

青山はその扮裝や舞臺裝置について、逐々説明したが、この尖端的な新裝の藝術形式に昵むことは、彼にはちつと困難であつた。

資生堂で青山から未發表の脚本の構成について、説聞かされながら、輕い食事をすまして外へ出ると、今度は友子が此頃評判になつてゐるキャヴァレーの女主人公を見たがるので、青山に少し酒を呑ませるつもりで、そこへも立寄つた。花房がちよいちよいそこへ飲みに來ることは彼も知つてゐたので、それと思ひあはせて、お人好しの友子の競爭意識が、何か女手の喜劇でも見てゐるやうで、他哩がなかつた。それに又このバアの女主人公のペトロンが、友子が時々締りやだの吝つたれだのと言つて貶してゐる或る下町のブルジョアでありもしたので、何の男からも排除されものになつてゐる彼女の愚さが、一層惱めくさく見えた。薄暗い部屋のなかで、友子は始終不安さうに目をぎろつかせてゐた。女主人公は可憐

不在であつた。
『ちつともお見えになりませんでしたのね。』
青山にコクテールの註文をきいてゐる女給が、片隅の暗がりにゐる彼を見つけてお愛相を言つた。
『私は酒が呑めないから』彼は眞面目さうに答へた。
『ぢや何かアルコール氣のないものをお作りしませうか。』
『それよりか水を一杯くれたまへ。それからチーズがあるなら少し持つて來たまへ。』
友子が麥稈で紅い曹達水を不味つぽらしく吸つてゐると、青山はチーズで遠慮しいしいコクテールを呑んでゐた。

彼は熱病に罹つてゐた。

きよう子はしばらく姿を見せなかつたが、多分藤子に頼んでおいた口がきまつて、藤子の友達のキヤフエで働いてゐるのだらうと思はれた。
『きりりとした、ちよつと小意氣な人ぢやありませんか。』藤子は言つてゐた。
『さうね。』
『それに何でも知つてゐるには驚いたわ。』藤子は笑つてゐた。
或晩ち藤子と逢ふと、そんな噂をしてゐた。
『それから丘（友子）さんがね、先生にお願ひしたいことがあると言つてゐましたよ。私にきいて見てくれと言ふんです

の。』

『何を。』

彼は風呂へ入りに來て、長火鉢の傍で枇杷を食べてゐた。彼は藤子に紹介してもらつた家政婦のことについて、話したいこともあつた。さういふことについて、本當に心安い相談のできる人が他に誰もなかつた。

『今度こそ斷らうとおもふ。』

『先生はいつもそんな事を言つて、いざとなると氣が弱くて……それに今言つたことを直ぐ忘れて、婆さんの前で飛んだことを仰やるから、こつちが立場を失つてしまふわ。』藤子は笑つた。

『何しろあのお婆さんは二人前だからね。』

『あのくらゐの人は、ちよつとね。』

友子の彼に頼みたいといふのは、無盡の金を取るのに、受人が三人必要だが、二人は出來たけれど、當てにしてゐた今一人の男が旅行中なので、彼に判をついて貰ひたいと言ふのであつた。

『僕とあのお婆さんとは昨今の交際だがね。』

『でもお金は六七百圓ばかりですつて。捺してておあげなさい。私にといふんですけれど、私にはちよつと資格がないでせう。――多分今に來るでせう。さつき電話でしたからね。こなひだあんな投入れの籠なんかもつて來て。先生のは入りませんか。』

籠花活が用簞笥の上にあつた。

『入らないね。』

『私困るわ、あんなもの貰つて。』藤子は迷惑さうに言つた。

風呂から上つて來ると、友子がやつて來て、茶の間に坐つてゐた。

『先生天麩羅食べに行きませう。今ここのおばちやんと約束したの。』友子が言つた。

蔭で皆んなで丘のおばあさんと言はれてゐる、一時代年上の友子からおばちやん／＼と言はれて、藤子は擽つたさうに、口元をもぞ／＼させてゐた。

友子は藤子のことを『あのお神わたい好きだ』と言つてゐたが、又さう云ふ商賣をやつてゐる女としての、彼女の態度を非難したりしてゐたが、兎に角友子に取つては、好い相手で、好い暇潰し場所だと思はれた。

『天麩羅をおつき合ひなさいよ。その積りにして電話をかけておいたんだ。』

食ひ意地の張つた彼は、づる／＼引摺られた。

『あれは新橋の幇間が出してるんですよ』と自動車のなかで友子から聞かされたけれど、行つてみると少しもさう云ふ風の悦け味のない、堅氣らしい若い男が揚げてゐた。

黒塗りの臺が、扇の地紙なりに設はれてあつた。そこで彼は鱚を賞美した。

歸りがけに、お神から何かの書附らしい長い卷紙を『どうぞ』と言つて渡された。友子は『よろしい』と言つてそれをくしや／＼にして袂へ捻ぢこんだ。

『初めて招待されたときの、あの時の勘定ぢやないか。』彼は思つたが、知らん振をしてゐた。その家はこの座敷天麩羅と隣り合つてゐた。

『さあ、何うしようかな。』彼は外へ出てから呟いた。

『家へいらつしやいよ。』

彼は友子の受け判に掴まりさうな氣がしたが、正直に逃げをうつ程のことでもなかつた。彼は默阿彌ものの世界へでも

引戻された感じであつた。

『先生判をついてくれると可いな。』友子はトツトツ〳〵といふエンヂンの音や、ざアぶり〳〵と言ふ水の音の聞える部屋で、彼にせがんだ。

この不思議な取組みの男女は、三尺ほど離れて延べられた床のなかで、いつまでも話をしてゐた。さうする必要もなかつたけれど、狂言の進行を、故意に妨げる必要もなかつた。

『さうね。受判になつてあげてもいいけれど、それほどのお附合でもないのに、先きで變に思ひはしないか。』

『そんな事あるもんですか。』

『まあ、もつと考へて。そんなに金がいるの。』

『家の書生をやつたら、そんな風にして來ちやつたんだ。』友子は大様に笑つてゐた。

『一體君の生活は、どういふ風なんかしら。』彼は枕のうへへ延出して、煙草を吸つた。

藤子や芳夫に、彼と友子のあひだに、何か事件がおこると思はせるのが、彼には此の場合のちよつとした興味であつた。

『私ですか。私は氣兼なしに兄から生活費をもらつてゐられるんですの。私が以前あの男と別れるとき手切れに取つた金が……世間では大變な金を取つたやうなことを言つてますけれど、あの男だつてまだそんな人氣が出てゐた譯ぢやなし、五萬とか十萬とかいふやうな纏まつたもんぢやなかつたんだ。だけど兎に角借金だらけの兄は救はれたんだ。』

あの男といふのは、彼もその名を耳にしたことのある辯護士で政治家であつた。

『何うして別れたのかしら。』

『別に大した理由はないんだ。あの男も地位と金がほしかつたんだ。それで親分の××男爵の妾腹のお孃さんと結婚したんだ。お孃さんと言つても、その時分もう二十七八の人でしたけれど。』

女子はそれから、母が上方の藝者あがりだつたところから、花柳界や歌舞伎の世界に知合ひが多かつた關係上、その頃の若い或る人氣役者との三年間のローマンスが續いた。結婚以前のことをぽつり／＼話した。古い草雙子にでもありさうな、エロチックな場面が、それにしては餘りに情趣に乏しい氣分で話された、彼は今の彼女から、さうした世界を想像することが出來なかつた。

するうち二人とも口を利くのが懈るくなつてしまつた。

翌朝藤子と芳夫が、彼の枕元へ來て、にや／＼しながら、何かを嗅ぎ出さうとでもするやうに。殊にも藤子が惡戲さうな目で彼を見た。

彼はをかしくもなかつた。

『まさか君のところで……。』

『受判になりました？』

『いや未だ。あのおばあさんいつ歸つたんだ。』

『いつ歸つたんでせう。』藤子も悅けた目をしてゐた。

『あのお婆さんは何うしても二番目ものだね。』

『惡い人ぢやないんですね。』

『さうさ、何だか可哀さうなやうな女だ。』

彼は床のうへに胡坐をくんで、朝の莨をふかしてゐた。

ある日も友子がやつて來た時、彼は戯れに圖を引いてゐた。彼は落着きのいい書齋を作りたかつた。さうした世間と離れて、秩序と希望のある日常生活に入るのが彼の願ひであつた。時々彼はこの上手のつけようのない此の家を賣つて、冬の凌ぎ易いところに移らうと思つた。

そこへ友子がやつて來た。彼女は希らしく化粧をしてゐたが、著ものはいつも着てゐるお召ではなくて、この前も著てゐた安ものゝ絣であつた。

『お金は取れたの。』

『まだよ先生、厭になつちまふ。』

『何うして?』

『何か調べてゐるんでせうよ。馬鹿に又たあの連中は堅いんだから。』

『五十圓おごるつて話だつたね。』

『取れたらおごりますよ。』友子は苦笑しながら、何かもつて來た細長いものを傍において、出しにくさうにしてゐた。

『それ何さ。』

『これ先生が好いと言つたから、持つて來たんだけれど。』

『ああ、支那の女が書いたといふ。』

『先生に差しあげますわ。』

財をつけた一軸をそこへ出した。

『いらないよ、そんなもの。持つて歸ると可い。』

『でもございませうが……。』
『そんな横ものをかける處もないし。』
『お預けしておきます。』そして友子は机の上に目をやつた。
『何してるんです。圖を引いてるんですか。今度家をお建てになるなら、私を助言者になさい。經驗があるんだから。』
『さう。ぢや假りにこんな地所へ、八室や九室の家を建てるとすると……。』
『さうね。どつち東です。これあ可けないや先生、入口は辰巳でなくちや。この家は何うなつてるか知ら。』
『門が北だ。』
『いけないね。門が眞北だと相續者が家におちつかないつて言ふけれど。』
『そのせるか知ら、芳夫が落着かないのは。』
友子は惡戯さうに一つ引きはじめたが、口ほどには出來なかつた。
『やつぱり自分のものでないとね。』友子は部屋を見廻しながら、「これは少し野暮ですよ。それに深みがないから先生なんかのやうな思索家には駄目ですよ。』
『花房さんは何うしました。』
『ちつとも來ませんよ。あの男家内が丸ビルの事務員でせう。女房なんか働かして恋氣地なし、わたい嫌ひさ。』
『可いぢやないか。』
『あの男も別れたがつてはゐるんだけれど、別れるには何とか色をつけなければなんないから……。』

「別れる必要もないぢやないか。」

「家に女房がゐないと、あの男も不自由で、仕事ができないでせう。」

二三日陰氣な雨が降りつづいた後だつたので、彼は何か食べに出たいと思つてゐた。

「藤子たちを呼んで、銀座へでも出てみるかね。」

「私もこなひだ下駄と傘をかりて來たんだ。」

「時々行くとみえるね。」

「芳夫さんなかなか藝術談が面白い。感心してしまつた。」友子は眞面目に言つた。

「ほう誰と。」

「私たちで。」友子は暗い目をした。

二人で家を出た。町はすつかり夏の夜の氣分であつた。

銀座で藤子たちへ電話をかけると、間もなくやつて來たが、歸りはやつぱり藤子の家であつた。

「家政婦がもつと呑氣だつたら、家庭の氣分が今少し安易になるかも知れない。」

藤子の茶の室で、癖の强いそのお婆さんの噂が盛んにされてゐるなかで、彼は考へてゐた。

「しかしあのお婆さんがゐなくなつたら、又家が崩れて來る。おれの用事も多くなつてくるに決つてゐる。」彼はそれを思ふと憂鬱になつた。

友子と同乘で、そこを出たのは可なり夜更であつた。彼は藤子と芳夫の氣持をかばふためにもわざとさうしたかつた。

「さあ、赤坂まで送るのも大變だな。」

『私が先生のとこまで送るのも。』

夜更の長いドライブの後、彼は人氣も絶えた、町はづれの或る家の門の前に立つた。

『さてこそ先生の穴だな。』闇に立つてゐる彼女が呟いた。

その翌日から彼は發熱した。彼はその一夜のことを考へると、惡寒を感じずにはゐられなかつた。

庭へ出てみるやうになつたのは、一週間もたつてからであつた。彼は裏へ出て水蓮と錦魚を見てゐた。そこへ忘れてゐたきよう子がやつて來た。

『御病氣いいの。』

『ああ、もう。』

『錦魚は死にません？』

『死なないね。』

『わたし人の紹介で、この頃日本橋の方にゐるの。』

『あすこは止めて。』

『あすこですか。何だか閑散ですもの。でもあすこの神さんの紹介で、初めたばかりの家へ助けに行つてるんですの。初の素人さんなのよ。旦那の鄕里の瀨戶内海から素破らしい海老魚をどん〳〵送つてくるの。一度蝦魚を食べに來て下さいね。』

きよう子はいくらか張合が出て來たらしかつた。

『まあ可かつたぢやないか。』

「別れる必要もないぢやないか。」

「家に女房がゐないと、あの男も不自由で、仕事ができないでせう。」

二三日陰氣な雨が降りつづいた後だつたので、彼は何か食べに出たいと思つてゐた。

「藤子たちを呼んで、銀座へでも出てみるかね。」

「私もこないだ下駄と傘をかりて來たんだ。」

「時々行くとみえるね。」

「芳夫さんなか〳〵藝術談が面白い。感心してしまつた。」友子は眞面目に言つた。

「ほう誰と。」

「私たちで。」友子は暗い目をした。

二人で家を出た。町はすつかり夏の夜の氣分であつた。

銀座で藤子たちへ電話をかけると、間もなくやつて來たが、歸りはやつぱり藤子の家であつた。

「家政婦がもつと呑氣だつたら、家庭の氣分が今少し安易になるかも知れない。」

藤子の茶の室で、癖の強いそのお婆さんの噂が盛んにされてゐるなかで、彼は考へてゐた。

「しかしあのお婆さんがゐなくなつたら、又家が崩れて來る。おれの用事も多くなつてくるに決つてゐる。」彼はそれを思ふと憂鬱になつた。

友子と同乘で、そこを出たのは可なり夜更であつた。彼は藤子と芳夫の氣持をかばふためにもわざとさうしたかつた。

「さあ、赤坂まで送るのも大變だな。」

『私が先生のとこまで送るのも。』

夜更の長いドライブの後、彼は人氣も絕えた、町はづれの或る家の門の前に立つた。

『さてこそ先生の穴だな。』闇に立つてゐる彼女が呟いた。

その翌日から彼は發熱した。彼はその一夜のことを考へると、惡寒を感じずにはゐられなかつた。

庭へ出てみるやうになつたのは、一週間もたつてからであつた。彼は裏へ出て水蓮と錦魚を見てゐた。そこへ忘れてゐたきよう子がやつて來た。

『御病氣いいの。』

『ああ、もう。』

『錦魚は死にません?』

『死なないね。』

『わたし人の紹介で、この頃日本橋の方にゐるの。』

『あすこは止めて。』

『あすこですか。何だか閑散ですもの。でもあすこの神さんの紹介で、初めたばかりの家へ助けに行つてるんですの。初の素人さんなのよ。旦那の鄕里の瀨戶內海から素破らしい海老魚をどん〳〵送つてくるの。一度蝦魚を食べに來て下さいね。』

きよう子はいくらか張合が出て來たらしかつた。

『まあ可かつたぢやないか。』

『え、だから。』彼女はしやがんで錦魚を見てゐた。

暑い日が藤棚の上から照りかかつて來た。

突然に『お電話です』と、二人のゐる直ぐ其處の下宿の物干から聲がかかつた。

彼は急いで家へあがつて行つた。で、電話口へかかつて見ると、それが藤子であつた。

『……あれから友さんにお逢ひになりません？』

『逢はない。』

『あの人をかしいんですの。この間私んとこの名古屋のお客さんをステイションへ送つて、汽車に乘りこんで行つてしまつたんですの。今日お客さまにきいて吃驚しましたわ。』

好い客だと聞くと、お銚子のお代りなぞもつて座敷へ出たがるので困るといふことは、彼も聞いてゐた。

『もう歸つてゐる筈ですけれど、お宅へは參りません？』

『來ないね。』

『何だか少し亂暴になつて來ましたから、お話しておくんですけれど、いつでしたか、あの人から先生をペトロンにしようと思ふが、何うだらうつて相談受けたことがあるんですの。二度ばかり花房さんと泊つて行つたこともありますから、それは私が花房さんを呼ばしたこともあるんですけれど、兎に角そんな事を言ひますから、先生も別に何うといふこともないんですから、この頃ひどく客になつたから駄目だと言つたんですの。この頃花房さんも逃げてゐるらしいんですの。』

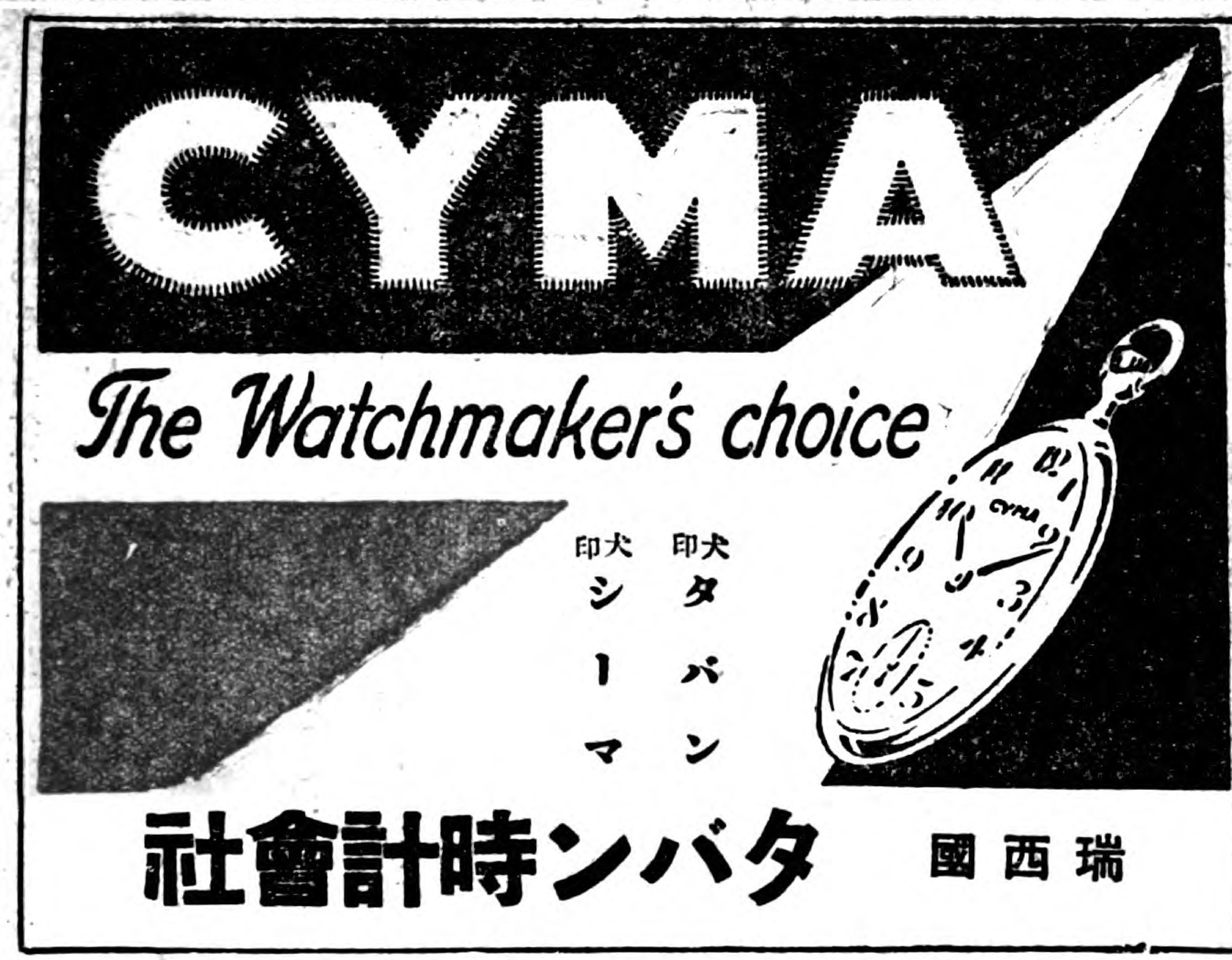
『金も花房に取られたんぢやないか。』

『どうもね。そのお金をやつて、花房さんが奥さんと別れる筈だつたんでせうよ。何だか方々借金だらけらしいの。哀れなやうな人ねえ。』

『筋書が徽くさくて淺果敢だけれど、憎めもしないね。ああ云ふのも矢張り時代的に滑稽化された惡の一つぢやないか。僕は何でもないけれど。』

『さうねえ。怒れもしませんね。それでは又……あの人が行かない前にと思つてちよつと。』

電話はあわたゞしく切れた。彼は庭に還つて來た。そして山路のやうに茂つた熊笹の毛蟲を捜しはじめた。きよう子も寄つて來て手傳つた。



定價		送料
一册	八十錢	參錢
六册	四圓八十錢	送料共
十二册	九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます

△御購讀は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵劵代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和四年七月十八日印刷
昭和四年八月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　島中雄作
印刷人　竹內喜太郎
東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社
東京市丸ノ內ビルヂング五八八區
中央公論社
電話丸ノ內二〇六番
振替東京三四番
同長野三二〇五番


内面艶消
新マツダ
特に明るく、汚れない
新マツダランプ
特許番号
東京電気株式会社
ギバ体温計
平型

GHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co, Published Monthly
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.